

# NARUTO 先見の写輪眼

ドラギオン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

第三次忍界大戦の最中。鬼の国周辺で木ノ葉の忍夫婦に救われた少女。

特異な才能をいくつも併せ持った少女の未来は、幸か不幸か。己が忍道に従い、生きていく、くノ一の物語。

幼少期編

目次

約束	1
その名を	10
うちはの集落	18
うちはの血	24
未来視	30
失ったもの、新たな命	35
ゲコ仙人。登場。シャナのルーツ	40
開眼、先見の写輪眼	45
九尾	52
封印	61
別離	68
うちはシャナ	77
木ノ葉 前編	87
木ノ葉 中編	92
木ノ葉 後編	97
うちは一族抹殺事件 前編	110
うちは一族抹殺事件 後編	116
後始末	126
姓をうずまき、名をシャナ	132
招集	141
下忍試験	146
初めての仲間	155
シャナ師匠。厳しい修行 前編	162

	シヤナ師匠。 厳しい修行 後編	169
	青い写輪眼	175
	任務	181
	コダマ	187
	ナルトとサスケ	200
	湯の国	207
	最強の術	213
	それぞれの修行	218
	生物兵器	224
	日向の少年	230
	天花乱墜の術	236
少年編		
	参上!うずまきナルト 前編	241
	参上!うずまきナルト 後編	245
第7班		253
	サバイバル演習 前編	258
	サバイバル演習 後編	261
	SHANA 閃光伝 友の名を呼ぶ	269
	SHANA 閃光伝 友の名を呼ぶ	279
	SHANA 閃光伝 友の名を呼ぶ	287
	SHANA 閃光伝 友の名を呼ぶ	295
	SHANA 閃光伝 友の名を呼ぶ	301
	SHANA 閃光伝 友の名を呼ぶ	313
中忍選抜試験		317
中忍選抜試験 2		324

月の皇子	終戦	木ノ葉崩し 3	木ノ葉崩し 2	木ノ葉崩し	中忍選抜試験 本戦 4	中忍選抜試験 本戦 3	中忍選抜試験 本戦 2	中忍選抜試験 本戦	中忍選抜試験 本戦前	温泉街事件 5	温泉街事件 4	温泉街事件 3	温泉街事件 2	温泉街事件	中忍選抜試験 口寄せの術	中忍選抜試験 休息	中忍選抜試験 10	中忍選抜試験 9	中忍選抜試験 8	中忍選抜試験 7	中忍選抜試験 6	中忍選抜試験 5	中忍選抜試験 4	中忍選抜試験 3
487	477	469	464	454	449	443	434	429	423	417	411	401	394	388	380	373	364	360	355	347	343	338	334	329

写輪眼	血の呪縛	4本目	九尾の封印	父と子	未来のサスケ	うちは	ボルト	時の操り手	未知の来訪者	里抜け	大激突 完	大激突 1 2	大激突 1 1	大激突 1 0	大激突 9	大激突 8	大激突 7	大激突 6	大激突 5	大激突 4	大激突 3	大激突 2	大激突	月の皇子 2
623	619	613	610	604	600	595	590	585	582	576	566	556	550	545	540	536	531	527	522	516	509	504	496	491

シャナの修業	626
ウラシキ襲来	630
覚悟	635
ウラシキ攻略戦	640
切り札	644
未来への帰還	654
秘密のボーイフレンド	657
秘密のデート	661
雪姫忍法帖	671
雪姫忍法帖 2	676
雪姫忍法帖 3	680
雪姫忍法帖 4	684
雪姫忍法帖 5	688
雪姫忍法帖 6	696
雪姫忍法帖 7	700
雪姫忍法帖 8	706
雪姫忍法帖 9	711
キャラクター紹介 (オリジナル or 原作改変組) 挿絵追加	716
雪姫忍法帖 10	720
雪姫忍法帖 11	724
雪姫忍法帖 12	727
雪姫忍法帖 13	736
雪姫忍法帖 14	740
雪姫忍法帖 15	747
雪姫忍法帖 16	750

砂隠れ	831
それぞれの成長	822
再会	818
キャラ設定	812
新章開幕 暁と第四班	805
疾風伝	
新たな出会い	799
コダマ外伝 参	791
コダマ外伝 弐	785
コダマ外伝 壱	779
昇格祝い	774
姉と弟 旅立ち	764
雪姫忍法帖 完	761
雪姫忍法帖 17	753



## 幼少期編

### 約束

……暗い。

「その目を我々に見せるな。汚らわしい！」

……痛い。

「早く死んでくれたらいいのに」

……苦しい。

「目をつぶし、口を縫い合わせてしまわないか？」

「そうよ。そうしましょ」

私の自我が目覚めたとき、私の周囲は、憎悪に満ちた目で私を見ていた。それだけははつきりわかる。鬼の国から少し離れた貧しい村の中で気味悪がられた私。今思うと迫害されていたのだろうか。ただ、幼い私に、抗う術はなかった。保護者である老婆に縋り、秘かに成長する他なかった。だが、物心ついた私が、言葉を話した時。

私の世界は闇に閉ざされた。

私の見たものを伝えた時、村の大人たちは、私を暗い蔵に閉じ込めた。

「呪われた子め」

私は、村の厄介者から呪われた存在へと変わってしまった。私はただ一言、村人達の前で言っただけなのに。

【おばあちゃん、明日、転んで、死んじゃう】って。

村人達に、縁起の悪いことを言うなど殴られた。だが、次の日に保護者であった老婆が階段から転げ落ち、死亡した。それから私の目は、塞がれ、口も猿轡を嚙まされた。

そこから私の虐待の日々が始まっていった。ご飯もろくにももらえず、日々鬱憤晴らしに殴られる日々。涙が枯れ、痛みを痛みと感じら

れなくなつた。なぜ生きてるかもわからず、気味悪がられ、自分を否定される日々が永遠に感じられた。

殴られれば痛い、だけどそれ以上に、存在を否定され続けることは、幼い私の心を傷付け続けた。

ある日、村人達が私を人柱にするといつて、蔵に押し寄せてきた。凶作や近くで忍の戦闘があつたり私が生きているせいで村は呪われた。だから私を人柱にするといつていた。

両手を縄で繋がれ、歩かされる。罵声やおそらく石を投げつけられながら、一步一步歩いた。やがて、柱のようなものに縛り付けられた。そして、足元が熱くなり、煙が私を襲つた。

「けほ、けほ」

呼吸できず、逃げることもできない私は、死んでいくだけだった。そのはずだった。

……

「何やってるってばね!!!」

聞いたことのない女性の怒号と共に、私の縄が切れる。そして、誰かに抱えられた。目隠しをしているため、誰かわからない。怒つた女性と村人達が言い争っているのが聞こえる。

「お前たち木ノ葉の忍には関係ないじゃろ!!」

「そうだ。呪われたそいつがいるから、不幸が起こるんじや!」

「殺せ!」

「ふぎけるなつてばね! あんな子供を、大人たちが寄つて集つて!」

殺せ、殺せと村人たちの声が聞こえていると、両耳を優しく塞がれた。何が起こつたかわからず、震えているとやがて私を抱えていた人が喋つた。

「大丈夫だよ。安心して」

彼が言うように、罵声がピタリとやんだ。だが、息を荒くしている女性が少しづつ近寄ってくる。怖くなり、体が震えだす。気配と音で女性がしゃがんだのがわかる。ガチガチと奥歯が鳴り、体を縮こませる事しかできない。

女性は、怖がっていた私を抱きしめた。

「や」

「怖かったってばね。こんなになるまで大人にいじめられて……」

初めて人に抱き締められ、優しく頭を撫でられた。そして、私を抱きしめた人は、泣いているようだった。なぜ泣いているのかわからない。けど、胸の奥が、どンドン熱を持ち始める。

徐々に、熱は強まり、目頭が熱くなる。そして、必死にこらえようとしたのに、もう出なくなっただと思ってた涙が流れるのを感じた。

「う、え、うう」

「よし、よし、泣いていいのよ。もう、貴方を虐める奴は、いない」

背中を摩られながら、求め続けたぬくもりに感情が爆発した。村にいた時は泣くと余計殴られたのに、涙も鳴き声も止めることができず、抱き締めてくる人物の衣服を汚してしまった。

ずっと泣いていると、少し離れたところで村の人と話している男性の声が聞こえる。

「では、彼女は我々が連れていきます」

「ふん、呪われた子を欲しがるとなんざ、物好きだな。まあ厄介を引き受けてくれるなら構わないさ」

「ええ。二度と貴方達のような人には近付けさせません。……あの子に名はあるんですか？」

男性が問いかければ、村長が答えた。

「あるわけなからう。あれは人ではない。呪いを振り撒く物の怪だ。お前もあの凶暴な女も、そいつの目を見れば実感するさ」

男性は、村長に「そうですか。では、これで」と告げる。そして、私と女性に軽く指先で触れる。

「少し、びつくりするかもしれないよ」

とても優しい声で説明され、私がポカンとしていると、急に浮遊感が走り、すぐに収まる。

「? ? つ!？」

一瞬だった。だが世界が一転した。目を塞がれていた私の嗅覚と聴覚は、鋭く周囲の音や匂いが、一変したのを感じ取った。聞いたことのない音、嗅いだことのない香りに脳がパニックを起こしそうになる。

「ちよつと、ミナト。飛雷神の術なんか使ったら、混乱するにきまつてるでしょ」

「ごめんごめん。少しでも早く、この子をあの村から引き離さなきゃと思って」

二人は何か話し合った後、男性のほうが私に話しかけてきた。

「僕たちの言葉はわかるかい？」

頷いて答える。難しい言葉はわからないが、日常会話くらいなら理解できる。目を塞がれたため、発達した聴覚は、村中の音を拾っていた。そこで言葉のある程度覚えた。

「そうか。ならまずは、僕たちの自己紹介からかな」

「その前に、この目隠し取ってあげなきゃ」

女性が私の目隠しを外した。急に眩い光が視界に入り、赤い髪の若い女性と黄色い髪の若い男性が居た。二人は私を見ており、驚いたように何かを口走っていた。だが、そんな情報を処理するより先に、私の脳はパニックを起こした。

「ヤー……… ヤー………」

私は一種のパニックになりながら、叫んで取られた目隠しを両手でもぎ取り、慌てて装着し泣き続ける。すると二人は驚いた後、叫ぶ私

を宥めようとしてくる。優しさに触れたことのない私は、戸惑いながらも叫ぶのをやめる。

でも動悸が激しくなり、平静を保つことができなくなる。

「クシナ、勝手に目隠しに触っちゃいけない」

「そ、そうなの？ ごめんてばね。もう勝手に取ったりしないから、泣かないで」

震える私を抱っこしながら、女性が心配そうに話しかけてくる。

「それ、とつちやダメなのね？」

頷く。これは私の唯一の外界からの守りなのだ。幼い私の胸に刻まれた村人達のあの目。私の目を見ただけ皆が怖くなった。私の目が気持ち悪いと石を投げつけられ、憎悪に満ちた目を向けられる恐怖。私にとつて目とは、自分を苦しめるものだった。他の人に見えるな  
いものが見え、嫌われるだけの部位。

だから、目隠しをされた時、あの村人たちの目を見ないこと、私だけが見えていたものが見えなくなったことは、ささやかな救いだっただの  
のだ。

今私に初めて優しくしてくれた二人も、私の目を見れば、あの目を向けてくるに決まっている。一種の防衛本能として幼い私には、目隠しをし続けることが刻まれていた。

「勝手に取ろうとして、ごめんってばね。よしよし」

「……とらない？」

「取らない取らない。貴方が良いって言うまでは」

私がすっかり落ち着くのを待ってから、二人は椅子に座り温かい飲み物を用意していた。私は、女性の膝の上に乗せられたまま。女性が私に温かいミルクを飲ませてくれた。砂糖が入った甘いミルクを火傷しない温度まで冷ましてから飲ませてくれた。甘い飲み物なんて初めて飲んだ。

そして、私が飲み終えるのを待ってから、二人が私に自己紹介をしてきた。

「さて、じゃ僕らの名前を話しておこうか」

「そうね。忘れてたわ」

「？」

「まず君を抱いている女性が、波風クシナ。そして、僕が波風ミナト」

「みなと？ くしな？……なみかぜ？」

「そうそう。彼がミナトで、私がクシナ」

「……私、私は……」

名前が出てこなかった。そもそも、名前で呼ばれた記憶がない。黙り込んだ私の反応を見て、男性が「そうだね」と言って私の手を取る。

「……わたしは、だれ、なん、だろ。のろわれた、子？」

「違うよ。断じて違う」

「それは名前じゃないってばね。それに呪われた子なんて、貴方のことじゃ絶対ない」

自分がわからない。今思えば私はただ生きているだけの生き物だった。でも、仕方がない。生まれてから周囲に否定され続けた私が、何かになれるはずがないのだ。

「君の事だけれど、あの村人たちから、僕たち夫婦が身柄を預かることになった」

「何かわからない」

「貴方は、私たちと一緒に暮らすってこと」

「なんで？」

私の疑問はおかしいのだろうか？

「今日から、ここがあなたの家になるからだつてばね」

「家？」

「そうだよ。君は今日から、木ノ葉隠れの里に住むことになる。僕らが保護者ということになる……君が嫌じゃなければだけどね」

「……」

保護者が何かわからない。村の老婆みたいなものだろうか。また倉庫に入れられるのだろうか。

そして、また虐められるのだろうか。

いやだ。もう嫌だ。あんな生き方したくない。そんなことなら、あのまま……終わりたいかった。

「あなたの考えてるようなことは起きない。私が約束する。指切りし  
ましよ」

「ゆびきりっ？」

「そう約束。こうやって小指と小指で」

女の人……クシナが小指と私の指を繋いでくる。

「こうやってね、相手と自分に対して約束を絶対に守るって誓うの」

「……」

「もし破っちゃったら、針千本飲まなきゃいけないってばね」

クシナが笑っているのが声でわかる。

「針、飲んだら痛いよ？ 血、何日も止まらなかったの」  
「っ」

男性……ミナトが驚いたような声が聞こえ、固まっていたクシナ  
が、力強く抱きしめてきた。

「絶対に、絶対！ 楽しいこといっぱい体験させてあげるし、美味しい  
ものだっておなか一杯、それに、あなた自身の目で色んな綺麗なもの  
だっで見れるようにしてあげる、……幸せだったって思えるようにす  
る！ 約束するってばね！」

クシナが泣き出してしまった。痛いくらい抱き締められているの  
に、心に温かい何かが広がっていく感覚がする。私にできたことは、  
その温もりにしがみ付き、彼女の誓いを受け止めるだけだった。

……

少女は、クシナが抱きしめ続けていると、すやすやと寝息を立てて  
眠ってしまった。熟睡した少女を寝床に寝かせた後、波風夫婦は、

テーブルに向かい合っていた。冷めてしまったので温めなおしたコーヒーを差し出すミナト。

「ん。さて、クシナ。そろそろ話し合わないかね」

「ミナト。私が言いたいこと、もう分かっているわよね？」

クシナの問いに、ミナトは困った表情をしたまま、腕を組む。

「あの子を僕らの養子にしようってことだよね？」

「ええ。あの子を見たでしょ？ あの子を小さな体にどれだけの苦痛を……、心にだって」

「確かにね。僕もあの村に戻すつもりはない。戦争孤児は、沢山見てきた。だが、彼女は、村人たちのストレスの捌け口として生かされているような悲惨さだった。そしてあの光景……」

二人とも任務の帰りに偶然出くわした光景を思い浮かべている。大人たちが大勢で一人の少女に石を投げ、火をつけた光景。まともな神経の持ち主なら、あの村の異常性を感じ取れる。

「なら、決まりね」

「待つんだクシナ。僕が言いたいのは、彼女自身の事だ」

「……」

「養子の件なら、一度、木ノ葉の孤児院に籍を入れた後に引き取れば大丈夫だけど、あの子の瞳のことだよ」

勝手に目隠しをクシナが外してしまった際、二人は一瞬だけだが少女の目を見たのだ。

それは、木ノ葉の里に住む忍なら絶対に知っているものだった。少女の目は、間違いなく、ある一族の瞳術の特徴を有していた。

最初は紫の瞳だったが突如変異。発光し、瞳孔の周囲に黒い巴模様が3つづつ浮かび上がっていた。そんな特徴を持つ目は、ある一族しかない。

「写輪眼。この子は、うちは一族の写輪眼を持ってる」

「あんな辺鄙な場所に、うちは一族が居たの？」

「わからない。だが、うちの特徴を持つ子供のごことは、一度三代目に報告したほうがいいね。うちは一族との関係もある」



輪廻眼、白眼に並ぶ三大瞳術の一つ。写輪眼。特殊な条件の術以外、すべての忍術・体術・幻術を見抜き跳ね返すと言われる瞳。それを備えた子供を保護したとなれば、ミナト達だけの問題ではなく、うちは一族、または里の問題になりかねない。

三代目火影、猿飛ヒルゼンなら知恵を貸してくれると考えた波風ミナト。

「でも、うちは一族の特徴は、目だけなのね」

クシナは、自分の知るうちは一族を思い出す。皆が黒い髪で黒い眼をしている一族であり、今回保護した少女は、その特徴から大きく離れていた。テーブルを離れ、ベッドで眠る少女の頭を撫でるクシナ。

淡い紫の瞳であり、髪はクリーム色。あまりにうちはから掛け離れていた。唯一、うちはと分かるのは、写輪眼のみだ。

「心配だわ。この子は、差別を受けて生きてきた。仮に、うちはが引き取ってくれたとしても、うちはで差別を受けたらこの子の居場所は……」

「そのことも報告するよ。絶対に悪いようにはしない」

クシナの心配をミナトも理解していた。写輪眼を持っていることは間違いないだろう。目を隠す防衛本能は、村人に写輪眼を見られたことによる迫害が理由だろうと想定できる。それだけなら、うちは一族に保護してもらえるのなら心配はない。むしろ一族の血を濃く受け継ぐとして、歓迎してもらえるかもしれない。

だが、決定的に少女は、うちはと違うのだ。

「青い写輪眼を持つなんて……」

「どうか、彼女にとって木ノ葉の里が住みやすいことを祈ろう」

そう。少女の瞳は、通常赤く発光する写輪眼とは別。青く輝く写輪眼だったのだ。

## その名を

木ノ葉の里が皆寝静まる夜。

火影の執務室にて、波風ミナトは、椅子に座りキセルをふかしている三代目火影、猿飛ヒルゼンへ連れてきてしまった少女について相談していた。

「クシナは相変わらず、衝動的じゃな」

「はは。すみません」

妻の評価に対して、反論できないミナト。確かに任務帰りに、突然走り出した妻の行動に一番驚かされたのは彼だった。だけれど、クシナの行動原理を愛おしく思う。

「それにしても、青い写輪眼か。突然変異か、全く別の資質なのか」

「オレとクシナは、あの子を引き取りたいと思っています」

「孤児院にも空きはあるが？」

三代目の言葉に対して、ミナトは首を横に振る。

「クシナの意志は固いか？」

「はい。それにオレも」

ミナトはクシナの事を思い浮かべる。他里から来た余所者だった彼女。当然、その人生には、差別が付きまどっていた。だが彼女は強かった。強い人だった。

だからこそ、それらに対して挫けず向き合った。

しかし、あの少女は強くなる前に、悪意に晒された。悪意に抗う術を知る前に、悪意に踏み躪られていた。

だからだろうか、クシナがあの子に構いたがるのは。

誰も守ってくれない、自分を守ることも知らない少女を助けたがつている妻。家を出るミナトを見送る妻は、既に決めている眼をしていた。

「わかった。一先ず、その子を預かることは許可する。うちは一族にも儂から連絡を入れておこう……なるべく穏便に事が運ぶよう計らおう」

「感謝します三代目」

「だが、いいのか？ 四代目火影候補に上がったばかりで、ややこしい事情を抱える羽目になるぞ」

「覚悟の上です。では、クシナへの報告もあるので、これで」

ミナトが帰ろうとすると、三代目が何かに気が付いたように「待て」と声をかける。

「？」

「一先ず、名前を付けてやるべきじゃな。報告書にも必要だからな」

「そうですね。わかりました」

「……必ずクシナと考えておけ」

「？ わかりました」

三代目火影は、ミナトのネーミングセンスを思い出し、すぐに防衛線を張った。それに気が付かないミナトは疑問を感じながら執務室を後にした。

ミナトが立ち去ってから、三代目火影は、椅子を反転させ夜空を眺め、呟いた。

「余計な手出しはするなよダンゾウ」

三代目の言葉とほぼ同時に、執務室の影に、木ノ葉の暗部養成部門「根」の創設者、志村ダンゾウが佇んでいた。

「何を甘いことを。昨今の情勢を考えれば、不穏分子でしかない。早めに始末するべきだろう」

「お前はやりすぎじゃダンゾウ」

「ヒルゼン。都合よく、拾った孤児がうちは一族だという状況、どう考えても出来すぎているだろう。それに本当にうちはだとすれば、虐待を受け続け、既に写輪眼まで開眼している齡3つにも満たない小娘が、拾った木ノ葉に感謝してくれるとでも思ったか？ 逆だ。そいつは、憎悪に満ちた怪物となるだろう。あの一族は、心に闇を抱えやすい。かつての、うちはマダラのように破滅的な思想に目覚めるやもし

れん。

お前に決断できぬというなら、ワシがやるしかない」

「止さんか……一度しか言わん」

タカ派のダンゾウと意見の合わないヒルゼンだったが、ドアから出ようとした彼を殺気を込めて睨み付ける。これ以上動けば殺すと伝えられたダンゾウは、握ったドアノブから手を放す。

「……ワシが、小娘の存在が木ノ葉への災いになると言ったこと、忘れるな」

ダンゾウはそう言い残して、執務室から出て行った。誰も居なくなった執務室で、ヒルゼンは深く息を吐いていた。

—————

夜が明け、朝日が差し込む時間帯。波風家のベッドの上。

そこには、クリーム色の髪をした少女が、目隠しをされた状態のまま、眠りについていてた。

「っ……う……う……」

突然、部屋の空気がいい香りが漂い始め、慌てて飛び上がる。目隠しをしているため、周囲を見られないが、聴覚と嗅覚を総動員して今どこにいるのか考える。

だが、村の中の何処でもない香りと音に少しだけフリーズする。だが、徐々に昨日のことを思い出す。

村で殺されるはずだった自分を、二人に救ってもらい、家に連れてきてもらったと寝ぼけた脳で思い出す。

住み慣れた蔵なら、自由に動けるが、知らない場所では物の配置がわからず、恐る恐る壁を伝って歩いていると、扉の開いた音が聞こえる。

「ん！ おはよう。起きてたんだね」

ミナトが少女と同じ目の高さに屈む。そして、不安にさせぬよう手を差し出す。

「一緒に朝ご飯を食べようか。怪我するといけないから、手をつなご

う」

少女が手を握るとミナトが手を引きながら、リビングへと案内する。リビングに入ると、美味しそうな香りが漂っており、ぐーっと少女のお腹が鳴る。キッチンで料理していたクシナが「おはよう」と出迎える。

「……ごめんなさい」

しかし、少女はお腹を押さえながら、怯えて部屋の隅に走ってしまふ。前が見えないため柵に激突しそうになるも、手を握っていたミナトが体を抱き上げて阻止する。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

少女はガチガチと震えながら、消えそうな声で謝る。少女の居た村では、彼女が腹を空かせるたびに「無駄飯食らい」と殴られていた。なので、悪いことだと思いついていたのだ。

しかし、少女に危害を加える者はいない。

「お腹が鳴るのはね、あなたの体が大きくなりたいてって言うてるんだってばね。それはとても良いことなのよ」

テーブルに朝食を並べたクシナが、少女の頬にやさしく触れる。クシナとミナトの仕事は、少女に植え付けられた恐怖を取り除くことだった。

ここには敵はおらず、心落ち着ける場所だと理解させてあげたかったのだ。

ミナトは、クシナの膝の上に少女を座らせた。

「いただきます」

「？」

二人が急に同じ言葉を言ったので少女は首をかしげる。

「はい、あーん」

「……」

「食べていいの。むしろ、これからはお腹いっぱい食べなきゃ」

「あー」

クシナが少女の口元に箸を持っていき、少し悩んだ少女だったが、口を開けて食べさせてもらう。とても美味しい食事に夢中になりながら、少女は口元に出されるご飯を食べ続ける。

栄養失調寸前だった少女の体が、食欲を加速させていた。その食べっぷりにクシナとミナトも少し安心した表情をしていた。

「むぐもぐ…ぐす、もぐ、ぐす。ぐす」

食べながら、目隠しの隙間から涙が流れる少女。いろいろな感情が渦巻き、自分でも何故泣いているかわからない。わからない。そうわからないのだ。

嬉しい。美味しい。楽しい。それらの感情を教えられなかった故に、わからない。

ミナトとクシナの二人は驚きながらも、二人で頷く。

「泣くほど美味しかったってばね？」

ミナトが少女の涙を拭き、クシナが頭を撫でていた。その光景は、本当の親子のようで、慈愛に満ちていた。泣きながらも生まれて初めてお腹一杯になるまで食べられた。だが、お腹よりも胸が何故か満ち足りるような感覚に戸惑う。

「食べ終わったら、こうして手を合わせて、ぐちそうさまっていうんだってばね」

「がち、そうさま？」

「ぐちそうさま、だよ。食べる時はいただきます。食べ終わったら、ぐちそうさま」

聞き覚えのない言葉。

「どちらも感謝の言葉だよ。作ってくれた人、食材を作ってくれた人、食べ物になった生き物や植物たちへの感謝の言葉だ」

「…………ぐちそうさま」

「えらいってばね。お腹、いっぱいになった？」

少女はクシナの問いに、頷く。少女の食事が終わると、ソファアーへと座らされる。そして、ミナトとクシナの二人は、ちやぶ台を挟んで

少女と向き合う。

「君のことが決まったんだ」

「？」

「今日から、オレ達は家族になる」

家族とは何だろう。村人達がそうで、私だけが違ったあれだろうか。

「私がお母さんで、ミナトがあなたのお父さんになるってことだってばね」

「お父さん……お母さん……」

そんなはずがない。自分にはいないのだ。だから呪われた子だったはずなのだ。そう少女が考えてしまうのは、育った環境故。

「……」

「もしかして、嫌？」

クシナが恐る恐る尋ねるが、少女は自分の衣服を握りしめたまま動かない。立ち上がろうとするクシナをミナトが制止する。

「ゆっくり決めてくれていいよ」

あくまで選ぶのは少女だからと、クシナへ伝える。

「……、いいの？」

「ん？」

「わたし、ここにいていいの？ じょうずに家族できないと思う……」

「そんなことない。そんなことないってばね」

家族をするものだと考えてしまった少女。この少女の価値観の違いをクシナは強く否定する。

頭の中で、少なすぎる経験のせいか、思考がぐちゃぐちゃになる少女。

「だって、わからないんだもん……」

「そうだね。君は知っていくことから、始めなきやいけない。オレとクシナも」

「？」

「オレとクシナも判らないことだらけなんだ。だから、オレ達と一緒に、家族を始めないか？ 少しづつ、色んなことを勉強していこう。皆で」

ミナトの言葉に少女は、「ほんとうに？」と問う。

「本当だってばね」

「本当さ」

「……………、……………うん……………」

そこで少女は生まれて初めて、人を信じることを決めたのだった。恐怖心と不安でいっぱいなのに、初めて胸が満たされた気持ちを求めたのだ。

それを人は、愛情と呼ぶ。

「なら、君の名前を……昨日徹夜で考えたんだ」

「名前？」

「そうそう。ミナトったら、初めての贈り物になるからって、悩みまくってたのよ」

そう笑うクシナとミナト、よく見れば目元に薄い隈があった。変な名前を考えるミナトに対して、クシナが何度も却下を下し、二人で頭を悩ませ続けたのだ。

そうしてようやく納得のいく名前が決まったところ、朝日が昇っていた。

二人は、反応を待つ少女に、初めて名前を呼んだ。

「あなたの名前は」

「君の名前は」

「遮那（シヤナ）」

暗い世界に閉じ込められた少女。だが、やがては人々を優しい光で照らすようになってほしい、そういう思いからつけた名だった。

「しやな？」

「そうだってばね。波風シヤナ、それがあなたの名前だってばね」



「……ありが、とう。わたし、シヤナ、うん、わかった」

「今笑った？ もしかして笑ったてばね？ かわいい、ほんとうにかわいいってばね！」

「クシナ、シヤナがつぶれるよ」

名前をもらった少女、波風シヤナ。現在、クシナに揉みくちやにされ、パニックになり固まっている彼女が初めての家族を得た日だった。

## うちはの集落

少女が波風シヤナとなつてから時が経ち、いろいろな事が変わった。

まず第一に、シヤナの存在は里に正式に認められた。

難民扱いで、波風夫婦の養子となる流れは比較的スムーズに運ぶ。三代目の手助けが功を奏した結果ともいえる。

そして、問題となつていた写輪眼を持つことについて、クシナは、友人であるうちはミコトからうちは一族のまとめ役であるうちはフガクへと報告した。

おそらく写輪眼を持つていること。

それは通常の写輪眼ではないこと。

なるべく穏便に事を進めてほしいこと。

それらを伝え、個人的にうちはの血筋かどうかにも調べてもらうこととなつた。その要望が通り、うちは一族の家庭へと尋ねることとなる。

—————

波風家。居間。

「イーヤーイーヤー!!」

拾われた時から、栄養状態も良くなり、少しふっくらした少女、波風シヤナ。彼女は、布団に籠つて、必死に抵抗していた。何故抵抗しているかといえ、うちはフガクとミコトの家に尋ねることになつたからだ。

その際、自分の目を見てもらう必要がある、前日から嫌がつていたのだつた。

トラウマを幾つも抱えたシヤナ。少しずつ改善し、我儘も言えるくらいには信頼というものを持つていた。擦れ違いも多く、叱られたり、怒つたり、褒められたりと、名実ともに波風夫婦の娘としての生活を送つていた。

少しづつ心の傷と向き合つていた彼女だが、どうしても自分の目を

相手に見られることだけは拒んだ。それは、木ノ葉の医者や波風夫婦相手にも徹底していた。

二人が優しいことはわかっていた。だが、彼女の心の奥深くの一番大きな傷が、自分の目を見た相手の反応なのだ。今は優しい二人が突然冷たくなったら？その疑問を振り払えるほど、彼女は強くない。得てしまったからこそ、失うことに憶病になってしまった。

村の生活を悪夢で見ることがあったが、最近では、ミナトとクシナに捨てられる悪夢に魘される日々が続いた。

その悪夢を見た日に、目を知らない人間に見られるということ、昨日は渋々ながら了承した予定を嫌がっていたのだ。

「ほんとうに、大丈夫だってばね！ 私たちは、見ないから」

「そうだよ、シヤナ。嫌がることは絶対しないから、布団から出てきてくれないかな？」

駄々をこねる我が子の成長を喜ぶも、約束の時間が迫るので、どうしたものかと悩むミナト。クシナも少しだけ布団を引っ張りながら我が子を説得する。

「変ていうってばね！」

「言わないってばね！ それに、今日行くのは、あなたと同じ目を持つてる人たちなの」

ずっと一緒にいたクシナの口癖が、あまり会話をしたことのないかったシヤナに移ってしまったのは必然だった。ぐずぐずとしていたシヤナだったが、やがて観念してベッドの枕元に置いてある ゴーグルに手を伸ばした。

紫の色付きゴーグルを装着したシヤナは、ようやく布団から這い出す。

目隠しをしたままでは日常生活が出来ないということで、クシナとミナトは色々思索し、最終的にマジックミラーの色付きゴーグルをすればという形に落ち着いた。シヤナのトラウマの発動条件が、自分の目を見た相手の反応であったがため、ゴーグルで目を見られなくすればいいと、ミナトの部下の一人がくれたものだ。

その対策が思いのほか効果的で、シヤナは世界を見ることができるようになった。

人の視線を最初は怖く思っていたが、周囲の人間が敵意を持った目をする事がないため、クシナと一緒に里を出歩けるようになっていた。

依存していることには変わりないが、少しでも症状が改善しているのは確かだった。

「……おはよう」

「ん。もうお昼前だけどね」

「顔、洗ってくるってばね」

シヤナはクシナが布団を片付けている間に、洗面所で顔を洗う。そして、しっかりとゴーグルを装着したのを確認して、恐る恐るリビングを覗く。

ひよっこりドアから除く娘の視線に気が付いたクシナ。

「顔洗ったってばね？」

「洗ったってばね」

「もう。あたしの口癖真似しちゃだめだってばね。まあいいわ、髪の毛やってあげるからこっち来て」

自分の真似をするシヤナに嬉しさ半分といった表情で髪の毛を梳いてあげるクシナ。シヤナが本来は人懐っこく、甘えたがりな性格だということはこれまでの生活で理解した。櫛で少しだけ伸びた髪を梳いていると、シヤナは目を瞑りながらも気持ちよさそうにしていた。

そして、髪の毛を整えると、再びゴーグルを装着していた。

昼食を終えた3人。約束の時間になる前に、うちはこの集落へと足を向けていた。

キヨロキヨロと里を見渡すシヤナ。

「ふらふらしてたら迷子になるってばね」

「手を繋ごうか」

ミナトとクシナ両方と手を繋いでシヤナも歩く。

里を歩いていき、木ノ葉の警務部隊のあるうちは一族の集落へたどり着く。

「ここが、うちなの？」

「そう。この団扇のシンボルがあるところだよ」

「ミコトの家は、もうちよつとだつてばね」

「あれって、おせんべいだつてばね……あ！」

「え？」

「あ、こちら」

3人でうちはの集落の門をくぐる。そして、少しだけ集落を進んだところで、シヤナが突然走り始めた。ミナトとクシナは、好奇心で走り出したシヤナを追う。

だが、二人に追いつかれるより先に、シヤナは、煎餅屋“うちはせんべい”の前でちょうど買い物をしている人物に抱き着いた。

「ごふっ」

2歳の子供とは言え、本気のタツクルを腹部に受けた人物は転倒。目を回していたが、すぐに復帰。タツクルしたシヤナに怒る。

「なんだよ急に！……シヤナ？」

「うん。そうだつてばね、オビト兄ちゃん」

シヤナを強制的に受け止めさせられた人物は、シヤナとは色違いのオレンジのゴーグルをした少年だった。その名をうちはオビト。波風ミナトの部下の一人であり、両親以外ではシヤナが一番懐いている人物だった。

ゴーグルでなく薄い布で目を覆い、買い物最中に里で迷子になったシヤナを集合場所に向かっていたオビトを見つけ、一緒に親探しをしたのが出会いだつた。

最終的にオビトの上司がミナトだとわかる。シヤナが迷子になつたと慌てて伝えに来たクシナと任務前に娘が迷子と聞いて搜索しようとした二人の前に、大泣きしながらおんぶされてるシヤナとオビトが現れたのだつた。

家族以外では、初めて接した人だつたオビト。心から心配し力を貸してくれた彼は、シヤナにとって大好きなお兄ちゃんになった。

ミナトの任務帰りや修行中に、何度かクシナと一緒に迎えやお弁当を届ける度に会っていた。今のタツクルも何時もの挨拶なのだ。

「シャナ、お前今日もかわいいなく、ほらほら」

「きやー」

シャナを抱っこしたオビトは、彼女の体ごとぐるぐると回って振り回す。自分に懐いたシャナをオビトも実の妹のように可愛がっており、いつも遊んでいた。二人で回っていると、クシナとミナトが歩いて追いつく。その姿を見てオビトが止まる。

「ミナト先生、それに……」

「やあオビト」

「なんだってばねその目。クシナ様と会えたのに、不満でもあるのかしら？」

嫌そうな表情でクシナを見たオビト。拳を構えるクシナ。二人はいつも小競り合いする中なので、ミナトもシャナも何も言わない。どちらも口では文句を言うが、仲がいいのは見てわかるのだ。

「先生達、シャナを連れてうちはの集落に何の用なんだ？」

「警務隊長のお宅に用があつてね」

「フガクさんの？ やっぱり写輪眼の事で？」

オビトの問いにミナトは頷く。シャナを下ろして、オビトは足元に落としていた煎餅の袋を拾う。そして、袋の中から煎餅を一枚シャナにあげ、頭を撫でている。

ミナト班の人間は、シャナの血継限界の事を知っていた。特にオビトは、エリートであるうちは一族の彼は、自分より遥かに年下のシャナが写輪眼の開眼者である事実を、複雑に捉えていた。偶然、シャナの目が写輪眼になるところを見た際は、さすがに驚き、嫉妬してしまう。

だが、ミナトやクシナから目のせいで心に傷を負っている事を聞かされ、自分だけは絶対に味方でいてあげようと考えた。写輪眼についても、持っている知識をミナトに伝えていたので、事情をよく理解し

ていた。

トラウマに対しても、自分の御下りのゴーグルをプレゼントすることで、シヤナに日常生活を送れるようにしてあげた。

「オビト兄ちゃん、おせんべい、ありがとうだってばね」

「おう」

「優しい所あるってばねオビト」

「う、うるせー、うるせー」

クシナにからかわれたオビトが拗ねる。そのあと、オビトと別れ、うちはフガクとミコト宅へ足を運んだ。オビトに会ったことで緊張のほぐれたシヤナは軽い足取りで家の敷居を跨いだのだった。

## うちはの血

シヤナを連れ来た一行は、うちはフガクの家の玄関でチャイムを鳴らした。

すると、家から2人の声が聞こえる。

「イタチ、お客様を出迎えてくれる?」

「うん母さん……いらっしやい」

女性と子供の声が聞こえ、玄関をイタチと呼ばれた子供が開けてくれた。ミナトとクシナに頭を下げた後、シヤナの姿を見て笑いかける。

奥から少年の母親であり、母クシナの友人であるミコトが現れる。

「クシナ、それにミナトさん、いらっしやい」

「おじやますだつてばね」

「ハハ、おじやます」

顔見知りの大人達はすぐ馴染んでいたが、初対面のシヤナは少し様子見していた。その様子に気が付いたミコトが微笑みながらシヤナの目線に合わせて屈む。恐怖心を抱かせないようにゆっくりとした動きでミコトはシヤナの頭に手を置く。

そして撫でることで、警戒心を解く。

「貴方がクシナの言っていたシヤナね」

「うん、そうだつてばね」

「本当に可愛いわ。クシナが自慢するのも当然ね」

「ありがとう」

少し照れるシヤナとそれを誇らしげにするクシナだった。だが、いつまでも玄関で待っているわけにもいかず、イタチとミコトの案内で客間へと案内される。

(おうち、全然違つてばね)

洋風な波風家と違い、うちは家は和風であり目新しいものが多いシヤナ。

「あなた、波風さん一家が来ましたよ」



「ああ」

部屋から洩い声が聞こえ、中に通されると客間には、威厳に溢れた表情をする一家の主、うちはフガクが居た。

「よく来たな」

フガクに迎え入れられて波風夫婦は、客間の席に座る。だが、シヤナはフガクの顔を見て怯えてしまつて部屋に入れない。

(むりだつてばね。こわいってばね！ おこつてるってばね)

かなり強面なフガクに固まつてしまつたシヤナだったが、ミコトたちはその様子を見て「ふふ」と笑っていた。

そして、イタチは「大丈夫、父さんは、顔は怖いけど、怒ってるわけじゃないよ」とシヤナを案内する。

「あなた。だから仏頂面じゃ怖がらせてしまつて言つたじゃない」

「そうか。すまないな。生まれつきこういう顔でな、怖がらせようとしたわけじゃない」

「こつちにおいてシヤナ」

ミナトが手招きし、彼に抱かれるようにしてフガクと向き合う。イタチとミコトが客間から離れるのを見てフガクが腕を組みながら話しかけてくる。

「ミナト君。その子が、三代目の言っていた子だな」

「はい。オレとクシナは、この子の目を見て写輪眼であると判断しました」

「そうか。見たところ、一族の特徴はあまり受け継いでいない。木ノ葉設立より前に分かれた分家の可能性もあるな。」

そのゴーグルを外してもらえるかな？」

シヤナは外そうかと悩みながら、動けない。いざ本番となると、どうしても怖いという感情が全身を支配し、石のように動かなくなる。

フガクは、動けないシヤナを見て「そうだったな。先に君に見せておくとしよう」と前置きし、顔の前で片手で印を作る。

(あれって)

そして、目にチャクラを込めた瞬間に、彼の黒い瞳が赤く瞳孔の周

囲に黒い巴模様が複数現れる。これこそが写輪眼という血継限界の本来の姿だった。

先に写輪眼を見せることでシヤナの心配を取り除いてくれたフガク。遠回しに、シヤナの目は、おかしくなどないと教えてくれているのだ。

その意図をくみ取ったシヤナは、怖がりながらもゴーグルを外してフガクと向き合う。

赤い写輪眼と薄紫の瞳が向き合いながら、シヤナはどうすればいいのかわからずミナトの袖を引く。

「シヤナ。自分の目を変化させてみて」

「えっと、んー、こうー！」

幼いシヤナは、チャクラの練り方が良く分かっていなかったが、本能的にチャクラを練られる子供だったため、目にチャクラを貯める。フガクを真似して印を組みながら、自分の目を写輪眼へと変える。

「んー、ほう、本当に写輪眼のようだな。そして、青い」

フガクは内心驚いていた。幼くして才能に溢れた息子のイタチですら、写輪眼は開眼できていない。なのにもかかわらず目の前の更に幼い少女は写輪眼を開眼している。それも3つの巴を伴った完成された写輪眼を持っていることに驚いた。

写輪眼は、その瞳力は開眼者の精神……心の闇ともいえる感情に深い関係がある。わかりやすく言えば、恨みや怒りの感情である。邪悪な面ばかりでなく、強い愛情や仲間を守りたいという面でも開眼する写輪眼だが、辛い感情が瞳力を強化するのも事実。特に戦場のような環境でこそ、写輪眼は育ちやすい。

問題は、大の大人たちが戦場のような強いストレスに置かれた環境で開眼、強化される写輪眼を、2歳半ばの幼子が完成させている点だ。虐待の話は聞いていたが、写輪眼を見ればそれがこの小さな体にとどれほどの重荷だったのか窺い知れる。同じ一族として、血のつながりのある少女の境遇に胸を痛める。

だがそれが写輪眼であるか、詳しく調べなければいけない。この少女の写輪眼は、通常とは大きく違う青く輝く写輪眼なのだから。

「今からいくつかテストをしたい。怖いことや、痛いことはない、俺の言うとおりにしてくれ」

「……はいだつてばね!」

大きな声で返事したシャナ。ミナトは、娘を信じ切った表情。クシナはどこか心配そうにしていた。

「まずは、俺の指の動きを目で追ってくれ。そして指を真似できる限り真似してほしい」

そういうと目にも止まらぬ速度で印を結ぶフガク。その速度は、戦場で使う印結びより遥かに早いものだった。

(嘘。全く見えないってばね。こんなの目で追えるの?)

(本気で印結んでるな、フガクさん)

ミナトとクシナは、フガクの手の動きを見て各々感想を頭で述べるが、シャナは真剣に目で追っていた。

青い写輪眼の眼差しを、同じく赤い写輪眼で観察していたフガクは思った。

(これは、目で追えているな。手の動きに合わせて瞳孔が動いている……驚いたな。印を結ぶ前に、写輪眼で軽い幻術もかけたのだが、瞬時に解いた)

やがて印を結び終えたフガクが自分の術発動寸前まで練っていたチャクラを霧散させる。目の精度を測るため実践の動きをしたフガク。

「やってみなさい」とシャナに指示を出せば、シャナは「うん」と頷いて……。

フガクの動きを再現してみせたシャナ。速度こそ劣るも、通常の印より遥かに速く正確に結んでいく。そして、最後の虎の印まで結んでいたシャナ。

クシナとミナトもその光景に驚いていたが、一番驚くことになるのはフガクだった。

「ぶう?」

「なっ!?!」

「ええ!!」

「きゃあ!!」

フガクの火遁豪火球の術を見て、真似してしまったシヤナ。シヤナの瞳力は、フガクの想定以上であり、彼のチャクラの動きまでも完璧に捉えていた。結果、彼の言葉通りに真似をしてしまった。チャクラの動きから性質変化まで真似（コピー）してしまった。

やがて、肺に溜めたチャクラの行き場をシヤナは考えていなかった。そもそも忍術を使ったことのないシヤナが忍術の途中停止の方法を知るはずがなかった。

結果、シヤナの口から炎が噴き出すことになった。炎は、フガク目掛けて飛び、写輪眼を発動中のフガクは回避するが炎が壁に命中する。

クシナとミナトも突然娘が火を噴いたので驚愕する。

—————

ミナトが素早く動き、すぐに鎮火したが、壁が少し焦げていた。

「うええええーんうえええん」

不本意に口から火遁を発動、さらに強面の男性の家を燃やしてしまったことで大泣きしていた。びっくりした事と怒られるとの思いから、クシナの胸で大泣きしているシヤナ。騒ぎを聞きつけたイタチとミコトも客間へ飛び込み、泣きじやくるシヤナを泣き止ませようとしていた。

「ご、ごめんな、さい」

「本当に申し訳ない」

「いや、いいんだ」

ミナトが謝罪し、クシナの後ろに隠れながらシヤナも謝る。フガクも気にするなど謝罪を受け入れる。うちはミコトとイタチは、珍しく冷や汗をかいて呆然としていたフガクの姿を愉快そうに見ていた。フガクも威厳を保つこともできず、小さい子を泣かしてしまった大人でしかなかった。

「寝ちやっただってばね」

「本当だね。じゃ、そろそろお暇させてもらおうか」

消火の後、イタチとミコトにお菓子をもらったシヤナは、機嫌をよくしていたが眠ってしまった。そして夕方になったこともあって、帰宅することになる波風夫婦。

うちは一家の3人に玄関で見送られる際に、フガクからミナトへ言葉があった。

「ミナトくん、その子の事だが、間違いなく写輪眼を持っている」

「やはり。何か気を付けることはありますか？」

「副作用はない。ただ、何かあれば、また訪ねてくると良い。その子は遠縁ながら、うちはでもある。なんでも相談に乗ろう」

うちは一族の長として、フガクはシヤナを認めた。そして、シヤナを波風夫婦が育てることも一族として許可した。これによって波風家とうちはでの亀裂はなくなるといつてもよかったのだった。

そして、日が暮れる木ノ葉の里を、父の背におぶられたシヤナが寝息と共に進んでいくのだった。温かい家へと。

## 未来視

うちは家訪問から少し時が経った。波風シャナは忍術の才能があつた事から、今日も朝早くからミナト主導で忍術の修行をつけてもらつていた。本格的なものではなく、基礎を教えるものであつたが、ミナトが遊んでくれていると思つた彼女は、真剣に取り組んでいた。写輪眼を持つシャナは、才能豊かというほかなかつた。チャクラ量もうちは一族と比べても多いほうで、センスもあり、ミナトをして将来自分を超える忍になるだろうと感ぜられるほどだつた。

とはいえ、優しい性格のシャナが忍者に向いているかと問われれば、ミナトは向いていないだろうと考えた。

しかし、里は写輪眼を使いこなすシャナを一般人として扱わない。戦時中ということもあるため、才能に溢れた戦力を放置する気はないだろう。

「お父さん。みてみて、分身の術」

数分前に披露した分身の術をシャナは真似して発動した。その数は6人で全員が精巧な分身となつていた。シャナが分身を見たのは3回で、初めの一回から分身の術を成功させていた。

「すごいよシャナ。これは先にオレが教えることがなくなりそうだ」「えー、もつと教えてほしいってばね」

成功体験のなかつたシャナは、忍術の修行で褒められるたびにモチベーションを上げていく。アカデミーの忍術のすべてを覚えてしまったシャナに、次はどうしたものかとミナトが頭を悩ませている。

そして、もう一つ懸念材料ができた。写輪眼をコントロール出来るシャナだつたが、よく可笑しなことを言うようになった。シャナは決して気にしていないようだが、何かが起こることを知っているように語るのだ。そして、シャナの言ったことは、必ず未来で起きる。そんなことが22回も続いている。

――

特に印象的だつたのは、ひと月前の任務に行く前日。

「ぺたぺた。ハハハ」

シヤナが寝る時間になっても眠らず、ミナトの忍装束にテーピングをして遊んでいた。

「こーら、ミナトの服に悪戯しちゃだめだってばね」

「いたずらじゃないってばね！」

悪戯と言われ、ひどく怒ったシヤナの様子をミナトは覚えていた。そして、何度かテーピングを外しても「とっちゃだめだってばね!!」と怒り散らす愛娘の様子に違和感を覚えたミナトは、任務に支障はないとそのままにしておいた。

その後、任務中に強敵との戦闘が勃発。無傷で倒すことはかなわず、何か所かに手傷を負った。

問題は、その数か所全てがシヤナのテーピングを巻かれた箇所だったこと。

勤の良い子供だと思っていたが、それは後日シヤナに聞いてみたところ、全く違ったと判明した。

シヤナは写輪眼を使っているとき、未来を見ることができると。その未来は、漠然としたものでなく起こりうる可能性のみを可視化しているらしく、数秒から数日、シヤナの体験だと一か月ほど先の事が見えたこともあるとのこと。物心つく前から未来視をしていたシヤナは、未来を見て最悪を回避する事を本能で理解していた。

未来視は彼女の持つ先天的な第六感だったのだ。

幼い少女の言葉を真剣に聞き入れたことで、いくつか理解できたことがあった。

予知は、遠い未来は主に偶発で、数秒後なら任意で行えるということ。

遠い未来でもチャクラ次第では視認することができ、一度見た未来でも、変化させる事はできる。

同じく未来を言い当てる妙木山の大家マ仙人の予知夢とは違い、変化させられる点で、別の系列の能力ともいえる。見たい時に見たい時間の未来を見られるという段階で利便性は遥かに高い。絶対的中す

る予知夢と自分の欲しい未来を手繰り寄せる事のできる未来視の優劣は不明だが。

未来がイレギュラーで変化した場合は、さらに視れば別の未来として視認できる適応力もある。

未来視は、自分の視点、または第三者の視点、制限はあるが彼女に近しいものの未来を見る事も出来る。

彼女は、父親であるミナトの未来を見て、怪我することを識っていた。だから先に手当をしておこうと思っただけ。その話を聞いて彼女の村での迫害された理由を理解した。物心ついたシャナは、村人に起こる不幸を見ていたのだ。だから、できる限り回避する方法を伝えた。それを彼女自身がやったことだと捉えられたのだ。

夫婦は、シャナの青い写輪眼特有の能力かもしれない未来視の事を、シャナに他言しないよう言い聞かせた。

恐ろしいまでの精度で未来を見る事が出来る能力は、最悪な未来をシャナに引き寄せるかもしれないと危惧した故の行動だった。これだけは里の上層部にも知られてはいけなかった。

いい方法はないかと考えている間に修行場へ2人の男女が訪れる。

シャナを見つけた途端、女性のほうが走ってくる。

「シャナちゃん！ おっはよう！」

「おはようリン姉ちゃん、カカシ！」

「あ、やっぱり俺は呼び捨てなのね」

元気よくシャナに挨拶してきたのはミナト班の紅一点である野原リン。その後が続いて歩いてきたのは、顔を額当てとマスクで覆った少年、同じくミナト班のはたけカカシ。

カカシの呼び方はオビトがシャナに対して「こいつは俺の部下だ。だから呼び捨てでいい」と教えたことで定着してしまった。オビトが嘘を教えるはずがないと信じているため、カカシは呼び捨てにされづけている。

「リン、カカシ、おはよう」

「おはようございます先生」



「今日もシャナの修行ですか？ 朝早いのに、精が出ますね」

ミナト班のメンバーが修行場に集まってきたがシャナはまだ来ないオビトの事を探している。

「オビトの奴はまた遅刻だよ」

「おねぼうさんねえ」

「ぷ」

「ふふ」

オビトの遅刻を仕方ない子という風に言ったシャナの格好と声に、リンは笑い、カカシとミナトも笑ってしまう。その後、訓練場でミナトとカカシが忍組手を行い、シャナは写輪眼で二人の動きを観察したり、リンの組手の際には、カカシから手裏剣の投げ方を教わっていた。

そうして時間が過ぎ、ようやくオビトが修行場に走って現れる。

息切れしながら、膝をついているオビトの前に仁王立ちするのはシャナだった。本当は、時間通りオビトが来ていればもっと遊べたのに、遅刻した彼のせいでシャナは帰宅の時間が迫っていたからだ。頬を膨らませ、怒っていることを伝える。

「遅いってばね！」

「悪い悪い、今日は困ってる婆ちゃんのバーゲンセール状態だったんだよ」

「ふん！ 許さないってばね」

「立腹のシャナは機嫌を直してくれない。」

「あらあら、許してくれないってさオビト君」

「ずっと待ってたもんね」

カカシとリンの両者もオビトの遅刻にいつも待たされるため、彼をいじる。いじられたオビトは不満そうな顔をしながらも、「今度、煎餅と団子持っていくから」という賄賂作戦で機嫌を直してもらった。

「みんな頑張ってるね」

「じゃ、私たちは家に帰るわね」

お昼前になってミナトと班員3人のお弁当を作ってきたクシナと

一緒に帰宅するシャナ。4人に手を振りながらクシナと手を繋いで帰る。

訓練場から離れて、家に向かう途中でお昼ご飯を定食屋で食べることになった二人。

好物の稲荷寿司とうどんの定食を頼んで食べている最中、事は起こった。突然食事の中のクシナが気分が悪いと真つ青になって、厠へ掛けこむ。後を追ったシャナは、必死にクシナの背中を摩っていたが、クシナが苦しそうな表情をしているため、泣きそうになる。

「お母さん、お母さん」

「シャナ、だいじよ、ぐ」

「……まってー!」

うずくまり動けなくなったクシナの姿を見て、走って助けを求めに行く。

店で女性を見つけると、大きな声で呼びかける。

「な、何?」

「お母さんが厠で、うえって、だから助けてつてばね!」

必死の形相で助けを求められた店員はすぐに様子を見に行き、近くの医者まで近くにいた忍達の手を借り搬送。シャナもそれについていき、クシナは病院で診察を受ける間もずっと横にくっついていった。

少し時間が経ち、検査結果を聞かされたクシナ。その頃には体調も回復していて、病院内で逆に疲れて眠ってしまった愛娘と一緒にミナトを待っていた。

とても心配させたし、怖がらせた。でも、人見知りの激しい娘が、自分から人と呼んできてくれた事を嬉しく思った。それに、もう一つともううれしいニュースがあったのだ。

## 失ったものの、新たな命

「え、クシナ今なんて!？」

「だから、赤ちゃんが出来たんだってばね」

「本当に?」

「本当に!」

家族が病院に担ぎ込まれたと聞いて病院に慌てて駆け込んできたミナト。無事なクシナとシャナの姿を見て一息ついた後、家に帰った彼に伝えられたのは、妻クシナの妊娠だった。感極まったミナトは、自分の妻を強く抱きしめ「ありがとうクシナ」と感謝を伝えた。

夫婦で抱き合っていると、ソファアで眠っていた長女が目を覚ます。目を覚ますなり、すぐにゴーグルを装着した彼女は、父と母の様子を見て首をかしげる。

「クシナ。シャナにも説明しないとね」

「わかってる。シャナ、こっち来て」

クシナは娘の手を取ると、自分のお腹へ誘導した。手をお腹に置かれたシャナは、首を傾げながら「お腹痛いの?」と聞く。それにクシナは首を横に振り、語りかけた。

「ここにはね、シャナの弟か妹がいるの」

「? 謎」

自分より年下を知らない少女の反応に、夫婦は新しい家族ができること、少女はお姉さんになることを教えられる。はじめは理解していなかったシャナも丁寧に説明され理解する。

「おねえさん。わたし、おねえさん?」

「そう。シャナお姉ちゃんだってばね!」

「わたし、お姉ちゃんになるってばね!」

初めてできる年下の家族。その存在に胸を高鳴らせるシャナ。いつ生まれるのか聞くも、まだまだ先だと知り少し落ち込む。

「なら、好き嫌いも無くさなきやだってばね、納豆食べる?」

「そうか。朝寝坊も無くさなきやね」

夫婦に自分の苦手な部分をつかれ「まだお姉さんじゃないってばね」と言い訳するシャナ。どうしても納豆は食べたくないし、どうしても朝は弱いのだ。

シャナはクシナのお腹に張り付いて、音が聞こえないか確かめる。

「赤ちゃん、あいたいってばね」

「そうだね。きつと赤ちゃんも会いたいと思ってるよ」

「産まれるまでに立派なお姉さんになってるといいってばね」

「納豆は嫌なんだってばね」

.....

クシナの妊娠発覚から数週間経ち、お腹の中の子供は、順調に育っていた。

今から赤ちゃんが出来るが一番喜んでいたシャナだったが、彼女は何日もベッドの上で泣き続けるような出来事があったのだ。

木ノ葉の里は戦争中で、戦争の任務に駆り出されたミナト班の面々。戦争は益々過激となり、うちはオビトと野原リンの両名が、任務中に命を落とした。

唯一帰ってきたのは、同じく任務でオビトと共に戦ったカカシ、彼の失った左目に移植された、彼の写輪眼のみだった。

「シャナ……オビトは、死んだ。戦死したんだ」

木ノ葉の里の門でオビトを待っていたシャナにカカシがそう告げた。ミナトは深刻そうな表情を崩さず、リンは涙を流し、クシナも口元を押さえ静かに泣いた。

「？ またオビト兄ちゃん遅刻したんだってばね」

オビトの死を理解できなかったシャナは、初めのうちは戦死を「遅くなるんだってばね」と思っていた。だけど待てども待てども、大好きなお兄ちゃんは帰ってこなかった。ミナトの説明を受けても、決して信じようとしなかった。

何日も何日も、オビトが帰ってくると信じて里の出入り口で待っていた。けど帰ってこない。

強い雨の日、ゴースタル越しに青い写輪眼を使っているシャナだっ

た。今日も里の門の外を眺め続けていた。

家から身重のクシナが傘を持って迎えに来る。動けないほどではないが、少しお腹も目立ってきた彼女は、オビトの死を認められないクシナに傘を手渡す。

「クシナ。今日は外に出ちゃダメって言ったってばね」

「……………だって、だって、私見たんだってばね！ オビト兄ちゃんの  
みらい、いきてたってばね……………しんでないんだもん……………」

自分の能力で予めミナト班のメンバーの未来を見ていたクシナ。彼女は、いつも任務に出る彼らを写輪眼で見ている。4人に危機が迫る未来が見えれば、駄々をこねてでも出発を遅らせたり、ミナトの荷物を増やすなりして最悪の事態だけは回避した。未来を見る事が出来るクシナは、父と彼の部下を守る役割を自分に課していたのだ。

にもかかわらず、オビトは死んだ。4人の未来を全て見るなんてクシナにはできなかった。けれど精度を落とし、数日後の表情だけを見ていたのだ。教えられたわけではない、波風クシナという生き物が持つ当たり前の使い方だった。

オビトは怒ってはいたが、生きていたのだ。なのに帰ってこない。クシナが迎えに来た姿を見たクシナは、彼女の前で体に力が入らず倒れた。

雨のせいで酷い風邪を引いたクシナは、自宅のベッドで声が枯れるまで泣き続けていた。自分の目を信じられなくなった。そして、リンとカカシの悲惨な表情が写った未来を見ても信じられず、風邪で動けなかった為、情報を伝えられなかった。

その後、再び任務に出たカカシ達。

結果、野原リンは、霧隠れの里との戦闘中に、殉職した。

今度ばかりは、里で報告を受けたクシナもすぐに理解して、泣きながら「ごめんだってばね、ごめんだってばね」と野原リンの墓で号泣した。短い間に2人の大切な人を亡くしたクシナ。

片方は、悲劇を止めるため最善を尽くし、片方は自分を信じられなかったが故に。

未来を見て動いても、動かなくても、大切な人達を死なせてしまっ

たという後悔が、幼いシヤナに重くのしかかる。

ベッドの上で吐きそうになるほど泣き続けた少女の青い写輪眼は、その光を赤く変える。そして、僅かばかり写輪眼の文様が変化し、すぐに元通りになる。

その日からシヤナは、未来視を使わなくなった。

娘の目が、通常の写輪眼になった事に気が付いた夫婦は、娘の不安要素が一つ消えたことに安堵するも、娘の可能性を潰してしまったのではと心配する。

だが、シヤナは、泣き続けるのを止め、自分の意志で立ち上がった。

シヤナが立ち直ったのは、ミナトが3次忍界大戦の功績を認められ、四代目火影へと就任した際だった。火影就任で忙しくなったミナトをサポートしていたクシナだったが、彼女も妊娠していたこともあつて、少し無理をしていた。

疲れが出た母の体調が悪くなった時、シヤナは母親を救いたい一心で、自分の新しい家族を絶対に守ると決め、自分から心の中にある暗い檻から飛び出した。

もう誰も失いたくなかった。オビトやリンは帰ってこない。だから残った家族を大切にしたかった。

立ち直ったシヤナは、元来の優しい性格から、クシナのサポート(家事)を必死に行った。

そして自分も赤ちゃんを守れる忍者になろうと修行を再開した。アカデミーの入学年齢が、終戦で引き上げられたので3歳のシヤナでは通えない。だから、クシナにチャクラの扱いを教えてもらっていたのだ。激しい運動はできないが、説明や指導くらいなら出来るからだ。

ミナトも火影の仕事で忙しくなった今、シヤナの手伝いはクシナの大きな支えとなっていた。

クシナのお腹に手を当てたシヤナは、オビトの形見のゴーグル越しに写輪眼でチャクラの流れを見ている。

ミナトとクシナは、シヤナに話していなかったが、シヤナはクシナの中に膨大なチャクラがあるのを見抜いていた。そのチャクラが悪

さをしないか見張っていたのだ。このチャクラが暴れるとクシナが苦しんでいるからだ。チャクラを目で見られるシヤナは、クシナにチャクラを流し、母の中で暴れようとするナニカを防いでいた。幸いクシナには赤ちやんを労わっているとしか見られていなかった。

赤ちやんに悪影響が出ないように、クシナに無理させないのがシヤナの一番の仕事だった。

## ゲコ仙人。登場。シャナのルーツ

シャナの介護もあつてクシナは、体調を崩すこともなくお腹が大きくなるまでになった。

そして今日は、波風家にお客さんが来ていた。

「いらつしやい、ゲコ仙人」

「ゲコ仙人じゃのうて蝦蟇仙人だのう。わぎと間違つたらんかお前」

シャナに玄関で出迎えられたのは、白髪で大柄の男性。ミナトの師匠であり、木ノ葉の三忍と呼ばれた自来也その人だった。はじめは大きい体と風貌で苦手だったのだが、自来也が子供の世話を得意としていたこともあり、何度か会ううちに仲良くなることができた。

口寄せで呼び出した小さなカエルを見せ、カエルをかわいいと思つたシャナ。カエルを大層気に入つたシャナは、彼に何度も口寄せをねだつたのだ。

ノリの良い彼も孫娘のようにシャナを可愛がり、今に至る。

「ゲコ仙人のほうが可愛いってばね」

「可愛さは求めたらん。ほれ、土産だ」

「ありがとうだってばね。……おかし?」

「土の国の洋菓子だ。前に食べたいと言つたただらう?」

自来也から風呂敷を受け取つたシャナ。リビングまで自来也を案内する。クシナとミナトもリビングに待機していて、彼を出迎える。

「自来也先生!」

「自来也先生、いらつしやい」

「おおクシナにミナト。いや、四代目火影に火影夫人と呼ぶべきかの



う」

ミナトは苦笑して「いつも通りでお願いします」と言い、クシナは照れていた。シヤナは、自来也にももらった風呂敷を開けて中身を見ようとしていた。

「なにこれ？」

風呂敷の中から出てきたのは、水着の女性が表紙の本の束だった。それを見たシヤナは首を傾げ、ミナトと自来也の二人は、急な殺気に振りかえる。

二人の視線の先では、拳を握り締めたクシナが般若のような表情で自来也を見ていた。

「ジ、ラ、イ、ヤ、先生」

「いや、これは、その、わしの、仕事の資料とお土産を」

「ク、クシナ、落ち着いて、おち」

「子供に何見せてるんだってばね!!!」

「あぎやー！ー！ー！」

「先生ー！！」

怒りに満ちた母親の拳が、自来也を捉えた。その一撃は、彼に綱手を思い出させたという。そしてシヤナは人が拳一つできりもみ回転する様を始めて見た。自分も出来ないかとシャドーボクシングしていた。

見事な一撃で気絶した自来也が目覚め、今度こそお土産を渡し、許してもらおう。

右頬を大きく腫らした自来也と波風夫婦は、お腹の子供の話をしていた。

お腹の子供の性別も判明し、弟が生まれることが決まっていた。その子の名前を師匠である自来也の小説の主人公「ナルト」を貰いたいと伝える。師の小説「ド根性忍伝」を気に入ったミナトとクシナにどうしてもとお願ひされた。

自来也は、ラーメンを食べながらつけた名前を、大切な息子につけていいのかと問うが、ミナトの意志は固かった。その日泊まっていた自来也は、シヤナにせがまれて他里の話をしていた。

シヤナは自来也の話を聞いているうちに眠ってしまう。

「それでの、……ふ、眠ったか。寝る子は育つもんだからのう」

自来也は、幼子をベッドまで運んで寝かす。そして、居間へ戻った時、同じくクシナを寝室で寝かせていたミナトが鉢合わせする。

二人は、それぞれ御猪口と日本酒、つまみに焼き鳥を出すと、二人の女人を起こさぬよう、明かりは最小限で静かに晩酌する。

御猪口で乾杯した二人は、互いに飲み終えると一息ついて話し始めた。

「シヤナの相手をしてくれて、助かりました。クシナも最近眠気が凄いらしくて」

「腹に子供を抱えておるからな。それに……九尾も」

「はい。三代目から、クシナの妊娠と出産は、極秘に行うと伝えられました。オレも同じ意見でしたので」

「細心の注意を払うべきだからな。それにお前の家庭の問題は、多いからな」

自来也は、ミナトの家にあった世界地図のある部分を串を投げて指し記す。その場所は木ノ葉から離れた国だった。

「鬼の国ですか。シヤナの故郷……」

「シャナの顔を見た時、心当たりがあった。ほれ」

自来也が懐から写真を数枚取り出す。そこには、シャナによく似た大人の女性とシャナと双子のような女の子が写っていた。髪型こそ違うが、瓜二つの鏡写しのようなようだった。

「この二人は……」

「鬼の国の巫女とその娘だ。シャナは、うちはと鬼の巫女の血を引いておる」

「鬼の巫女……あの魍魎とかいう」

「そう。それに、鬼の国の人間に聞いたところ、鬼の国の巫女には、魍魎を封印する力と……未来を見る力があるそうだ。眉唾だと思っただけだが」

シャナの血縁関係を自来也は独自に探ってくれていた。結果、シャナの出生に大きく近づいた。そして、シャナの特異な未来視のルーツも追えた。

「儂の勘だが、あの子は、恐ろしいまでに強くなるぞ（ワシやお前よりも）」

「才能に溢れていますから、自慢の子です」

ミナトはそういうが、自来也は別の可能性を思い浮かべていた。

未来視に写輪眼、考えただけでも最強の組み合わせといえる。そして忍の神に愛されたような才覚。出来過ぎて居るのだ。まるで兵器を作っているような完成度と言える。

何者かが意図的に生み出したような。だが、あくまで勘でしかない。

「それと、シャナの奴。クシナの中の九尾に気が付いているぞ」

「え？」

「クシナのチャクラを整えているのを見た」

シャナがこっそり行っている母親へのサポートを自来也は見逃さ

なかった。

「クシナが言っていました。シャナが傍にいると心なしか楽になると……でもまだ3歳なんですよ。そんな医療忍術みたいな真似」  
「文字通り見様見真似じゃな。未恐ろしい子だ」

自来也が自分とミナトの御猪口に酒を注ぎ、再び口にする。

「どうも」

「まあ今は無事に生まれることを考えねばな。子供が二人になるんだ。生半可な任務より過酷だろうからな」

「覚悟の上です」

二人は夜遅くまで酒を飲み交わした。そして、自来也が任務に出る事になると、シャナが我儘を言いつて引き止めたりもした。だが里からの緊急任務を放棄する訳にもいかず、渋々別れることになってしまった。

里の門まで一人で見送りに来たシャナに自来也は問うた。

「シャナ」

「なーに、ゲコ仙人」

「お前さんは、両親が好きか？」

自来也の問いに、シャナは満面の笑みで答えた。

「お父さんもお母さんも大好きだってばねー！」

その返答を聞いた自来也も笑い、シャナの頭を強くなでる。

「……そうか。いい子に育ったのお。シャナ、ミナトとクシナ、それに生まれてくるナルトを頼んだぞ」

「うんー！」

そう言っつて、自来也は長期の任務に向かったのだった。

## 開眼、先見の写輪眼

ナルトの出産日が迫り、波風一家は、里から離れた洞窟で生活していた。

暗部の護衛と嚴重なまでの結界に守られた要塞。その場所で、後は生まれるだけの赤ちゃんを待つだけだった。

夫婦だけなら問題はなかったが、二人の子供であるシャナの処遇をどうするか三代目火影との話し合いの末、シャナも一緒に連れていくことが決まっていた。

そこでの生活も数日と経った後、ついにクシナの陣痛が始まる。

「お母さんー！」

「これ！ 離れておれ！」

三代目火影の妻と助産師の医療忍者の両名が、クシナの出産の手助けをはじめ、ミナトは封印術でクシナの中にいる九尾を抑え込む。九尾の妖狐、尾獣と呼ばれる膨大なチャクラを持った怪物であり、クシナはそれを体内に封印する役割を持つ人柱力なのだ。

九尾を封印できるだけの膨大なチャクラを持ったクシナだったが、出産の際は、封印のチャクラが赤子へ移るため封印が弱まる。だからこそ、里から離れた場所で嚴重な下準備をしたのだ。

苦しそうな母の声を表情に、シャナは不安になるが、幼子の世話をする余裕のない大人達。

「シャナ、わたしは、だいじょうぶ、ぐううう、あああああ!!」

「少しだけ離れているんだシャナ（早く出てこいナルト。九尾は出てくるな!）」

全身汗だくのクシナと同じく汗だくのミナトを見て、シャナは洞窟の入り口付近で風にあたろうと洞窟の出口に向かった。

「あれ、おじちゃんたち……え?」

洞窟から出たシャナの前に広がっていたのは……護衛として派遣された暗部の忍達。身を隠していた彼らを写輪眼で見つけてしまったシャナは何度か話しかけ、飴を貰ったりなどしていた。顔見知り

だった彼らの無残な死体だった。

洞窟の前の水脈が血で染まり、ピクリとも動かない姿を見てシヤナは本能的な恐怖を感じる。

【ほう。小娘も居たのか】

「!?」

恐怖から父と母の所に引き返そうとしたシヤナだったが、突然男性の声が聞こえそちらを振り向く。

【運が悪かったな】

シヤナの前に現れたのは、黒いフードで全身を覆い、右目だけが覗くお面をつけた男だった。彼は、仮面越しに赤く光る写輪眼でシヤナを捉えていた。その目を見た時、シヤナは金縛りにあったかのように動けなくなった。

忍者になりたいと修行を頑張ってきたシヤナだが、3歳の少女には、本当の殺気と向き合う経験がなかった。故に全身が震え、息が出来なくなる。

自然と涙がゴッグルの中で流れ、心の中で（お父さんお母さん）と両親を呼び続ける。でも二人は、ナルトの出産と九尾の封印で精いっぱい、外の異変に気が付かない。

【痛みはない。一瞬だ。……死ね】

仮面の男の声に殺気が乗り、男が手を伸ばしてくる。暗部の精鋭たちを殺した男なら、シヤナの細い首を一ひねりである世に送れるだろう。幼子と言えど目撃者は生かさないと冷酷な襲撃者は、シヤナの命を刈り取ろうとする。

（怖いよ、助けて、おとうさん、おかあさん……）

恐怖で目を瞑ったシヤナ。死ぬ、そう感じた。

だが、シヤナの中に眠る生存本能がそれを許さなかった。彼女の忍としての血が、マグマのように心臓から全身に巡り、膨大なチャクラを精製。それらが全身に行き渡り、やがて写輪眼が赤い光から、青い光へと色を変える。咄嗟に目を開いたシヤナ。

すると、膨大な量の未来がシヤナの目の前に現れ、彼女の瞳は、そ

の中で自分の死を見た。

ならどうすればいいか。シヤナは知っていた。未来を変えるしかないのだと。頭で考えるより先に、シヤナは写輪眼の動体視力で男の腕を見切って回避。髪の毛を整えるために付けていたヘアピンを抜き取り、男の腹に突き刺した。

小柄の少女と言えど、鋭い針を男性の体に突き刺すくらいは出来る。

【何】

まさかの反撃を受けた男は腕を大きく振るってシヤナを殴り飛ばそうとするも、その未来を写輪眼で見て、分析していたシヤナはしゃがんで回避。男のアキレス腱にヘアピンを突き刺す。2発も反撃を食らった男の次の行動を未来視したシヤナは、男が本気の蹴りでシヤナの首をへし折る前に飛び退いて回避する。

自分の行動を思考より先に回避された仮面の男は、少しだけシヤナを警戒する。

「……」

シヤナの息が乱れる。だが死が迫ったことで、実際に死ぬ世界線の自分を見続けることで、極限の集中力を持つて対処している。目の前の男が持つ能力をまだシヤナは見えていない。だが、未来で体験する事実を、未来視で先取りした彼女は、男に攻撃が当たらないと知っていた。

同時に、自分の次の行動が導く未来の結末を何度も見る、写輪眼の瞳力で何度も観察することで、男に有効打を与える方法を識った。

未来で何百回も殺される中で、男の攻撃の瞬間のみ、男に触れられる。

(みえる。ぜんぶ)

実践経験のないシヤナであったが、未来で試行錯誤の結末を見られること、写輪眼の力で通常の何百倍もの情報を深く得られる恩恵、全てが合わさって膨大な経験値となっていた。

全ての忍に対する天敵となった少女、術を使う前に全て見切り、研究し、克服する。

後に、〈先見の写輪眼〉と呼ばれる血継限界であり、木ノ葉の青い閃光と呼ばれる少女の力が、開花した瞬間だった。

「わたしは、しなないってばね」

だが、幼い少女の脳は、沸騰寸前だった。写輪眼を日常から使えるチャクラ量のあるシャナだが、戦闘中に未来視をする事などなかった。常に膨大な量の未来を経験値にする能力だったが、受け皿である脳が限界に近づいていた。

そして、チャクラの消費量も膨大なものであり、長く使い続けることは不可能。情報量を減らせば、その分負担の減る能力だが、初めて開眼した力を危機的状況ではコントロールできない。

そして、シャナには膨大な量の経験値がなければ、男に瞬時に殺される。

未来を見て、男の投げるクナイの雨の軌道を識ったシャナは、絶対に当たらない位置を見つけて体をその隙間にねじ込む。当たってから回避する、を行える彼女は、1分近く仮面の男と戦っていた。

男の攻撃前のタイミングで、反撃することで男の攻撃が自分をすり抜けることも知った。当てたいときは、男の攻撃中にカウンター。回避したいときは、男の攻撃が当たる前に攻撃。少しづつ仮面の男を攻略していく。

【何故お前が俺の力を知っている？】

明らかに自分のすり抜け能力を攻略しているシャナに、男の苛立ちが声に籠る。抵抗されるなど考えてもいなかった。

(小娘のうちの血をなめ過ぎていたか)

実力差は圧倒的なのに、シャナに触れられない。ギリギリの紙一重で全て回避される。小柄ゆえに死角に逃げ込み続ける少女を捉えられない。

フェイントも仕掛けるが、フェイントには見向きもせず、的確にカウンターだけを貰っていく。やらしいことにシャナのヘアピンでのカウンターは、全て急所を突いている。普通の人間なら、動けなくなるほどダメージを負っている。

だが、男は規格外の体をしており、シャナの攻撃も驚きこそすれ、ダ



メージとは言い難かった。

シヤナも自分の攻撃が効果が薄いと感じ、仮面の男の投げた手裏剣を幾つか回収していた。クナイ投げは、筋力の関係から避け、投げやすい手裏剣で牽制する。少女が思い出すのは、カカシの手裏剣術。カカシの雷を纏った雷遁手裏剣をコピーして繰り出す。

電気を纏った手裏剣が男へと向かう。

【無駄だ】

手裏剣は男の体をすり抜け、明後日の方向に飛んでいく。飛んで言った手裏剣は、重力で落下して川に落ちる。もう手加減はしないと全力で怒涛の連撃を繰り出す仮面の男。その動きも未来で見ていたため、回避しようと軽い身のこなしで往なす。

「あぐ」

しかし、4回ほど回避したタイミングでシヤナの脳と体に限界が訪れる。激痛が目と体中を襲い、酷い頭痛が彼女の動きを鈍らせる。その隙を見逃さなかった男は、シヤナの首を掴み、力を籠める。

息が出来ず、もがき苦しむシヤナ。

【手こずらせたな。いい眼を持っている、だがその才能が開花することは、もう、何?】

シヤナの首がへし折れるかというところで、一本のクナイが仮面の男の右腕。シヤナを締め上げていた手に突き刺さる。奇襲に驚いた男は、シヤナの首から手を放してしまう。

男が振り返ると、洞窟の入り口に血みどろで息も絶え絶えの暗部の忍が居た。彼の胴体には、2本の手裏剣が刺さっており、僅かに雷遁を纏っていた。それはシヤナの投げたものだった。

「にげろ、よんだい、めに、はや、く」

「(ごめんなさい)」

仮面の男から解放されたシヤナは、洞窟の奥に逃げていく。その背中に手を伸ばした仮面の男に、死にかけて暗部の忍がクナイを投げて牽制。男の手はシヤナの体をすり抜け逃してしまう。

【死に損ないが】

「(実際は死んでたさ。だが、犬死ではない)」

仮面の男は、自分に突き刺さったクナイを抜いて、暗部の男性の頭部へ投擲。自分の役割は果たしたと消えた少女の後姿を見て暗部の忍は絶命する。しかし、仮面の中の顔に無念の表情はなかった。

実際に暗部の男は死んでいた。仮面の男の不意打ちで死んでいたはずだったが、シャナの投げた雷の性質を纏った手裏剣がAEDと同じ役割を果たし、心臓を電気ショックで動かし一時的に蘇生。仮面の男を追って洞窟に入った所、シャナを見つけて、助けたのだ。

シャナは、自分だけの力ではどうやっても死ぬ運命に抗おうと膨大なパターンをシミュレーション。結果、暗部の忍を蘇生する案が選ばれた。当然、暗部の忍は再度死ぬことになる。それしかなかった。だから実行したのだ。

シャナは、何度もごめんなさいと謝りながら、洞窟の奥に向かって走る。

しかし、シャナの思惑が成功したのは事実。仮面の男は、何故か生き返った暗部の亡骸を見て、全てを察する。

そして、畏れにも似た感情をシャナに抱く。

（ありえん。未来でも見えているのかあの小娘は。思いついたとしてなぜ試せた。こんな策を）

下忍ですらない幼子の作戦。神業と奇跡の合わせ技。当然理解できるものではない。

まんまと逃げおおせたシャナの力。それをまざまざと見せ付けられた。

（泣き虫だった癖に、強くなったな。シャナ）

仮面の男は、自分が仮面の中で笑っていることに気が付く。だが、すぐに仮面を外し、自分の頬を殴って覚悟を決める。時間を盗られ過ぎたと、仮面を被り目的地へ向かって透過しながら走った。

背後から男が追ってこないことを確認したシャナは走り続ける。

（もっとはやく、もっとはやく、早く伝えないと。はやく、はやくー）

なぜ自分も遅いのだろうと、父ミナトの瞬身の術や飛雷神の術を思い浮かべる。

シヤナの焦燥感と共に、洞窟内で青い光がシヤナの全身から発せられていた。

その夜は、月が良く出ていた。まだまだ夜は長い。

## 九尾

シャナのチャクラに異常が起き始めていた。チャクラが光を放ち、洞窟内で輝き始める。その異変にシャナは気が付いていなかった。

ようやく父と母の居る部屋の光が見え、赤ん坊の大きな泣き声が聞こえた。

「……、……！」

その声が、生まれたばかりの赤ちゃんだとわかった。会いたかった弟のナルトの声だとわかった。けれど襲撃者がいる以上、逃げてと叫ぼうとしたシャナ。だけれど、声が出ない。仮面の男によって喉が潰されていたからだ。

そして、中から悲鳴と共にミナトの声が聞こえる。

(あのひとが、中にいる。お父さんに伝えないと)

慌てて駆け込んだシャナが目にしたのは、赤ちゃんを抱えた仮面の男。その魔の手を金髪で顔に髭のような文様のある赤ちゃん。シャナの弟であるナルトに向けられていた。

【さあ人柱力から離れるミナト。さもなければ、この子の寿命は数分で終わる】

「なる、と、ああああ」

(まずい、九尾が)

子供を産んだばかりでクシナの封印が弱まり、中の九尾が出てこようとする。さらに人質に取られた息子という状況に、ミナトは身動きが取れなくなる。

「落ち着け」

【俺は落ち着いているさ。誰よりも】

仮面の男は、ナルトを放り投げて懐から出したクナイを以て切り掛かる。シャナは、もう未来予知できる状態でなかった。写輪眼も通常の状態に戻り、先を読むことができない。

だけれど、優れた動体視力を以てして、ナルトの未来がどうなるかわかってしまった。

(つぎけんなんてばね！)

ナルトが奪われると分かったシヤナ。既にミナトが動こうとしていたが、シヤナの火事場のくそ力がシヤナの先見の写輪眼とは違う力を発現させる。

瞬身の術を使い高速で移動したミナトの隣を、青い光となったシヤナが飛び出し、ナルトを突き刺そうとした仮面の男の体を蹴って、空中にいるナルトをキャッチ。

「……（ナルト。無事だつてばね）」

「シヤナ！ まだだ！」

想定外の速度で迎撃と人質奪取を行ったシヤナだったが、すぐさま飛んできたミナトに抱えられ、ミナトはナルトに巻かれた布をはぎ取る。

【その通り】

仮面の男は、10回も攻撃を食らったことでシヤナが自分の術を克服していることはわかっていた。だからこそ、閃光となって訪れたシヤナの攻撃を片手でガードし、すぐにナルトに巻かれた布に仕込んだ起爆札を爆発させた。

【飛んだか。やはりミナトは、一筋縄ではいかない】

爆発する直前、ミナトが抱いたシヤナとナルトと一緒に消える。さすがというか、動けないクシナの居る此処ではなく、起爆札ごと飛んだことは称賛に値する。

だが仮面の男の狙いは、ナルトでもミナトでもなく、ましてやシヤナでもない。

封印の弱まった人柱力であるクシナただ一人だった。

「あなた、なに、もの」

【俺は誰でもない】

仮面の男は、クシナを右目の穴から吸い込み、自身もすぐに渦のような次元の歪みに吸い込ませた。

起爆札を回避するために、飛雷神の術で二度飛んだミナト。一度目は、家に設置した特製クナイのマーキングに飛び、その後は緊急用の里の外れにあるシエルターに飾ってあるマーキングへ飛んだ。

「…、…っ！ げほげほ」

「シヤナ。喉が、あの男にか？」

喉が痛くて話せないシヤナを労わり、赤ん坊のナルトをベッドに寝かせる。

「戦ったのかい？」

シヤナは頷く。幼い娘が、謎の男と戦って生き残ったことを喜ぶべきか、怒るべきか。それとも娘の危機に気が付かなかった自分の不甲斐なさを責めるべきか悩む。だが今は悩んでいる時間はなかった。敵の狙いは、クシナであつた以上、すぐに戻らなければいけない。狙いが九尾である可能性が高い。

「シヤナ、俺は母さんを助けに行かなきゃいけない。ここは安全だ。この薬を飲んで、待っていてくれ」

「…、…！」

必死に何かを伝える娘だったが、声が出ていない。ミナトは、シヤナの喉を薬を浸み込ませた包帯で巻いてあげると、シヤナの頭を撫でる。

「ここなら安全だ。シヤナ、ナルトを頼むよ。強いお姉さんのシヤナにはできるよね」

「(うん)」

自分出来ることはない。赤ちゃんのナルトを守ることが、ミナトが全力で戦うために必要な事だと悟る。だが伝えなければいけないと、ミナトの手のひらにひらがなで指文字を書く。

「？ す、け、る、あたら、ない、さわる、あたる」

「(お母さんを助けてお父さん)」

仮面の男の情報を伝えたシヤナは、安心してしまう。すると、どつと疲労感がシヤナを襲い、倒れそうになる。だけど、必死に足に力を入れて弟の眠るベッドに座り、ミナトを見て頷く。

「行ってくるー！」

ミナトがシヤナの前から消える。時空間忍術である飛雷神の術でクシナに付けておいたマーカーキングへ飛んだのだった。残されたシヤナは、ベッドで眠る弟の姿を見た。

(初めましてだつてばねナルト。やつと会えた)

ナルトが寒くないように、布団を掛けなおしてあげるシャナ。そしてナルトの頭を優しくなでてしていると、ナルトが指を小さな手で掴んできた。そして怯えて泣き始めた弟のお腹を優しく撫でてあげる。

(ナルト。大丈夫だつてばね、お父さんがお母さんを連れ帰つてくれる)

言つてあげたいことがいっぱいあるのに、仮面の男のせいで喋れない。けれど、無事に生まれてくれた弟の事をシャナはとても愛おしいと思つた。

少し疲れたと、シャナも横になつてナルトの顔を眺めていた。小さくあくびをしている弟の頬を突いてしまう。

するとミナトがクシナを抱えて現れた。一瞬敵かと思ひ体を起こしたシャナだつた。今度はミナトの置いていつたクナイを両手で構える。

「オレだよシャナ。少し手伝つてくれるかい？」

クシナをベッドに寝かせるため、シャナもミナトの手伝いをする。ベッドに寝かせられた。クシナの様子は正直言つて最悪と言える。シャナの写輪眼は、クシナのチャクラが激減している事を見抜いていた。

明らかに弱り切つた様子であり、いつもの活力は皆無だつた。

「ナルト。……シャナ、おいで」

震える手でナルトを抱き、涙を流した母。そしてシャナにも手を伸ばす。シャナも母に近寄ると、二人して抱き締められた。

「ミナト、ありがとう、ふたりにあわせてくれて」

クシナがミナトにさういうと、ミナトは拳を強く握りしめ、「すぐ戻る」と伝えた。

そして、クローゼットから四代目火影と書かれた装束を纏い、その場から消えた。

「シャナ。……あなたに説明しておかなきゃね」

(うん)

母がシャナに今起きていることを伝える。自分が九尾の人柱力で

あつたことも、そしてこれからシヤナとミナト、ナルトが送る人生について。母の想いが籠った言葉を聞いてるうちに、シヤナは嫌な予感がした。

『けがなおってから、でいい』

指文字で書くも、クシナは力なく首を横に振る。そして、シヤナの頬に手を添える。

「お母さんは、もう長く生きられない」

（いやだ。いや、いや）

「だからもしもの時は、ナルトの事お願いねシヤナ」

まるでお別れのような言葉にシヤナは、首を横に振り続ける。未来視を使いそうになるも、もしそれで死が確定していたら、そう考えると母の死など見たくない。

感情が乱れ、写輪眼が涙で潤っていく。

その瞬間、とてつもない振動と莫大なチャクラ、獣の遠吠えが聞こえる。

「クシナ、シヤナ、掴まれ！」

突如、シエルターが崩れ始めるが現れたミナトがシヤナ達を抱えたまま、時空間忍術で飛ぶ。シエルターから少し離れた位置に飛んだシヤナ達。

彼らの元居た場所には、怪獣とも言えるほど巨大な九尾の狐が現れていた。

「（あのチャクラって）」

あまりに馬鹿でかいチャクラと体にシヤナは目を見開く。だが、ナルトを抱えた両親は、どちらも息が絶え絶えだった。ミナトは背中に大きな傷を負っており、さらにチャクラ不足に陥り、クシナは生命の限界が近づいている。

「早く、九尾を封印しないと（結界を張らなければ、だがチャクラが）」「ミナト。ナルトとシヤナをお願い。私が九尾を連れていく！」

クシナが抱いていたナルトを彼に手渡し、死力を尽くして全身から光の鎖を発生させる。

クシナの旧姓、うずまき一族に伝わる封印術である金剛封鎖の術



だった。鎖はすぐに九尾の狐の体中に巻き付き、周囲一帯を鎖の結界で覆う。

(すごい)

九尾は、金剛封鎖を破ろうと暴れるも、クシナの文字通り命を懸けた鎖を引きちぎれない。

「クシナ」

「このまま、九尾を引きずりこんで死ぬわ……そうすれば、九尾の復活時期を延ばす事が出来る。残り少ない私のチャクラであなた達を助けるにはそれしかない。今まで、色々ありがとうミナト」

母に手を伸ばしたシャナ。シャナの手を握り、自分の頬との間に挟むクシナ。

ミナトは、唇をかみしめながらクシナに伝える。

「クシナ、君がオレを……四代目火影にしてくれた。君の男にしてくれた。

そして、この子達の父親にしてくれた……」

「…泣かないでミナト。私は嬉しいの」

涙をこらえるミナトにクシナは精一杯笑いかけながら言う。

「私は、あなたやシャナに愛されている。

それに、今日はこの子の……、誕生日なんだから……。

何より、もし私が生きてたら家族4人で暮らしてる未来を想像したら、幸せだって事以外、想像できないんだもん。

ただ……心残りがあるとすれば、大きくなったシャナやナルトを見てみたかったあ」

死が迫る中、大人になったシャナやナルトの姿を想像する。もう叶わないけれど、大きくなったシャナに恋愛相談されている自分、悪戯ばかりのナルトを叱っている自分、その光景を笑ってみているミナト。色んな想像が頭を巡る。

そんな彼女を見てミナトも一つの決心をする。

「君が九尾と心中する必要はない。オレの残りのチャクラで、君の残りのチャクラを分けてナルトとシャナに封印する。そして、屍鬼封尽で九尾をオレに封印する。人柱力でない俺が尾獣を封印するにはそ

れしかない」

「でも、あの術はリスクが」

「そして、封印するのは九尾の半分だけだ。物理的にすべて封印は出来ない上に、九尾が消えたとなれば、他国との均衡が崩れ、また戦乱が始まってしまう。」

だから屍鬼封尽で九尾を半分だけ永遠に封印し、残りの半分をナルトに封印する。八卦封印でね」

ミナトの言葉を聞いてクシナが驚く。ミナトのやろうとしていることは、自分の命を懸けた封印術であり、使えば彼が死ぬことが確定するからだ。

ミナトは今回の黒幕を倒しきれなかった。だからこそ、自来也から聞いていた予言の子であるナルトに全てを懸けることにした。九尾の人柱力となり、世界の破壊と変革の運命を担う存在、それが自分の息子であると確信していた。

力をつけたナルトなら、あの男の野望を止めてくれる救世主になると。

「ミナト、でも」

クシナの制止を聞かず、ミナトは屍鬼封尽の印を結び、術の発動態勢をとる。屍鬼封尽は、うずまき一族秘伝の忍術であり、死神を召喚し、その死神の腕で対象と術者の魂を永遠に死神の腹の中に封印するという術だ。

代償はもちろん術者の命。

「貴方が死ぬことなんてないじゃない!! シャナとナルトの成長を見守っていてほしかったのに、私なんかの為に、ナルトが犠牲になる必要なんてないじゃない!! あなたが犠牲になる必要なんて」

「国を捨てる事、里を捨てる事、それは子供を捨てるのと同じだよ。国が崩壊した君なら良く分かるだろう？」

国を持たない人達がどれほど過酷な人生を強いられるか。

それに俺達家族は、忍だ」

四代目火影として、里も家族も守るための方法がそれしかなかったのだ。父の言葉を聞いたシャナは、父にも手を伸ばす。それを受けたミ

ナトは、シヤナを抱きしめる。

「ごめんよシヤナ。オレは、皆を救わなくちやいけないんだ。それにナルトの中に封じ込める九尾をコントロールできるのは、写輪眼を持つものだけ。だから、シヤナにナルトを託したいんだ」

(なんで、なんで、みんな、いなくなっちゃうの)

声が出ない。けれど涙だけは止まらない。別れが迫っている。ミナトを抱きしめる力が強くなる。ミナトも涙を流し、シヤナを抱きしめる。これが父親として娘にしてあげられる最後の抱擁。

本当にシヤナと出会ってから楽しい日々だった。新米パパと新米ママとして、十分とは言えなくても全力で取り組み、色んな思い出が出来た。この子との出会いは運命だったのだと感じる。

「何よりも守りたいのは、お前たちの未来。里の未来なんだ」

「どうして、そこまで」

「短い時間であっても、母親として子供たちに伝えられることがあるはずだ。それは俺にはできない。だけどね、子供達の為に死ぬことは、父親でも出来ることだ。むしろ、命を懸けて子供たちを守る。それがオレの役目だ」

ミナトは、シヤナを下ろし、印を結ぶ。すると儀式用の台座を口寄せし、封印術の準備に取り掛かる。そして、シヤナにナルトを預ける。「四代目火影から、幼いくノ一に対する指令だよ。弟を守ってくれ」

(……)

そう告げると屍鬼封尽を開始。シヤナが台座にナルトを寝かせるのを見る。

死神の腕がミナトの腹を通して九尾に伸びる。死神の腕は、九尾のチャクラをつかみ取ると、それを引きずり出し、ミナトの腹部に封印の刻印を刻む。

(全身が岩のように、なんて重いチャクラなんだ)

チャクラの半分を封印された九尾は、大幅にサイズダウンを起こす。すぐに封印に取り掛かろうとしたが、体が思うように動かない。九尾との戦闘で負った傷も此処にきて重荷になり始める。

そして、最悪のタイムミングでクシナの体調が悪化。金剛封鎖の鎖が

次々と碎けてしまう。

そのタイミングを見ていた九尾の狐。己を赤ん坊に封印しようとした波風夫婦に怒り狂い、解放された腕を振るってナルトを殺しにかかった。

その鋭い爪がナルトに触れるより先に、クシナとミナトが彼を守るように立ち塞がる。その鋭い爪は、二人の胴体を貫通、二人が踏ん張るも爪は止まらない。

咄嗟にシヤナは、ナルトを抱き上げて、庇おうとした。そして、目の前に迫る鋭い爪は……ザクつという音を立てて止まった。

## 封印

ナルトを狙い両親の体を貫いた爪は、シヤナのゴーグルまで届いていた。

ビキビキとひび割れていくゴーグル。シヤナは、一步下がって距離をとる事でゴーグルから爪を抜いた。

(お父さん、お母さん)

「お、と、さ、おかあ、さ」

串刺しになった両親の姿に、シヤナは震える。ぽたりぽたりと二人の血が爪を伝って、シヤナの抱くナルトに血が滴り落ちる。二人は、血みどろになりながらも、ナルトとシヤナが無事なことに安堵していた。九尾の爪が突き刺さった状態で、ミナトは印を結び、小さな蝦蟇を口寄せする。クシナが再び封印に力を入れたことで九尾は再び身動きが取れなくなる。

そして、伝言を彼の師である自来也に伝えるよう告げた。告げられた蝦蟇は、すぐにその場から消える。

「ぐふ、シヤナ来てくれるか?」

「う、うん」

串刺しの両親に呼ばれ、シヤナは近寄る。そして、ミナトが指先でシヤナの額に術を施した。その際、自分のチャクラとクシナのチャクラを少し組み込んだ。

「これは、ナルトの封印の鍵だ。もしナルトの封印が緩んだ時、封じられるよう術を、組み込んだ。自来也先生に聞けば、使い方がわかる」

シヤナに与えられた術式は、すぐに消える。ミナトは封印の鍵を九尾をコントロールできる可能性がある娘に託したことを後悔はしていない。写輪眼と鍵があれば、ナルトが九尾に乗っ取られる心配もない。

「クシナ…、もう命がもちそうにない」

あとは、八卦封印だけとなるが、自分やクシナの命が風前の灯火となったため、ミナトはクシナに言葉を頼んだ。

「そろそろ八卦封印をやるよ。オレのチャクラもナルトに少し組み込

みたいんだ。当分は二人に会えなくなる。今のうちに子供達に言い  
たい事を言っておこう」

クシナはシャナに伝えた言葉を思い出す。だけど最期となり、涙を  
流しながら本当に伝えたい言葉を発する。

「ナルト、好き嫌いしないで、シャナも甘いもの食べ過ぎないように  
ね。」

お風呂には毎日入って温まる事。シャナは女の子だから、髪の手入  
れも頑張ること。それと、夜更かししないでいっぱい寝る事。

それと姉弟だもの、喧嘩することもあるだろうけど、仲直りは絶対  
しなさい」

胸に次々浮かび上がる言葉を娘と息子に伝えていくクシナ。母と  
して二人の未来を案じるが故の言葉。

「それから、お友達を作りなさい。シャナは人見知りだしそこは少し  
心配。でも本当に信頼できるお友達を数人でいいの」

人柱力と青い写輪眼を持つ姉弟。差別を受けるかもしれない。け  
れど、二人には友達と過ごせるような人間になってほしい。

「母さんは、苦手だったのだけれど、勉強や忍術もたくさんやりなさ  
い。もしナルトがわからないことがあったら優しく教えてあげてね。  
でも我儘言ったら怒ってもいいわ」

頭のいいシャナなら、きっと大丈夫。ナルトも安心して任せられ  
る。

「それと大切なこと、忍びの三禁について。特に、お金の貸し借りには  
気をつける事。任務金はキチンと貯金すること。シャナは買い食  
いが好きだから特にね。ナルトが可愛いからって、お菓子ばかり食べ  
させちゃだめよ」

容易に浮かぶ。ナルトの我儘に甘々な姉が、お菓子を買って過ぎて、  
ご飯が食べられなくなる光景が。

「お酒は、20歳になってから。飲み過ぎては体に障るから程々にす  
るって」

この子たちはどんな大人になるんだろう。一緒にお酒を飲んだり

もしたかった。

「それと三禁で問題なのは女ね。母さんは女だからよく分からないけど、とにかくこの世は男と女しかないから。好きになるなら母さんのような人を見つけてなさい。」

逆にシヤナは、変な男に騙されちゃだめよ。貴方は可愛いから、色んな男性のアプローチを受けると思う。けど誠実な人に勝る物はな  
いわ……」

「そこは、オレみたいな人っていわないんだ」

「ふふ、そうね。それと三禁と言えbaumou1つ、自来也先生には気をつ  
けなさいってばね」

クシナの言葉をシヤナとナルトは一つ一つ受けていく。

「2人共、これから辛い事、苦しい事いっぱいあるかもしれない、けど  
自分をちゃんと持つて。」

そして、夢を持つて！　そして、夢をかなえようとする自信を持つ  
て!!」

二人の未来以外望むものなんてない。夢を持ち叶える子供達の姿  
を浮かべる。

「もっともっともっともっともっ……色々なことを一緒に教えてあ  
げたいのに、もつと一緒にいきたいのに!!!」

二人と同じ時間を歩いて行きたいのに。色んな所に一緒に行きた  
かった、いろんな体験をさせてあげたかった!」

クシナの感情が爆発する。止めどない涙と共に言葉が出てくる。  
だが最後に伝えなければいけない言葉があった。

「私は二人を愛してる。誰よりも、貴方達を愛してる!」

滝のように涙を流しながら、シヤナとナルトに触れる。この言葉だ  
けでも伝えられてよかったと、安堵する。クシナが言葉を終えミナト  
も話し始める。

「父さんの言葉は、母さんと同じかな。クシナ、そろそろ八卦封印を施  
すよ」

「グアアアア!!!」

ナルトに九尾を封印しようとクシナのチャクラを封印に組み込も

うとしたとき、九尾が鎖を引きちぎって暴れ出す。

「くうー！」

「おんぎゃあ、おんぎゃあ」

逃がしはしないとクシナが鎖で腕をからめとるが、複数の尾が自由となつて周囲の森をなぎ倒す。尾だけでも自由になつた事で全ての尾を4人に向けて突き刺そうと振るつた。その抵抗にクシナとミナトは止める力がない。

九尾の狐の咆哮にナルトが大きな声で泣き出す。

どうしよう。こんな感情初めてだつてばね。いや、確か村で、村人たちに思つた感情がこれだつてばね。どうしよう。ナルトも泣いちやつたし、お父さんとお母さんが死んじやう。

体中から力が抜ける。大切なものが根こそぎ奪われ、黒い暗い感情が全身を包み込む。心が震えず、何も感じなくなつていく。

どいつもこいつもシャナから奪つていくのだ。仮面の男や九尾の狐。これらが両親の命を奪い、殺した。

さらにナルトの命まで奪おうというのか。

どうして私は奪われるの。私の大切なものは、絶対に私から離れていく。もうナルトしかいないのに。

ナルトしかいない。弟しかいない。私の大切な人は、この子しかない。この子を奪われたら、私には何が残るの？

何も残らない。だから、私は私であるために、この子(ナルト)を守らなければいけない。どんな存在からも、だから力がある。私はいつも、奪われたのは何故。

私が弱いからだ。守りたい、守りたい、守りたい、どんな手を使つても、この手に残つた弟だけは！！！！

だから私から奪うやつは殺す！！

「ア、アアアアアアアアアアアア」

シャナのゴーグルが砕け散り、シャナの青い写輪眼が姿を現す。その表情は、怒りに歪み、青筋が浮かび上がる。殺意と怒りに染まつた

!!!!!!!!!!!!



表情のシヤナの写輪眼が変化する。

三つ巴の文様が両目とも歯車の文様へと変わり、シヤナの潜在能力から膨大なチャクラが全身の細胞から噴き出す。

それは写輪眼を持つものが稀に開眼するといわれる万華鏡写輪眼そのものだった。シヤナの万華鏡写輪眼を見た九尾の狐は、その瞳術によつて瞳を青く変え、ピクリともできなくなる。

喉から血が出るが、それでも声を荒らげる。

九尾を操ることのできる写輪眼、それが万華鏡写輪眼なのだ。両親の死が決定したことで、大切な人の死を感じ取ったことから開眼したそれ。

(う、うぐげん!!! この目、忌々しい写輪眼め)

九尾は何とか抜け出そうとしているが、シヤナはナルトを抱いたまま、憎悪に満ちた目で睨み付ける。

「化け狐」

膨大なチャクラが、巨人像となつてシヤナを包み込む。最初は骨だった巨人が、瞬時に形を変える。それは、巨大な阿修羅像のような形となり、6本の腕と怒りの形相を現していた。

九尾よりはるかに大きいチャクラの阿修羅像を生み出したシヤナは、両目と口から血を吹きながら「ころす！」と宣言する。

シヤナの言葉で動いた阿修羅像から、2本の腕が伸びて九尾の右腕を優しくもがちり固定する。両親に負担を掛けないシヤナの優しさだったが、残った4本の腕は、その剛腕を容赦なく身動きできない九尾の狐の胴体へと叩き込む。

周囲に地震のような衝撃が起こり続け、巨人のラツシュは目にも止まらぬ速度で続けられる。一撃一撃が地形を変える破壊力を持ち、その攻撃力で九尾を殴り続ける。やがてラツシュが止まる。

「ぐうぐう」

地面にめり込み、憎しみを込めた目でシヤナを見上げる九尾。それを見下ろすシヤナは「うるさいってばね」と一蹴。強烈な一撃がズタボロな九尾の顔面を地面にめり込ませる。

(あのめ、まちがいない、あの男の)

虫の息になった九尾は、自分を見下ろすシャナの目を見て、記憶に深いある人物と被った。だが目の持つ闇に関しては、シャナのほうが深く感じた。

「なんとかいいってばね」

さらに理不尽な一撃がシャナの指示で振り下ろされる。一方的に叩きのめされた九尾。意識を失い、完全に伸びてしまった尾獣をシャナの操る青い阿修羅像は持ち上げる。

ピクリとも動けない九尾にシャナは、ようやく力を解除する。

「お父さん、お母さん、はやく、して、ってばね」

写輪眼を解除したシャナは、ナルトを台座へ寝かせ、両親の前で仰向けに倒れる。

瀕死になっていた両親は、シャナの使った謎の力と、豹変した様子に手も足も出なかつたが、「さすがは私たちの子」「さすがオレの子だ」と娘の親孝行に助けられたと喜んだ。

そして、八卦封印で気を失い大人しくなった九尾をナルトの中に封印した。そこでミナトは力尽き、その生涯を終えた。

残ったクシナは、シャナを抱きしめる。

「ありがとう。私たちの娘になってくれて、私とミナトをお父さんとお母さんにしてくれて」

「……お父さんとお母さん、大好きだってばね」

涙を流し抱擁するシャナの手の中でクシナもその命を終えた。

—————

「大丈夫か!？」

すべてが終わった後、三代目火影と忍達が駆け寄ってくる。彼らが見たのは、亡骸となったクシナとミナト。そして赤ん坊を抱いてこちらに這ってくるシャナの姿だった。体中がチャクラで火傷しており、痛々しい姿だった。

「生存者あり！ 医療忍者を早くつれてくるのじゃ!!」

シャナと赤ん坊が生きていると分かった猿飛ヒルゼン。彼の裾を掴んだシャナが「おとうと、ナルト、おねがい」と伝える。

「ナルトか。この子の名前じゃな。わかった、じゃから、もう喋るな」

ナルトを受け取ったヒルゼン。そして、ナルトを預け安心しきった  
シャナは気を失った。

シャナが目覚めたのは、その事件から2か月ほどたった後だった。  
無理をし過ぎたシャナは、何度も死と蘇生を繰り返し、どうにか命を  
繋いだ。

## 別離

目の前に映るのは、九尾に貫かれたクシナとミナト。

その痛々しい姿に駆け寄って、手を伸ばそうとするもその場から動けない。声も出ない。

その場から動けないシャナに対して、九尾の顔が挑発するように歪む。そして、両親の体をわざと痛めつけるように爪を太くしていく。血反吐を吐いて苦しむ両親。

やめて、やめてええ!!!

声にならないシャナの絶叫が闇のような空間に響く。だが、その声は九尾に届かない。やがて、二人の体が血潮となって消える。ボタバタと両親だったものが地面に広がる。

【どうしてお前の親は死んだ?】

声が聞こえ振り返れば、仮面の男がナルトを抱いて立っていた。そして、オビトとリンの亡骸がその男の足元に転がる。

【お前には圧倒的に足りないからだ、力が】

ナルトを離して!

【ほら、お前の力がないばかりに、全てお前の手から零れ落ちていく】

男は、ナルトの包まれた布を鷲掴みにして、握りつぶした。その時飛んだ血が顔にかかる。そして呆然と立ち尽くすシャナを前に、足元に転がったオビトを踏みつけ睨む。

【これで、わかっただろう。愛など不要、お前が求めなければいけないのは力のみ】

ころす。ころしてやる!!!

【そうだ。その目だ。俺と同じ力を以て、成すが良い】

仮面の男が、自分の仮面を外そうとしたとき。シャナの意識は、白い光に包まれた。

眩しい光で目がくらむ。それに、体中が岩のようで一切動かない。

それでも動こうと力を入れてみると、突然女性の驚いた声が聞こえた。

「先生！ 意識が戻りました！ 先生!!」

急に騒がしくなり、何人か部屋に入ってくる。その頃には、目も少しづつ慣れてきてここが病院のベッドの上だと分かった。薬品の独特なおおいに顔をしかめていると、男性の医療忍者がシャナの目に光を当て、瞳孔の動きを確認、脈を測ったのち質問してくる。

「私の指が何本か言えるか？」

「……に」

喉が全く動かずかすれた声しか出ない。何がどうなったのかわからず、泣きそうになる。そして、先生から説明を受ける。ナルトの誕生日から今は、2か月経っていること。シャナは、あの日、死に掛けたまま二か月間入院していた。

お父さんとお母さん、それにナルトはどこにいたのか、シャナは聞いた。その言葉を聞いた医師たちは、みな複雑そうな表情をしていた。

「それは、ワシから説明しようかの」

そして、彼らが答えるより先に、病室に三代目火影が入ってくる。医師たちは頭を下げようとすが、三代目がそれを制して、少し二人にしてくれるかと頼み、病室で二人きりとなる。

病室の椅子に腰かけた三代目火影は、シャナの様子を見た後、ゆっくりと話しかける。

「お前にとっては、受け入れがたいかもしれんが……波風クシナとミナトは、あの九尾の封印に携わった後に、亡くなった」

聞きたくなかった事実。知っていた。父と母の体温が消える瞬間まで一緒にいたのだから、もう二度とあの温もりはシャナを包み込んでくれない。ほろほろと涙が流れるシャナ。

「なる、と……おとう、とは？」

弟はどうなったのだろう。弟の事は命を懸けて守った。けれど赤ちゃんは弱い。もし、ナルトの身に何かあったらと動悸が止まらなくなる。

「そうじゃな。お前の弟、ナルトの事じゃが、無事じゃ。クシナやミナト、そしてお前が命を懸けて守り切った」

「……ほ、んと?」

「本当じゃ。今日もミルクをたくさん飲んでいと聞いたぞ」

「いか、なきや」

三代目は、体を起こし直ぐにでもナルトの所に行こうとするシャナを片手でベッドに押さえつける。

「待つんじゃ。お前の体では無理だ。それに、大切な話があるのじゃ」  
「……」

三代目は、厳しい眼をしながらシャナに里で決まった事を教える。その内容が、シャナの意志に反し彼女の怒りを招くと分かりながらも。

里中を荒らしまわった九尾のせいで、里は半壊するほどの被害を被った。

その怪物を封印されたナルトは九尾の人柱力となり、本来保護者である両親を失う。残ったのは同じく幼子のシャナのみ。

故に四代目火影の血縁者であるナルトとシャナの身を守るため、二人が四代目の娘と息子であるという情報が秘匿される事となった。

そして、ナルトが九尾の人柱力である事実は、絶対に他言禁止で話せば厳罰に処させれる。

「なんで、そんなの、おかしい、ばね」

さらにひどい知らせは、シャナはナルトと暮らすことが出来なくなった。九尾の人柱力であるナルトと幼いながらも写輪眼を開眼しているシャナ。この二人を同じ環境に置くことを危惧する勢力があり、ナルトは、保護者を探している最中で、シャナはすでに決まっているという。

九尾封印の際、シャナの見せた力を目撃した忍は多く、彼女の力も重大な警戒の対象となった。

大き過ぎる力を2つも制御することは不可能というのが里の上層部の判断だった。もしどちらかが暴走して、もう片方も釣られたとあれば、被害は甚大となる。

だからこそ、二人は別々に育て、引き合わせてはいけなさと決められたという。

「か、える、なると、の、ところ」

そんな大人たちが勝手に決めた決定、従わないと。シヤナは、ベッドから無理に起き上がろうとする。やはり、そうなたかかと三代目が止めようとする、シヤナは瞳を写輪眼に変化させる。

青い写輪眼を初めて見た三代目は、驚くが更なる驚きがあった。シヤナの写輪眼の文様が歯車の文様へ変わる。それは万華鏡写輪眼であり油断していた火影は、幻術にかけられる。

金縛りのような動きを制限するだけの術だが、猿飛が固まっている間に、シヤナは点滴のガートルを支えにして、家に帰ろうとする。

「待つんじゃシヤナ（やはり、万華鏡写輪眼を開眼しておったか）」

しかしそこは三代目火影。幼子の幻術などすぐに解除し、シヤナの手を掴む。三代目は、シヤナの万華鏡を見て、うちは一族の中でも才能あるものしか辿り着けない力を持っている彼女の危険性を認識する。

だが同時に、それだけの辛い体験がこの細く小さな体に降りかかったのかと、哀れみもした。

「はなして、はなしてよお」

シヤナが暴れて腕を振りほどき、扉の前に立つと病室に一人の男性が入ってくる。

「三代目。説得は失敗したようすな」

「フガク。まだそうとは決まっていない」

シヤナは、青い万華鏡写輪眼で部屋に入ってきた男を見る。その人物は、以前にシヤナの写輪眼を見てくれた、木ノ葉刑務部隊の隊長、うちはフガクだった。

「信じられない。万華鏡写輪眼を、本当に」

「どいて、どいてっ、てばね！」

ドアの前に立つフガクの足を必死に押すシヤナだったが、ピクリとも動かない彼に腹が立って、幻術を掛けようと瞳を見る。だが、フガクは幻術にかからずシヤナの万華鏡写輪眼を、同じく赤い三枚刃の手

裏剣の文様の万華鏡写輪眼で見つめ返す。

青と赤の万華鏡写輪眼が対面し、互いに驚いている。うちはフガクは、忍界大戦の際に、親友の死を見たことで万華鏡写輪眼に開眼していた。

万華鏡写輪眼の開眼する条件、親しい者の死……シヤナの開眼理由は両親だろう。

「俺も同じ目を持っている。だから、それは通用しない」

「……」

「波風シヤナ。お前は今日より、姓をうちはと改め、うちはシヤナと名乗ってもらおう」

シヤナの保護者候補。それは、うちは一族だった。最初は、ダンゾウが写輪眼、それも万華鏡写輪眼、さらに須佐能乎にまで辿り着いている力を我が物にしようとした。

その才覚を求めダンゾウ一派が暗部養成施設“根”で預かると言い始めた。だがそれを止めたのは猿飛ヒルゼンと、このうちはフガクだった。

ダンゾウの思惑は、ミナトとクシナに託されたシヤナを悪用する行為に他ならなかった。ダンゾウは今回の九尾事件で、里との間に亀裂の出来たうちは一族がクーデターを起こそうとしていると察知。

一族単位と言えども、うちはは強力な戦力。だからシヤナをうちは一族に対する切り札にするつもりだった。

うちはを殺すには、うちはをぶつける。単純だが合理的な案だった。

それにシヤナは波風ミナトの娘だと里中に知れ渡っており、シヤナを育成すれば、それだけで次代の火影候補となりうる。戦力としても政治としても美味しい存在だった。

それにストップをかけた三代目とフガク。フガクは、シヤナが予てより写輪眼を持つことを知っていたと言い、写輪眼を持つ以上うちはの一族に名を連ねるべきだと血の正当性を主張。元々顔見知りであり、血継限界を守る意味でも、うちは一族預かりにしたいと告げる。

うちはでなら、シヤナに力の使い方を教え制御できると告げた。



同じくダンゾウに預けることに反対派の三代目も、うちはと里の亀裂を知っていたため、ダンゾウと違い少なからず血族として迎えてくれる、うちにはこそ預けたいと告げた。それによってうちはの意見を通し、彼らの不満を少しでも解消できればいいと考えた。

結果は、里の過半数の意見を貫き、うちは一族へ預けられることとなった。

「いや」

「そうでなければ、お前は二度とナルトに会えなくなる。これは事実だ」

シヤナが、うちは一族を拒んだ場合、里の孤児院へ預けられることになる。だが、その場合、ダンゾウという男がどんな手段を使つてでも手に入れようとするのは明白。

その場合、どんな結末が来るかわからないフガクではなかった。

だが、うちはとしてならシヤナにもナルトと会う機会も訪れる。

姉弟としてではなく、木ノ葉の忍として会えることはあるだろうと、考えていた。

「……」

「お前達が一人前の忍となれば、再会させると約束しよう」

「……ナルト、あい、たい、よ」

「シヤナよ。永遠の別れではない、しばしの間、離れて暮らすだけじゃ」

「……おま、え、たち、みんな、きらいだ、ぜったい、ゆるさない」

大人たちの都合。シヤナとナルトに配慮しようとしたものの、姉弟を引き裂く決定。シヤナは感情のまま暴れそうになるも、暴れた未来を見てしまう。

それは未来というには暗く、辛い生き方になる。そしてナルトには一生会えなくなる。

それにシヤナは、生きる目的があった。永い眠りの中で、何度も見せられた大切な人の死。その元凶である九尾と仮面の男を殺すという目的が。そこに弟を奪った人間たちが追加されただけなのだ。

どんな事をしてでも弟を守り、両親を奪った一人と一匹を殺し、里

の大人達もただでは済まさない。報いを受けさせる。

シャナの恨みは深い。その写輪眼は、憎悪と怒りで更に強くなっていた。

ミナトとクシナの愛娘、シャナ。両親の愛を受けた彼女は、木ノ葉隠れの里の住人達を家族と思い未来に引き継ぐ、“火の意志”を受け継いではいなかった。

両親に託された弟を守ること。「託されたものを何があっても守り通す」これが、シャナの忍道となった。

「では、これからはよろしく頼む」

フガクに差し出された手を、シャナは無視してベッドに戻る。

今は回復しなければいけない。強くなるために。

少し時間が流れた未来。

夕暮れの木ノ葉の里。歴代火影たちの顔岩が夕日に照らされ、もうすぐ夜が来る。

木ノ葉隠れの公園。ここでは子供たちが遊具で遊んでいた。

「へへえ〜んだ。絶対捕まらないってばよ!」

「もう、何時間、鬼ごっこするのさ、僕お腹すいちゃったよ」

「たく、めんどくせえ」

「最後まで鬼だった奴は、アカデミーにお菓子持参だからシカマル」  
「ワンワン!」

4人の子供達と一匹の子犬が公園で鬼ごっこをしている。楽しそうに遊んでいる子供達だったがやがて、彼らの親が迎えに来る。公園の入り口に

「キバ、赤丸。そろそろ帰るよ」

「母ちゃん、じゃあなお前ら、行くぞ赤丸」

「シカマル。そろそろ帰るぞ」

「わりいなナルト、先に帰るわ」

「チョウジ。行くぞ」

「うん、またねナルト。父ちゃん、今日の晩御飯なんだろう」

「お、おう」

4人中3人が、それぞれ家へと帰る。そして取り残されたのは、黄色い髪の男の子だった。顔に髭のような文様があり、青い目をした少年。彼は、公園のブランコで親と帰る友達の姿を眺める。そして寂しそうな表情をしていた。

だが遅れて公園に走ってくる影を見て顔を上げる。

「遅れてごめん。一緒に帰ろうかナルト」

俯いていた顔を上げた先にいたのは、淡い紫の瞳であり、髪はクリーム色でサイドテールに、木ノ葉の額当ては首元にかけており、額にはオレンジのゴーグル。服装は、青い忍装束のきれいな女の人。

その人物が髪のをかき上げながら、ナルトに手を伸ばす。

ナルトの表情は明るくなり、「おそいつてばよ」と照れながら手を取った。二人で手をつなぎながら、ナルトと女性は、夕方の公園から出ていく。

「ナルト、ご飯何食べたい？」

「あのさ、あのさ、ラーメンが食べたいってばよ！」

「またあ？ まあ今日は遅いし、一樂食べにいこっか」

二人は、夕飯を食べようと一樂を目指して歩く。誰かと手を繋いで歩く、迎えに来てくれる、何より、家族がいることに嬉しくなったナルト。

「へへへ」

「何笑ってるんだってばね？」

「何でもないってばよ。姉ちゃん」

木ノ葉の里を歩きながら、ナルトのアカデミーでの悪戯した話など聞いて「じゃ明日の修行の内容厳しくしなきゃね」と告げる。それには嫌そうな顔をしたナルトだったが、自分の話を聞いてくれる姉と繋いだ手に力を籠める。

そうしてラーメン屋「一樂」につくと、店長のテウチと娘のアヤメが二人を歓迎する。

「お、ナルトにシヤナか。いらっしやい」

「おっちゃん、俺、とんこつ味噌チャーシュー大盛り」

「私は、野菜ラーメン大盛りで」

二人の注文に「あいよ」と店主は答える。そして、二人でラーメンを食べて、家に帰る。そんな日常の風景だが、二人の姉弟の顔には笑顔があった。

そんな未来の一ページ。

## うちはシヤナ

目覚めてから半年余りをリハビリ生活に費やし病院を退院したシヤナは、うちは一族に引き取られた。

そこから4年ほどの時が過ぎて、もう8歳だった。

あれから背も伸び、同年代の中なら高いほうで、常に青い写輪眼で生活していた。服装も、背中にうちはの文様を縫い付けられたものを着ており、年齢の割に大人びた表情で美人と美少女の中間と言えた。今でもゴーグルを額に付けてはいるが、人の視線を恐れることはなくなった。

当初はうちはフガクの家に預かれる筈だったが、フガク家には、今年生まれたばかりの赤ん坊であるうちはサスケがおり、その泣き声を聞いたシヤナがナルトを強く意識し始める。不安定な精神状態で、両親の死や望まない弟との別離を意識することで体調を著しく悪化させる事態が発生。

他の家に預けることが必要と判断された。同じく万華鏡写輪眼を開眼していた忍、うちはシスイの居る家に預けられた。

万華鏡を持つシヤナが暴走したとき抑えられるのは、同じ万華鏡を持つものというのが一族の認識だった。

シスイ家に預けられたシヤナは、それは大人しい子供だった。かつての幼さは鳴りを潜め、まるで居ないかのように息を殺して生活していた。

シスイの両親は、心に傷を負った少女が自分のタイミンで打ち解けてくれるようにと気を使っていた。

「優しい人たちってのは、わかるってばね」

体力の回復したシヤナだったが、新しい家族に馴染めなかった。二人が死んだとしても、二人の代わりなんていない。優しくしてくれるし、シヤナの事を最大限気を使ってくれていた。悪い人たちではない。突然現れた子供を引き取り、自分の子のように育てようとしてく

れる。

その気持ちを感じて、二人の手助けなどは、行った。恩返しとして、少しでも気持ちを返したいと思っていた。

けれどシヤナの心には、ナルトしかいなかった。泣いていないだろうか、お腹空かせていないだろうか、怖い目にあっていないだろうか、そんな考えがずっと頭をよぎる。

退院直後は未来視をナルトのために使っていたが、今では生きていくことくらいしかわからない。離れている期間が長すぎたからか、徐々にナルトの未来を見る事が難しくなる。

そして、会いに行くことも難しかった。

うちの集落を歩いて行き、集落の端にたどり着いたシヤナだったが、この集落から出る事が出来ないのだ。何も無い空間だったが、シヤナが進もうとすると結界として機能し、強固な壁となった。この結界はうちは一族の集落の出口全てに張り巡らされていて、子供のシヤナに突破は難しい。

一度何者かがシヤナを誘拐しようとした事件があり、その際は、義兄となった、うちはシスイによって助け出された。

なぜ攫われたかと言えば、シヤナは夢遊病を患っており、何度も眠りながら家に帰ろうと無意識で彷徨っていたからだ。それ以外にも、何度か里の掟を破って、ナルトと接触しようとしたことも10回ほど。

狙われ、脱走癖や夢遊病など、危険要素があまりに多く、施された結界だった。

もちろん保護者が居れば外に出ることも許されるが、シヤナは檻に閉じ込められたと感じていた。

だけれど、シヤナはうちのは集落でなら自由は許されており、自由に修行に打ち込むことが出来た。弟に会いに行けない、なら力をつけるしかない。両親の仇は、またナルトを狙って訪れる。それを退けるだけの力が必要だった。

未来視ではなく、直感がそう訴えかけていた。

やれることは、強くなることだけ。そう思いながら毎日修行を行っ

ていた。

(それに、私は弱かったころとは違う)

忍者アカデミーに通わなかったシャナ。正しくは、うちの集落から出られない上に、ナルトが通っている同じ場所にシャナが通うことはできなかつた。

元々ミナトとクシナの指導で、アカデミーの授業は必要なかつた。むしろ力を求めるシャナには無駄な時間にすら感じられた。

それにシャナは、数年間の修行期間で確実に力をつけていた。修練場にて、両手を合わせて術を発動する。

「粒遁・天輪の術(りゅうとん・てんりん)」

シャナの頭上に青い光が集中。シャナの狙いに合わせて、丸太に巻きつけられたのを丸太ごと吹き飛ばし、膨大な熱量で蒸発させる。発射後、シャナと的の間の地面は熱で溶け、その威力を物語っていた。

「粒遁・天翔の術」

シャナの体が青い光に包まれ、かつてのミナトの瞬身よりも速く、一直線に移動する。目的地は、うちのはの修練場の山の天辺である。あまりの速さに自分の写輪眼であっても、何も見えなくなる。そんな速度を出しても安全に移動できるのは、青い写輪眼で視力ではなく、未来視によって視界を確保しているからと言える。

光速程ではなくとも亜音速で目的地にたどり着いたシャナ。瞬時に衝撃波が修練場を襲い、周囲を壊滅させてしまう。

「……やりすぎだったってばね」

粒遁。シャナの持つ火、風、雷の性質変化を同時に起こして発動する術である。自身を粒子に変換し、亜音速で移動する術や、粒子を凝縮、それを相手に向かって発射する術。どちらも強大な運動エネルギーと熱エネルギーを持った術へと至った。チャクラを粒子に変換しそれを操る。

非常に攻撃的で、手加減が出来ない弱点はあるが、遠距離＋時空間忍術クラスの移動能力という力を得た。

この術に関しては、仮面の男からナルトを救いたいと思つて発現した。それを自己改良したのだ。

青い写輪眼と同じくシャナしか持ちえない武器として。3年間の修行期間が掛かったものの、ようやく物にできた。ただ、コントロールがうまくいかず、衝撃波と小火の連続である。

敵を倒すことにおいては、優位だが、仲間と戦うには向いていない。けれど、一人きりになったシャナは、それで良いと思いついていた。

更に父ミナトのクナイを持って粒遁のチャクラを流していく。

「粒遁・天刃」

粒遁で生み出した青い刃。無理やり刃の形にしたチャクラの粒子は、激しく振動を繰り返して膨大な熱を持つ。それを修練場の木で試し切りすれば、抵抗なく木を焼き切れた。斬れた跡は燃え、その熱量を物語っている。持続は長く出来ないが、一撃必殺の刃としての新術。

3つの術を生み出したシャナだったが、彼女の目標は、ミナトだった。

黄色い閃光。その速さと強さを再現したい。父のような強い忍になりたいのだ。

「わあ。かっこいいねシャナ姉ちゃん」

「？」

「危ないな。気を付けてくれ」

突然背後から声を掛けられビックリしたシャナがクナイを向けてしまう。そのクナイを受け止めた人物がいた。シャナのクナイをクナイで受け止めたのは、うちはフガクの長男であるイタチ。声をかけたのは弟のサスケだった。

兄の背中にびったりくっついてるサスケとイタチは修行の為に来たのだった。

「イタチ、サスケ」

「シャナ姉ちゃんの術、いつもすごいよね」

「正直、やりすぎだけどな。また、シスイに怒られるぞ」

シャナの術をカッコいいと褒めるサスケと修練場の荒れ果てた姿を見て苦言を零すイタチ。正反対の対応をする兄弟。イタチとは小さい頃からの知り合いで、サスケは赤ちゃんの時から知っている。

昔のシャナは、2歳くらいのサスケの御守をしたこともあった。イ



タチとも修業する関係でこの2人とも付き合いが長い。

イタチの言葉の通り修練所に急いで現れた人物がいた。

「お、さっきの爆音、やっぱりお前かシャナ」

「……イタチ」

「何？ おい、イタチ、なんてことをしてくれただ」

「いや、俺は」

現れたのは、うちはシスイ。うちは一族の中でも手練れ中の手練れで里からも注目されている忍である。一応、シャナの義兄となっており、彼女の師匠でもある。彼の登場と周囲の荒れ果てた状況から、罪をイタチに擦り付けた。

イタチは言葉も出ないようで、シスイに詰め寄られていた。

「シャナ姉ちゃくん」

「……おにぎりはどうだつてばね？」

「いいよ。困った顔の兄さんも面白いし」

サスケの咎めるような顔に、賄賂を提案。兄の困り顔というレアな顔を見てサスケは、了承する。

シスイは、一通りイタチに詰め寄ると、納得したのかイタチを解放する。

「なぜ俺が……」

「さて、諸君。今日も修業するぞ」

シスイとイタチの両者は忍であり、アカデミー生のサスケと自己流忍術使いシャナの指南役でもあった。正確には、シスイの下に3人の弟子がいる状態だった。

4人はそれぞれ忍術、体術、手裏剣術の修行をしていた。

そしてイタチが修練前に見たシャナの術の説明をすると、シスイが困り顔でシャナを見る。

「遂に完成させたのか？」

「瞬身のシスイ、破れたり、最速は私」

シャナは、自分の義兄が「瞬身のシスイ」という二つ名を持っている事にライバル心を抱いていた。亡き父ミナトこそが木ノ葉で最速だと信じていた。

「いいや、まだまだだな」

「？」

木の葉の黄色い閃光の娘。それを8歳のシャナは誇りに思っていた。誰かに語ることも出来ない誇り。クシナとミナトの長女であるという過去が、シャナという少女の人格形成の根幹となっていた。

自尊心も育ったシャナは、母親に似て負けず嫌いでもあった。

瞬身の術でシャナの背後を取ったシスイに倣って、瞬身の術で背後を取り、クナイを向ける。

「瞬身の術は、俺のほうが上かな」

「ち」

しかし、シスイはさらに速く動いてシャナの背後に回って頭を撫でる。身体能力の面、特に体術の面でイタチとシスイには及ばない。逆に術の威力に関しては、火力重視のシャナが現役の忍である彼らを上回っていた。

「もう一度、やるってばね」

「仕方ないな。いくぞ」

たがいに写輪眼でにらみ合い、忍組手を始める。青と赤の瞳が交差しながら、拳と蹴りが交差する。体格差で圧倒的に負けているシャナだったが青い写輪眼に光が灯り、未来視を可能とする先見の写輪眼を使用する。

(相変わらず、頭が沸騰しそうになる)

写輪眼でも追いきれないシスイの動きを、未来視で予習することで、全て解る。見るのではなく、識る。先見の写輪眼を発動したシャナは、シスイの攻撃を全て紙一重で回避し、何発もカウンターを入れていく。

(こいつ、急に)

シスイの拳を首の動きだけで避け、胴体に二発拳を叩き込む。むせそうになったシスイだったが直ぐにシャナの胴体を狙って蹴りを繰り出す。しかし、両手で足を受け止められ、上段蹴りで顎を狙われる。ギリギリで両手でガードしたが、ガードと同時に腹を殴られる。

たまらず後ろに飛んだシスイだったが、先回りしていたシャナの蹴

りが背中に入る。

「くっそ、例の奴か」

何発も貰っているシスイだが、ようやくウオーミングアップが終わったとばかりに素早い動きでシャナに迫る。シャナはその動きにも完璧に対応する。だが、攻撃に回る余裕はなく、二人して修練場の森に駆け込む。

木々を駆け抜けながら、縦横無尽に迫るシスイの攻撃を回避し続ける。

互いに木の上を飛びながら、二つの写輪眼の交差は、さらに能力の高い万華鏡写輪眼同士のにらみ合いになる。青い歯車の万華鏡と赤い四枚刃の手裏剣の万華鏡が光を散らす。

互いに動体視力も向上した状態で読み合いによる攻防が続く。

「やるなシャナ」

「話しかけんなってばね！ くっ」

「あ。まずい！」

シスイの言葉に答えた瞬間、集中力の切れたシャナの右頬にシスイの腕がクリーンヒット。シャナは、木の上から落下。

慌てて追いかけたシスイだったが、地面に倒れ伏したシャナが煙を上げ丸太に変わる。

「変わり身か」

「そうだってばね！」

不意を突かれたシスイの頬にシャナの右足がクリーンヒット。木に叩きつける。

「やられた。降参、降参だ」

木に叩きつけられ、チャクラで木に張り付いたシスイは、頬を押さえながら降参宣言をする。綺麗に一本取られた上に、止めなければシャナはさらに攻撃を仕掛けてくるだろう。

「シスイ。後は頼んだってばね」

シスイの敗北宣言を受けたシャナ。すぐに先見の写輪眼を解除し未来視を止める。膨大な量の未来、さらにシュミレーションを行っていたシャナは、限界になり気絶する。

今度こそ本当に木から落ちたシャナをシスイがキャッチ。

木の上を飛んで修練場に戻る。

「あ、兄さん、帰ってきたよ」

「忍組手じゃなかったのか？ 急に森に走ってびっくりしたぞ」

「悪い悪い。ヒートアップしちゃってな」

シスイが抱えているシャナを見てサスケが「寝ちやったの？」と尋ねるがシスイは首を横に振る。実際気絶していたシャナも直ぐに目を覚ましていた。

目を覚ました彼女は手を額に当てて、苦しんでいた。

「頭割れそうだってばね」

「青い写輪眼の未来視も、問題ありだな」

シャナを木陰に寝かせたシスイ。同じく横に腰かけたシスイ。二人でイタチの手裏剣術を見ながらシャナの能力について確認する。

「はじめは嘘だと思ってたけど、お前の目は本当に未来を見ているな。見切りは俺を遥かに凌駕している。動きも格段に良くなるのは、最適解を見つけているんだったか」

「そう。私の見た未来に自分の動きを合わせるだけ、正しくは未来の私をコピーするの」

「先見の写輪眼、いい能力だな」

時間にして最大4分。それがシャナが先見の写輪眼を使える時間。未来視の膨大な情報を処理できる限界時間であり、体も無理な動きに悲鳴を上げて動けなくなってしまう。その代償に見合うだけの力であり、4分間はシャナに攻撃を当てることは火影ですら難しい。というのがシスイの見立てだった。

未来を見通す写輪眼ということ、シスイが付けた名前が先見の写輪眼だった。

一度先見の写輪眼相手に全力で攻撃を仕掛けたことがあるが、シャナにかすり傷すら付けられなかった。

シスイも1発も貰わなかったが、プライドは大きく傷ついた。

シャナも弱点を理解して未来視の精度を落とし、減らすことで脳の負担を減らす工夫はしている。しかし、今の所上手く行っていない。

精度を落とせば、絶対回避とも言える力が回避能力の向上に落ち着いてしまう。

先ほどシスイの一撃を食らった時のように、格下相手はともかく格上には、致命的だ。

さらに先見の万華鏡写輪眼、より分析能力の上だった状態では、1分も持たなくなる。洞察力は向上するも今の所、使い道がわかっていない。

通常であれば万華鏡写輪眼には、両目に同じか別々の特殊能力が宿るものだが、シヤナはいまだに万華鏡の瞳術を發揮できていない。

「イタチもお前も若い世代の勢いが凄すぎて、自信なくなるよ」

「……あ、サスケー！」

シヤナはイタチの手裏剣術を見て真似しようとしてるサスケを大きな声で呼び止める。

「え、何？」

「怪我するからやめときな」

「大丈夫だよ」

「いや、サスケ。まだお前には」

イタチも止めようとするが、サスケは言う事を聞かず空中での手裏剣術を真似し、盛大にバランスを崩して落下。足首をくじき、イタチにおんぶされながら帰ることになった。

イタチの背で涙目のサスケ。シスイとシヤナも家に帰ることになり、4人でうちはの集落を歩いていた。

「だから止めとけて言ったってばね」

シヤナはサスケの未来を見て止めたのに、サスケが言う事を聞かなかった事に怒る。だがうちは一族では、シヤナの他にシスイしか知らない未来視。

何も知らないサスケが素直に言うことを聞かざるががないのだ。

「だってえ。シスイもシヤナ姉もイタチ兄さんも、みんな凄すぎるんだよ。俺だけ……」

「サスケ。お前は一番幼いんだ。焦ることはない」

そう言いながら4人はそれぞれの家に帰った。うちは一族の若い

世代であり、次代のうちにはの優秀さは、結束の強いうちは一族の大人達も自慢にしていた。彼らの力があれば、うちには安泰だと。

だが同時に、うちの内ですイやイタチ、そしてシャナをある目的で利用しようとする流れがあった。

今日のような日は、そんな運命に翻弄される嵐の前の静けさだった。

## 木ノ葉 前編

今日も何時ものように修行をしていたシヤナ。今日はシスイとイタチは任務で外しており、自分の修行というより、サスケの修行の手伝いだっただ。

「シヤナ姉ちゃん、いくよ。火遁・豪火球の術！」

溜池の上でサスケが火遁を発動するが、小さな炎しか出ない。とてもではないが豪火球というより、小火球の術が良い所である。サスケが父親より教わった術だが、イタチのように上手にできないと相談されたのだ。

シヤナはめんどくさいと断ったが、イタチ達がない以上、シヤナしか頼れる相手がいないと延々とせがまれた為、修行を見てやっているのだ。

「才能ない」

「相変わらず酷い言いよう。なんで、おれ、兄さんみたいにできないんだろう」

シヤナは、水面でチャクラによる歩行練習をしながらサスケの術を見るが、あまり進歩していない。

「イタチは天才。サスケは凡才。真似するほうがおかしいってばね」

「ひど過ぎない？」

シヤナの態度にサスケがむくれる。だがシヤナは気にしていないとばかりに自分の修行に集中する。片手で逆立ちをしながら水上で腕立て伏せをする。シヤナに足りないのは、やはり体である。チャクラのコントロールと体力と筋力をつけるために修行を行う。

サスケは、仕返しにシヤナの方向目掛けて、火遁を発動しようとする。

「甘い。火遁・豪火球の術」

「うわあああ」

シヤナは、水上で印を素早く結び、術を発動。

サスケの放った炎を遥かに巨大な炎でかき消し、サスケはしやがみこんで炎を躲す。

「豪火球はこうやる。わかった?」

「当たり前でそれどころじゃなかったよ!」

サスケの講義に「お前は私の弟子じゃない。手取り足取り教える時間をもつたない」と冷たく突き放す。

「……サスケは、成功のイメージが頭に焼き付いて、自分の力量を忘れてるんだってばね」

「俺が落ちこぼれてること?」

「そう。イタチに勝ちたいのはわかる。でも年齢も経験も、何もかも違う」

「……シヤナ姉ちゃんは、俺に俺のペースでやれって言ってるの?」

「そうとしか言っていないってばね」

シヤナの言葉を読み取れたのは、サスケが小さい頃から一緒に居たからと言える。シヤナは冷たく、いつも突き放そうとするが、見放したことはない。いつもヒントはくれるし、危ないときは助けてくれる。

本当は優しい人だというのは、わかっていた。距離を取りたがるくせに、面倒見がいい、めんどくさい人。それがサスケの認識だった。

態度に腹は立つが、嫌いではない。どちらかと言えば、サスケはシヤナが好きだった。

「集中力が大切。サスケには特に」

「わかった。……火遁・豪火球の術!」

深呼吸し、落ち着いてチャクラを練った火遁の術は、シヤナほどではないが、先程よりも大きな火球となった。その光景を見ていたシヤナは、頷いていた。

成功したことでシヤナの顔を見るサスケだが、シヤナはやることはやったと自分の修行に専念した。

チャクラの少なくなつたサスケは、溜池の傍で腰掛ける。暇になつたサスケは、シヤナにアカデミーの話始めた。

全てを聞き流していたシヤナだった。

だがシヤナの修行は、サスケのある言葉で終わりを迎えた。

「そういえば最近さ、変な奴に絡まれるんだ」



「サスケが生意気だからだつてばね」

水上逆立ち腕立て伏せをしていたシヤナ。

「ナルトって奴なんだけど。なんか里の大人から嫌われてるのかな。いつも怒鳴られて、睨まれてるんだ」

サスケの声と同時にシヤナは、バランスを崩して溜池に落ちた。急にシヤナが水に落ちたことでサスケはびっくりするが、水から上がってきた彼女の顔を見て恐怖に歪む。

シヤナは脅すつもりはなかったが、サスケを問い詰めないわけにはいかなかった。

「サスケ、その子の事、聞かせてくれる？」

「あ、あんまり知らない。小さい頃からアカデミーに居たとか、問題児だとか、親が居ないとか、一人で住んでるとか……よくわかんないけど、大人達が遊んじやダメとか言ってるのは聞いた」

「そう。サスケから見ても、その子は、幸せそうだった？」

「……全然。なんか、かわいそうだった」

サスケの言葉に嘘はない。素直にそう思ったのだろう。シヤナはサスケに何ももう言うつもりはなかった。ありがとうとだけ伝えて、シヤナはその場から瞬身の術で消える。

彼女の向かう場所は、うちの集落の外だった。

(なんで、木ノ葉なんて信じてしまったんだ)

自分がこのうちの中にいる限り、ナルトの事は大丈夫だと思っていた。実際、うちはフガクに尋ねれば、問題ないと聞かされた。問題ない。それはいったいどういう意味でだ。

シヤナは自分の思っていた大丈夫と大きく違うナルトの現状に怒りや、憎しみが抑えられない。

自分のように、大人に保護されて静かにだが、幸せに過ごしてくれていると思っていた。自分が姉だと名乗れなくても、愛情を受けて、笑いながら生きているんだと思ってた。

人柱力として生まれたナルト。なら里の為に九尾を体内に封印してくれた英雄。そう扱われてると思った。口に出せなくても、里から感謝を受けていると思っていた。

だから、ナルトの障害になる奴らを倒すために力を磨いた。ナルトは幸せだから、私がそれを外から守ってあげるんだって。

なのに、自分が優しさを受けている間、ナルトは大人達から忌み嫌われていた。保護者もなく、今は5歳の弟が一人暮らし。大人達からは、九尾の人柱力ということで怒りを向けられている。

大人しくうちへの集落に留まっていた結果がこれだ。大人たちの都合のいい事実だけを伝えられ、真実には触れていなかった。

シャナが大急ぎで集落の端にたどり着くと、結界に阻まれる。苛立ちから、頭突きで結界を破ろうとする。当然結界は破れず、シャナの額から血が流れる。

「何が問題ないだ!? 私の弟が里に忌み嫌われている? ナルトのおかげで、今平和に生きられている奴らが? ゆるさないってばね」

結界に阻まれるも、シャナは止まるつもりはなかった。

(すぐにでもナルトを迎えに行こう。そして二人で里を出る。そして後は、木ノ葉の里を滅茶苦茶にしてやる)

里を抜ければ追われる事になる。けれど、シャナは逃げ切る自信があった。

(人柱力のナルトを欲しがる所はどこだろう。自由にはなれないが、保護してくれる里はあるはず……やはり雲隠れにでも行ってみるってばね)

木の葉の里がナルトを迫害するなら、出て行ってやる。それがシャナの考えだった。望み通り出ていき、ナルトを欲しがるであろう雲隠れにでも保護してもらおうと考えた。雲隠れが選ばれた理由は、人柱力や血継限界を優遇し、育てる施設がある。そして木ノ葉に並ぶ忍五大国の一つだったからだ。

おそらく人柱力のナルトが一番過ごしやすい場所であると、シャナは秘かに思っていた。

そんなシャナは、両手を合わせてチャクラを練る。里との決め事、里の事情、里の人々、そんな事はどうでもよくなった。里がナルトを守らない以上、シャナが里との取り決めを守る必要はない。

「こんな結界で、私を閉じ込めようだなんて、100年早いってばね!!」

粒遁・天翔」

結界を破れば、瞬く間に警務部隊や里の忍達にシヤナが抜けだしたと知られる、けれど立ち止まる理由にはならない。

シヤナは、体を粒子に変換しながら、亜音速で結界を突き破る。衝撃波が、うちのはの集落を襲うが、怒りで頭がいつぱいになったシヤナは、被害を気にしない。どのみち壊すのである。早いか遅いかだけの違い。

いつもは思慮深い彼女だったが、心の平静が完全に壊され、衝動のまま体が突き動かされていた。

すぐに結界が破られたことは、警務部隊に知れ渡り、木ノ葉の重要指定人物、うちはシヤナの搜索が決まる。

しかし、彼らに見つかる前にナルトを探せばいいと木ノ葉の里へ潜伏するシヤナ。

風のように木ノ葉を駆ける彼女は、変化の術で暗部の忍の仮面とフードに包まれた格好に化ける。

暗部の姿なら、正体を隠せる上に、緊急事態の今なら、シヤナを搜索している体で里を探れるからだ。

(ごめんナルト。すぐに、すぐに、行くつてばね)

シヤナは、未来視を使い、追手に捕まる未来から逆算。搜索網の間を縫ってナルトの搜索を始めた。

## 木ノ葉 中編

なんでどいつもこいつも、そんな目で俺を見るんだ。

夕方の木ノ葉の里を歩いていた少年は、大人達から向けられる敵意の籠った目に、強い不満と怒りを感じていた。物心ついたころから、自分だけが嫌われ、避けられ、批難される。

(誰も俺を認めないってばよ)

少年は、先程、屋台で美味しそうな串焼きを眺めていたら、店主と思われる男から「なににしてやがる！　ここはお前の来るところじゃねえ、どっかいつちまえ！」と心のない言葉と共に串焼きを投げつけられた。

少年に当たった串焼きは地面に落ち、ソースを服と地面に吸わせていた。

少年は当然怒った。けれど、周囲の大人たちは少年の味方をしなかった。

気味が悪いだの、早くどっかいけばいいのに。そんな陰口が聞こえた。

まるで自分がここにいるのが間違いのような気がして、気が付けば涙を流しながら走っていた。でも、どこに行っても人の目は彼を否定する。

この里に自分の居場所なんかないんだと感じた。

「ちくしょう。ちくしょう！　いつて」

走りながら、ふと目線に歴代火影の顔が彫られた火影岩が目に入る。その瞬間、大きな何かとぶつかった少年は地面に転がってしまった。少年がぶつかったのは中年の木ノ葉の忍だった。木ノ葉の忍特有の緑のジャケツト姿の男性は、ぶつかってきた子供に「お、わるい」と謝ったものの。

「あ、てめえは!?!」

「え、あ」

ぶつかってきた子供が、金髪碧眼で頬に髭の文様がある少年だと分かると、態度を豹変。少年の襟首をつかみ上げ、激しく揺さぶりなが

ら「財布でも取ろうってか!? ああ!!」と怒鳴り散らす。

急に持ち上げられた少年は、恐怖から固まってしまい、襟首を締め上げる木ノ葉の忍の為すがままになる。男は酒を飲んでいたので、顔が赤くなり正常な判断力を失っている。酔っ払いが子供に絡んで騒いでいる。普通なら止められるべき事態、でも誰も少年を助けようとならない。

少年も一度は周囲に助けを求める目をしたが、すぐに「いい気味だわ」「いい気味だ」といった目線に歯を食いしばって耐えるしかない。「なんとか言えやこら!」

ついに拳を少年に振るい始める。男は忍者であり、その力加減を忘れた拳を幼い少年が食らえばどうなるか。大怪我では済まない。

殴られる。そう思い目を瞑る少年。

……あれ? 痛くないってばよ。

少年は、来るはずの痛みが来ないことに疑問に思い、目をゆっくり上げる。

「なんだ、お前は」

「黙れ。その子を離せ」

酔っぱらっていた木ノ葉の忍は、突然背後から現れた暗部の忍と思われる人物によって拘束されていた。片手を捻られ、首筋に特殊な形のクナイを当てられ、首筋から血が流れていた。

「ち」

男は、少年を掴んでいた手を離す。少年の体が支えを無くして落下する。だが尻もちをつく前に暗部の忍が少年を支える。少年は自分を支えてくれる人物を見上げた。仮面で素顔は見えないが、仮面の覗き穴から青い瞳が少年を見ろしていた。

(俺と一緒に目だつてばよ。でも、なんでだろ)

少年は、初めて自分に敵意以外の感情を向ける目を見たかもしれない。それは喜びか、悲しみか、どんな感情かはわからない。けれど、里の大人達とは大きく違うのだけはわかった。

謎の暗部と酔った忍が睨み合っていると、居酒屋から2人の忍が出

てくる。彼らはクナイを構える同僚を見て、駆け付ける。

「なんだ、テツカ、そいつにやられたのか」

「そうだ！ 因縁付けてきやがったんだ」

「暗部だか知らねえが、ぼこぼこにしてやるよ。それになんだ、此奴あのクソガキじゃねえか。その疫病神を庇うんなんざ、可笑しな奴だ」  
「ぶつ殺しちまうか、ガキもこいつも」

酔っぱらった忍達は仲間だったのか、少年を背に守る暗部の忍にクナイを向ける。暗部の忍は、少年を3人の男たちから守るため前に出る。

周囲の人間も、さすがに忍同士の戦闘になれば巻き込まれると、我先にと消えていく。

誰も居なくなつた所で3人の忍達が3方向から取り囲む。

「やる気か。俺ら三人は、上忍候補なんだ、蛮勇は身を亡ぼすぜ」  
「疲れている。さっさと来い」

暗部の忍は、言葉の通り疲弊していた。少年を庇う背中が、肩で息をしているのは明白。まるで一日中走り回つた後のように声も枯れていた。

掛かって来いという言葉に堪忍袋の緒が切れた忍達が、一斉に襲い掛かる。

「危ないってばよ!」

「心配しないで。一瞬で終わらせる。粒遁・天刃」

暗部の忍は、手に持ったクナイから光の刃を展開。中忍く上忍クラスの忍達の攻撃を全て紙一重で回避。回避と同時に、粒遁のチャクラ刀で男達の忍具をバターのようには切断。さらに遅いと言わんばかりに溜息を吐きながら、男たちの両足の腱を切断する。光の刃は、男たちの腱を焼き切り、激痛を与えながら、無力化する。

「な」

「ぐ」

「あ、足が!」

次々に立てなくなり、地面に倒れる3人組。地面に倒れ、必死に手で体勢を立て直そうとする彼らを暗部の忍は許さない。自分を見上

げる形になった忍達が術を使うより早く、両手の腱を斬った。当然抵抗する者もいたが、その場合は腕ごと切り落として無力化した。

3人の絶叫が響き渡る。

「え、あ」

少年は目の前で起こった現象に言葉を失う。とんでもない強さに言葉を失ったのか、残虐な行為に言葉を失ったのかわからない。

「血は出ないから、長く、いつまでも、苦しめる。さあ次は舌か？ 目か？ 選ぶってばね」

少年からは見えない位置で、暗部の忍は彼らに殺気に満ちた目を向ける。その強さと恐ろしさから、戦意喪失した男達。だが足の腱と腕を斬られ、逃げる事が出来ない。瞳からは涙が流れ、生命の危機を全身の細胞で感じる。

追撃しようとする暗部の忍を止めたのは、意外にも虐げられていた少年だった。

「や、やりすぎだってばよ」

「……そう。ごめんだけど背中に乗って。はやくー！」

暗部の忍は、あっさりチャクラ刀を解除。特殊なクナイを胸にしまう。ただ、何かを感じ取ったように少年に背中を向ける。暗部の忍に急かされたため、少年はその背中に飛び乗ってしまう。

少年は、背中に乗ると、感触に違和感を感じた。思っていたより背が小さく感じるのだ。

だが、暗部の忍は少年をおぶったまま、素早く屋根を飛び、木ノ葉の里の森へと駆け込んだ。

「ぜえ、ぜえ」

「大丈夫？」

会った当初から息切れしていた暗部の忍だが、森に入るなり限界が来たと言わんばかりに仰向けに倒れる。その姿は、先程の冷酷な忍者から掛け離れていた。

「なんでこんな山奥に来たんだってばよ」

「騒ぎを嗅ぎつけて……忍が集まる。それに、怪我してるでしょ？」

「ほんとだってばよ。さつき、こけたときに」

暗部の忍は、懐から消毒と包帯を出すと、少年の怪我している手に消毒した後、包帯を巻いていく。

丁寧にまかれた包帯を見て少年は「なんで、たすけてくれたんだってばよ」と尋ねる。

「そう、約束したから」

「約束？ ふーん」

特に理解していない少年。息を整えた暗部の忍は、少年の目を見ながら「いつも、こんな生活しているの？」と尋ねる。

少年は、近くに倒れてあった木に腰かける。そして自分の包帯を巻かれた手を見ながら答えた。

「そうだってばよ。なんでかしんねえけど、里の奴らは、俺の事を認めなくてくれねえんだ」

「辛い？」

「しんどいってばよ」

しよんぼりしている少年の頭を同じく木に腰かけた暗部の忍が撫でる。急に頭を撫でられて顔を上げた少年は、自分を慈しむ目と目があった。

「姉ちゃんは、俺の事……姉ちゃん？」

少年は、暗部の忍が女性であると思ひ、その声をかけた。すると女性は急に泣き始めた。ぽたぽたと仮面の奥から涙が流れ落ちる。

「え、なんだってばよ、腹痛いのか？ 姉ちゃんって」

「なんでもない。大丈夫だってばね」

少年が本当に心配する中、女性は、ナルトの肩を掴んでこう尋ねた。その目は、強い覚悟を宿していた。

「君は、木ノ葉の里を出たくない？」

彼女の質問は、少年の未来を大きく左右するものだった。少年の言葉を待つのは、仮面の奥で青く輝く先見の写輪眼だった。



## 木ノ葉 後編

シャナは、うちはこの結界を突き破って木ノ葉の里を駆けまわっていた。

未来視を最大限に活用し、追っ手の存在を回避し続け、半日も里中を探し回っていた。自分に残された家族である弟。ナルトの存在を。

アカデミーなどを探しても見つからず、ナルトが出歩いている事がわかる。

「ちくしょう。ナルト、どこにいるんだってばね」

体力とチャクラに自信のあったシャナも、さすがに半日走り続けた上に、隠密を繰り返していたことで消耗していた。未来視は、人探しには向いていない。可能性をしらみつぶしに見ていては、情報量で脳が先に焼き切れてしまう。

地道に足で探すしかない。

そうして夕方になった時、ようやくナルトを見つけた。赤ん坊の姿しか記憶にないが、顔はクシナに似ており、髪は父そっくりの少年。間違いなくシャナの弟であるナルトだった。

大きくなった弟の姿を見て、涙がこぼれそうになるが、木ノ葉の忍に殴られそうになっている姿を見て、足が動いた。

ナルトを保護するために男を無効化しようとしたが、その仲間達も出てきて3人に囲まれる。

男たちの言う通り中忍く上忍クラスの实力はありそうだった。けれど、酔っている上に舐め切っているのか、動きに統率性のかけらもない。

シャナは冷静に、冷酷にこの3人に処罰を加える。まずは足を斬り動けなくし、次は両腕を無力化。その後は、拷問してやるつもりだった。

弟の危機に対して、自分が案外冷静に対処している事に少しだけ驚く。酷い怒りで沸騰しそうなのに、脳は冷静に事を運ぼうとする。

冷静というより冷酷と言ったほうがいいか。そんなこと考えていると、不安そうな表情のナルトが裾を掴んでいた。

「や、やりすぎだつてばよ」

やり過ぎてはいないと思う。力の使い方を間違えた大人達に処罰を与えただけだ。それもほんのさわり部分。だけれど、ナルトが怪我をしているのを見て、怒りが一時的に霧散する。先に治療してやりたいと思い携帯用忍具を開こうとした時、未来視が発動する。

無意識に発動した未来視は、この場所に手練れの忍達が駆けつけてくる未来。

「……そう。ごめんだけど背中に乗って。はやく！」

すぐに離れなければいけないとナルトを背負って、木ノ葉の森へと逃げ込む。この場所なら暫く追手はこないと知っていたから逃げ込んだ。

「ぜえ、ぜえ」

「大丈夫？」

疲労困憊になり、無様にもナルトの前で仰向けに倒れてしまう。体を鍛えたつもりだったが、やはりまだまだ修行が足りないと実感する。

「なんでこんな山奥に来たんだつてばよ」

「騒ぎを嗅ぎつけて……忍が集まる。それに、怪我してるでしょ？」

息を整えて、ナルトの様子を見る。手のひらが擦り？けている。あの男達にやられたのだろうか。

「ほんとだつてばよ。さつき、こけたときに」

ポーチから包帯と消毒液を取り出し、それでナルトに処置している。消毒液が染みたのか涙目になるナルト。でも痛いと言わない姿にいじらしくなって頬を撫でてしまう。

「なんで、たすけてくれたんだつてばよ」

包帯を巻いてあげると、ナルトはそんな質問をしてくる。子供が襲われていた。だから助けるといえるのがおかしいのだろうか。

しかし、シヤナには思い当たる節があった。誰も自分を助けてくれないと感じた時、人を頼ることを止めてしまうのだ。故に、ナルトは人に助けられるという体験をしたことがないのだろうか。

「そう、約束したから」

「約束？ ふーん」

シャナは約束したのだ。父と母に。ナルトを守ると。これまでは守れなかった、けれど今からは違う。

この子を助けなければいけない。

「いつも、こんな生活しているの？」

「そうだってばよ。なんでかしんねえけど、里の奴らは、俺の事を認めしてくれねえんだ」

聞きたくなかった事実。ナルトにとって迫害は、生活の一部になっていた。父さん母さんはナルトの未来と里の未来両方を守ったのに。里の人間たちは、ナルトを九尾の化け狐と扱って苦しめる。

「辛い？」

「しんどいってばよ」

本心だろう。5歳の子供にそう言わせる里とはなんだ。こんな里に未来なんてあるのだろうか。シャナは自分の思い出したくない過去とナルトの現状を重ね合わせてしまう。

「姉ちゃんは、俺の事……姉ちゃん？」

するとナルトは、シャナに疑問を投げかけようとした。だが、ナルトにふと「姉ちゃん」と呼ばれたことで感情のダムが決壊する。ずっとそう呼ばれたかった。九尾の事件さえなければ、ナルトも父と母に囲まれ、幸せに生きていた。

すぐに自分が姉だと名乗り出ようか。

(私の事なんて知らないはずだってばね)

「え、なんだってばよ、腹痛いのか？ 姉ちゃんって」

「なんでもない。大丈夫だってばね」

ナルトはシャナを心配して背中を摩る。その優しさに、涙が止まらなくなる。必死に泣き止もうとするのに、色んな感情が渦巻いてしまう。

優しい子だと思った。どれだけ非難されようとも本質的には、母や父のように優しい子なのだ。

シャナはおもむろにナルトの肩を掴んでこう尋ねた。

「君は、木ノ葉の里を出たくない？」

ああそう言ってくれたら、命を懸けてでも里の外に逃がしてあげよう。ナルトの中にもあるだろう復讐の炎。恨みだつて晴らしてあげる。こんな里に意味なんてない。」

(里を抜けて、暮らしやすい所に行こうナルト。私は死ぬかもしれないけど、貴方だけでも救われる)

シャナは、先見の写輪眼で里抜けをした未来を見た。九尾を逃がすわけにはいかないと総出で追ってくる忍達。シャナの力でも死は免れないが、ナルトを逃がすことには概ね成功する。

「里を出るって、どういう意味だつてばよ」

「そのままの意味だつてばね。木ノ葉の大人達は、皆あなたの敵。ならこんな里にいる意味なんてない」

夕日が沈む前になら、里を抜けられる。

「でもさ、でもさ、それってもう木ノ葉には戻ってこれないんじゃないや」「うん」

シャナの言葉にナルトは、考えを巡らせる。即答されると思っていたのに渋っていた。

「俺ってば、……俺ってば……」

「嫌なの？」

詰め寄りそうになった。

「俺は、木ノ葉の里の奴らは嫌いだつてばよ。……あの目が特に嫌いだ」

「わかるってばね。大人のああいう目は、私たちからしたら怖くて仕方ない」

シャナの心に刻まれた傷。奇しくも同じ運命を歩んでいる姉弟。故に同じ思いだと思っていた。

「でも俺は、逃げないつてばよ」

「逃げていいんだよ。お前が、お前が苦しむ必要なんて」

ナルトは、火影岩を見ながら、シャナに言った。

「俺ってば、一度逃げたら、ずっと逃げなきゃいけない気がする」  
確かにそうだ。木ノ葉を抜けたとしても、ナルトを迫害する人間

達というのは絶対にいる。人柱力である以上、避けられない運命というものがある。

今逃げれば、また逃げることになるかもしれない。未来を見られるシヤナであっても、ナルトの未来全ては見られない。逃がすことはできても、シヤナにはナルトを支え続けることはできない。結局のところ解決する見込みはない。

「だったら、俺は、逃げたくないってばよ。俺は、ずっげー忍になって、火影を超すんだ。そしたら、里の奴らだって俺を認めてくれるはずなんだ」

「火影になるってこと？」

シヤナは信じられなかった。ナルトは、自分の考えを持っていた。それはシヤナの想定とは遥かに違うものだった。ナルトと自分の考えの違いに恐怖すら感じた。

迫害されるなら逃げればいい。それがシヤナの考えだ。逃避はなにも間違いではない。シヤナはいつも困難を避けてきた。けれどナルトはシヤナと違う。壁が立ちほだかればぶつかるしかない。

壁を察知して迂回してきたシヤナに、壁と向き合うナルトの考えは理解できない。

(なんで、ナルトはそんなに強く生きられるんだってばね)

「そうだってばよ。火影は、俺の夢なんだ」

沈みかけた夕日の光が、火影岩を照らす。そして、四代目火影の顔岩を強く照らした時、シヤナはナルトが父によく似ていると思った。自分の夢を語り、屈託なく笑う弟。

自分の両親を知らないのに、父と同じ火影を目指すという弟。「こんなこと、誰にも言ったことないのに、なんか姉ちゃんには、言いたくなかったってばよ」

自分の夢を語るナルトは照れていた。初めて口に出した夢を聞かされたシヤナはひどく混乱する。まっすぐに自分の事を見る目。本気で言っているのだ。

人柱力のナルトが、迫害されているナルトが、火影を目指す。それがどれだけ茨の道なのか、目の前の少年は理解しているのだろうか。

地獄のような修業をし、どれだけの成果を上げても、ナルトは認められない。力をつければつけるだけ批難され、隔離されるかもしれない。

そんな夢を追い求める弟を止めてあげるのが自分の勤めだろうと、シヤナはナルトを気絶させてでも連れ出そうとした。弟はまだ幼い、だから私が。

「俺ってば、まだまだ弱いけど姉ちゃんみたいに強くなって、いつか姉ちゃんのこと守れるような火影になる！」

ナルトを気絶させようとしたシヤナの手が止まる。止まってはいけない。ここはナルトの意思を無視してでも連れていかなければいけない。なのに、なのに。

（動け。これは全部ナルトの為なんだ。恨まれたって良い、ただ姉として最初に最後に弟の世話をしたいだけ）

シヤナの写輪眼には、弟の姿の背後に、彼と寄り添う父と母の姿が見えた。いるはずがない、ただ弟の面影から父と母を投影してしまっただけだろう。なのに、ナルトから父と母を感じ取ってしまった。

二人の意志を受け継いでいるナルトの様子に、両親の表情は穏やかだった。

里の為に命を懸けた二人。自分は里を平気で捨てられるのに、弟のナルトは、里を守るといふ意思を宿している。

（でも、でも、こんな地獄に……）

こんな地獄に弟を置き去りにしたくない。けれど、父と母の遺志を継いでいるナルトの夢を否定する言葉が出ない。ナルトを守ると決めたのに。

「姉ちゃん、また泣いてるのか？」

「これだけは答えてほしい。辛い道になる、なれないかもしれない、人生無駄にするかもしれない。それでも、無謀にも、火影になるっていうの？」

シヤナはなぜ自分がこんな質問をしたかわからない。どう考えたってナンセンスだった。頭では連れて逃げる事しかないと思っている。

なのに胸の奥で、強い衝動がシャナの考えを否定する。ナルトを守る。それはどうやって守ることなのだろう。

父と母に託された弟を守るとは、両親の本当の願いとはなんだろうか。

「絶対になるー!」

(ああ、この子は、父さん母さんの血を継いでる)

自分の独りよがりな面に気が付いた。そしてこの子は、非常に頑固で負けず嫌いなのだろう。迫害から逃げたくて仕方なかったシャナと違い、見返すそれがナルトの考え。母と同じく、決して負けない強さを持っている。

(私の最善は、ナルトにとって)

自分の考えを優先し、ナルトの気持ちを考えていなかったのは、シャナも里も同じだった。

日が沈む瞬間、シャナの未来視が勝手に働いてしまう。これは本当にランダムで発動する眩暈のようなものだった。

遠い未来、大人になり火影になったナルトが家族に囲まれている光景。ぼやけて詳しくは見れないが、はるかに遠い未来の気がする。

数多くの辛く切ない未来の中で、唯一輝く未来。それを目指すというナルト。

(そんな未来もあるんだ……)

シャナがナルトに伸ばした手は、彼に小指を差し出していた。ナルトは、シャナの小指を見て、不思議そうに眺めている。

「なら約束しようってばね。指切り」

「ゆびきりっ!」

「こうやって小指と小指で繋いで、絶対に約束は守るって誓うの」ナルトは喜びながらシャナと指切りする。

「何があっても火影になる。男の子に二言はないってばね?」

「うん! まっすぐ自分の言葉はまげねえ! 約束するってばよ!」

「そっか。私も応援するってばね」

二人の姉弟は、初めて指切りをした。シヤナは母と初めて指切りした日を思い出す。そして言葉に出さないが、心の中でナルトに約束をした。

（少しの間だけ我慢してってばね。必ず私が迎えに行くから。私も絶対にお前を守る）

少しの間、ナルトはつらい思いをする。それは確定だ。日も暮れてしまい、もう里抜けは不可能。

力だけでなく、家族としてナルトを守る。それが父と母の願いだったのだろうか。シヤナが一番望み、失ったもの。はじめから持っていなかったナルトに与えてあげる事こそ、自分の役目。

シヤナは、ナルトを抱きしめた。突然抱き締められたナルトは、「え、ええ？」と困惑しているが、温もりに飢えていたナルトもシヤナを抱きしめる。

ナルトも次第に瞳に涙を溜め、やがて泣き出してしまう。悲しい訳でもないのに、力いっぱい泣いた。

泣き止んだ二人は、お腹が空いたため、森と川で魚や木の実を取って焚火で焼いて食べた。二人とも軽い会話をしながら食事を楽しんだ。シヤナは弟と初めての食事、ナルトにとっては、自分を認めてくれた人との食事。

しばらくするとナルトは眠ってしまい、シヤナはナルトを膝に寝かせながら、頭を撫でていた。

火遁で焚火を起こし、弟の寝顔を眺めていると、ある人物が森に現れた。

「再会は、済んだかのう？」

「三代目火影、お前は、この場で殺してもいい」

シヤナは、クナイを向け粒遁の刃を伸ばし、離れた位置にいる三代目火影の首に向ける。

だが、火影との間に割り込んだ人物がいた。

「やめろシヤナ」

割り込んだ人物は、右手に雷のチャクラを迸らせながら、火影に危



害を加えれば殺すと殺気を向けてくる。その人は、シヤナのよく知る人物、銀髪に覆面姿だが左目だけ写輪眼を持つ男、父の弟子であるコピー忍者、はたけカカシだった。

「カカシ。その術うるさいってばね。ナルトが起きちゃう」

カカシの術は、チチチと音を立てているため、眠っているナルトを起こすなど怒る。だが火影に刃を向けたシヤナを警戒しない訳にはいかない。

火影やカカシが此処にいるのは、シヤナがナルトを攫い、里の忍を襲ったという報告を受けたからだ。

「カカシ、下がっておれ」

「しかしー」

「なあに、少し話をするだけじゃ。のうシヤナ」

三代目は、カカシを下がらせ、シヤナの前に腰かける。シヤナはずっと三代目火影を睨んだまま、大人しくしている。

「お前の言いたいことは良く分かる」

「黙れ」

「……全てワシの責任じゃ。ナルトを、ワシは守れんかった」

「そう、お前はなにも守れない。断言するってばね。お前の死は、きつと無意味だ」

シヤナは、意地悪そうにそう言った。ナルトを膝枕していなければ、三代目の顔面を殴りたいほどだった。

「本当なら、こんな里滅茶苦茶にしてやりたいってばね。けど、この子の夢を奪う訳にはいかない」

三代目は、シヤナの目を見て取引を持ち掛けられていると気が付いた。上忍中忍を8歳の少女が再起不能にしたという報告は聞いている。

全員医療班に搬送されるほどの重傷を負っていた。的確に急所を突いた戦術。

(ミナトやクシナの遺した片割れ。ここまでは)

里に不信感と復讐心を抱えたこの子が、里で最も強くなる可能性を秘めている。それは、木ノ葉の里が、シヤナという存在を怪物へと変

えている証拠。

火影という責務に忙殺され、さらにダンゾウの動きや他里の動きに目を光らせていた間、シャナという少女は怪物へと変貌していた。本当に大切なものに目を向けていなかった。

ホムラヤコハル、ダンゾウといった同期の者たちを信用しすぎていた。ナルトの事を頼んだ者たちに裏切られた。しかし、それはヒルゼンの怠慢というほかなかった。良かれと思い、したこと多くが、この姉弟に地獄を見せていた。

ナルトの件が、シャナの逆鱗に触れたことは間違いない。シャナはナルトを連れて里から出ようとしていた。里に対する不信感と、ナルトを守るという使命感、そして憎しみ。全ての要素がその決断を迫らせた。

ここでシャナを捕らえる事はできるだろう。

だが、これ以上ミナトとクシナが遺した二人を追い詰めたくはなかった。それに今度は、ナルトが暴走しないとも限らん。たった半日とはいえ、ナルトにとつてシャナは重要な人間になったはず。

(今更償うことは出来ん。だが、もう見て見ぬふりは出来ん)

「望みを聞こう。ワシが直接管理する。……だが、まだ一緒に暮らさせることは出来んぞ」

「お前らの首……冗談だつてばね。ナルトの身柄を守れ。数年でいい。数年で私はすべてを解決する。そうだな、カカシとその部下を護衛にしろ」

シャナは三代目火影に要求を並べていく。交渉材料となるのは、シャナの能力。里中が搜索に出たのに、二人は最終的に夜遅くまで里に潜伏できたこと。結界を平気で突破する術や、上忍クラスを打ち倒す戦闘力。そして、万華鏡写輪眼。

力での脅し。子供であるシャナには、それしかなかった。当然長くは続かない。けど、三代目火影の影響力のあるうちに、全てを整える。そのための時間はあった。

シャナは望みを伝えていく。

ナルトの身を守れ。ナルトを利用させるな。ナルトの事を考えて

くれる大人を身近に置いてやれ。などを伝えた。そのすべてがヒルゼンによって約束された。

特に護衛の人選は、もともと知り合いのカカシを選んだ。火影直属の暗部であるカカシなら、裏から守るくらいは可能だろう。

「お前の事は望まんのか？」

「望まない。私は自分で解決できるってばね。」

それに、ナルトはこれからも辛い目に遭い続ける。……それを思えば、私の苦しみなんて軽いもの」

シヤナの願いは、全て聞き入れられた。そして、今回の騒動も、三代目火影の権限でもみ消すと宣言した。幸い、ダンゾウは他里に会談に出かけているため、今のうちに全てを終わらせておくと言っていた。

夜遅くになり、そろそろ家に帰らなければいけなくなった。

だが、シヤナは「まだ帰らない」と言い張る。約5年の月日をかけて出会った姉弟。別れが惜しいと思うのは当然かと考える三代目。だが、いつまでも一緒に居ることはできない。

シヤナは、三代目に「今何時だってばね」と尋ねる。

「今は、ちょうど日付が変わったところじゃな」

三代目は、懐中時計を胸から出しそう告げた。すると、シヤナは、ナルトの髪を撫でながら、額にキスをした。突然そんなことを始めたシヤナに驚く三代目だが、シヤナは気にしない。

「誕生日おめでとうナルト。姉さん、まだ帰れないけど、必ず迎えに行くからね」

そうしてシヤナは、自分の懐に持っていた父ミナトのクナイを取り出して、ナルトの手に握らせた。大切にし、肌身離さず持っていたクナイをナルトに預けたシヤナ。

ゆつくりとナルトを起こさないように立ち上がり、「帰るってばね」と告げた。

「カカシ」

「ハッ」

「シヤナを送ってやれ」

傍に控えていたカカシが三代目の指示で再び現れる。ナルトは、三代目が連れて帰る故、カカシはシヤナを送り届けろと命じる。その命令を受けたカカシは、少し悩んだ後、シヤナを連れてうちらの集落へと向かう。既に里の警戒態勢は解除され、シヤナが出歩いて誰も気にしなかった。

しばらく会話のなかった2人だったが、シヤナからカカシに口を開いたのだった。

「久しぶりカカシ」

「……ああ。確かに久しぶりだな」

「オビトも久しぶりだってばね」

シヤナの言葉にカカシは、何も言えなくなる。シヤナは、青い写輪眼でカカシの左目を見てそう言った。カカシに移植されたオビトの写輪眼に向けて呼びかけたのだ。

やはり、シヤナはオビトの事を忘れてはいない。同時にオビトの死の原因となった自分を恨んでいるのだとはつきり感じる。

「冗談だってばね」

「いや、いいんだ」

「皆居なくなっちゃったってばね。カカシも私も」

シヤナは、カカシを恨んでないなかった。これは本当だった。オビトとリンの死からカカシは一度もシヤナに会ってはいなかった。そしてミナトとクシナも失い、シヤナとカカシは、大切な人をすべて失った共通点があった。

ただ、カカシに会いたいという感情はあったのだ。同じ痛みを知るものとして、痛みを共有したかったのか、慰めたかったのかは、シヤナにもわからない。

ただ、寂しかった。それは間違いなかった。

「ナルトの事、頼むってばね」

「俺にそんな役をさせて平気なのか？俺はオビトとリンを死なせておめおめと帰ってくるような……」

「私だってお父さんとお母さんを目の前で死なせたってばね」

それは違う。そうカカシは叫びたかった。だが強い後悔の念を宿

した声色に、そんな言葉は慰めにもならないと知る。自分の力不足を悔いているのだ。三歳だった少女が。

「ずっとカカシに頼めないのは、わかってる。だから数年でいいの」「数年でどうする気だ」

「全部黙らせるってばね。……私、強くなつたってばね」

確かに。カカシはそう思った。さつき向き合った時、本気でカカシが仕掛ければ、カカシは死んでいたと感じる。錯覚かもしれない。けれど、この少女は、そう思わせるだけの自信と強さを持っている。

「でも、もつと強くなる。火影すら超えるほどに」

三代目に交渉していた不気味な少女はそこになく、将来の夢を語るような子供の顔で、少女はカカシに宣言した。

「だから、お願いだってばね。やることが多いの」

「ああ。任せろ」

うちの集落についたシヤナは、警務部隊に囲まれながら、カカシに手を振って別れた。その後、シヤナは、2年後の〈あの事件〉まで、うちの集落から出ることはなかった。

## うちは一族抹殺事件 前編

ナルト誘拐事件から2年の時が過ぎた。

うちはシスイとその両親とシヤナが暮らす一軒家。シスイの部屋に訪ねてきたシヤナが、シスイに向けて忠告をしていた。

「シヤナ今なんて言ったんだ？」

「だから、シスイ、死んじゃうよって」

「え、マジ？ 予知？」

「予知」

シヤナはその日の夜に未来視の能力が働いた。遠くない日にシスイが死に、うちは一族が滅ぶ未来を。かなり鮮明に見られたことから、かなり決定的な未来だということも。

シヤナの能力を知っていたシスイは、彼女の忠告を真剣に、聞いていた。

なぜなら、シスイ自体、命に関わる使命を果たそうと考えたのが、昨日だったからだ。それが原因となれば、シスイの策は失敗することが確定的となる。

「どうやって死ぬ？」

「誰かははつきり言えないけど、暗部だと思う。クーデター関連かな？」

あくまで予知夢として見たため、シスイ以外の人物が乱れていた。だが、最期の姿は、満足げだったと伝える。その言葉を聞いたシスイは、少しだけ悩んだのち、「そうか」と言って納得していた。

「いつも子供のお前に、苦労かけるな」

「もう、止まらないのかな？」

シヤナは、シスイと仲良くしていた。彼は信頼に値すると感じたからこそ、未来視についても教えた。彼も信頼の証に自分の万華鏡の能力【別天神】も説明していた。二人の目的は共通していた。

うちはのクーデターを止める事。

シスイとシヤナは、うちはフガクにより里へのクーデターを知らさ

れていた。だが、二人そろってそれを止めるほうに思考を傾けた。

シスイは、里を愛しており、里の為。

シヤナは、クーデターの計画に九尾の狐を使う可能性が出てきたため。

(里も一族も何もかも滅茶苦茶になる)

(あの化け物を復活させる訳にはいかない。それにナルトが利用されることなどあつてはいけないってばね)

シスイとシヤナの反対を聞いたフガクは、それでも一族の未来を思えばこそだと、決行を譲らなかつた。他の大人達もクーデターへの準備を始めており、既に止めることは難しい。

シスイは三代目火影との連携によって止められないか、シヤナは未来を変えることで阻止できないかと考えていた。だが積み重なった時間と不満は、うちは一族の未来を一本のレールからはみ出させない。

あるのは、失敗と成功のみ。未来視の話をフガクに打ち明けたこともあつた。だが、子供の妄想だと否定される。逆に他のうちはの人間には、話さない事だと念を押された。

半信半疑でもあつたが、シヤナの未来視を一族が知れば、利用する勢力も出てくる。

クーデターを起こすとしても、幼い子供は巻き込むことを許さないというのが、フガクの考えだつた。

八方塞がりとなり、シスイが己の持つ万華鏡にて、クーデターを強制的に阻止しようと考えれば、シヤナが未来視で死を予言する。

(だが、止まるわけにはいかない)

「もし、俺がお前の未来視通りになったら……」

シスイはシヤナにある言葉を残した。それがシスイの遺言となつた。その次の日、シスイが身投げしたという情報がうちは一族に広がった。

シスイの両親は悲しみ、秘かに息子を奪つたと噂される里への恨みを強くしていた。優しかつた夫婦は、自慢の息子を失つたせいで、性格が変わつたようだつた。

今まで参加したことのないクローダーの集会にも積極的に参加していた。

(うちは一族は、愛情深い一族、けれど、同時に恨みに染まりやすいか) シャナは、豹変した夫婦を見て、自分もそうなる可能性があるのかと思った。正確に言えば、シャナ自身も怨みの感情に支配されることが多い。純血ではないが、うちはの血が濃いことは明白で、両親を失った自分が自暴自棄になっていないのは、弟の存在が心を繋ぎ止めているからだ。

そして、身投げしたと言われる義兄の存在も大きかった。彼はシャナを尊重し、決して裏切らなかった。

予定調和のように死んでしまった彼のことを思い、シャナは静かに涙を流す。人に係わることで失う痛みを知っているシャナは、九尾事件以降、繋がりを求めなくなった。けれど、義兄だけは、シャナの繋がりがかった。

「馬鹿、兄貴」

一度も呼ばなかった兄を、誰も居ない部屋で初めて口にした。死ぬと分かっているも里の為に身を捧げた兄に、シャナは黙禱する。その死に様に苦しみがなかったことを祈りながら。

その日からすぐに未来視で、これから起こることを識った。当然、シスイの両親には、伝えた。

「問題ない。うちはの未来は明るい」

「そうよ。シスイの恨みを晴らさなくては」

聞き入れてもらえなかった。シャナは、また一人になるのかと辟易しながら、森の修練場に作った隠れ家に身を潜めていた。

—————

うちはの集落では、妙に殺気立つうちは一族の大人達がいた。

その数日後、うちはの集落では、大量の血が流れていた。人々の悲鳴と血潮が舞い散り、集落一帯を紅く染め上げる。

一人、また一人と、うちは一族の者たちを殺していくのは、同じうちは一族の男、うちはイタチ。彼の赤い写輪眼は夜の闇の中で一際輝



いていた。

冷酷な暗殺者は、老若男女かわららず皆殺しにしていく。

ある程度殺し終えた後、イタチは自宅に向かい、そこで自分の父と母を殺した。父と母を刀で殺したタイミングで、彼の弟が家に入ってくる。

倒れた父と母を見たサスケは、その光景に絶望の表情を浮かべる。

「兄さん！ 大変なんだ、父さんと母さんが……兄さん？」

部屋の中に兄がいると知ったサスケはイタチに助けを求める。だがイタチの目はひどく冷たく、サスケに向かつてクナイを投擲。サスケは反射的に避けるも、兄から攻撃された事実には戦慄する。

「愚かなる弟よ（万華鏡、写輪眼）」

イタチは弟に対して、万華鏡写輪眼を使った。イタチの万華鏡写輪眼は三枚刃の手裏剣の文様をしており、その瞳力で、サスケを幻術の世界へと引きずり込む。

彼がサスケに見せたのは、自分がうちは一族を抹殺する光景。抵抗する者、無抵抗の者、逃げる者を一人残らず刈り取っていく光景。そして最後に見せたのは両親を殺した瞬間である。

サスケはそんな光景を見せ続けられたことで悲鳴を上げながら、床に倒れ伏す。どうにか耐えた精神力を持って、イタチを睨む。

「にいさん、どうして……」

「己の器をはかるためだ」

「器？ そんなものの為に、みんなを……うあああ!! ふざけるな!!」

兄の言葉に怒りを覚えたサスケは、兄へと向かって殴りかかる。だが圧倒的実力差の前で、イタチの拳を腹に受けて、身動きが取れなくなる。

（殺される、殺される！）

再び床に沈んだ弟を見下ろすイタチ。サスケは兄に殺されると恐怖を感じ、動けないはずの体に鞭を打って、逃げだしてしまふ。涙を流しながら、死体の転がるうちには集落を駆け抜けていくサスケ。

背後を振り返る勇氣はなく、ただ「死にたくない、殺さないで」と叫びながら情けなく逃げる。

サスケが無意識に逃げ込もうとしていたのは、うちは一族の修練場だった。

両親が殺され、兄に命を狙われる現状、唯一自分を助けてくれる人物が、そこにいると思っただからだ。

ようやく修練場に入ろうというところで、イタチがサスケを追い越して現れる。

「無様なサスケ」

「ひっ……どうしてなんだよ兄さん。兄さんはこんな人じゃなかったのに」

闇の中で光るイタチの写輪眼に睨まれ、恐怖から動けなくなる。そんな弟を見てイタチは心底呆れたとばかりに吐き捨てる。

「お前が望む様な兄を演じ続けてきたのは、お前の器を確かめる為だ。お前はオレの器を確かめる為の相手になる……そういう可能性を秘めている。」

だからこそ生かしてやる……オレの為に」

自分の目的の為、サスケを生かすというイタチ。彼はさらに言葉を吐づけた。

「お前は、俺と同じ万華鏡写輪眼を開眼しうる人間だ。ただし、それには条件がある」

「？」

サスケの目を見ながらイタチは、邪悪に歪んだ笑みを見せる。

「最も親しい友を……殺すことだ。シスイを殺した、俺のように」

「え、じゃあ、兄さんがシスイを」

「その通りだ。そのおかげで俺はこの目を手に入れた。……南賀ノ神社本堂、その右奥から七枚目の畳の下に一族秘密の集会場がある。」

そこに、うちは一族の瞳力が本来何の為に存在するのか、その本当の秘密が記されている」

イタチは、サスケに向かって言葉を吐づける。

「お前が開眼すれば、俺を含み、万華鏡写輪眼の使い手は3人になる。そうなれば、お前を生かしておく意味もある」

イタチは、サスケを睨む。サスケは、殺気を向けられたことで、激

しい震えと吐き気に襲われる。その様子を見たイタチ。

「ふん、今のお前など、殺す価値もない。愚かなる弟よ……このオレを殺したくば恨め！ 憎め！ そして醜く生きのびるがいい……逃げ、逃げて、己が生にしがみつくだいいい」

イタチは再び写輪眼を万華鏡写輪眼へと変える。

「そしていつかオレと同じ”眼”を持ってオレの前に来い」

再びイタチはサスケに幻術をかける。サスケの精神を限界にまで追い込んだ事で、イタチは立ち去ろうとする。正しくは次の標的を殺しに行くところだったのだが。

「待て!!」

突如、幻術から抜け出したサスケが、修練場に突き刺さっていたクナイをイタチに投擲する。イタチは、そのクナイを刀で弾くが、不意打ち気味だったため一本だけを取りこぼす。

取りこぼしたクナイは、イタチの額当てを飛ばした。弟からの反撃に驚いたイタチを見るサスケの目は、未熟な一つ巴の写輪眼だった。

イタチは飛ばされた額当てを拾い、付け直す。そして、サスケの姿を見たイタチの目には、僅かばかりの涙が流れていた。サスケはその涙の意味を考えるより先に、力尽きて気絶してしまう。

「っ、サスケ」

涙を流しながら、倒れたサスケを心配そうに見るイタチ。先程までの冷酷さとかけ離れた姿は、何方が真のイタチなのかをわからなくする。そしてサスケに手を伸ばそうとした時、修練場の森から青い閃光が駆け抜け、イタチとサスケの間に割って入る。

サスケを庇うように現れた女性は、イタチ相手に手裏剣を投擲。イタチはそのすべてを回避し、その人物を写輪眼で睨み付ける。

「シヤナ」

「イタチ。やはりこうなつたつてばね」

現れたのは2年間で更に成長したシヤナだった。

## うちは一族抹殺事件 後編

シヤナは、イタチが何をしてここにいるかを知っているようだった。イタチは最後のターゲットが自分から来たことに驚くも、好都合だと考え、シヤナを睨む。

刀を構え、殺気をシヤナに向けるイタチ。

殺気に当てられても動じないシヤナは、青い写輪眼でイタチを睨み返す。だが警戒しているのか手裏剣は両手に構えている。

「シスイの遺志を継いだ結果がこれだってばね？」

「何故お前がそれを知っている」

シヤナは、イタチ相手にシスイの話をする。

「私は、数日前からシスイが死ぬことを知っていたってばね」  
「どういうことだ」

イタチは知らなかった。シヤナの青い写輪眼の秘密を。未来を見る写輪眼、先見の写輪眼を知っているのは義兄であるシスイのみだったからだ。

「私が何も知らないかと思っていたのかイタチ？」

「ほう。お前が知っているというか、うちは一族のことを」

「フガクは、何も言わなかったのか」

急に父親の名を出されたイタチが、嫌な予感がしたのか、万華鏡写輪眼でシヤナを睨みつける。

「クーデターの戦力に私も数えられていたからな。もちろん断ったけど」

「本当に知っていたのか。呪われた一族のことを」

「……ナンセンスな一族だってばね」

そう言い切ったシヤナに、イタチは口元に笑みを浮かべる。同じ考えを持っていたからだ。酷く自虐的な笑みだった。

クーデター。それは木ノ葉に不信感と不満を持ったうちは一族の計画していた作戦。

里の上層部を万華鏡写輪眼を持ったフガク、そしてシスイにより制圧する予定だったがシスイは死亡。代わりに息子のイタチとで制圧。

無血革命を起こすつもりだった。

シヤナは、万華鏡写輪眼を持つているため、うちは一族の大人達は、木ノ葉の里に対するクーデターの戦力扱いをしていた。だがあまりに幼いこともあり、フガクが阻止した。

大人達だけで進められていたクーデター計画こそが、今日イタチによつて引き起こされた、うちは虐殺事件の原因だった。

「けど、気持ちはわかるってばね。私にも大切なものがある」

「お前にか？ お前は誰にも興味がないんだと思つていた」

「うちには居ないだけ。私の事をお前は何も知らないってばね」

イタチはシヤナの事を確かに何も知らない。シヤナの両親は見たことがあるが、弟の存在までは知らなかった。

「それでは、シスイの死を知つていたとは？」

「言つても信じないだろうけど、私の目は特殊だつてばね。あの人が死ぬことを予知したから、忠告はしておいた。けど、無駄だつたつてばね」

シスイの事を話すシヤナだったが予知などという言葉信じると、イタチは甘くない。だが、この自分を殺しに来た相手に突拍子もないことを言う神経も理解できない。

「到底信じられないな。もし予知など言うものがあるなら、お前は俺の前に出てこず、隠れていたはずだ」

「なんでそう思うってばね？」

イタチの挑発的な言葉にシヤナも怒気を込めて聞く。

「何故か？ お前は俺には勝てない。俺と向き合えば、死ぬのに出てくるはずがないだろ？」

「ああ。そういうことか。私がお前より弱いって言つてるってばね」

シヤナは激怒していた。自分の力を侮られることに対して、人一番敏感な彼女は、すぐにでもイタチに襲い掛かろうかと考える。

確かにイタチの言う通り、今日のようなことが起こるのはわかつていた。だから身を隠すことも十分可能だった。けれどある理由とサスケに対するイタチの行いに腹がたつた。だから出てきたのだ。

「そろそろ、終わらせよう。言い残すことはあるか」

「何を勘違いしてるか知らないけど、私を殺すなんて1000年早いつてばね」

「そうだな、だが俺の術の前では1000年は一瞬だ。月読！」

イタチが、一瞬で終わらせてやるのが救いだと万華鏡写輪眼の瞳術を発動する。

自身と目の合ったものを、自分の精神世界に引きずり込み。あらゆる法則が術者の思い通りに構築される世界では、時間の流れすら自在。実際は1秒しか経っていなくても、精神世界では3日過ぎさせる事も出来る。

その幻術をかけ、シャナのみ動きを完全に封じたのち、殺すというのがイタチの策だった。痛みは感じる間もなく死んでいる。

「ぐ」

だが、油断しきっていたイタチは、青い閃光となったシャナの掌底を腹部に受け、吹っ飛ぶ。地面に転がったイタチはすぐに起き上がるが、咳き込みながらシャナを見て、目を大きく開く。

「馬鹿な、それは」

「万華鏡写輪眼。私が開眼したのは、3歳の時だつてばね」

最強の幻術、月読は、同じく万華鏡写輪眼を持つシャナの瞳力の前に敗れた。瞬時に月読を解除したシャナ。シャナの幼少から使い続けている写輪眼の瞳術は、うちは一族の歴史から見ても最高峰という他なく、洞察力もさることながら、幻術に対する耐性に関しては、無敵とも言えた。

そしてシャナは、青い万華鏡写輪眼でイタチを見つめながら続ける。

「3歳だと、そんな馬鹿なことが」

「事実だつてばね。私の両親が死んだとき、九尾事件の時に開眼したんだつてばね」

イタチは、想定外の事態に頭を働かせる。イタチの目的は、うちは一族を皆殺しにする代わりに、弟だけは助けるよう契約した。弟を救うためだけに、一族を捨てる覚悟を決めていた。

それは概ね成功していた。クーデターなど起こせば、サスケも含め

て全滅する未来を変えるために、自分を犠牲にした考えだった。

だが、最後の最後で、とんでもない伏兵が居た。

「力を偽っていたのか」

「使いこなせなかったただけだってばね。まあ組手の時は、手を抜いていたのは事実だってばね。イタチは知らないと思うけど、全力の私はシスイに一度も負けたことがない」

うちはシスイは素晴らしい忍で、イタチの兄のような人物。何度も模擬戦をし、その実力は自身以上だと認めていた。そのシスイより強かったのは、自分より年下の少女なのだから、世の中よく分からないと感じた。

「自分の知識と思い込みで、お前を過小評価していたのか、俺は」

「少なくとも目に関しては、お前は私に勝てないってばね」

両手を合わせて粒遁の用意をするシャナ。イタチは火遁の印を結び、先に術を発動する。イタチの豪火球が迫るが、シャナはそれを気にせず粒遁・天輪を発動。集束された粒子は、熱と速度を持って豪火球の術を貫通。イタチに命中する。そして、イタチの上半身が消し飛んだと同時に、煙を上げて消える。これは影分身による陽動だったのだ。

そして、火遁の影に隠れて接近したイタチの本体。イタチを見ているシャナの背後には、手裏剣。逃げ場はなかった。その刃がシャナの体に触れる瞬間、シャナの体が青い光に包まれ、目に留まらぬ速度で移動する。

「ぐ」

亜音速での高速移動。その衝撃波が手裏剣とイタチの体を吹き飛ばした。風圧で体に裂傷を負うイタチだが、空中でシャナの移動先をとらえ、火遁・鳳仙花の術を発動。

炎が再びシャナへと向かい、光から元に戻ったシャナの体を焼き尽くす。

「よそ見すんな」

しかし、炎が当たったのは、シャナの影分身だった。本体は、イタチの背後に回り込んでおり、彼の背中を蹴りつけた。

地面に叩きつけられたイタチだったが、落下する寸前に受け身を取り、距離を取る。

「粒遁・天倫！」

空中でチャクラ粒子を集束、粒子砲を発射するシヤナ。イタチは瞬身の術でシヤナをかく乱しようとするが、シヤナの万華鏡にはすべて見えている。着地前に2発ほど発射し、全てイタチにギリギリ当たらない位置に着弾する。

(強い。これほどか)

(やつぱり優秀だつてばね。上手く躲してる)

全弾避けられたシヤナは、森に身を隠したイタチを追う。一方イタチは、シヤナの強さを感じ、森で息を潜める。シヤナの実力を見誤っていたイタチは、残り時間が短いことを考える。

このままでは、シヤナを殺すことが出来ない。それは、サスケのみ生き残らせる目論見がうまくいかないことを示す。これではダンゾウとの取引が成立しなくなる。

「自分の弟に、殺しに来いと言っていたが、それがお前の望みなのかつてばね！」

シヤナは森にいるであろうイタチに話しかける。シヤナは、イタチとサスケの会話を聞いていたからこそ、ここに現れたのだ。

「はつきり言つてやる。復讐心を抱えながら、生きたような奴はろくでもないやつになる。私のような心に欠陥を抱えた人間になってもいいのか？」

それにお前は泣いていた。身を削つてまで、弟に恨まれてまで、成したいことつて何だつてばね！

私はお前の事が嫌いだ。でも、サスケに対する気持ちだけは認めていたのに」

「お前にはわからない。お前が俺の何を知っている!!」

森の奥からクナイの雨と共にイタチが飛び出してくる。シヤナは、クナイを手裏剣で全て迎撃し、間を縫うように迫る刃をクナイで受け止める。激昂の表情をしたイタチが、何度もシヤナに刃を振るう。

その勢いに押され、シヤナは防戦一方になる。



女性と男性の筋力の違いか、シャナの体が木に叩きつけられる。木に叩きつけられたシャナに詰め寄り、クナイで刀を受け止めた彼女を壁に押しさえつけるイタチ。

「お前を始末すればサスケは助かる!! そのために、俺は一族を捨てたんだ、これ以上邪魔はさせん!」

「私にもお前の考えはわからない。けど、唯一共感する所があった」

イタチの腹に蹴りをお見舞いし、木の上に垂直に立ったシャナは、イタチに手裏剣を投擲。すぐに避けたイタチだったが、シャナは手と口で啜えたワイヤーを操作する。操手裏剣の術でイタチを追い詰め、木に拘束する。

ワイヤーで固定されたイタチは、刀でワイヤーを斬ろうとするが、シャナの手裏剣によって刀を木に固定される。

「弟を思う気持ちだけは同じだと思っていたのに。お前は選択を間違えた」

「何を言っている。お前に弟なんて」

「いるってばね。私には会いたくても会えない弟がいるんだってばね。いいかイタチ、私たちが、勝手に弟の将来を考えたって、それは可能性を潰すことにしかならない。」

サスケはこれからどう生きていくと思う。恨みと憎しみを抱え、大好きだった自慢の兄を殺す人生。そんなことを望んでいると思うのか」

シャナは2年前、ナルトの未来を自分の考えで決めようとした。もし、あの時思い止まらなければ、イタチと同じく、弟の人生を歪めてしまうところだった。確かに最善ではある、だがそれが望みではないのだ。

シャナにとってイタチの行動は、理解はできる。うちのクーデターによつて、一族全員が滅びるくらいなら、弟だけでも。そう考えたのだろう。

けれど、それでもサスケに後始末を押し付けるような行為は許せなかった。

「何も知らない小娘が、俺が何も考えなかったと思うか、すでに手詰ま

りだったんだ」

「なら、サスケにだけでも真実を伝えるべきだったってばね。どのみち恨まれるのなら」

「それでは、サスケは俺を殺せない！ サスケは、うちには残された最後の未来になる。そして将来、抜け忍になった俺を殺せるだけの力を持つてば、サスケはうちは一族を亡ぼした敵を討った英雄となる。

それこそがサスケの人生を考えた結果だ。だから、ここでお前は死ねシャナ！」

滅びるしかない一族を再興する手段、それはイタチの脚本した復讐物語。その主人公にサスケを配置することだった。

イタチに詰め寄っていたシャナだったが、突然イタチの体が爆発。目の前にいたイタチは影分身であり、彼はそれを爆発させることで、回避不可能な攻撃を仕掛けた。

大爆発という規模のそれは、間違いなくシャナを捕らえた。その一部始終を写輪眼で見ていたイタチは、木の影から現れる。

強敵だったがどうやら時間までに始末できた。写輪眼を解除したイタチは、チャクラ不足とスタミナ切れを感じていた。影分身にチャクラを割き過ぎたと、相手の手ごわさに溜息を吐く。

「気が済んだか？」

「……嘘だ」

イタチの素直な感想だった。ゼロ距離の大爆発。跡形すら残らない規模の爆発だったのに、シャナは生きていた。それも無傷で。

シャナの体は、青いチャクラでできた骸骨のような巨人に覆われており、6本腕の巨人は、腕を組みながらイタチを睨んでいる。

「私はお前より強いよイタチ」

「……そのようだな。殺せ」

今のイタチにシャナを殺すことはできない。そうイタチ自身が認めた。その瞬間、シャナは青い巨人を解除する。まるで敵意などなかったように、シャナも写輪眼を解除し紫の瞳に戻る。

「なぜ、殺さない。俺はお前に敗れた」

「私の目的は、お前の真相を聞き出すことと、シスイの両親の敵討ち

だ」

そういつて、シヤナは、イタチの右頬をぶん殴った。殴られたイタチは驚くも、倒れはしない。

「これでいい。あの二人は復讐に取りつかれてしまった。だから、この結末は、よかつたのかもしれない。だが私にも義理はある。この一発で済ませてやるってばね」

豹変した夫婦は、シヤナから見ても心苦しかった。そして、サスケに対する考えと思いを聞いてしまった今、争う理由はなかった。

「もう時間切れなんだろう？」

「……」

「悪いが、私はナルトの所に帰るため、死ぬわけにはいかないってばね」

「ナルト……、そうかお前の弟というのは、九尾の」

ナルトを九尾と言われたことで腹が立つが、今は怒ってる暇はないのである。

「弟に会いたいのか？」

「会いたいから、頑張ってるんだってばね」

自分の力はすべてそのために磨いている。だが、うちのクーデターが発覚し、弟への被害を止めるために時間を使い過ぎた。どうにかクーデターを阻止できないか考えていたが、今回は時間切れだった。

だからこそ、真意を知った今、イタチと敵対する理由がなくなった。イタチもシヤナを殺せない。

なら、お互いに利用しあうべきなのだ。

「取引をしないかシヤナ」

「何を望んでる？」

シヤナの問いにイタチは、答える。

「俺は、どのみち木ノ葉の上層部に釘を刺す予定だった。そこに条件を加えるだけだからな。望むのは、サスケを鍛えてやってくれ、お前なら出来るだろう」

「……サスケに、お前を殺させる手伝いをしろと？」

「そうだ。俺より強いお前なら、弟を任せられる」

「私はお前の考えに否定的なんだけど」

シヤナはイタチの考えが気に入らない。なのに、その手助けをしろとはどういうことだと詰め寄る。

「お前がサスケを見守ってくれるなら、俺は里の上層部にお前が弟と暮らせるように、譲歩させる事が出来る」

「……」

「俺は抜け忍となり、ダンゾウ達に俺との契約を違えれば里の機密を漏らすと伝える。そうなれば、奴らは従わざるを得ない」

シヤナは思案する。未来視を使ってその結末を追えば、確かに成功する確率が高い。

彼女の様子を見ていたイタチは、シヤナの目が写輪眼ではなく、ただ青くなっていることに気が付いた。

「その青い瞳、それがさつき言っていた予知か？」

「そう。私は未来視が出来る。それに写輪眼を組み合わせて、使えるのが私の写輪眼。シスイが言うには先見の写輪眼」

シスイらしいなとイタチが笑う。

「イタチ。その条件を飲んでもいい。だけど、私はサスケの意思を無視しない。あの子の考えを優先し、任せることにする。それに復讐者を育てるつもりはない。私はあいつを強くするだけだ。その方針に文句は言わせないってばね」

サスケが復讐を望まなければ、シヤナはサスケを鍛えない。これだけは譲れない。弟分として、可愛がっていた子でもある。なるべく冷たく接してはいたが、それでも親しい存在なのは間違いない。ただろう。

そんな子に、復讐を背負って生きる宿命は、重すぎるのだ。

純粋なサスケは、何色にも染まってしまう危うさがある。そして染まったが最後戻ってこられなくなる。

「それでいい。後は頼んだ……」

イタチはそう言い残し、その場から消える。おそらく里の上層部へ、向かったのだろう。シヤナは、イタチが居なくなった所で、膝か

ら崩れ落ち全身の痛みを耐える。

「く、ぐうぐう、あああ」

ギリギリの勝負だった。後数秒イタチが留まれば、シヤナは無防備な姿を晒すところだった。最後に使った術は、シヤナの持つ最大の防御と攻撃方法。イタチの不意打ちを完膚なきまでに防ぐことで、力を誇示する目的で使った。

だがその代償が、全身の細胞を針で刺されるような激痛。地獄のような苦しみがシヤナを襲う。シヤナは修行を繰り返して、この術を発動可能となったが、持続時間が短く、代償が大きすぎる。

けれど、イタチに諦めさせなければ、この交渉は引き出せない。そして、イタチを殺してしまうことにつながる。

数十秒ほど副作用に苦しんでいたが、ようやく動けるようになったシヤナは、地面に倒れているサスケの様子を見る。土埃で汚れた頬を拭いながら、シヤナはうちは一族で起きた事件を察して駆けつけてきた、木ノ葉の忍達に保護されるまで、その場から動かなかった。

何も変えられなかった今回の事件、シヤナは空を見上げながら今は亡きシスイの遺言を思い出していた。

「もし、俺がお前の未来視通りになったらへイタチの事を頼む。あいつは器用だけど、何でも抱える癖があるからさ。いつか潰れてしまいうので心配なんだ」

シスイの遺言。それはイタチがサスケの事を頼んだ事と同じだった。

(うちは男どもは……めんどくさいってばね)

互いに誰かを大事にし、それをシヤナに託して消えるのだ。シヤナはそれを断れない。繋がりを求めて大切にしているのはシヤナも同じだから。

唯一変わった事と言えば、シスイもイタチも、自分以外の誰かに、思いを託せた事だけだろう。

こうして、うちは一族は、抜け忍うちはイタチを除けば、2人の子供だけを残して壊滅したのだった。

## 後始末

うちは一族の壊滅。それは木ノ葉の里だけでなく、他の国々をも震撼させたニュースとなった。

唯一保護された、二人のうちは。片方は、事件の犯人の弟。もう片方は秘匿されているとはいえ、四代目火影の忘れ形見。重要人物のみが生き残り、他のうちはは全滅していた。

事の詳細は、うちはのクーデターを察知していた里の上層部が、イタチに命じていた作戦だった。イタチ一人に全ての罪を背負わせ、クーデターの鎮圧を行わせたのだ。

弟の命を救う代わりに、一族抹殺に手を貸したイタチ。彼は、予定通り里を抜ける寸前に、ダンゾウを通してサスケとシヤナの身の安全、そして行動の邪魔をするなど脅した。

イタチの脅しは効果的であり、残されたうちはサスケを狙っていたダンゾウは、身動きが取れなくなった。心神喪失状態のサスケは、木ノ葉の病院に入院中。

もう一人はと言えば。

里の上層部の4人。三代目火影とダンゾウ、ご意見番の二人と向き合うのは、シヤナ。彼女は、青い写輪眼でもって4人を見定める。

無傷でイタチを撃退したとされるシヤナ。その実力は、折り紙つきだろう。ダンゾウ達も最大限警戒せざるをえない。

一方、既にシヤナの要望を叶えるため書類を用意していた三代目は、その書類を読み上げる。

「本日より、うずまきシヤナと名乗り、ナルトと暮らすことを認めよう」

「何を考えている猿飛!!」

物言いをつけたのは、ダンゾウだった。九尾の人柱力と万華鏡写輪眼を持つうちは。その二人を同じ場所で管理するとなり、文句をつけてくる。

「二人を引き離したのは、何方も幼く力が不安定だったが故。現にシヤナはあのイタチと戦い無傷で生き残っておる。自分の力を制御

できているなら、ナルトの九尾を制御するのに、この子以上の適任もおるまいて」

「しかし」

「儂の管轄下にシヤナとナルトを置く。全ての責任は儂がとる。これでも不満か」

三代目火影の決定に、ダンゾウは反論できず、ご意見番の二人もシヤナの力を利用し、九尾を制御できるのならと許可する。

「だが、その子は、忍ではない。一般人に九尾を制御させるつもりか？」

ダンゾウは、シヤナがアカデミーに通っていないことを引き合いに出す。確かにシヤナは忍術使いであっても、忍として登録されていない。言うなら一般人だ。

忍者候補でもないシヤナに、里の尾獣を預けるつもりかと尋ねる。「そうじゃな。確かにシヤナは、忍ではない。昨日まではな」

猿飛は、ダンゾウに向かって書類を投げ渡す。書類を受け取ったダンゾウは、それに目を通して、固まる。それはシヤナの忍者登録証だった。

「シヤナは、アカデミーに入学後、すぐに卒業した。故に、まだ仮ではあるが、下忍なのじゃよ」

権力の行使に迷いのない火影。シヤナの立場を整えるために、手を尽くしていた。珍しく先手を取り続ける猿飛に、ダンゾウも言葉が出ない。

そして、反対意見がなくなったことで、シヤナの処遇が決まる。

「じゃ、行ってくてばね」

シヤナはあらかじめ三代目に渡されていた木ノ葉の額当てを眺めながら、木ノ葉の病院へと向かう。すぐにでも弟の所に行きたい気持ちを抑え、義理を果たすため、サスケの病室の窓から侵入する。どのみち面会謝絶なのはわかっていたので、窓から入り込んだシヤナ。

病室の中では、ベッドの上で目覚めていたサスケが、シヤナを見る。

「シヤナ……生きてたのか」

「私は強いからね」

サスケは、精神的な理由からか、見るからにくたびれていた。

「イタチが、みんなを殺した……父さんと母さんも」

「生き残ったのは、私とお前だけだつてばね」

それは事実だった。サスケは、その光景を思い出したのか唸りながら、頭を抱える。その目には、明確に闇が漂っていた。それは間違いなくイタチに対する復讐の炎。イタチの弟を思う心によって植え付けられた復讐心は、幼かった少年の心を変化させていた。

やがて、唸るのを止めたサスケの目は、シヤナの目を見返す。

「イタチは俺に、殺しに来いと言っていた」

「聞いてたつてばね。器がどうか言つてた」

「あいつは、そんなくだらない物の為に、うちは一族を……」

シヤナは気が付いた。サスケの性格が以前と変わっていることを。深い悲しみによって写輪眼を開眼していたサスケは、間違いなくうちはの闇に囚われていた。

「お前も家族を奪われたんだろ？ なら、お前もイタチに」

「甘えるなつてばね。それはお前の復讐。私を勝手に巻き込むな」

イタチを殺す覚悟をしているサスケ。だが、そんな事に巻き込まれたくない。イタチに対する怒りはあろうとも。シヤナには彼に対する復讐心などない。

きつぱりと復讐の協力を断ったシヤナに、サスケは理解できないと怒鳴る。

「なぜだ!?! お前だつて両親を奪われ、兄を奪われたはずだ！ なのに、俺と同じ痛みを味わつたお前が何故イタチに復讐を考えない!! 敵を討とうとしない!!」

「興味がないからだつてばね」

「く……、もういい！ 復讐は俺だけです」

シヤナの目は、イタチへの復讐の意志がないと語っていた。サスケが知らないだけで、既に彼女なりのケリは付けていたからだ。

「復讐は、人生の目標にするにはあまりに些末なものよ」

「黙れ。俺は、一族の、父さん母さんの仇を討たなければいけない。そ



れが俺が生かされた訳だ」

復讐に取りつかれている。この復讐心を払うことはできないのだろうか。サスケには、普通の人生を歩ませたいと思うのは、何故だろうか。

愛するものの為に愛する家族を殺した兄、失った愛の為に愛する兄を殺す弟。なんと罪深い一族の宿命か。

愛があるからこそ、うちは一族は止まれない。失った後も、止まることはできない。それがどれだけ困難な道で、そこに救いはなくとも、進むしかない。

「……出来ると思うの？ イタチは強い。それをお前が？」

「どんなことをしてでも、俺は強くならなければいけない。……あいつを殺す」

（説得は無理か。私も狐と仮面の男を許すことは死んでも出来ないつてばね。こんな気持ちを抱えて生きるか……）

「……」

「何だつてばね？」

サスケは、拳を握りしめながらシヤナを見る。

「お前は生き残ったうちはで、唯一の写輪眼の持ち主だ……だから、俺に」

「強くなる協力をしてくれってことだつてばね？」

言いにくそうに言葉を選んでいるサスケ。今までなら無理やりにも修行に付き合えと言ってきたのに、変わってしまったようだ。

それに断る理由はない。イタチに託されたのだから。

それにサスケを鍛えなければいけないのは事実だった。サスケは生き残ったうちは一族の一人、この類稀な血継限界、写輪眼を求める人間は多い。政治的にも、物理的にも狙われるだろう。その中で生きていくには、自分を守るだけの力が必要だ。

「まずは体を治すつてばね」

「なら」

「いいよ。鍛えてやる。ただし、イタチを殺せる力じゃない。お前が生きていくための力だつてばね」

サスケは不満そうな顔をする。だが、シヤナに兄殺しを応援する気はない。

そういえば、サスケに伝える事があったと、話を切り替える。

「あと、私は今日から、引越す」

「引越す?」

「そう。元々うちの集落は閉鎖状態だからな。私は、先に引越すことになる。この住所だつてばね」

シヤナはサスケに住所の書かれた紙を渡す。

「サスケは知らない事だけど、私には弟がいる。その子と一緒に住むことになっている」

「は? 弟? どういうことだ?」

サスケの疑問に、シヤナは答えていく。元々、うちは一族ではなかった事。血は継いでいるが、うちはの家系出身ではない事。シスイの家には養子として貰われていたこと、両親はすでに死んでいる事、保護者が居なくなったことで弟と暮らすことが決まった事を。

彼からしては、青天の霹靂であり、シヤナの言葉を頭の中で整理するのは時間がかかった。

「だから、私は弟と暮らすんだつてばね」

「……そうか。わかった」

シヤナには、まだ家族がいる事を知り、自分と同じ孤独ではなかったのだと知るサスケ。だが、シヤナが弟の話をするときは、酷く嬉しそうだったため、素直に「よかったな」と相槌を打つ。

少しだけ弟と暮らす感想を語ってしまったシヤナは、サスケに対して不謹慎だったと口を閉じた。

時間が迫ってきたため、シヤナは医師に見つかる前に窓から帰ろうとする。

「そうだ、苗字も変わったつてばね。私は、うずまきシヤナ。今度からは、そう呼んでくれてばね」

そう言つて窓から飛び出し、瞬身を使ったのか、すぐに見えなくなる。そんなシヤナを窓越しに眺めていた。

少ししてから、サスケはシヤナの残した言葉を思い出した。

「うずまきっ… うずまきって…」

サスケは、その姓を持つ人間を知っていた。シヤナとの繋がりが、彼とその人物を繋ぐ大きな懸け橋になることに、まだ誰も気づいていなかった。

## 姓をうずまき、名をシヤナ

サスケの病室から新しい家に向かったシヤナ。

木の葉の住宅街にあるアパートの入り口に立った彼女は、三代目から預かった鍵を使って中に入る。

「……カップ麺、カップ麺、カップ麺……、え？」

シヤナは部屋の中を見れば、部屋は散らかっており、ごみ箱の中はカップラーメンと牛乳、パンの袋などしか入っていないかった。

あまりな食生活に絶句してしまう。掃除もあまりしないのか、空気がほこりっぽかった。

シヤナが窓を開けるとベランダは、いろんな種類の花や植物が植木鉢で育成されていた。部屋の割にガーデニングが丁寧にされたベランダ。

「植物が多い部屋だつてばね」

よく見れば部屋の中も鑑賞樹やが多く、棚の上にもサボテンが並べられていた。

「ここがナルトの部屋か」

一人暮らしさせられている弟。その生活習慣は、あんまりなものだった。冷蔵庫を見れば、野菜類も用意されているが手を出した形跡がない。野菜嫌いなのだろうか。部屋を眺めていると、壁にシヤナが昔渡した父ミナトのクナイが吊り下げられていた。

今は無き実家にもこのクナイが吊り下げられていたなど、懐かしくなる。

自分の大事にしていた忍具を大切にしてくれているようで、嬉しくなった。

「スーパで食べ物買ってくるつてばね」

「だああらああ!!」

新生活の為、弟の健康状態の為、外に出ようとした時、金髪の少年がシヤナにタックルを決める。タックルを受けて倒れたシヤナを少年が怒りながら縄で縛り、叫ぶ。

「この泥棒め！ つてあれ？」

「ふふふ、うふふふ、あはは」

縛り付けられたシヤナが煙となって消え、少年は唾然とする。そして、冷蔵庫の影に隠れていたシヤナがひよこつと現れる。

「変わり身だつてばね。不意打ちするのなら、叫んじやだめだつてばね」

「誰だつてばよ！ 人の家に勝手に……てばね？」

「覚えてないってばね？ 2年前そのクナイをあげただけだな」

大きな声をあげて攻撃してきた少年の行動にツボってしまったシヤナ。馬鹿にしてるわけではないが、天然な子だなとしみじみ思っていた。声の大きい所なんかは母さんにそっくりだと感じる。両親の子供であり、両親の特徴をしっかりと引き継いでいる存在。

「2年前つて……あ、その青い目」

「お」

シヤナの青い写輪眼を見つめる、同じく青い目の少年。シヤナの言葉に、どうやら過去を思い出しているようだった。

「あの時は、変化してたからね」

「じゃあ、あの時のつえー姉ちゃん！ え、でもなんでここに？」

シヤナは、少年の両肩を掴んで、目線を合わせる。少年はシヤナの目を見て、変な文様のある目だと感じた。

「今日から、私が君と一緒に暮らすことになったんだつてばね」

「一緒に？ なんてだつてばよ」

確かに突然言われても理解できないだろう。シヤナは言いたくて仕方なかった言葉を遂に、ついに口にしたのだった。

「信じられないと思うけど、私はね、あなたのお姉ちゃんなんだつてばね、ナルト」

「姉ちゃん？」

ナルトの問いにシヤナは頷く。ようやく伝えられた事実には、シヤナの目からはまた涙が流れる。ずっと言いたかった、迎えに行きたかった。約8年にも及ぶ待ちに待った姉としての再会。

伝えたいこと謝りたいことが多すぎて、思考が纏まらなくなってくる。

「ずっとずっと会いたかった。それに、ずっと一人にしてごめんつて

ばね」

「ほんとうに、ほんとうに、俺の姉ちゃんなのかってばよ？」

「本当に本当だってばね！ この日をどれだけ待ったことか……」

急に現れた姉の存在。今まで天涯孤独だと思っていたナルトに突然できた家族。ナルトは、シヤナに抱き締められる。またあの時のような温もりを感じた。

「しんじられないってばよ……」

「そうだってばね。仕方ないってばね」

シヤナだって逆ならそう感じるはずだ。シヤナにとっては待ちに待った再会でも、ナルトにとっては突然姉と名乗る女性が現れたに等しい。それは再会ではなく、ナルトの世界に対する侵略ともいえる。受け入れてもらえるとは思っていなかった。

だが伝えずにも居られなかった。

「だってさ、だったら、なんで、俺はずっと独りぼっちだったんだってばよ!? 辛いときも悲しいときもずっと一人で!! 一人で!! 皆に嫌われてる時だって!! なんでそんなときにいてくれなかったんだってばよ!!」

「……会いに行きたくても、いけなかったってばね」

言い訳だと分かっている。自分に怒っているナルトの気持ちは痛いくらいに分かる。孤独とは本当につらいのだ。

姉だと名乗ったシヤナは、ナルトの辛いときや苦しいときにそばにいなかった。一人他所の家で生活をしていただけだった。ナルトの苦しみを何一つ理解していなかった。

「そんなことしんじられるわけないってばよ!？」

「そうだよね、そうだってばね」

なんて重い言葉だろうか。ずっと想い続けていた弟に、認められないとは。だが甘んじて受け入れよう。この子の味わい続けた地獄の少しでも、受け入れよう。

「俺ってば、おれってば、ずっとずっと一人だと思ってたんだってばよ」

「ごめんねナルト。本当にごめんなさい」

シヤナは、感情を爆発させるナルトに謝り続ける。幼く、大人たちの都合で捻じ曲げられた人生。非はなかったというのに、ナルトの怒りに謝り続ける。

会いたいという気持ちが強くなるにつれ深くなっていたのが罪悪感だった。ナルトに対する罪悪感がシヤナを蝕んでいたといつても過言ではなかった。

ぼたぼたと大粒の涙を流し始めたナルトを受け止めるシヤナ。

「もう、よくわかんないってばよ……いっぱい言いたいことあるのに」  
「……」

「じゃ、姉ちゃんは俺の母ちゃんや父ちゃん知ってんのか？」

ナルトの質問。確かにそう思うのが普通だ。

だが、シヤナは三代目火影との取り決めに思い出し、「知らない」と答えた。

「なんでだってばよ？」

「私も小さかったから、覚えてないの。ただ、死んだということだけ教えられてきた」

嘘だ。二人の顔は一瞬たりとも忘れたことはない。ただ、三代目火影と交わした約定が、ナルトに情報を与える事を封じている。

【両親の事を決して話してはいけない】

【九尾の事を話してはいけない】

どちらも里の大人達と同じ規律だった。もしやぶれば、シヤナとナルトはまた離れ離れになる。それだけは嫌だった。だから誤魔化すしかない。

気に入くわない。けれど、九尾の事をナルトが知ったらどう思うか、ましてや父と母の仇を封印されているのが自分だと知ったらどうだろうか。だから言えない。今の幼いナルトには特に。

「ごめんね。私は何も知らないんだってばね」  
「そっか」

ひどく残念そうな顔をするナルトに、真実を告げたくなる。

「姉ちゃんの名前、なんていうんだってばよ」  
「？」

「俺ってば、本当の姉ちゃんってのよくわかんねえけど、2年前にも聞きたかったんだ、名前」

ナルトにそう言われてしまえば、シヤナに断る理由はない。

「うずまきシヤナ。それが私の名前だってばね」

「シヤナ、シヤナ姉ちゃんって呼べばいいのかってばよっ」

「何でもいいの。姉ちゃんでも、お姉さまでも、姉貴でも、好きに呼んでほしいってばね」

ナルトは考えた末に「姉ちゃんって呼ぶってばよ」と告げる。

シヤナもそれでいいと答えた。自分もナルトも話したい事がたくさんあり過ぎて、何から話していいかわからなくなる。

お互いに少しづつ、距離感を確かめる時間が出来た。

テーブルに座りながら、二人で好きなもの嫌いなものなど話し合った。後は、一緒に暮らす事についても、説明した。ナルトの部屋は一人暮らし用の家なので、正直言えば狭い。だから三代目がナルトの隣の部屋を借りてくれたこと。

本来なら壁をぶち抜いてもいいが、とりあえず隣の部屋どうしで住むということ。

「後ね、ナルトの部屋を見させて貰ったんだけど、カップ麺食べ過ぎで、栄養偏り過ぎだと思っただってばね」

「えー、そんなことねえってばよ」

「いや、ある。いきなりとは言わない。けど改善はするべきだってばね。なぜなら」

「なぜなら？」

「こんな生活してたら、一生チビだってばね」

シヤナの一言は、ナルトの人生に大きな落雷を落とした。チビという言葉、確かにアカデミーでもそう呼ばれる。明らかに他の生徒よりも背が低く、いつも見上げている。

それが一生続くのは嫌だった。

何より格好がつかない。ずっとチビのまま火影になった姿を思い



浮かべ、火影の衣装の裾をずりずりと擦って歩く姿は、みつともない。気にいつている女の子と並んだ時、子供のままの自分と大人になった彼女と並ぶ光景。

ダメ絶対！ がナルトの心の声だった。

「あ、あのさあのさ、まだ、背って伸びるのかってばよ」

「姉ちゃんは、野菜もしつかり食べてるから、背が高いほうだってばね。まだまだ間に合うってばね。けど、成長期に入るまでに改善していかないと」

「そんな〜」

少し脅し過ぎたかとシャナが反省する。

ご飯の話をしていると、二人ともお腹が空いてきた。

「お腹減ったってばね」

「カップ麺しかないってばよ」

「スーパ―に行く時間なかったし、夕飯食べに行こうか」

姉弟としての会話が楽しかった。二人ともそう感じていた。他愛のない会話でも、二人にとってはとっても重要な事だった。こうして過ごせる普通の幸せ、家族に話を聞いてもらえる喜び、頼って話してもらえる喜び、何物も捨てがたい。

二人は夕飯を食べに行くことになり、ナルトがいつも行っているラーメン屋に行くことになった。

シャナは近頃、里を歩いた経験がなくお店を知らなかったため、ナルトのおすすめを優先したのだった。

ラーメン屋に向かい歩いている間、ナルトの悪戯の武勇伝を語られるが、「帰ったら説教するってばね」という返答にナルトが固まる。

確かに面白いが、四代目の火影岩に落書きした件はしつかり叱ろうと思ったシャナ。保護者ということは、ナルトの悪戯の責任も取らなければいけないので、少し頭が痛かった。

「もうすぐだってばよ」

「誤魔化さないの」

少しナルトを叱りながらも、シャナは自分たちに向けられる視線を確認していた。ナルトには当然のように悪意の籠った視線を向ける

住人達。そのナルトと仲良くしているシャナの存在も、どうやら疎ましい様子だった。

(どこまでも腐った連中だつてばね)

せつかくの楽しい時間も、この目が台無しにしてくる。今ここで写輪眼の瞳術を使えばどうなるだろうか。其処ら中燃えている光景でも見せれば、蜘蛛の子を散らすように消えるだろうか。

(あーだめだめ。だめだつてばね。すぐに黒い考えになるのが私の悪い所だつてばね)

ここ数年で自分の悪い癖は理解していた。正しくはうちの血に宿る宿命といったところか。愛するものの事になったら、自分を見失うのだ。感情に支配され、体を突き動かす。

愛する者の敵を許せなくなり、破壊で解決しようとする。

母は自分を優しい子だと言ってくれた。でも自分の中にはどうしようもない獣がいる。

うちはの人間を間近で見えて知った事実だった。自分も同じように豹変する時があることを。そして、こんな感情を繰り返せば戻つてこれられないという危機感も。

「ここだつてばよ」

ナルトに連れられて入ったのは、ラーメン一樂というお店だった。すぐく食欲をくすぐる匂いが漂うラーメン屋には、若い女性店員と中年の店主が居た。

店に入ると女性店員がナルトとシャナを見て驚く。

(この人も、奴らと同じ……ん?)

「おとうさーん！ おとうさーん！ ナルト君が女の子連れてきたわよ!!」

ナルトに手を引かれるシャナを見て大騒ぎした。思っていた反応でなく、殺気が行き場を失う。そして女性店員の声に振り返った店主は、ナルトとシャナを見て、嬉しそうに笑う。

「お、ナルト。女連れとは、お前も案外隅に置けないな」

「え、違うつてばよー!」

「デートでラーメン食べに来たんでしょ? キャー、可愛いわね。ナ

ルト君、こういうお姉さんがタイプなのね」

二人の店員と店主は、シャナの顔を見ながらナルトに話しかける。ナルトは顔を真っ赤にして反論しようとするが、姉だというのが照れ臭いのか言葉になっていない。

「シャナ姉ちゃんは、俺の、俺の姉ちゃんなんだってばよ!!」

「ん？ 姉ちゃん？ それって姉弟の姉ちゃん？」

「そうだってばよ。おっちゃん、俺とんこつ味噌チャーシューの大盛り」

席についたナルトは店主に注文をする。拗ねて頬を膨らませたナルトに「悪い悪い、チャーシュー一枚おまけするからすねんなよ」と謝っていた。

女性店員もお冷を出してくれ、シャナに注文を聞いてくる。

「ナルト君にこんなお姉さんがいたなんて初耳ね。お姉さん注文どうします？」

「あー、えっと、野菜ラーメンの大盛りで」

ふとメニューを見て、温野菜の好きなシャナはそれを頼んだ。注文を受けた店主は「お姉ちゃんのほうもナルトおまけしとくぜ」とサービスしてくれる。

この二人は、ナルトを好意的に受け入れてくれている。常連だからなのかとも思うが、ナルトが楽しそうに会話している様子から、本当にこの店主の人柄に惹かれているのだと分かった。

木ノ葉の里でナルトに好意的な人は初めて見た。ごく僅かしかないが、弟を認めてくれる大人の存在にシャナの胸もあつたかくなる。

そして、ラーメンが2つ出てきて、それを二人で食べる姉弟。店主たちもシャナの事に興味があるのか、いくらか質問される。

離れたところに暮らしていて今日から、一緒に住むと伝えると店主が言った。

「そうか。俺が言うのも変だけど、ナルトの奴があんなに楽しそうなの久々に見たぜ。ちよつと問題児だけど、根は良いやつだ。仲良くしてやってくれ」

「もう、お父さん。でも、二人でまた食べに来てくれたらうれしいです。サービスもしますよ」

二人の言葉にナルトがまた照れながら、ラーメンを啜っている。シヤナも「はい。素敵なお店なんで、また食べに来るってばね」と返して、美味しいラーメンを食べた。

二人そろってお腹いっぱいになり、帰宅する。

そして、寝る時間になったシヤナは、ナルトに「おやすみ」と伝えて、自分の部屋へと帰っていった。その際ナルトも「おやすみだつてばよ」とナイトキャップを被った姿で返した。

ちなみに、お風呂のタイミングで「一緒に入ろうってばね」というシヤナの御願いは、思春期の男の子であるナルトに却下された。

(二回くらい一緒に入りたかったってばね)

頭の中で赤ん坊のナルトの姿から、更新されていないシヤナだった。

この日、うずまき姉弟は、家族となったのだった。

## 招集

ナルトとの共同生活を始めたシャナ。部屋は別とはいえ、ナルトの家事能力の低さが、誰も彼の世話をしなかったことから起因すると考え、家事は主に担当。

アカデミーに行っている間にナルトの部屋を掃除していた。

「ふう、やっと終わりだったばね」

少しナルトにかまい過ぎて、怒られることも何度かあった。逆にナルトのだらしない生活に注意することも多く、共同生活は、可もなく不可もなくといったところだった。

未だに風呂に入ろうと誘うが、断られる。男女の機微や羞恥心に関しては、全く成長していないシャナ。それこそ3歳で止まっている可能性がある。

「ん？」

シャナは小休止していると、足に小さな巻き物を携えた伝書鳩が窓から入ってくる。

「招集？」

伝書鳩から渡された文章は、三代目からの招集命令だった。一応書類上、下忍ということになっているシャナ。彼女に集合場所と時間を伝えた伝書鳩は、再び空に飛び立っていく。

「最低限下忍として、生きるしかないってばね……」

忍者であることが最低条件の生活。面倒には違いないが、行くしかない。モチベーションが低く、しぶしぶゴーグルを額に付け、家を飛び出したシャナ。木ノ葉の里の屋根伝いに火影の執務室に向かう。

火影の執務室の窓から侵入すると、机に三代目火影が座りながら、煙管をふかしていた。

「はやかっただな。次は、入り口から入ってくるように」

「嫌だつてばね」

なぜ従う必要があると言わんばかりのシャナ。三代目火影は、里の最高権力者ではあるのだが、シャナは信用していない。故に敬いもしない。

シヤナが部屋に目を向ければ、シヤナと三代目以外にも、2人知らない人間が居た。

片方は、肌が白く長い茶色の髪を左側だけ三つ編みにして、明るい茶色の目を持った少女。少し病弱そうに見える。

もう片方は、鼻と口の周り以外はマスクで覆われた少年。髪の毛の色が黒であること以外はあまり姿が見えない。

両者ともに、シヤナと同じ10歳前後であることを除けば、共通点がない。

少女は部屋の隅で座り込んでおり、少年は腕を組みながらシヤナの方をマスク越しに見ている。

「そろそろ、説明を始めるかの」

「はい、火影様」

「……はい」

「帰っていいってばね？」

一人だけやる気のないシヤナ。先見の写輪眼は使っていないが、酷くめんどくさいことになる。シヤナの言葉を無視して三代目火影は続ける。

「おぬしら三人は、忍者アカデミーに理由があつて通えなかつた者たちじゃ」

「……」

三代目の言葉に、少年は頷き、少女は不安そうな顔で話を聞いている。シヤナは「それをお前が言うのかつてばね」と心の中で愚痴る。男の方はまじめで、女の方は気弱、何の集まりだと思つていた。

「今、木ノ葉の里は、優秀な忍を求めておる。そのためのアカデミーでもあるが、アカデミーが全てではない。いろいろと協議もあったが、早い話がお前達三人でスリーマンセルを組んでもらうつもりじゃ」

「どう言うことですか？」

おずおずと手を挙げた少女は、三代目を怖がるように、静かに尋ねる。

「確定ではないが、ある試験を乗り越えた場合、お前達を特例で下忍とすることに決まったのじゃ」

「そんな特例があるんですか火影様」

「お前達自身らが知るように、それぞれ特異な力を持つておるのがお前達じゃ。その才能を環境が潰してしまうのは、もったいないと思つてな」

少年の質問に三代目火影は、そう答える。シヤナは思い当たる節が多すぎる。先見の写輪眼、粒遁など特殊な技能を持っている。だがこの二人も何かを持っているということだろうか。

「詳しくは、試験官である彼に聞いておけ」

「やあ」

三代目の声と共に執務室の扉から、木ノ葉のジャケットを着た背の高い男性が一人現れる。

男性は、三代目に頭を下げた後、「付いてきてくれるかな」と言い、そう言つて3人を引き連れて、木ノ葉の里の修練場へ足を運んだ。

そして、修練場に足を運んだ4人は、それぞれ用意されていた椅子に腰かけ向き合つていた。

「まずは自己紹介から行こうか。僕の名前は、ヤマトと呼んでくれ。特定の一族出身ではないよ」

「ヤマト先生ですか？」

「うん。今日の試験を担当することになった。元暗部で今は上忍だよ」

全員がヤマトの経歴を聞き、少し驚く。

暗部というのは、文字通り暗殺専門の部隊であり、エリート忍者の集まり。そこ出身の忍者であるこの若い忍は、それ相応の実力者ということだろう。

「好きなものは、クルミ。趣味は、建築関係の本を読むことかな。では、君」

「あ、はい。えーと、鞍馬八雲です。鞍馬一族の出身で、好きなものは、果物。趣味は、絵を描くことです」

「八雲だね。よろしく。じゃ次は君だ」

「俺は、油女トルネ。油女一族。好きなものは、天ぷら。趣味は、昆虫

採集」

「シクロさんのお子さんだね。よろしく」

「はい」

二人の紹介が終わると。3人の目がシヤナに向けられる。特にヤマトとトルネの目は、シヤナを警戒する色が浮かんでいた。シヤナの情報を持っているであろうヤマトはわかるが、トルネに警戒される理由がわからない。

ただ黙っているわけにはいかないので、シヤナも渋々自己紹介を始めた。

「うずまきシヤナ。元うちは一族出身、好物は、温野菜。趣味は、……新術開発だつてばね」

うちは一族と言った瞬間、八雲が驚いていた。うちはの生き残りの一人ということに驚いていたのだろうか。そういえば、最近趣味がなかったとシヤナは考えていた。

ナルトは植物の水やりが趣味だと言っていたし、何か始めるかどのんきに考えていた。

全員の自己紹介が終わったところで、ヤマトが話を切り出した。

「さて、自己紹介も済んだね。そろそろ試験の内容を教えるよ。試験は、僕の持っているこの鈴。これを君らの中の誰かが手に入れば、合格だよ。逆に不合格なら、二度と忍者にはなれないと思つておいて」

ヤマトは懐から金色の鈴を取り出し、それを狙つて3人に挑むよう告げる。

「僕は、しばらく離れているから、作戦タイムなり、罠を設置するなり好きにしてい」

「武器も使用するんですか？」

「そうだよ、殺す気で来て構わない。もし僕が死んだら、それでも試験は合格だからね」

「……了解」

「そんな時間、いらないつてばね」

鈴を取ればいいなら、さっさと取ると瞬身の術でヤマトに襲い掛か



る。写輪眼でヤマトの隙を見逃さなかったシヤナは、粒遁を纏わせたクナイでヤマトを攻撃。ガード不能の一撃必殺、その手ごと鈴を貰おうとした。

「なにより、実力を過小評価されたことに腹が立ったからだ。」

「うん、いい動きだね。けれど、まだ試験開始してないよ」

「?」へえ、木遁だつてばね」

シヤナが切り裂いたヤマトは、木材のような材質になり、シヤナの手を枝分かれした木が拘束する。そして、地面から生えた木から現れたヤマト。

信じられない事に、シヤナはこれが幻術でないと看破している。先見の写輪眼は使っていない状態とはいえ、写輪眼のシヤナでも見分けのつかない分身、そしてこの木を用いた拘束術。間違いなく初代火影のみが使えた木遁だと分かる。

トルネと八雲も警戒して後ろに飛び、距離を取ってヤマトの様子をうかがう。

腕を拘束されたシヤナは、自分の背後に立つヤマトを青い写輪眼で睨む。

「そっだよ。木遁だ。これで多少は、認めてもらえたかな? 僕が試験官にふさわしい実力だよ」

「いいってばね。ぶつとばしてやる」

自分を拘束する木を、もう片方の手で握った粒遁の刃で切ったシヤナは、刃をヤマトに向けて「面白くなってきたってばね」と笑う。

「よろしい。二人もいいね」

「はい」

「了解した」

「じゃ、一時間後に僕が此処に来たら開始だよ」

うずまきシヤナ、鞍馬八雲、油女トルネの三人は、ヤマトが消えると、少しだけ距離感があったが、歩み寄る事を始めた八雲のおかげで、コミュニケーションを取り始めたのだった。

## 下忍試験

試験時間になり、ヤマトが修練場に戻ると3人はいなかった。完全に気配を消しており、うまく隠れている。

(この地面の感じ、罨も用意してるね)

姿勢を低く地面に手を当て、周囲を探るヤマト。

「さて、そろそろ探しに行こうかな」

「火遁・鳳仙花の術!!」

「ええ?」

潜伏している三人を探そうとしたヤマトだったが、突然飛び出してきたシャナが火遁の術を発動。ヤマトの周囲を炎が包み込む。ヤマト本人ではなく、ヤマトを囲むように炎が燃え上がり、その輪の中にシャナが入ってくる。

タイマンの形になったヤマトとシャナ。シャナは両手に持ったクナイから粒遁の刃を伸ばして、二刀流の構えを取る。ついでのと写輪眼で幻術を掛けようとするが、ヤマトはシャナの目を見ない。

写輪眼対策はしているようで、安心するシャナ。

「君さ。ちよつと変わってるよね。なんていうのか、大人しい子かと思ってたのに、やり方が豪快過ぎて」

「面倒事が嫌いなんだってばね」

(チャクラ刀か。この年で使いこなす子は珍しいな。それにあの切れ味、斬るといふより焼き切ってるんだね)

自分の木遁を切り裂いた切れ味は、人体ならたやすくスライスするだろう。

暗部の先輩であるカカシから聞いていた情報もあり、シャナ相手に油断はできない。だが本気で行くことも出来ない。

「木遁の術」

ヤマトの周囲から木材のような木が生え、それらが急成長し、シャナ目掛けて襲い掛かる。シャナは、粒遁の刃で迫りくる木遁の術を斬っていく。だが質量で押してくる無数の木に追いやられ、横に躲

す。

「木遁・黙殺縛りの術」

「粒遁・天輪」

ヤマトが先に細い糸のような木でシャナを拘束しようとするが、シャナも粒遁の粒子砲を頭上で溜め、ヤマト目掛けて発射する。発射された粒子砲がヤマトの胴体を消し飛ばすが、それは木遁の分身。バラバラになった木遁分身から枝が生え、シャナを捕まえる。

木遁分身を出した本体は、自分の出した枝を足場に木遁のコロシアムから脱走する。

「写輪眼でも見切れないってばね」

木遁分身は厄介だなと感じるシャナ。枝を再び粒遁の刃で切断し、火遁のコロシアムから抜け出したヤマトを追う。だが足止めにも木遁の檻が作られ、閉じ込められる。完全に隙間なく密閉された暗闇で、青い写輪眼だけが光る。

足止めがうますぎるだろうと、シャナがいら立った。

（あの術の威力、僕が分身じゃなかったら、肉片も残らなそうだ）

シャナの術の威力はどれも一撃必殺級のもの。故に大味と言わざるを得ないが、最大限警戒しなければいけない。何故ならシャナは、鈴を取るという目標を忘れていそうだからだ。

（絶対僕の命を取りに来てるよな。合格なんて言うんじゃなかった）

慌てて森に入り姿をくらませようと考えた時。森の方からクナイと手裏剣10本が飛んできて、ヤマトは立ち止った後に跳んで回避すると、森からトルネが現れる。

「君も出てくるのか」

「先生は殺す気で来いと言いました。だから、俺は俺の出来る事をします」

トルネが自分の手袋を外す。その掌は、紫に染まっており、通常の皮膚とは言い難かった。

「動けなくなったら抵抗しないでくれ。解毒しなければ死ぬ」

トルネが体術の構えをする。そして、彼の皮膚が手から腕まで紫に染まっていく。それは、油女一族で彼だけが持つ特異な虫。燐壞虫と

いい、ナノサイズに近い毒虫であり、ひとたび生物が触れれば、瞬時に感染して激痛と共に全身の細胞を破壊する術。

つまり彼の体術の一つ一つが必殺の一撃となりうるのだ。

「君も鈴じゃなくて命狙ってくるの？ どうなってるんだこの班」

「どうしても忍者にならなければいけない理由が出来た。覚悟」

トルネが飛び出す。速度は平均より早い程度で、アカデミーに通っていない割には、いい身のこなしだと感心する。だが一撃も貰えない以上、手加減はできない。全力で相手するしかない。

「はあー！」

「おっと」

何度も拳を繰り出すトルネ。ヤマトはすべてを見切り、当たらないように回避。

足をかけ、体勢を崩したトルネの首筋に手刀をお見舞いしようとするが、当たる直前に彼の首も紫に染まる。

ギリギリで触れなかったヤマト。トルネは体勢を立て直し、息を整える。手のひら以外に虫を広げるには、チャクラの消耗が激しいらしく、息が乱れるのだ。

「はあはあ、まるで当たらない」

「はは、見るからにヤバそうだからね。でも今のガードはうまいと思うよ。ただ近付けないとなると、忍術しかないね。木遁の、おっと!」

トルネを木遁で拘束するために印を結ぶヤマト。しかし、そのタイミングでクナイが頭目掛けて飛んできたため、木遁を防御に使用。角材の盾を作り出してクナイを防ぐ。

（八雲だな。援護に徹してるのか。確かに体力に問題があると資料に書いてたからな。けど、あの子にはあれがあるからな。まあ近距離でなければ効果の薄い術だと聞いているから、森から出てこない限りは安全か）

シヤナ、トルネ、八雲の資料に目を通していたヤマトに油断はない。ただ問題があるとすれば一つだった。

（全員命取りに来てるな、これ。どうする、本気で殺しに来てるよこの三人）

本来は、模擬戦の中でチームワークを見せてもらい、協調性やそれぞれの特質を見せてもらう予定だったのに、誰も鈴を狙わず命しか狙ってこない。普通は鈴を取れば合格なのだから、上忍相手を殺すより、鈴を狙うのが定石だろう。

なのに、三人共鈴の事を忘れているかのように、急所狙いが続く。

「八雲！ 援護は任せる」

前線で戦うと宣言したトルネ。返事はないが、森の中で忍具を構えているであろう八雲。そして、木遁の檻を切り裂いて脱出したシャナが全身から青い光を迸らせながら合流する。

「あれ？ カウンターの毒蟲はどうなったんだってばね」

「直前でばれた。すまない」

「上忍は、伊達じゃないってことだってばね。私も一緒に戦う」

シャナは、片手に粒遁の刃を迸らせたクナイを持って、トルネの横に並ぶ。だがトルネが心配そうにシャナを見る。それは彼の戦闘スタイルが仲間との連携に向いていない故だろう。触れれば感染する毒虫は、不慮の事故で味方に被害を与える場合がある。

「今からは、私は無敵だってばね。好きなように動け、私が合わせる」

「本当だな。いくぞ」

トルネとシャナが同時に飛び出す。それに示し合わせたように森から手裏剣がヤマトに向かう。手裏剣に追いつくように急加速したシャナが、手裏剣を受け止めていた木遁の壁を両断。後ろに飛んでいたヤマトに肉薄する。

何度も刃を振うが、ヤマトが攻撃を見て回避する。シャナは、足を集中的に狙う。そのせいで動きが鈍くなったヤマトに追いついてきたトルネが拳を振るう。

「はあ!!」

「危ない危ない」

トルネの拳を回避できないと知ったヤマトは、自分の腕を木遁で木に変え、木のグローブでトルネの拳を受け止める。直接触らなければ、防げると踏んだヤマトだったが。

「木遁は、生命を生み出す術だったな、シヤナ」

「そう。私の目がそう判断した」

「嘘だろ!？」

トルネの拳の触れた木が、彼の毒蟲に感染。徐々にヤマトの体へ伸びていき、ヤマトはたまらず手を木から切り離す。トルネの毒に感染した木遁の術は、紫に染まり、そして朽ちていく。

木遁の術にまで感染する毒虫の威力に、ヤマトの顔がこわばる。

彼の想像以上に攻撃的な術の使い手が、目の前に二人いる。片方は火力が非常に高く、もう片方は毒性が非常に強い。

「曇みかけるぞ」

「わかつたってばね」

再び二人が飛び出す。ヤマトは接近させてなるものかと木遁の術を発動。二人を襲うように地面から角材が生え、彼らに襲い掛かっていく。無数の木材を前に止まらないトルネ。彼の前を走るシヤナが、次から次にチャクラ刀で木材を切断していく。

シヤナの取りこぼした木は、トルネが殴りつけ、無効化。トルネの背中を足場にシヤナが飛び上がり、トルネは姿勢を低くかける。地面で合流した二人は、木々を互いにカバーしながら、突き進んでいく。

(この二人初対面だよ。連携の息が合い過ぎてる。……シヤナが宣言通り、合わせてるのか)

徐々に距離を詰めてくる二人に、大人げないと思いつつも、ヤマトも本気で迎撃する。

「木遁の術!」

30を超える木々が、シヤナとトルネを襲うが、突然二人の姿が煙のように消える。

(何?)

煙のように消えた二人は、突然、ヤマトの背後から現れる。

「どうやって」

しかし、自分の体から木を飛び出させたヤマト。奇襲のつもりだった攻撃だったが、再び当たる直前で存在が掻き消える。状況が理解できず、木遁の術で自分を覆い隠し、防御に徹しようとする。

だが、ヤマトが発動した木遁の術は、ヤマトの足元から生えた木々が彼の両手両足を拘束するように成長する。

自分の術に身動きを縛られたヤマト。幻覚にしては、リアルすぎ、実際に木に縛られているように感じる。

（これは幻術か。木の感触や香りまでするのに、いや、痛みまで）

成長を続ける木遁に、体中が締め上げられ、骨がきしむ。その痛みが本物のように錯覚している。自分を拘束する木をどうにかしようと全身から木遁の術を発動。体から生えた木々が拘束する幻の木遁をはねのけ、拘束から抜け出すことに成功する。

だが、今度は地面が割れ、巨大な地割れとなってヤマトの体は落下する。

実際に浮遊感を感じて、慌てて体勢を立て直そうとする。

木を伸ばして地割れでできた谷に橋を架け、体勢を整える。だがこれが幻術か土遁か判別が出来ず、すぐに幻術返しを行う。

「解！ え？」

自分のチャクラを乱し、このひどく精巧な幻術から抜け出す事が出来た。

「その命貰うってばね」

「覚悟！」

どうか幻術から抜け出せたヤマトだったが、地割れはやはり幻術で、地面に横たわったヤマトは自分が出した木で地面に縫い付けられ、身動きがとれない。

その状況下で、目に入ったのは、先程、ヤマトの木遁分身を木っ端微塵にしたチャクラ粒子砲をチャージしている体勢のシヤナ。トルネは、毒手でヤマトの喉を掴もうとしている。

自分の木遁で身動きの取れないヤマトは、どうあっても死んでしまおうだろう。木遁でガードしてもトルネの毒蟲に感染する。

「まいった！ 参った、降参する！」

ヤマトが発動した。降参宣言を聞いたトルネは、手袋を装着して毒虫を封じる。シヤナは、降参したヤマト目掛けて粒遁・天輪を発射しようとして、トルネに冷静に止められる。

「なぜ、撃とうとしてるんだ」

「どうせ木遁分身だつてばね」

「本体だよ！」

シヤナは、写輪眼の瞳力でも見切れない木遁分身に、プライドを傷付けられた。負けず嫌いのシヤナは、何度か木遁分身を見切ろうとしたが見切れず、腹が立っていたのだ。

ヤマトは腹いせに殺されてはかなわないと、本体だと主張する。

トルネも流石に降参した後に、反撃はないだろうとシヤナを止める。

「試験は合格だよ。全くもう、とんだ目にあつたよ」

自分の木遁の術から抜け出したヤマトは、肩を落としながら地面に座る。くたびれたと言わんばかりの様子に、シヤナも流石に術を解除した。

落ち着いたヤマトは、二人を見て、八雲が居ない事に気が付く。

「そういえば、八雲はどこにいるんだい？ さっきの幻術も、何処からかけたんだか」

「ここです。シヤナちゃん、トルネ君、助けて、崩れてきたの!」

八雲の声が聞こえた先は、先程シヤナを閉じ込めるために作った木遁の檻だった。八雲は、ヤマトのチャクラがなくなり崩れそうになっている檻に閉じ込められていた。

呼ばれた二人は、慌てて八雲の救助活動を始め、すぐに彼女を救助することに思考する。

助けられた八雲、助けたシヤナとトルネは、ヤマトに質問攻めにあつていた。

「あの檻に入ってたのかい？」

「はい。シヤナちゃんが反対側にも穴をあけて、私を設置しました」

「設置？」

あんまりな言い方にヤマトが疑問を覚えるが、それにはシヤナが答えた。

「八雲の幻術は、相手との距離感が大事だつてばね。だから八雲をこの場所に隠して、いつでも幻術にかける準備をしてもらった。後は影



分身を森に配置して、八雲が森にいると勘違いさせたんだってばね」  
「俺は、シヤナと一緒に八雲の幻術までの時間稼ぎと、ヤマト先生の足止めをしてたんだ」

「即席でよく考えたね。そんな戦術」

八雲の幻術でヤマトを封じる作戦。それは八雲の持つ幻術が、通常の幻術とは違うから選ばれた選択肢だった。八雲の幻術は、脳を支配し、五感全てを欺くことが出来るというものだった。

鞍馬一族自体が幻術に突出した一族だったが、八雲のそれは別次元であり、彼女の幻術内で怪我をすれば、脳が騙され、実際に痛みと機能不全を思う。炎に包まれれば、体に火傷が発生し、焼け死ぬこともある。心臓を突き刺されれば、実際に心臓が突き刺された際と同じ症状が起こる。

つまり幻術で人が殺せるのだ。

今回はそれを採用したのだ。唯一の欠点は、幻術使いの八雲との距離が近いほど、効果が強まるが離れば効果が弱まる場所である。

「確かに僕は、八雲は森にいるから大丈夫だと思ってたけど、実際は傍にいたから、術中に嵌められたってことか。見事な陽動だったよ」

「私は、本気で首狙ってたってばね」

「やっぱりそうだよ。君だけ攻撃が殺意に満ちてたよ。よく考えたら森からの手裏剣も君じゃないか!？」

実をいうと、シヤナの提案で、八雲も幻術でヤマトを最悪死亡、再起不能、にするつもりだったので、3人共鈴なんか狙っていなかったのは内緒である。

生物兵器並みの毒虫使い、五感支配の幻術使い、写輪眼と血継淘汰使いの3人組。バラバラながら、恐ろしいスキルを持った彼らが、意外と良いチームワークを発揮している事に、ヤマトは認めるしかなかった。

「君たち、全員合格だよ。後日また、ミーティングするよ」

この日より、隊長ヤマト。うずまきシヤナ、油女トルネ、鞍馬八雲を班員とする。第四班。通称、死の班と呼ばれるフォーマンセルが誕

生した。

ヤマトが報告の為に、一度火影の元に向かうと言っていたので、班員の三人は、帰り道を一緒にしたのだった。

## 初めての仲間

下忍昇格試験の準備期間。

ヤマトに置いて行かれた3人は、互いに気まずい空気を醸し出していた。

全員初対面な上に、全員がアカデミーなどの施設に通えず、コミュニケーションの取り方を測りかねていた。

「……面倒な試験だつてばね」

「確かにな」

シャナのつぶやきにトルネが同意する。彼もこの試験が面倒だと感じていた。

「でも、これに受ければ、忍者になれるんだよね」

トルネとシャナがめんどくさそうにしている中、八雲だけが真剣な表情で、試験について考えていた。

彼女の追い詰められたような表情に、シャナとトルネは「偉くやる気だな（だつてばね）」と口に出す。

「だつて、私にはこれしかないから……これに受からないと……受からないと」

八雲のあまりに必死な様子に座つて話をしようとトルネが提案。軽い気持ちで考えていたシャナは、彼女の様子に「まあ落ち着くつてばね」と宥める。

緊張のあまり顔色の悪くなる少女に自販機から飲み物を買つてきたトルネ。

飲み物を飲んで落ち着いた八雲は、どうしても試験に受かりたい理由を話し始めた。

「私は、鞍馬一族の為に、忍者になりたいの」

「鞍馬一族つて、聞いたことないつてばね」

「……そう」

「俺はあるぞ。幻術に特化した一族だったか」

「あ、ごめんつてばね」

シャナのずばずばとした物言いに八雲は暗い表情になるが、トルネ

がすかさずフオローを入れる。

八雲もシャナに悪気がないと分かったのか「ううん、いいの」と答える。

八雲の一族は、元々は名家であり、多くの優秀な忍を輩出してきた。だが昨今になり一族から上忍を輩出することが出来なくなり、徐々に衰退していったという。だがそんな中で、一族史上最強の幻術を持った八雲が生まれた。

一族は八雲に一族の未来を懸けるようになったが、八雲は体が弱かった。

体力に難があり、アカデミーに入学できなかった。現在の当主が、八雲を幻術使いにするために、三代目火影に掛け合った。

そこで専門教師をつけてもらえたが、八雲は忍に向いていないと言われた。

「でも、そんなときに今回のお話があったの」

特別に下忍になれる試験。八雲には文字通りこれが最後のチャンスののだ。一族の期待を背負いながらも、応えられなかった。だから、何をしてでも受からなければいけない。しかし、その気負いが彼女の体調を悪化させる結果につながる。

「顔色が悪い。少し落ち着け」

「先生を殺しちゃえば、合格だってばね。私がやってあげるから、心配しないでいい」

鈴の存在が頭から消えているシャナ。冗談抜きで、仕留めようと思っていた。先見の写輪眼を使った4分間なら問題ない。あまりに気負い過ぎている八雲の様子に、少し同情もしていた。

彼女の話は嘘ではなく、藁にも縋る思いで此処に来たのは承知した。

「こ、殺しちゃだめじゃないかな?」

「合格するためには、殺すしかないってばね。相手も覚悟の上でああいったってばね」

鈴の事は忘れてしているシャナ。ふざけて居る訳ではなく、本気でそう発言している。

「そうなの、かな（どうすれば幻術にかけて、仕留められるんだろう）」  
折れる八雲。既に頭の中でどうやれば仕留められるか思案していた。常識のある彼女だが、一族復興のために非常識に身を置くことに躊躇はなかった。

そして、アカデミーに通えなかった彼女にとって、初めての同年齢のシヤナの言葉は、刺激的だった。

その言葉が正しく思えてしまう程に。

「だが、実際どうするつもりだ。相手は上忍。命のやり取りとなれば一筋縄ではいかない（合格条件は他にもあるのだがな）」

「私なら勝てるってばね」

「もしそうだったとしても、お前しか合格にならない場合もある」

トルネの指摘に、シヤナは少し考えた。確かに彼の言う通り、シヤナしか合格しない場合、八雲の願いは叶わない。それは少し可愛そうな気がした。

「仮に俺や八雲が一人でやった場合も、同様の可能性がある」

「……私は、誰かと組んだことないってばね。足手纏いが居れば、動きにくくなる」

「俺も同じだ。そして俺の術は、仲間との連携に向いていない」

シヤナは同年代の子供と話したことすらない。そして、誰かと一緒に戦うなど、考えたこともなかった。集団戦闘のノウハウがないシヤナは、戦力の大幅な低下を覚悟しなければいけない。

そしてトルネも同じだった。誰かと組む経験は皆無。そして彼の持つ毒虫の術は、味方を巻き込む可能性があり、大変危険だった。

二人とも共闘は望まない。だが、二人は自然と、3人で合格する方法に思考がシフトしている。自分一人さえ受ければいいという発想が出ないのは、八雲の話を聞いた事もあるが、どちらも面倒見が良く、優しい所がある故。

当然だが、八雲にも共闘の経験などない。

「全員で合格するなら、共闘は必須」

「でも、皆共闘は苦手っぽいってばね」

「とりあえず、皆で何が出来るか話し合ってみる？」

八雲の提案。それは当然と言えば当然だろう。お互いの手札を知らなければ共闘などできない。三代目の言っていた特異な力というのが、互いに気になりはした。

「そうだな。まずは俺から話そう」

トルネは自分の毒虫について、説明した。その毒性と即効性、威力などを傍にあった木で実演する。結果は、二人の少女からの拍手だった。

素直にすごい術だと感心した二人に拍手されたトルネは、意外な反応に驚いている。

本来なら気味悪がられ、避けられる類の能力。差別を受けてしかるべきだった術だが、二人はすんなり戦力として受け入れていた。

何故かと言え、二人の少女も彼に負けず劣らずの、特異な力を持っていたからだ。

「私は、まず写輪眼を持つてらばね」

「青い写輪眼？ 俺の知っているのは赤い写輪眼だ」

「私は、見たことはないけど、青いんだね」

自分の目をよく見ろと指示し、色は違うが写輪眼だと説明する。体術、幻術、忍術を跳ね返すと言われる瞳術を持っており、もう一つ能力があると説明する。

未来視について、教えようかと迷ったシャナだが、これまでの経験から信じてもらえないと思い避けた。

「もう一つは、チャクラを粒子状にして、好きに操れるってばね」

「粒子？」

「血継限界なのか？」

百聞は一見に如かずだと、シャナは術の実演をする。両掌を合わせ粒遁・天輪を発動する。頭上にチャージされたチャクラ粒子は、集束し雷遁で加速された状態で発射され、膨大な熱と運動エネルギーを持って空に向かって発射された。

空に向かって発射した粒子砲は、空中で空気に触れながら拡散。何も壊すことなく霧散する。

だが、その速度と威力は、見ただけでわかる物であり、八雲が凄

と拍手し、トルネも冷や汗をかきながらシヤナを見ていた。

「写輪眼と粒遁が私の手札だつてばね」

「粒遁、恐ろしい威力だな」

「威力を上げるには、時間が必要だつてばね。即席だと、十分の一位になるつてばね」

毒虫、写輪眼、粒遁、手札がそろい始め、最後に残された八雲に目が向く。

八雲は、少し緊張しながらも両手で印を組み、自分の能力を披露する。

「魔幻・奈落の術！」

「な!？」

「ええ!？」

八雲の術と共に、トルネとシヤナは、急に空に体が打ち上げられた後に、地面にぽっかり空いた底の見えない大穴に落下を始める。幻術だというのはわかってはいるが、浮遊感や落下最中の風を肌に感じ、本当に落ちていくように感じる。

そして、奈落の底に落ち続け、底が見えた時、そこには無数の剣がこちらを迎えていた。

これに刺さったら死ぬ。そう感じ体を動かすが、いつの間にか縄で縛られており、身動きできない。体に食い込む縄の感触ときつく縛られた痛みは、本物のようだった。

遂におしまいかと思った時、突然の上昇気流に襲われ、再び宙に浮きあがる。トルネは、再び地面に落下する感覚を味わい、悲鳴をあげそうになる。

(万華鏡写輪眼！)

一方シヤナは、写輪眼でも看破できない幻術に、畏れを感じた。仕組みは謎だが、この幻術は普通の幻術ではない。そう思いイタチの時と同じく、最強の写輪眼を持って抵抗。

万華鏡写輪眼になった事で、ようやく幻術世界での主導権を取りもどした。奈落の底に落下する最中に、巨大な阿修羅像を召喚し、6本の腕で大穴の壁に突っ張るようにして体を支えた。それはシヤナ自

身が自分に幻術を掛けたからできた芸当だった。

幻術の中で幻術を使用し、幻術世界で主導権争いが起こり、シャナの瞳力が勝利する。

シャナは谷の底を万華鏡写輪眼で覗くと、そこには黒い鬼のような怪物が見えた。

(何あれ?)

シャナのそんな疑問を他所に、幻術が解除された。

「うあああああ」

幻術を自力で解除したシャナ。彼女が見た光景は、全力で集中して幻術を掛けていた八雲と幻術の世界で落下し続けるトルネだった。トルネはその場で苦しみながら声をあげていた。だが体は実際に縛られているように身動き一つできないでいた。

シャナはトルネが哀れになり、八雲の肩を叩いた。

「は、え? あ、シャナちゃん」

「すごい幻術だったってばね。けどトルネがヤバいってばね」

「集中し過ぎた。ごめんトルネ君!!」

すぐに八雲が術を解除すれば、トルネが全身から汗をかきながら、吐きそうになっていた。幻術にしては、強力過ぎるそれ。精神が限界まで追い詰められたトルネの背中を摩っている八雲。やった本人が心配しているとシャナは思った。

恐ろしい幻術もさることながら、シャナはトルネの腕に縄の跡があるのを見た。

「え、縄は、幻術じゃないのかってばね?」

「く、なに、何故縛られた跡が」

トルネも自分の体中が鬱血しているのに気が付いた。それは縄に縛られた箇所だった。

「私の幻術は、五感を操れるの」

八雲の説明を受け、彼女の幻術の凶悪性は、二人に強く印象付けられた。特にトルネは二度と食らいたくないと懇願していた。脳を騙し、実際に痛覚を与え、体にも傷を負わせる。幻術を直接攻撃の領域に特化させたのが八雲なのだ。



精神攻撃と身体攻撃の両立。

(一番ヤバい術の使い手だってばね)

(彼女を忍者にしない理由があるか?)

二人は背筋が冷えるのを感じた。この少女の潜在能力は、条件付きとはいえ、高水準に存在する。幻術に関しては、木ノ葉で彼女の右に出る者はいないだろう。

しかし、そんな彼女が術に集中し過ぎたのは、シャナが原因だった。「私の全力の幻術を簡単に破ったのは、シャナちゃんが初めてだよ。紅先生だって、解けなかったのに」

術に抵抗されたことで、それを抑え込もうと躍起になり、トルネが犠牲になっていたのだ。徐々に過激になる術にシャナも抗ったせいで、歯止めが利かなくなっていたのだ。

結果的にシャナの方が勝ったが、負けていた場合、トルネ以上に追い詰められたことだろう。

「幻術には、強いんだってばね」

「うんうん。本当に強かったよ」

「吐きそうだ……、少し休ませてくれ」

気分が悪いトルネが回復するまで待ち、そこからお互いの持ち札を使い、木遁使いのヤマトを仕留める計画を立てたのだ。作戦立案は、八雲が行った。トルネが白兵戦担当、シャナは遊撃担当、八雲は幻術担当。それぞれ役割分担をした。

唯一鈴を覚えていたトルネも、八雲の幻術で頭から鈴の勝利条件が飛んだのは運命の悪戯だった。

それが試験での作戦の裏側だった。

## シヤナ師匠。厳しい修行 前編

正式に下忍認定されたシヤナを含む第4班。一週間ほど経ってから、ようやく招集が掛かる。

事前のミーティングを終え、試験官であったヤマトが隊長として就任。

フオーマンセルとして任務に向かうことになったのだが、この班にはいろいろな弱点があった。

「すぐ終わる依頼が良いってばね」

「すぐ終わる依頼じゃと?」

任務を受けるために4班の面々は、依頼受取所に足を運んだ。そこで任務を受領する際に、初めての任務ということで三代目火影が、任務の説明を行い、Dランクの任務の中からどれがいいかと尋ねた。

その問いにシヤナが答え、お使いの任務を選んでいた。

確かにそれなら一時間もかからずに終わるだろう。というより忍者にお使いを依頼する方がおかしい気もする。

「これでいいのか? 誰も受けないと思っておったが」

「遠出とか効率悪いってばね」

「私も、なるべく簡単に疲れないのがいいかな」

シヤナの性格が一つの例だろう。効率を求める志向性ゆえか、任務にやる気を示していない。もう一つは、八雲の体力のなさである。強力な幻術使いである反面、アカデミーに入学できないほど体力のない彼女は、遠出の任務などに向いていない。

「俺がおつかいなんてしていいのか?」

「手袋してるならいいんじゃないかな?」

もう一つは、先天的な毒虫使いのトルネは、選べる任務に限りがあるということ。全員が問題を抱える中、シヤナの強い推薦もあり、お使いの任務を受領した。

木ノ葉の下忍の中で、最強の実力を持つ第四班。

その実力は、迅速な御使いという任務で発揮されたのだった。

「じゃ行ってきます」

「失礼します」

「10分で終わらせてやるってばね」

4班の3人が出発し、残されたヤマト。さすがに上忍をお使いの任務につけるのは、もったいないため、別の任務を割り振られたからだ。

「心配か？」

「いや、心配はしてません。あの三人、意外と相性がいいみたいで、いいチームだと思いますよ」

「お前も殺されかけたからな」

「それは言わないでください。性格的には、シヤナが変わってると思いますが、八雲とトルネが大人しいので、基本的に帳尻は取れますからね。引っ張っていくのはシヤナで、最終的な決定はトルネが下すといった感じでしょうか」

ヤマトは、試験やミーティングでの彼らを見てそう言う感想を抱いた。

トルネが冷静なタイプなので、彼に相談するのが、基本になっているようだった。

「八雲は少し消極的な所もありますが、これは改善されると思います」

「うむ。あの子にとっても最善の結果になったようじゃな」

忍になれないと決まった八雲の表情は暗かった。だが今は、下忍になれたことを喜び、なにより仲間が出来たことがうれしかったのだろう。

トルネも持って生まれた特異体質のせいで、一族の中でも避けられ、アカデミーに入学できなかった。

本人も仕方ないことだと諦めていたが、心のどこかで、繋がりを求めているのかもしれない。

降ってわいた下忍昇格試験で仲間が出来た。

全員が孤独を感じたことのある班員であり、共通点が多い。同じ境遇故に通じ合ったのだろうか。

「この先は、どうなるかは、お楽しみですかね」

「そのようじゃな。必要とあれば支えてやってくれ」

ヤマト自身も、幼い頃から木遁の使い手であり、根に居たことから、

普通の子供時代を過ぎさなかつた。特異な力に振り回されてきた経験は誰よりもあり、三人を理解してあげられるのは、彼しかないというのが三代目の見解だつた。

その日の御使い任務は、30分ほどで終了した。何事もなく終了した後、3人は解散する運びになり、シヤナは二人に別れを告げて、大急ぎで、うちのは修練場に向かつた。八雲は、シヤナと話がしたかつたのか複雑そうな表情だが「また明日」という言葉に機嫌を直していった。

うちのは修練場、うちは一族の事件以来、誰も寄り付かないそこは、絶好の訓練場所。

そこに走つて辿り着いた時、二人の先客が居た。

「遅いぞ。何をしていた」

一人は、シヤナが遅刻したことに不満気なサスケ。もう片方は、「ずっと待ってたつてばよ」と文句を零すナルトの二人だつた。

「任務だつてばね。お前達との約束の為に、最速で終わらせたんだつてばね」

これは真実だつた。最速記録を更新したとはつきり言われたからだ。本来は、今日依頼を受けるつもりがなかつたのに、ヤマトからの招集で仕方なく任務を受けに行つただけなのだ。

「お前が遅れたせいで、このウストラトンカチと待つ羽目になつた」

「サスケ、喧嘩売つてんだつたら買ってやるつてばよ!!」

喧嘩腰のナルトがサスケに掴みかかろうとするが、シヤナが止める。二人に無駄な体力を使わせる訳にはいかないからだ。

「さて、今日も修業をつけてやるつてばね。とりあえず二人まとめて掛かつてこい」

今日も修業が始まる。サスケとナルトは、シヤナが写輪眼で睨み付けてくると立ち上がつて、クナイを構える。この2対1の戦闘訓練は、シヤナと二人の戦闘能力差を考慮した結果、行われるものだつた。

そもそもなぜナルトとサスケがシャナと修業しているかと言えば、事情があつた。

サスケの修行をつけることは、イタチとの約束で決まっていた。退院したサスケから日時を指定され、そこでサスケが強くなるための修行を始めた。

基礎能力の向上をメインに、毎日数時間行っていた。

そんな日々が過ぎた中で、ある日ナルトがシャナにアカデミーの話をした。

「最近、サスケの奴が、強くなってるってばよ。あの野郎、秘密の特訓とかしてるんだってばよ！」

自分から勝手にサスケに向かつていくナルトには、サスケが強くなつていくのを肌で感じられたようだ。サスケが強くなっていると聞き、自分は間違つてなかったと喜ぶシャナ。

「してないしてない。姉ちゃんが修行見てあげてるだけだつてばね」

シャナの言葉にナルトの目は大きく見開かれ、彼女に詰め寄る。

「姉ちゃんがサスケの修行見てるってどういうことだつてばよ！ 何でサスケなんかと」

「え、っと姉ちゃん元々、養子だつて話したつてばね？」

「あ、うん」

「姉ちゃんは、うちは一族の血を継いでるから、この写輪眼だつて持つてるわけだつてばね。それで、サスケは親戚みたいなもので、姉ちゃんが修行つけてあげてたつていう」

シャナの説明にナルトは不満だつたらしく「ずるいってばよ！」と憤慨する。だがシャナもサスケだけを特別扱いしてるわけではない。本来はナルトも一緒にも思ひ誘いを掛けたこともある。

「ナルトが姉ちゃんの誘い断つたんだつてばね！」

「だつて、恥ずかしいってばよ」

「だつたら姉ちゃん悪くないってばね」

さすがに理不尽だと怒れば、ナルトの語尾が弱くなる。明らかに非が自分にあると考えたのだろう。けれど引き下がれないらしく、「俺も姉ちゃんと修業する！」と宣言。サスケとの修行についてきてし

まった。

サスケの事をライバルだと決めているナルトからすれば、サスケだけが強くなるのは我慢できなかったらしい。

当然、突然ナルトを連れて行ったため、サスケが怒る。

「なんでそいつが居やがる」

「それはこっちのセリフだサスケ！ よくも俺の姉ちゃんにこっそり修行頼みやがったな！」

「姉ちゃん？……そういうことか」

サスケは以前シヤナが言っていた弟という存在を思い出し、それがナルトだと理解した。確かに、うずまきだと名乗っていた。

「お前の弟が、こんなウストラトシカチとはな」

「あん？」

「こいつは、アカデミーでもドベだ。はっきり言って時間の無駄だ。俺の修行についてこれるわけがない」

「なんだと!? 誰がドベだ!」

「なんだよ本当の事だろうが、ドベ」

喧嘩を始めたナルトとサスケ。性格的に合わないと思っていたが、煽るサスケと煽り耐性のないナルト。どう考えても相性が最悪である。

しかし、シヤナからすればナルトもサスケも大差ないのである。圧倒的な実力差から、二人への評価を下すシヤナ。サスケの事は認めているし、ナルトの事は大切に思っている。だが力という面において、シヤナはお世辞を言わない。

正確に判断を下し、伝える。それは強さにプライドを持つ彼女が持つ価値観だろう。だから特に悪意なく、口を開いた。

「アカデミーのドベは事実だってばね。姉ちゃんも先生から聞いてる」

「えー」

「ふん」

「でも、サスケもうちはじやドベだってばね」

「はあ!?!」

落ち込んだナルトと反感を覚えたサスケ。シヤナの言葉を理解できなかった。

「私からすればナルトもサスケもドベ同士、底辺だっていつてる」

「ちよ、姉ちゃん、いくらなんでも」

「喧嘩売ってるのかお前」

別に喧嘩は売っていない。シヤナは強者であり、強者は弱者にケンカを売らない。ただ冷静に実力を評価しているだけだ。うちは一族は、シヤナ、サスケ、イタチしか公式で存在しない。ならサスケはうちは一族のドベなのだ。それも圧倒的に。

アカデミーでは優秀でも、シヤナからすればお遊戯に等しい。お遊戯がうまいサスケを強者として見る。それは不可能だった。

「修行するって言ってるのに誰が居るからとか、関係あるのかってばね？ お前がそんなこと気にする必要ないってばね」

「お前」

「ナルトもだつてばね。腹が立つなら強くなればいい。余計なことしてる時間はないってばね。何か難しい？」

敵意はないが、甘えは一切ないシヤナ。最愛の弟だろうが、託された親戚の子だろうが関係ない。強くするためなら、何だつてする。

「二人同時でいい。ドベ同士大差ないからな。かかってこい」

シヤナの挑発ともとれる言葉に、サスケが怒り、クナイを持って駆け出す。サスケが武器を持って姉に襲い掛かった姿を見て、ナルトが止めようとするが反応が間に合っていない。

「はあああ!!!」

クナイを大きく振りかぶり、シヤナの喉を狙うサスケ。シヤナはその動きを青い写輪眼で洞察。クナイをギリギリで回避、サスケの腹に膝をお見舞いする。

「ぐ」

体がくの字に曲がったサスケの首筋に、素早い手刀を叩き込み、サスケの意識を刈り取った。気を失い、地面に倒れ伏したサスケを見下ろしたシヤナは、今度はナルトに向かって「かかってきなさい」と誘う。

「え、あ、ええ」

サスケが一瞬で気絶させられた光景に言葉を失うナルト。ナルトも姉が強いのは知っていたが、ここまで一方的な強さを持っていると思っていなかった。

「強くなりたいでしょ？ サスケはいつもこの修業に耐えてるってばね。お前はそこで見てるだけってばね？」

いつまでも掛かってこないナルトにシヤナがそう言えば、負けず嫌いなナルトは拳を握り、シヤナに向き合う。ナルトにだって目標がある。その目標の為に強くならなければいけない。

「いくってばよ」

「うん」

ナルトは全速力でシヤナに向かって走り出そうとし、瞬身の術で急接近したシヤナの上段蹴りを顎に受け、脳震盪を起こしてふらつく。

ふらついたナルトの髪を掴んだシヤナは、自分の膝に引き寄せて、ナルトの顔面を蹴る。鼻血を出して倒れたナルト。さすがに追撃はいらなれないと思い、シヤナは地面に突っ伏した二人を起こそうと、水筒の水をかける。

「はっ、な」

「っほ、っほ、ぶへ」

飛び起きたサスケと水でむせたナルト。両者は自分を見下ろす青い写輪眼を見て、実力の違いをはっきり理解する。

何をされたのかもわからない。相手との差を実際に感じながら、ナルトは甘えを捨て、サスケは意地を持って睨み返す。

「どうする？ 休憩要るってばね？」

サスケとナルトは、シヤナの問いに立ち上がることで答える。

「まだまだだっつてばよ！」

「同感だ。お前に一発は入れてやる」

闘志をたぎらせる二人。シヤナは、そんな二人との修行を2時間も続けたのだった。



## シヤナ師匠。 厳しい修行 後編

今日の日課である模擬戦。一人一人では、瞬殺されるナルトとサスケだが、いつからか互いにカバーを行えるようになっていた。自分に向かつてくるシヤナの動きは目で追えないが、攻撃を食らいかけている味方なら見えるため、瞬時にカバーに入ることによってどうにか戦闘を続ける。

最初の内は一人で戦うことに拘っていた両者だが、実力差を体に叩きこまれたせいで、それぞれの感情を抜きにして共闘する道を選んでいる。

「ナルト。一人で突っ込むな！」

「お前が立ち止まってるのが悪いんだろうが！」

口喧嘩は絶えない。性格的に仕方ないとはいえ、そろそろ慣れないものかとシヤナがげんなりする。二人してシヤナにかかってくる割に、隙があれば喧嘩するのだ。

「男の子って、めんどくさいってばね」

「ムキーーーー！ 姉ちゃんと言えども腹立つ！」

「喚くな！ あれは確かに腹が立つが、どうしようもないだろ」

ぼろぼろのサスケとナルト。対して無傷のシヤナ。ナルト達が腹を立てているのは一人無傷な所ではない。二人の相手をしているシヤナは、何故か読書をしているからだ。それもかなり真剣に本を読みながら、二人には目もくれない。

シヤナが読んでいる本は、先日八雲から押し付けられた恋愛小説である。

そんなものに毛ほども興味のなかったシヤナ。恋愛どころか、男女の違いすら理解していない節のある彼女だったが、八雲がそれを指摘した。

初めて出来た女友達であるシヤナと、帰り道に恋バナをしてみたかった八雲であったが、シヤナの返答が全て理解不能だった。あまりに幼稚な感性を持つている友人に危機感を覚えた八雲。

服装も趣味も趣向も男の子のようなシヤナに対して、少しでも女子

力を向上させなければという使命感が湧いたらしい。意外にも家事は好きだという事実が唯一の救いであったが、シヤナの情操教育に取り組み始めた八雲。

その一環が、恋愛小説の押し付けだった。少しでもシヤナの女の子の面を成長させればと、断るシヤナに無理強いした。シヤナは嫌がっていたが、年頃の男の子と暮らす上でも必要な事だと説得され、渋々読書を行っていた。

だがナルト達との修行もあり、本を読む時間が取れなかった彼女は、あろうことか模擬戦中に読み始めた。さらに写輪眼すら解除しているため紫の瞳になっており、手を抜いているのが一目瞭然だった。もちろんナルトとサスケは、本を読み始めたシヤナに激怒。ぶちのめしてやると意気込み、全力で襲い掛かった。だが、現状はかすり傷すら付けられていない。シヤナは、恋愛小説が難しく頭を悩ませているが、修行の結果、写輪眼なしでも使えるようになった未来視を使い、しっかりと二人の動きは洞察している。

写輪眼に頼り切っていることを自覚していたシヤナは、裸眼での未来視を戦闘に取り込む訓練を同時に行っていた。未来視の精度自体は落ちるが、これなら脳の負担が減り、長時間使えるのだ。

未来を見て二人の動きを洞察し回避する。写輪眼の動体視力やチャクラを見る力を失うが、それでも二人相手に戦える。

本に集中しながら、未来視を行い、戦闘を継続する。その負荷はすごいもので、シヤナ自身の特訓にもなると、八雲に感謝し始めていた。涼しい顔で戦っているが、並列思考しながらの戦闘という曲芸は、シヤナの集中力を鍛える立派な訓練になっていた。

「ねえ、二人は好きな子がいるってばね？ どんな感じの子が好きだってばね？」

「知るか!？」

「そんな本読んでないで、修行に集中しろってばよ！」

恋愛小説は難しいと、自分に殴りかかってくる二人に尋ねるが、求めていた返答が来ない。まだ二人とも小さいし、恋愛事はわからないかと自分の事を棚に上げるシヤナ。

模擬戦がメインで、それ以外はスタミナ向上のための体力づくりを言い渡されているサスケとナルト。二人は、全力で動きながらも長い時間動き続ける事が出来るようになっていた。

特に目覚ましいのがナルトである。動きは単調で直線的、正直お粗末なものだが、ずっと動き続けるスタミナにシャナは驚いていた。ナルトの攻撃は一切止まらず、次から次に飛び掛かってくる。

一方サスケは、フェイントを織り交ぜながら高い運動神経を発揮し、テクニカルに攻めてくる。

(ナルトが陽動、サスケが隙を見つけて攻め込んでくる。いつの間にか役割分担が出来てる)

喧嘩の止まない二人だが、シャナという共通の敵を持てば、いいコンビネーションを発揮する。

本を読みながらの戦闘ではあるが、気を抜けば一発貫いそうになる。

「ナルト、何度も言ってるけど、動きが単調すぎ。サスケは、フェイントに拘って手数が少なくなりすぎ」

「なんで本読みながら、アドバイスまでできるんだってばよ！」

「(化け物かこいつ。息切れ一つしてない……いや、それはナルトもか)」

サスケは、延々と動き続ける二人に、息切れしている自分を恥じていた。ナルトは生まれ持ったスタミナが異常であり、シャナは修行の成果と無駄の少ない動きで二人に修行をつけているが、サスケからすれば自分は彼らに劣ると感じていた。

逆にナルトは、二人の動きが自分より遥かに優れていることに焦りを感じる。目指す先にいる二人がどんどん遠ざかっていく感覚を感じていた。

相手の優れているところを感じるのは、相手をよく見て自分を観察できている証拠。

それから20分ほど戦い続け、サスケとナルトが泥だらけになりながらも、一発入れようと工夫を凝らす。

「だあらー」

「そこだー！」

サスケの投げたクナイと突撃したナルトの攻撃を回避したシャナだったが、サスケがその避ける先に待機しており、シャナの顔を蹴り上げようとする。

その蹴りは、シャナの持っていた本を蹴り上げ、空高くへと飛ばす。

「！」

「ふ」

「やったってばよー！」

シャナの持っていた本を奪ったサスケ。落下する本を拾い、シャナに向ける。

「これでもう、本は読んでられねえな」

「へへーん、そうだそうだ」

手に持っていた本を奪われたシャナは、驚いた表情をしながら、サスケとナルトを見て微笑む。あまり見せない表情に二人は啞然とする。そんな二人を見ながら、シャナは腰のバッグからもう一冊の本を取り出した。

その表紙は、サスケの持つ恋愛小説と同じタイトルでありナンバリングが2と書かれていた。

「残念、それは読み終わったんだってばね」

「はア!？」

「もうやだってばよーー！」

その本は読み終わったとVサインするシャナに疲れ切ったサスケは尻もちをつき、ナルトは激しく地団駄を踏んだ。シャナに勝てないまでも本だけは奪ってやろうとしていた二人だったが、シャナが読み終わるまでに間に合わなかったのだ。

疲れ切った二人に、休憩を言い渡したシャナ。二人はその命令に逆らう気力もなく、がつくりしていた。

休憩しながら落ち込む二人を横目に、シャナは本を読みながら冷や汗をかいていた。

(読み終わる前に、本取られたってばね……)

実はシャナは読み終わっていなかった。ただ、二人のドヤ顔を見

て、素直に認めたくなかったのだ。最後のコンビネーションは、シャナの未来視の動きとはわずかに違い、新しい未来となつてシャナから本を奪った。

シャナの予想を超えた動きをした二人の弟子。二人の成長を嬉しくも思いながら、素直に負けを認めたくない意地が勝ってしまった。負けず嫌いは二人に限った話ではなく、シャナも十分に負けず嫌いなことから。

修行の時間が終わり、辺りが暗くなる。

「今日はここまでにするってばね。今度は3日後になる」  
「3日か」

「それまでは、自主練でいい。主に火遁の術を練習するってばね」

明日からは任務が立て続けで入っており、二人を見ることが出来ない。だからメニューを伝えておくことにした。サスケは、シャナから忍術の修行を言い渡され、不思議そうな顔をする。

今までの修行内容は、体術メインの体力増強だったからだ。

「そろそろ、チャクラを使った修業をするってばね」

「そうか。わかった」

サスケは、その言葉に素直に従う。シャナは体術も強いが、生粋の忍術タイプの忍である。彼女の術の威力は子供の頃から知っている。シャナの術は、うちは一族の仇である憎きイタチですら認めていた。「あのさあのさ、俺ってば腹減ったってばよ。帰りにラーメン行こう？」

「うーん、いいよ」

一樂のラーメンが食べたいと言い始めたナルト。シャナも頑張っているのご褒美に食べに行こうと言い始めた。一樂のラーメンが好きなナルト。シャナも好みの味で気に入っているので、よく食べに行くお店だった。

二人が夕飯の相談をし始めたところ、サスケはポケットに手を入れながら帰り始めた。

「どこ行こうとしてるんだサスケ」

「なんだウスラトンカチ」

「今から食べに行こうって話してるだろ」

「だからどうした」

「お前も一緒に行くんだってばよ！」

ナルトはサスケを誘った。もとより一緒に行くものと思っていた  
ようで、サスケが一人帰ろうとした姿を見て引止めたのだ。

まさか誘われているとは思わず、サスケが固まる。

シャナはそんなサスケに手招きをする。

「ほら、一緒に食べに行こうサスケ」

「はやくしろってばよ」

うずまき姉弟に手招きされたサスケは、少しだけ立ち止まってしま  
う。しかし、待ちきれないナルトが走ってきて、サスケの背中を押す。

「押すなナルト」

「だったらテキパキ歩けってばよ」

二人に連れられ、サスケは一緒に一楽に行くことになった。これは  
そんな修行の日々。

## 青い写輪眼

雨隠れの里。常に雨の降る空とパイプ塗れの標高の高い建物が立ち並ぶ里。

その建物の屋上で涙を流している人物が居た。黒い生地に赤い雲が描かれたマント姿だが、マントが大きすぎて引き摺っている為、裾がボロボロになっていた。その手には、女の子の人形の手が握られており、だらんと地面に横たわっていた。

その人物は、非常に小柄で、まだ5歳程度の少女だった。黒い髪と紫の瞳を持ち、紙でできた薔薇の髪飾りでツインテールにした少女は、空を見ながら大きな声で泣いていた。曇り空に響き渡る少女の叫びにも似た泣き声。その音はまるで雨隠れの里中に響くようなものだった。

大泣きしている少女の背後に、空から降りてきた一人の人間。

「また泣いているのか」

「ううう、うう、だって、十蔵が、十蔵があ」

少女の傍に舞い降りた人物は、少女と同じ服装でオレンジの髪に、黒いピアスが顔に数多く刺さった面持ちをしていた。額当ては雨隠れのもので傷が入り、その目が特殊だった。

眼球全体が紫の波紋模様で覆われており、忍界においてもそのような目を持つものは、全くいないだろう。何故なら彼の持つ目は、忍の祖と言われた六道仙人が開眼したという輪廻眼だからだ。

「十蔵は、任務の為に殉職した。我々暁の人間が、その死で泣くことは許されない」

「ペインのバカア、うううううう、ああああん」

ペインと呼ばれた男の注意を聞いても、泣き止まない少女。ペインは泣き止まない少女を泣き止ますことは不可能と感じ、その場で印を結ぶ。

「ううう、う？ 雨」

「暁の人間が泣くことは認めない。だが、この雨なら涙も見えなければ泣き声も掻き消える。小南が心配している。気が済んだら戻れ、風

邪を引かれては敵わない」

大雨が降り始め、少女の声をかき消す。そしてしゃがみ込んで雨に濡れた少女の涙を拭うと、ペインはすぐに踵を返して、建物の中に入っていく。

その後ろ姿を見た少女は泣くのを止め、涙を拭いながら彼についていく。

ペインの背後にちよこんと揺れるツインテールは雨を吸って、重くなっていたのか、よく揺れている。

「もう泣かないのか？」

「また泣くと思うけど、今は泣かないの」

「そうか」

ペインの輪廻眼と目を合わせた少女は、彼から目をそらして部屋の奥に走っていく。部屋の奥では何人かの人間が待っており、それぞれペインと同じ服装で漢字の刻まれた指輪をしていた。

「小南……」

「コダマ。また外に出ていたのね。ずぶ濡れじゃない。それにまだペインの目が恐いのね」

頭に紙でできた薔薇をつけた小南と呼ばれた女性は、駆け寄ってくる少女の水気を、体から出した紙の束でふき取る。水気をふき取られた少女は、小南の袖をつかみながら、部屋にいる人間たちを見る。

「ふふ。あら、目元が赤いわね。泣いていたのかしら？」

コダマと呼ばれた少女の顔を見て、そう言ったのは蛇のような舌を動かす男性。名を大蛇丸という、伝説の三忍と呼ばれた一人だった。彼は蛇のような目を光らせながら、コダマを見つめる。それは好意的というよりは、興味深い生き物を見るような目だった。

その視線に縮こまる少女。小南が大蛇丸に注意しようかと思った時、彼の顔面に鉄の刃のついた機械の尾を向けた人物がいた。

「やめろ大蛇丸」

「優しいのねサソリ。貴方らしくもない」

「そのガキが泣き始めたら、またうるせえだろうが」

サソリと呼ばれた男は。金属の尾を持ち、巨大な体を持ちながら背



が低いという異形だった。彼が大蛇丸と睨み合っていると、ペインが制止した。

「そこまでにしておけ。これからの方針を話す」

「チツ」

「命拾いしたわね」

「お前ら、どれだけ時間を無駄にさせる気だサソリ、大蛇丸。とことん、俺をイラつかせやがる」

二人がまだもめそうになっていると、頭巾姿でマスクをした大男がいら立っている。その殺気に二人も気が付き、三つ巴になる。睨み合う三人。

「もう一度しか言わない。大人しくしろ」

ペインの言葉に、三人は殺気を収めて大人しく話を聞こうとする。そしてようやく、傭兵集団暁の会議が始まったのだった。

その会議の内容は、2名の戦死者を出したことで、新しいメンバーの勧誘と新たなツーマンセルの組み直しだった。彼らの会議を文字通り部屋の隅で聞いていた少女。

やがて会議が終わり、それぞれが部屋から退室する。

「サソリ、角都、ありがとう」

少女は、サソリと角都に走っていき礼を言う。だが二人とも不愛想にするだけだった。サソリは何も発することなくその場から退室し、角都は自分を満面の笑みで見上げる少女を見下ろす。

「あまりイラつかせるなコダマ。……だが、あの野郎には気を付けておけ」

そう一言だけ残して、角都も部屋を退室する。残ったのは、ペインと小南、そして新入りのメンバーである、元木ノ葉の忍、うちはイタチだけだった。薄暗い部屋で目立つ紅い写輪眼は、少女と同じ目線に立ち、彼女に謝罪をした。

「十歳の事、すまなかった。俺が傍に居ながら」

「イタチ。もう大丈夫」

誠意を込めた謝罪をコダマは受け入れる。彼女にとって大切な人の死だが、イタチのせいでないのはわかっているのだ。

全ては争いのある世界が悪い。そう理解しているのだ。だからこそ争いを無くすために世界に痛みを与えることで戦争を排除しようという暁に在るのだ。

正しくは、暁の理念を生まれつき叩き込まれ育った少女。

(世界に痛みを。それが平和)

完全に理解しているとは言い切れないが、コダマの人格形成は、間違ひなくペインの思考のそれだった。

「コダマも頑張って世界が変わったら、十歳も嬉しいもんね」

純粋な笑顔を向けられる。その顔は、暁の行動で世界が一度焦土になるような地獄を再現することを知らないようだった。だが、イタチの感じた感想とは違ひ。少女は理解している。

世界を憎み、世界を一度壊さなくてはいけないと。小鳥が死ぬだけで泣くような泣き虫の少女は、心から世界の崩壊を望んで生きているのだ。そこでどれだけの人が死に、泣き叫ぼうとも、大義の為には仕方ないのだ。

「だから気にしないで」

「? (これは)」

少女が目を開いた瞬間、イタチの写輪眼が驚きで揺れる。イタチはあまりコダマという暁という組織に最初からいた少女と関わっていなかった。任務の合間に会うだけだったが、黒髪の少女の顔立ちが、どこかサスケに似ている気がしていた。

だからこそ知らなかったのだ。

「なあに?」

「その目は」

「コダマの写輪眼だよ?」

コダマが写輪眼を持っていることを。そして暗闇の中で発する色が青であるということ。

木ノ葉に在る、あの少女と同じ目を持つ存在。純粋で幼いながらに写輪眼に宿っているのは、明確な憎悪だった。

(あいつといい、コダマといい、青い写輪眼を持つ者とは)

イタチは、この少女の存在も警戒しなければいけないと意思を固め

たのだった。イタチとの会話を終えるとコダマをペインが呼び出した。

「コダマ」

「うん」

コダマはペインの輪廻眼が怖いのか目をそらしている。あのぐるぐるが苦手だというのは、彼女がよく口に出している。怖いというくせに、何かあれば彼の背中を追っているのだ。

「お前には任務に向かってもらう」

「任務？」

「そうだ。ゼツと共に湯の国に迎え。そこで、ある人物を殺してこい」

ペインの任務は、目の前の少女が受けるべき任務とは程遠い。その指令内容を聞いていた、食虫植物のような外殻、その中に白と黒の半身ずつという奇妙な姿をした生き物。黒と白のある内、白いゼツが、不思議そうに尋ねた。

「コダマには早いんじゃないの？」

「黙れ。リーダーの命令は絶対だ」

白ゼツの言葉を黒ゼツが否定する。間違ったこと言っていないのにと拗ねた白ゼツ。一方コダマは、目を輝かせながらワクワクしている様子だった。

「この女を殺してこい」

ペインが写真を見せる。その人物は、火の国の大名家の令嬢だった。彼女の暗殺依頼こそが任務だった。

「帰りの護衛に木ノ葉の忍を雇うらしいが、下忍を含めたフォーマンセルだ」

「その人たちも殺せばいいの？」

「必要ならな。無理ならターゲットだけを殺せ。ゼツ、お前は手を出すな。お前は撤退の時にだけ手を貸してやればいい」

ペインの命令を受けたコダマは、何度も頷いて了承。自分の実力を見てくれるつもり

「いつてきますー」

ビルの屋上に向かって走り出し、階段を駆け抜けて屋上に到着す

る。そこで自分のツイントールを引つ張れば、それが黒い翼へと変わる。変化ではなく、これがコダマの持つ能力の一つなのだ。

「行くよー！」

翼をはばたかせたコダマは、瞬時に飛びあがり雲を超え、晴れた空へとたどり着く。生物的でありながら、生物離れした飛行能力で、少女は湯の国を目指した。

その光景をビルから見えていたゼツ。彼女の飛んで行った方向を見て眩いた。

「あの子ってさ。地図読めるんだっけ？」

その問いには誰も答えなかった。明後日の方向に飛んで行ったコダマを見て、ゼツは地面と同化しながら、彼女の後を追った。

全力で空を飛行するコダマは、ふとイタチとの会話を思い出していた。

「イタチの言ってたアイツってだれだろうねえ？ 青い写輪眼って心で言ってたもんね？ うーん、まあいつか」

青い写輪眼。その奇妙な瞳術が対峙するのは、その後すぐだった。

## 任務

朝早くから家を出たシャナ。今日は、第四班で初めての里外任務の日だった。

任務の内容は、火の国の大名家の令嬢の護衛。湯の国に観光に出かけていた彼女だったが、帰りの際に護衛が大怪我をしたため、木ノ葉に護衛依頼を出した。下忍で新設の第四班に依頼が届いた理由は不明。

現在湯の国で立ち往生している大名家の令嬢を無事火の国に送り届けるのが任務だった。

本来なら上忍を派遣してもおかしくない任務だったのだが、指名依頼だったため彼らになった。

集合場所である湯の国の国境に向かう前に第四班で集合し、里を出る事になった。

「おはようシャナちゃん」

「おはようだってばね。皆」

「ああ、おはよう」

「時間通り来たね。なら行こうか」

ヤマト隊長を先頭に、3人は追従して走り出す。かなり朝早く出発したのは、第四班で体力に問題のある八雲のペース配分の為だ。任務終わりに修行を行い、少しでも体力をつけようとしているが、あまり向上はしていない。

それでも少しの間なら追従できるくらいにはなった。瞬発力は適性があり、持久力のみ課題となっていた。

ある程度の距離を走り、崖を登っていく際、息が切れて動けなくなってしまう。

その様子を見ていたトルネが下りてきて、八雲に手を差し出す。

「大丈夫か？ もし辛いなら、ペースを落とすように隊長に」

「ありがとう。でも私頑張れるから」

「しかし、顔色が」

任務も始まっていないのに、足を引っ張りたくない。そんな思いで

トルネの手を取らなかった八雲。自分の力で登る八雲の姿を見上げるトルネ。

(大丈夫、大丈夫、今日は調子がいいんだから)

先に登ってしまったシャナとヤマトは、先で待っているだろう。八雲が二人にも迷惑をかけたくないと、無理に飛んだ時、着地先が崩れ、バランスを崩してしまう。体勢を立て直せないまま落下する八雲。

しかし、八雲の体は地面に落下する前に、下から飛んできたトルネに受け止められる。八雲の体を抱いたまま、崖を飛び越えたトルネ。彼に地面に下ろされた八雲はトルネの顔を見る。

「俺の毒蟲が怖いのはわかってる。だが素手で触れなければ感染はしない。だから、辛い時は言ってくれ。俺たちは仲間だからな」

「ちよ、ちがうの」

「いいんだ」

八雲が手を取らない理由が自分のせいだと思いついでいるトルネ。彼女が否定するより先に、ヤマト隊長に休息を願うに行つたトルネ。二人が遅れている事に気が付いて引き返してきたヤマトとシャナ。

「少し休憩を取れませんか？ 思いの外張り切つてしまつて、疲れてしまいました」

「そうかい？ まあ時間には余裕があるし、休憩にしようか」

トルネは、八雲の体調ではなく自分の都合で休息を願つた。その願いを隊長であるヤマトは認め、全員で木陰で休息をとる事になった。

ヤマトとトルネ、シャナと八雲というメンバーに自然と分かれ、木陰で横になる面々。

八雲は、自分を助け庇つてくれたトルネの背中を見ていた。彼の手を取らなかつたことで彼を傷付けたのではないかと。気遣いをしてくれ、手助けをしてくれた彼に礼を言えていないことが、心に重く押し掛かつてくる。

そんな彼女の顔を覗き込んだシャナ。青い写輪眼は、いつ見てもきれいだと思うが、嫌に顔が近く「な、なに？」と尋ねた。

「なんか、ずっとトルネのこと見てるから、何してるのかと思つたつてばね」

「そ、そう？　気が付かなかったなあ。あはは」

「さつき嫌がらせでもされた？　私が一発ぶん殴ってこようか？」

袖をまくり上げ、恩人に殴りかかりに行こうとするシャナを慌てて止める。トルネが八雲に嫌がらせなどありえないだろう。彼は紳士的で、人をよく見てくれてる。厳しいアドバイスは何度かあったが、全て八雲の事を思つての事だった。

人から避けられてきた彼は、それに慣れてしまいがちながらも、人にやさしくすることを忘れない人なのだ。それは彼の強さであり、魅力であらう。

「そんなんじゃないから」

「じゃ、どんなのだつてばね？」

「もう。シャナちゃんには、私の渡した本読んでのの？」

「全巻読破済みだつてばね。ただ、全然わかんない」

すでに渡された本は読み終えている。物語としては面白いが、感情面の描写がいまだに理解できないシャナ。それを聞いて、今度は映画見に行こうねと誘う。映画なら、本よりも恋などについて理解できるはずだ。鈍感、情緒面三歳児のシャナであっても、八雲の今の気持ちがあるかわかつてくれるはず。

そこまで考えた八雲は、自分が考えたこと、感じていた感情がなんであるか、理解してしまう。

一度意識すると、それしか頭に浮かばなくなってくる。

（いやいや、待って。何を考へてるの私？　今は任務だから、そんなこと、いや、任務じゃなかったら何なの？）

どんどん思考の渦から抜け出せなくなる。顔も耳まで真っ赤になり、頭を抱える。やがて自分の使命を思い出し、一族の為に上忍にならなければいけないと自己暗示を繰り返す。

（それに、素顔だつて見れたことないのに。でも声は素敵だと思つし……つて違う）

シャナは、目の前で真っ赤になっている八雲の額に手を当て、ヤマトの所に歩いて行く。

「ヤマト」

「隊長ね。なんだいシヤナ」

「八雲、熱あるってばね」

「ないよ!!」

突然の発言に八雲が手を大きく振って否定する。確かに元気そうだとヤマトが、「体調が悪くなれば言うんだよ」と告げる。あやうく恥をかきそうになった八雲はシヤナを睨む。

睨まれたシヤナは肩をすくめて、良く分かっている表情をしている。

(青春してるなあ。若さってやつかな)

まだ20代のヤマトは、なんとなく八雲の雰囲気を感じてそうしめじみと考えた。

少しの休憩を終え、ようやく湯の国との国境沿いにたどり着いた。だが、国境付近に大名家の令嬢らしき人物は居なかった。

「少し早すぎたかな?」

「そんなことはないと思いますが。湯隠れの里にいるかもしれない」

ヤマトとトルネが相談していると、湯の国の山の方角から、女性の悲鳴が聞こえる。そして、爆発の音まで聞こえてくる。

明らかな戦闘が行われている。他国の戦闘に介入するのは危険だが、場所が場所であり、任務対象の事を考えると行かなければいけなかった。

「行くよ」

「私が先に行くってばね」

第四班の中で最速のシヤナが斥候を買って出る。写輪眼を持ち、粒遁の移動術を持つ彼女なら、すぐに駆け付けられる。その提案を許可したヤマト。シヤナが先行し、残りが追いついてフォーメーションを組む。それが作戦だった。

シヤナに危険が降りかかるが、シヤナ以上の適任はいない。

「粒遁・天翔」

両手を合わせ印を結び、シヤナが光の粒子となって急加速。音を置き去りにして空中へと駆け抜けていった。



「僕らも追いかけるよ」

「はい」

第四班の初めての实战が今始まる。

悲鳴を上げた女性。彼女のそばには無数の死体が転がっていた。腕利きの護衛だった10人の元忍の私兵。彼らはみな、彼女を守るため敵と交戦し、敵の放った羽のようなもので串刺しにされ、異形の腕で引きちぎられて、その場に横たわっていた。実力者ばかりの護衛達は、現れた襲撃者に瞬殺されていた。全員が一撃で殺され、護衛達の反撃は怪物相手に掠りすらしなかった。

あたり一面血まみれで、その場で生きているのは、女性と最後に残った護衛。そして、その護衛を体に似合わない巨大な腕で握りしめている、頭から翼の生えた少女だけだった。

「おに、げ、くだ、さ」

「逃げちゃだめだよ！ 逃がしちやダメ！」

「げぎよ」

護衛の最後の一人が少女の腕で握りつぶされる。肉の塊となったそれを投げ捨てた少女。彼女はまさしく異形だった。

頭から大きな翼を生やし、両腕は獣のように毛でおおわれ、鋭い爪を備えた巨大な腕。少女の体躯よりも腕の方が大きく、その腕は大人を驚掴みに出来るほど巨大だ。

瞳は青い輝きを放っており、異形の腕と翼以外は、かわいらしい容姿をしている。それがなおのこと不気味さを増長させる。

「お姉さん、どうやって殺そうかな？」

「いや、ころさないで！ お金ならあげるから」

「お金？ うーん、いらないや」

「ひいこ」

少女は、巨大な腕を振り上げ、女性の頭に向かってスイングをした。怪力を誇る巨大な腕は、女性の頭を叩き潰すのは容易いだろう。怪物のような少女が女性の命を奪おうとした瞬間。

「?!?!」

森の上空から青い閃光が急降下。異形の少女を吹き飛ばし、大木へと叩きつけた。

「何?」

女性は、新たに現れた人物を見る。

「任務により助けに来たつてばね。私が来たからにはもう大丈夫」

うずまきシヤナは、女性にそう告げ彼女を守るように、異形の少女と対峙する。大木に勢いよく叩きつけられた少女は、「もう! なんなの!」とぶんすか怒りながら、立ち上がり、襲撃者を睨む。

シヤナと少女が睨み合った瞬間、お互いの瞳を見て、互いが驚く。

「!?!」

何故なら、この世に二つとない筈の青い写輪眼同士のにらみ合いとなったからだ。

## コダマ

青い写輪眼同士の邂逅。それは同時に開戦の合図だった。

「粒遁・天輪」

シヤナは、チャクラ粒子を頭上に3個ほど作成。全て集束させ、同じ目を持つ異形の少女に発射していく。殺気を感じ取った異形の少女は頭から生えた翼で空高くに離脱。空中から真下にいるシヤナを観察しようとするが、次々に発射される天輪を空中で避けていく。(なんだあいつは。なぜ同じ目を持っているってばね)

護衛対象を背に、空を自由に飛び回る少女を狙い撃ちにするシヤナ。だが、写輪眼での洞察力を以てしても、亜音速で発射される術の速度を以てしても一発も当てられない。全てギリギリで回避され、空から青い写輪眼がこちらを見通しているように感じられる。

明らかな様子見。こちらの出方と実力を伺っているのだろう。

「ひいい」

「そこから一步も動くな。わかった?」

シヤナは悲鳴を上げて縮こまっている女性にさういうと、彼女は頷いて答える。下手に動き回られたら面倒なのだ。空という有利を取られている以上、シヤナの攻撃は当たらないだろう。

「粒遁・天倫……乱舞!!」

巨大な天輪を10発ほど頭上で集束。全て一度に発射する。発射された粒子の弾丸は、空で待機していた少女に向かって飛ぶ。

「おつきくても当たらないよー」

写輪眼を持っていた異形の少女は、空中で素早く回避し、余裕の表情である。相手を馬鹿にしたような態度にシヤナは内心腹が立つが、すぐに指をはじく。

それを合図として、少女に回避されその頭上にまで飛んだ巨大な粒子の塊。それらは瞬時に破裂し、無数の小型の天輪となって空から少女に降り注いだ。

「いやー……!!」

さすがに空から降り注ぐ粒子弾の雨に悲鳴をあげながら回避して

いく少女。写輪眼の持つ動体視力と運動神経を駆使し、どうにか全弾回避しようとした時、背後に現れたのはシャナ。

粒子弾の雨は囿であり、本命は青い閃光となって空に飛びあがったシャナ自身だった。写輪眼対策の一つ、背後を取る。それは見事に成功したのだった。

「え？　ぐ」

空中に飛びあがったシャナは、少女の頭から生えた羽を粒遁の刃で切断。さらにその顔面に蹴りを食らわせることで、異形の少女を地面に叩き落とした。切り裂かれた翼からは羽が舞い散り、少女は、地面に勢いよく落下。

自然落下で着地したシャナは、右手に粒遁を纏ったクナイを構え、様子をうかがう。

（なんだ今の蹴った感覚。鋼鉄でも蹴った気分だ）

異形の少女の体が、思った以上に固く、蹴ったシャナの足の方がダメージが大きかったのだ。右足は赤く腫れ、うかつな攻撃だったと後悔する。

自分の足を調子を確認していると、土煙の中から無数の羽根が飛来する。猛烈な速度で向かってくる羽根を写輪眼で観察する。それぞれが非常に鋭くなっており、一本一本がクナイよりも殺傷能力が高そうであった。そして、羽根の先端に液体が付着しており、毒もありそうだった。

目で見て回避するシャナ。全部合わせて50本の羽根が飛来する。それらは点ではなく面で攻撃する目的のようで、回避するシャナだが躲しきれない羽根が何本もあった。

それらを手に持った粒遁の刃で切断し、当たることなく回避していく。

「ばあー！」

「何?！」

全て回避したと思った矢先、背後から現れた異形の少女。右手でシャナのクナイを持つ手を弾き、先程のシャナと同じ動きでシャナの後頭部を蹴り飛ばす。頭を蹴り飛ばされたシャナは、木に叩きつけら

れる。

「ぐ、く」

頭を強打したことで、シヤナは脳みそが揺さぶられる。そして痛み  
に表情をゆがめる。間違いなく目の前の異形の少女は、シヤナのした  
ことをコピーしてきた。

木に手を当てながら立ち上がるシヤナ。ダメージが重いシヤナと  
は違い、異形の少女は、自分の巨大な手をにぎにぎしながらシヤナに  
向かって話しかけてくる。

「ねえねえ。貴方の目ってなんで私と一緒になの？ お揃いななの？」

「……（なんだこいつ、不気味だつてばね）」

「不気味じゃないよ。コダマだよ」

「……（コダマ？ 名前か？）」

「うん。コダマって言います。よろしくお願いします！」

ペこりと頭を下げたコダマ。毒気を抜かれそうになったシヤナ  
だった。だが、瞬時にコダマと心の声が会話している事に気が付き、  
火遁の印を結び口から炎を吐き出す。不意打ちにもならない攻撃だ  
が、相手と距離を取り、分析する時間が必要だ。

なにより第四班の面々が到着するまで時間を稼げればいい。

「距離取りたかったの？」

（化け物か）

火遁の炎に怯むことなく、巨大な獣の腕を盾に前進してくるコダ  
マ。コダマの腕は、炎に強いのか一切燃えることなくまっすぐシヤナ  
に接近する。

青い写輪眼同士が急接近し、互いの巴模様が見える距離まで近づ  
く。巨大な腕では、接近戦は苦手だろうとシヤナが新たにクナイを取  
り出す。

「お前」

「化け物じゃないの！ コダマだよ！」

クナイで首をはねようとしたが、巨大な獣の腕は、少女の意思で小  
さくなり、シヤナのクナイを持った手を受け止める。すさまじい怪力  
で両手首を握られたシヤナは動けなくなる。小柄のくせに、フィジカ

ル面でシヤナを上回るコダマ。

シヤナに切られた頭の翼は、既に回復を始めているのか、煙をあげながら徐々に生え始めている。

「コダマ?」

「コダマ」

自分は化け物じゃないと言い張る少女。化け物と呼ばれたことにご立腹の様子。けど妙に緊張感のない戦い方をするせいで、やりづらくて仕方ない。

(心読めるのかってばね?)

「うん。読める」

馬鹿なのだろうか。自分の能力を自分から明かすとは。だが、心を読む写輪眼。それがどれほど脅威かは、言わなくても判るだろう。唯一頭が弱いのが救いではあるが、それでも異形の体からくる怪力と俊敏さ、毒のある羽、危険生物であるのは間違いない。

シヤナが天翔で移動した距離から考えて、増援はまだ来ないだろう。

「お姉ちゃん名前はなんていうの?」

「さあ、心読めばいいんじゃない?」

シヤナの目をじっと見つめるコダマ。なぜ名前を聞く必要があるのだろうか。心を読めるなら、素性も読めるのでは? そんな問いが頭に浮かぶが、コダマから目をそらす。

「こっちみてよお」

「(やつぱりか)」

心を読めるなら、先程空中での不意打ちが成功した理由がわからない。ということとは、コダマの読心は、青い写輪眼で相手の目を見る事が条件なのだろう。それがわかれば、戦いようもある。とはいえ、コダマの身体能力は、人間離れしておりそれと戦うなら、目を見ないという縛りを課すのは無謀だ。

(そんなに目が見たいなら)

「見ろってばね!」

「あ」

シヤナは、瞬時に万華鏡写輪眼を使用。万華鏡写輪眼の幻術でコダマを縛り付ける。幻術にかかったコダマは、慌てて目を瞑るが遅い。コダマの怪力から解放されたシヤナは、自由になった両手でコダマの腹を殴り、追い打ちに顎を殴る。

相変わらず体が硬く、殴ったシヤナの手が痛むが、確かな手ごたえがある。

「雷遁・雷掌」

すぐに印を結び、雷遁を両手と足に纏わせる。そのまま、顔から血を流すコダマに掌底と蹴りを食らわせる。

「いったあ!! や、いや、やめてえ!」

体が頑丈でも、雷遁の痛みは感じるようで、酷く痛がる。そして、続けざまに何度も雷遁を纏った掌底と蹴りを繰り返す。一撃必殺ではなくとも、電撃を浴びせ続けることで相手の動きを阻害する忍術だった。

「粒遁・天刃」

体が痺れたのか、動きの悪いコダマ。だがしつかり目を開けて青い写輪眼でシヤナを睨む。すでに幻術返しを使っているのか、体内のチャクラが激しく循環していた。もう幻術は効かないぞとシヤナの万華鏡写輪眼を睨むコダマ。既に頭の羽は再生し、顔の出血も止まりかけていた。

だがシヤナも両手にクナイを持ち、粒遁の刃の二刀流の構えを取る。シヤナの構えを見たコダマは、獣の腕を構えながら、羽をはばたかせ、いつでも飛翔する準備をする。

シヤナは、自分の動きを確かめるように、2刀を振るう。

「なにそれ、かっこいい」

「そう。けど、そんな余裕もなくなる。私の本気を見せてやるってばね」

コダマは、能天気だが、シヤナは相手の力量を見極めた。コダマは強いと。その身に宿るチャクラ量は、弟であるナルトより多く、研ぎ澄まされている。見た目通りの年齢だと思わない方がいい。

(先見の写輪眼)

シヤナは一度、万華鏡を解除し通常の写輪眼に戻した。そのうえで未来視を使い、あまたの可能性を手中に入れる。ここから先は、すべての事象がシヤナの掌の上となる。

先に飛び出したのは、コダマだった。翼をはばたかせ、羽根を発射。羽根の弾幕と同時に飛びあがり、シヤナに襲い掛かる。シヤナではなく、シヤナの足元に刺さった羽根が、コダマのチャクラによって爆発する。爆発の中心にいたシヤナは飛び上がり回避。

だが空中で鋭い爪でもって襲い掛かるコダマ。

「あれ？　なんで」

必中のはずの爪が、シヤナが空中で身を捻ったことで回避される。だがそれで終わることなく、何度も空中で旋回しながらシヤナに襲い掛かるコダマ。だけれど、攻撃はシヤナに一切当たらない。全てが当たる寸前に回避される。

写輪眼で捉えているのに、シヤナの動きはそれすら超えてくる。明らかに動きが洗練され、隙一つなくなっていく。速度ではコダマが圧倒しているのに、追いつけないのだ。心を読もうにもシヤナは的確に視線を逸らす。

「なにしているのかしらないけどー」

コダマは、尾骶骨のあたりから黒い毛におおわれた尻尾を出し、それを鞭のように振るう。だがシヤナは距離感をあらかじめ知っていたように一歩後ろに下がり回避。すぐに前に飛び出してくる。

巨大化した両腕で、シヤナをプレスしようと振るうコダマ。その動きを待っていたとばかりに、シヤナが、両手のチャクラ刀を振り下ろす。火遁の効かない頑強な腕だが、粒子刀の切れ味は、それを上回る。「うわああああ」

巨大化した腕を根元から切断されたコダマは激痛に悲鳴を上げる。両腕を切り落とされたことで、シヤナの接近を防ぐ方法がない。苦し紛れに翼から羽根を飛ばすも、飛んでくる軌道が解っているシヤナはすでにその軌道上に居ない。

上空にジャンプしたシヤナは、影分身の印を結び3人に分かれる。左右に別れた影分身が一気に距離を詰め、上空にいるシヤナが粒遁・



天輪をチャージする。

「なんちゃって」

万策尽きたと思われたコダマは、斬られた腕を数秒で再生。巨大な腕が急に眼前に迫ったシヤナの影分身たちは、その鋭い爪に腹部をつらぬかれ消滅。残った本体だったが、シヤナの足に地面を掘り進んだコダマのしつぽが絡みつき、その体を地面に叩きつけた。

地面に叩きつけられたシヤナに畳みかけるように、コダマの巨大な腕が振り下ろされた。

激しい一撃に、シヤナの体が血に染まり、手足が明後日の方向に向いていた。

(という展開だつてばね)

全て未来視で見っていたシヤナ。尻尾で地面に叩きつけられたのは影分身だった。本体とはいえ、粒遁・天翔で後方に下がっており、勝ち誇ったコダマに最大限チャージした粒子砲を発射した。

シヤナのチャクラを感じ、空を見上げたコダマに粒子砲が迫る。時間をかけて要した天輪は、コダマの体を蒸発させるのも容易いだろう。

「んが」

コダマが抵抗しなければだが。

口を大きく開いたコダマ。口から赤いチャクラの塊を発射する。発射されたそれは、シヤナの天輪の術と同じチャクラの粒子を集束したものであり、二つの粒子砲が空中で爆発。互いに相殺する。

(粒遁!?)

自分のオリジナルの術をコピーされたことに驚くが、粒遁はシヤナしか使えない血継淘汰だ。写輪眼を持っていてもコピーなどできない。出来る理由があるとすれば、シヤナと同じチャクラを持っている可能性だ。

未来視ならすでに終わっているはずだったのに、死に瀕したコダマが本能的に行った行動のせいで未来が大きく変わってしまう。

急激に増えた情報量に、シヤナの脳が悲鳴を上げる。

「なんか出た……なにこれ」

コダマも自分が咄嗟に行った技に驚いていた。けれど、戦闘に意識を向けてすぐに構えを取る。シャナは頭を片手で押さえながら、変わってしまった未来を少しづつ纏めていく。すぐに必勝のパターンを導きだそうとするが、コダマの方が早かった。

一気に前に飛び、シャナの心を読もうと目を合わせる。

「あれ？　心が読めない」

（なんだ、未来視が）

しかし、シャナとコダマの未来視と読心の両方が機能しなくなる。二人の粒遁のぶつかり合いの後、空中に飛散する紫色のチャクラ粒子を浴びた二人。その青い写輪眼が、色を変え、赤い通常の写輪眼となっていた。

互いに相手の目を見て、相手の変化とその瞳に写り込んだ自分の目を確認する。

（コダマの目もまっかになってるー！！）

（何をされた？）

驚愕しながらも剛腕を振るうコダマ。その一撃がシャナの体を捉える。両腕でガードしたシャナの体を軽々と殴り飛ばし、彼女を吹き飛ばす。

攻撃が当たり、ここが畳みかけるところだと追撃に走るコダマ。

一方不意打ちを受けてしまったシャナ。ギリギリでガードは出来たが、両腕の骨が折れ、肋骨も折れている。印を結べなくなり、術の発動に支障が出てきた。その状態で更にコダマが剛腕を振るってくる。

「くらえ！！」

「くらうかってばねー」

巨大な獣の腕での拳。その一撃を受け止めたのは、万華鏡写輪眼を再び使ったシャナがチャクラの巨人を展開する。巨大な骨の巨人は、コダマの右ストレートを巨大な腕で受け止める。

シャナの術は、うちは一族に伝わる術であり、万華鏡写輪眼を両眼に開眼したものだけが使える秘術・名を須佐能乎。その力は、コダマ

の怪力を軽々と受け止めるほどだった。

「ふええ」

「お返しだってばね」

須佐能乎でこぶしを握り、コダマに殴り掛かる。だがコダマも巨大化した獣の腕で須佐能乎の拳を受け止める。互いに拳を受け止め、硬直状態となる。

「ふぬぬぬ!!」

「須佐能乎と力比べできるとか、馬鹿力過ぎるってばね。けど」

須佐能乎相手に力で勝負し始めたコダマ。ギシギシと骨の巨人が軋み始める。だが、シヤナの須佐能乎は、6本腕の阿修羅型。残った腕を使い、コダマの体をぶん殴る。殴られたコダマは、ピンボールのように木々を跳ね返りながら吹き飛び、岩に体を打ち付けて倒れる。ガードすら許さない一撃は、コダマに大ダメージを与える事が出来た。

さらに一撃加えようとした時、シヤナの体中に激痛が走る。

「ぐああああああ、ぐうう」

全身の神経が焼けただれるような痛みにも、膝について苦しむシヤナ。須佐能乎が徐々に小規模になり、右腕と胴体以外消滅してしまふ。だが腕が動かない以上、須佐能乎を解除する訳にはいかない。

「もう、もういやー!」

戦闘の余波に耐えられなくなった女性が、慌てて逃げようとする。それを見て居たコダマが、起き上がって頭の翼から羽根を飛ばした。コダマの勝利条件は、シヤナに勝つことではない。血まみれになりながらも痛む体を動かすコダマ。

彼女の頑強さと体力には、シヤナも恐怖を抱く。

シヤナが須佐能乎を手を伸ばすが、一本だけ届かず女性に迫る。

「木遁の術」

森からヤマトの声が聞こえ、逃げようとした女性を守るように木の盾が完成する。コダマの羽根は木の盾に突き刺さるも女性には届かない。

「無事かシヤナ!」

「シヤナちゃん！」

「おそい、つてばね」

「君が早すぎるんだよ。だが、よくやったよ。木遁の術！」

トルネと八雲も現場に駆け付けた。その後ろにはヤマトがおり、印を結びながらコダマに木遁の術を発動する。ヤマト達を見たシヤナは、一步も動けなくなる。コダマは、自分の足場から生えた木に体を拘束されかかるも、怪力で振り払いながら女性を殺そうと突進する。「すごいなこれ。トルネ、八雲、やるよ」

「はい！」

「準備します」

木遁の次から次に生える木々に鬱陶しそうにするコダマだが、彼女に向かって手袋を外したトルネが急接近する。突進するコダマに合わせて、前に飛び出したトルネは、コダマの巨大な腕を狙い自分の毒手を当てる事に成功する。

毒虫がコダマの巨大な腕を紫に染め、毒が蔓延する。

「いつ……へっっちゃらだ！」

「くっそ」

激痛に顔をゆがめたコダマだが、すぐに己の毒で毒虫を中和してしまう。正確に言えば、コダマの毒素が毒虫を殺してしまう。自分の毒が効かない相手の存在に、トルネがうろたえていると、コダマがトルネの手を掴んで、ヤマトの方向に投擲する。

巨大な腕で投げられたトルネは、ヤマトに激突する寸前に八雲によって受け止められる。

「す、すまな……やくも！」

トルネを受け止めた八雲は、トルネに触れてしまった手から毒虫が感染し、激痛に顔をゆがめている。その様子を見たトルネが慌てて毒虫の感染した部位に触れ、毒蟲を抽出する。少しずつ顔色が戻り始めた八雲だが、顔は汗だけで毒のダメージは残っているようだった。

自分の毒で仲間を傷付けたことに狼狽えるトルネだったが、八雲は彼の肩に手を置く。

「大丈夫。トルネ君。先生の所に行つて」

「しかし」

「私たちは仲間なんだもん。やらなきゃいけないことがあるよ」

八雲の言葉に、トルネは迷いを一時的に捨て抗戦するヤマトの応援に向かった。ヤマトは木遁の術でコダマの攻撃を迎撃するが、怪力と素早い身のこなしに苦戦する。

ヤマトは、現在赤くなっている写輪眼に気が付き、警戒の色を強くする。

(写輪眼を持っている子か。そしてこの腕。なんなんだ)

「隊長！」

「トルネ。八雲は？」

「解毒しました。時間を稼いでくれと」

「わかった。一気に行くよ」

ヤマトは、コダマを閉じ込めようと木遁・木錠壁を発動。3重にも展開された木遁の檻がコダマを封じ込める。だが中で大暴れするコダマのせいで地響きがおき、木錠壁にひびが入る。

ひび割れた木遁・木錠壁から這い出したコダマだったが、トルネが再びコダマの顔面と頭の羽に毒手を打ち込む。

毒虫は確かにコダマの細胞を破壊しようとするが、数秒で彼女の毒で死に絶えてしまい効果が薄い。

「きかないって言ってる！」

「ぐあ」

トルネを尻尾で叩きのめしたコダマは地上では分が悪いと空中に飛びあがる。空を飛んだことにヤマトは驚くが、護衛対象である女性だけを狙い羽根を飛ばすコダマ。

木遁の木々が攻撃を遮るが、羽根は鋭く威力が高いため、貫通するのも時間の問題となる。

空中にいるコダマは、ヤマト達からの攻撃手段が限られる。

「これでどうだ」

コダマは口を大きく開き、粒遁・天倫と同じような粒子砲を発射しようとする。その威力は、第四班が良く知るところであり、溜めていくチャクラの量がヤマトの木遁ごと周囲を吹き飛ばさん威力となる。

「じゃあね。あれ？ あっーーーーーい!! っ  
やーーーーー!!!」

発射寸前になったコダマだった。しかし、突然体中が発火し、業火に体中が焼かれる。本来火遁でも燃えない体毛で覆われた腕や羽、尻尾まで燃え上がり、苦しみ続けるコダマ。あまりの熱さに粒子砲を解除してしまう。

火を消そうと空中をむちゃくちゃに飛び回る。ようやく火を消したところで、全身火傷でただれている。涙を流し苦しむコダマにさらに追い打ちが起る。

「なんで、また毒が、いったあああああ!! もうむり!!」

体中に突然トルネの毒が回り始めた。効かない上に解毒したはずの毒が回り始め、その激痛にコダマは耐えられなくなって、その場を離脱するように高度を上げ、消える。

コダマが全身にやけどを負い、痛みに耐えかねて撤退した姿を見ていた第四班。

彼女の気配が消えたことで、木の上に立った状態の八雲はようやく術を解除する。コダマを襲った炎と毒は、実は八雲が彼女にかけて幻術だった。

コダマのチャクラが多く、写輪眼を持つていたために準備に時間がかかったが、術は成功。炎に焼かれる痛みと、直前で受けたトルネの毒の痛みを再現したのだ。

特にイメージではなく、直前まで感じていた痛みの感覚は、ダイレクトにコダマに伝わり、彼女が撤退する理由となった。知っている苦痛の数だけ、あたえる苦痛がより強くなる八雲の幻術。

「やりました先生」

「苦労様。今は休んでくれ」

幻術に全チャクラを注ぎ、遠距離にいるコダマに大ダメージを与えたが、殺すことはできず撤退させるだけにとどまった。だが、直前に毒を受け、チャクラのなくなった八雲は気絶。コダマのしつぽを顔面に受けたトルネも気絶。

シヤナは、須佐能乎の代償でボロボロだった体を酷使し、同じく気を失う。

残ったのはヤマトと、護衛対象の女性のみ。とてもではないが、国境は越えられず、湯の国に療養に向かうしかなくなる。

「初の里外任務で、こんなことになるなんてね」

ヤマトは木遁分身を出し、女性の護衛と班員3名を湯の国に運んだ。幸い大名家の女性の理解もあり、幾つも部屋を貸し切ってもらえることとなった。

里に向けて伝書鳩を飛ばし、第四班の帰還が遅れる事を知らせたのだった。

撤退したコダマは、空を飛びながらも力尽きて落下。ふらふらと地面に向かって落ちる寸前。ふわりとコダマの体が浮き上がる。重力に逆らってゆっくりと落ちる彼女の体を、地上で待機していたオレンジの髪に輪廻眼を持つ男、ペインが優しく抱き上げる。

疲れ切り、傷だらけのコダマを眺めるペイン。彼はコダマの頭を何度か撫でると、背後にいたゼツに話しかける。

「コダマがやられる程の相手が居たのか？」

「そうだね。見た感じは下忍のフォーマンセルだったんだけど、恐ろしく強い奴が居たんだ」

「軽い任務のつもりだったが、ここまで追い詰められたか。逃げればよかったものを」

「張り切ってたからね。ペインから任務貰えたって」

ゼツは迷子になっていたコダマに道案内をした時のことを思い出し、そう告げる。無表情のペインは、輪廻眼で小さなコダマの寝顔を見る。

「しばらくコダマは任務に出さない」

「一回失敗しただけでダメなの？」

「鍛えてやるだけだ。痛みを知ったコダマは、さらに強くなる」

コダマを回収したペインとゼツは、その場から消える。

## ナルトとサスケ

木ノ葉の里。

忍者アカデミーのお昼。教室内で昼食を終えたうちはサスケは、退屈そうに空を眺めていた。今日も退屈な授業を受けながら、珍しくナルトが来ていないことに気が付く。

今日はシャナが帰ってくるはずの日であり、それを迎えに行ったのかと考えていた。

シャナの用意したメニューは、難易度が高く習得には至っていない。手を使わずに木を登る行為があそこまで難しいとは思わなかった。

ナルトと競って行った修行だがどちらも成果は芳しくなかった。とはいえ、チャクラの移動と維持を学べるなど、得るものも多い。今日の修行ではどうやって工夫するかを考えていると、教室にナルトが走りながら飛び込んでくる。

「サスケエー！ ちよつと来るつてばよ」

教室に入ってきたナルトは他のクラスメイトに目もくれず、サスケの所まで駆け寄ると、サスケの手を引いて教室の外に連れ出した。

サスケとナルトが外に出るのを見ていたクラスメイト。

「あれえ？ 今のナルト？ 今日休みじゃなかったの？」

「さあな。でも今来たじゃねえか」

「サスケを連れて行ったね」

チョウジとシカマルは、二人して突然現れたナルトの事を話しており。

「サスケ君が連れてかれちゃった」

「ナルトオオ！」

女子たちは、サスケを連れていかれ、ご立腹の様子だった。

「だけど、最近サスケ君、ナルトと一緒に居る事多くない？」

「仲良いよね。喧嘩はしてるけど、二人とも一緒に修行してるらしいよ」

クラスメイト達もナルトとサスケの仲が改善したことは理解して



いた。特に変わったのはナルトだろう。相変わらず馬鹿をやるが、体術の成績は上がり始め、忍組手でもサスケを相手に手も足も出なかった時から一変。サスケ以外には勝っているというまで成長していた。そして、女子に対する態度も変化していた。女子をからかい、時には怒らせる事ばかりしていたナルトだったが、なんというか少し優しくなったのだ。

これまで毛嫌いしていた女子たちも、どこか紳士的な態度のあるナルトの変化を好意的に感じていた。

「どこいったんだろう？」

—————

ナルトはサスケを屋上まで引き連れて、握りしめた手紙を見せた。

「なんだそれ」

「今日の昼頃に届いた手紙だってよ。姉ちゃんが……シヤナ姉ちゃんが」

手紙を持ったままのナルトからサスケがそれを奪って確認する。そこには、シヤナが任務で負傷し、湯の国で療養する旨が書かれていた。

「あいつが怪我？ 殺しても死ななそうなのにな」

「おれってば、おれってば、心配で、何って言うんだろうな、この気持ち」

サスケはナルトの顔を見る。普段の明るい顔から一変し、暗い表情となっている。

家族の居なかつたナルトは、新たにできた家族の怪我を聞いて、失うことに対する不安を覚えたのだ。今まで一人だったナルトにはなかつた感情。

初めての感情に振り回されているのだろう。

「何日かしたら戻ってくるだろう。怪我だけみたいだしな」

「そりゃ、そうだけど」

「それより、俺とお前は木登りの行が終わってねえんだ。早く習得しないと馬鹿にされるぞ」

むしろ、期限が延びたことを喜ぶべきだ。シヤナは出発前に、帰っ

てくるまでに終わらせておけと書いていたのだ。今日帰ってこられたら、大目玉を食らったのは間違いない。

「……わかったってばよ」

「第一にお前は俺より遅れてんだ。人の心配してる場合かよウスラトンカチ」

あえて挑発する。そうすればナルトは乗ってくると分かっているからだ。思惑通り、ナルトは激怒しながらシヤナへの心配を忘れたようだ。第一、あの女が本当にケガをしたのかも怪しいくらいだった。

その後、アカデミーをさぼっていたナルトはイルカに見つかり、こっぴどく叱られていた。

アカデミーが終わり、いつも通り修練場で修行を行ったナルトとサスケ。与えられた木登りを行い、昨日より1mほど高く登れたが、それでもつぺんまではまだまだ遠い。ナルトはチャクラの扱いが下手なため、何度も地面に落ちては傷を負っていた。

それでもサスケの倍以上の挑戦数で、少しづつだが差を縮めてくる。

その修業を夕方まで行い、ナルトに誘われてラーメンを食べに行くことになったサスケ。もう断つても無駄だと理解しているからか大人しくついていく。

二人して木ノ葉の夜道を歩いていると、ナルトが何かに気が付いて走り出す。

「やいやいやい！ 一人相手になにしてるんだってばよ！」

ナルトはどうやら林の中で、5人の上級生に虐められている人物を見つけたようだ。大声をあげながら、自分より大きな体の連中に向かっていく。

さすがに分が悪いとサスケもナルトを追いかけ、彼の肩を掴む。

「ナルト！ お前何やって」

「なんだこのチビ？ この白目お化けの仲間か？」

アカデミーの上級生達は、ナルトを見るなり「こいつ、あのナルト

「じゃね？」と悪意に満ちた目で睨み付ける。

だがそんな目には屈しないと睨み返すナルト。

「ナルト君？」

「おっと。いじめられっ子同士仲良くってか？」

どうやら上級生たちのターゲットになっていたのは、日向一族の娘、日向ヒナタのようだった。修行着姿の彼女は、暴力を振るわれたのか土で汚れていた。日向一族という木ノ葉の誇る一族出身である彼女だが、気弱な性格が災いし、こうやって虐められることも多いようだ。

ナルトの声を聴いて、顔をあげた彼女だが、一番体のデカい少年に髪を掴まれていた。

その様子に激怒したナルトが、指を突き差して怒鳴り散らす。

「ぶつとばす！ ヒナタ、ちよつとだけ我慢してろつてばよ!!」

「ひゅー、かつこいい。おい、ぶつ潰してやれ」

5対1となれば、分が悪い。だが目の前のナルトに数の不利など頭がない。たとえ負けてもナルトは、こういう心無い悪を許さない。

一人目の少年の顎を殴ったナルト。二人目が迫ってくるが、その拳を回避して肘を鼻に当てる事で鼻血をふかせる。

しかし、3人目が背後からナルトを羽交い絞めにし、4人目が動けないナルトの顔面を殴ろうと拳を振りかぶる。

「考えて飛び出せウストラトンカチ！」

しかし、拳より先に参戦したサスケの蹴りが顔面に入り、血を噴きながら倒れる。そして、ナルトが羽交い絞めにされたまま、無理やり跳び上がり、がら空きになった腹をサスケの拳が貫く。

「お、おえ」

鳩尾にめり込んだ拳にナルトを解放し嘔吐する少年。最初にナルトに殴られた2人も立ち上がって、サスケとナルトに向かってくる。だが、ナルトとサスケ両者の飛び蹴りを顔面に受け完全にダウンする。

あつという間に4人を制圧したナルトとサスケ。

(なんか、此奴ら弱いつてばよ)

(元々相手にならないような連中だが、こいつと組むとやりやすいな)  
ナルトは、修行する前なら絶対に勝てなかった相手。体の大きさもさることながら、数の暴力にいつも屈していた。けれどどうだろう。サスケという心強い仲間がいるとはいえ、ナルトも相手に劣っていない。少年たちの攻撃が遅く見え、なにより怖くなかった。サスケの助けがなくても、どうにかする自信すらあったのだ。

シャナのしごきに比べれば、いじめっ子たちの暴力など見戯に等しい。いつもやられるだけだったが、実戦慣れするという面で、ナルトは確かに強くなっていた。

一方でサスケも、初めてシャナ以外にコンビネーションを使ったが、思いの外思い通りの動きが出来たことに驚く。規格外の相手をしているせいで、成長を感じ取れなかっただけで、サスケもまた強くなっていた。

「な、なんだよお前ら」

手下の4人が制圧され、気圧されるガキ大将。人質のようにヒナタの髪を掴んだまま、一步下がる。そのせいでヒナタが小さな悲鳴を上げる。その声を聴いて、サスケとナルトがガキ大将に振り返る。

二人して背中合わせに構えを取るナルトとサスケ。

「後はお前だけだぞ、デブ」

「ヒナタを放しやがれ!!」

啖呵を切ったナルトにブチぎれたガキ大将は、ヒナタを放して全力で二人に殴りかかる。

本来なら体格差に任せてボコボコにしているはずだった。

なのに。

「遅いってばよ」

「腹ががら空きだな」

片方に殴り掛かれば、躲かれ、もう片方に後頭部を蹴られる。それに反応し、蹴りをお見舞いすれば、受け止められ。軸足をもう片方に払われる。

そして、仰向けに倒れ込む体勢になったガキ大将の腹を二人して殴り飛ばす。筋力と体格で勝るガキ大将は、自分よりも小さな二人に翻

弄され続け、徐々にボコボコにされていく。

サスケが上半身、ナルトが下半身を重点的に狙い、片方が狙われればフリーの方が攻撃を仕掛ける。その戦法をアカデミー生が出来るはずがないのだ。

これは長い事二人で戦ってきた経験故のコンビネーション。お互いにやることを理解している。とはいえ、突っ込み気味のナルトに合わせられるのは、サスケが周囲をよく見る能力にも長けているからだろう。

「うおああああ」

敗北の色が濃厚になったガキ大将は、3人の戦いを呆然と眺めていたヒナタへと駆け出す。人質にでもする気なのか、ナルトとサスケを完全に無視して突進をする。

「させるか(ってばよ!!)!!」

ナルトとサスケは、無意識に足の裏にチャクラを集中。それを爆発させることで、急加速して走り出し、ガキ大将を追い抜いた後は、地面に素早く吸着。急ブレーキをかけながら、突然前に現れた二人に驚いたガキ大将の顎にアッパーを決める。

それが決め手となり、口から血を噴いたガキ大将の巨体は地面に倒れ伏す。

「よっしやあああ!!!」

喧嘩に勝ったことでナルトが喜ぶ。サスケも、最後のチャクラ吸着と反発の感覚に手ごたえを感じていた。そんな二人を見ていたヒナタ。彼女の無事に気が付いたナルトが、しりもちをついているヒナタに手を伸ばす。

「もう大丈夫だってばよ」

ナルトに手を引き起こされ顔を真っ赤にしたヒナタは、もじもじしながらも小さな声で「あ、ありがとう。ナルト君。それにサスケ君も」と二人に礼を言う。

「ああいう輩も居る。あまり遅くまでは出歩かない事だな」

「そうだな。ヒナタは、大人しいから余計にだってばよ」

ナルトは、ヒナタに家まで送ろうかと尋ねるが、彼女は首を横に

振って「大丈夫。もう大丈夫だから」と改めて二人に頭を下げて家へと帰った。

「やっぱちよつと変な奴」

「は？ お前、あの反応を見て……いや、なんでもない。飯に行くなら、早く行くぞ」

「お、そうだった。ラーメン、ラーメン、一樂のラーメン！」

二人は夜道を歩いて、一樂へと向かった。一樂の店主たちが温かく迎え、二人で虐めっ子から女の子を助けたと報告したナルト。それを聞いたアヤメは、「なにその王道展開」とはしやぎ、漢気に感銘を受けたテウチから、サービスで替え玉を無料にして貰っていた。

これはシャナの居ない間の弟子たちの武勇伝。

## 湯の国

コダマとの戦闘を終えた第四班。

幸いにして、重傷を負っていたシャナだったが、湯の国の医療忍者による治療を受けたことで、大方完治していた。だが、無理は禁物ということで、依頼主である大名の女性の厚意もあり、温泉旅館に宿泊していた。

生まれて初めての高級旅館にテンションの上がつっていたシャナ。

大名家の女性は、Cランク任務にも関わらず、命を懸けて戦ったシャナに感銘を受けていた。死んでいった護衛達の弔いもあり、一週間は湯の国に留まることになった。

シャナと八雲は、旅館の温泉に浸かりながら、疲れを癒していた。露天風呂に浸かりながら、二人して湯治を楽しんでいる。

「いい湯だねシャナちゃん」

「ご飯も美味しいし、もうここに住むのもいいってばね」

鹿威しの音が聞こえる風流な温泉。疲労回復と、骨折に効くという効能を肌で感じる二人。

「ご飯も美味しかったけど、シャナちゃんが戻しちやったのはびつくりしたね」

「白子ってあそこまで苦手だと思わなかったってばね。うー気持ち悪い」

初めて食べる食材の中で、どうしても白子だけは受け入れられなかったシャナ。食べた途端感触と味に嫌悪感を感じ、食べきれなかったのだ。

ちやぶちやぶと湯を楽しんでいるシャナを眺める八雲。

普段は男の子のような服装でわからないが、年齢の割に顔と体も大人びており、正直美人だと感じる。八雲も同じく美人でスタイルもいいほうであるが、隣の芝は青いのだ。

(セクシー系も行けるねシャナちゃん。悩殺できそう。ていうか、でかい。今度服屋に一緒に行こう)

ジーとシャナの肢体を眺めていた八雲だが、シャナは全く我関せずと言った表情だった。同年代で同性ならいろいろ気にするものだと思うが、シャナは男の子寄りの感性なのだろうと肩をすくめる。

肩をすくめながらも、何故かシャナの胸部に手を当てる八雲。

「なんで胸触るってばね？」

「あわよくば、ご利益ないかなって」

そんな会話をしながら、しばらく温泉を満喫した二人。

「いいお湯だけど、あんまり長湯はダメなんだよシャナちゃんは」

「残念だつてばね。……そういえば、トルネは？」

シャナの質問に、八雲の表情が暗くなる。その原因は、温泉に浸かっていた八雲の右腕にある。戦闘中のハプニングとはいえ、仲間に毒蟲を感染させてしまった責任を感じたトルネが塞ぎ込んでしまったのだ。

全く会話がなないわけではないが、事務的な会話を終えると、彼は部屋に閉じこもってしまったのだ。

食事のたびに、顔を出しては八雲やヤマトに謝り、部屋にこもるの繰り返し。

「まだ整理がつかないみたい」

「やっぱり一発殴って」

「なんでシャナちゃんは、殴る事から始めるの？」

拳を構えたシャナを止める八雲。コミュニケーションの方法が変だと指摘され、シャナは首を傾げていた。

二人は、温泉を後にし浴衣姿でお店を巡る事になった。

「トルネ君にも何か買っていこうか？」

「お饅頭売ってるってばね」

シャナが饅頭屋さんを見つけ、そこでお土産として買った分とは別に、買い食いしたかったシャナの提案で買った饅頭。

それがあんな悲劇を引き起こすとは思っていなかった。

—————



少し時間が過ぎ、トルネの部屋にヤマトが訪ねていた。

「入るよ」

「どうぞ」

部屋に入ったヤマトは、部屋の隅で両ひざを抱えているトルネを見つめる。彼を刺激しないように傍に胡坐をかいて座るヤマト。

「そろそろ、気持ちの整理がついたのかと思ってね」

「隊長……俺はやっぱ暗部に行くべきだったんでしょか？」

トルネは、元暗部であるヤマトにそう尋ねた。

トルネは第四班に配属される前に、根のダンゾウの元に引き取られる予定だった。それが突然三代目のおかげで、通常の下忍となった。

だが、本来トルネの術は暗殺向きであり、人を殺すための力だった。

「確かに。君の能力なら暗部でも活躍出来ただろうね」

「……俺は、誰とも組めない人間なんです。今回の事だって……俺は役立たずなうえに、八雲に苦痛をあたえてしまった」

仲間を守りたかった。なのに自分の力が仲間を傷付けてしまった。

「この班なら、俺もやっていける。そう思っていたのに……俺は、俺は」

トルネの悩みは深い。

「僕は君がこの班を大切にしているのも知ってるし、君の責任感が強いのも知ってるよ」

「正直どうすればいいのかわかりません」

自分のコンプレックスがそのまま重く押し掛かる。自分ではなにもし守れない。むしろ守ろうとすることこそ間違いだった。考えがどんどん暗いものになっていく。

ヤマトはトルネの様子を見かねて、肩に手を置こうとした時、トルネの部屋のドアをガンガン叩く音が聞こえる。

ヤマトは、おそろしくこの騒がしさからシヤナだと思った。

「八雲……やめるってばね！ さっきから様子が変だってばね！ 止まらない！」

どうやら違うらしい。ドアを激しく殴っているのは八雲らしい。むしろ声からしてシヤナは止めているのだろう。鍵が掛かっていな

いことに気が付いたのか、ドアノブを回して入ってきた二人。  
必死に八雲を羽交い絞めに行っているシャナだが、ズルズル引き摺られている。

馬鹿力を発揮してはいって来た八雲。浴衣が着崩れており、表情も艶つぽく頬に赤みがさしていた。そして何より重要なのは、目が据わっている事だ。

「おい〜！ いい加減うじうじしてないで、こっちみなさいよ！」

八雲は、彼女の変貌に固まっているトルネの胸ぐらをつかみ上げ、ブンブン振り回す。ヤマトは八雲の変貌に驚愕していた。

「なによ。ちよつと失敗しただけで、もうだめだとか！ ふざけんじゃないわよ」

「や、八雲、急に、どうし」

「どうせならいろいろ観光したいのに、閉じこもってさ。気にしないでって言うてるのに、ずっとずーっつと気にし続けて！ こっちまで気になるわよ!!」

ガクガクとゆすられるトルネ。シャナが懸命に八雲を引きはがそうとしているのに、八雲はびくともしていない。

そして、シャナの買い物袋から既に開いている箱が転がり落ちる。

「シャナ。これを八雲は食べたのかい？」

「そうだってばね！ おすすめの饅頭食べたら、八雲がやつぱり腹立つ、ぶん殴るって走っていったんだってばね」

ヤマトは、箱のパッケージを見て、八雲の様子を理解した。箱には【酒まんじゅう】と書かれていた。アルコール度数が少し高めである。飲酒を子供は出来ないが、食べ物に入れるなら問題ない。旅行中にお酒を飲めない子供たち向けに少しだけ大人な味を体験できる商品だった。

それを食べた八雲は、酒乱状態になっているのだろう。普段から抑圧されたストレスを発散しているのかもしれない。

「本当に済まない」

「だから謝るな！ トルネは何もしてないのに謝ってくるな！」

「しかし、俺のせいで、ぐっ」

謝るなど怒っているのに謝るトルネに頭突きをした八雲。啞然とするトルネ。もろに入った頭突きにシヤナとヤマトも言葉を失う。

「私はね、トルネに守られるだけの役立たずじゃないの。私だつてあなたを守つてあげられるし、一緒に戦つてるの。」

それに私の怪我は私の責任なの！　なのに勝手に背負つて、勝手につぶれないでよ馬鹿」

八雲の言いたかったことはこれなのだ。何故自分の怪我の責任をトルネが背負うのか理解できない。この間、トルネが言っていたように、仲間なのだ。自分だけで背負わないでほしい。

それは仲間を大切にしているのではない。仲間を信用していないのだ。

「私は、一緒に戦いたい。守つてほしい訳じゃない。それに、毒が通じなかったからつて、トルネが無力なわけじゃないでしょ！

もういい加減にしてよお。ばかああああ」

酒に酔い、滅茶苦茶な会話だが、心の声をぶつける八雲。

感極まつたのか、泣き出してしまふ八雲。泣かせたくなどなかった。今の自分の不甲斐なさが八雲を泣かせてしまったのだ。

「……すまな」

「あ？」

「いや、ありがとう。君の言葉に助けられた」

トルネは、八雲の声を聴いて、自分の中の迷いに向き合うことに決めた。少なくとも自分を仲間だと思ひ泣いて怒つてくれる彼女と共に強くなりたいと思つた。

泣きじやくる八雲の頭を撫でながら、トルネは自分の新しい目標を考えていた。

「何だつてばね、この展開」

「うーん、若きかな」

おいてきぼりのシヤナとヤマトは顔を合わせながら、酒まんじゅうの箱を静かに隠したのでつた。八雲に食べられないように。

八雲は酒乱という新しい発見は、後に木ノ葉の毒蓮華として他里ま

で名を轟かせる忍の誕生に繋がるのだった。

## 最強の術

予定日から一週間遅れで第四班は、木ノ葉の里に帰還した。

護衛対象である女性も無事、送り届ける事に成功。再びコダマの襲来を警戒していた面々だが、何事もなく任務を完遂する。

そして何事もなく里に帰った面々。それぞれ解散して自宅に向かう。シヤナだけは、サスケとナルトの修行の成果を見せてもらおうと訓練場に向かった。

「あ、姉ちゃん！ 帰ってきてたのかってばよ！」

修練場の木の天辺にいたナルトがいち早く、シヤナの姿を見つける。ナルトの声に反応し、同じく木の頂上に立っていたサスケもシヤナを見つけて二人とも降りてくる。

「ただいまだってばね。木登り出来るようになってるんだ？」

「おう！」

「退屈していたところだ。次の修業を教えろ」

二人とも得意げにしているが、二人が手を使わず登れるようになったのは、昨日なのだ。本当にギリギリのタイミングで修行を終えていた。

ナルトとサスケは、冷ややかな表情の陰で冷や汗をかいていた。

（あつぶねえ。あと一日早かったら、絶対馬鹿にされてたつてばよ）

（正直イルカには感謝だな）

二人は、木登りの行に難航していた。だが、アカデミーでナルトが木登りの行を行っていると、アカデミーの教師であるイルカがそれを見て、アドバイスをくれた。

そのアドバイスを試したところ、少し高く登れたナルト。ナルトに頼まれたイルカは、休み時間にナルトにコツなどを伝授。ナルトが一人上達しているのに気が付いたサスケはナルトからコツを聞き出し（二楽のラーメンおごり）二人とも修業をやり遂げたのだ。

二人の成長を素直に喜んだシヤナは、いつも通りに修行をしようと言った。

「行くつてばよ姉ちゃん！」

「本は読まないのかよ」

今日は本を読もうとしないシヤナにサスケが挑発的な笑みを向ける。

「今日は、ちよつと厳しめに行こうと思ってる。……写輪眼。術も使っていていいつてばね」

印を結び、写輪眼を発動する。青い写輪眼に睨まれた二人は、合図もなくチャクラを足に集中。そして反発させることで加速する。

二人のチャクラの動きと、取り囲むような連携を写輪眼で追うシヤナ。

(いい動きしてる。きちんとモノにしたんだ)

少し頬が緩みながらも、襲ってくるサスケとナルトに容赦のないカウンターを決めていく。ナルトの鳩尾に膝を入れ、後ろから上段蹴りを放ってきたサスケには、攻撃をしゃがんで回避、後に頬に肘を入れる。

一瞬で二人とも殴り飛ばされ、苦しむ。痛めつける趣味はないが、甘えさせる気は一切ない。

「どうした。終わりつてばね?」

「…、まだまだだつてばよ!!!」

「負けてたまるか」

すぐに起き上がった二人。怪我はしていない。だが立ち上がったのなら、もう一度叩きのめす。

「一発でも当てたら、修行は終わってラーメン奢ってやるつてばね」

だからかかってこい。そう言ったシヤナ。そうは言いつつも、負けるつもりなんて微塵もなかった。

数時間ものあいだ、何度倒れても立ち上がった二人。だが全身ボロボロで満身創痕と言ったありさまだった。

少し呼吸を整えるシヤナと距離を取りながら、ナルトとサスケはシヤナに聞こえないように作戦を立てていた。

「かすりもしないとはな」

「写輪眼本当に反則だつてばよ。……ん！」

全てを見抜く写輪眼。その攻略法を考えていたナルトは、ある方法を思いつき、サスケに耳打ちした。

「馬鹿な。あの術をやるつもりか？」

「イルカ先生にも効いたスゲー術だつてばよ。あれならいけるつてばよ」

「いや無理だろ。絶対に上手く行くわけないぞ」

それでもやるといったナルトに渋々従うサスケ。すかさずクナイを投擲し、火遁の印を結ぶ。そのサスケの前をナルトが爆走する。

ナルトごと火遁で焼くつもりかと、シヤナが困惑する。飛んできたクナイを回避し、ナルトに向かって水遁を放つ準備をする。

すると、サスケは火遁を発動せず構えだけを取っており、シヤナに接近したナルトが印を結んでいる。

「いくつてばよ」

(何する気？ あの印は、変化だったはず)

謎の行動にシヤナは先見の写輪眼を発動した。未来視を使つてナルトの行動を先読みしようとする。だがそれが悪手だったのだ。

「おいろけの術!!」

ナルトは、変化の術を使った。そして、金髪ツインテールのセクシーな美女に変化した。そして、色っぽくシヤナに微笑みかけた。

この術はナルトが開発した術であり、スケベな相手に使うと鼻血を噴き出して倒れるという必殺忍術だった。しかしこの術には致命的な弱点があつた。

男性にしか効果がないのだ。女性のシヤナには一切効果がない。そう思われた。

先見の写輪眼を使つて、おいろけの術を見抜いていたシヤナ。彼女は、セクシー美女になったナルトを見て、噴き出した。

「ぶっ、あはははははははははははは!! 何その変な術!! あはは、うふふふ」

彼女にしては珍しく大声で笑い、腹を抱えながらヒイヒイ言ってい

る。

「おらあー！」

「ははは、ぐっ」

あまりに奇抜な術にツボに入ってしまったシャナは、涙目になりながら膝を叩いて笑っていた。だがその隙にナルトがシャナの顔面に一発入れる。殴られたシャナは、仰向けに倒れて空を見上げる。

「ぶっ、あははは……あ」

殴られても笑い続けるシャナ。彼女の無敵の瞳術。先見の写輪眼の意外な弱点が発覚した瞬間だった。未来を実際に見て学習する事が出来る術、見る事で発動する幻術などは効果がない。しかし見るという関係上、見た情報は全て記憶に残るのだ。

つまり膨大な情報量でナルトのおいろけの術を見てしまい、シャナにとつて面白い術であるために、回避できない術となってしまった。見れば見るほど面白おかしい術で、シャナのツボにはまった結果、腹が痛いほど笑ってしまい、ナルトの一撃を貰ってしまった。

先見の写輪眼は集中力が大事。なのに集中して見てしまうと集中力が乱れるほど爆笑してしまうのだ。しかも、先見の写輪眼を使う以上、見ないということはできない。まさに天敵。

自分が殴られたことに驚くシャナだが、何度も思い出し笑いしてしまい、地面をたたきながら、笑い転げる。

「おれってば、やったってばよー！」

「馬鹿な。あんな術で」

サスケは驚愕していた。馬鹿笑いしているシャナの姿もだが、一撃入れたナルトに。そして、おいろけの術の威力に驚き、無意識に変化の印を結びそうになっていた。

（いや、んなわけあるかー！）

危うくおいろけの術を習得しそうになったサスケだが、理性が総動員して拒否した。あの術でイタチと戦うのは嫌だし、あの術で復讐が成功するのも嫌だ。

「うそだあああ、あははは。あんな術に、ぶっ」

先見の写輪眼まで使ったのに、完敗したシャナは、悔し涙を流しな



がらも少しの間笑い続けた。その後、約束通りラーメンを奢ることに  
なったシヤナ。恐ろしい忍術を開発したナルトに、術について聞き取  
り調査をしながら、シヤナもおいろけの術をマスターしたのだった。

この姉弟は、どうなってるんだと横で冷やややかな視線を送るサスケ  
を無視して、悔しがりながらラーメンを啜る姉と術の効力を自慢する  
弟。

後に意外性ナンバーワンのドタバタ忍者と呼ばれるナルト。その  
武勇伝の一つとして、先見の写輪眼を正面から打ち破ったという伝説  
が追加されたのだった。

## それぞれの修行

湯の国の任務からしばらくして、ヤマトとトルネは、ある人物を訪ねるために、木ノ葉の里の団子屋に向かっていた。

そこで待ち合わせをすることになっていたからだ。

約束の時間よりかなり早く到着した二人だったが、待ち合わせ場所には、先にその人物がいたようだ。

「お、早かったなヤマト」

「ガイさん。お待たせしてすみません」

その人物は、逆立ちで腕立てをしており、太い眉とおかっぱ頭、全身緑のタイツを着ている変わった人だった。だがこの人物こそがトルネがヤマトに会いたいと願いだした相手である。

逆立ちを止め、トルネを見た人物。それは木ノ葉の忍の中でも体術のスペシャリストである上忍、マイト・ガイだった。

「ヤマトから話は聞いているぞ。俺に体術の稽古をつけてほしいんだったか？」

「はいー」

いい返事をしたトルネに、歯を見せながら笑うガイ。

「ヤマト。この子を預かっていいのか？」

「しばらくは任務もないので。出来る限りでかまいませんがね」

ヤマトは、湯の国の一件以来、トルネに体術の指導を頼まれたが体術が優れているわけではない彼は、どうせならと自身の先輩である力カシにガイへと取り次いでもらった。

後は頑張るんだよとトルネに伝え、ヤマトは自身に与えられた任務の為にその場を後にする。

「ところで、生まれは油女一族だったか？」

「はい」

「あの一族の人間が、体術を極めるのは珍しいと思うんだが、理由はあるのか？」

ガイの質問はもつともだ。蟲使いの一族であり、戦闘のすべてを蟲で行う彼らは、体術を鍛える必要性が低い。だがトルネは一族でも特

異体質であり、近接戦闘がメインだと伝える。そして、自分がガイに師事したかった理由も伝えた。

仲間たちと一緒に戦うため、彼女たちを守るため、自分は前に出て戦いたいのだと。安心して彼女たちが戦えるように。湯の国での失態も併せて説明する。

静かにトルネの胸の内を聞かされたガイ。彼はトルネが話を終わるとサムズアップする。

「お前の気持ち。よくわかった。静かなタイプかと思ったが、いい青春してるなお前！」

「…青春ですか？」

「そうだ。お前を鍛えるにあたって、幾つか言うことはあるが……俺の修行は厳しいぞ」

トルネの覚悟を試すガイ。ガイの質問にトルネは間髪を容れず答える。

「覚悟の上です。どうか俺を強くしてください」

「(冷静ながらも胸に秘めた思いは熱い。いい子じゃないか)。よし、それなら手始めに修練場を30周だ。それも一周一周ペースを上げていく」

「はー」

覚悟のほどはわかった。この子は途中で投げ出すような子ではない。なればこそ、全力で応えるのが自分の役目だとガイは理解した。

油女トルネは、体術のスペシャリスト、マイト・ガイの弟子となった。

ガイの熱心な指導とトルネの努力は、彼の体術の実力をメキメキと伸ばす切っ掛けとなった。彼との修行の日々は、彼が班員を持つまで続けられた。

—————

一方で鞍馬八雲はと言えば、トルネが本格的な修行を始めたと聞いて、元より自分の指導をしてきていた人物。夕日紅の元を訪ねた。

木ノ葉の誇る幻術使いである彼女なら、自分の弱点を解決してくれ

るはず。正直言えば、会いたくない相手でもある。

もし八雲が下忍になれなかった場合、八雲の術は彼女によって完全に封印される約束だったのだ。

故に八雲は二度と彼女に会うことはないと思っていたのだが、自分から彼女を呼び出すことになるとは思っても居なかった。

先に待ち合わせ場所にいた八雲に声をかけてくる人が居た。

「や、八雲」

「紅先生」

八雲が紅を先生と呼ぶと、彼女は複雑そうな表情を取った。

「まだ、私を先生と呼んでくれるのね」

「……正直、私は先生を、許しきれません」

「それはそうよ。貴方に言ったこと、行おうとしたことは、私を恨んでしかるべきことだもの」

八雲の専任教師だった紅は、ある理由から八雲の忍としての道を諦めさせようとした。だが三代目が最後のチャンスを与えてみると言い、彼女は見事に下忍になった。

自分では八雲を忍にしてあげる事が出来なかった後悔と、彼女の力を封印しなければいけなくなった後悔が紅の表情に影を落とす。

まだ八雲の中にあつた問題については、根本的な解決をしていない。けれども仲間と一緒に生活する彼女は、自分の中に闇を溜め込まなくなっていた。そして班員に、八雲の力を封じ込める事のできるシヤナが居るのも大きかった。

むしろ今の楽しそうに生きる彼女の表情を見れば、八雲の可能性を諦めた紅に掛かる誤った選択の責任は重いのだろう。

「今日はどうしたの？ 私に会いたいだなんて」

「実は、お願いがあるんです」

「お願い？」

自分の胸に手を当て、頭を下げながら八雲は紅に「私に幻術を教えてくださいほしいんです」と頼んだ。

「わ、私に？ でも八雲の幻術は、十分以上に強力なはずよ」

「私の幻術は、時間がかかりすぎるんです。できれば素早く幻術を掛

けられるようになりたいんです」

必殺の幻術も、常にシヤナとトルネが戦ってくれているからこそ、発動できるだけ。もし一人になった場合、八雲は一番無力だろう。

「つまり、幻術で幻術の為の時間稼ぎがしたいってことね？」

「そうです。トルネ君もシヤナちゃんも、一人一人がものすごく強くて、いつも守ってもらってるだけになって。二人は私の事を凄いつて言ってくれるけど、私はもつと強くなりたいんです」

(あの頃の八雲は、もういないのね)

まっすぐに自分を見つめ、頑張りたいという八雲。体が弱く自分に自信がなかった頃の少女はもういない。

「いいわ。任務の合間になるだろうけど、それでも良ければ教えてあげる」

「本当ですか！」

八雲は喜んだ。きつと第四班の二人はもつと強くなる。だから自分も決して置いて行かれないように食らいついて行きたいのだ。

ちようどトルネと同時期に八雲も紅からの指導を受ける事になった。

幻術使いとして有名な紅は、八雲の覚悟に応え、実戦的な幻術の使い方を伝授していった。

一方その頃。シヤナと言えば、サスケとナルトそれぞれに術を指導していた。

二人のチャクラ属性を見るために、紙を渡し、チャクラ性質を確認した。結果、ナルトの紙は斬れ、サスケの紙は燃え、しわくちやになっていた。

結果的にナルトは風遁。サスケは火遁と雷遁の性質を持っていることが分かった。

そこで影分身を行い、それぞれ別の術を教える事となった。サスケには、シヤナが得意とする雷遁・雷掌を伝授することになった。

威力は低いが相手を痺れさせる性質上、サスケのテクニクにさらに磨きがかかる。効力と利便性を聞いたサスケは、その修業に取り組

んだ。

案外気に入ったのか、力の入りようが違った。

「あのさ、あのさ。俺にはどんな術教えてくれるんだってばよ」

ナルトは姉を見上げながら、新術について目を輝かせる。シヤナはそんなナルトの前で、掌を出した。

「風遁・旋風玉<sup>つむじだま</sup>」

シヤナの掌に風遁のチャクラが渦巻いた球が完成する。それをシヤナは隣にあつた木にぶつける。すると、木の一部がスレッツジハンマーで殴られたように潰れる。

「何その術」

「私が考えた術だつてばね。まだまだ完成には程遠いけど、不意打ちにはなる。威力も体術よりははるかに高い」

シヤナがその術を開発した経緯は、亡き父だ。父の修行風景を見たことのあるシヤナは、どうにか父の使っていた術を再現しようとした結果生まれたのだ。だが父の術を見よう見まねで再現しただけで、威力も何もかもが違う。

本来なら教えてほしかった術であるが、父にまだ早いと断られた。だからシヤナが再現するしかない。

父の跡を継ぐのは自分だと思っていた。故にシヤナは父の術を全て会得したい。けれど今はもういない父に師事を仰ぐことはできず、自分で開発するしかない。

「すつげーすつげーってばよ」

「ふふ。けど性質変化の修行は難しいってばね」

チャクラの多いナルトなら、この術も威力が上がるはず。シヤナは粒遁があるため、旋風玉は使わない。けれど父の息子であるナルトにこの術を教えられるのは、なんとという運命だろう。

「よろしく願いますってばよー」

「いいだろう。だが長くなるとは思っておくってばね」

長丁場の修行になる。けれど、ナルトにとって確かな武器になるのなら、教えるしかない。幸い印もいらす、発動できるため、初級には

いいだろう。

そして、ナルトとサスケの修行を影分身に任せたシャナは、一人で修行を行う。シャナに術を教える事の出来る人間はいない。故に、自分の力で強くなるしかない。

うちのはの修練場の地下に苦手な土遁で作った地下室。そこでチャクラを研ぎ澄ませ、修行を続ける。何度も何度も自分の影分身を倒しては、さらに強くなった分身を倒す独自の修行法。

(あの狐と仮面の男を殺すには、まだまだ術が必要だってばね)

地下室の壁には、狐の壁画と、仮面の男の壁画が血で描かれており、恨みの深さが突き刺されたクナイで窺い知れる。

平和な生活。新しい仲間や弟子、家族に囲まれたシャナの心の中には、いまだに消える事のない闇の炎がしつかりと燃え盛っていた。

どうにかしてナルトから九尾を引きはがし、そして九尾を狙って現れた仮面の男を殺す。それはシャナに刻まれた使命だから。ナルトを守るために。

青い写輪眼が万華鏡に変わり、シャナが自分の瞳術を目覚めさせる修業が始まった。

(力が全てだってばね。あのコダマとかいうやつも、次は仕留める)

誰にも知られない中で、少女の闇はより深くなっていた。

## 生物兵器

シヤナ達に敗れてから、しばらくの間任務に就けなかったコダマ。ペインからの指導を受けながら、自分の力を磨いた。

とはいえ、集中力のないコダマは、すぐに暁のメンバー相手に絡みに行ってしまう。大蛇丸以外のメンバーとの交流をしていたコダマは、彼らから術を教えてもらうことも少なくなかった。

当然拒まれることも多かったが、しつこく懇願し続ける彼女に教えた方が早いと感じる人間が多数だった。

そんな彼女は、今雨の国の室内公園で10人近い子供たちに壁の隅まで追い詰められていた。

「いやー！ 皆でコダマを虐めないでー！ー！ー！」

人形を抱きしめながら、この世の終わりだというように叫ぶコダマ。

だが子供たちの目は非常に冷ややかで、コダマを責めた。

「繋ぎ鬼してるんだから、最後まで逃げたらこうなるでしょ」

「コダマちゃんずるいよそういうの！」

「虐めてないし！」

繋ぎ鬼というのは、鬼ごっこ的一种でタッチされたら手をつなぎ鬼が大きくなる遊びである。同年代の子供達と遊んでいたコダマはいつも最後まで逃げ切るも、追い詰められるのがお決まりであった。

いつも囲まれるため、最後の抵抗として被害者ぶるのである。

しかし、子供の勝負の世界はシビアである。情けなどない。

「えへへ。だめか〜」

ついに捕まってしまう、やり直しとなる。だがそのたびに最後に壁に追い詰められるコダマ。彼女の能力なら逃げ切るのは容易いが、同年代の子供を怪我させる訳にもいかず、年齢相応の力しか出していないのだ。

子供達と一緒にってはしやぐコダマの様子を見ていた暁のメンバーの二人。うちはイタチと新メンバーである干柿鬼鮫が遠くから



眺めていた。

「いやはや。ああしてみると普通の子供なんですがねえ」

「そうだな」

「昨日まで、全身血まみれになるまで殺しまくってた子と同じとは思えませんねえ」

コダマが鬼になり、逃げ惑う子供たちを追いかける。一番最初にターゲットにされた子が、コダマによってタッチされた瞬間。鬼鮫の脳裏には昨日の光景が写った。

「ぐああああああ」

コダマの巨大な腕で地面に叩きつぶされた男性。血の池となった彼の姿に武装した50人を超える人間達は戦慄する。それぞれが武器を構えているが、頭から翼を生やし、両腕が巨大でまるで鮫肌のような鱗に覆われた怪物に恐れをなしている。

愛らしい少女の顔をしていることが、なおのこと恐怖を増強させる。

「いっばいだねー!」

少女は翼で羽ばたき、空中に飛びあがると羽根を発射。無数の羽根手裏剣によって男たちが突き刺されていく。少しだけ数を減らしたコダマは、猛スピードで男たち目掛けて接近。剛腕を振るい、蹴散らしていく。武器を構えた男たちの反撃も、新たに腕に追加されたサメ肌のような鱗が阻む。そして、腕を振るえば、鱗に皮膚や肉を削り取られた男が出来上がる。

手あたり次第に掴んでは、叩き潰し、削り殺し、握りつぶすコダマ。その猛威に逃げ出す男達。だが逃走は許さないと羽根手裏剣を飛ばして背中を貫いていく。

その戦いぶりを観察させられていたのは、イタチと鬼鮫だった。新しいツーマンセルになった彼らは、今回のコダマの見張りだった。組織に入るなり、コダマに懐かれた鬼鮫はひどく困惑しており、彼女が大名暗殺の依頼に同行すると聞き、さすがにどうかと進言した。

だがコダマの能力を知っている面々は「見て居ればわかる」とだけ

説明。

自身の武器であり生きた忍刀・鮫肌がペットのように懐いている少女を引き連れ、土の国の大名を殺しに来た面々。コダマが一人でやると言い始め、何とか言い聞かせようとした鬼鮫だったが、猛スピードで大名家の籠を襲いに行ったコダマ。

護衛の忍達すらも殺戮していく姿に唾然とする。

「恐ろしいですね」

「あいつは強いと言ったはずだ」

「それはそうですが。しかもあの腕……私の鮫肌を再現してるんでしょうか」

自分の武器と似た体質になっているコダマ。そのことを尋ねれば「おそらくそうだろう」と返された。コダマの能力は未知数だが、常に強くなろうとしている。

実際防御力と殺傷能力は向上し、生物兵器としての性能が向上している。

あらかた護衛を殺し終えた頃には、全身血まみれの少女が完成している。元気にハキハキとしながら人の命を摘み取っていく狂気といったらない。

大名家の籠を狙って羽根手裏剣を掃射したコダマ。

だが籠を守るように地面から石が盛り上がって巨大な盾となる。その盾に攻撃を阻まれたコダマは、首を傾げる。しかし、彼女の足元にクナイが落下。クナイに括りつけられた袋が爆発し、爆発に巻き込まれる。

「おっと、新手ですね。行きますかイタチさん」

「待て。まだいい」

助太刀に行こうとする鬼鮫をイタチが止める。実際、腕でガードしていたコダマは無傷であった。

(何この匂い……変なの)

コダマは爆発にまぎれた僅かな匂いに気が付いて、首を傾げる。だが次の瞬間、花びらがコダマの周囲を舞い、周囲が見えなくなる。「やれ、コンゴウ」

女性の声が聞こえ、そのあと野太い男性の音が聞こえる。コダマは写輪眼で花びらが幻術だと察知し、すぐに解除する。すると自分に拳を振るおうとしている大男が見えた。

「ぬおおお!! 何ー!」

「きやあああ」

渾身の一撃を、小柄な少女に受け止められた男は驚愕する。巨大な腕ではなく小さくした腕で受け止められ、力負けしたのか巨体ごと投げ飛ばされる。すさまじい勢いで放り投げられた大男は、コダマに接近して幻術を掛けていた小柄な少女に激突。少女は戦闘不能となる。

「おい、毒が効いてないのか此奴」

すぐに起き上がった大男だったが、地面を蹴って急接近したコダマの乱打を受けて吹き飛ばされる。彼の言った毒というのは、先程クナイに括りつけられた袋であり、無臭の神経毒だった。だが毒をもつもしない頑強さを持つコダマには無力だった。

「とどめ、とどめー!」

自分で作った歌を歌いながら両腕を巨大化させたコダマ。そのまま男を殺そうとしたが、無数の石が剛速球となってコダマを襲う。写輪眼で石の軌道を見ていたコダマが、それらを回避していると、石の陰から接近した赤い髪に手の甲に目がついた男に腕を触られる。

すると、触られたコダマの巨大な腕が石に変わっていき、重みで落下。砕け散ってしまう。

片腕を失ったコダマは、その術を観察しながら距離を取る。

「ずいぶん好き勝手やってくれたな小娘」

「なにこれ」

石化して崩れた腕を確認しながらコダマは男を見つめる。男はコダマを警戒しながら、右手の甲にある目を開眼し、チャクラを込めていく。それは先程と違い、一瞬でコダマを石に変えるつもりだからだ。

その男に見覚えのあった鬼鮫。

「あいつは、岩隠れのイシダテですね。手強いらしいですよ」

鬼鮫が知っているレベルの忍。だがイタチが動くこうとしないこと

で、鬼鮫もコダマの様子を見守る事しかできない。

イシダテの石化する腕を警戒しながら回避し続けるコダマ。

不意打ちを食らってしまったが、相手の目を見るコダマにイシダテの術は当たらない。

「なんで当たらないんだって思ってるねおじちゃん」

「なに？」

「何を考えてやがる薄気味の悪いガキ？ ふふ、なんで俺の考えが違って？」

攻撃を回避しながら、イシダテの心の声を口にし、小馬鹿にしていくコダマ。小さな少女に舐められていると悟ったイシダテは、額に青筋を浮かべながら右手にさらにチャクラを集中。地面を殴りつけ、巨大な石礫の弾丸を飛ばし続ける。

けれど、イシダテの目を見ていたコダマには、一発も当たることなく回避される。

そして、石化して砕いたはずの腕が瞬時に再生する。あまりに異様な力にイシダテも警戒したのか、一歩下がってしまう。

「そろそろ終わりにするよ？」

「黙れ!!」

プライドを傷付けられ、コダマの体に触れようとしたイシダテ。だが、動きを見切ったコダマによって手首をつかまれ、怪力によってブンブンと振り回される。その時、手首をへし折られ、意識を取り戻していた大男の方向に巨大化した腕で殴り飛ばされる。

殴り飛ばされたイシダテの体を大男が受け止める。だがダメージが大きいのか血反吐を吐いて蹲っていた。

「おじちゃん結構強いね。けど、もうつまんないや」

石化は面白かった。だがそれ以外は特色のない相手。同じ青い写輪眼を持っていたお姉ちゃんとは大きく違う。コダマの人生に敗北の二文字を刻んだ強いお姉ちゃん。あの人にもう一度会いたい、お話ししたい、戦いたい。あらゆる興味が同じ目を持っていたシャナに向けられている。

湯の国での敗北以来、コダマはシャナに執着していた。天涯孤独

だった自分と同じ目を持ち、自分よりも強いシヤナこそが、自分の本当の家族ではないだろうか。

彼女の中では、今は敵だがいつか暁に入ってほしいとすら思っていた。人懐っこいコダマの性格は寂しさの表れ。大切にしてくれるがどこか距離のある暁のメンバーとは違う、家族を求めている。

### 「粒遁・天墜の術」

すでに興味のない人たちを無視して。コダマは、口の前にチャクラ粒子の塊を作り、シヤナの天倫と同じ要領で粒子弾として発射した。コダマの膨大なチャクラをチャージした粒子弾は、岩でできた盾に守られた大名の籠を跡形もなく消し飛ばした。

岩の盾など無意味だと言わんばかりに膨大な熱と威力でもって吹き飛ばした一撃。まるで尾獣の放つ、尾獣玉のような威力のそれは、イシダテたちが護衛していた大名をこの世から蒸発させた。

速度では、シヤナの術に劣るが、攻撃範囲の面ではコダマの方が上だった。

すさまじい爆風に戦意喪失したイシダテと大男は、コダマが死体がないかと確認している間に、気絶した少女を抱えて逃げ延びた。護衛対象の大名を殺されたことで彼らは、里を追われることになったが、それはまた別の話。

まさに怪物と言ったコダマの暴れっぷりに、鬼鮫は唾然とさせられたのを今でも覚えている。

そんな暴れっぷりの彼女は、雨の国に帰るなり、同い年の子供達と戯れて全力で遊んでいるのだ。

彼女たちがコダマの正体を知れば、いったいどうなることやら。

「何者なんですかね、コダマは」

「全くわからない。ただ、俺たちの仲間だということだけは確かなんだろう」

正体不明のコダマ。後に生物兵器コダマと呼ばれる彼女の正体を知る物は、その場にはいなかった。

## 日向の少年

第四班はそれぞれの能力を向上させながら、あらゆるCとDランク任務をこなし、稀にAランク任務もこなしていた。そして修業にも励み、何年かが過ぎた。

すでに新米ではなく、経験を重ね続けた彼らは、岩隠れでの中忍試験の話を受けていた。けれどもこれまで4回もの中忍試験同様に、彼らは推薦を蹴った。

わざわざ他所の国に行つてまで、任務の難易度の上がり、さらに責任も重くなる中忍になりたくないというシャナ。

トルネも特段中忍に興味が無いといい、乗り気ではなかった。

一人やる気に満ち溢れていた八雲だったが、最初の受験で雷の国に向かった際、気候の変化から体調を崩し受験できなかった。その日は一晩中泣いていた八雲だった。

そして、トルネは、八雲の事を考え、無理に他所の国に行かず、火の国で行われる中忍試験を待とうと言った。ホームグラウンドであるし、長距離移動による八雲の体調の悪化も防げると提案した。

一刻も早く上忍になりたかった八雲だが、自分の体調のせいで二人に負担を掛けたくないという修行に打ち込んでいた。

一方でヤマトは里の上層部から、優秀な第四班をいつまで下忍にしておくつもりだと圧力を掛けられていた。けれども彼らが望まないなら、無理強いなどできない。胃が痛くなるような板挟みにあいなながらも、隊長として彼らを守っていた。

そんな彼らをよく思わない人間も多かった。実力派と持て囃されながらも簡単な任務しか選ばない。忍者を舐めているとしか取れない態度に、腹が立つ人間がいる。

特にアカデミーに入らなかつたという話は、アカデミー出身の下忍たちからすれば、目の上のたん瘤であった。

第四班の面々が久しぶりに集まり、全員で修行をしていた。

黒い忍装束と黒い手袋は同じだが、数年間で体格が良くなり、筋肉質ながらもしなやかな肉体を持つトルネ。

彼は、同じく数年で身長が伸び、着物のような忍装束を着る八雲と体術で対峙していた。以前と違うのは、八雲は指輪を全ての指に付けているところだろう。優しそうな雰囲気を持つ美少女に成長した彼女は、ロングの髪をポニーテールにしていた。

どちらも15歳となり、成長期であり男性らしく、女性らしく成長していた。

その二人の体術を見守るのは髪をサイドテール、額にオレンジのゴーグル、青い忍装束を着たシャナが居た。彼女も15歳となり、女性らしい体つきとなり、美女と言っても差し支えなかった。

服のデザインもオビトのおさがりのような服から、女性らしい物へと変わっていた。

両足には、ダガーのような小刀がホルスターに入れられており、彼女の戦闘スタイルを物語っていた。

第四班、結成から数年の時を共に過ごした彼らは、良き仲間であった。

「いぞ八雲。息も上がっていないな」

「これくらいは、ね」

体術で一番延びているのは、トルネであり、写輪眼がなければシャナでも体術では敵わない。

そんな彼に打ち込み続けている八雲。苦手な体術も人並みに扱えるようになり、スタミナも増えた。

トルネは、八雲の蹴りや拳を受け止めながら、希に反撃し、八雲もそれを回避するを繰り返していた。

そんな二人を眺めていたシャナは、手元のパンフレットに目を通した。

風雲姫シリーズ完結編と書かれたそれは、シャナが大好きな映画の歴史と最新作の情報が記載されていた。

八雲と映画館に初めて行ったシャナは、映画を大層気に入った。恋愛映画からアクションまで、あらゆる映画を見に行く程、お気に入りだった。

趣味になったそれは、シャナの生活を大きく変化させたと言って良

い。

「早く、みたい気もするし……でも終わってほしくないってばね」

今一番はまつている作品ゆえ、そんな葛藤があった。パラパラとパンフレットを読んでいる間に、汗だくになった八雲が組手を終える。相手をしてきたトルネは涼しい顔をしているのが、二人の体力の差を表している。

八雲がタオルで汗を拭いていると、突然3人の子供達が現れる。

「あんた達が、アカデミー免除組っていうのは。噂を聞いていたので見に来てみれば……この程度か」

一番気の強そうな少年は、瞳の色が白であった。そんな特徴的な目を持つ一族は一つしかない。うちは一族と同じ三大瞳術の一つ、白眼を持つ日向一族である。

そういえば、今年のルーキーに日向一族の天才が居ると話題になってたなど、八雲は思い出す。

悪意のある視線に、三人は何事かと目を向ける。

腕を組みながら、シヤナ達を見定める日向の少年。そんな彼についできているのは、中華風な服装とお団子頭の少女と濃い眉毛とおかっぱ頭の目立つ少年。

「ネジ。急に失礼じゃないですか。先輩方に」

「こいつらが先輩なのは、卑怯な手を使って忍者になったからだろうか？ 実力はたかが知れている」

「もうー。やめてよネジ」

少女と真面目そうな少年に止められるも、日向ネジは、止まらない。

彼は、特別扱いで下忍になった第四班の事をよく思っていない人間だった。アカデミーで学ぶことなどないと思っていたネジは、自分も同じように下忍にしてくれと頼んだ。しかし、彼らは特別な例で、ネジはアカデミーを卒業するしかなかった。

故に日向一族でも宗家すら超える才能ある自分が特別枠に選ばれなかったことにプライドを傷付けられた。下忍になり日も浅い彼だが、ちようど第四班の居場所を聞いた事で、見定めに来たのだ。

だが結果は落胆だ。憤りすら覚えた。特にくノ一の動きはひどく、



アカデミー生に毛が生えた程度だった。のんきに本を読む女と、体術の腕前は散々な女。唯一、体格のいい男がいるが、そいつも敵ではないと踏んでいた。

全力は出していないようだが、動きは早くはない。

唯一警戒していたのは、うちは一族の生き残りである女だけ。一人本を読んでいる彼女だけが、自分に抵抗できそうな相手だと感じていた。

「随分と失礼だな」

日向ネジの言葉にトルネが反応する。

「何か間違いがあるか？ 言葉の通りだろう」

「自分の価値観だけで相手を判断してはいけない」

トルネの注意にも似た言葉。だがネジは鼻で笑い、挑発するように白眼を発動する。目の周りの血管が浮き上がり、かなりの遠方まで360度全てを見通す透視眼。その目で全てを目視する彼は、トルネを挑発する。

「卑怯な手を使い忍者になったようだが、中忍にもなれていないお前たちなど、その程度だということだ」

「はあ」

溜息を吐いて首を振るトルネ。その様子に「なんだ凶星か？ 腹が立ったなら、かかって来てもかまわない。なんなら三人纏めて相手してやる」と強気に出ている。

実際アカデミーでは負け知らずで、ナンバーワンルーキーの名を聞いた先輩達に絡まれたこともあったが、全て蹴散らしてきた。

「そこまで言うなら、俺が相手になろう」

「いや、私が相手するよ。模擬戦でいいよね。なんでもありの」

トルネを遮って八雲が模擬戦を提案する。突然口出ししてきた八雲にネジは、「あんたじゃ相手にならない」と彼女の動きを見ていたが故に断った。

八雲は、ネジから見て弱く、下手に戦えば怪我をさせるだけだからだ。

「確かに私は、二人より弱いよ。けど君よりは強い」

「あんたが幻術使いなのは知っている。だが、俺の白眼にちんけな幻術など効きはしない。引っ込んでいろ」

眼中にないと言われた八雲だが、優しく微笑みながら、「恐いんだ」と呟いた。

「なんだと?」

「恐いんでしょ。幻術にかけられるのが。だから理由をつけて逃げろんだよね。日向一族の天才といえども、恐いものはあるよね」

「もう一度言ってみろ」

すぐにでも攻撃態勢に入りそうなネジ。流石に無視できないとシヤナも本を閉じ、青い写輪眼でネジを見つめる。

しかし、八雲は続ける。

「日向一族なんて、その程度だったんだね」

「日向を馬鹿にするのか。没落した鞍馬一族の人間風情が」

「なら、やろうよ。日向ネジ君」

八雲の誘いにネジは乗った。

「いいだろう。後悔しても俺は知らん」

「おい八雲。俺がやる。だから君は……」

トルネの提案を首を横に振りながら、「私は大丈夫」といい拒否した八雲。

「その身の程知らずはすぐに終わらせるさ。そしたら次はお前達だ」

ネジはそう言いながら、シヤナとトルネを睨み付ける。一方八雲は、心配そうに見守る少女、テンテンに審判を頼んだ。

彼はこちら側の人間が審判をするのを嫌がるだろうからと。

「お姉さん……ネジは本当に強いんです。だから、だから」

「ありがとう。でも見ててね。くの一を馬鹿にするとどうなるかを」

「ぐ、ご武運を」

優しく接してくれる八雲を心配するテンテンと応援する少年ロック・リー。

ネジと八雲が距離をとって向かい合った。白眼を発動しているネジは、柔拳の構えを取る。一方、八雲は自分の手につけられた指輪を弄っていた。

二人の戦いが始まるという時。再び本を読み直すシャナ。そして、八雲を止められなかったトルネ。

(私がやれば良かったってばね)

自分なら程よく生意気盛りの天才君を追い払えたのにと考えるシャナ。一方トルネは、ものすごく心配していた。

(俺が一番ましなんだ少年。お前はハズレくじを引いてしまったんだ)

第四班でもっとも恐ろしいのは、シャナやトルネではなく、ぶちギレた八雲なのだ。

トルネは、日向の少年の未来を案じていた。

## 天花乱墜の術

審判に指定されたテンテンは、緊張した面持ちで向かい合う二人を見つめる。

「では、いざ尋常に。はじめ」

開始の合図に、走り出したのはネジだった。相手が幻術使いだと分かっている以上、時間をかける意味はない。それに接近戦タイプの彼は、速攻で勝負をつけるには近づくしかない。

印すら結ぶ暇もなく、柔拳をお見舞いする。柔拳は、チャクラを相手の体内に放出し、内臓にダメージを与える体術であり、必殺の威力がある。

下忍とは思えない動きで接近するネジ。さすがに言うだけのことはあると、トルネとシヤナが彼を評価する。近付かれれば、八雲では一秒と持たないだろう。

「終わりだ」

「ふふ」

印を結びすらせず、八雲は自分の小指の指輪を外した。

謎の動きだが、白眼で全てを捉えているネジは、そのままあっすぐ進もうとして、足元に突然発生した大穴に立ちどまってしまう。

本能的に立ち止まってしまったネジだが、それが幻術だとすぐにわかる。虚を突かれた。印すら結ばずにどうやって幻術を使ったのかはわからない。だが、所詮幻術。白眼の瞳力の前には、まやかしではないと幻術を解除すれば、なんてことはない。穴など開いていなかった。

だが、幻術が解かれると同時に投げられたクナイがネジに接近する。

（あまい！）

いい不意打ちだが、ネジはクナイを全て見切って回避しようとした。だがその瞬間に八雲は指輪を一つ外す。そうすれば投げられたクナイが何本かは、見えなくなり、幻のクナイが無数に発生した。

幻術で数を増やすと同時に実体を持つクナイをカモフラージュす

るいやらしい戦法だった。

覚えていたクナイの位置から軌道を予測。幻術にかけられたままではあるが、本物のクナイは回避できた。

（あの指輪がタネか）

瞬間的に幻術を掛けてくる八雲の戦術。その仕組みはわからないが、指輪を外せば幻術が発動するのは確かだ。だが、そうと分かれば指輪を外させなければいい。

ネジはホルスターからクナイを抜いて投擲。指輪に触れていた八雲は、突然のクナイ攻撃に自分のクナイを持って弾くことで対応。

しかし、指輪に触れる事が出来ずにネジの接近を許してしまう。慌てて指輪を一つ抜いた八雲。瞬間、ネジの体を巨大な植物が拘束する。それは幻術であるが、相手の動きを縛る類の幻術であった。

だが、すぐに幻術を解除したネジは、渾身の掌底を八雲の腹部に放つ。

白眼で相手が幻術でないと見抜き、更に肉体を捉えた確かな手ごたえに勝利を確信する。

「ぐっ、が、あがは」

「横隔膜を麻痺させた。しばらく息はまともにできない」

攻撃をくらい、どうにか立ち上がった八雲だったが息が出来ず地面に蹲る。その姿を当然の結果だと断じて審判であるテンテンの方向を向くネジ。

「俺の勝ちだ。テンテン勝利宣言を」

ネジがそういうと、テンテンは驚愕した表情で何も言わない。何があつたんだと白眼で周囲を観察するも、ネジと倒れた八雲だけだ。

イライラし始めたネジが「はやくしろ」と怒鳴りそうになった時。

突然背中に温もりと柔らかさを感じ、首筋に冷たく固い感触が当てられる。

「ザシュ」

耳元に小さな声で首を切った擬音を発せられた。

ネジの背中を取ったのは、八雲だった。ネジの首に手を回し頸動脈にクナイを当てている。完全に生殺与奪を握られたネジ。だが、彼の

目には、倒れている八雲の姿と背後を取る八雲の二人が見える。

まさか影分身かと驚いたネジだったが、そんな考えを否定するように蹲っていた八雲が、霞のように消えていく。

そこまで見てさつき自分が倒したのは、八雲の幻術だと気が付く。

(馬鹿な。白眼で観察し、手ごたえもあつたのに幻術だと)

確かに攻撃を当てたはずなのだ。幻術なら何かしらの違和感があつてしかるべきなのに、それが一切なかった。

呆然と立ち尽くすネジの背後を取りながら怪しく微笑む八雲。その艶っぽい姿にロック・リーは頬を紅くし、テンテンは感動している様子だった。

「私の勝ち」

「勝者、八雲さんー」

完璧な勝利だった。勝利宣言を受けたことでクナイを仕舞い、ネジの背中をポンポン叩いた八雲。涼しい顔で仲間の所に帰ろうとした彼女だが、プライドを傷付けられ、頭に血の上ったネジが、殺意を込めて柔拳を背後から繰り出そうとした。

だが、その動きを読んでいたのか八雲が再び指輪を外そうとする。

結果的にネジの一撃は、八雲に当たらなかった。

「模擬戦は終わったと思うが、不意打ちを行うのが日向の流儀なのか？」

ネジはいつの間にか背後に接近していたトルネに腕を捻られ拘束されていた。そして、同じくネジが反応できない速度で接近したシャナがダガーをネジの首に当てており、完全に身動きが取れなくされた。

「……」

「まだやり足りないなら、私が相手になってやるってばね」

自分の目では一切追えない速度で動いた二人。トルネとシャナの両方がいつでも自分を殺せると知り、ネジは唇を噛みしめながら「まいった」と白旗をあげた。二人が駆けつけたことで八雲は「ありがとう二人とも」と外そうとした指輪を元に戻していた。

ただ自分でも対応できたのになど不満気でもあつた。

もし八雲が次の幻術を使えば、ネジは精神と肉体に大ダメージを負っていただろう。それは下忍にはとても耐えきれない規模のものだ。

八雲を助けに来たシャナとネジを助けに来たトルネ。心に傷を負わせるのはあまりに酷だと、考えたトルネ。ネジの八雲を見下す態度に腹が立ったシャナは、とことん縛りを追加して屈辱を味わわせてやろうとしていたのだが、それも察知したトルネが止めた。

何年も一緒に居れば性格が掴めるというものだ。

ネジが敗北した姿を見たリーとテンテンの二人。年上とはいえ、高い実力を持った先輩方の姿に畏敬の念を抱いていた。

テンテンは、妖艶な幻術使いの八雲とクールビューティーに見えるシャナに憧れ、はしゃいでいた。二人のような、くの一になりたいですと伝えながら、握手を願っていた。

元々すごい女性の忍がいると聞いていたテンテンは、二人に会ってみたかっただけなのだ。だが会ってみればカッコいい姿に更に惚れ込んでしまった。

「トルネ先輩！」

「なんだ？」

ネジを解放したトルネに話しかけたロック・リー。

「ボ、ボク達は、先輩と同じ師を持つものです」

「ん？ ああ君がガイ先生の班員の子か」

トルネは、つい先月に体術の師匠から班員を持つため、修行の時間が取れなくなると伝えられた。元々筋が良かったトルネなら、自分の道を進めると判断したガイによる免許皆伝の試験が行われ、トルネは一人前と認められた。激戦の上で認められた後、新しい弟子に、すごい夢を持った子がおり、その子を育ててみたいと伝えられた。

「ボクも先輩のような立派な忍になってみせます！」

それがリーなのだろう。

弟弟子の登場にマスクの下の口が微笑む。そして親指を立てながらサムズアップする。

「厳しい修行だが、頑張れ。君が諦めなければ、努力は君を裏切らな

い」

最大級の賛辞を向けたトルネ。リーは感動しながら熱い握手を交わした。

(ガイ先生の好きそうな子だな)

師を思い出しながら新たな世代の今後を楽しみにしたトルネ。

シヨックから立ち直ったネジ。

「俺はあんた達を必ず超える」

そう言い残し、リーとテンテンをつれて何処かへ去っていった。

「いやーすごい子だったね」

誰もいなくなった事で八雲が感想をのべ始める。

実際のところ、指輪がない八雲ならかなり苦戦したはずだった。

「相変わらず厄介な戦法だな」

10個の指輪は、それぞれ八雲のチャクラで練られた幻術が封印されており、はずすことで対象に効果を発揮する。

それぞれ落とし穴、植物の縛り、透明化、残像など種類があり、それを組み合わせることで相手を欺くのが八雲のオリジナル、十廻の術である。

幻術使いの苦手な接近戦でも抜群の奇襲性と応用性があり、相手が術を解いてもかけ続けることで時間を稼ぐ。

そして必殺の五感を騙す幻術、天花乱墜の術がある。こちらは準備に時間を要するが、十廻の術で時間を稼ぎ、更に相手が自分から迫ってくるため、術の効果も最大限に発揮できるのである。

現にトルネは、何度も敗北したことがあり、独自の路線を貫く八雲をすごいと思っていた。

一方でシャナも万華鏡写輪眼で対応できるが、幻術合戦になれば通常では、八雲に勝てない。

敗北したことはないが、なんだか冷や汗をかかされている。

ネジが弱いわけではない。相手が悪いのだ。

それ以来、ネジが彼らを侮ることはなくなった。そして更に時が流れ、ナルトとサスケのアカデミー卒業の日が迫るのだった。



## 少年編

### 参上！うずまきナルト 前編

うずまきナルトは危機に瀕していた。

長年の修行で無事風遁を会得した彼だが、今年のアカデミー卒業試験にて最も苦手な術。

「分身の術！」

ナルトは、試験官であるミズキ先生とイルカ先生の前で分身の術を披露した。だが結果的に出てきた分身は、ズタボロにされたナルトの姿だった。ちょうどシヤナとの修行後のような瀕死のナルト。

とんでもない分身を出してしまつたと、合否を確認するためイルカの表情を伺う。

イルカは笑顔で首を横に振る。

「不合格！」

死刑宣告がされた。よりによって一番苦手な術。シヤナの目が光っていたため比較的真面目にアカデミーに通っていたナルト。姉が任務で里に居ない日は、悪戯三昧だったが、まさか卒業試験になつて不合格になるとは思っていなかった。

「イルカ先生！ お願いだってばよ。試験を変えてほしいってばよ」

「駄目だ。今年は分身の術と決まっています、お前のそれでは不合格としか言えない」

分身の術が苦手なことはわかつていた。当然姉からも「練習するつてばね」と言われていたが、風遁の術が楽しすぎて基礎忍術の練習をおざなりにしていた。

「イルカ先生、一応分身は出来てますし……彼の成績は実習に関しては良好です。合格にしてあげても」

「あれでは足手纏いを増やしただけです。実戦では使えません」

イルカが頑なに許してくれない。ミズキの助言を受けても意見を变えない頑固さにナルトは、掌に風遁・旋風玉を作つて地面に投げる。

すると暴風が教室を襲い、プリントなどが散乱。

「バーカバーカー！」

ナルトはアカデミーから逃走した。

「こおらナルト!!!」

怒るイルカだったが、ナルトはすでに飛び出しており、怒声だけが木霊する。逃げてしまったナルトをミズキが追いかけると言い、彼にナルトを頼んだイルカ。

一人になり、プリントを拾い集めるイルカ。

彼はナルトのプリントを掴んで眺めていた。

「ナルト。お前が努力家なのは知っている。だが、生半可な術で忍になれば、お前が危ない目にあってしまう」

イルカは、うずまきナルトを生徒の中で最も見てきた。昔は孤独で、どうしようもない寂しさから里の人間達を困らせていた問題児。だが、ナルトにある日家族が出来た。

嬉しそうに教師である自分に報告しに来たナルト。

天涯孤独だった彼に温かさを与えてやれる存在。同じく孤独だったイルカは、ナルトの事を心から祝ってやれた。

九尾の事件のせいで、里中から恨まれていたナルト。何の罪もない少年が過ごすには、辛過ぎた期間。ようやく自分以外にもナルトを想いやつてくれる人物が出来たことは、イルカからしても嬉しい事だった。

そこからナルトは変わった。いや、元々あった彼の良い面が表に出てきたというべきか。

悪戯する所は変わらないが、帰りの時間には、どこか寂しそうにしていた顔が、明るくなっていった。特に女子に対する態度は大きく変わり、優しく接し、手を貸している姿をよく見かけた。

クラスで一番チビだったナルトも、今は背が伸び成長期を感じさせる。

成績も実技に関しては、非常に良好だった。木ノ葉でも有名なうずまきシヤナに修行をつけてもらい体術の伸びは、うちはサスケに肩を並べる程だった。

そして、いつも突つかかっていたサスケとの関係が大きく改善していた。いつも二人で組み、互いに競い合っていた。サスケの態度も軟化し、傍から見れば仲のいい友達にしか見えなかった。

サスケの事も、うちはの事件以来気にかけていたイルカは、ナルトとサスケの二人が友情を育んでいることに安心していた。

サスケのライバルとして周囲にも見直され始めたナルト。元々日向ヒナタに好かれていたらしいが、稀に女生徒がナルトの話をしているのも聞こえた。

家族の存在は、ナルトの人生を変えたのは間違いないだろう。

だが、それだからこそ、ナルトには厳しくしてしまう。甘えさせるだけで、なあなあにしているのは、彼の人生にとっても良くない。

教育者として、そして彼を傍で見てきたものとして、イルカはナルトなら苦手な試験でも乗り越えられると信じている。

今日は逃げられてしまったが、あらためて再試験を行うことを伝えてあげなくてはと、一人微笑んだ。

その日の夜。ナルトが封印の書を盗むという事件が発生。

そして、その事実を報告しに来たミズキと手分けして、ナルトを捜索することになる。

三代目火影により非番の忍達が集められ、ナルトが封印の書を盗んだという事実を伝えられ捜索を命じられた。

集まった忍達は、封印の書の危険性と、九尾の人柱力であるナルトへの悪感情から次第にヒートアップしていく。捜索ではなく駆除を考え始めた大人達。

「やるなら、化け狐の力を使う前だ」

「どのみちろくな奴じゃねえんだ！ 見つけ次第殺るぞ」

「ナルトを殺せ！」

「今まで生かしておいてやったのに、恩知らずな九尾のガキを殺せ！」

と我先にとナルトを殺してしまおうとする大人達。彼らも九尾の

事件で仲間や家族を失なった被害者ではあるが、それでも非人道的と言わざるを得ない。何人かの冷静な忍達が過激派を窘めようかか様子伺っている、突然空から青い閃光が降り注ぎ、ナルトを殺そうと言っていた10人の忍達の足止めをするかのような攻撃。彼らを囲むように降り注いだそれは、円となって地面に刻まれていた。

「なんだ!？」

「九尾か!？」

忍達がうろたえていると、遅れて青い閃光となって現れたクリーム色の髪にオレンジのゴーグル、青い忍装束の女性。うずまきシヤナが小刀を構えながら現れ、忍達を青い写輪眼で睨み付ける。その怒気と殺気に身動きが取れなくなる捜索隊。

「ナルトの犯した過ちは、私の責任だってばね。ナルトを見つけたして、必ず封印の書は返す。けどね」

写輪眼には明確な殺意が宿っており、下手な行動は、死につながりかねないと忍達を警戒させ、それぞれが武器を構える。

「私の弟を殺すって言ったやつ。その線を一步でも越えたら、ぶつ殺すってばね!!!」

怒りに顔を歪める少女と忍達の睨み合いが始まった。

## 参上！うずまきナルト 後編

事件が起こる数時間前。公園で時間を潰すナルト。

家に帰ろうにも、任務に出ていて夜に帰ってくる姉に、試験に落ちたとは伝えられない。

真剣に悩んでいると、木ノ葉の住人たちがいつもの目を向けてくる。人を人とも思わない目。

(なんで、どいつもこいつも)

大人達の目は未だに慣れない。

「おいナルト」

「サスケ」

「お前落ちたつてのは本当なのか？」

公園に立ち寄ったサスケが自分を心配するような言葉をかけてくる。だが今のナルトには、サスケの善意を受け入れる余裕がなかった。特にサスケが持っていた木ノ葉の額当てがナルトの神経を逆なでした。

「うるせえってばよー！」

「なっ」

その場から逃げ出してしまおう。

「あのバカ」

そんな言葉が聞こえた気もするが、全速力で逃げ出したナルトをサスケは見失う。

しばらく逃げていると夕方になり、ボーと屋上で空を眺めているとミズキ先生が現れ「話があるんだ」と話しかけられた。

「イルカ先生も、別に意地悪しているわけじゃないんだ」

「じゃあ、なんで俺だけ」

「ナルト君には、本当の意味で強くなってほしいんだよ」

忍術が苦手な意識はある。けど、どうしても卒業したかったのだ。ライバルであるサスケと差をつけたくなく、姉を心配させたくもない。そして里の人間達を見返すために、忍者になりたかったのだ。

ナルトの表情を見て、少しだけ怪しく笑ったミズキ先生。彼はナルトにとっておきの秘密を教えると告げた。

それは、火影邸からある巻物を盗み出すこと。その巻物には、初代火影が封印した数々の術が書かれており、それを会得すれば忍者になる資格十分だということ。

「でも、そんなことしたらさすがに怒られるってばよ？」

盗みまでしなくてはいけないのだろうか？　それがナルトの疑問だったが、ミズキは作戦を伝える。

ナルトが盗んだ巻物を合流場所に持ってくるように告げる。

「今日中なら僕が火影邸に返しておける。そうすれば何も問題ないよ」

「……わかったってばよー」

どこか怪しい雰囲気はあった。けれど自分の悩みを解決する方法にナルトは飛びついてしまった。

—————

ミズキの指定した時間に書物を盗み出したナルト。ちょうど警備の居ない時間を狙った犯行であり、無事に盗み出したナルトはミズキの指定した木ノ葉の郊外にある森で書物を読んでいた。

「何々々多重影分身……うっそだあ!!　一番苦手な術かよ」

封印の書を読みながら、ナルトは書かれた影分身の習得に取り掛かった。元々姉が多用していた術であり、それを覚えたとなればイルカ先生も認めてくれると思っただからだ。

それから数時間。全身土まみれになりながら、修行の疲れを癒していたナルト。

「見つけたぞナルト!？」

息を切らしながら走ってきたイルカ先生に見つかる。

「やべ、まだ一つしか術覚えてないのに……へへへ、あのさあのさ、俺ってばスゲー術見せるからさ、それが出来たら卒業させてくれよな。そしたら合格間違いなしなんだろ？」

突然ナルトが言い始めた言葉にイルカは引っ掛かりを覚える。

「誰がそんなことを」

「誰って、ミズキ先生だってばよ。この巻物もミズキ先生に後で返すことになってるんだってばよ」

ナルトはイルカの表情を見て、何かいけないことをしたのかと不安になる。イルカはミズキという名前を聞いて、最悪のパターンが頭に浮かぶ。

その瞬間、森の奥から無数のクナイと手裏剣がナルトを襲う。

「危ない!？」

咄嗟にナルトを突き飛ばしたイルカだったが、6本ものクナイが体中に刺さり、血を吐いている。

自分を庇ったイルカが大怪我をしたことで、ナルトはすぐに手裏剣の出どころである人物を睨みつける。

「その巻物を渡せナルト」

その人物は完全武装したミズキ先生だった。その顔には悪意が満ち溢れており、薄暗い欲望を感じさせる。反射的にクナイを構えるナルト。頭では理解できないが、状況がミズキが敵だと本能的に感じさせる。

「全部お前の差し金か」

「そうだイルカ。なあナルト、イルカはお前がそれを持つことを恐れているんだ」

ナルトはミズキを警戒しつつ、話を聞いてしまう。ミズキの言葉を理解したイルカが聞くなというのが無理な話だった。

「理由は一つだ。12年前の事件を知ってるだろ？」

「九尾の事件」

「そうだ。あの事件以来、俺たち木ノ葉の住人にはある掟が定められた。ナルトお前にだけは決して伝えられない掟がな」

ナルトの表情を見てミズキは意地悪な笑みを浮かべる。

「なんで俺だけ」

「聞くなナルト!!」

「それはな、12年前木ノ葉を襲い、イルカの両親や里中の人間を殺した九尾の化け狐……その正体がナルトだと決して口にしなない掟だ」

ナルトは、固まってしまった。ミズキの言葉を一言一句頭の中で再

生するが、思考が回らない。自分が化け物だと伝えられ、受け入れられる人間が何人いるだろうか。

「う、うそだってばよ」

「嘘なもんか。それはお前が一番理解してるだろう」

大人たちの目。自分を認めてくれない環境。そのすべての原因が自分が化け狐だったから。生まれてからの疑問に答えが出てしまう。だが一つだけ望みがあつた。

あの忌々しい目から自分を救い出してくれた存在。家族として自分を認め、理解してくれる存在。

「そんな、わけない。だって俺の姉ちゃんが」

「あの女も変わってるよな。知ってるかナルト？ 里の大人たちは、あの女がお前と暮らすようになってから、あの女も迫害していたってことに」

知るはずがない。自分にだけ向けられていると思っていた目が姉にも向けられ、その原因が自分だということに。

「化け狐なんかと暮らしたがる女なんて気味が悪いだろ？ だから里の人間は、あの女も毛嫌いしてる」

理不尽な暴力を振るわれることは、シヤナにもあつた。ナルトは知らないが、彼女はすべての力を尽くして排除していた。あくまで危害を加える相手に対してではあるが、シヤナも確かに被害を受けていた。

「言うならお前の存在自体が、里の人間にとって目障りだったんだよ」

「そんな…」

「そのイルカだってそうだ。お前を庇ってるように見えるが心の中は何を考えてるのやら。あの女も内心ではお前を憎んでるかもしれないねえな」

ミズキを止めなければと、イルカが動こうとするが体が思うように動かない。

シヨックで戦意喪失したナルト。クナイを持った手を下ろし、呆然と立ち尽くす。その隙を見たミズキは背中に背負った巨大手裏剣を投擲。



「っ」

反応の遅れたナルトは、回避する事が出来ない。肉を割く音が聞こえ、ナルトの頬に血がかかる。

「イルカ先生」

動けなくなつたナルトを庇うようにイルカが盾になった。背中で手裏剣を受け止めたイルカは、ナルトに覆いかぶさるような体勢で痛みを耐えていた。

頭の仲がぐちゃぐちゃになり心が悲鳴を上げているナルト。だがそんなナルトを庇うイルカ。

「なんで」

「ナルト。俺は、お前の事を恨んでなんかいない」

目の前の少年を救うには、自分の胸の内を伝えるしかない。

「確かに俺の両親は、九尾に殺された。それは今でも覚えている。誰も俺をほめてくれたり、認めてくれる人がいなくなった。だから寂しかった、そして確かに暗い感情があった」

イルカはナルトの頭を撫でた。

「でもな、それはナルト、お前にじゃない。俺にとってお前は、化け狐なんかじゃない。お前は俺が認めた、木ノ葉の里のうずまきナルトだ」

自分を認めてくれた存在。姉やサスケ以外にもしつかり自分を見てくれる存在が居た。そのイルカ先生が、今ミズキに殺されそうになっている。

「ぐちゃぐちゃいってんなー！」

ミズキがもう一個あつた巨大手裏剣を投擲する。当然イルカがそれを受けようとしますが、もし食らえばイルカの命が危ない。そんな状況で怯えているうずまきナルトではない。

「風遁・旋風玉!!!」

イルカ先生を庇うように立ち上がったナルトは掌に風遁のチャクラを集め、巨大手裏剣を弾き飛ばす。

「なに!?!」

「イルカ先生に手えだすな。殺すぞ」

殺気を込めてミズキを睨みつけるナルト。風遁の術には驚いたが所詮アカデミー生ということ、ミズキがナルトを舐めて掛かる。

「やってみろよ化け狐！」

「イルカ先生。見ててくれってばよ。俺のスゲー術。影分身の術！」

ナルトは指を十字に組みながら、生来持っている膨大なチャクラを練り込む。次の瞬間、森全体に無数のナルトの影分身がひしめき合う。その数は1000にも及び、それぞれが実体を持った高等忍術。つまり1000人のナルトに囲まれたミズキ。

「じゃ、遠慮なく行くってばよ」

「うあああああ!!!」

1000人のナルトは、それぞれが旋風玉を構えながら、ミズキに襲い掛かる。絶望的な状況に尻餅をついたミズキは、無数のナルトの攻撃を受け、再起不能になる。

(強くなったな。ナルト)

生徒の立派な姿に、イルカは安堵していた。

ミズキがぼろ雑巾になったところ、イルカは戦い終わったナルトを手招きした。

「何？ イルカ先生」

「お前に渡したいものがある」

そう言ってイルカの傍まで近寄ったナルトに、イルカは自分の額当てをつけてあげる。目を瞑らされていたナルトは、目を開けるとイルカが微笑んでいた。

「卒業おめでとうナルト」

恩師からの賛辞に、ナルトは涙を流しながら喜んだ。だが、ナルトを探す木ノ葉の忍達の事を考えれば、早く封印の書を返さなくてはいけない。

「一緒に返しに行くぞナルト」

「う、うん」

だがナルトとイルカが森を出る前に、青い閃光となったシャナが訪れる。突然の姉の登場にナルトがおののく。明らかに怒気の籠った

シヤナは、ズイズイとナルトの傍まで近寄る。

「あのさ、ねえちゃん、おれつてば、その、あの」

ナルトの頬から乾いた音が聞こえた。それは姉にぶたれたということだった。

明らかに怒っているシヤナに、ナルトは何も言えなくなる。再び手をあげたシヤナにもう一度殴られると構えたナルトだったが、その手はナルトの頬にやさしく当てられる。

「姉ちゃん今日はナルトを許してあげないってばね。けど無事よかった」

そのままナルトを抱きしめ、静かに涙を流す姉の姿。自分の事を心から心配してくれた彼女の泣き声を聞いていると、かつて自分は誰かに心配されたいという願いがあつた事を思い出す。

けれど、人に心配させるということは、こんなに胸が痛いんだと気が付いた。姉にぶたれた頬と胸が、いつも動けなくなるまで殴られた痛みより遥かに痛かった。

「ごめんだつてばよ」

「この馬鹿弟」

その後、様子を見に来た第四班のメンバーとも合流。無事に封印の書を火影に返すことに成功した。

だが、シヤナを含む第四班は、しばらくの間、謹慎処分をくらうことになる。理由は、同じ木ノ葉の忍を再起不能寸前まで痛めつけた私闘によるものだった。

夜までの任務だった第四班。ヤマトが報告に行き後は帰るだけという段階で、シヤナの予知が発動した。木ノ葉の忍達にナルトが囲まれ、ナルトが殺される光景を。胸騒ぎと共に、騒がしいエリアに急行したシヤナは、ナルトが封印の書を盗んだ事実と大人達がナルトを殺そうと宣言している現場に遭遇。

その言動に頭に血が上った彼女は、彼らを行かせないために戦闘を開始。

全力で挑んできた忍達に、シヤナが応戦。写輪眼を最大限活用した戦闘で次々に撃破していく中、数の暴力で挑んできた忍達。

そこに遅れてきた八雲とトルネの二人も、状況が状況の為、シャナ側で参戦。結果的に過激派を無力化は出来たが、仲裁に来た三代目火影によって痛み分けにされたのだ。

火影が止めなければ、殺人も辞さない覚悟だったシャナ。興奮状態で言う事を聞かない彼女を八雲とトルネが宥め、ようやく落ち着いた彼女が勘を頼りにナルトを見つけたということだ。

家に帰ったナルトは、姉に尋ねてしまった。

「姉ちゃんは俺の正体知ってるのかってばよ」

そんな言葉が出てくると思わなかったシャナは、少しだけ驚きながらも、ナルトに向き合いながら答えた。

「知ってる」

「だったら、なんで」

「姉ちゃんにとってナルトはナルトだからだってばね。九尾の化け狐は全く別の存在。なのに姉ちゃんがナルトを嫌う理由なんてないってばね」

その言葉を受けて、酷く安心したナルト。

そう、シャナはナルトと九尾の狐を別のものだと考えている。混合する大人達に吐き気がするし、力づくでも否定する。

けれど、シャナはナルトを愛すと同時に、九尾の狐を殺したくて仕方ないのも事実。今すぐにでもナルトの腹を搔つ捌いて九尾を引きずりだして、肉塊に変えたい。けれどナルトが苦痛を味わうことになつてしまうと、人柱力は尾獣を抜かれれば、死んでしまう。

だから行動に移せていないだけ。のうのうとナルトの腹の中で生きる怪物に全身を搔きむしりたくなるような憎悪と嫌悪感を宿すシャナ。日に日に膨れ上がっていく復讐心は、ナルトとの生活でも一切消えない。

むしろナルトを盾にしている事に、恨みが深まっていく。ナルトがシャナからどこか怖い印象を感じるのには、その憎悪が自分越しに九尾に向けられているからだろうか。

## 第7班

木ノ葉の下忍になったナルト。

アカデミーに集められた卒業生たちと一緒に、班を組むスリーマンセルが発表されていくのを聞いていた。

「第7班、春野サクラ、うずまきナルト、うちはサスケ」

遂に班を発表された。唯一女子であるサクラは、想い人であるサスケと組めたことに喜び、ナルトもサクラの事が気になっていたために、同じ班を喜んだ。

(サクラはともかく、ナルトか。まあ悪くはない)

サスケも長年一緒に修行しているナルトの実力は買っていた。そして連携も阿吽の呼吸で行える人間と組めたことは僥倖と言える。

そして担当上忍がほかの人間を連れていく中、ナルトたちが取り残される。

「なんで俺たちの先生だけ来ないんだってばよ」

「もう、ナルトうるさい！（でもなんで来ないのよ！）」

「もう、我慢ならねえ！」

ナルトは、教室の黒板消しを扉に挟んで準備していた。即席で見えの罫、そんなものに掛かる忍者はいない。そう思い、呆れていたサスケ。

だが、教室に入ってきた人物は、見事に頭に黒板消しをくらった。

そして悪戯が成功したことを喜ぶナルト達を見て、呟いた。

「うーん、お前らの第一印象は……嫌いだ」

銀髪の片目を隠したマスクの男。はたけカカシとナルト達の邂逅だった。

屋上に集められた彼らは、はたけカカシという上忍に自己紹介をしていた。

「名前は、はたけカカシ。好き嫌いをお前達に話す気はない。それに将来の夢って言ってもなあ」

そう言って、ナルトを指さした。

「俺さ俺さ、名前はうずまきナルト、好きなものは一楽のラーメン。嫌いなものは、姉ちゃんのしごき……。将来の夢は、火影を超す！ んでもって里の奴らに俺の存在を認めさせてやるんだ」

(あの子が大きくなったな)

「はい、次」

ナルトの成長した姿を見て、少しの間だけ護衛にしていたカカシは、そんな感想を抱いた。

「春野サクラです。好きなものは……というか好きな人は」

ちらつと横を見てサスケの顔を見る。

「んで、嫌いなものは？」

「それは、辛い料理です。将来の夢は……お嫁さんです。きやー」

最近の女の子らしく、忍術よりも恋といった感じで、カカシは少し呆れる。そして最後にサスケを呼び指す。

「うちはサスケ。好き嫌いには特にならない。将来の夢というか、目的はある」

「目的？」

「ある男を必ず殺すこと、そしてそのあかつきには、一族を復興する」とだ」

サスケの目には殺意があった。目の前にいない誰かを見る目。カカシはサスケの過去を知っておりそれがだれかわかっていた。

その後、カカシから初めての任務について知らされたナルト達。

「ただいまだつてばよ」

「おかえり。シャワーでも浴びてくるってばね。リビング汚したら殴るってばね」

サスケと修業したのち家に帰ったナルト。家の明かりがついており、元氣よく声を出せば、台所で夕飯を作っていたシャナが出迎える。こんな普通のやり取りですら、ナルトにとっては嬉しい事だった。

泥だらけのナルトは、殴られる前に洗面所に駆け込み、慌ててシャワーを浴びてリビングに帰ってくる。

そうすれば、シヤナがテーブルに鍋を用意していた。

「へへ、うまそ」

「謹慎中暇だから、今日は水の国の海鮮鍋作ったってばね」

カニやら魚やらが入った鍋。それを二人で食べる事になる。ナルトは、鍋を口にしながら、シヤナに今日あったことを報告していた。

「ナルトは第七班だってばね？」

「そ、サクラちゃんとサスケと一緒にだってばよ」

心底嬉しそうにしているナルト。仲のいい友達と気になる女の子と組めてうれしいのだろう。

シヤナは、ナルトの頬についた食べかすを取ってあげ、ナルトに尋ねる。

「サクラちゃんって、ナルトが好きだって言ってた子？」

「そ、そう。めっちゃ可愛いんだってばよ」

「そっかあ。嫌がることしちやだめよ」

「わかってる」

「あんたとサスケがいるのに、怪我するようなことあったら、三日間は動けなくしてやるからね」

明らかにナルトとサスケのレベルは下忍を超えている。その二人と組まされた子は、おそらくシヨックを受けるだろう。二人について行こうと無理をするかもしれない。

だからそんなことにならないよう、ナルトにはその子の事を守れと伝える。

ナルトは当然だと言わんばかりに自分の胸を叩く。

「女の子には優しくだつてばよ」

「そう。毛嫌いされたら、あんたのいいところも見てもらえないってばね。そんなのもつたいないからね」

鍋を食べ終わった後、シヤナが風呂に入るため、自分の部屋に帰る。その間ナルトが食器などを洗って時間を潰していた。

「ナルト、姉ちゃんの下着、こつちで洗濯しちやっただってばね」

風呂から出てきたシヤナが、バスタオル姿で入ってくる。成熟した女性であるシヤナのあられもない姿、それを見てナルトは激怒する。

「だ、から！ そんな恰好で入ってくるなっばよ!!」

大慌てでシヤナの服一式を放り投げたナルト。この人は、こういうところで本当に駄目だと、自分がしつかりしなければという責任感を感じさせる。

「ちゃんとタオル巻いてるのに」

「そういう問題じゃねえっばよ!」（姉ちゃん、こんなんでお嫁に行けるのかな?）」

姉のズボラな面にあきれ返りながらも、着替えてきた姉とリビングのソファアーでのんびりする。

「そういえば、明日朝飯いらなっばよ」

「なんで?」

「明日、カカシ先生にサバイバル演習するっばいわれた」

サバイバル演習と聞いて、シヤナは自分もやったなと思います。あの時初めてトルネや八雲と出会ったのだ。そして全員で協力してヤマトを殺そうとしていた。

「それに落ちたら、アカデミーに逆戻りだっばいわれたっばよ」

「そう、アカデミーの教科書もう一回出さないとね」

「なんで、落ちる前提なんだっばよ」

相手があのカカシと聞き、シヤナはナルトに警戒心を高めるよう誘導する。試験の内容は言えないが、心構えを間違えてはいけない。

「言っどくけど、カカシは強いっばね」

「あの先生が?」

「そう。殺す気で頑張りな。ていうか、殺さないと合格難いっばね」

「え?」

驚愕するナルトの頭を撫でながら、シヤナは明日は頑張れと伝える。

その日の朝4時。ナルトを早めに起こしたシヤナは、彼に歯磨きと顔を洗わせ、すつきりしたところでお弁当をナルトに渡した。一人分にしては明らかに多い。



「成長期だから朝飯抜くなら昼飯多めに食べな」

「にしても多いってばよ」

「サスケとサクラって子、それとカカシの分も入ってる。サスケのは、おほか多めだから間違えない事」

全員分の弁当を渡したシヤナは、今日は何をするか考えながらあくびをしてナルトを見送った。

（頑張るってばねナルト）

そういえば、ナルトにアドバイスをしたが、サバイバル演習の時、ヤマトが何か怒っていた気がする。それはなんでだったか。シヤナは思い出せなかった。

ナルトはカカシを殺すつもりで演習に挑む。別に殺さなくてもいいのに。

## サバイバル演習 前編

すごい意気込みで木ノ葉の里の修練場にたどり着いたナルト。

ちょうど、サスケとサクラも合流し、今日の演習について話し合うことになった。シャナの言葉をサスケとサクラに伝えるナルト。

「シャナさんって、あの綺麗な女の人？ あの人がナルトのお姉さんなの？」

「うん。うずまきシャナっていうんだってだよ」

「ああ。そういえば苗字同じね」

サクラは、ナルトに姉が出来たと聞いていたが、その人物が下忍最強と言われるくノ一であることは知らなかった。そして強大なライバルとしてシャナを認識してしまう。

（あんな綺麗なお姉さんが、サスケ君の師匠だなんて。やばい。それに長い髪の女の子が好きって話も、あの人のせいなの）

恋のライバルに認定されたシャナ。弟子としかサスケを見ていないことはサクラは知らない。一方で幼少の頃は、確かにシャナの事が好きだったサスケ。恋心か憧れかはわからないが確かに意識していた。とはいえ、シャナの正体を知った今、頼りになる師匠としてだけ認識している。

明らかに話を聞いていないサクラを他所に、サスケとナルトは結構真剣に考えていた。

「あのシャナがそういう相手か。あれが？」

「うんうん。自分の事最強だと思ってる姉ちゃんが、強いって言ったってだよ」

サスケが真剣に考え始める。あの女は、冗談でも相手を強く言ったりしない。相手を見て、ぼろくそに評価する。強さに嘘をつかない。それがシャナの評価だった。

「でも、ナルトのお姉さんも下忍なんですよ？ だったら上忍相手なら誰でも強いっていうんじゃない」

サクラが自分の世界から戻り、サスケとナルトの話に参加する。心の中でこういう男の子同士の友情もいいな。とか考えながらだが、

シヤナを知らない彼女の評価は正しい。

「あいつは化け物だ。上忍とか下忍とか関係ない」

「とーっても怖いんだってばよ」

どんな人なんだろう。それがサクラの感想だった。だが彼女をよく知る人間は、皆ナルトとサスケと同じ評価を出す。

「とりあえず、準備するってばよ！ 時間はまだまだあるから」

「そうだな。サクラ」

「な、何サスケ君？」

憧れのサスケに呼ばれ、サクラがきやぴきやぴと反応する。

「作戦を立案しろ」

「え？」

「ナルトは実技しか出来ない。俺よりも座学の成績のいいお前なら、何か策を考えられるはずだ。演習である以上、戦闘は行われる」

突然の作戦指揮官の任命。それに戸惑うサクラ。

「俺とナルトの動きはわかってるよな」

「う、うん」

「お前では俺たちの動きについてこれない。だからバックアップに徹して、状況判断を任せることになる」

サスケの言葉は正しい。二人に合わせて接近戦に入れば、足手纏いになる。この数年でナルトの実力は、アカデミーでも有数になった。自分にあるのは頭脳と知識のみ。

もしそれすら出来ないなら、ただのお荷物でしかない。サスケの言葉はそう言っているのだ。

「でも」

「大丈夫だってばよサクラちゃん。俺とサスケが絶対守るから。安心して、動いてくれてばよ。サスケ、もうちよつとサクラちゃんに気使えってばよ」

「なんだ急に……サクラ、お前の記憶力は、俺より優れている。だから適切に膨大な罫を利用できるはずだ」

ナルトに励まされるサクラ。周囲の環境を見渡しながら、自分に来る事。暗記した知識を引き出すことで最善の作戦を過去のデータ

から引き出す。

そして仕掛けた罠を全て記憶する。

「カカシ先生がどんな人かわからない。だから、オーソドックスな罠や作戦になってもいいの?」

「問題ない」

「なら、今から罠をたくさん仕掛けなくちゃ」

上忍という未知の敵に対して、準備のし過ぎということはない。だが集合時間までに罠を設置することなどに間に合うのだろうか。

「やるぞ、ナルト」

「おう」

ナルトとサスケは、二人とも十字の印を組む。

「影分身の術」

サスケは影分身を一体。ナルトは10人近い影分身を作り出す。影分身は高等忍術だったが、ナルトが先に会得。サスケとの修行で使った際、それを教えろと頼まれたため伝授したのだ。

数ではナルトに劣るが、影分身を使えるようになったサスケ。人数が11人増えたことで罠の準備を行えるようになった。

「二指示してくれればよ」

「ふん」

(すごい、分身の術じゃなくて、実体がある)

サクラは、地面に絵をかきながら、ナルトとサスケの分身に罠の設置場所と種類を指示。大急ぎで用意された罠の数々は、演習場を一種の地獄に変えていた。

だが、カカシが訪れたのは、集合時間から数時間遅れてだった。

( (ぶっ殺す) )

万全の準備を整え、待たされ続けた怒りを殺意に変えた3人。そしてようやく狩場に獲物<sup>カカシ</sup>が足を踏み入れたのだった。

## サバイバル演習 後編

約束の時刻から数時間遅れ、ようやくカカシが現れた。

「やあやあ、遅くなつてすまん。ちよつと道に迷つてな」

悪びれない様子に腹が立った三人だが、おかげで準備と隠蔽までできた。後は内容を聞いて作戦を実行するのみ。

修練場についたカカシは、時計を用意してお昼にセットする。

「じゃサバイバル演習の内容を説明する」

（（来た））

カカシは自分のポケットから鈴を二つ取り出す。

「内容は簡単だ。俺からこの鈴を奪い取れ。俺から鈴を奪えたら合格だ」

「え？ でも鈴は二つじゃない」

「そうだ。だから必然的に一人は落ちる」

「そんな」

サクラがカカシの出した内容に困惑している。入念に用意した作戦も、二人しか受からないのであればご破算になる。なによりサクラの実力で二人を出し抜くことは難しいだろう。

唯一幸運なのは、二人の合格率を上げる手伝いになつたくらいだろうか。

「殺す気で来て構わない。武器でも忍術でも自由にやれ。お前らの実力を見るためのテストだからな」

手段はなんでもいいと言ったカカシ。その言葉に表情を明るくしたナルトとしてやったりといったサスケ。二人の様子に疑問を覚えたカカシ。

（普通は多少、狼狽えるもんなんだがな）

今まで受けてきた生徒たちと違った反応に、カカシは違和感を感じる。

「スタートの合図で、始めるぞ」

カカシが試験を始める前に、サスケとナルトがサクラの肩に手を置く。一人落ちるんだと落ち込んでいた彼女にこう言った。

「頼むってばよサクラちゃん」

「安心しろ」

突然サクラを励ますような二人の行動に、カカシは疑問の目を向ける。だが始めない訳にはいかず、「スタート」と口に出した瞬間、二人に励まされたサクラが一番先に動いた。

クナイを持って、しゃがみ込み、足元に土をかぶせてカモフラージュしていたワイヤーを切断した。

(何!?)

試験開始と同時にサクラたちが仕込んだトラップが発動。森の奥から無数の起爆札付きクナイが飛んでくる。それらは、ナルトとサスケの背後から飛来し、彼らの体を貫通する。

「影分身か」

衝撃を受けたサスケとナルトの影分身が消え、煙となってカカシの視界を塞ぐ。本能的に横に移動したカカシだったが、地面に突き刺さった無数の起爆札が爆発。直撃は受けなかったものの、爆風と粉塵に巻き込まれる。

煙の中から飛び出したカカシは、ダメージは受けていないが冷や汗をかかされていた。

すぐに周囲を確認するが、罠を発動したサクラの姿が見えなかった。

「一番先に動いたのがサクラとはな。それに今のトラップ。待ち時間の間に、セツトしていたか」

奇襲攻撃として上々。完全に虚を突かれた。特にサスケとナルトが影分身であり、彼らごと攻撃する大胆さには、肝を冷やされた。一瞬だが脳がフリーズさせられたのだ。

「全員隠れちゃったな（あらかじめ作戦を立てていたということか。そしてさっきの励ましは、2人しか合格できないという状況下においても作戦を実行するという合図）」

中々以上に侮れないとカカシは、森に逃げ込んだ3人を追うために歩いて行く。森の中は罠だらけの彼らの狩場。だが上忍である自分が、逃げる訳にはいかないのだ。

森に逃げ込んだサクラを待っていたのは、サスケとナルト。二人と合流しながら後ろを確認したサクラだが、カカシは追って来ていない。

「二人とも、どうするの？ 試験には二人しか合格できないって」

「ああ影分身からの記憶で聞いている。どのみち、さっきの身のこなしからして、一人では鈴は取れない。俺とナルトでもキツイな」

「なら」

「とりあえず三人でやればいいんじゃない？ そんなもって鈴を確保してから決めようってばよ」

先に鈴を確保して合格権を確保する。それに越したことはない。

「あ、カカシ先生追ってきたってばよ」

ナルトが突然、カカシの襲来を口にする。森の入り口付近にサクラに変化した影分身を配置しており、それがカカシによって倒された。影分身の経験は、本体にフィードバックされる。その事実をシヤナから聞いていたため、偵察用に用意していたのだ。

一方カカシもナルトが影分身に変化まで使うと思わず、サクラが消えた瞬間には驚いていた。

「場所は？」

「えっと、あのワイヤーいっぱいのところ」

「まだ遠いな。ナルト、影分身を増やせ。罨では仕留められない。いくぞ」

「本当に作戦通りでいいの？ 私ずっと後ろにいることになるわよ？」

当初の予定通り、二人が前に出る。最も危険な役割であり、サクラは罨を状況に応じて発動させるだけ。

「でもさでもさ、俺とサスケ戦いながら難しいこと考えられねえし、戦況を見てくれる人って大事だってばよ」

「何もできないって考えるなら、合格してから強くなればいいだろう。自分出来る事をしろ」

ナルトが影分身を2人出し、それをサクラの護衛に当てる。サクラは何か言いたそうだったが、すぐにナルトの影分身たちと安全圏に避難した。

そのタイミングで、森の木に飛び移ってきたカカシが現れる。

「お前ら、随分と森を魔改造しちゃって。罠だらけだな」

「それを全部潜り抜けてきたやつに言われたくねえな」

「数には驚かされたが、捻りがなかったからな」

「じゃ、そろそろ、俺らとやるってばよ」

カカシを警戒しながらも、サスケとナルトが背中合わせで構える。正直な話、これだけの罠を設置し、綿密な作戦行動、チームプレイを行えている3人。カカシの基準からしても合格だった。鈴などなくとも、チームプレイの大切さを理解している。

元々つるんでいた二人はともかく、足手纏いになるであろうサクラも作戦に組み込んでいる。3人で協力する考えを持ち、実力の劣るサクラの安全を確保しながらの戦闘。

(いいチームだな)

だがどうせなら実力を見せてもらおう。

「火遁・豪火球の術!!」

「風遁・旋風玉!!」

サスケの火遁の術をナルトの風遁の術が強化する。サスケの出す炎に風遁の回転力を横から加え、炎の竜巻となった合体忍術は、カカシに襲い掛かる。カカシはすぐに木から飛び降りるが、炎の竜巻はカカシを追う。

(下忍で性質変化。それも合体忍術まで。こいつら、アカデミーでは実力を隠してたのか)

明らかに情報以上の実力。カカシは土遁・土流壁を発動。地面から盛り上がった土の盾で炎を防ぐ。

「おらあ!」

壁を盾にしていたカカシの両サイドから、ナルトの影分身が迫る。カカシはナルトの影分身の腕を掴んで、もう片方の影分身に投げる。激突して影分身が消えるが、今度は空から無数のクナイが降り注いで



くる。

(サクラの罾か)

降り注ぐクナイの雨を手に持ったクナイで弾きながら、森の中では形勢が悪いと判断したカカシ。しかし、火遁の術を解除したサスケとナルトのコンビが迫る。

走りながらナルトは旋風玉を構え、サスケも印を結んで雷遁・雷掌を発動。電気を両手両足に纏う。

「お前ら、本当に下忍か？」

ナルトの旋風玉を手首をつかみながら、受け止めると、サスケがナルトの体を飛び越えて、雷遁を纏った連続攻撃を仕掛けてくる。サスケの攻撃を回避するために、ナルトの手を放せば、ナルトもサスケに合わせて体術を仕掛けてくる。

雷遁を纏った体術がひどく目立ち、ナルトの動きが洞察しにくい。片方を抑え込もうとするともう片方がフォローし、互いの体が一切邪魔にならないように戦っている。当たり前のように踏み台や、支えにしての連続攻撃。

本来なら本でも読んでのんびりやろうと思っていたのだが、そんな暇はない。そして二人に意識を割けば。

「ぬお」

突然ロープでつるされた丸太が襲い掛かってくる。姿勢を低くして回避すると、待ち構えていたナルトとサスケの蹴りを受ける羽目になった。ガードしたが、蹴り飛ばされたカカシ。すぐに木を足場に受け身をとって体勢を立て直す。

「お前ら、師匠は？」

明らかに戦いなれている。師匠の名を尋ねるカカシ。子供二人で修行しても、ここまで強くはなれない。なんとなく答えに心当たりはある。以前、テンゾウから聞かされた愚痴を思い出したからだ。

試験官だった自分を全力で殺しに来て、自分が試されていたような気がすると。

生半可な忍なら、既に死んでいてもおかしくない。

文字通り殺す気で来ている。そして鈴を狙う様子は一切ない。お

そらくカカシを倒した後に回収する算段なのだろう。

「ん？ 姉ちゃんだつてばよ」

「うずまきシヤナ。あの女に師事している」

やはりそうかというカカシの顔。里抜け未遂以来会っていないが、実力は聞いているし悪評や武勇伝も耳にしたことがある。だがまだ下忍のシヤナが二人を弟子にしているとは思わなかった。

いつまでも幼い頃の姿が脳裏に浮かび、今ではシヤナも教える立場になったんだなど、自分が年を取ったことを痛感する。

だがあの子の弟子である二人も普通ではないということだ。鈴を狙わないところが特に。

体術の腕前や連携に関しては、満点。忍術も高水準であり、正直悔っていた。

「そうか、どうやら俺は、お前らの事は好きになれそうだ」

もう少しだけ見せてもらおう。合格は間違いない。だからこそ、底が知りたいのだ。カカシは自分の額当てをあげ、隠れていた左目を開放する。

「!？」

「うっそだつてばよ！」

カカシの左目を見たサスケとナルトが固まる。何故なら、カカシの左目は、赤い光を放つ写輪眼だったからだ。サスケはうちは一族でないものがその目を持つことに驚き、ナルトは初めて見た姉以外の写輪眼に驚いていた。

そして二人そろって写輪眼の脅威を叩き込まれていたため、警戒心を強める。

「影分身の術!!」

「多重影分身の術!!」

人数で押すしかないとサスケが一体、ナルトが10体の影分身を出す。警戒の色を強くした二人の様子からカカシはシヤナの修行風景を思い浮かべる。

(こいつら相手に写輪眼まで使ってたのか)

「うおおお!!」

「おらああ!!」

影分身と一緒にカカシに向かうサスケとナルト。その動きに合わせて、サクラも罫を何個も起動し、援護を行う。だが写輪眼を使うカシの実力に影分身は蹴散らされ、サクラの援護も決定打にならない。

的確に罫を起動するのだが、一発も当たらない。

手ごたえがなくなったことで、ナルトとサスケも焦りを覚えるが、カカシの方も焦っていた。

(写輪眼と目を合わせないか。よく訓練されている。それに影分身を盾に、自分の動きは洞察させない。鍛えすぎでしょシャナ)

持久戦になりかけたとき、演習の終わりを伝える時計の音が鳴り響く。

演習が終わり、集められた3人。疲れ切っていた3人を傍に、カカシも体力の限界が来ていた。どつと疲れた顔をしながら、三人に結果を発表する。

「お前らは合格だ」

「え!?!」

「なんで!?!」

「どういうことだ」

時間が足りず、仕留めきれなかったことで不合格だと思った三人。最後の写輪眼で完全に計画が狂ってしまった。なのに結果は合格。

「演習の中でお前達には、忍者として一番大事なものが備わっていると判断した」

「大事なものの?」

「ああ。忍者にとって大切なことはなんだ、サクラ」

「掟を守る事?」

教科書に載っていた答えを出すサクラ。その答えを聞いてカカシは頷く。

「そうだ。忍の世界では、掟を守らないやつはクズだ。だがな、仲間を

大切にしないやつはそれ以上のクズだ」

その点。この三人は仲間を大切にしている。二人しか合格できない条件下でも、チームワークを忘れなかった。その時点で合格なのだ。

「お前らの戦いを見て、確信したよ。ヨシ、サバイバル演習終わり。明日から、第七班で任務を始めるぞ」

「お、おおー！ー！！」

「ふっ」

「やった、合格した」

合格宣言で緊張が解けた3人。ようやく長かった演習が終わり、帰れると思った時、カカシからある注意をされる。

「弁当食ってから、森の罨回収しとけよお前ら」

「「あ」」

森に仕掛けまくった罨。それを回収しないと、次使う人が危ないからと伝えられる。膨大な罨を仕掛けた3人は、回収の事を考えていなかったのだ。既に疲れ切った三人が、罨を回収し終えるのは、夜までかかったという。

ナルトが正式に下忍になってから、任務の連続となった。

一方で謹慎の明けた第4班のメンバー。さっそく任務を幾つも請け負い、仕事を果たしていく。

3年に一度の皆既日食が起ると言われている日が迫ったある日。ナルト達は波の国に護衛任務に出た。初めてのCランク任務で張り切っているナルトを見て、少し心配になったシヤナだった。

そしてシヤナ達も、久しぶりの里外任務に従事していた。草隠れと岩隠れの境界付近にある須弥山の麓に向かっていた。今回の任務は、その付近で行方不明者が続出しており、その山の調査依頼だった。

突然舞い込んだ任務。危険度が高く、未知との遭遇が予見され、Aランク任務となった。

下忍でしかない彼らに任務が舞い込んだ理由は、手掛かりとなる情報に、その山のふもとで偶然発見された犠牲者が居た。その人物は嵐遁の使い手の女性で、発見時に衰弱しており、精神状態も異常だった。うわごとのように「写輪眼の姫」と死ぬまでつぶやき続けていたそうだ。

そして依頼主は、雷の国の富豪で、犠牲者の家族だった。妻を失った悲しみから、木ノ葉にこれ以上犠牲者が出ないように真相解明をと依頼してきた。雲隠れの里にも依頼をしたそうだが、手掛かりが一つも出なかったという。

妻の遺した写輪眼の姫という言葉から、依頼主は、元うちはの生き残りである女性。シヤナの事ではないかと考えた。そして遥々木ノ葉まで、縋るように来た依頼人の態度に、本人がまだ下忍であり、依頼を拒否される可能性も伝えた三代目。

それでもかまわないと言質を取ったうえで第4班に説明をしていた。

明らかにシヤナを誘い出すような状況下で、彼女を行かせていい物

か迷う上層部。

「いいってばね。受領する。こほっ」

「良いのか？ 既に木ノ葉の暗部を向かわせて、危険がないかを探らせてはおるが」

「ナルトも長期任務になったし、別に構わない。こほ」

三代目は、シヤナに何度も確認を取るが、彼女は問題ないという。唯一問題があるとすれば、八雲の体調なので、野宿は基本せず、宿に泊まるので依頼主に前金を請求するとは言っていた。

そして、準備を終えた第四班は、高難易度任務に出発した。

—————

一応先に向かっていた暗部と合流し、それから調査する手筈となり、道中をしつかり休みながら移動。

何日もかけてようやくたどり着いた。

「なんか、不気味な山だね」

「3人共、注意するんだよ。何が起こるかわからないんだからね」

険しく、不気味な雰囲気の漂う山々。暗部と合流する約束になっているのだが、時間を過ぎても彼らは現れない。

何か嫌な予感がすると忍の勘が告げる。

「こほっこほっ」

「シヤナちゃん。大丈夫？」

今回の任務、シヤナが体調を崩してしまったのだ。何度か咳をしていたシヤナだったが、到着寸前には、熱も出していた。

しかし、任務に対する責任感や意地でこの場所に来てしまっていた。

最初は気合で何とかなると思っていたが、次第に体調が悪化していく。山を登っていくうちにシヤナだけが遅れ始める。チャクラも乱れ、スタミナ確保のため写輪眼も解除してしまった。

ふらつきながら、立ち止まってしまったシヤナを心配して、八雲が駆け寄る。

「やっぱりすごい熱、シヤナちゃん、体調悪いんでしょ？ 一度宿に帰ろう？」

「大丈夫だつてばね」

シヤナの体に触れると体温が高く、任務の続行など不可能だと感じた。そのため、八雲が任務の中断を提案したが、シヤナは首を横に振る。自分の受けた任務を失敗するなど、プライドが許さないからだ。

だが八雲が腕を掴んで止める。そしてシヤナの手に薬を持たせた。「駄目だよ。そんな体で、危険があるかもしれない任務に挑むなんて。これ、私がよく飲んでる風邪薬。これ飲んで休もう?」

「大丈夫。ほつといて」

「ほつとけないよ! すぐに隊長に伝えるから」

「いらない!」

体調をよく崩す八雲だからこそ、不調のまま任務を受ける無謀さを知っている。だからシヤナが何といおうとも任務を中断させると宣言する。

体調が悪く、煩わしい八雲の態度に、シヤナは頭に血が上る。掴まれた手を払いのけ、八雲の胸ぐらをつかむ。

「黙つてろつてばね! お前には関係ない。それに、八雲に体調の事でとやかく言われたくないつてばね! 自分の心配だけしてろよ! ……あ」

頭の中がぐちゃぐちゃで、普段なら言わないことを言ってしまう。言い終えた後に少しだけクールダウンしたシヤナだが、八雲は表情が暗くなり、胸倉を掴むシヤナの手を振り払う。

そして、シヤナの体を肩で突き飛ばしながら、先に山を登り始める。

「もういい。好きにすれば!!」

本気で八雲が怒っていることが、自分を睨む目でわかったシヤナ。明らかに言い過ぎた。すぐに謝ろうとしたが、怒った八雲は、顔も見たくないというように先に行つてしまう。

その姿にシヤナも意地を張つてしまう。

いつも体調を悪くして任務を中断するのは八雲なのだ。だから彼女に心配されたくないなどない。

(私は悪くないつてばね)

意地になりながら、山を登つていくシヤナ。

「君たち喧嘩でもしたのかい？ 任務中なんだから、あまりそういうのはね」

いつも仲のいいシヤナと八雲がそれぞれ睨み合い、明らかに敵対している空気を感じ取ったヤマトが仲直りを促す。だが二人とも「問題ないです（つてばね）」と言って耳を貸さない。

トルネも二人が本格的に喧嘩している光景を初めてみたので、上手い言葉が見つからない。

全員で登山を終えると、人工の門のようなものが現れる。過去の大戦で使われたらしき城門を眺める第4班。かなり奥まで進んだ彼らだが、未だに先遣隊である暗部と遭遇できていない。

「ほ、ほ」

「シヤナ？」

かなり強がって体調を偽っていたシヤナだが、標高が高くなり、気圧の変化もあってか限界が迫っていた。さすがにヤマトとトルネも様子が気が付いて、途中下山を考えた時だ。

突如煙を上げて、装甲に覆われた巨大な獣、装甲に覆われた巨大な鳥、そして無数の首を持つ蛇のような怪物が口寄せされる。3種類の口寄せ動物に囲まれた。

それぞれ自然界に存在しないような怪物であり、口寄せされたということは、口寄せの使い手が居るということ。

口寄せ動物たちの頭の上に煙を上げて現れたのは、背が高く細長い体形をした双子の男達と気の強そうな鞭を持った女性。それぞれが膨大なチャクラを宿しており、生半可な相手ではないと感じ取れた。「君たちは何者かな？ 僕らは木ノ葉の忍で、この場所を調査に……おっと」

鳥に乗った男がヤマトの質問が終わる前に何かを地面に投げ捨てた。

それは血まみれの仮面だった。主に木ノ葉の里で使われている暗部用の仮面で、それを彼らが持っているということは、拾ってくれたのではなく、殺して奪ったということだろう。



トルネは、手袋を外し、ヤマトは印を結ぶ。八雲も指輪を外す準備をして準備する。シャナも少しうつろな目で相手を見据え、ホルスタールからダガーを抜く。

「我々が用があるのは、写輪眼を持つものだけだ。その二人のうちのどちらかが、写輪眼の姫か？」

「そうか。君たちが行方不明事件の犯人か」

相手は暗部を殺した手練れ集団。決して油断することなく、木遁を発動しようとしたヤマト。だが突然城門が開き、第四班を取り囲んだ3人が傳く。

門の奥から出てきたのは、白髪で、包帯を全身に巻き付けたミイラのような姿の少年だった。

異様な風貌と存在感を放つ少年は、包帯のマスク越しに話しかけてきた。

「よく来たね。こんなにも早く来てくれるとは思っていなかった。私の名は卑留呼。この世に君臨する最強の忍だ」

自分を卑留呼と名乗った少年。その名に心当たりのあつたヤマト。かつて暗部時代に伝えられた抜け忍のリストにその名が記されており、ダンゾウからも要注意人物だと教えられていた。

「撤退する!! 逃げるよ!」

体調の悪いシャナを抱えて戦闘は、利口じゃない。すぐに撤退を知らせ、木遁で足止めを狙うヤマト。しかし、目にも止まらぬ速さでシャナの傍まで接近していた卑留呼。

「ほう、君が写輪眼の姫かい？」

「どうだかね。けど、最強の忍はお前じゃない」

「いい加減にするんだシャナ!」

「どうにかダガーを構えるシャナ。」

シャナに向かって手を伸ばそうとした卑留呼。それを庇うようにヤマトが立ち塞がり、木遁の術を発動する。地面から生えた木が卑留呼の全身を拘束する。しかし、卑留呼はその拘束を難なく力づくで破る。小柄の彼が持つにしては考えられない怪力に、驚くヤマト。

「木遁・大樹林の術!」

「冥遁・吸穴孔（めいとん・きゆうけつこう）」

そして、追撃にと右手を木に変え、直接攻撃を仕掛ける。だが卑留呼が左手を前に突き出すと、ヤマトの木遁・大樹林の術が彼の掌に刻まれた刻印に吸収される。さらに卑留呼の刻印から紫色のチャクラが放出され、ヤマトの体を包み込む。

「何!？」

木遁を吸収され、さらにはヤマトの体からチャクラが抜き取られる。チャクラを吸われ、力が抜けたヤマト。身動きが取れなくなる。

「木遁か、面白いけど返すよ」

卑留呼がそういうと、卑留呼の掌から大樹林の術が発動し、ヤマトの体を突き飛ばした。自分の術を返されたヤマトは、壁に叩きつけられる。

「隊長!」

「俺が行く」

高速で駆け出したトルネ。蛇を従える男が、その行く手を阻もうとしたが、トルネの速度を前にして捕らえる事は敵わない。

「迅遁・先駆」

印を結んだ卑留呼は、トルネの高速体術の速度を凌駕する速度で動き始めた。その動きに驚くも、トルネもさらに速度を上げ、目に見えないほどの高速戦闘を繰り広げる。

「私の迅遁についてくるとは、中々だ」

「それだけではない!」

「鋼遁・金剛」

どうにか毒手をくらわせようと、拳を繰り出したトルネ。その攻撃を見ていた卑留呼は、全身を硬質化させて彼の拳を受け止める。

剛力による毒手を受け止めた卑留呼だが、その力を怪力で相殺。少し後ろにのけぞるも衝撃を殺してしまう。

「ほう、毒か」

（こいつ）

全身が鉱物の様に変化した卑留呼に毒が効果をなさない。毒が効かない相手というのは、稀にいるため、体術で押し切ろうとするも、卑

留呼の体に巻き付いていた包帯が刃物の様に変化し、トルネの右太腿と肩を貫く。

出血し、隙の生まれたトルネの体を迅遁という高速移動術を持った卑留呼が殴り飛ばす。

殴られたものの、受け身を取り、反撃に出たトルネ。

「嵐遁・雷雲」

全身から黒い雷を帯びた雲を発生させ、自分の周囲に放電した卑留呼。その雷にとらえられたトルネは感電して、地面に倒れる。

瞬時に二人を撃退した卑留呼の実力は異常だった。

残されたのは幻術使いの八雲とシヤナのみ。息を荒くしながらもシヤナは駆け出す。

「粒遁・天輪!!」

写輪眼を使いたくても、チャクラがうまく巡らない。写輪眼を維持できない事に気が付いたシヤナは、残された武器である粒遁を発動。

「粒遁? 聞いた事のない血継限界だな」

シヤナの繰り出す術を見て感想を零す卑留呼。余裕ぶっている卑留呼相手にチャクラの粒子砲を発射する。当たれば一撃必殺の忍術であり、シヤナの必殺技。

「だが、無駄だ。冥遁・吸穴孔」

ヤマトの時と同じく、粒遁の粒子砲を吸収する卑留呼。だが、僅かに吸収しきれなかったのか、卑留呼の包帯や肌が切れて血が滲み始める。その事には、卑留呼も驚いているようだが、すぐに鋼遁を併用して防御力をあげる事で無力化。

シヤナの天輪を見事に吸収してしまう。少ないチャクラを使った忍術だったが、効果はない。

「終わりだ」

シヤナの予知能力が働き、卑留呼が吸収した術を反射する光景が目に見えぬ。だが体が動かないシヤナ。

「待って!」

突如、シヤナを庇うように八雲が指輪を抜き取りながら前に飛び出す。八雲の姿を見た卑留呼は、攻撃を思いとどまったかのように右手

を下す。疲労から膝をついてしまったシャナを背に庇う八雲を見て、卑留呼は眩く。

「ふふ、君が写輪眼の姫だったか。見事な写輪眼だ」

「私を呼んだ目的は何？」

卑留呼は何を言っているのだろうかとシャナは働かない頭で考える。

「そうだね、説明くらいはしておいてあげよう。私は長年かけて鬼芽羅の術という術を編み出した。この術は他の生物と融合し取り込むことで、自分の力とする事が出来る」

そう言いながら、卑留呼は自分の体をスライム状に変化させる。

「この術は、特殊な天体現象の際に行えば、血継限界ですら取り込めるんだ。既に私は4つの力を取り込み、後は写輪眼を欲している。後は言わなくてもわかるかな？」

特殊な天体現象。それを聞いて八雲は、明後日に起こるであろう皆既日食を思い浮かべる。卑留呼の狙いは、うちは一族の持つ写輪眼なのだ。

「それで、私を探していたのね」

「そうだ。君を取り込めば、私は不死の最強忍者となれる」

「なら狙いは私だけだね？ だったら仲間は見逃して」

「この場所と私の名を知ったものを逃がせと？」

「最強の忍者なんでしょ？ だったら木ノ葉からの応援が来ても平気だよな？」

強気に出る八雲。その言葉と態度を気に入ったように卑留呼が笑う。

「いいだろう。ただし、大人しく君が付いてくることが条件だ。それとも抵抗するかい？」

「しない。私じゃあなたに勝てない。だから、最後にお別れをさせて」「好きにしたまえ」

そこまで喋って、八雲は、シャナの方向に振り返る。

そこでシャナが見たものは、赤い写輪眼を持つ八雲の姿。正しくは、指輪の幻術を用いて、卑留呼を含む周囲の人間に写輪眼を持つ姿

を見せているのだ。

そんなことをした理由は一つ。写輪眼の姫であり、今は戦えないシヤナを助けるため。身代わりになるため。

悲しげな表情の八雲。そんなことをする必要はないと、シヤナが声を出そうとすれば、八雲が指輪を抜いてシヤナに幻術を掛ける。

猿轡のようなものを幻術で囁まされたシヤナは口を開けなくなる。

人差し指を唇に当て「黙って」と口にした八雲。

「短い間だったけど楽しかったよシヤナちゃん。それにヤマト隊長やトルネ君もありがとう。皆、さようなら」

「……!!」

トルネやヤマトも八雲に手を伸ばすが、ダメージが響いており、上手く動けない。そんな彼らに別れを告げた八雲は卑留呼の傍まで歩み寄り、彼の差し出した手を掴む。

八雲に手を伸ばすシヤナ。だが八雲は帰ってこない。

「いい子だ。だがな、気が変わった!!」めいどん・じゃっしめん 冥遁・邪自滅斗

「何を!」

卑留呼は、左手を伸ばして掌から青い炎をシヤナ達に向かって発射する。シヤナの粒遁を吸収した一撃は、強力無比。裏切った卑留呼に幻術を掛けようとした八雲だったが、卑留呼の冥遁によってチャクラを奪われ気絶してしまう。

未来視が常に警鐘を鳴らし続けていたシヤナは、本能的に粒遁・天輪を発動する。

青い炎を迎え撃つ粒子砲。だがなけなしのチャクラを使った攻撃では押し負ける。徐々に青い炎が迫りくる。

もうだめかと思われた時。

「粒遁・天墜」

シヤナの天輪と邪自滅斗の戦いに赤い粒子弾が割込み、卑留呼側で大爆発を起こした。卑留呼は、すぐに術を吸い込んで無効化していた。そして獣を操る男女も爆発に巻き込まれまいと距離を取った。

そして、地面に横たわっていたヤマト、トルネ、シヤナの三人は、爆風によってはるか遠くまで吹き飛ばされた。

そして、一番遠くまで飛ばされたシヤナは、山の麓付近の谷に落ちそうになった所、空中でキャッチされる。

シヤナをキャッチしたのは、暁の衣装を身にまとい、頭から黒い翼と獣の腕に尻尾を生やした少女。シヤナと同じく青い写輪眼を持つ存在、生物兵器コダマだった。

「ナイスキャッチ！ コダマ選手、大得点です！」

シヤナを抱えながら、コダマは大はしやぎしていた。

「さようなら」

そう言つて八雲は闇に消えていく。それは何故か。

(また私が弱かったから)

血まみれの池、そこで横たわるのは、オビトやリン、そして父と母。彼らは物言わぬ亡骸となりながらも、助けを求めるようにシヤナを見ている。そして其処に空から亡骸になった八雲が降つてくる。ベちやりと血の池に落ちた八雲。彼女もまたシヤナを責めるように目を開きながら死んでいた。

そして、其処で唯一立つのは、仮面の男と奴が従えし九尾。

———また後悔をしているのか砂利。

(後悔?)

シヤナがよく見てしまう悪夢。この夢はいつもシヤナに何かを語りかけてくる。

今回は何を後悔しろというのだ。

———己の力の無さをだろう。絆がついていても所詮は砂利。

お前には何も救えない。

私は強くなった。あの頃とは違う。

———違わん。お前は何も変わっていない。ならあの小娘は何故連れ去られた。

あれはあいつが勝手にやった事だ。シヤナは、仮面の男に怒鳴る。あんなこと望んでいなかった。なのに勝手に犠牲になりに行った。

———違うだろう。お前は命を救われたのだ。弱く醜いお前の為の犠牲となったのだ。

そんな声が聞こえ、シヤナは強い怒りを覚え、声を荒らげる。まるで雑音を消すかのような咆哮。心の傷をえぐるような言葉の刃、その刃を払いのけるために、シヤナは吠える。

—— まだまだ足りん。求めろ、力を。

(おきろー!! おつきろー!!)

突然、のんきな声が空間に響き渡り、シヤナは光に包まれた。

シヤナは、目を覚ました。

体中がだるく、高熱を出しているのか、頭が働かない。だが生きているようで、全身に痛みが走る。

「くっ」

全身汗まみれで気持ち悪く、唯一頭の上に載せられたタオルがひんやりと冷たかった。シヤナは、自分の状況がわからずに周囲を見渡す。どうやら川から近い洞窟で眠っていたらしい。

卑留呼との闘いで死に掛けたはずだが、何かが割り込んできたせいで吹っ飛ばされたのだと思い出した。

だが、自分を誰が此処に運び込んだのだろうか。

自分の荷物が傍に転がっており、食料が勝手に開けられ傍に捨てられている。誰かが食べたのだろう。そして、傍に八雲から渡された風邪薬の小瓶が転がっていた。

熱に魘されながら、ぼーっと川を眺めていると見覚えのある人物が現れた。

「やっと起きたね。お姉ちゃん」

「お、ま、え……、だ」

「コダマだよ。お久しぶりだね」

のんきな話し方をするコダマ。前回、湯の国で殺しあった青い写輪眼を持つ特異な少女。恐ろしい強さを誇り、シヤナが対一で初めて負けそうになった相手。

そいつが両手に魚を掴みながら、シヤナに笑いかけてくる。

「お魚取ってきたんだよ。お熱下がった?」

「なんで、おまえが」

夢でも見ているのだろうか。何故殺しあった関係でしかないコダマがシヤナの体を心配しているのだろうか。

「あのね、コダマ、お姉ちゃんカバン触ってたらご飯見つけて食べ



ちやったの……だから代わりに魚取ってきたの」

「いみ、ふめい、だって、ばね」

どうやら食料を荒らしたのは、コダマらしい。どうりで甘い携帯食料が根こそぎ食べられていると思っただがわざわざ魚を取ってくるのは何故だ。

いやそれ以前に、シヤナを生かしておく理由はなんだ。いろいろ尋ねたいが、のどが痛い。

「えーと、このまえば、ごめんね。コダマも任務だったの。だから戦わなくちゃいけない。けど、今回はお姉ちゃんの敵じゃないよ」

(そうだった。こいつ心読むんだってばね)

以前は暗殺の依頼と護衛の依頼が双方にあり、敵対しただけで、個人では争う気はないというコダマ。

試しにどこの組織だと心の中で聞いてみるが、頭の弱いコダマでも、さすがに組織の情報は「言えませーん」と首を横に振って断る。ただ好きな食べ物や趣味などは、べらべら話す。

緊張感とは無縁の生き物であるコダマに、シヤナは呆れ始める。

(なぜここにいる)

「えーつとね、別の任務の帰りで空飛んでたら……なんかすごいチャクラを感じたから見に来たら、お姉ちゃんたち戦ってて」

シヤナ達が戦闘を行っている間、相手側の力量を空から観察、シヤナ達の敗北の色が濃厚になったタイミングで助太刀したという話だった。阿保の割には合理的な動きをする。

その介入がなければシヤナ達は死んでいたかもしれない。だから礼を言うべきかもしれない。

(なんか腹立つんだってばね)

「なんで!? お姉ちゃんの仲間、あの植物の人と毒の人は、どこ行ったか分からないよ。お姉ちゃんしかキャッチできなかつたし」

あの二人はそう簡単に死ぬ玉じゃない。おそらく生きてると仮定してもいいだろう。コダマの自己紹介を聞かされながら、少しずつ脳が働き始める。

(あの戦いから何日経ってる?)

「一日だよ。一日待っても起きないからコダマお腹すいちやつて、たべちゃいました。反省！」

正座しながら片手を上げ反省を宣言するコダマ。

こんなちやらんぽらんなのに自分と並ぶくらい強いんだから、利巧だったらシヤナは負けていた可能性がある。

そして、一日経過したということは、もう皆既日食まで一日しかないということだ。それまでにシヤナの代わりに捕まった八雲を助けなければいけない。

しかし、どう考えても不可能だった。シヤナは回復しておらず、トルネとヤマトも行方知れず。

里に応援を呼びに行っても、到着には何日もかかる。八雲はもう助からないだろう。八雲が偽物だと気が付けば殺されるか、そのまま取り込まれる。

そうなれば次こそ自分に向かってくるだろう。万全の状態を迎え撃てるなら、シヤナは卑留呼であろうと殺せる。だから諦めるしかない。残念な事だ。初めての友達を失ってしまった。

けれど仕方ない。そう、これは仕方ないのだ。任務で死傷者が出る事は忍にはよくあること。

八雲は、――。

「なんで嘘つくの?」  
「?」

シヤナの目をじっと見つめるコダマが急に呟いてくる。

(何の話だつてばね)

「嘘つき。お姉ちゃん嘘つきだよ。あのお姉ちゃんの事、助けたくて仕方ないんでしょ? 今すぐにでも助けたいし、無事かどうか心配で仕方ないのに、どうして諦めるなんて考えてるの?」

コダマの言葉にシヤナはむきになる。仕方のない事だ。今の自分では救えない。万全の状態になれば応戦も出来る。なのに無理に挑めば、結果は最悪の事態を招く。

未来視によってシヤナが負け、その力を吸収されれば、卑留呼は強大な力を手にするだろう。それは木ノ葉の里を危機に落とし入れ、ナ

ルトの身をも危険にさらすことになる。

第一に勝手なことをしたのは八雲だ。自分から攫われに行つたようなものなのだ。それに八雲の犠牲すらシャナが行動を起こせば無駄になる。ただの犬死になつてしまふんだ。

なぜそれがわからないと憤慨する。

「コダマ馬鹿だからわかんない。けど、お姉ちゃんの声で一番大きいのは、八雲を助けたいって言葉だよ」

（そんな訳ない。私は勝てない戦いはしないってばね）

「だったら、何で泣いてるのお姉ちゃん？」

コダマに言われ、自分の頬に涙が伝つていることに気が付く。そんな筈がないと涙をぬぐうが、止まらないのだ。

「心が悲鳴を上げてるんだよ」

しやがみ込んでシャナの頬を突くコダマ。シャナ自身でも気が付かない感情を読み取っているのだろうか。彼女はさらに言葉が続ける。

「コダマ思つたこと直ぐに口に出しちゃうから、嘘つけないんだ。けどそれは自分に正直に生きてるんだって教えてもらったよ。それは悪い事なんかじゃないんだよ」

（でも、無理なものは無理なんだってばね!! 今の私じゃ、八雲を助けられない。どんな未来を見ても、助けられないんだよ……）

本格的に泣き始めてしまったシャナ。声を出しながら泣いたのはいつ以来だろう。人との関わり合いを避け、弟と自分の身を守るために繋がりを切り捨てた。

なのに、シャナの中には八雲の存在がしつかりといた。かけがえない存在として。第4班のメンバーと過ごし、仲間が出来、友達が出来た。いつの間にかシャナの世界は広がっていたのだ。

失うことが怖くて、自分の力で守れるものを限定して固執した。けれど、今またシャナの世界の一部が奪われようとしている。だから先に切り捨てようとした。奪われるなら捨ててしまった方が傷は浅いから。

そんな言葉で自分を偽つた。

(いやだ。そんなの絶対に嫌だつてばね！)

捨てたくない。友達を失いたくない。自分のせいで友達と会えなくなるなんて絶対に嫌だ。

効率重視の自分の考えを心が否定する。

譲れないものがある。譲つてはいけないものがある。

(八雲を失いたくない)

シャナの心の仮面が砕けていく。むき出しの本音が内側からシャナの仮面を打ち砕く。八雲を助けたい。そして、きちんと顔を見て仲直りもしたい。喧嘩別れなんて絶対にごめんなのだ。

「だったら、やることは一つだよね。お姉ちゃん」

「……八雲を助けるつてばね」

「そうだよね。あのお姉ちゃんに謝りに行かなきゃね」

(違つてばね。八雲を連れ戻して、喧嘩の続きをしに行くんだつてばね)

仲直りしたいのに、其処は素直になれないシャナ。心の声を聞けるコダマにそんな嘘は無意味なのに？をついてしまう。

迷いが消えたことで、少し頭が楽になる。

だが、シャナの未来視は常に警鐘を鳴らし続ける。何度も自分が死ぬ未来を自動で見せ付けてくる。この選択は間違いだと言わんばかりに。

(鬱陶しい!!)

シャナは自分の頭を殴った。いつも頼りにしている未来視だが、八雲の救助を邪魔するなら不要だと未来視を解除する。考えないで動いてみるのも大事だ。

まずは目の前にある最有力候補を味方につけるべきだろう。

(コダマ)

「何？」

(お前今は暇だつてばね?)

シャナの問いにコダマは頷いて肯定する。やることはやったので、仕事はない。緊急の用事ならペインが伝えてくれるので今は暇だつ

た。

(あいつを倒す。そのために手を貸してほしいってばね)

「えー。めんどろうそうだよ?」

(じゃ、食べた食料返すってばね)

「うへえ! そんなのあんまりだよー。……コダマもお願いしていい?」

コダマからも条件があるという。コダマからの要求が何か全くわからないシヤナ。とりあえず言ってみろと心で伝える。

「抱っこしてほしいの」

(抱っこ?)

「うん。ちよつとでいいから」

そういうとコダマは、シヤナの胸に飛び込み、抱き締める。まるで母を求めるような行動に戸惑うシヤナだが、何故かコダマの気持ちかわかった気がして、抱き返す。数分の間、シヤナに抱き締められたコダマは、彼女の心音を聞きながら安心しきって満足気に離れた。

コダマの欲しいものはまさにその温もりだった。同じ目を持つ年上の女性であるシヤナ。彼女を本当の姉だと思い込んだコダマにとって姉の抱擁は、欲しかった家族の温もりなのだ。

「よし。お手伝いするよ」

(変な子)

「なら、お体なおさないかね。魚食べる?」

コダマを一時的とはいえ戦力に出来たのは大きい。そしてコダマの言う通り、シヤナは体を治さなくてはいけない。そのため栄養のあるものを食べ、体を休める必要がある。

タイムリミットまでまだ一日あるため、今が勝負なのだ。

コダマの好意に甘え、彼女の取ってきた魚を焼いて食べ、残った食料も平らげた。

「にっつが」

八雲のくれた風邪薬を飲んだシヤナは、その苦さに顔を歪めるが、時間が惜しいと眠りについた。

疲労と病気のせいで深い眠りについたシヤナを見下ろすコダマ。

今ならシャナを攻撃しても抵抗すらされない。忍が他里の人間に無防備を晒す危険性は、すさまじい。

コダマは、頭のツイントールを翼に変化させる。そこから羽根を飛ばせば、シャナは死ぬだろう。

だがそんなことはせず、翼で自分を包み込んだコダマは、翼の寝袋に包まれながら、シャナの隣で眠った。明日の戦いに備えて。

朝になり、日食まで2時間と言ったところ。

目を覚ましたシヤナは、隣でぐーすか眠るコダマを起こして、準備を整える。風邪の方は薬がよく効いたのか7割方回復していた。

ふと、太腿に装備したダガーを見つめる。このダガーは、粒遁をクナイに流し、武器にするシヤナがいつもクナイがすぐに駄目になると嘆いていたため、誕生日に第4班から送られた、特殊な金属を用いたチャクラ刀なのだ。

シヤナのチャクラに反応してその性質に合わせる特殊な忍具。

思い出が、最後にならないように、これからも作っていけるようにと願掛けしながら、装備するシヤナ。

体調が万全とは言えないが昨日のような醜態は晒さない。

シヤナの横でコダマもストレッチをしていた。

「そろそろ、行くつてばね」

「はい……。そう言えば忘れてた！ お姉ちゃん名前なんて言うの？ コダマ聞いてない」

「？ シヤナ。うずまきシヤナだつてばね」

「シヤナ姉ちゃんだね。一気に飛んでいくよ！」

当然のように髪の毛を翼に変えるコダマ。どんな仕組みだと手触りを確認しているが、くすぐったそうにして避けられる。

巨大化したコダマの腕に掴まり、そのまま空を飛ぶ。

二人で空を飛びながら城門を目指していると、コダマから気流が乱れすぎて飛びにくいと伝えられる。

仕方なしに登山することとなった二人。粒遁・天翔で一気に上る方法も、同じく気流の関係で使用できない。

粒子が拡散してしまい、最悪死につながるからだ。そしてチャクラの消費量も多く、4つの血継限界を使える卑留呼相手にスタミナ切れ

は勘弁願いたい。

二人して山を登るしかなかった。そのため、全速力で山を駆け抜けていると、卑留呼の仲間の男が待ち構えていた。

「おや？ 幸運にも助かったというのに、命を捨てに来たのかな？」

「こいつ、敵？」

「通してくれないかってばね？」

「こちらにも事情があつてね。通すわけにはいかないな」

「敵」

城門の前に立ちふさがり、八雲を救助する邪魔をするなら敵だ。敵である以上、殺してもかまわない。その意図を汲んだのか、両腕を巨大な獣の腕にしたコダマが駆け出す。

「口寄せ！ 双頭蛇！」

飛び出したコダマに対して、無数の枝分かれする蛇を口寄せ。それらを網のように分裂させながらシヤナとコダマを襲う。コダマは後ろに飛んで回避。そのコダマを拘束しようと囲うように蛇が迫る。

「火遁・豪火滅却」

男の攻撃を全て焼き払うように炎の壁がシヤナから放たれ、圧倒的な制圧力を以て蛇たちを焼き払う。全ての蛇を焼き払い、男を襲うように炎が迫る。

しかし、足元に口寄せした蛇を足場に高く飛び上がることで攻撃を回避する。

シヤナが火遁を解除すると、地面に降り立った男目掛けて、コダマが強襲を仕掛ける。

「私の蛇は、無限に増殖する！」

さらに口寄せを行い、数千に近い数まで分裂した蛇。その牙がコダマに迫り、コダマは鬱陶しそうに腕を払いながら対処している。コダマの読心も、面で制圧してくる相手に相性が悪いのか、上手く近づけていない。

とはいえ、コダマの防御力の前には蛇たちの牙など届かない。それをわかっているのか、蛇を盾にし巻き付き、コダマの動きを阻害する



ことに集中している。全身を蛇に包み込まれ、コダマは巨大な蛇の塊になっただけだ。

弱い蛇でも数が集まれば、物量という名の暴力となる。遠距離で戦うシヤナにも地面を掘り進んだ蛇たちが襲い掛かる。シヤナもダガーを粒子刀に変える事で、首を切り落としているが、斬った傍から生えてくる首に苦勞している。

こんな相手に時間を食うわけにはいかない。明らかに足止めを狙っている男の策略に苛立つ。

蛇を足場にし、空高くからこちらを伺っている男。

「木ノ葉旋風」

「っ」

その男の背後から、黒い影が現れ、男目掛けて蹴りを放った。突然の不意打ちに男は腕で攻撃を受け止めたが、地面に叩き落とされる。

地面にうごめく蛇たちをクッションにして衝撃を殺した男は、襲撃者を睨む。

「待たせて済まないシヤナ」

現れたのは、トルネだった。

「トルネ」

「八雲を助けに来たんだらう？ こいつは、俺が相手する。お前は先に進んでくれ」

トルネの言葉にうなづくシヤナ。同じ班員であり、前線で戦う二人に言葉は不要。

シヤナは、トルネの提案を飲んで、火遁の術で城門までの道を塞ぐ蛇を焼き払う。そして、男を横切って城門に向かう。

そして、固く閉ざされた門を前にして、大きな声で頼りになる怪物を呼ぶ。

「コダマ!!」

「は—————い!!」

巨大な蛇の塊になっていたコダマが周囲の蛇たちを吹き飛ばし、ジャンプしてシヤナの横に着地する。その口を見れば蛇の体液と肉片が付着しており、彼女が蛇を食べていたことがわかる。

蛇に捕まっていたというよりは、蛇の捕食に勤しんでいたらしい。

「美味しいの？」

「美味！ お腹いっぱい食べたから元気いっぱいだよ」

そう言いながら巨大な城門を獣の腕で殴り、粉碎したコダマ。明らかにパワーアップしており、食事によってチャクラ量も増加している。

変な生き物だと呆れながら、先に進もうとする二人。

トルネは、突然、湯の国の襲撃者であるコダマが現れ、あろうことかシャナの指示を聞いている光景に驚いてはいたが、彼女たちにけしかけられた蛇を高速体術で蹴散らす。

後ろはトルネに任せて大丈夫だと言ってコダマと一緒に進むシャナ。

「貴様！」

「お前の相手は俺だ。悪いが、一瞬で片をつけさせてもらおう」

コダマの存在はイレギュラーだったが、この目の前の男を仕留める事には変わりはない。卑留呼にやられた傷は、痛みはするが戦闘に支障はない。だが傷口が開き、血が流れ始める。

長期戦は望ましくない。

「一瞬だと？ 見たところ体術しかできないようだが？」

「ああ。それで十分なんだ」

無数の蛇をトルネに向かわせる男。トルネは、その蛇全てが反応できない瞬身で移動。男の虚を突いて背後に回り込んだトルネ。全身が紫に染まり、毒蟲を体中に巡らせている。

ガイにより教えられた体術の中でも禁術に位置する奥義。人間の体内リミッターである八門遁甲第一の門・開門を開くことにより身体能力を強化する。自分の意志でリミッターを外すことによる一種のドーピングのような効果を得られる技だが、トルネには八門遁甲の才能は皆無だった。

ガイが真剣に教えてくれたが、習得に至りはしなかった。

だが、トルネはある方法で八門を習得した。

それはまさに邪道ともいえる方法。彼の宿す毒蟲は、トルネの細胞

を住みかとしているナノサイズの毒蟲だ。その毒蟲に無理やり八門を開かせる。それがトルネの切り札だった。

男が振り返った瞬間に、その顎を蹴り上げる。そして、尋常ではない脚力により宙に蹴り上げられた男を追うように影舞葉で背後に回る。そのまま男の胴体を腕ごと抱き締め、高速で回転。受け身の取れない男の頭を地面に叩きつけた。

男の体から飛び退いたトルネは、地面に倒れた男を見下ろす。

「表蓮華。木ノ葉の体術だ」

だが倒された男は、体中から蛇を出しながら起き上がる。ダメージは大きかったのか、動きは鈍い。

「まだだ。この程度で俺を」

「そうだな。だが俺の表蓮華には、続きがある」

「が、ぐおあああああ!!!」

トルネがそういうと、男の全身が紫に染まり、毒蟲に汚染される。無限に分裂する蛇たちも男と同じようにトルネの猛毒に汚染される。どれだけ生命力に優れようとも、分裂出来ようとも本体が繋がっていない以上、トルネの猛毒の前には無意味。

苦悶の声を上げながら泡を吹いて倒れた男。

見事に撃退したトルネだが、傷口が開き始め、息を乱している。シヤナに任せると言った彼だが、満身創痍のまま戦っていたのだ。故に短期決戦を望んだ。

すぐにでも八雲を助けに行きたいが、八門のフィードバックもありすぐには動けない。

「頼むシヤナ。八雲を……」

トルネは体力の回復と治療に専念することとなった。ここで終わるつもりはないのだから。

シヤナとコダマは、城門を通過して第二の城門にたどり着き、そこで戦闘を行っていた。

「ほらほらー」

今度の相手は、下半身を自分の口寄せした装甲に覆われた巨大な獣

と融合した女だった。ボンデー姿で鞭を武器にする彼女は炎を吐く獣を操りながら、鞭でシヤナとコダマを攻撃していく。

だが写輪眼を持つ二人に鞭はかすりすらせず、獣の前足の攻撃も全て回避される。

「ちよこまかとー！」

巨大な獣と融合したことで能力が向上したようではあるが、俊敏性は低下している。元々速いシヤナと空も飛べるコダマを捕まえることはできない。

けれど巨大すぎる獣を一撃で仕留める余裕がない。並の術では効果が薄く、粒遁・天輪を使った場合、かなりのチャクラを消費してしまう。卑留呼がチャクラを吸収する性質がある以上、出来る限り節約したいのだ。

コダマも獣を殴ったりしているが、サイズ差がありすぎて、有効打にはなっても決定打にならない。

「火遁・豪火球の術」

「水遁・水鮫弾の術」

獣が口から炎を吐き出すが、シヤナとコダマの両方が火遁と水遁の術を使うことで相殺する。単純な出力勝負になった時、突如地面や壁から木が生え始め、巨大な獣の体を拘束していく。コダマは驚いてキョロキョロしているが、木遁なんて使えるのは一人だけだった。

ようやく遅れてきたヤマトが追いついたのだと分かった。

「遅れてすまないね」

山道の壁に立っていたヤマトは、印を結びながらシヤナに話しかけた。だが、コダマの姿を見て、コダマをも捕えようと木遁を発動する。

だがシヤナが庇うように前に出たことで、彼の木遁が停止する。

シヤナは真剣なまなざしでヤマトを見つめる。

「どういふことかな？」

状況がわからずヤマトが尋ねれば、説明する時間はないと言わんばかりにコダマの手を繋いで駆け出す。

城門へと駆け込んだシヤナを止めようとしたヤマトだが、先に拘束していた獣と融合した女が暴れ始めた。こちらを先に処理せねばな

らないと意識を敵に向ける。

(後で説明はしてもらってからねシヤナ)

だが卑留呼の目的である日蝕まで一時間を切っている。故にシヤナを先に行かせた。あの子は自分勝手だが、無駄なことはいらない子だからと。

「えええい鬱陶しい木だね!」

「僕からするとその獣の唸り声の方が鬱陶しいかな」

「やれ!」

「木遁・樹界壁」

女の指示で口から炎を吐いた獣。ヤマトは、木遁の術で壁を作り炎をしのぐ。

「そんな木で、私の炎が防げるかあ!!」

女は火力を上げる。ヤマトの木遁の盾が燃え始め、徐々に崩れていく。

「木遁・黙殺縛りの術」

盾が削り切られるより先に、巨大な獣をひも状の樹木が縛り始める。地面から生えた樹木は、巨大な獣の口をふさぎ、その動きを阻害していく。増え続ける樹木について動きが制限された獣。女も鞭を振り回すが、木に絡め取られ、身動きが取れなくなる。

僅かにしか動けなくなった女を見下ろしながら、ヤマトは印を結び直す。

「とどめだよ。木遁・樹縛榮葬!!」

「いや、いやあああ!! たすけ、たすけてえ!!」

「ごめんね。そのつもりはないんだ」

女を縛り付けて居た樹木が急成長し、女の体や獣を押しつぶしていく。骨の折れる音や破裂する音を聞きながら、ヤマトは木に埋もれて絶命した相手を眺めた。女と獣を押しつぶして成長した木は、やがて見上げるほどの大木となった。

きちんと止めを刺したヤマト。

早速シヤナ達を追おうとしたが、両足に力が入らない。卑留呼との戦闘でチャクラを抜かれた後遺症か、まだヤマトの体力は回復しきれ

ていなかったのだ。兵糧丸でどうにか回復したチャクラも今の戦いで使い切ってしまったのだ。

「くそ。僕のせいだ、く」

悔しさに顔を歪めるヤマト。現状一人一殺で撃退している、敵は残り二人。もう増援は望めないのだ。

蛇と獣、その二つの怪物をトルネとヤマトに任せた。

二人なら、相手を撃退しているはずだ。そう信じてシヤナは第三の刺客と対峙している。

「ここは通さない。卑留呼様が完全になる邪魔をさせはしない」「でつかい鳥」

巨大な鳥に足だけ融合した男が、シヤナとコダマを通せんぼしている。コダマは今日は面白いものをいっぱい見られると興奮している。あの鳥も焼いて食べたらいよいよのかなとシヤナに尋ねていた。

だが一番厄介な相手は此奴だろう。

シヤナとコダマ目掛けて、巨大な鳥は、自身の羽根を飛ばしてくる。その羽根を飛んで躲した二人だが、地面に刺さった羽根が起爆札の様に爆発した。

中々に威力と殺傷能力の高い攻撃と、空中にすることで攻撃方法に限られる。

「コダマ、頼むってばね」

「いいよ。すぐに終わらせるから、先行ってて」

飛行能力を持つコダマを除いては、だが。コダマは自分のツインテールを翼に変える。黒い翼を広げたコダマに対して、怪鳥が起爆羽根を発射する。それを撃退するようにコダマの翼から羽根を飛ばし、空中でぶつかった両者は爆発する。

同じタイプの攻撃に驚く男だが、コダマは両腕を獣化し巨大化させて戦闘準備を整える。

地面を蹴り、翼で飛ばたくことで飛翔したコダマは、一直線に怪鳥に接近する。男は鳥を操作し、コダマとの空中戦を繰り広げる事になる。

先に進もうとしたシヤナに羽根を飛ばすが、迎撃するようにコダマが羽根の弾幕で援護する。

「おじちゃん。コダマとあそぼうよ」

「なめるな餓鬼!？」

互いに羽根を飛ばし、空中を縦横無尽に飛び回りながら戦う。飛行速度ではコダマの方が優位らしく、相手を翻弄していく。

「えええいー!」

「ひひ」

背後に回り込まれた男は、コブラのような空中機動でコダマの背後を取る。背後を取られたコダマに羽根を放つ。だがコダマも相手の動きをコピー。羽根を躲して回避。そのまま背後を取ると急加速して、怪鳥に掴みかかる。

翼を掴まれたことで飛行能力を失った怪鳥は、コダマと一緒にきりもみ回転しながら地面に落下した。

「ぐ、ぐううう」

怪鳥はすでに動けず、融合していた男もダメージを負っていた。一方、攻撃を仕掛けたコダマは、ガッツポーズをしながらピンピンしていた。もう男に抵抗する術などないと思つて喜んでいたコダマが目を離れた隙に、相手は何やら巻物を取り出していた。

コダマに気付かれないように巻物を開いた男は、自分の吐血を使つて新たに口寄せの術を使った。

「えっ?」

ぼふんという音と共に、突如現れたのは、先程の城門にいた男と女がそれぞれ使用していた獣と蛇そっくりの口寄せ動物。新たに呼び出された二匹を見てコダマが、男の目に視線を合わせる。

心を読んだコダマは、相手のやろうとしていることに気が付いた。だが好奇心が勝った結果、最悪の事態を引き起こした。

「鬼芽羅の術!!」

怪鳥に融合していた男が術を発動すると、スライム状の物体が発生し、獣と蛇、怪鳥を取り込み一つの怪物。巨大キメラへと変貌した。獣の胴体、怪鳥の翼、蛇の尾を持つ怪物は全身を装甲に覆われたまさに生物兵器。

そのチャクラ量は絶大で、コダマの目から見ても手強い生き物と



映った。そして男は完全に取り込まれたことで自我を失ったのか、コダマを殺すという意志だけで巨大キメラはそこに立っていた。

「すごいね。ぐう」

その姿に見とれたコダマを、巨大キメラの前足が捉え、壁に叩きつける。壁にめりこむような威力で殴られたコダマの小さな体は、すさまじいダメージを負う。

巨大化した両腕でガードしたのにもかかわらず、体中から出血するコダマ。

合体したことで暴走しているが、その分、パワーも素早さも、頑強さも突出している。

「負けないもんー！」

空に飛びあがり、キメラの羽根と炎を回避しながら接近したコダマは渾身の右ストレートをキメラの顔に叩きこむ。だが、少しよろめいたのみで、ダメージになっていない。何発も巨大化した腕で殴りつけるが、頑丈な鎧に罅が入るのみですぐに回復されてしまう。

そして、巨大な蛇の尾がコダマを丸のみにしようと口を開く。

コダマは慌てて空中を飛び回るが、巨大キメラが飛翔し、コダマを追う。

「うおおおー！」

「グアアアア!!」

空中で羽根の応酬。互いに羽根を飛ばして攻撃しながら、急接近。キメラの前足の一撃とコダマの剛腕がぶつかる。弾き飛ばされたのは、コダマだった。

地面に叩きつけられ、吐血するコダマ。生まれて初めて、フィジカルの面で相手に押し負けたのだ。

「ぐっ、いった。いたいよ、うえええん、いたーい!!」

全身傷だらけで泣き始めるコダマ。だが地面に降り立った巨大キメラは、巨大な前足で何度もコダマを殴りつける。すぐに翼と巨大な腕でガードするが、何度も上から叩きつけられる攻撃に、コダマの体が悲鳴を上げる。

そして、全体重をかけた巨大キメラの一撃によって、コダマの体は

地面にめり込み、動けなくなる。

(ああ。これ、あぶないやつだ)

傷が再生を始めるが、それでも死ぬときは死ぬ。このままでは、巨大キメラに殺されてしまうだろう。元々フィジカル勝負などせずに写輪眼に頼って戦えば勝機はあった。

だが好奇心に負けてしまった。つい力比べをしてしまった。

だがこうなっては仕方ない。ペインによりコダマの命が危機に瀕した場合のみ、許された力がある。

「グオオオ!!」

怒りに任せるように、巨大キメラがその巨大な前足を振り上げる。

コダマはその光景を見ながら、あるワードを口にする。その名で自分を呼べば、僅かな間、コダマはコダマでなくなってしまう。ペインから与えられたコダマという名前。

それを否定してしまうのが悲しくて仕方ない。

けれど、ペインの野望を見届けるのが自分の仕事だ。だから死ぬわけにはいかない。

「サトリ」

その言葉をつぶやいた時。コダマは目を瞑る。コダマの脳裏に獣の顔が4面についた黒い巨大な箱のイメージが巡り、その中に広がる恐怖と絶望を思い出す。だがその中から救い出してくれたのがペインなのだ。

だから怖くない。

コダマの体が大きく変化した。振り下ろされた巨大キメラの腕を受け止めるさらに巨大な腕。

小柄な少女の体から、巨大キメラよりも巨大な黒く不気味な怪物へと変化したのだ。50mを超える体躯と巨大な黒い翼、両手両足は、獣のようで、胴体は非常に細く、人間でいえば胸部に巨大な口がある。頭部はなく、尾てい骨から長い尻尾が生えていた。

過去、忍の祖が存在していたころの生物兵器サトリが現代に蘇ったのだ。

尾獣にも匹敵する巨大な怪物となったコダマは、巨大キメラに向

かつて咆哮を上げる。大地が揺れ空がざわつく異形の登場に、本能のみの巨大キメラは狼狽える。

巨体に似合わぬ高速移動をしたコダマだった怪物。巨大キメラが炎を吐くも、ギリギリで回避しながら巨大な拳をキメラの顔面に叩きこむ。その威力たるや、巨大キメラの顔面を陥没させるほどだった。強烈な一撃を受けたキメラはたじろぐが、すぐに持ち直し、空へ飛翔しようとする。

(させねえよ！)

普段のコダマとは違う荒い口調で、巨大キメラの背後に先回りしていたコダマだった怪物。飛んで逃げようとする巨大キメラに馬乗りになり、翼を力に任せて引きちぎる。飛翔能力を失ったキメラは、残った足で暴れまわるが足を掴まれ怪物の胸部にある巨大な口で食いちぎられる。

痛みに悲鳴を上げる巨大キメラだが、捕食者であるコダマには、慈悲はない。暴れる手足を次々引きちぎり、咀嚼していく。

そして、残った蛇の尾を踏み潰す。何度も何度も執拗に踏みつぶし、顔だけが残った巨大キメラ。

(ああ。いい気分だ)

虫の息だった巨大キメラに何度も拳を叩き込み続けるコダマだった怪物。既に絶命していても面白がつて殴り続ける怪物。

(今度はそうだ街に行こう。街の奴らを一人一人ちぎって食べてやろう)

あふれ出る凶暴性に思考が支配されそうになった時、サトリに飲み込まれたコダマの意識に声が響いた。

【お前は今日からサトリではない。コダマだ。この俺の崇高な目的を見届けるもの。暁のコダマだ】

これは過去の記憶。サトリにされた少女がコダマになった時の記憶。

——もし、……、ぼく、を——こ——、して……りゆ

う、ぜ——やく、そ——す、なか——つた——

く——れ——

そのほかにも古い記憶が蘇る。箱の中で一緒に居た誰かに頼まれたことがあるような。そんな曖昧でかすれた記憶。他にもいろんな記憶が頭を巡り、やがて意識が覚醒する。

気が付けば、コダマは人間の姿に戻っており、体中の傷も完治していた。目を開き青い写輪眼が空を見上げる。

「コダマ、もっと強くなりたいなあ」

三角座りで、一人反省会を行うコダマ。だが数年ぶりに全力を出せた解放感も感じていた。けど自分より強い相手は、沢山いるのだ。

そうシヤナが立ち向かう相手も強いのだろうか。

「つてー！ シヤナ姉ちゃん死んじやわない!? 部下の此奴もめっちゃ強いよ！ ボスの強さヤバイつてば」

せっかく見つけた家族を殺されては敵わないと、コダマは走って山を登る。先に行ったシヤナを追うために。

日蝕まで残り数分となった時。

須弥山の頂上に建てられた宮殿。その最上階は、ドーム状になっており、天井には穴があけられ、日蝕を拝めるような構造になっていた。特殊な天体現象の光を取り込み、足元は水で覆われた卑留呼が術を執り行う儀式場。

その中心には、両腕を拘束され、吊り上げられた八雲が居た。

「ん」

眠らされていた八雲は、静かに目を覚ます。ゆっくりと目を開ければ、目の前には卑留呼が立っていた。

「目覚めたか。もう少しで時間となる。眠っておいたほうが良かったろうに」

(……この人に捕まったんだね。チャクラが少ない——)

思い出すのは、動けない第四班を攻撃した彼の姿。到底許せるものではなく。

すぐに幻術を発動しようとしたが、チャクラを吸収されたことで術が発動しない。タイムリミットは残り数分。その間にチャクラを練って、卑留呼を殺す。それが八雲の考えだった。

「いよいよ、私は不死身の最強忍者となる。予定よりも数年早まったが、それは大した問題ではない」

(間に合わない。いや、仮に私が死んでも、この人だけは連れていく) 皆既日蝕が始まり太陽に月が重なり始める。すると、歓喜の声をあげた卑留呼の体中が、青いスライム状の物質に変わっていき、スライムが八雲の体を足から包み込み始めた。手枷が外れたため、暴れて逃げようとするも包み込まれた下半身の感覚が消えている。こうやって少しずつ融合されていくのだろう。

自分はずいぶん早く死ぬ。その恐怖に涙が流れる。

だが、シヤナ達を殺したであろう卑留呼は許さない。

(さようなら、皆)

八雲の体が胴体まで取り込まれ、後自由なのは首だけだった。最後にこれまで一緒に過ごした人達との思い出がリフレインした。

最後に浮かぶのは、自分に手を伸ばしていたシャナの姿。

(そういえば、最後まで仲直りできなかったな)

口喧嘩してしまい、仲直りできなかった。酷いことを言われたと思う。けど、その後のシャナの顔を見れば、酷く後悔しているようだった。けれど、その場では感情が邪魔をして、歩み寄る事も、シャナからの歩み寄りも拒んでしまった。

自分の体調のせいで人に迷惑を掛けたくないという感情なら、自分が一番良く分かっていたのに。

「やくもおおおおー！！！！」

突如、天井を突き破って青い閃光と共にシャナが現れる。走ったのだろうか、汗まみれで必死の形相の彼女が自分の名を呼んでいた。(ああ、生きてたんだ。……生きていてくれたんだ。なら、もう安心だね)

本当に良かった。その思いは本物だった。最後に親友の顔が見られてよかった。

だが卑留呼のスライムは、シャナの顔を見てほっとした八雲を完全に取り込んだ。

「ふふふ、ふはははははは！！！！ 融合は終わった。ついに私は最強の存在へと」

「ふざけるな」

「ついでだ、お前も吸収してやろう！」

高らかに笑う卑留呼を他所に、地獄の底から湧き出るような声がシャナから発せられる。そして、肌がぴりつくような殺気に、卑留呼は、異変を感じる。巨大なスライム状の体を変化させ、シャナへと襲い掛からせる。

そして、抵抗せずにスライムに包まれたシャナ。

「ふふ」

「何笑ってる」

完全に吸収したはずのシヤナが、自身の背後に立っていた。変わり身でも影分身でもない。確かに吸収したはずなのに。そして、振り返った卑留呼が見たのは、自分を睨みつける冷たい視線、青い歯車のような万華鏡写輪眼を携えたシヤナの顔。そして振りかざした拳だった。

顔を殴られた卑留呼。かなりのけ反るが、すぐに体勢を立て直し、無数の触手状のスライムをシヤナに向けてけしかける。

そして再びシヤナに命中。その体を壁に叩きつけ、壁に押さえつけられたシヤナの体と融合を始める。

だが、シヤナの右目の万華鏡写輪眼の歯車の文様が回転。青い光を放つと、捕えていたシヤナの姿が消える。

「どこに行った!? ぐうあああ」

シヤナを見失った卑留呼が周囲を探していると、ダガーを粒子刀に変えたシヤナが、卑留呼の心臓にそれを突き刺していた。心臓を刺された卑留呼だが、それでも致命傷にならず、腕を振り回し、怪力を持ってシヤナの顔を殴打、その体を弾き飛ばした。

シヤナが床に広がる水に落下したのを確認した卑留呼は自分の傷を癒しながら、青い写輪眼について考えていた。

「まさか、お前が写輪眼の姫なのか？ なら私が取り込んだ此奴は？」  
「私の親友だってばね」

殴り飛ばしたはずのシヤナが再び卑留呼の背後に現れ、再び心臓を粒子刀で貫いていた。感知も出来ず、一瞬のうちに移動したシヤナ。瞬身の術なら感知できたはず。なのにできなかつた。

背後に現れたシヤナは再び右目の万華鏡の歯車が回転しており、殴られたはずの頬も無傷だった。

幻術かと思いが当たった。だが、歴戦の勘がそれを否定する。

卑留呼の反撃を感知し、彼から飛び退いたシヤナ。その姿を見て卑留呼は左手の刻印から冥遁・邪自滅斗めいとん じゃつじめんとを発動しようとした。

だが、シヤナの左目の回転する歯車の万華鏡写輪眼を見た瞬間。一瞬だけ卑留呼の意識が飛び、気が付けば卑留呼は、冥遁・邪自滅斗めいとん じゃつじめんとを発射した体勢で固まっていた。まるで数秒後の自分の状態にされた

かのように。

術は発動していない。なのに術を発動した後の体勢になっていた。チャクラは消費していないが、発動寸前だった術が解除され、彼の冥遁は不発に終わる。

「何をした!?!」

まるで、時間を戻したようにダメージを無くすシャナ。そして逆に時間を飛ばされたかのような卑留呼。二つの術の真相にたどり着けない卑留呼。

「八雲を返せ!」

正体不明の術。シャナの持つ万華鏡の固有の術だろうかと思案する。

完全に八雲という小娘に騙されたと苛立つ卑留呼。だが目の前の小娘を取り込めば同じことだ。そう思っていた時だ。突然、卑留呼の全身が燃え始め、彼の足場だった水が全て溶岩へと変わる。その熱のすさまじい事。

「ぎゅあああああ!!! なんんだ、これは!!! こむすめ、いったいなに、をしたあ!!!」

業火と溶岩に焼かれ始める卑留呼。スライム状の肉体を激しくくねらせながら、焼けていく体で悶える。その暴れ様はすさまじく、卑留呼は自分の体のコントロールを失っていた。

(何が起きてるってばね?)

攻撃するより先に卑留呼が狂ったように苦しみはじめ、体中が火傷を負っていく。その光景に覚えのあったシャナ。すぐさま、誰の仕業か辿り着く。

取り込まれたと思っていた八雲の幻術・天花乱墜が卑留呼を襲っているのだ。八雲の術は相手との距離感で効果を変える。なら八雲の体と融合する卑留呼には、効果が絶大だ。その威力は、卑留呼が死にそうになりながら暴れていることから明らかだ。

このままいけば、卑留呼は幻術の中で死ぬだろう。取り込んだ八雲と一緒に。

「悪いけど、そんなカッコいい真似、させないってばね」



シヤナは八雲を助けに来たのだ。卑留呼を倒しても八雲が死ねば、それは無意味なものになる。必ず助け出す。

シヤナは、印を結び自分の全身からチャクラの粒子を散布する。そして、両手にダガーを変化させた粒子刀を構える。

「行くつてばね。粒遁・天門の術」

ドームに広がる無数のチャクラ粒子。シヤナが術を発動すると、それらの粒子をマーキングにシヤナが青い光となり口寄せされ、瞬間移動する。そして、ビーム状の刃でスライムの体を切断していく。八雲がどこにいるかは不明だが、未来視を使い、事故を予防。

斬っては瞬間移動を繰り返しながら、スライムの巨体を切断していくシヤナ。青い閃光となり続け、粒子から粒子に飛び続けるシヤナの姿は、流星群のようで、美しい光景とは裏腹に絶大な殺傷能力となつて卑留呼を襲う。

シヤナの動きが速すぎて、光の道筋が網の様になりながら、切り刻んでいく。

父の飛雷神の術を、シヤナなりに再現した術。粒子から粒子に移動し、攻撃を仕掛けていく新術。ただし散布した粒子は、コントロールできず風に流されるため、このドームのような空間でなければ、使えない未完成の術。

だが攻撃を察知した瞬間安全圏に逃げられるこの術は、強い。

「ぐおおおおあああ」

苦しむ卑留呼を傍に、シヤナは僅かばかりに八雲のチャクラを万華鏡写輪眼で捉える。そして、スライム状の体を円形に切断。スライムから覗く八雲の手を見つけたシヤナは、その手を掴み、引き抜いた。八雲を引き抜かれたタイミングで、限界の来た卑留呼の体が破裂する。

その爆風から気絶した八雲を庇い、ドームの外に瞬間移動したシヤナ。自分と触れる相手なら一緒に移動できる時空間忍術で、ドームの天井に着地したシヤナは、八雲の様子を確認する。

全身に軽いやけどはしているが、重傷はない。

「よかった。息はしてる。心臓も動いてる」

呼吸の確認と、心音の確認を行ったシャナ。気絶しているだけで命に別状はない八雲を抱きしめる。

間に合った事に対する喜びと、失いかけた不安が一気にシャナを襲う。けれど掴み取ったものを確かめるように抱き締める手に力が入る。

だが安心もつかの間。ドームの天井を突き破って卑留呼が現れる。膨大なチャクラを迸らせながら、口元の包帯が外れ、不気味に裂けた口を開いている。

正体を現した卑留呼は、空を見上げる。既に日蝕は終わっており、奴の野望は潰えたと言える。

「おのれ、貴様ら」

「ご愁傷さまだつてばね」

挑発するシャナ。八雲を寝かせ、すぐさまご立腹の卑留呼と向き合う。万華鏡写輪眼で戦える時間はそう長くない。チャクラは残り半分ほど。勝率は高くない。

「まあいい。本来の計画通り2年後にまた、儀式を行えばいい。だが、貴様らはここで殺して、世にも醜悪な生き物に改造してやろう」

「できれば、可愛いのが良いつてばね」

軽口で返すシャナ。ダガーを右手に構え、左手は印の構えを取る。未来視と写輪眼の併用奥義、先見の写輪眼を発動しようとした時、嬉しい誤算が起こる。

「コダマちゃん、参上！」

空を飛び急降下してきたコダマが傍に着地する。そして変な決めポーズをとっていた。

どうやら刺客を撃退したらしい。しかし、消耗しているのかチャクラが少なくなっている。しかし卑留呼を相手にコダマの増援は嬉しいことこの上ない。

「なんだ貴様は……どうなっている青い写輪眼の2人目だと」

卑留呼はコダマを見て驚いている。公式には、一人しかいない写輪眼を使う女性。それが目の前に二人いるのだから。

そんな卑留呼を無視して、シャナはコダマの目を見る。心を読める

コダマに言葉は不要。すぐ意図を汲んだコダマ。

「とつても強いんだね」

シヤナとコダマは、同時に目を開く。シヤナは両目に青い万華鏡写輪眼を携え、一方コダマの青い写輪眼も変化が起こる。文様が変化して小さな歯車3つが噛み合った文様へと変わる。それはコダマの持つ万華鏡写輪眼に他ならなかった。

まさか万華鏡写輪眼まで開眼しているとは思わず、シヤナも驚くが、心強いことに変わりなかった。

先見の写輪眼と心見の写輪眼の二つが卑留呼と対峙する。

「迅遁・先駆!!」

印を結び高速移動した卑留呼。だが万華鏡写輪眼を用い、更には未来視と読心を使える二人には、遅くすら見えた。高速で繰り出される体術を息の合った動きでコダマとシヤナが回避していく。回避しながら、両者も瞬身を使い反撃に転じる。

どちらも卑留呼の動きを先読みし、カウンターを仕掛けていく。

「はあー!」

「ぐうう」

接近戦で押される卑留呼は、鋼遁を用いて防御力を上げる。しかし、コダマが腕を巨大化させた怪拳を受け、ダメージを負う。殴りつけたコダマの腕も卑留呼の固さによってひしゃげる。だが、再生能力を用いて連続でこぶしを振るうコダマ。

自分のダメージは度外視で殴り続ける。コダマと卑留呼が殴りあっている最中。粒子刀を構えたシヤナが視界の端から卑留呼の硬質化した右腕を切りつけた。刃は効かないと叫んだ卑留呼だが、シヤナの刃は熱による溶断。一振りでは切れずとも、もう一本の粒子刀を持つシヤナ。

二振りの粒子刀が合わさることで膨大な熱となった刃は、卑留呼の左腕を斬り飛ばす。

「ぐううう」

左腕を切り落とされた卑留呼は、コダマの渾身の拳を受ける。吹っ飛んだ卑留呼だったが、すぐに斬られた腕をスライム状にして再生。

印を結ぶ。

「嵐遁・嵐鬼龍!!」

チャクラを吸収して巨大になる雷雲を発生させた卑留呼。しかし、未来と思考を読む写輪眼の姫達は、卑留呼の起こした雷を回避。距離を取って卑留呼を睨みつける。

「冥遁・吸穴孔」

雷を回避している二人。

だが、二人同時にジャンプして、背中と背中がぶつかってしまった。卑留呼は最初から二人を同じ場所に追い込むことを考えていた。彼は、二人のチャクラを吸いつくしてしまおうと考えた。故に冥遁を発動。冥遁のチャクラに触れた術やチャクラはすべて吸収されてしまう。左右を雷によってふさがれ、空中に逃げてしまった二人。迫りくる冥遁を前にして、コダマが前に出る。

「粒遁・天輪」

コダマが前に出たことで、シヤナは粒遁の術をチャージし始める。コダマが冥遁を防ぐと信じたが故の行動。卑留呼は笑った。どうやって冥遁を防ぐというのだろうか。どんな術であろうとも、冥遁の前では吸収される栄養素に過ぎない。

だが、前に出たコダマが不敵に笑い、両目の万華鏡写輪眼に現れた3つの歯車が回転する。

「虚空蔵（こくうぞう）。（お願いペイン）」

コダマが術を発動すると同時に、コダマの目の前に、コダマと同じ服装でオレンジの髪の毛の男性が霞のように現れる。その男性は、手を卑留呼に伸ばすと「神羅天征」と唱えた。

「なんだこれはあ」

さすれば卑留呼の冥遁のチャクラが、男の発した謎の力によって弾き飛ばされ、謎の力がそのまま衝撃波となって卑留呼の体を吹き飛ばし、ドームを貫通してドームの床に叩きつけられた。シヤナは背中しか見えない謎の男の登場に警戒するが、役割を終えたとばかりに手を下した男は霞のように消える。

術を使ったコダマは、力が抜けたように落下する。

コダマの術は、未知の術でシヤナの万華鏡でも一切理解できなかった。だがコダマが冥遁を防ぎ、卑留呼を吹き飛ばしたことで隙が出来た。

だが、未来視により卑留呼によって天輪を発射しても吸収される可能性が見える。だが最大限にチャージしたチャクラ粒子を解除して無駄にする訳にはいかない。

(どうする。こんな時)

思い浮かべるのは、自分の知る最強の存在。そう考えた時、頭痛と共に可笑しい映像がリフレインする。巨大な木の巨人と戦う、同じく巨大な須佐能乎を操る男。長い髪を持ち、この世のすべてを見透かすような強い眼光を持った男。邪悪な写輪眼を持った強大な姿、破壊を振りまく荒神、知りもしないはずの人物。

だが、シヤナはその映像を振り払った。

シヤナが追い求めるのは破壊ではない。大切な人を守るために戦った父の背中だ。

落下する最中、シヤナは自分の粒遁・天輪のために用意した高密度粒子の塊を雷遁・雷掌を用いて掴み取った。雷遁で保護された手で、膨大なエネルギー球を掴んだシヤナは、それを風遁・旋風玉で高速で乱回転させる。

思い出に残る父の姿、あの父の使っていた術をこの場で再現する。回転が加わり膨張しそうになる粒子球をチャクラでもって抑え込む。形だけは、父の術に近づく。だが、あと少し、完成まで時間が足りない。

体勢を立て直した卑留呼が空にいる自分を睨み、術の用意をしている姿にほくそえみながら左手をシヤナに向ける。

再び冥遁を発動されかける。

「終わりだ!!」

——シヤナ。君は一人じゃない。

シヤナの耳に、父の声が聞こえた気がした。間に合わないと思った時、卑留呼はシヤナの居ない方向に冥遁を発動していた。その謎の行いにシヤナの未来視が大きく変化する。

そして、その原因は、ドームの天井からこちらを見下ろす八雲の姿を見て、納得がいった。土壇場で目を覚ました八雲が、シヤナの考えを読んで幻術を卑留呼にかけた。

「いってー！ シヤナアアアアー！！」

八雲の声を聴いたシヤナは「いくつてばね!!」と大声で応える。その瞬間、シヤナの右手に作られた乱回転するチャクラ粒子の球が、変化。青い光は黒く染まり手のひらサイズの球体に土星の輪のようなものが掛かったものへと進化する。

父である波風ミナトの術とは少し違う。だが、限りなく再現した術が遂に完成した。何年もかけて生み出した術。それは友を救うために今猛威を振るう。

「また、幻術か」

八雲の幻術に気が付いた卑留呼。だが、まだシヤナの迎撃には間に合う。卑留呼は吸収したシヤナの粒遁・天輪を発射した。亜音速で迫る粒子砲。それがシヤナに迫るが、先見の万華鏡写輪眼はその未来を捉えている。

ギリギリまで引き付けたシヤナは、不敵に笑みを浮かべる。

天輪が命中する寸前、シヤナが瞬間移動する。そして、右手に光り輝くチャクラの球体を持ったシヤナは、卑留呼の背後に現れた。

「粒遁・天門」

ドーム内に散布した時空間忍術用の粒子は微かにだが残留しており、シヤナはそれを目標に瞬間移動。見事に卑留呼の背後を取ったシヤナは、自分の右手の術を振り返った卑留呼の胴体に叩きこんだ。

「粒遁・螺旋輪虞!!」

術をくらった卑留呼は、すさまじい威力を前に吹き飛ばされそうになる。自分の胴体に押し付けられた螺旋輪虞に内臓や肉、骨を碎かれながらも吸収してやろうとする。両腕で、冥遁を発動し、その威力を殺そうとあがく。

螺旋輪虞がすでに手から離れたシヤナは、踏ん張り必死にあがく卑留呼を観察していた。既にチャクラはなくなり、写輪眼は解除されている。

「ふふ、ぐう、わたしの、かちだ」

徐々に小さくなつていく螺旋輪虞に勝ちを確信した卑留呼。だがシヤナはその顔を見て、意地悪に微笑んだ。シヤナが腕を前に伸ばし、その指を弾いた瞬間。

螺旋輪虞の術は、輪つかの部分ですさまじい衝撃波として拡散。卑留呼の体を輪切りにし、ドームをも二つに切り裂いた。体を真つ二つにされた卑留呼は、冥遁の発動が出来ずに乱回転する嵐のようなチャクラ粒子に飲み込まれ、壁を貫きながら木っ端みじんとなる。

斬撃と衝撃の二段構え、それがシヤナの螺旋輪虞だった。

卑留呼の体は、チリひとつ残らず消滅し、勝負はついた。あまりの疲労感でうつぶせに倒れてしまうシヤナ。

だが戦いの衝撃でドームが崩れ始める。瓦礫が降り注ぎ、本格的に危ない状態となる。上には八雲がおり、彼女も動けないだろう。コダマは、何処に行ったのか心配すら感じない。

遂に巨大な瓦礫がシヤナの真上に降り注ぐ。回避は出来ず押しつぶされるのだろうか、最後の最後で無理し過ぎた。考えなしに動けるのは気分がいい、でも少しは考えよう。次からはそうしようと自虐するシヤナ。

「木遁の術」

崩れ落ちる瓦礫を、床から生えた木々が受け止める事でシヤナの身を守る。そして、天井から落下した八雲だったが、彼女の体を落下する瓦礫を蹴りあがって辿り着いたトルネが抱き上げた。

「遅れてすまない八雲」

「とる、ね、く、ん。あり、がと」

八雲は自分を抱えたトルネの姿を見て、眠ってしまう。一方木遁の術で建物の崩落を支えるのは、後から追いついたヤマトだった。

「ご苦労様。全部出し切ったって感じかな？」

「やまと、うごけない」

「隊長ね。大技を連発し過ぎたのかな。それと、あのコダマは？」

ここにたどり着く前に、最後の城門の前で無残に殺された巨大な生物の死体が転がっていた。

なんとなくだがそれがコダマによるものと勘づいた。しかし、現在にはコダマの姿が見当たらない。

「さあ。気まぐれな子だから、どっかいったんだってばね」

そう言つてコダマについて語らないシャナ。最低限の礼儀でもつて彼女の情報は話さない。怒られるのは同じなので、少しくらい酷く怒られてもいいだろう。

八雲の命に比べれば、安いものだ。

シャナが喋る気がないと分かったヤマトは頭を抱えながらも、シャナの体を背負つて移動することを決めた。

そうして崩れ行く建物から逃げ延びた第四班。

全員ボロボロだった彼らは、先遣隊の暗部からの連絡が断たれたことを疑問に思つた三代目が極秘で向かわせていた暗部部隊に回収された。



数日を掛けて、里に戻った第四班。シヤナと八雲は病院に入院。トルネとヤマトは、比較的軽傷だったために退院。特に万華鏡写輪眼の瞳術を使ったシヤナ。実は初めての発動で、体に無理をさせてしまっただけらしい。

卑留呼というSランクの凶悪犯を単独で抹殺したことで、第4班は火影からも表彰された。未曾有の危機となる可能性があった事件だけに、その功績は大きかったのだ。

特に下忍3人を率いたうえで、任務を達成したことからヤマトの昇給もあつたらしく、珍しくご機嫌のヤマトの姿があつたらしい。その分力カシに何かと財布扱いされていたという事実もあつたが。

そして、シヤナ、トルネ、八雲の三人は、それぞれ二つ名を周囲の忍達から得ていた。それは他国にも伝わるほどだった。

うずまきシヤナは、木ノ葉の青い閃光。

油女トルネは、木ノ葉の毒蓮華。

鞍馬八雲は、木ノ葉の幻術姫。

そう呼ばれるようになった。

八雲とシヤナは同じ病室で隣のベッドで治療を受けていた。

「……」

「……」

非常に気まずい。あの日から眠り続けた二人は、目が覚めたら同じ病室だったのだ。

互いに顔を合わせてしまい、目をそらすのも負けた気がする。だが、いつまでも見つめあつてるわけにもいかず、シヤナが話し始めた。「なんで、勝手なことしたんだってばね」

「は？」

「だって、あの状況で、あんなことしなかったら、こんなことにはならなかったってばね」

「え、もしかして喧嘩売ってるの？」

いきなり喧嘩の続きを始めようというのかと八雲は少し腹が立った。声に怒気が籠り始め、幻術にかけてやろうかと考え始める。

だが八雲の反応を見たシャナが少し黙り込んで考える。

「だから、違うくて。その、あの、あああもう!!」

枕を抱きしめて顔を隠してしまおうシャナ。少し自問自答をした後、顔を出す。

「ごめん。私が、私のせいで、八雲にあんな危ない事させちゃったってばね。ごめんなさい」

「え」

「ちゃんと八雲の言うこと聞くべきだった。そしたら、そしたら」

素直になれないシャナ。けれどここで言い訳をすれば、どうなるかわからない。

「そうだね。あそこで言う事を聞いてくれてたら、こうはなってなかったかも」

「……だってばね」

「けど、私もシャナの言葉に頭に来ちゃって、意地を張っちゃった。シャナの気持ち、すごく分かったのに、自分の気持ちだけで話してた。私もごめん、私だって敵に捕まるようなことしちゃって、余計に皆を危険にさらしたんだもん」

結果的に八雲の行動が正しかったが、身代わりになった事でより危険な状況になった可能性もあった。

お互いの行動を謝り続ける二人。

「私達、喧嘩したのって初めてだよね？」

「そうだってばね」

おそらくお互いに不満もあったのだろう。けれどそれを溜め込んでしまったからこそ、任務中に爆発してしまった。

「喧嘩しちゃったけど、私、シャナの事好きだよ。いつも強くてかっことよくて、憧れの女の子だし」

「そんなことないってばね。私は、ずぼらだし、めんどくさがりで、大切なものが何かも判ってなかった。だめだめなんだってばね、私」

シヤナの自虐する言葉に八雲は笑う。いつもプライドの高いシヤナらしくないしゅんとした態度と合わさって、八雲は笑顔になる。

「そうだね。確かに駄目駄目な所もあるよね」

「うん」

「けど、そんなシヤナの事、私好きだなんて思うよ」

友達からの最大限の自己肯定。その言葉が胸を温かくする。そういえば、さつきから八雲の言葉に違和感を覚えたシヤナ。

「そういえば、いつから呼び捨てになってた？」

「あれ？ そう言えば、私呼び捨てにしてたね。元に戻した方が良いでしょう」

八雲の言葉にシヤナは首を横に振る。そして恥ずかしそうに枕にまた顔をうずめる。

(この子可愛いな)

シヤナの意外な一面に八雲はからかいたいが気持ちが沸き起こる。

そして、同時にシヤナの本質に触れた気がした。いつも強気で、周囲に明確な壁を作る女性。けれども本当は恥ずかしがり屋で、素直じゃなくて、甘えん坊、年齢より幼い精神年齢をした少女。何らかの理由があつてシヤナは、大人になるしかなかつたんだろう。

大人が誰も守ってくれないのだから、自分が大人になるしかないように。大人のふりをしているんだろう。

「ねえシヤナ」

「何？」

ベッドから手を伸ばした八雲。人差し指と中指だけ伸ばした八雲の手を見て、シヤナは首を傾げる。

「これ和解の印なんだって」

「和解だつてばね？」

「これで手をつなげば、和解したことになるって忍組手の作法なんだって」

八雲から差し出された仲直りの合図。それを見てシヤナは、八雲の指に自分の指をからめるように手を伸ばした。和解の印が結ばれる。「私も八雲の事好きだつてばね。いなくなるかもと思った時、本当に

嫌だった」

「そっか、ありがとう」

シヤナが甘えてくるようで、八雲は不思議な気持ちになった。完全に仲直りした二人は、生涯の親友となったのだった。

その後、波の国での任務を終えたナルトやサスケがお見舞いに来たり、ヤマトやトルネが様子を見に来たりといろいろあった。

仲直り以来、シヤナが八雲に甘えるようになった。人恋しいのか常に一緒に行動するシヤナ。八雲が連れ去られたのがトラウマになりかけているらしく、非常に警戒していた。

自分の事を大切にしてくれる親友の好意を嬉しいと思いつつ、八雲は困っていた。

「シヤナ。大丈夫だから、問題ないよ」

「いや、敵の忍が待ち構えてるかもしれない」

「そんな訳ないよ!? お願いだから、お手洗い位一人で行かせて〜!」

どこまでもついて来ようとするシヤナに、八雲が辟易したのは、良い思い出。さすがにシヤナも悪戯でやっていたので、すぐに問題は解決した。

## 中忍選抜試験

病院を退院したシヤナは、自己鍛錬を積みながら、ナルトとサスケから波の国の任務について聞いていた。

どうやら依頼人の申告詐称で、Aランク任務相当の内容らしく、敵の忍との戦闘が何度も行われたようだ。

最初の刺客である中忍クラスは、ナルトとサスケで難なく対応できたが、霧隠れの鬼人・桃地再不斬が襲来。さすがにナルトとサスケも上忍クラスの殺意を持った攻撃には苦戦。

頼りのカカシも、再不斬の罠にかかって行動不能。

そこをサクラの立案で二人のコンビネーションプレイを行い、カカシを救助。

カカシが再不斬を倒し、解決かと思われたが、再不斬は死んだふりをしていただけで、生存していた。再不斬が再来することを想定し、修行を行った。サクラは遅れていたチャクラコントロールを。ナルトとサスケは、基礎能力の向上と水上戦闘に慣れるため、水上歩行の修行を行った。

そして、チャクラコントロールが抜群にうまかったサクラは、ナルト達が何日もかけた木登りを一日で終了。本気で二人に見直され、警戒もされた。

そういう日々を過ごすうちに、再不斬が再来。今度は、氷遁という血継限界を使う少年を引き連れ、第七班に襲い掛かってきたらしい。

その戦闘は熾烈を極め、敵の術中に嵌められたサクラを守るためにサスケは写輪眼を開眼。ナルトはサクラを庇ったサスケの姿を見て、赤いチャクラが体から湧き出し、今までにない戦闘力を発揮。見事に氷遁使いの少年を撃破。

その後、カカシに追いやられた再不斬を庇って少年は死亡。再不斬もカカシによって無力化され、全てが終わったと思った時。

再不斬の依頼主の裏切りが発生。残酷な忍者であった再不斬は、ナルト達と戦った少年の想いをナルトに語られ、涙を流しながら、少年の死を侮辱した依頼主を撃破。

忍とはなんであるかと生き様と死に様で見せ付けられたらしい。人間として成長したであろうナルトとサスケ。そんな二人との修行は、任務終わりに語られたヤマトのある言葉によってしばらく延期となるのだった。

「中忍試験?! 木ノ葉ですか!?!」

非常に興奮するのは八雲だった。何年も待ちに待った木ノ葉での中忍試験。ようやくこの時が来たと大はしゃぎしている。

「そうだよ。今年こそは中忍を目指して頑張つてね。試験日は一週間後」

「ヤマト、なんでご機嫌だつてばね?」

「隊長ね。ようやく君らに試験を受験させられるからだよ」

ヤマトは三人に推薦状を手渡す。実力は申し分ない三人。いよいよ上にどやされる日々も終わる。ヤマトは涙しながら三人の中忍試験合格を願った。

「いよいよだな」

「うんうん! いよいよ!」

「八雲、落ち着かないと、当日に体調悪くなるってばね」

シヤナの指摘に、はしやぎすぎている自覚のあった八雲は落ち着く。これで風邪を引いたら元も子もない。

だがワクワクしてるのは、トルネやシヤナも同じだった。

「どんな試験になるんだろう。体力勝負だったらいやだなあ」

「どうだろうな。まあ八雲も体力はついてるし、問題ないだろう」

「私が予知しようか?」

シヤナが突然そんなことを言い始める。シヤナは八雲とトルネに對して、自分の未来視の事を打ち明けたのだった。はじめは半信半疑だったが、シヤナの勘の良さから、これまでの功績を考えると、未来視というものを認めた。

便利なようで、意外と不便な能力でもある未来視。その内容を詳しくは言っていないが、自分には予知能力があると伝えたことは大きい。そして、決して秘密を洩らさないでほしいと。

「絶対やめて!? そんなカンニングみたいなのだめだよ」

一週間先と、難易度は高いがテストの内容を見るくらいなら、出来ると思つたシャナだが八雲が拒否。自分の実力で受かりたい彼女は、生真面目さからシャナの提案を拒む。

「絶対に先読みはやめてね。正々堂々試験を受けるんだよ」

「え、私もダメなの？ 事前に対策とか」

「駄目!」

ここまで強く言い切られては、シャナもズルをするわけにはいかない。二人の会話を聞いてたトルネは、腕を組みながら中忍試験について考える。

「戦闘とか非常時はいいけど、そういうのよくないよ。シャナだって映画のネタバレとか見るのも嫌でしょ?」

「確かに」

納得してしまう。ネタバレは嫌だし、相手がそれを知っているのも気分が悪い。シャナは中忍試験に関して、未来視を使わないことに決める。

シャナに対する八雲の説得が終わり、3人で団子でも食べに行こうという話になった。

シャナも夕飯御の買い出しに行きたかったので街に繰り出すのは賛成だった。

「あれって、ナルト君じゃない?」

シャナ達が街道を歩いていると、曲がり角にナルトとサクラ、そして木ノ葉丸を含んだちびつ子たちが居た。木ノ葉丸たちは、ナルトに懐いている木ノ葉の子供達で、ナルトが暇な時によく相手をしてあげていた。

それを知っているシャナは、彼らとも面識を持っていた。

妙に怖がられているのが謎だが。

「何かもめているんじゃないか、他国の忍?」

トルネは、ナルト達もめていると判断した。トルネと八雲も、ナルト達とはシャナを通じて面識があった。

ナルトが旋風玉を使用し、相手に警告をしている。そして警告され

ている相手は、木ノ葉丸の胸倉を掴み、小さな体を持ち上げている。苦しそうな表情の木ノ葉丸が見える。

風貌から木ノ葉の忍ではなく、他国の忍だと分かる。中忍試験が開かれる以上、他国の忍が木ノ葉にいるのはおかしくない。

しかし、他国の忍が木ノ葉の住人を襲っているようにしか見え、他国の忍は見せ付けるように木ノ葉丸を殴ろうとしていた。

「まずいな。いくぞ」

「う、うん」

トルネが止めるために駆け出すより早く、シヤナが先行した。天翔を使い、青い光と共に駆け出し、いち早く現場に到着。男から素早く木ノ葉丸を奪い返し、シヤナは男の体を蹴って、ナルト達の元に着地する。抱っこした木ノ葉丸を下ろし、砂隠れの額当てをした2人の男女を見据える。

「ぐっ、何だお前、痛てえジャン」

「なんだ今の動き」

蹴られた男は、黒子のような衣装で顔に文様、背中に包帯に巻かれた何かを背負っている。もう一人は金髪を4つの束に纏めた大きな扇子を持った女性。女性の年齢はシヤナと同年代くらいだろう。

突然現れたシヤナに警戒したのか、女性が扇子を構える。

シヤナは、怖かったのか泣いている木ノ葉丸を追いついた八雲に預ける。八雲は木ノ葉丸の怪我を確認しながら、子供達を背に庇う。トルネも同じようにナルトとサクラを守るように前に出る。

「姉ちゃん!」

「何があっただってばね?」

弟が揉めているため介入してしまったが、事情が一切わからない。するとサクラが説明し始めた。木ノ葉丸が男性にぶつかってしまい、それに怒った男が暴力を振るおうとしたと。

「子供がぶつかったことは私が謝るってばね。けど、暴力を振るうのは同盟国とはいえ、問題なんじゃないか? 中忍試験を受けに来たのに、主催国で揉め事なんてね?」

砂と木ノ葉は同盟国。中忍試験を受けるため訪れているにしても、



里の住人を痛めつける真似は敵対行為だ。事情も不慮の事故であるため、事を大ごとにすれば立場が悪いのは砂の彼らだ。

ナルトやサクラは、中忍試験という単語は初耳だったらしく、首を傾げていた。

「なんだよ偉そうに。保護者の登場かよ。やっぱお前よええジャン」

「んだとてめえ！ やんのかってばよー！」

話がややこしくなるので、シヤナはナルトに拳骨を叩き込んで黙らせる。殴られたナルトは、シヤナを見るが、目で「黙ってる」と命じられる。

騒ぎを聞きつけてか、サスケもこの場に現れた。

「どうしたお前ら」

第四班と第七班のメンバーが集合した。人数もそうだが、相手の力量を感じ取った砂の忍達は、それぞれの武器を構える。だが突然砂嵐が発生し、その中心に赤髪に酷い隈、額に愛と刻まれ、瓢箪を背負った少年が現れる。

存在感を持つて現れた少年。肌を感じる殺気から、力量は砂の忍達でも抜けている。

(なんだこの殺気は)

(子供達だけでも逃がそうか)

トルネが秘かに戦闘準備を整え、背に庇った子供たちを逃がそうとする八雲。戦闘経験が一番豊富で修羅場をくぐってきた彼らだからこそ感じ取れる。

この瓢箪の少年は危険だと。

一方でナルトとサクラは、相手の力量を感じ取れていない様子。サスケのみが写輪眼を発動し、砂の忍を警戒している。

「他里で恥さらしな行動はするなカンクロウ。里の面汚しが」

「う、ご、ごめんな我愛羅。兄ちゃんつい」

「そうだよ。姉ちゃんも謝るからさ」

どうやら力関係は、一番年下らしき瓢箪の少年が主導権を握っているらしい。砂の3兄弟なのだろう。だがそこには、兄弟の絆などな

い。相手を恐れ、力で支配するだけの関係。

「黙れ。殺すぞ」

その一言で砂の姉兄を黙らせた我愛羅は、シヤナ達を見据える。

「俺たちも此処で殺し合うのは望まない。ところで、木ノ葉のお姉さん、お前の名前は？」

我愛羅が指さしたのは、シヤナ。先程の動きを見ていた我愛羅は、この中で一番強いのがシヤナだと感じ取っていた。他にも後ろの体格のいい男と子供を庇う女、木ノ葉の忍者はぬるいと聞いていたが、侮れない奴らが居ると感じ取っていた。

そして次にうわさに聞く写輪眼を使っている少年と風遁を使っていた少年、先の3人には劣るが、決して悪くはないと感じていた。

そして何よりも自分と同じ何かを感じ取れたシヤナ。その目に強い憎しみと孤独を抱える同族だからこそわかるオーラ。それを放つシヤナに興味がわいた。

「うずまきシヤナ」

「あの閃光か。どおりで」

「閃光ってあの」

「やべえ奴ジャン」

砂隠れにもシヤナの異名は広がっていたらしい。シヤナの名前を聞いてその場から立ち去ろうとした我愛羅達。だがそれをサスケが止める。

「おい、お前の名は？」

明らかに強い忍。自分より強いかもしれない相手にサスケも興味を持った。我愛羅は「そうだな。失礼した」そう言ってシヤナ達に向き直る。

「砂瀑の我愛羅だ。お前はうちはだな。お前も中忍試験を受けるなら、それなりに楽しめそうだ」

我愛羅はそういうと砂嵐を発生させ、その場から消える。

残された第四班と第七班は、子供達を家に送った後、解散となった。

「トルネ」

「ん？ どうしたんだサスケ」

「少し俺と組手に付き合ってくれ。自分の実力を再確認しておきたい」

トルネはサスケの頼みを受けて、少し組手に付き合うと、広場に向かう。家の方向が同じだったサクラと八雲は一緒に帰宅。

帰り道で、ナルトは自分が全然相手にされなかった事に不満気だった。

「俺ってば強くなってるのに……。俺も姉ちゃんみたいな二つ名ほしってばよ！ そしたらカツコよくきめれるってのに」

「閃光の弟、なんてどうだってばね？」

明らかに揶揄うシヤナ。ナルトは憤慨する。そんなみつともないのは嫌だと怒る。

「火影になる男、うずまきナルト。っていうのはどうだってばね？」

「それイイ！」

仲のいい姉弟は、家までお喋りしながら帰った。そして腹ペコで帰った矢先、冷蔵庫の中に何もないと知り、一樂のラーメンを食べに行っただけだった。

その次の日だった。中忍試験に5年ぶりにルーキーが受験することとなったのは、その中には、ナルトの同期全員が含まれていたのだった。

今、中忍試験が始まる。

## 中忍選抜試験 2

弟と同時期に中忍試験を受けるにあたり、ナルトからある宣言をされた。

「姉ちゃんも試験の最中はライバルだつてばよ！俺と戦うことになつても全力でやってくれつてばよ」

という可愛いお願いをされたことで、シヤナは泣く泣く弟と距離をとる事になった。ナルト曰く、シヤナにも見せたことのないすごい術を開発してやると意気込んでおり、結局試験の日まで別々の部屋で過ごす徹底ぶり。

試験の申込期日に、何故か幻術で階を偽った建物を普通に通過した第四班。

何事もなかったかのように願書を提出。

一番乗りで試験会場に入ったシヤナ達。ぞろぞろと他国の忍達や、先輩の木ノ葉の忍達も教室に入ってくる。だが、シヤナ達の顔を見るなり距離を取って様子見に徹している。どうにも居心地が悪いと愚痴るシヤナ。

「なんか、すごい見られてるってばね」

「本当だね。なんでだろう」

「わからない。警戒されているようだが……まあ気にしても仕方ない」

三人共、自分たちが有名になっている自覚はない。試験開始まで時間があき、雑談をする3人。

「今年の試験、ナルト君たちも受験するんだよねシヤナ？」

「うん。張り切ったナルトに、接近禁止令出されたつてばね」

「ああ。なんとなくわかるな。シヤナ試験中でもナルト君の為に、手助けしそっだし。保護者と一緒に試験、やだな」

「姉離れが早い。あと10年は待つてほしい」

（22歳を超えて姉離れできていないのもどうなんだ）

口に出せば面倒なことになると分かっているトルネ。だが何となく顔を見たことで考えが読めたシヤナが肘で彼の鳩尾を突く。その

攻撃にむせ返るトルネ。

「でも、入ってこないね。ルーキーの子達、結構そろってるのに」

「あ、今度はトルネの弟子が入ってきた」

リー、テンテン、ネジの三人が会場に入ってくる。シャナ達の姿を見たリーとテンテンが走ってくる。

「シャナさん、八雲さん、お久しぶりです。お二人も今年は受験なんです。私も初めての試験で、お互い頑張りましょうね」

「うん。頑張るってばね」

「よろしくね」

「トルネ先輩！ お久しぶりです！」

「久しぶり……。リー、お前表蓮華を使ったのか？ 包帯が外れてい

る」  
トルネに腕に巻いた包帯の乱れを見破られ、この人はやはり侮れないと畏敬の念を抱くリー。試験前に腕試しをしようとして、ある相手に挑んだという。

思ったよりも相手の力量が高く、戦いにのめり込んでしまい、つい表蓮華を使いかけたという。だが途中でガイ先生に止められたという。

（よく見ると、顔面と脇腹に打撲の跡がある。リーに体術でダメージを与えられる相手か）

リーも無傷では済まない相手。そんな奴が居るのかと思ったトルネ。一方残されたネジは、なんとも言えない微妙な表情で八雲たちを見ていた。

「なんだってばね？」

「俺はあの時より強くなった。この試験で、あんた達には負けない。そう宣言しに来たんだ」

「せいぜい頑張るってばね。もし私と戦うことになったら、油断しないことをおすすめる」

「こちらの台詞だ」

シャナはネジの事を許していない。八雲を侮辱したころの記憶が消えていないのだ。とはいえ、虐めるのは大人げないと警告で済ませ

ておく。

3人は、シヤナ達へのあいさつを終えるとそれぞれ離れた席に着席する。

今度は、砂の3姉弟が現れる。我愛羅の存在感は際立っており、注目が集まるが、その目を見て戦意を喪失する受験生たち。

我愛羅は、その中で平然と自分を見返す紫の瞳に気が付く。

「木ノ葉の青い閃光、あんた達と同時期に試験を受けられて幸いだ。俺は強い奴を望んでいる」

「我愛羅だったってばね？ よろしく」

シヤナが手を伸ばし、握手を申し込む。我愛羅はその手の意味が解らず、シヤナを睨む。だが怖いもの知らずのシヤナは、我愛羅に「握手」と伝える。

シヤナは秘かに我愛羅を気に入っていた。敵として。好敵手かはわからないが、血の匂いにする瓢箪を持ち、その目にある殺意と狂気。實力はまだ測れないが、歯ごたえのありそうな相手だからだ。

獲物としてシヤナを認識した我愛羅に対して、シヤナは良い対戦相手としてしか見ていない。明らかに失礼な態度をとる我愛羅に対しても、強さゆえの傲慢さを理解するシヤナは寛容だった。もちろん八雲やトルネを侮辱すればこの場で再起不能にするつもりだが、強さを見極めているこの少年は、そんなことはしない。

「砂隠れには、握手の習慣ないってばね？」

「……はあ」

我愛羅が握手に応じた。その光景に彼の姉兄は驚いている。

「もし、強い相手がお望みなら私の所に来るってばね。いつでも歓迎だってばね」

「ふ、ははは。そうか、楽しみだ」

握手に応じた我愛羅を、彼にしか聞こえない声で挑発するシヤナ。その傲慢さには我愛羅も苦笑するしかない。だが手から伝わった殺気は本物であり、我愛羅の生命を脅かすほどの実力者であることは間違いない。

身震いしていることに気が付いた我愛羅は、少しご機嫌だった。自

分の実力を試すためバトルジャンキーの気があるシャナと強い相手を殺すことで生を実感するサイコキラ。意外と相性は良かった。

「シャナ。なんであの子と仲良くするの?」

「ん? なんか、目が、私やナルトに似てるんだってばね。だから、かも」

「どこが? と感じたトルネと八雲。だがシャナは感じ取っていた。あの目の奥にある寂しさに。だからこそ手を差し伸べたのかもしれない。」

「後、なんか可愛いってばね。やんちゃ盛りって感じで」

「本気で聞くとよ。何処が?」

そうして八雲と話していると、シャナは自分に向けられた舐め回すような視線に反応。青い写輪眼でもってその人物を睨む。その人物は、草隠れの長髪の忍だった。

明らかに下忍のものではない異質な気配に、シャナはその人物を睨みつける。そうして視線が交差したが、相手が頭にかぶった笠を下ろすことで視線を外す。

「どうした?」

「あの草隠れの忍、気を付けるってばね」

シャナは酷く真面目だった。彼女の言葉を聞いた二人も、その人物に対する警戒を強める。

(あら、私からこぼれた僅かな気配に気が付いて、睨み返してくるなんて。流石は、うちの姫。これはうかつに近寄れないわね)

草隠れの忍は、シャナを正しく評価した。うかつに近寄れば、ただでは済まない。

シャナと草隠れの忍による睨み合いをしている間に、既にナルト達、第7班は到着していた。ルーキーたちで集まり、その騒ぎを収めに来たメガネをした木ノ葉の先輩忍者に試験について説明され、脅された。その結果。

「俺はうずまきナルトだ!! てめえらには負けねえぞ!! わかったかあ!!」

目立ちたがりのナルトらしく、大きな声で受験者全員を敵に回した

のだった。そして、ナルトの発言に「うずまき？ うずまきってあの閃光の？」「いや、それはあのゴーストをした女だ」「血縁者なのか？」などとシヤナのネームバリューが影響し、強く警戒されることになった。

宣言を終えたナルトはすつきりしており、サクラが激怒していた。けれども怒りに任せてちよっかいを掛ける奴は、いなかっただ。

何故なら、その生意気な奴の姉が、其処にいるからだ。

空気が殺伐とした時、試験会場に煙と共に怒声が響く。

「このくそ野郎ども！」

多くの木ノ葉の忍を引き連れて現れたのは、試験官の森乃イビキ。彼は、忍達に警告を述べていく。許可のない戦闘や殺人は認められない。

名前を呼ばれたものから受験票を提出。指定された席に座れと。

「早くしゃがれ、第一の試験は筆記試験だ」

そう宣言したイビキ。その発言にこの世の終わりのような声を上げたものが二人いた。一人はアカデミーで筆記の成績がドベのナルト。

そしてもう一人。

「勉強とかやったことないってばね!!!」

うずまきシヤナ。アカデミーに通わず、学業に時間など割いたことのない女性だった。

うずまき家に訪れた最大の敵、学力テストの猛威が、今振るわれるのだった。そして彼女の班員は、それぞれ家庭での教育は終了しており、一般的な学力はあった。

(そういえば、シヤナは、勉強をしたことがあるのか?)

(もしかして、シヤナ。教科書も読んだことないんじゃない?)

まさかの盲点。第一試験こそがシヤナにとっての最大の敵だった。



## 中忍選抜試験 3

イビキによって指定された席に座った受験生たち。青白い顔で試験に臨む2人の姉弟。

ルールが説明された。3人1組が共同体で、3人にそれぞれ10点づつ持ち点が追加。試験終了時に合計点数が15点以下の班、そして0点の人間が一人でも出た班は失格とする。

カンニングは試験官側に発見され次第、2点減点とする。もし5回見つかったら即失格。

問題は全10問で10問目は白紙であり、試験開始から時間がたつてからイビキから内容が伝えられるという。

そして試験が開始され、答案用紙を見たシャナは、何一つ理解できなかった。

(勉強とかしたことない。まさかこんな罫が、あらかじめわかってたら、対策したのに)

シャナは、頭を抱えながら未来視を禁止した八雲を少し恨んだ。

実際のところ、シャナでは問題文を未来視しても、自力で答えにはたどり着けず、八雲に聞けば怒られ、トルネも回答できない。知り合いいも少ないため、答えは得られない。さらにカンニングを疑われる始末。

調べようにも問題文は全て応用のため、答え合わせも出来ない。

完全に詰みな状態だった。

そして試験内容から、シャナが点数を取れなければ、失格が決定している。

これはさすがに怒られる。二人に怒られる姿が目に見え、さらに思考がマイナスに働いていく。

何年も待ったのに、シャナの学力不足のせいで落ちるなんて事態、最低以外の何物でもない。

もはや試験に一切向き合わないシャナ。そのせいで試験の本質に気が付いていなかった。

シャナは一切勉強をしていないので正しく理解できていないが、こ

の問題、下忍に解けるものではなかった。

(この試験は、情報収集能力を試す試験だ)

誰かが心の中で確信した。元々解ける問題ではなく、試験官側が用意した正解を知る者からカンニングを行うこと。それが試験の内容だったのだ。

通常ならカンニングは失格なのにチャンスが五回もある事自体がおかしい。

それぞれ下忍達は自分の持つ手段でもって、カンニングを行っていた。ただ、あまりに拙いカンニングは次々に減点され、何人かが失格となっていた。納得がいかない奴らもいたが試験官側に力で制圧されていた。

そのことでナルトとシャナはカンニングすらできない精神状態になっていた。

(拜啓。お父さん、お母さん。シャナは元気です……)

天井を見上げながら、天国の父と母に語りかける。

シャナの様子を見て、もはや解答用紙すら裏返している様から、後ろの席の八雲は彼女の考えを察した。

(諦めちゃってる……)

八雲が指輪を外し、シャナに幻術を掛ける。

「シャナ。驚かないで聞いてね。声も出さないで」

シャナの視界に、試験官のコスプレをした八雲が現れ、黒板を使って授業を始める。

(ついに幻覚まで。シャナはもうダメかも知れないってばね)

「はい、天井見ない。これ幻術だから。説明するね」

シャナは八雲の幻術に説明を受ける事で試験の趣旨を理解した。

とんでもない試験だと試験官を睨むシャナ。

(許せん)

そして、自力で8割は問題を解いていた八雲から、幻術内で答えを教えてもらう。既にトルネにも教えている為、合計点数はおそらく15点以上になると伝えた。

そこまで聞いて、テスト中不安で仕方なかったシャナは、涙を流し

ながら感謝していた。

もう八雲の家に足を向けて寝られないと本気で考えていた。

(危なかった)

それが八雲の正直な感想だった。だが、残る10問目があるのに安心しきったシャナが眠り始めてしまう。八雲が問題を解く時間ずつと、精神的に追い詰められている影響が出たのだろうか。

それが10問目が出ても、八雲なら解いてくれるという安易な考え故か。

(俺の試験中に居眠りする奴が居るとはな)

あまりに大物な態度に、イビキが感心する。この精神的に追い詰められる状況下でリラックスする様子に底知れぬものを感じ取っていた。

本当は、八雲任せの無謀な安心なのだが。シャナが寝息を立てているのを見て、八雲が驚愕する。

(あの子、全責任を私に放棄した!?)

(八雲、頑張ってくれ)

勝てない戦いはしない。無理なものは避け続ける。そんな思考のシャナ。

そして、シャナが深い眠りにについている間に、ついにイビキによって第十の試験内容が発表された。

10問目は、解けなければその時点で不合格。それどころか今後の中忍試験の受験資格も失うというもの。受験生たちに緊張が走る。9問目までもカンニング必須な試験なのに、10問目は自分の人生を左右する責任が伴われる。

棄権する事も出来るが、その場合、チームメイトも道連れになる。

そんな極限状態の選択肢を与えられ、数多くの受験生が棄権を選んでいく。

「もう、棄権する奴はいないか?」

10分ほどしか経っていないが、受験生たちの神経を削るような難問。悠久の時にも感じられた時間の中、一切起きないシャナ。熟睡しているのか、彼女を見ていた試験官が「大丈夫か?」と心配していた。

一方で一問も解けていないのは、うずまきナルトだけだった。二度と中忍になれないという絶対に嫌な条件を前に棄権しそうになる。

だが自分の忍道を思い出した彼は、バンっと机をたたく。

「なめんじゃねえ！俺は逃げねえぞ！受けてやる。もし一生下忍になつたつて意地でも火影になってやるから別にいいってばよ!!」

啖呵を切ったナルトに、イビキは尋ねる。間違えたら一生下忍だぞと脅す。

「関係ねえ。俺は自分の言葉は曲げねえ」

ナルトの言葉を聞いて残った受験生たちが、全員その勢いに？まれる。もう誰も棄権なんてしないと判断したイビキたち試験官は、その時点で第一試験の合格を言い渡した。

この試験は、9問が情報収集能力が不足している者を振るい落とすための試験で、10問目は実際の任務でよく起こる理不尽な逃げる事のできない二択にも挑めるかを試す課題。

ようは困難に挑む度胸を試すものだったのだ。

その点で言えば、今ここに残った全員は合格だった。イビキは合格者の彼らに、自分のバンドナの奥にある拷問の跡を見せ付け、情報は時に命よりも重いということを語った。そして、忍として生きるなら、決して避けられない任務というものがある。

中忍という部隊長クラスともなれば、理不尽な場面に直面しても、みなを率いて窮地を切り開く資質が必要なのだ。そう試験の本当の意味を伝えたイビキ。

そこまで説明したとき、教室の窓を突き破って一人の女性が入ってきた。

「あんた達、喜んでる場合じゃないわよ。あたしは第二試験官、みたらしアンコ。次行くわよ次！」

急に現れた女性は、気の強そうな美人であつたが、どうにも空気を読めないらしい。すぐに周りとの温度差に気が付いたのか、顔を少し赤くしていた。

だが試験官である彼女は残ったメンバーを見て、不服そうであつた。全部で40組、120人残った受験生たちを見ながら、「次の試験

で半分以下にしてあげる」と宣言していた。

「つて、何この子？ 熟睡してんの？」

明日から行われる第二試験の場所は担当の先生に聞けと言ったアンコ。受験生たちは、皆仲間たちと一次試験の合格を喜んだりしている、しかし、前の方の席で熟睡し、自分の髪の毛を食べているシヤナを見て、イビキに「なにこれ？」と尋ねる。

イビキはお手あげだというようなジェスチャーを取って、答える。

「シヤナ。起きて」

「むにや、うん、なに？」

「第一試験終わったの。いい加減しやきつとして」

「はい。いた、いたたた、八雲!? 八雲さん!？」

体を伸ばしてコリをほぐすシヤナ。その様子に呆れているのか八雲がシヤナの耳を掴んで引っ張っていく。どうやらお説教が始まるらしい。

「八雲、あまり、厳しくするのは」

「トルネ君？」

「がんばれシヤナ」

止めようとした矢先、八雲に微笑まれたトルネは、シヤナを見捨てた。二人の関係性が変わり、力関係ははつきりとしている。そして八雲が遠慮しなくなった関係か、若干トルネも怖くなっていたのだ。

素直に怒られた方がいいだろうと、トルネは達観した。

そして、イビキとアンコの視線に気が付いた八雲は、頭を下げながら涼しい顔でシヤナの耳を引っ張りながら教室から出ていった。

「あの子達よね。最近噂になってる」

「ああ。第四班だな」

「全員修羅場をくぐってるのね。いい目をしてるわ。ぞくぞくしちゃう」

そう彼らを評価したアンコ。イビキはまた悪い癖が出たなど呆れていた。

## 中忍選抜試験 4

次の日。第二試験会場である第44演習場、通称死の森に集められた参加者たち。

そこで行われる試験の内容は、5日間のサバイバルであり、天と地と書かれた巻物をそれぞれ班に種類づつ配布。受験者は、試験終了までに持っていない方の書を手に入れ、演習場の中心にある塔まで辿り着くこと。

なんでもありで、相手を殺してもいいため、同意書が要る事。

失格の条件は、班員が死亡、または再起不能になる事。巻物を勝手に開く事。タイムオーバーの3つである。

本当の殺し合いをするととなり、受験生たちは殺気立っていた。

「こういうのやりたかったってばね」

「何でもありか。怖いね」

「所で、本当にやるのかシヤナ？ 嘘だと言ってほしいんだが」

試験内容について聞いたシヤナの提案は、正直想像外だったトルネ。とんでもない作戦を考えていたからだ。いや前日のストレス発散も兼ねたものだろう。

「やるってばね」

「やりたくない」

「やるってばね！」

「いいや駄目だ。お前は試験を早く終わらせたいだけだ」

シヤナの提案を却下するトルネ。流石にあり得ないと断固拒否するスタンズだった。八雲は、珍しく意見が割れる二人のどちらの肩を持つか悩んでいた。

そんなあほな会話をしている第四班。

一方ナルトは、不気味な森を眺めており、試験官であるアンコから警告をされていた。

「ここが死の森と言われるゆえんは、すぐにわかるわ」

「へへーん、そんな脅し俺は怖くないってばよ!!」

「そう。君は元気がいいのね」

元気よく強がったナルト。その言葉を聞いたアニコが笑顔になり、そして少しの敵意をナルトに向けた。そして、瞬時に袖からクナイを取り出し、ナルト目掛けて投擲。

「え」

ナルトはそれを見て反射的に横に跳ぶことで回避する。しかし、瞬身の術でナルトの背後に回り込み、その頬にクナイを当てる。それはまごうことなき警告。

「はや」

「君みたいな子が一番早く死ぬのよ。私の大好きな血を垂れ流してね」

つーつとナルトの頬から血が流れる。相手の動きに驚いていたナルト。実力を見せつけたアニコの背後に、回り込んだ人物が居た。

自分の背後に殺気を持った人物が来たことでアニコも反応して、もう一本のクナイを構えようとするが、その腕を捻られ、首にクナイを当てられる。

「へえ、早いよね」

「クナイ返すってばね。代わりに、私の弟を放してもらえる?」

ナルトに攻撃された事に激怒したシヤナは、アニコが投げたクナイをキヤツチして、そのまま背後に回り込んでいた。

「あらら、お姉さんの登場だったのね。ごめんなさいね」

「姉ちゃん」

解放されたナルト。自分の為にシヤナが怒っているのはわかったが、酷く悔しい気持ちになる。アニコは、シヤナに解放されるなり、腕を回しながら「私も鈍ったわね」と反省していた。油断していたとはいえ、下忍に背後を取られたのだから。

「姉ちゃん、なんで助けたりなんか。俺との約束を忘れたのかってばよ!?!」

「……」

ナルトは試験前に言っていた。試験中はライバルとして自分を見てくれと。なのに、いつまでも自分の保護者である彼女。力の差はわかっている。だが負けるつもりはないのに、明らかに下に見られる劣

等感だろうか。

ナルトは姉に対して怒りを向けてしまった。

「試験官の攻撃は、試験に関係のない戦闘だから助けただけ。試験中なら無視したってばね。それに、私に助けられたくなかったら、お前が強くなればいいだけ。違うかナルト？」

シヤナは無表情のまま、ナルトの髪を掴んで語る。

「粹がるなら、この試験に合格して私の前に現れるくらいはしてほし  
いってばね」

「上等だ！」

シヤナの挑発。それに乗ったナルト。だが同時にシヤナからの警告も理解していた。ここからは真正銘、シヤナも敵に回るということを。シヤナだけでなくナルトより強い奴らも、命を狙ってくる。ここからは甘えがあつては生き残れないと。

八雲とトルネの居る場所に戻ったシヤナ。

「なんで、ナルトと喧嘩したのに嬉しそうなんだ？」

「うーん、あの子が私に凄まれても、まっすぐ睨み返してきたってばね」

波の国の任務や、第一試験を突破したことで変化があったのだろうか。明確に心は強くなっているようだった。男の子の成長は早いと聞いた事があるが、それは本当なのだろう。

ナルトの成長を喜ぶ半面、姉離れが迫っているような焦燥感。

でもここは、ナルトの言葉を信じてあげたい。そう思った。

同意書を提出し、巻物を貰ったシヤナ。八雲が預かろうかという中、シヤナがそれを掴んで、同意書提出のテントに在った垂れ幕から出ていく。

ただでさえ注目されているシヤナ達。彼らとは同じ書でないことを祈る受験生たち。

「私たち地の書だから、よろしくだつてばね」

あえて自分たちの書を見せたことで、敵を作るシヤナ。反則行為に近いが、他の受験生たちの表情から、天の書組が割れる。ある程度、組



み分けを把握したシヤナ。これで地の書の受験生組は、シヤナ達を襲うメリットはなくなる。

そして、シヤナ達は相手がある程度絞れた。

(ナルト達は、天の書みたいだってばね)

サスケやサクラの反応を見て、そう判断したシヤナ。ナルトは、シヤナを睨みながら拳を突き出していた。その目には、取れるものなら取ってみやがれと浮かんでいた。

決められた配置に移動させられたシヤナ達。他の受験生たちと同タイミングで死の森の入り口が開かれる。

シヤナ達のゲートは、44番だった。

「シヤナ、さっきのあれ怒られちゃったね」

「反則ギリギリだからな」

「あのさ、やっぱり私の作戦でやるってばね」

まだ言うのかとあきれれるトルネ。もう言っても聞かないのだろうと、諦めモードに入っていた。トルネが諦め、八雲は「好きにしていよ」と頷いている。

「じゃ、死の森を時計回りに、見つけた奴から全部狩っていくってばね」

最悪のバーサーカーが全てのチームを狩りつくすと宣言した。シヤナの作戦は、この第二試験でライバルを狩りつくし、その場で合格するというもの。

ナルトと別居生活をしている期間が長く、もう手っ取り早く終わらせようと考えた愚行だった。

恐ろしい考えの下、第四班は、死の森の狩人となった。

## 中忍選抜試験 5

第二試験が始まり、20分ほど過ぎた段階。

「た、たのむ、ころさないで」

「じゃ、巻物よこせてばね」

木ノ葉の受験生。シヤナ達よりも年上の3人組は、完全制圧され、一人を残して縄で拘束されていた。

残った一人もズタボロにされ、涙ながらに命乞いをしていた。

「渡す。渡すよ。でも地の書だぞ」

「受験者の間引きだつてばね」

シヤナに顔面を踏みつけられながら懐から巻物を渡す受験生。その巻物を確認したシヤナは、火遁の術で巻物を燃やしていく。自分たちの合格の条件を失ったことで涙する木ノ葉の忍。

だが、シヤナ達に襲い掛かってきたのは此奴らだった。名ばかり有名になり生意気だと因縁をつけて挑んできた3人だったが、八雲の幻術のみで制圧され、シヤナによってボコボコにされたのだ。

シヤナから仲間を連れて森の入り口付近に戻っておけと命じられる。もし姿を見かけたら、殺すと告げて。

このチームを含めてシヤナが脱落させたチームは、現在で5組。まるで辻斬りの様に全力で駆け抜けるシヤナとトルネが高速で相手を武力制圧。殺しはしてないが、致命傷を与える事もあり、取りこぼした相手を幻術に嵌める八雲。

中には、シヤナ達の姿を見た瞬間、気を失った者たちも居た。元々トルネ、八雲、シヤナの3人は、サバイバルの経験が浅い。なので無理に罫を張ったりせず、積極的に戦闘能力で周辺の受験者たちを狩っていく事にしたのだ。

どうせ眠るならゆっくり眠りたいと、手当たり次第に参加者を減らしている。それもド派手な戦闘を行い、あえて受験生を引き寄せてすらいる。

木ノ葉の忍達が泣きながら、入り口に向かったのを眺めながら、シヤナは出だしが好調なので気分が良かった。

「すごい怨み買ってそう。すごい目で睨まれてるけど、大丈夫なの？」

「どうせ、あの実力じゃ死ぬだけだってばね。早々に退場させてあげただけ、優しいと思うけど？」

力に自信のあるシヤナらしい傲慢な意見。この子、活き活きとしてるなど感じる八雲。だが、八雲は、自分たちを見ている何かの気配を感じた。

「また、来たよ」

「わかってる」

シヤナがそういうと、既に隣にいたトルネはおらず、森の奥で打撃の音と、呻くような声と共に3人の忍達が吹っ飛んでくる。

「はええ」

「かほっかほっ」

(化け物だ。この人達全員)

トルネによって潜伏先から引き摺り出されたのは、音隠れの忍だった。包帯姿で蓑を纏った男と死の文字が3つ縦に並ぶ服を着た男、かかとまで届く黒髪の女、その三人だった。

音隠れの下忍であり、今回唯一の音の参加者だった。

大暴れするシヤナ達の様子を伺いに来た彼らだが、八雲に感知されてしまった。元々八雲は感知タイプではなかったが、卑留呼と一瞬だけ融合してしまった影響か、チャクラの感知能力を得てしまった。

そのセンサーに掛かったため、トルネによってたたき出されたというわけだ。口に出さずとも八雲は幻術で二人に位置を説明できるため、完全な奇襲をくらったのだ。

「どうする？ 私達と戦う？」

「舐めんなあ!?! ぐう」

「ザク、止せ! 僕らで勝てる相手じゃない、ツチも動くな」

死と書かれた服装の男が、両手の掌をシヤナに向ける。両手の平に空けられた穴から超音波と空気圧を混合した技を放とうとしたが、噴射口である掌にシヤナからクナイを投げつけられ、苦悶の表情となる。強制的に術の発動を止められたザク。

シヤナは青い写輪眼で彼のチャクラを観察しており、一切の抵抗を許すつもりはなかった。だが冷静に実力を分析した包帯の男、ドス・キヌタは、仲間たちを制止する。

「もしかしたら、私たちに一矢報いる事が出来るかもしれないってばね」

自分を見下ろしながら、抵抗してみろと挑発するシヤナ。その目に怯えの表情を見せるドス。だが実力差を肌で感じ、この人には絶対に勝てないと感じる。だが不思議と悔しさを感じなかった。シヤナがあえて助かる道を用意してくれているからだろうか。

ドスは、自分の懐から天の書を取り出して、シヤナ達の前に置く。そして、土下座のような体勢になりながら頭を下げた。

「これで見逃してくれませんか。僕たちは、貴方達と敵対しないと誓います。だから、見逃してください」

ものすごいプレッシャーから頭を上げられないドス。だが自分たちが抵抗すれば、彼女は自分たちの首を刎ねるだろう。この圧倒的なプレッシャーは、自分たちの里の長であるあの方をも凌駕する。

生殺与奪を握られた以上、相手の気に障ることをせず、判決を待つしかない。

「どうするのシヤナ？」

「うーん。土下座してるお前、名前は？」

名前を聞かれたドスは、すぐに答える。

「ドス・キヌタです」

「いいよ。見逃してあげる。ちょうど、天の巻物も欲しかったし、行けつてばね」

見逃されたことでドスは、彼らに頭を下げながら仲間と共に去っていく。珍しく相手を許したシヤナの行動に疑問を持った八雲。何故逃がしたのかと聞かれたら、シヤナは嬉しそうに答えた。

「あいつ、めっちゃ強くなりそうだった。ここで潰すのは惜しいと思っただけね」

シヤナがそう評価した。今は雑魚だけど、警戒心と引き際をわきまえ、何より力の差を感じ取れる勘の鋭さ、それらが揃ってる人間は珍

しいという。強くなることが好きなシヤナは、同時に戦える相手を望んでいる。

年を重ねるごとに強くなっていくシヤナの成長速度は異常だろう。だからこそ、珍しく強敵だった卑留呼との戦いを機に、強敵を求めるようになった。強敵の基準も自分より幻術に優れる八雲や体術のエキスパートであるトルネなどの、実力者とハードルが高い。

だからだろうか、シヤナは育てる方面に意識が向き始めていた。里から滅多に出られない以上、里の中で自分の好敵手を作る。それが楽しみになってしまうている。

不敵に笑うシヤナを見た八雲。

「ちよつと、話しようかシヤナ」

「え？」

「最近のシヤナちよつと血の気が多すぎだと思うよ。ナルト君不足だからって、暴れまわるのは、やりすぎじゃないかな？」

戦闘狂になりつつあるシヤナだったが、八雲が阻止する。卑留呼戦以降、シヤナの戦いの意識が変わった事に気が付いている八雲。並の相手との戦闘時はつまらなそうで、強い相手と戦っているときは楽しそうなのだ。

けれど、そんな癖をつけたら、シヤナはどこか遠い所に行ってしまう。そんな予感がするのだ。

「確かにちよつと、不安定かもしれないってばね。うーん、反省するってばね。けど、第二試験で終了作戦は、やりたいってばね」

「疑問なんだがいいか？」

「何？」

一刻も早く終わらせたいシヤナ。トルネは、ずっと思っていた質問をシヤナに投げかけた。

「ナルト達に遭遇したらどうするんだ？」

「そりやもちろん。巻物を奪って戦闘不能にするってばね。あたりまえじゃん」

容赦ないな此奴とトルネが思った。言葉にした以上、シヤナは実行

するんだらう。シャナの思考は、中忍試験に合格することに向いている。第一が弟の身を守るというスタンスに変化はないが、ナルトを合格させるつもりはない。

ナルトの合格と、八雲やトルネとの合格を考えれば、後者を選ぶ。

「それなら安心だ」

「そういうトルネ君こそ、リー君とかに会ったらどうするの？ 可愛がってるんでしょ？」

「同じだな。あいつは手を抜かれたら余計怒る。全力で叩き潰すさ」

トルネとて、覚悟はできている。師であるガイの教え子達と戦う覚悟はできている。兄弟子としてしてやれるのは、それくらいだ。

その後、死の森に入った参加者の数多くが、入り口付近で無念そうに試験終了まで過ぎすという事態が発生。試験官側も何があったのかと尋ねてみたが「青い写輪眼」「黒い影」「おぞましい幻術」と恐怖の象徴のようにつぶやく人間が多数だった。

「……十中八九、あの子達ね」

さすがのアンコも呆れるほかなかった。

## 中忍選抜試験 6

試験開始から時間がたち、16時を過ぎた頃。また出会った受験者を強襲した第4班。受験者を攻撃し、

「これで、何組目だ？」

「何本燃やしたかわからないね。そろそろ、野営のポイントを決めない？ 疲れてきちゃった」

「これからじゃないってばね？ まあそういうなら、そうするってばね」

八雲が疲れたと言い、川付近の場所で野宿の準備をする。シヤナが雷遁で魚を麻痺させ、浮かび上がった魚を回収したトルネと八雲。

あえて忍ばず、敵をおびき寄せるために盛大に火も使う。

隠れるのは性に合わないし、隠遁術は、シヤナと八雲が苦手とする領域。トルネも出来れば、隠れ潜み無駄な神経を擦り減らすのは勘弁だった。

感知タイプの八雲と未来視で危機を先読みできるシヤナの二人が居る以上、不意打ちは難しい。堂々と野営を行い、交代制で睡眠を取ろうという話になった。

まだ日が高いが、巻物は手に入れ、むしろ余分に狩り取っている現状、休息はいつでもいい。遅めの昼食を取り、全員で休憩をする三人。シヤナは、少し眠ると言って、先に眠りについていた。

「楽しそうだね。シヤナ、それにトルネ君も結構楽しいでしょ」

「そんな顔をしていたか？ まあ否定はしない。あえて言うなら、もう少し歯ごたえのある相手と戦いと思ったくらいだ。弱い者いじめみたいで、少し気が咎める」

「その割に、倒してる数一番多いのトルネ君だよ」

「俺がやらないと、重傷者が溢れかえるからな。八雲やシヤナは、手加減が下手だからだよ」

そんなことはないという八雲だが、一番心に傷を与えるのは八雲だ。それは間違いない事実だった。

実に暢気な雰囲気で過ごしていると苦笑しそうになった二人。だ

が突然、眠っていたシャナの瞳が開かれ、青い写輪眼のまま、飛び起きる。

汗だくになったシャナは、「ナルトが危ない」と言って駆け出した。「説明してシャナ」

「未来視で、ナルトの身が危ない未来が見えた。それももうすぐ、だから、だから」

「理解したが、少し落ち着け。深呼吸をしろ」

追いかけてきたトルネと八雲に宥められるシャナ。感情のままに動いていては、ダメだと言われ、少しだけ息を整える。だが、突然、目の前に2組の草隠れの忍が立ち塞がる。

シャナの警戒していた髪の長い女はいないが、二人組は、シャナ達四班を見て、クナイを構えている。

「ここから先は通さない」

「通りたければ、われらを」

思惑は謎だが通せんぼする二人組。その二人に瞬身で近付いたシャナが胴体を一刀両断。計4つの肉片に切り分けた。

だが、胴体で切断されたはずの二人組は、煙を上げながら4人となる。

「ひゅー、はえーぜよ」

一人は、腕が6本もある男。その男は、口から糸を吐いて、木々の間に張り巡らせた。

「噂通りの実力者だな」

一人は、オレンジ髪の巨漢。シャナの動きを見て警戒の色を強くしている。

「けどよお、俺らの敵じゃないな」

一人は、何故か頭が二つもある青髪の男。シャナを値踏みするような目つきをしている。

「躊躇なく切つてきやがったな、このウシチチ女」

一人は、赤い髪に帽子をかぶった女。気が強く口が悪そうで、隣にいた巨漢に言葉使いを注意されていた。

なんとも個性あふれる集団が現れ、彼ら全員がシャナ達の道を阻も



うとしていた。

「そこを通せ。お前らに用はないってばね」

「通すかウシチチ。お前らの足止めが私たちの仕事なんだよ」

どうあっても邪魔をする気らしい。2人が四人に分裂したのも謎だ。中忍試験を不正に受験している線も考えたが、シヤナ達を故意に邪魔し、ナルトに危機が迫っている状況下では、敵と認識する他ない。

シヤナは、先見の写輪眼を発動。4人全員に挑みかかる未来を見通し、彼らの未来の行動を知ること、正体不明な相手の能力を知る。

そしてある程度の情報収集をその場で済ませたシヤナは、トルネに對してチャクラ刀のダガーを投げ渡した。突然投げられたダガーをつかみ取ったトルネはシヤナの顔を見る。

「八雲とトルネにはお願いがあるってばね」

「こいつらの相手か？」

「そう」

「いいよ。私たちが此奴らの相手をするから、先に行つて」

トルネは頷き、八雲は承諾する。二人が相手してくれるなら安心だと思つたシヤナ。

「トルネは、あの首二つの男と蜘蛛男の相手を。首二つは毒を使えば無力化できる。あの糸はチャクラ刀で切つて。八雲は残つた二人。笛と土遁には気を付けて」

「!!?!」

シヤナの指示に従いそれぞれが敵をマークする八雲とトルネ。だが突然自分たちの戦闘スタイルを知っているような発言には、驚愕の表情を浮かべる。だが、走り出したシヤナを行かせまいと、蜘蛛男が口から糸のネットを発射する。

だがその攻撃を高速で動いたトルネが、シヤナから預かつたダガーにチャクラを流したチャクラ刀で切り裂く。

（俺の糸を初見で？）

自分の糸を切断されたうえに、恐ろしく速いトルネが立ち塞がり、シヤナを食い止める事が出来なかつた。

「さて、始めるとしよう。お前たちが何者かは知らない、だがな」

「シヤナの敵は、私たちの敵なんだよ。ここであなたたちは潰す」

両手にダガーのトルネと指輪に手を添える八雲。二人は、4人の敵と対峙することとなった。殺気を感じた四人は、それぞれが二人に向かって襲い掛かり、二人はそれを迎え撃ったのだった。

## 中忍選抜試験

### 7

春野サクラは、今絶望の最中にいた。

中忍選抜試験、第二試験の会場である死の森で、何よりも恐ろしい相手と対峙することとなったからだ。

突如、襲い掛かってきた草隠れの長髪の忍。その忍の放つ殺気により、サクラは身動きが出来なくなり、応戦したナルトとサスケの両名も無残にも敗北した。

名を大蛇丸と名乗った男。その力は驚異的だった。

大蛇丸と第七班の実力差は明らかで写輪眼を用いたサスケと危機的状况下で赤いチャクラに包まれたナルト。万全を超えた状態で挑みかかったが、蛇のような動きや術を使う相手の圧倒的な実力の前では無意味だった。

偶然に何発か攻撃が入りはしたが、それもダメージになっっていない。やがてナルトは謎の封印術をくらい、サスケも金縛りの術で動けないところを首を伸ばした相手にかみつかれ、首元に呪印を刻まれた。

サスケも無力化し、残ったサクラには目もくれずに、封印術をくらい気絶したナルトに歩み寄る男。

「サスケ君にも印は刻んだ事だし、後は九尾の子には死んでもらおうかしら。後々厄介になりそうだしね」

大蛇丸が気絶しているナルトにクナイを振り下ろそうとする。だが咄嗟に駆け出したサクラがナルトを抱えて救い出す。だが、ナルトを抱えて逃げ切れるわけなく、蹴りを食らって抱えたナルトごとサスケが倒れる木まで飛ばされる。

「貴方には用はないのだけれど、邪魔をするなら、殺すわよ」

サクラの全身から力が抜ける。相手に生殺与奪を握られ、抵抗すら許されない。唯一出来ることは、ナルトとサスケの盾となって死ぬことだけ。

こんなに強い奴が居るなんて思っていなかった。その力も、目も何もかもが恐ろしくて仕方ない。ガチガチと震えるサクラに興味を無

くしたのか、再び九尾の人柱力であるナルトを殺そうとする。

「お願い。見逃して」

サクラが口を開く。一秒でもいい、大蛇丸から時間を稼ごう。それがサクラに出来る唯一の抵抗であり、意地だった。

「それはできない相談よ。黙ってなさい」

「ひっ」

再び金縛りの術を掛けられる。もう何もできない。ただ涙を流すしかないサクラ。だが、その涙は無意味ではない。彼女が命懸けで作りに出した数秒こそが、逆転の切り札となったのだから。

「ありがとうサクラさん」

絶望の中、暗い未来を照らす一筋の光が、サクラの横に降り立った。現れたのは、ナルトのお姉さん。彼女は、サクラの緊張を解くように肩に優しく触れて微笑みかけてくれる。

その顔に緊張状態と金縛りの術から解放されたサクラは息を大きく吸い込む。

なぜ現れたのかわからない。けれど、サクラの稼いだ数秒がうずまきシヤナという下忍最強の忍が駆けつける時間を稼いだことに変わりなかった。

「貴方が二人の班員でよかったってばね。怖かったってばね？ もう大丈夫」

泣き始めてしまったサクラを胸で受け止めたシヤナは、優しく宥める。サクラの小さな体を抱きしめ、背中を撫でる。だが、その青い写輪眼は敵対者として憎悪と殺意を大蛇丸に向けていた。

隙一つないシヤナの威圧感に、大蛇丸は近付けない。

第一試験では、暢気に寝ており、第二試験開始時には、自分の力を誇示する子供っぽい面があるなど、才能に溺れた少女だと思っていた。だが、目の前にいるのは、歴戦の忍そのもの。

まごうことなき強者であると感じる。伝説の三忍と呼ばれた大蛇丸が迂闊に動けば殺されると感じるほどの相手。

「サスケ君が、ナルトが、何も出来なくて、私」

「サクラちゃんの勇気に二人は助けられたってばね。胸を張って。貴

方は強い女の子だつてばね。今からいう事を聞いて」

シヤナの言葉をサクラは、真剣に聞いていた。サスケとナルトをあしらった相手が警戒している事から、サクラは初めてシヤナの力を理解できた気がする。

「あいつは私が遠くに連れて行つて相手するから、隠れてなさい」

「わかりました。でも、あいつは、ものすごく強いです。シヤナさん一人じゃ」

「その点については、問題ないつてばね。私の方が強いから」

シヤナがそう言い切つた段階で、サクラはナルトとサスケを避難させようとし、シヤナは瞬身で大蛇丸に急接近。シヤナの動きを観察していたはずなのに、反応出来ない速度によつて顔面を驚掴みにされ大蛇丸は、力づくでサクラ達から引き離される。

一瞬で大蛇丸を連れて居なくなつたシヤナを見たサクラは、急いで二人と隠れられる場所に移動を始めた。

「小娘が！」

顔面を掴まれていた大蛇丸が抵抗。シヤナを振り払い、木の上に着地する。その姿を腕を組み見下ろす青い写輪眼。

「さて、やつと本題に入れるつてばね」

(何この子。雰囲気が変わったわね。まるでイタチのような威圧感、いやそれ以上の)

肌で感じるシヤナの力。過去に敗れたうちはイタチよりも強い威圧感を感じる。シヤナの瞳力は、ナルトを殺されかけた事実によりさらに闇が深くなり強くなつていた。

「弟を殺そうとしたお前は、ここで殺す」

「あら、逆鱗に触れちゃつたかしらね。一つ質問なのだけれど、あなた、四代目火影の娘よね？」

四代目火影の名を出されたシヤナは、動きを止める。今はほとんどその事実を忘れられているシヤナ。うちは一族にいた期間が長すぎで、波風シヤナであつた事実は、里の上層部以外から薄れていた。

そして、何故目の前の男がそれを知っているのか。

「何者？」

「私は大蛇丸」

その名に覚えがあつたシヤナ。そして、サスケとナルトは相手が悪かつたなど再認識する。シヤナのよく知るゲコ仙人、自来也と同じ伝説の三忍の一人が此奴なのだろう。

「そう。私は四代目の娘」

「まさか、うちはだったなんてね。貴方の噂は聞いているわ」

「それで？」

シヤナの質問に答えながら、大蛇丸は下半身を蛇のように変化させ、木を這いながら高速で移動する。

「サスケ君が第一目標だったのだけれど、あなたのその目、ぜひ欲しいわ！」

首を伸ばして、シヤナの首元にかみつこうとする大蛇丸。名に恥じない、術だなど感心するシヤナだが。彼女の写輪眼は大蛇丸の動きを洞察している。

「忍法・針地藏」

伝説の三忍である大蛇丸の攻撃に、シヤナは同じ三忍である自来也の術を披露する。シヤナの髪が伸び、チャクラによって硬質化し、鋭利な葺となる。

髪で自分を包み込んだシヤナの防御を前に動けなくなる大蛇丸。

「それは自来也の」

「ゲコ仙人の術は、口寄せ以外は盗んだってばね」

一年ほど前に、里外任務で自来也と出会ったシヤナは、術を幾つか教えてもらっていた。この針地藏もそうであった。

「乱獅子髪の術」

動きの止まった大蛇丸に、髪をチャクラで操り伸ばしたシヤナが髪を触手の様にして攻撃を仕掛ける。その攻撃を回避するが、シヤナがクナイを投擲、大蛇丸を捉える。

回避する方向を読まれていた大蛇丸は、ガードしたものの、腕にクナイを食らってしまう。

「火遁・龍炎放歌の術」

クナイを受け怯んだ大蛇丸相手に、龍の形をした炎を飛ばすシャナ。炎はシャナの意思で軌道を変え、森を駆ける彼を追尾する。

徐々に炎に追いつかれ始めたため、振り返って印を結ぼうとする大蛇丸。だが、背後にシャナが現れ、両腕を掴んで拘束してくる。そしてそのままシャナごと火炎の龍に飲み込まれる。炎に触れた瞬間にシャナは煙を上げて消え、影分身だったと悟るがもう遅い。

炎に完全に包まれた大蛇丸を観察していたシャナ。

「死んだふりはいい。早く掛かって来いってばね」

シャナの言葉通り、大蛇丸は業火で焼かれる体から脱皮するかのよう自分の口から新しい自分の体を構成、自分の体だった肉体から這い出し、シャナへと飛び掛かる。その際に口を大きく開き、喉の奥から剣を取り出していた。

炎の中を突き進み奇襲攻撃を仕掛けた大蛇丸。その刃がシャナの胸を突き刺し、勝利を確信したとき。剣で串刺しにされたシャナが霞のように消える。

そこでようやく大蛇丸は自分が幻術にかけられたのだと悟る。

「粒遁・螺旋輪虞」

幻術を解いた時には、懐に忍び込んでいたシャナの必殺技が繰り出される。螺旋輪虞を受けた大蛇丸は、巨大な木に体を叩きつけられる。だが木に大蛇丸をめり込ませながらも螺旋輪虞の破壊力は止まらない。

「ぐうぐうぐう」

「爆ぜろってばね」

シャナが指を弾くと、螺旋輪虞の輪つかの部分に衝撃波となり拡散。大蛇丸の体ごと巨木を輪切りにし、残った螺旋回転する粒子の塊が彼を飲み込もうとする。

「うええ」

「キモ」

上半身と下半身に分けられた大蛇丸は、再び口から自分の体を複製。ギリギリのタイミングで螺旋輪虞から逃れる。しかし、急場しの

ぎの脱皮だったのか、吐き出された大蛇丸は、取り繕う間もなく冷や汗を流している。

そしてそんな彼を吐き出した上半身は、螺旋輪虞の回転に巻き込まれる形で木っ端みじんの肉片となる。

「あなた、中忍試験なんか受けてる場合じゃないでしょうに。早く上忍なりになるべきだわ」

「飛び級？」

大蛇丸は、今本気で死に掛けたことでそんな言葉を口にする。油断していたのは事実。相手を試して、あわよくば、自分の新しい肉体の候補にするつもりだった。だが考えが甘かったのだ。

元々、大蛇丸の狙いは写輪眼だった。だが最初に手に入れようとしたうちはイタチには、敗北を喫した。育ち切ったうちは一族の恐ろしさと力を体感させられた彼は、まだ未熟なサスケを手に入れる計画を実行するために、木ノ葉に来たのだ。

第一の目的は成功した。だが欲を出し、もう一人生き残った、うちのは少女に挑んだのは間違いだった。

(この子は、私よりも確実に強い。それも、あのイタチ以上に)

忍術、幻術、体術の全てが高水準であり、その写輪眼は、イタチ以上のものを感じ取れた。ここで戦っても勝ち目はない。そう思わされた。

自分には手札がまだまだあるが、そのすべてを見透かされた気がしたのだ。

恐怖を感じてしまった。

(穢土転生を使えば、問題ないでしょうけど、ここで使うのは、リスキーすぎるわね)

二代目火影の禁術を使えば、シヤナ相手でも戦える。だが、シヤナを相手に切り札を使ってしまうえば、元々の目的が達成できない。それに勝てる保証はない。

それはよろしくない。

大蛇丸は、光玉を地面に投げつけ、その光にシヤナが少しだけ怯んだすきに、逃走を始める。



「うずまきシヤナ。その名、胸に刻んでおくわ」

「逃がすか。手裏剣影分身の術」

地面に同化するようにして逃げる大蛇丸。弟を殺そうとした相手を逃がすまいと、手裏剣を投擲。それを影分身させる事で無数の手裏剣の雨にするが、ギリギリのところまで間に合わず、地面に手裏剣の雨が突き刺さる。

向かってくると思っていたシヤナは、逃げの一手を取った大蛇丸の行動に一瞬動作が遅れてしまった。

それが彼の敗走を許した原因となってしまった。

大蛇丸が逃げてしまい、後を追うかと考えていたが、トルネや八雲が合流してきた。

あの4人を相手にしていた二人だが、手傷などは負っておらず、無事な姿にシヤナも安堵する。かなり厄介な能力持ちばかりだったが、事前知識を生かして戦ってくれたのだろう。

「シヤナ無事？ ナルト君たちは？」

「ギリギリセーフだってばね。本当に助かった。ありがとう」

二人が足止めをしていた4人の相手をしてくれなければ、危なかった。もう未来視が働かない事から、ナルトの命の危機は脱したとみていい。

「そういえば、二人とも無事だったってばね？」

「正直、特殊能力には驚かされたが、お前の事前情報のおかげで、対処できた」

「結構危ない場面もあったけど、トルネ君がめっちゃくちや走り回ってたよ。速いのなんのって」

「おもりを外しただけだ」

八雲は、不意を打たれかけた際のトルネの高速移動を思い出す。いつもの倍以上の速さで木々を駆けていくトルネの動きに4人は最大限の警戒をし、近づかれなくなった事で八雲の幻術が最大限生かされた結果。

4人の刺客全員を撤退に追いやったという。追撃も考えたそうだが、シヤナの様子が心配になり駆けつけてくれたらしい。

二人はシャナにナルト達と合流しなくていいのかと尋ねるが、シャナは首を横に振る。

「ここから先は自分の実力で生き残ってもらうってばね。さっきのは、イレギュラーが相手だったから助けただけ」

「徹底してるね」

「もし森で見つけたら、予定通り狩るってばね。」

非情にも思えるが、ナルトの意思を尊重するシャナの意志は固い。ナルトとサスケの両方が動けないのでは合格も難しい。だが、手を差し伸べる事はしない。差し伸べたところで掴まないので、あの子達なのだから。

その後、シャナ達は、多くの脱落者を量産しながらも第二試験を突破したのだった。

## 中忍選抜試験 8

第二試験を難なくクリアしたシャナ達。目的地の塔に入るなり、入り口に巻物を開けと書かれており指示通り天と地の巻物を開けば、巻物には口寄せの術が仕込まれており、煙を上げて誰かが現れる。

「ストップ！ ストップ！」

現れたのは彼女たちの担当上忍であるヤマトだった。口寄せされた瞬間から、木遁で作った盾を装備し、制止を呼び掛けている。

長年第四班の引率をしていると、危機察知能力が上がるのか、その選択は正解だった。

シャナが火遁の印を結び、トルネも蹴りの構えを取り、二人の背後に移動した八雲が幻術の準備をしていたのだから。

「あ、ヤマト。何してるってばね」

「隊長だよ。もう、君らの前に急に現れると攻撃されるから、準備して正解だったよ」

「ごめんなさいヤマト隊長。急に出てくるからびっくりして」

「申し訳ない」

攻撃しそうになった八雲とトルネは謝るが、シャナは「サバイバルの後で神経研ぎ澄まされるところに出てくる方が悪いってばね？」と零していた。

あながち間違いでもないのでヤマトは、「そうだね。そう言われるとそうかも」と納得しそうになっていた。

戦闘状態が解除されたことでようやく説明があると告げられる。

「とりあえず、第二試験合格おめでとう。心配はしてなかったけど、怪我也もなさそうよかった」

ヤマトの素直な感想である。班員として愛情を持っている彼らが大怪我していたらと思うと怖い。だが実力は彼が良く知るところであるし、専門分野ではヤマトも勝てないのだ。

だから本当に心配はしてない。ただ、一言だけ言いたかったのだ。

「それはさておき、君らやってくれたね。アンコからどやされたんだよ！ 反則じゃないとはいえ、倫理観はないのかって。なんて勢いで

参加者減らしてるんだ」

ヤマトはアンコに怒られていたのだ。シヤナ達が故意に参加者を襲い、サバイバルを脱落させ続け、死の森のゲート付近は、試験終了間際までキャンプ場になってしまった。

何なら、脱落組が試験に落ちたからと緊張から解放され、合流したのち和気あいあいとキャンプしていた。そんな光景の原因が彼らだからだ。

「ぶっちゃけると、私達3人以外は全滅させる予定だったってばね」  
「やっぱり碌なこと考えてないと思つたよ」

その後、ヤマトに案内され、試験会場の合格者控室で待機することになった3人。そこで一日ぐっすり眠った後、試験終了の時刻となった。

ようやく試験が終わつたが第二試験通過は、27人となった。シヤナの狩り切れなかったメンツが残っており、その中にはナルト達も居た。

第三試験の前に、全員整列させられ、上忍や火影が会場に現れる。そこで試験通過の労いと火影から中忍選抜試験の真の目的について説明が始まる。

中忍試験は里間の戦争の縮図だと説明されている間、シヤナはナルトたちの様子を伺っていた。

その様子を見ていた八雲が小声で話し掛けてくる。

「ちゃんと話聞かないと怒られるよ？」

「あのジジイの言うことなんか聞く価値ないってばね」

里の大人が嫌いであり、その筆頭である火影のことを敵視するシヤナ。なんなら殺気を込めて睨みつけているせいで、三代目からは呆れられていた。基本三代目の言葉にはNOで答えるシヤナに中忍試験の最中に注意すれば反抗され、威厳がなくなるだろう。

なので無視を決めている。

三代目からの説明が終わると、月光ハヤテという体調の悪そうな忍が前に出て、第三試験の予選を行うといい始める。本戦に向かうには人数が多すぎるため半分にすると思かされる。

そして今回からは1 on 1の試合が基本であり、ここからは班員の心配はすることはないと言われる。そこで唯一カブトという忍だけが辞退したことで、26人による対戦が決まる。

電光掲示板で試合が決められ、第一試合はサスケとヨロイという木ノ葉の忍。

二人の対戦が始まるが、サスケは首元を押さえながら、戦いにくそうにしており、ヨロイという男の術。シャナの写輪眼で見たところチャクラを奪う性質がありそうだった。

チャクラを奪われながらもサスケは、トルネやロック・リーの得意とする表蓮華の動きをコピーしたオリジナル体術、獅子連弾でヨロイを撃破した。

「シャナ見たか？」

「サスケの体に一瞬だけアザが広がった。なにかはわからないけど、上忍連中が警戒していた……けど、カカシが連れて行ったから大丈夫だと思う」

サスケの痣については、大丈夫だろうと思ったシャナだが、嫌な予感がする。未来視は発動しないが胸騒ぎがする。自分の勘を信用するシャナは、少し悩みはしたが、次の試合が油女シノと音の忍の一人であり、自分の番ではないため仲間である二人に場を離れると告げる。

当然困惑されるが、シャナが自分の目を指さし「私は最後から二番目だから」と告げれば、納得するしかなかった。付いていこうかと尋ねられたが断る。

「トルネもあの子の試合みたいでしょ？ 八雲だつてほかの相手の試合は大事。私だけで行くつてばね」

トルネと同じ一族出身である少年。彼はあまり話さないが、弟のように思っている少年だ。試合を見たいと思うのも当然であるし、八雲も本戦に出る気満々なため、情報収集は必須だろう。

二人を置いて、カカシ達の後を追うシャナ。暗い地下室のような場所にたどり着いたシャナは、気絶しているサスケと彼を守るように立ち塞がるカカシ。千鳥という術を発動させ、完全に臨戦態勢に入つて

いた。

そして対峙するのは、死の森で会った大蛇丸という男だった。柱に隠れて様子をうかがう。

「サスケにこれ以上近づくな……。いくらあんたが、あの三忍の一人でも、俺なら刺し違えてやることくらいはできるぞ」

「くく、クハハハ」

「何がおかしい」

威嚇するカカシに対して大蛇丸は余裕の笑みを捨てない。実際力の差は歴然。

「呪印を封印したようだけれど、そんなもの意味はないわ。その子は復讐者よ。どんな邪悪な力であろうと求める心を持っている」

「そこにつけこんだのか」

「ええ。そのとおりよ。彼の復讐心こそが、私にとって必要な要素だからね」

大蛇丸の殺気にカカシは僅かに怯んでしまう。その隙を見逃さない彼は、カカシ達に襲い掛からんとする。

シヤナは柱から飛び出し、大蛇丸めがけて手裏剣を投擲する。彼は手裏剣に気が付くと飛んで回避。だが回避した先にシヤナが回り込み、近接戦闘を強いられる。

数発の拳と蹴りを受け止める大蛇丸だがシヤナに頭をつかまれ、頭突きを食らって飛ばされる。空中で体勢を立て直し、受け身を取ろうとした所にシヤナが追加で投げた手裏剣が突き刺さる。

すぐに袖から蛇を出し、手裏剣を防いだ大蛇丸。襲撃者であるシヤナは、カカシの横に着地し、粒子のチャクラ刀を構え、片方の手で印を結んでいる。

「シヤナ？」

「私の弟子に、何勝手してくれてるんだってばね。殺すぞウワバミ」シヤナは万華鏡写輪眼で大蛇丸をにらむ。万華鏡に辿り着いていると思っていなかった彼は、その瞳力に慄いている。

彼女は怒っていた。彼女はサスケに復讐をさせるつもりはない。なのに、純粋なサスケを復讐に引き込む輩がいるのだ。そんなことの

手伝いをするつもりはない。させるつもりもない。

それが酷く気に食わない。

(逆鱗に触れてしまったかしら。怖いわね)

シヤナの目を見たとき、龍に睨まれているような感覚を味わった。まだ蛇でしかない自分が、龍には勝てない。ここで殺されるわけにはいかないと思える方向に思考が向く。

「今はその時ではないわ。でも、今度会ったときは、殺し合いをしましょう。うずまきシヤナ」

次あったときは、必ず殺して見せると宣言する。だが今のままではまずい。シヤナというイレギュラーがいる以上、切り札である穢土転生の再調整が必要。

(制限をある程度外し、操れる範囲で本来の実力を発揮してもらいましょう)

大蛇丸がその場から消え始める中、シヤナが追走しようとするもカカシに止められる。深追いは危険だと。

「カカシ。引率の上忍ならしっかり守れつてばね！」

「…面目ない」

シヤナはカカシの胸ぐらをつかむ。

「修行不足だか何だか知らないけど、あまりに頼りないなら、預けられないってばね」

そう言い残して、シヤナはカカシを解放して、試験会場へと戻っていく。伝説の三忍相手に勝てという無茶ぶりをするシヤナ。だがシヤナは勝つつもりであるし、実際に彼を撤退に追い込んでいる。

「無茶を言うやつだ」

こんな化け物を三人も飼いならしているヤマトのことを思い、かなり見直す羽目になった。

「これは俺も鍛え直しだな」

カカシは気を失ったサスケを抱えながら、医療班のもとへと向かうのだった。

## 中忍選抜試験 9

シャナが試合会場に戻る前に大蛇丸が本当に撤退したか探るため、周囲を確認していると、結構な試合数が終わっていた。

音の忍とトルネの弟分は、弟分の勝利。

春野サクラと山中いのは、相打ちによる引き分け。

ナルトと犬塚キバの戦いは、不調のナルトだったがどうにか勝利を収める。

テンテン対テマリは、忍具使いのテンテンを風遁で完封したテマリの勝利。

カンクロウ対剣ミスミは、傀儡使いのカンクロウが勝利。

日向ネジ対日向ヒナタの戦闘は、ヒナタが粘るも結果的にネジの圧勝。

シカマルと音のくノ一の戦いは頭脳プレイを活かしたシカマルの勝利。

トルネと八雲もすでに試合を終えていた。二人とも雨隠れの忍との戦闘であり、瞬殺したらしい。トルネは一撃で何もさせずに気絶させた。

一方八雲は、相手が舐めた態度で挑んできたため、精神崩壊手前まで幻術で追い込みをかけていた。試合会場が狭く、距離が近いせいで八雲の術の効力が最大限発揮。激痛に悲鳴を上げる雨隠れの忍びにクナイを何本も投擲し、心身ともに追い込んだという。

あまりの酷さに審判からストップをかけられたという。

「なんでそこまでやったの？」

「あの失礼なこと言ったから。内容は秘密だよ」

実際はシャナがいないことで、相手はシャナが恐れをなして逃げ出したと笑った。親友を馬鹿にされ腹が立ったのだ。そして残り少なくなつた試合。

現在は砂漠の我愛羅と雨隠れの忍の戦闘だった。腕を組み、様子を伺っている雨隠れの忍に対して威圧する我愛羅。その態度に腹を立てる雨隠れの忍。



「さつさとこい。雨隠れのおじさん」

「じゃ早く殺してやるよ。忍法・如雨露千本」

雨隠れの忍が、4本の傘を放り投げ、それらをチャクラで操ること  
で無数の仕込み千本が発射される。360度から千本の雨が我愛羅  
目掛けて降り注ぐ。

「この術に死角はない。俺のチャクラで操られた千本が全てお前に襲  
い掛かる!!」

だが我愛羅は動かない。無数の千本が我愛羅の肌に突き刺さる寸  
前に、我愛羅の背負う瓢箪から砂が溢れ出て、彼の全身を殻のように  
包み込む。その砂が迫りくる千本全てを受け止めた。

(砂を操る忍術)

そして、無傷で千本全てを防いだ我愛羅。自分の術を防がれると  
思っていなかった男は狼狽え、一步下がってしまう。我愛羅は自分の  
砂に突き刺さった千本をつまみ上げ、男を睨む。

「千本の雨か。なら俺は血の雨を降らせてやろう。砂漠柩」

我愛羅がそういえば、彼の周りにあった砂が意思を

持ったように男に襲いかかり、あつという間に全身を包み込んでし  
まう。その拘束力は強大で、砂に包み込まれた男は身動きも出来ない  
まま、我愛羅の操る砂によって天井付近まで持ち上げられる。

その時点で勝利は決まったようなものだった。我愛羅は地面に転  
がる傘を砂で拾って広げる。

「その口を塞いでも殺せるが……ちよつと惨めすぎるからな」

「なにを」

「砂漠葬送」

「我愛羅君！ 試合はこれで！」

砂で持ち上げた相手に我愛羅は手を伸ばし、手を握りしめる。その  
動きにつられるように男の体が砂の圧力で潰れ、その血肉が文字通り  
血の雨となって降り注いだ。我愛羅は差していた傘で血を受け止め  
るが、試合会場は血で汚れる羽目になる。

試験官も制止しようとしたが間に合わず、第三試験予選で最初の犠  
牲者となった。人一人が死んだことで参加者全員が我愛羅の容赦の

ない殺意に恐怖を感じていた。

そして勝利宣言を受けた我愛羅が会場から上ってくれば、本能的に恐れて道を空けてしまう。

だがすぐに同じ砂のメンバーの所に戻らず、我愛羅はある人物の元に向かっていた。それは、我愛羅が男を殺した時、唯一恐れず、むしろ微笑んでいた人間。

「今のが俺の術だ。あんたの力も是非見せてくれ、うずまきシヤナ」  
明らかに機嫌のいい我愛羅。自分と同じ戦闘狂独特の匂いを感じ、死にすら恐れを感じない。血を見て昂った我愛羅はすぐにでもシヤナと戦いたがっていた。

トルネがシヤナを守るように前に立ちふさがったが、シヤナが手でどかし、我愛羅の前に出る。

「姉ちゃん!?! お前、姉ちゃんに何のようだったばよ!」

突然、我愛羅の前にナルトが飛び出す。我愛羅が「やべーやつ」と感じ取っていた彼は、姉に狙いを定めている我愛羅を警戒し、守ろうとしていた。実力では敵わないが、たった一人の家族を失いたくなかった。

「お前には用はない。うせろ、殺すぞ」  
「う」

「ナルト。いらない世話だってばね。我愛羅君、本戦で遊ぼうってばね、お互いが死ぬまで」

自分のほしい回答をくれたシヤナに、我愛羅は「はは」と笑う。心底嬉しいと言った笑みを浮かべる我愛羅。シヤナも我愛羅の強さを見て戦いたくなくなった。珍しさもさることながら、シヤナの写輪眼は、我愛羅の中にある何かを捉えていた。

それを含めれば我愛羅は、シヤナにとって最も楽しめる相手となる。

「お前は最高だ。楽しみにしているよ」

我愛羅はそう言い残して砂のメンバーの元に帰っていった。ナルトは腰が抜けてしまい、手すりに凭れることで如何にか立っていた。

そんなナルトの頭を撫でながら、シヤナは柵から飛び降りて、試合

場に足を運ぶ。

「さて、そろそろやろうか」

シヤナが飛び降りた後、電光掲示板には、次の対戦相手が表示される。

『うずまきシヤナ』

VS

ロック・リー』

シヤナは、対戦相手であるリーを指で呼び出した。掛かって来いという挑発に、気合を入れたリーはガイの激励を受けていざ馳せ参じる。

「シヤナさん。よろしくお願いします！」

「うん。よろしく」

## 中忍選抜試験 10

「では、ロック・リー対うずまきシヤナ。始め！」

見合うリーとシヤナ。その試合に会場中の全員が注目していた。他里にまでとどろく閃光の名を持つシヤナの戦い。第三試験で戦うことになるライバルの力量を見定める必要があるからだ。

既に会場中がシヤナの勝利を確信している。リーには悪いが、誰も彼が勝つとは思っていない。

彼と彼の師を除いては。

シヤナが動かないことで、リーがクナイを構えながら相手との間合いを測り始める。シヤナの戦闘スタイルを多少は知っているリー。距離をとつても無意味だというのはわかつている。

けれどもシヤナの本気を見たことがない以上、うかつには飛び出せない。

まだ試合が始まったばかりだというのに、既にリーは緊張から汗をかいていた。

「リー君」

「え、あ、はい」

「3分間だけは、私から攻撃しないってばね。好きに掛かってきなさい」

シヤナの突然の発言に審判が「それはさすがに」と言いよどむ。だが誰よりもシロックなのがリーだった。

「それは、どういう意味でしょうか」

「意味？ わからない？」

「それは、僕なんかには、実力を出すまでもないと言うことでしょうか？」

「それ以外にあるかってばね？」

リーが走り出す。そしてクナイを構えた手でシヤナに攻撃を始める。シヤナはその動きを洞察しながら、回避する。すれすれで回避するシヤナを追うように、リーが木ノ葉旋風などの体術を連携させ、攻め始める。

素早い動きでシャナに連撃を繰り返すが、シャナは息一つ乱すことなく、避け続ける。

そして彼の動きが荒くなった時、態と足を出すことでリーの足をかき、バランスを崩させる。

(やられる!?)

咄嗟にガードしたり。だが、シャナはリーの隙を放置。そのまま彼が体勢を立て直すまで何もしない。試合会場全体が今ので終わったと思ったが、シャナは自分の言葉を守り攻撃しない。

「な、舐めないでください!」

自分が侮られていることに腹を立てたり。彼の目標は、日向ネジだ。だが目の前の女性はネジすら超える天才。落ちこぼれだった自分が劣るのは自覚している。だが、舐められっぱなしは腹が立つ。

リーは再び攻めの手を強めるが、焦りからか技の連携が荒くなり始める。

荒くなった攻撃は、シャナを捕らえる事など不可能。

「リーさん、なんで体術だけで戦ってるんだろう。幻術とか忍術も織り交ぜなきや、絶対に当たるわけがないのに」

試合を観戦するサクラは、二人の力量差を感じとり、そんな言葉を口にする。それを聞いていたガイはそれを否定する。

「リーは、忍術を使えないんだ。あいつは、忍術のスキルがない。だからあいつに出来るのは体術のみだった」

「そんな」

「だから忍者として唯一残された体術、それに全てを捧げた」

会場でシャナを捉えきれないリー。やがて距離を取るように、ジャンプして会場に備え付けられた印を結ぶ腕のモニュメントに着地する。そこで息を整える。

「リー! 外せ!」

「でもガイ先生! それは複数名の大切な人を守る時だけと」

「かまわーん。俺が許す!」

このままだと劣勢だと感じたガイは、リーに課していた制限を取り払う。シャナの実力を前に、このままでは勝てない。それはリーの努

力を無に変えてしまう。

だからこそ、リーに今できる最大の力を発揮させる必要があった。ガイの許可を得たリーは、自分の足に付けられた重りを外した。そしてそれを投げ捨てる。

重りをつけた修業。あまりにもベタなそれだが、八雲とトルネは知っていた。その重りの重さを。

重りは床に激突すると地響きを起こし、土煙を上げる。

八雲はトルネに小さな声で尋ねた。

(あれってトルネ君のやってたやつ?)

(ああ。もうやっているととは思っていなかったが、ここからリーの速度の見せどころだ)

トルネは自分の弟弟子が、本当の速度を出すと理解。だがそれでもシヤナ相手にどこまで通用するか、わからない。煙と共に駆け出したリー。その速度は、見る者の視界から消えるほど。

大勢が見失う程の速度でこぶしを突き出したリー。だがシヤナの青い写輪眼は、その拳を見ていた。そして、片手で受け止めてしまう。

(止めた!?)

(ゲジマユの動きでもダメなのかってばよ)

軽く受け止めたシヤナだが、リーも不敵に笑っている。

「どうやら、防御はしてくれるみたいですね」

「うん。滅茶苦茶速かったから」

シヤナに防御をさせた段階で、リーは自分の動きならシヤナを捉えられると判断。再び消えるように加速。その素早すぎる動きで会場の視線を置き去りにする。唯一捉えているのは、シヤナと写輪眼を使っているカカシ、ガイなどの実力者のみ。

全くノーマークだった選手の想定外の動きに会場が沸く。

「まだまだあ!!」

高速移動による体術。回避が難しくなったのか、シヤナはガードを織り交ぜながらリーの蹴りや拳をいなしていく。的確にガードと往なしを用いてまるで舞うように戦うシヤナ。徐々に速度が上がっていく中でも、シヤナの動きは洗練されていた。

(リーさんの動きに対応してる)

そんな芸当が出来るのも、写輪眼の恩恵と言える。裸眼のままならシヤナは動きを追えていなかった。だがまだ先見の写輪眼は使用していない。

(この人、本当に強い。ですが、これならどうです！)

リーは、八門遁甲の第一の門を開け、一時的に能力を強化。シヤナの顎を蹴り上げようと急加速する。突然の加速にシヤナは視界からリーを見失う。

表蓮華の最初の一撃、蹴り上げを行ったり。だが両腕で顎への蹴りをガードされる。だが、シヤナの軽い体は衝撃で浮き上がり、リーの奥義の流れに問題はない。蹴り上げられたシヤナを追い影舞踊で迫るリーは腕に巻かれた包帯でシヤナを拘束しようとした。

「く」

だがトルネも使う表蓮華を受けるシヤナではなく、リーの腕の包帯を掴み、強引に引っ張ることで彼の体勢を崩し、リーの体を土台に飛び上がった。

リーはそのまま床に叩きつけられ、シヤナは軽やかに着地した。

背中を強打したリーはすぐに起き上がろうとするが、八門を開いた代償で体が動かせなくなっている。

「やはり、表蓮華は無理ですか」

「見慣れちゃったからね。目をつぶっても回避できる」

(俺のせいで、リーのハードルが上がってしまったか)

表蓮華が通用しない相手。発動すら封じられる始末。なによりも表蓮華の代償を払っているリーを未だに放置する余裕のあるシヤナ。むしろ回復を待たれている。

リーは自分の不甲斐なさに血が出るほど奥歯を噛みしめていた。遠いのだ。あまりにシヤナとの力の差が遠い。

「あと一分だってばね。どうする?」

(ガイ先生申し訳ありません。でも、ネジやサスケ君、そしてナルト君たちが本戦に行く。なのに、僕が此処で負けたくないんです。どうか認めてください)

シヤナの実力を前に、リーは体中のチャクラを活性化させる。それは八門遁甲をさらに開く必殺の奥義。代償は表蓮華の比ではない。けれど、そんな代償を払わなければ、シヤナには決して届かない。だからこそ、使うと決めた。

本来はネジに対抗するための切り札だった。けれどもネジよりも強いと言われる彼女に出し惜しみなどできない。ここで全力を出せない自分が、どうやってこれからも戦っていくと言うのか。

リーの肌の色が赤く染まる。そしてチャクラがほとぼしり始める。周囲の空間を震わせるような気迫と共にリーは八門遁甲の門を開き始める。

(今こそ、自分の忍道を、貫き守り通す時!!)

「第三 生門・開!!」

天才と言われる相手に努力だけで勝利する。努力しかできないリーの辿り着いた目標。

「第四 傷門・開!!」

体中に痛みが走る。そして、鼻から血が流れ、全身が悲鳴を上げている。だがそれでいい。今日の前の相手を倒すのに、この程度の痛みでは安い。

全身のリミッターが外れ、リーは地面を蹴った。その瞬間床が砕け散り、これまでとは比較にならない最高速度が出た。表蓮華の次の段階。裏蓮華が始まった。

狙うはもちろんシヤナ。手加減されているのはわかっている。けれど、今自分が相手を倒すなら今しかないのだ。

シヤナはリーの動きを見て「あは」と笑ってしまった。想定外の収穫。トルネですら出したことのない八門遁甲の次の段階、シヤナはすでに万華鏡写輪眼を使用していた。そして、決死の覚悟で挑んでくるリーを敵と認めた。

「君は私の敵にふさわしい」

だからこそ先見の写輪眼を使用し始め、自分よりも早くなったリーに対抗して瞬身の術を用いてスピード勝負を始めた。

突然消えたシヤナとリー。その光景を見ていた下忍は、彼らを見失



う。上忍たちが唯一戦いの一部始終を目に焼き付けていた。

「馬鹿な、リーの速度と張り合っているのか」

「いや、リー君の方が速い。だがシャナは、何か術を使うつもりだ」

ガイが試合会場を縦横無尽に走り回るシャナとリーの動きを見て驚愕する。が、写輪眼でより注意深く見ていたカカシが否定する。

リーとの体術によるスピード勝負では、シャナが惨敗している。明らかに速度で劣り、チャクラコントロールによる制動力で翻弄しているだけで、ギリギリの攻防が続いている。だがシャナはリーの攻撃を避けながら、両手を合わせていた。

「粒遁・天翔」

速度で劣っていたシャナは、粒遁を用いてリーを一気に引き離れた。光となって亜音速に近い速度で天井に移動したシャナ。突然のスピードアップにリーは驚くが、全速力で追いつがる。追いつかれたシャナがさらに粒遁で加速。その追いつくことは、上忍連中ですらついていけない規模だった。

最高速度ではシャナが勝つが、あくまで直進しかできず、術のタイムラグのあるシャナは、常にトップスピードのリーを引き離せない。だがリーも体を限界状態で使用し続けることはできない。この追いつくことが続けば、先に倒れるのはリーだ。

「これが人間の動きか？」

試合を観戦していた我愛羅が零した言葉。それは試合会場全員の心の声だった。

「これで最後です！ 第五 杜門・開!!」

あと一步追いつけないスピード勝負。シャナに追いつくため自分の限界を引き出したリー。代償に骨が折れ、筋肉の繊維が切れる。だが粒遁で天井に着地したシャナがさらに粒遁を使う前に追いついた。後は一撃、裏蓮華の一撃を決めるだけでいい。

本来は裏蓮華は連続コンボの体術だが、もはやこの一撃にかけるしかない。

「リー君。君は十分楽しませてくれたから、お礼に見せてあげるって

ばね。粒遁・螺旋輪虞！」

リーの渾身の拳を未来視で知ってたシャナはそれを回避。非常に小型の螺旋輪虞を掌の上に作り出したうえで、カウンターとしてリーに叩きこんだ。ちょうどそのタイミングが指定した3分を過ぎた頃だった。

渾身の一撃を避けられ、螺旋輪虞を食らったリーは、吹き飛び、地面に叩きつけられる。

「ぐああああ!!」

だがリーの体に食い込む螺旋輪虞は威力を失っておらず、彼の全身の骨を砕き始める。そして、螺旋輪虞は、残された攻撃、輪っかの拡散がまだ控えている。

シャナは、戦いの高揚感に支配されたまま、指を弾こうとしてしまう。もし指を弾けば拡散した輪っかがリーを真つ二つにしたうえで高威力の本体を受けてしまうだろう。

慌てて飛び出したガイが螺旋輪虞を手刀で弾こうとしていた。他の上忍たちもシャナを止めようとしていたが、間に合わない。

「姉ちゃん!! やめるってばよ!」

唯一、誰よりも先に飛び出していたナルトだけがシャナに飛びつけた。天井にいたシャナに飛びついたナルトは、姉の表情から悪い予感がしたことで、試合中にもかかわらず制止に走ってしまった。

「え? ナルト?」

急に弟が飛びついてきたため、シャナは虚を突かれてしまう。シャナの未来視にナルトの乱入はなかった。シャナが戦闘から意識が離れたタイミングで、試験官である月光ハヤテから試験の終了が宣言される。その瞬間にリーを押さえつけていた螺旋輪虞が消滅。気を失ったりリーに駆け寄るガイ。

裏蓮華の代償で全身ボロボロだが、シャナの螺旋輪虞の威力が小規模であったこともあり、致命傷に至ってはいなかった。

ナルトと一緒に地面に着地したシャナは、酷く驚きながらナルトを見つめている。

「ナルトどうしたんだってばね」

「いや、あのままじゃゲジマユが」

確かに戦いの熱気に酔っていたのは事実。だが殺すつもりはなかったのだが、何処かで自分の中に薄暗い感情があったのも事実。シヤナは弟のおかげでクールダウンし、少しやり過ぎたかと後悔していた。

「リーー」

ガイが驚きの声を上げ、シヤナが振り返ると満身創痕の状態でリーが立ち上がっていた。腹部に螺旋輪虞を食らった跡があり、手足の骨もズタズタで立てるはずがない。

なのに立ち上がった彼は、気を失いながらも構えていた。

「リー。お前って奴は。そんなになつてまで、自分の忍道を」

天才と呼ばれた仲間やライバルに追いつきたい。その意志で立っているだけの彼をガイは、抱き締めた。

まさか立ち上がるとは思っていなかったシヤナが一番驚いており、人の精神力が肉体を超越するという事実を見せつけられた。

やり過ぎたと思ったシヤナは、リーになんて言葉をかけるべきかわからず、向き合うしかなかった。

だがそれを見ていたガイから「いや、君は悪くない。むしろリーの全力を相手に戦ってくれて感謝する」と告げられた。

ある意味一番盛り上がった予選は、シヤナの勝利で幕を閉じた。

その後、音の忍最後の一人である、ドスと秋道チョウジの試合は一瞬で終わり、ドスの本戦出場が決まる。

そして予選が終わり、本戦開始は一か月後と告げられる。予選でライバルの術や戦法を見たことで、それぞれが準備期間を与えられた。

本戦はトーナメントであり、ナルトVSネジ。八雲VSドス。カンクロウVSシノ。うちはサスケVSうずまきシヤナ。テマリVSシカマル。我愛羅VSトルネ。という結果になった。

本戦は、各国の大名や忍頭を招集するための時間でもあった。それぞれ体力の回復や修行に打ち込むようにと告げられ、解散が決まった。

シヤナは一か月もナルトにかまえない期間が延びたことで絶望の

淵にいた。修行つけてあげようかと尋ねても断られ、枕を濡らす羽目になつていた。

そんなシヤナを見かねてか、八雲からお爺さんからもらった温泉のチケツトで試験の疲れを癒す湯治に行かないかと誘われたのだった。

## 中忍選抜試験 休息

八雲に誘われて二人で温泉街に旅行に来ていたシャナ。一月もナルトに会えない悲しみでボロボロになっていたシャナの心も温泉で癒されていた。

「あのさ八雲」

「どうしたのシャナ」

温泉に浸かるシャナは、体を洗っている八雲に話しかける。

「ペアチケットだったのに、トルネ誘わないでよかったの？」

「何言ってるの!?!」

突然の不意打ちに八雲がひどく動揺し洗面器を足に落としてしまい、悶絶していた。八雲の貰ってきたチケットは、温泉旅館のペアチケットであり、必然的に同室なのだ。それをシャナはトルネを誘わないでよかったのかと尋ねた。

もし誘っていれば、温泉旅館で年頃の男女が二人きりになってしまおうではないか。

「当たり前でしょ!?!」

「でもさ、映画で温泉旅行とか定番だつてばね。いくら私でも、八雲がトルネのことを好きっているのはわかるつてばね」

「だとしても、二人きりで旅館は段階飛ばしすぎでしょ!?!」

「意気地なし」

「怒るよ!?!」

シャナに恋愛関係で揶揄されるのは、納得のいかない八雲。すぐさま体を洗い終え、湯船につかる。

「そういうシャナこそ、相変わらず恋の、この字もないよね」

八雲が反撃に出る。この恋愛感情三歳児に負ける事はプライドが許さない。

「好きっていうのが良く分かんないつてばね。ある程度歳重ねたらわかるかと思つてただけどね」

「結構、色んな人にアプローチされてるじゃない。その中にはいい人いないの?」

シヤナは確かにモテる。容姿は端麗だし、スタイルもいい。あまり女らしくない性格も異性からはある種の親しみを覚えるらしい。シヤナが15歳になった頃合いから、告白を受けたことも一度や二度ではない。だけど丁重にお断りしている。

「シヤナの理想のタイプって何なの？ さすがにあるよね？」  
「うーん」

シヤナは思い浮かべる。強さの理想は父であるミナトだ。だが、異性として好きというのは、違う気もする。カッコいいとは思うし、シヤナもミナトが大好きだ。けれど父のような相手を求むかと言われると分からない。

黙り込んで考えるシヤナの様子を眺める八雲。数年前ならこんな会話は出来なかつたと、お姉さん気分になる。

「強い人？」  
「まさかの強さ基準？ まあシヤナは強いから、そう思うのも当然かな」

守ってほしい願望でもあるのかなと考えるが、おそらく違う。互いに研鑽できるような相手が欲しいだけだろう。

「カッコいいに越したことはないけど。信念がある人が良いってばね」  
「お、シヤナにしては大人っぽい回答だね」

「気に入らない性格なら、叩き直せばいいしね」  
この子本気でやりそうだから怖いと八雲は思う。ある程度ビジョンが出来始めるが、シヤナは漠然としたイメージしかわからない。

自分の将来というものに全くイメージがわからないシヤナ。気になれば未来視を用いて未来が見られるが、そんな中でも幸せな未来なんでもものは、思い浮かばない。

まだ15歳であることも理由だが、シヤナは自分の将来についてイメージがない。どうなりたいという願望がないのだ。あるのは弟を守る事、九尾と仮面の男に対する復讐だけ。

「難しいこと考えたくないってばね」  
「ごめんごめん」

脳が考える事を拒否する。シヤナの疲れた表情を見て、八雲が謝

る。そして、二人してゆつくりお湯に浸かっていると、突然シヤナが  
呟く。

「そういえば、今さっきから、外で誰かが覗いてるってばね」

「そっか。……え？」

「なんか視線を感じるんだってばね。あの柵の隙間から」

シヤナが言う場所を見れば明らかにのぞきあなのようなものがある。そこから視線を感じながら、何故シヤナは平然としているのだろうと八雲は怒る。

「そこまで分かっているなら、もっと早く言おうよ！ 覗き犯が居るんだから！」

すぐにタオルで体を隠した八雲。八雲の声を聞いてほかの女性たちも悲鳴を上げる。そこまですてようやくシヤナは、覗き魔が悪い事だと知る。覗かれてる間も気にしていなかったが、この反応からするに捕まえるべきかと思い、飛び出した。

「シヤナ、服!!」

八雲の制止を振り切り切りバスタオルを体に巻き付け、覗き犯を捕まえようと柵を飛び越え、突然襲い掛かったシヤナに驚く覗き魔に蹴りをお見舞いしたシヤナ。

「ぐおおお」

シヤナの蹴りを顔面に受けたのは、ふさふさの白髪をした大男であり、彼は隣にあった樽に突っ込み、悶絶していた。シヤナは自分の蹴った相手が見たことのある人物で驚く。

「あれ、ゲコ仙人？」

シヤナの一撃を受けたのは、ゲコ仙人こと、自来也であった。すぐに起き上がった彼は、「痛いのお」

と立ち上がり、タオル一枚姿のシヤナを見て鼻血を流す。思いもよらぬサービスに興奮し始める彼。

「うへ、うへへ、ピチピチお姉さ、ん？ あれ、お前さんシヤナか」

「なんだなんだ？ うお、女？」

「すげー恰好」

「いかーん!!」

だが、相手がシャナだと理解した後は、青ざめ、騒ぎを聞きつけて集まり始めた温泉客たちの前に彼女の体が晒されるのを避けるため、立ち塞がる。自分の体でシャナを庇いながら民衆を散らそうとする。「若い娘がなんて格好しとるんだシャナ!? 早く服を着んかあ!?!」  
「なんで、私が怒られるんだってばね!?!」

覗き犯のくせに、シャナの格好を注意する自来也。取材として女湯を覗いていたのは事実で、実際シャナ達と気付かずにはしゃいでいたが、孫娘のようなシャナ。その子の肌が衆目に晒されるのは、ドスケベの自来也にも容認できない。

羞恥心というものが無いのかと呆れる自来也。納得がいかないシャナ。

だが、服を着こんだ八雲が旅館から飛び出し、タオル一枚姿のシャナが衆目に晒されている状況を見て、幻術を使つて彼らの目をそらす。

「シャナ、服、着なさい」

「はい!」

本気のトーンで話す八雲の声に脊髄反射で答えるシャナ。これは怒らせたらずいと知っているのだ。非常に素早い動きで服を着こんだシャナ。その姿を確認した八雲は、覗き魔である自来也を睨み付け、幻術で縛りあげる。

「ぬおお。幻術かこれ」

幻術で地面から生えた蔓に縛られる自来也。

「ああ八雲。この人、知り合いだってばね」

「この覗き犯が?」

「この人、覗き犯じゃないよ」

「そう、そうだのオ。ワシは覗きなんかしとらんぞ。なあシャナ」

「どういう関係?」

覗き犯が知り合いだというシャナ。その言葉に嘘はなさそうであり、もしや誤解でもあったのかと八雲が考え始める。知り合いなのは二人を見れば間違いではないが、何か怪しい。八雲の質問に、シャナは少し考えた後説明を始めた。



「ゲコ仙人とは、よく一緒にお風呂に入った関係だつてばね！」

「ダウト！ よくも幼気な女の子を騙して、そんな酷いことを!？」

「シヤナお前!? 他になかったのか」

シヤナは何も間違つてない。自来也とはお風呂に入ることが多かった。2歳半の頃の話だが。とんでもない発言に八雲は憤慨。

誤解を招く発言をしたシヤナに自来也も困惑する。今のは明らかにまずかった。

詰め寄られ、どういふことかと聞きだされるシヤナは涙目になっていた。どうにか幻術破りで抜け出そうとしていた自来也。彼らの騒ぎを聞きつけ、ナルトが現れる。

「あ、やいやいやい！ 見つけたぞエロ仙人！ あれ、八雲の姉ちゃんに、シヤナ姉ちゃん」

「蝦蟇仙人だつて言つとるのに、お前ら姉弟はわざと間違つたらんか？」

ナルトまで合流した事で、混乱を極めた場。

收拾がつかなくなるかと思われたが、少しづつシヤナの説明が入る。シヤナは、ナルトを抱きしめながら、平静を保つ。

「この人が伝説の三忍、自来也様なの？ 本当に？」

「本当。ゲコ仙人と私は昔からの知り合いだつてばね」

「姉ちゃん放してくれつてばよ。このエロ仙人に修行つけてもらわなくちゃいけないんだから!」

ナルトが自来也を探していた理由は、自分の修行を見てくれる相手を自来也が倒してしまったからだという。一応実力者であることはわかるので、修行をつけろと押しかけていたらしい。そして半日もの間、追いかけまわし、今ようやく捕まえたのだという。

シヤナが自分が教えてあげようかと尋ねるも、速攻で断られる。姉離れが早いと八雲に泣きつくシヤナ。結局のところ、覗きをしていたのは事実なので、幻術ではなく本物の縄で拘束されている自来也を八雲は、訝しげな目で見つめる。

「それで、自来也様は、どうしたいんです?」

「もつとムチムチお姉さんと胸のときめくような出会いが」

「警務部隊に引き渡そうか」

八雲の決断は早い。流石に警務部隊に知り合いを突き出すのは嫌なシャナと修業を見てくれる相手が居なくなるのは困るナルトが止める。特にナルトの必死な説得に八雲が折れてくれた。強くなりたいたいという思いは誰よりも理解でき、修行の相手が欲しいというのも理解できた。

人格には問題ありそうだが、伝説の三忍である自来也の話は聞いた事のある八雲。

「自来也様」

「は、はいー」

八雲の声に自来也も素直に答える。八雲の怖さは、身に染みて知っており、この女子は怒らせてはいけないタイプだと本能的に察した。まず自来也ですらコントロールできないシャナを飼い馴らしている手腕を見ればわかる。

「真面目に、この子の修行を見てくださるのでしたら、覗きの件は水に流します」

「え」

「流石、八雲の姉ちゃん！」

ナルトがひどく嬉しそうにしている。シャナは姉としての株が奪われ、酷く困惑。一方、自来也は心底めんどくさそうな条件に眉を顰める。だが八雲が「何か？」と尋ねると「いいえ！ 修行に付き合います」と降参する。

（このシャナの友達の子、おつかないのオ。綱手とは違った意味で殺されそうだ）

逆らわんに越したことはない、自来也がナルトの修行を受け入れる運びとなった。肩を落としながら、ナルトと共に修行に向かう彼らを見送った八雲とシャナ。

「なるとおく、中忍試験なんか早く終わればいいのに」

「後、30日は終わらないよ」

ナルト不足が深刻なシャナを励ますように頭を撫でる八雲。しか

し、彼女の元に一匹のハトが舞い降りる。それは八雲の家で飼っている伝書鳩だ。八雲はその鳩の足に巻かれた手紙を読み、顔が真っ青になっている。

「どうしよう、おじいちゃんが倒れたって知らせが」

「どうも何も、帰ってあげるってばね」

「でも」

「一緒に帰ろうか？」

家族が心配で温泉どころではないだろう。だから一緒に帰ろうかと尋ねるが、八雲はシャナには、残っていてほしいと告げる。せっかくの温泉だし、シャナも楽しんでいる最中なのだからと。

シャナは特に気にしなかったが、せっかくの提案なのでシャナだけでも長居させてもらうことにした。

2人部屋を一人で使うことになったシャナ。八雲は、荷物を持ってすでに温泉街を出ているが、ふと未来視が働いたことで、シャナは影分身の術を使う。

「八雲の護衛を頼むってばね」

「了解だってばね。安全確保したら消えるってばね」

影分身のシャナが八雲を追って旅立つ。

本格的に一人つきりになったシャナは、旅館の一室で大の字になって天井を見つめているのだった。

## 中忍選抜試験 口寄せの術

エロ仙人との修行に乗り出したナルト。

どの程度チャクラを扱えるかを見るために、水上歩行を披露させられるナルト。シャナとの修行で水上歩行をマスターしていたはずなのに。上手く行かずにずぶ濡れになる。

「あれ、おかしいうってばよ。最近、ずっとチャクラがうまく練れねえんだってばよ」

今まで出来ていた事が出来なくなり、ナルトは何度もチャレンジするが上手く行かない。

濡れた服が邪魔だと脱ぎ捨て、意地になって「本当に俺は、出来たんだからな！」とエロ仙人に宣言するナルト。

出まかせを言ったわけではないと察した自来也は、チャクラを練るナルトの腹部に現れた封印がおかしい事に気が付く。

(どうやら本当にチャクラが練りにくくなってるようだのオ。四象封印を二つ用いた八卦封印、九尾のチャクラをこの子に還元できるよう組んである。

ナルトを守るためだな。四代目よ。しかし、その丁寧な封印の上に雑に刻まれた五行封印のせいで、ナルトと九尾のチャクラが混ざり合っている。大蛇丸の奴だな)

無駄な封印のせいでチャクラが練りにくいなら、封印を解けばいい。

「ナルト、万歳してみろ」

「なんで?」

「ほれ、はやく」

ナルトが自来也の指示に従って万歳すると彼は指にチャクラを集めた掌底を叩き込み、ナルトに刻まれた五行封印の対抗術である五行解印を使って彼の封印を解いた。

「な、なにすんだってばよ」

「ちよつとリラックスするツボをな。ほれ、もう一回やってみろ」

腹を抑えながらナルトが水上歩行を行うと、先程とは打って変わ

り、上手く行く。自由に水上の上を歩けたナルトは「ほらな、ほらな。俺ってば水上歩行をマスター済みなんだってばよ」と自慢げに披露する。

「それに、風遁・旋風玉!! あ、出来たってばよ」

水上歩行と同時に風遁を使うナルト。その様子を見た自来也は、ナルトが風遁を使えると思っておらず、素直に感心していた。水上歩行ですら下忍には難しいテクニックである上に、さらに性質変化までも行えるナルト。

本人はチャクラのコントロールが苦手だと言っていたが、実際は実用レベルまで練り上げられている。

「お前のその術、オリジナルか?」

風遁・旋風玉。性質は違うが、ナルトの父親であり、自分の弟子であるミナトの開発した術、螺旋丸に酷似している。父を知らぬナルトが使えるはずのない術だが、旋風玉を発動したナルトの姿はミナトによく似ている。

「いんや。姉ちゃんに教えてもらったんだってばよ。俺ってば姉ちゃんに修行つけてもらってたから」  
「そうか」

やはりシヤナかと予想が的中する自来也。だがそれでもおかしい。シヤナは当時三歳のはず。そのシヤナに螺旋丸を教えることはなかったはずだ。とすれば、シヤナは何度か見ただけのミナトの術を真似して術を開発したことになる。そしてナルトの能力値の高さも、シヤナのおかげだという。

齢15歳の少女が、オリジナルの術を幾つも開発し、ナルトを鍛え上げる手腕を持つ。もとより才能豊かな子だと思っていた。実際自来也も術を幾つも盗まれている。

だがここにきて理解する。シヤナの能力は、自来也の想像をはるかに超えている。

(底知れない才能か。四代目、クシナ、お前らの忘れ形見の片割れは、恐るべき強者へと成長を遂げておるのオ)

あの小さかった子が立派になったと喜ぶべきか、才能に翻弄される

様を嘆くべきか。

「なら、基本は押さえているな？」

「押さえてるってばよ」

シヤナの修行は、良く分からないが、徹底的に鍛え上げたんだろう。ナルトを守るために。であれば、自分も少しくらいは協力してやるのが、シヤナやミナトに対する礼儀だろう。

「なら、お前に説明しておくことがある」

シヤナが絶対に教えないことを自分が教えておこうと思った。シヤナが最も怨み、話すことも避ける九尾の事を。何よりその力の使い方を。教えるのだ。

ばれたらシヤナに殺されるかもしれないが、九尾もナルトの力である以上、使いこなせるようになる必要がある。なにより、ナルトを狙う存在と戦う場合、九尾の力を使えないでは、おそらく何の抵抗も出ない。

「お前は、自分の中に二つのチャクラがあると理解しているか？」

「二つ？ うーん、そういえば赤いチャクラになったことがあるってばよ。なんかすげー力がわいてきた事があるってばよ」

どうやらナルトには九尾のチャクラと触れた経験がある事が発覚。それなら話が早いと、そのチャクラを練ってみろと指示するも、ナルトは意識してできないという。

「才能ないのとお前、シヤナの奴も苦労したことだろうな」

「えらそーに言うなってばよ。それに赤いチャクラが練れないからなんだってんだよ」

「いいかナルト、今からお前にとっておきの術を教えてやる。だが、普段のお前のチャクラでは全然足りねーの。だから、お前の中にある赤いチャクラを好きなタイミングで引き出せるようにならなければいけない」

そこまで言われ、ナルトはその術って何だと尋ねる。

「スタミナの多いお前にぴったりの術だのオ。それが今から教える口寄せの術だ」

口寄せの術について聞き覚えのないナルト。どんな術かと尋ねれば、自来也は術について説明を始める。

「口寄せの術は、あらゆる生き物と血で契約を交わし、好きな時に忍術で呼び出せる、時空間忍術の一種だ」

「へーなんかカッコいいってばよ」

「そのためには、お前のチャクラを全て使い切り、赤いチャクラを出さなきゃいかん。なんでもいい、術を使って死ぬほどチャクラを使え」ナルトの潜在能力を引き出すために術の無駄遣いをしろと言われたナルト。すぐに多重影分身を使い、それぞれが水面に立つ。突然何を始めるかと思えば、ナルトは風遁のチャクラを練りながら、旋風玉を発動して、それぞれがぶつけ合う。

チャクラの消費も兼ねて、風遁の術の威力や精度の調整も同時に行うナルト。練度や威力の低い影分身が先に消え、残った影分身同士が術のぶつけ合いをおこない続ける。

(面白い修行だのオ)

やがて最後まで残った本体のナルト。多重影分身と風遁の合わせ技は、彼の体力を一気に奪ったらしくふらついていた。

ナルトが倒れかけたので、自来也が支え、水面から引き離す。そして満身創痍のナルトに水を与えた自来也は、自分の指を噛み、出血させる。

「何すんだってばよ?」

「今から見せるのがお前に教える術だ。よく見てろってのオ」

出血した指を掌に押し当て、印を結んだ彼はそれを地面に向ける。そうすれば地面に口寄せの術の術式が広がり、煙を上げて巨大な蝦蟇が口寄せされる。

「おおー。蛙だってばよ。すっげー、エロ仙人」

ナルトは自来也の術を称賛する。すると彼から巻物が投げ渡される。かなり巨大な巻物を受け止めたナルトはそれを開いてみると、血で書かれた名前がずらりと並んでいた。

「ナニコレ?」

「これはワシが代々受け継ぐ口寄せ蝦蟇達との契約書だ。自分の血で

名前を書き、その下に片手の指全ての指紋を血で押せ」

ナルトは自来也の指示に従って名前を開いている欄に書こうとするが、ナルトが書こうとした欄の横。一番新しい欄が血で塗りつぶされ、血が滲んでいる。

「？」

唯一そんなものがあるせいでそれが気になったナルトの様子を見ていた自来也は、静かに彼の問いに答えた。

「それは、お前の姉、シヤナが契約した欄だ」

「え、姉ちゃんも蝦蟇呼べるの!?!」

そんな隠し種があったのかと驚くナルト。そしてどこまでも自分の先を行く姉に嫉妬してしまう。どこまで追いかけてもその分引き離されているような感覚。だがそれは杞憂であった。

「呼べん」

「そっか、やっぱ姉ちゃんってすげー……え？」

自来也は、少し悩みながらも最後まで話そうと決めた。

「シヤナは蝦蟇達との契約を解除した。だから塗りつぶしてあるんだ」

「なんで？ 蝦蟇の口寄せて強いんじゃないのかってばよ？」

その言葉には同意する自来也。だがシヤナは蝦蟇達との契約を解除したのだ。それは事実だった。

「お前の姉さんはな、口寄せの才能が全くないんだのオ。才能というよりかは、資質が皆無なんだ」

「姉ちゃんが？ そんなことあるわけ」

そんな筈はないと否定するナルト。だが自来也の表情を見れば、彼が姉を貶しているわけではないと感じた。

「二年前、ワシと偶然会ったあ奴は、ワシから術を盗むと言って、いろんな術をコピーして行つた。だが口寄せの術だけは、2週間練習しても習得できなかった」

自来也は思い出す。負けず嫌いの彼女が、出来ない術に血反吐を吐きながらも取り組む姿を。だがチャクラも十分に印も間違っていない上、契約も正規の契約書を交わしている。なのにカエルはおろか才



タマジヤクシすら呼び寄せる事が出来なかった。

試しにと思いい武器の口寄せをさせてみればそれはすんなり成功した。無生物であれば家であろうと平気で口寄せできるのに、生物となれば蟻一匹呼べない。

そこまで来てようやくシャナの欠点を見つけた。

それはシャナの持つ先見の力が皮肉にも、彼女の術を邪魔している事実だった。シャナの未来視は、鬼の巫女の系譜の能力である。正規のものとは違うが、唯一同じなのは魂が通常の時間軸の外にいる事だろう。未来に触れる際、シャナの魂は時を實際に越えている。未来をのぞき見出来るスキルは、シャナの魂を時間軸からずらしている。

口寄せの術は、血と血の契約。すなわち魂と魂の契約ともいえる。シャナは、自分のチャクラや触れているものは生物でも飛ばせるが、生物と魂の繋がりを作る力が欠如していたのだ。

未来視を持つことで、契約動物を持つことが出来ない事実。決して認めなかったシャナだが、一月も経ち、里に戻らなければいけないようになった段階で、ついに諦めた。

(四代目、父の姿を追うあの子にとって、ミナトと同じ事が出来ないのは何より認めがたい事実だった)

シャナは自来也から巻物を受け取ると、静かにも大粒の涙を流しながら契約を解除した。悔しくて仕方なかったのだろう。かける言葉が見つからなかった自来也。涙で血をにじませながら、自分の名前を血で塗りつぶしていくシャナの後姿は、痛ましかった。

ナルトは、姉の失敗したところを見たことがない。なのに、そんな過去があると知り、契約書のシャナの欄を眺める。

「おれに、できんのかな？」

「わからん。だがシャナに出来ないからと言ってお前に出来ないとは限らん」

「でもさ、でもさ」

ナルトにとって絶対の存在がシャナだった。だがシャナの存在がナルトの可能性を縛る鎖にもなっている。姉の出来ないことが自分に出来るのかと。

「いいかナルト。シヤナは確かに強い。それにお前にとって素晴らしい師だった。だが、お前はシヤナの後ろを追いかけるだけでいいのか？」

「なんだってばよ」

「お前が強くなれたのは、シヤナが積み重ねて研鑽を積んだ結果を与えられているからだって言ってるんだのオ」

「んなこと、言われなくても判ってるんだってばよ！」

「いいや分かつたらん。世の中にはシヤナよりも強い奴が居る。そんな奴にシヤナが負けた時、シヤナの下位互換でしかないお前は、何が出来る？」

下位互換と言いたくはない。シヤナの教育は間違いなくナルトを短時間で強くしている。だが、ナルトのこれからの人生で戦う敵はより強く、強大なものとなる。シヤナを追い、同じことをしているだけでは、写輪眼も未来視もないナルトでは、限界が来る。

そうなる前に、ナルト自身の強みを見つける必要があるのだ。

「お前は火影になりたいんだろ？」

「そうだ」

「ならお前はシヤナを超えなければならぬ。そのためにも、お前だけの武器は必要なんだのオ」

自分だけの武器。それはナルトの身を守るだけでなく、何時かはシヤナの事も守れる力になる。そういう力をつけろと言われて、ナルトは覚悟を決めて契約書に名前を記す。いつまでも守られたくないというナルトの反抗期、それは同時にシヤナの事を守りたいという思いにつながっていた。

シヤナという殻に包まれたナルトが、自分の手で外に出ようとした瞬間だった。

「エロ仙人。俺やってやるってばよ。だから、だから、指導お願いしまするってばよ!!」

頭を下げたナルト。

「元よりそのつもりだ。だがワシの修行、死ぬ気で取り組まんと、本当に死ぬぞ」

「押忍！」

その後、約一月をかけた修業は、ナルトを確実に強くし、口寄せの術の限定的な習得と、九尾との邂逅を果たす結果をもたらした。

## 温泉街事件

八雲が帰ったため一人残されたシャナは、案外温泉街を満喫していた。見たことのない食べ物には飛びつき面白い見世物は見学していた。

ただ女の一人旅であるからして、温泉旅行に来た男性から声を掛けられ、酒の席に呼ばれるなどのナンパも多く、それだけが面倒だった。あらかじめ八雲から、ナンパされたら額当てを見せて忍者だと言えば、ある程度は回避できると教えられていたので、その方法で撃退することが多く。

中には他国の忍もおり、忍者であるシャナに臆することもないバカもいたが、体に触れようとした瞬間に写輪眼で幻術を掛けるなどして撃退を繰り返していた。

温泉卵を購入し、温泉街から少し離れた場所にある秘湯スポットに食べながら向かっていたシャナ。パンフレットには載っておらず、宿の女将さんに聞いた場所であった。

「結構遠いってばね」

割と遠い距離で、思ったより時間を食ってしまう。温泉卵も平らげてしまい、早く着かないかなと考えていた時だ。人通りの全くない山奥で、かすかにだが「ふええ」と赤ちゃんの泣き声が聞こえる。

こんなところで聞こえるはずがないと思いつつも、気になってしまふ。赤ちゃんの泣き声は、シャナにとつていい思い出がない。一時は、心の傷を広げる原因にもなってしまった。だが、シャナは、森の奥で泣いている赤ちゃんを放置するような人間ではなかった。

様子を確認しに行くことに決める。何もなければそれでいいし、何かあれば何とかしなければいけない。そう決めた彼女は浴衣姿のまま、森の中を駆け抜けた。

「居たー!」

声はあまり離れておらず、すぐに赤ちゃんの姿を捉える事が出来た。おくるみに包まれた赤ちゃんを抱いているシャナと同年齢くらいの青年が居た。銀髪の端正な顔立ちをした美青年であり、シャナも

素直にかっこいい顔立ちだと感じた。

袈裟のような服を着ており、三日月に包まれた太陽のような紋様が背中にあつた。どこかの一族かと思つたがシヤナの記憶に該当する文様ではない。

端正な顔立ちながらも、目を閉じたまま、泣きわめく赤ちゃんに右往左往しているのが一目瞭然だつた。

「な、泣き止んでくれ」

「おい」

「誰だ!？」

あまりに無茶苦茶なあやし方に、赤ん坊の泣き声が大きくなる。その様に腹が立つたシヤナが声をかければ、青年は警戒心を露にする。だが、敵意を向けていないシヤナに困惑している。

シヤナは、青年が立ち上がった事でより苦しい体勢になつた赤ん坊を彼から取り上げた。

「なにを」

「お前、赤ちゃんをなんだと思つてるつてばね! 赤ちゃんはこう抱くんだつてばね」

シヤナは、赤ちゃんを無理のない姿勢でかき上げ、泣き止ませようと少しだけ揺らしながら、あやしていく。目の開いた赤ちゃんはシヤナの穏やかな表情と「もう、大丈夫、怖くないつてばね」という落ち着いた声に安心したのか、泣き止む。シヤナは、だいぶ昔、1歳未満だつたサスケをあやした時の記憶を思い出す。当時、シヤナは赤ん坊の泣き声にトラウマを刺激されていたが、稀にサスケの両親やイタチも任務に出る事になり、シスイの家で預かることがあつた。その時、泣いているサスケをあやしていたのはシヤナだつた。その時を思い出した。

泣き止んだ後に、涙をハンカチでふき取つたシヤナは、赤ちゃんを不安にさせないよう抱いたまま、青年を睨む。

「お前この子の、お兄さん?」

「いや、違う」

「なら、この子の両親はどこだつてばね」

もしかして誘拐かと考える。明らかに青年は赤ちゃんの扱いに精通しておらず、人気のない山で二人というのもおかしい。疑いの目を向けられた青年は目を閉じているのにもかかわらず、シヤナの視線に引いていた。

「それが、僕もわからないんだ」

「は？」

「僕も一時間ほど前に、突然女性にこの子を預かってくれと渡されて、困り果ててたんだ。本当だよ。誓って嘘じゃない。けど、この子を渡した女性が戻ってこなくて、赤ちゃんも起きたら泣き出して」

本当に困っていたらしい。その言葉に嘘を感じ取れない。本当に突然赤ちゃんを渡されたのだろうか。そして、赤ちゃんを抱いたこともない青年は、困り果てていた。そこに偶然シヤナが現れたのだという。

本当に助かったと礼を言われる。

不思議な雰囲気を感じ、独特の魅力を持つ青年は、シヤナの疑う目が緩んだことで「ありがとう、信じてくれて」と微笑んだ。

「それで、どうするんだってばね？ 赤ちゃんをこんなところに放置する訳にはいかないってばね。ミルクだって飲ませないといけない」「正直、僕は此処に来たのも初めてで、どうすればいいのかわからなかったんだ」

なんだこの箱入りの男はと、シヤナが呆れる。こんな男に赤ん坊を預けた人物の目的も判らない。だが、放置することはできない。自分の指をしゃぶっている赤ちゃんを見て、一先ず温泉街に戻ろうと決める。親が帰ってくる可能性もあるが、何らかのトラブルがあった可能性もあり、赤ちゃんの保護を優先させてもらう。

「とりあえず、私の泊ってる宿まで戻る。温泉街なら、赤ちゃん用のミルクも買えるはずだってばね」

「そうか。ならそうしよう」

「お前もついてくるのかってばね？」

「駄目かい？」

シヤナは青年は、別に要らないと考える。だが一応巻き込まれた彼

にも事の顛末を知る権利はあるのだろう。第一、目を一切開けないこの男を森の奥に放置するのも不安だ。ついて来いと告げる。

「というか、目を開けろってばね」

流石に目を瞑りながら森を歩くのは一流の忍でも危ない。だが青年は悲しそうな表情のまま、「僕は目が見えないんだ」と告げた。

「けど、チャクラを使って周囲を感知する術を持つてるから、問題ないよ」

「お前、忍か？」

チャクラを扱う術という言葉に、シヤナは裸眼から写輪眼に切り替える。そして、青年のチャクラを見て驚いた。今まで見たことのないチャクラの質をしており、その量も強大だった。影分身で半分になっているとはいえ、今のシヤナよりも遥かに多い。だが、何処か優しく、切なさを感じる。

その正体がわからないが、忍である以上警戒するに越したことはない。

「僕は忍なんてものじゃないよ。あんな野蛮な人種と一緒にしないでほしいな」

「私も野蛮な人種って言うてるんだってばね？」

目の前の忍者に対して、随分な言いようだと怒気を込めて言えば、彼は慌てて「いや、君の事じゃないよ。すまない！ 怒らないでほしい」と謝罪を口にする。シヤナの怒気に反応してか赤ちゃんがぐずり始めたので、すぐに戦闘態勢を解除する。

「ごめん、ごめん。いい子だから、泣かないでね」

「君は、とても優しい女性だと思うよ」

「うるさい。とりあえず宿に向かうってばね。ついてこれる？」

「問題ないよ」

シヤナが赤ちゃんを怖がらせないように、なるべく速度を落とすしながらも木々を駆け抜ける。その後ろにぴったりとついてくる青年。彼は興味深そうな顔で、シヤナの後姿を追っていた。

「そういえば、君の名前を聞いてなかったね」

「何、ナンパだってばね？」

「ナンパ……って何だい?」

「なんだろう?」

「ええー」

どうやら箱入りは確定の様子。ナンパとは何かと聞かれたシヤナも、実は良く分かっていない。彼の質問に頭を捻りながら、八雲の言葉思い出す。とりあえず、シヤナは相手の誘いに乗らない方がいいと言われていたが、何故ダメなのかは、聞いていない。

声をかけるのがナンパなのだろうか。永遠に答えの出ない状態となり、シヤナは考えるのを一先ずやめた。

後で宿の女将さんにでも聞いてみようと思った。

「シヤナ。うずまきシヤナだつてばね」

「シヤナ。いい名前だね」

名前を褒められるとは思わなかった。だが、父と母に与えられた名前を褒められるのは、素直にうれしい。ありがとうと返せば、彼は、シヤナの顔を見て少し視線をそらした。目は開けていないのに、何故かそらされた気がしたのだ。

そして温泉宿が見えた時、彼は静かにシヤナに名を告げた。

「僕は、トネリ」

「トネリ? 変な名前だつてばね」

「そ、そうかな?」

「冗談だつてばね。いい名前だと思うよ。よし、先に赤ちゃんのミルク買わないといけないつてばね」

温泉街の入り口に到着した二人。シヤナは早速赤ちゃんの食料の確保のため、売店へと向かった。シヤナに付き添うようにトネリも売店に入り、ミルクやおしめを購入する姿を見て、若い夫婦だと言われたシヤナ。

さすがにそれはあんまりではないだろうかと顔に出してしまふ。その様子をチャクラの心眼で見ていたトネリが笑い、シヤナはそれを睨み付けていた。

シヤナはトネリを連れ、温泉宿の女将さんに、八雲の分のチケットを渡し、今から二人と赤ちゃん一人で使うと告げた。シヤナの後ろで



優しく赤ちゃんを抱くトネリ。女将さんに笑みをむければ、年甲斐もなく見惚れていた。

「あら、彼氏さんとその妹さんなのね」

「あ、うん。お願いしますってばね」

「お世話になります」

言い訳が面倒になったシヤナは、その誤解を解く手間を考えれば、もうそれでいいと思えた。そして、3人で旅館の一室に入り、シヤナが用意した寢床に赤ちゃんを寝かせる。

ポットからのお湯で粉ミルクを溶かし、水で冷ましたうえで赤ん坊の口元に持つていけば、お腹が空いていたのだろう。ごくごく飲み干し、お腹いっぱいになった様子。げっぷをさせ、ようやく安心した赤ちゃんは眠ってしまう。

「はあ」

「ふう」

ようやく落ち着いていたシヤナとトネリ。二人は、お茶を飲みながら、一息をついていた。だがシヤナは写輪眼で窓の外を見ており、トネリもお茶をすすりながらも、宿の外に意識を向けていた。

「トネリ、お前滅茶苦茶強いつてばね？」

「どうだろうね」

だったら気が付いているんだろうという言葉は発しない。温泉街に入った直後、シヤナは視線を感じていた。明らかに敵意のあるそれ。トネリも同じく感じていた様子で、この赤ん坊に関する問題がある事が発覚する。

どうやらトラブルに本格的に巻き込まれたと感じる二人。相手の気配の隠し方から、雑魚ではない。殺気は感じとれても正確な位置がわからない。

「誘い出す方向で行きたいってばね」

「同じ意見だ」

二人の飲む茶飲みには、それぞれ茶柱が立っていた。

## 温泉街事件2

旅館の一室で待つ間にシャナはトネリの格好がひどく目立つことから浴衣に着替えさせた。温泉街を逃げる場合浴衣姿の方が自然だろうという案に彼は困惑していたが、「はやく」というシャナの言葉に従う。

そして敵の動向がわからない以上、相手の出方を伺っていたシャナ。トネリの正体も不明なので、シャナは色々と質問した。

意外にも、トネリはシャナの質問に答えてくれた。

「僕は遠い所に住んでいてね。稀に父と一緒に、この地に訪れたんだけど、父と意見が食い違って……その、あの」

「家出したと?」

「そんなところかな」

意外な理由でシャナはトネリを観察する。どちらかというとなんか動的な行動なのだろう。父親と離れ一人山奥に向かって突き進んでいたら、知らない女性に赤ん坊を預けられたと。

そして術についても、軽く話していた。

「僕の一族は忍ではない。けれど、チャクラを扱う事が出来るんだ。僕のこの心眼も、一族独自の技術だ」

「どこまで見えてるんだってばね?」

閉じられた瞳を覗き込むように近づくシャナ。シャナの顔が近くになるとトネリは、視線を外す。少なくとも、シャナの顔はぼつちり見えているのだろう。

「君が思っているより見えていると思うよ。後近いよ」

「ふーん、色は?」

「色は難しいかな。感じ取れてはいるけれど、君のしている色と僕を感じる色は違うかもしれない」

輪郭などが見えるが、色の判別が健常者とは違うという。とはいえ、非常に便利な術だなど思った。逆にトネリもシャナの目が気に

なった。自身を見つめる写輪眼の存在。写輪眼を見たことがない事もあるが、シヤナの目に何故か引き込まれる。

その感情が何なのかトネリにはわからない。

「シヤナの目も珍しいんじゃないのかい？」

「激レアだつてばね」

写輪眼の希少価値はすごいだろう。うちは一族が減んだ今となつては、正統継承者の数は極僅か。シヤナの青い写輪眼に限れば、現状二人しか開眼者が居ない。

じーと眺められるシヤナは、そんなに変だろうかと考える。

「変？」

「そんなことはないよ。綺麗だと思っただけさ」

「他には？」

この際、トネリの術を教えてもらおうとしていたシヤナ。実力は不明だが、忍術ではない術を使う青年。彼の術には興味があつたからだ。

「僕もまだ一族の全てを学んだわけじゃないけど、出来ることと言えばこういうのかな」

トネリが掌から無数の小さな光の玉を作り出す。それはチャクラでできた球体であり、写輪眼で観察したシヤナはまるで泡のようなチャクラの球体を自在に操る様も見る。シヤナは似た術を使うが、トネリが今やっているように球体を複雑にコントロールすることは叶わない。

球体を自在に操り、部屋中に循環させるトネリ。見事なコントロールにシヤナが素直に感心する。

「これ何遁？」

「そういえば知らない。名前あるのかな？」

「そんなことあるつてばね？ 私だったら粒遁とか自分でつけてるけど」

名前のない術なんかあるのかと、シヤナは彼の目の前でチャクラの粒子を放出する。それを集束して幾つかの球を作り始める。シヤナの得意とする術の模倣。完璧にコピーできない術でも似たような術

を作り出せる彼女は、粒遁を応用して、トネリの泡の術を真似する。血継淘汰である粒遁だが、トネリの術を見れば水遁の性質が混ざっており、それにあやかって水遁のチャクラも混ぜ込んでいく。

そして2つほど小さな光の玉を作ったシヤナは、ゆつくりだがトネリを真似て、動かししていく。あらかじめセットして軌道を決めておく天輪と違い、体から離れた粒遁を手動で操作するのは難しい。苦手な水遁ということもあり難易度が高い。

第一チャクラ性質を4つ混ぜ合わせる芸当を即座にやっつてのける事が異常。血継淘汰を超え、血継制覇ともいえる高難易度の術。

「すごいねシヤナ。僕の一族の技を一度で」

「これ、くそ難しい。だめだつてばね」

すぐに割れてしまったチャクラのシヤボン玉。実用には程遠いとシヤナが疲れた様子で評価を下す。だがトネリは、シヤナの事を凄いと評価した。彼の一族でもない者が、それを模倣し、近づいた。

うちは一族である証拠、写輪眼を持つ少女。知れば知るほど興味深く、トネリは、彼女の力を評価していた。

(ハゴロモの子孫。うちは一族の姫か。ハムラの子孫である僕とは相容れない筈なのに、関つてはいけない筈なのに)

自分の一族に伝わる戒律。その掟や理念を思えば、シヤナとの接触は間違いである。けれど、一族の目的に疑問を感じ、反抗したことで父から逃げた彼は、今のこの時間を運命だと感じていた。

父や一族に伝わる教えに逆らってしまった自分の前に現れたのは、その教えによって裁くべき対象であるハゴロモの子孫。彼女のことを知れば、何か答えが見つかるのではないかと感じた。

「トネリ。監視の人数が増えたつてばね。けど、仕掛けてこない」「僕らの正体がわからないから、様子を見てるんだらうね」

誘い出す作戦は、シヤナ達がただ待てばいい。敵は、人数を増やし、シヤナ達を包囲する気だろう。そして、タイミングを見て宿から抜け出し、逆に叩く。忍者ではないと言い張るトネリではあるが、泡の球体の術からしても、森でシヤナを追いかけた身のこなしも、中忍クラスは優に超えている。

足手纏いにはならないだろう。シヤナのアンテナは、トネリの事を強いつ感じ取っているのだから。

シヤナは、布団ですやすやと安心しきって眠る赤ちゃんのお腹を優しくポンポンと撫でる。

「貴方は運がいいってばね。安心して、お眠り」

運命があるのなら、この赤ん坊の引き寄せたのは豪運だろう。最強のシヤナと未知数のトネリに守られる赤ん坊の身は、世界で一番安全ともいえる。シヤナもトネリもこの子の為に命をかける理由はない。けれど、見捨てるつもりは皆無だった。

成り行きではあるが、関ってしまった以上、赤ん坊を見捨てるのは人間の行いではない。

特にシヤナは、大人の都合で振り回される苦しみを知っている。だからこそ、見捨てられないのだろう。

横になり、赤ん坊の様子を見ているシヤナ。その姿を見ていたトネリは、窓枠に靠れかかりながら、あるアドバイスをする。

「シヤナも少し眠ったらどうだい？ 長丁場になるかもしれないし」「うーん、そんなに時間はかからないってばね」

なぜそう言い切れるのかと尋ねれば、「内緒」と言われ、肩をすくめるしかない。けれど声色に動揺も嘘も感じ取れず、「そうか。信じるよ」と答えた。

妙に余裕のある態度に子ども扱いされてる気がしたシヤナ。だが自分の言葉をこうも信じる彼が心配になっている自分も居た。待っている間にトネリからもシヤナの身の上の質問があった。

シヤナも問題のない部分は話した。木ノ葉の忍である事、うちは一族であること、弟がいることなどを。かなり熱く語りながらも、トネリの泡遁（シヤナ命名）の球を一つ作って遊んでいたシヤナ。

粒遁よりもさらに難しい術だが、ものに出ればシヤナの大きな武器となるからだ。

「シヤナ、少しチャクラの流し方が違うよ。こうやるんだ」「なるほど」

トネリがシヤナの手を取り、自分のチャクラを流しながらチャクラ

の遠隔操作の方法を教えてください。これをマスターできればシャナは粒遁を発射後に曲げたりすることが出来るかもしれない。

トネリに教わりながら、チャクラのシャボン玉を操作するシャナ。苦手な水遁も少し練習しなければと修行の必要性が出てきた。

「こうだつてばね?」

「上手いよ。一時間も経ってないのに、基本をマスターするなんて」

時間つぶしの意味もあり、トネリも優しくも真剣にシャナに指導していた。忍者であれば術を他者に教えることは少ない。だが忍でない彼に、一族秘伝の術を教える事に対する抵抗はない。

シャナも誰かから忍術を教わるのは、久しぶりだった。自来也に教わった時は見事に失敗し、修行に対するモチベーションが低下していた。

けれど、シャナは忍術の修行が好きだった。何より好きだったのがシャナが上手にやれば褒めてくれる両親が好きだった。

ある程度完成してしまったシャナに、その感覚を思い出させてくれた。そして何より今は強くなる感覚がたまらなく好きなのだ。

泡遁の修行をしているシャナとそれを見守るトネリだったが、時間が流れることで敵の準備が整ったらしい。シャナがようやく2つのシャボン玉を操作できるようになった段階で、彼女から修業の終わりを告げられる。

「トネリ。来たつてばね」

「あつという間だったね」

コンコンと部屋のドアをノックされ、シャナ達が黙っていると勝手にドアを開けて女将さんが入ってきた。だがその様子は明らかにおかしく、顔色は真っ青で目の焦点が合っていないかった。

「おまえ、たち、は、なに、ものだ」

「……女将さんを操つてどういうつもりだつてばね」

シャナの写輪眼は女将さんのチャクラがおかしいことを見抜いている。幻術かとも思ったが、その肌に浮かぶ斑点が何らかの術でもあると理解した。

「なに、ころしはしてないさ、ただ、このしゅうへん、の、にんげん、

には、ねむって、もらわ、なければ、な」

「シヤナ。どうやらそいつの言うことは確かみたいだ。まだ夜になつたばかりなのに、静かすぎる。温泉街つてもつと賑わうものだよね？」

トネリが心眼で周囲を確認すれば、温泉街の人間たちのほとんどが眠りにについているようだった。

「起きてるのは私達とお前達だけか」

「そうだ。あかんぼうを、わたせ。そうすれば、おまえたちはみのがす」

「この子の親がお前なのか？」

「いや、ちがう。ただ、わたしのもくてきのため、そのこをほっしているだけだ。きみたちともあらずう気はない。ねむって、いたまえ」

そういうと女将さんは口から黒い霧のようなもの吐き出し始める。

シヤナの写輪眼がそれを見抜いた。瞬時に女将さんから離れ、赤ん坊を抱く。

「毒みたいなものだつてばね！」

「外だね」

室内で毒を食らつては敵わない。トネリが、泡遁でシヤナの抱く赤ん坊を包み込み、更に生み出したシヤボン玉で旅館の壁を爆破。その風穴から二人が避難する。

部屋で毒を吐いた女将さんは、その場で倒れる。そして、彼女の吐き出した黒い煙が人型を取り始める。そして、それは分身のように男性の姿となる。辮髪で修行僧のような姿をした男は、体に刻印のようなものを刻んでおり、逃げていった二人の方向を眺めながら、自分の動きを確かめていた。

「楔も使えず、引き出させてせいぜい、10パーセントと言ったところか。うちのはの娘に謎の男。これでも十分か」

男は、シヤナ達を追って静まり返った温泉街を飛び出すに至る。不気味な雰囲気の中の男は、シヤナ達の追跡を始めた。

毒にまみれた部屋から赤ちゃんを抱えて飛び出した二人。背後か

ら感じるプレッシャーにいち早く反応したのは、トネリだった。

(なんだ、この悪寒は)

シヤナを危険な目に遭わせないため、自分だけで相手した方がいいかと考えるが、シヤナが「面白そうなやつが釣れたってばね」と笑っていた。

強者を求める酷く野蛮でありながら、美しい笑み。トネリは、自分が最も嫌う戦争を止めない野蛮な存在である人間、その最たる例である戦闘狂のシヤナの姿を見て、美しいと感じてしまった。

なんて自由で、活き活きとした姿なのだろうと。

「トネリ！ この泡は頑丈だってばね？」

「ああ。相当頑強だよ。……応戦する気か？」

「どのみち、この子の親の場所を知ってるのはあいつだけ。この子を森に隠して、やるってばね」

「わかったよ。だが、その子優先だ。相手は僕らより強いかもしれない(本当に、僕も馬鹿だな)」

トネリの言葉を聞いて、シヤナが「いいね。こういうの待ってたってばね」と答えるも、シヤナも赤ん坊を優先する気らしい。両親に会わせてあげるといふ気持ちは強いようだ。

だが甘くはないだろう。敵の気配は、大筒木トネリも警戒しなければいけないほどのだから。

「君からは目を離せないな、本当に」

「ん？」

「では、僕も实力を見せるとするよ」

「頼りにしてるってばね」

二人は、自分たちを追う存在を迎え撃つべく、温泉街から離れた場所にある森に面した草原を目指した。



### 温泉街事件3

シヤナとトネリの二人は、赤ちゃんを安全な場所に配置。

そして、待ち構えていると、シヤナ達を追ってきた謎の男が姿を現す。

「逃げ続けるかと思っていたが、まさか待ち構えているとはな」

「女将さんは、無事だったばね？」

「ああ。無駄な殺生はしない主義だ」

男の言葉は嘘ではないらしい。本当に眠らせているだけなのだろう。だが男の目から感じ取れるのは、目的の為なら何人でも殺すことはいとわれないという冷酷さ。

人の好きそうな佇まいで誤認しがちだが、目の前の男はシヤナが会ってきた中で一二を争う危険人物だった。

「さて、本題に入ろうか。あの赤ん坊を渡せ」

「お前は見るからに怪しい。あの子をどうするつもりだ」

トネリの質問に「ふむ」と考え始める男。そして、「ある実験の対象にしようと思つてな」と告げた。

「それでその子の父親に高い金を払ったというのに、母親の方が勝手に持ち出してな。私もある意味被害者ということだ。だから、その子を返してくれるとありがたいんだが？」

ごく当然の事のように言う男。トネリは男の言動に腹を立て、隣にいるシヤナは笑みを消し、無表情になっていた。子供を売買したという親の話も理解できないし、実験に使うと平然に言う男の倫理観がトネリは許せなかった。

すぐにでも殴りかかろうとしたが、シヤナが彼の手を掴んで止める。

「母親は今どこ？ 殺したの？」

「いいや。まだ殺してはいない。山奥の小屋で死に掛けてはいるがね。それがどうした？」

本当に人間と話しているのかという程、感情の動かない男。そいつを観察しながらシヤナは、溜息を吐いた。

「それだけ聞いたら十分だってばね。こいよ、カス」

「やれやれ、血の気の多いお嬢さんだ。無駄な殺生は、好まないと言ったんだがな」

シャナの言葉が開戦の合図だった。男が掌をシャナに向かって伸ばした。ただそれだけにしか思えない行動。だがシャナの写輪眼は、男の行動の意図を察していた。

「トネリ！」

「わかつてるー！」

シャナの前に出たトネリが、自分たちを包み込むようにチャクラの泡を展開する。すると、その泡に微小な何かが突き刺さり、次の瞬間拡大。鉄パイプのような大きさの黒い棒がトネリの展開した泡に阻まれていた。

トネリは、突然目の前に現れた黒い棒に驚き、シャナを見つめてしまう。シャナから聞いていた攻撃が、本当に来たからだ。

そしてなにより黒い棒を射出した本人が一番驚いていた。

(どうなっている。こいつら、俺の攻撃を初見で防いだ。写輪眼でギリギリ捉えたとしても、まるであらかじめ用意していたような)

男の持つ能力は、少名毘古那<sup>スクナヒコナ</sup>という自分が見たものを極小のサイズにまで小さくする能力。むろん生物は小さく出来ないが自分の体なら可能という能力。目に見えないほど小さくした杭を高速で射出し、それが相手の体に刺さった瞬間元のサイズに戻すという技。それをあろうことか、あらかじめ知っていたように防御された。

そして、攻撃を防ぐなりシャナが光に包まれ、超高速で男に迫る。(はやい。しかし、それだけだ)

粒遁・天翔で距離を詰めたシャナはその速度を殺さないまま、飛び蹴りを放つ。だが、男はその高速の動きを見切り、右手でガード。片手で飛び蹴りを防がれたシャナ。

防がれる速度ではなかったのに防がれ、万力のような力で空中に固定される。

「く」

「思い切りがいいな」

男は左手を開き、シヤナの体に何本もの杭を打ち込んだ。しつかりと極小の針が刺さったことを確認した男は、シヤナの足を掴んですさまじい膂力で投げ飛ばした。

「火遁・業火滅却―」

投げ飛ばされたシヤナは、空中で印を結び、反撃に火遁の術を使う。間髪を容れない反撃で、男に迫る炎の津波。回避する場所もない攻撃だったが、男が不敵に笑えば、シヤナの放った術が瞬時に消えてしまう。男を覆いつくす規模の炎は、男の能力である少名毘古那によってサイズを減少。もはや糸と変わらない規模に縮小される。

術が消された訳ではないが、射程も規模も使い物にならなくされたのだ。

「シヤナ」

シヤナの体が地面に叩きつけられる直前に、泡遁のクツションを作ったトネリ。彼の作ったクツションに受け止められたシヤナ。落下のダメージは完全に受け流してもらえたため、無傷だった。

「ぐ」

「な」

落下のダメージは受けていない。だが、不用意な接近戦の代償に、シヤナの体に打ち込まれていた極小の針がシヤナの写輪眼でもとらえきれない速度で鉄パイプのような元のサイズに戻り、彼女の肢体を貫く。幸い手足が串刺しになっただけで、内臓にはダメージはない。

その攻撃を仕掛けた男は、首を傾げていた。

「その胸と腹にも杭を刺したと思っただが？」

男の記憶が正しければ、男の杭はシヤナに致命傷を与えていたはず。なのに、打ち込んだはずの杭が消えており、見つからない。

すると、シヤナがくすくす笑いながら、上を指さした。その指に視線を誘導されると、自身の頭上に二本の杭と無数の手裏剣が降り注いでいる光景が目に入る。

先ほどの火遁は陽動でこちらが本命ということだろう。そして、致命傷になる杭だけを投げ返しているということは、シヤナが自分の少名毘古那の仕組みを見抜いているということだ。一度目はまぐれか

と思ったが、あえて食らうことで油断を誘う作戦を実行したシャナ。そこから導かれるのは、シャナは男の戦法を熟知し、戦略を練ってきているということだろうか。

（ありえんな。写輪眼で偶々、捉えられたただけだろう）

自分に迫りくる手裏剣やクナイの雨だが、それも小さくしてしまえば無意味。その考えは正しく、男の視線に入った手裏剣の雨は、瞬く間に見えないくらい小さくなり、無力化される。

「他愛もない、ん」

攻撃を無力化し、次はどんな手で来るのかとシャナを見る男。すると、先程まで手足を串刺しにされていたシャナが五体満足で立っており、その青い写輪眼が、歯車の文様となっていた。

そして、右目の歯車の文様が回転し、シャナは指を弾いた。

その行動の意味が解らなかった男だが、それはシャナの攻撃に他ならなかった。

「ぐううう、なんだと」

小さくして無力化したはずの手裏剣やクナイの雨。それらが男の目の前で時間が巻き戻るように巨大化した。いや、正しくは少名毘古那で小さくしたものが元のサイズに戻ったのだ。小さくし衣服や肌に食い込んでいた忍具が元のサイズに戻ったことで、体中に大きな傷が生まれる。

明らかに男の術に対する意趣返しであり、男は、体中から出血している。

「万華鏡写輪眼か。何をした」

「お前が生き物以外を小さく出来るように、私も自分と見た物質の時間を少しだけ戻せるんだってばね。名を御年神。」

シャナの右目の瞳術。それは、文字通り時間の巻き戻し。チャクラの爆発的な消費量と使用中は、未来視が出来ない欠点はあるが、それを補って余りある能力。忍術なども巻き戻せないなど、無制限というわけではないが、小さくされた手裏剣を小さくされる前に戻すくらいは、朝飯前だった。

そして、杭を打ち込まれたシャナだが、自分の体を杭が刺さる前に

戻したのだった。

「この下等生物が」

「下等生物に一杯食わされたお前は、何だつてばね」

自分の能力を真似られ、傷を負わされたことで頭に血が上る男。体中から黒い杭を飛び出させ、体に刺さった手裏剣を内側から弾き飛ばす。この程度傷にも入らないと言わんばかりの態度。

シヤナは、男の態度が気に入らない。だからこそ、こんな悪趣味な戦法を取ったのだ。赤ん坊を実験材料に扱う輩をシヤナは拒絶する。「シヤナ。もう気が済んだ？ そろそろ相手も本気だ。僕も参戦していいんだね」

「うん。お願いだつてばね。ただ、気を付けるつてばね」

シヤナは、御年神の術で男の攻撃を無力化できる。おそらく男の天敵がシヤナなのだろう。だが、トネリに関しては、未知数。泡遁が通ずるとは限らない。そして、小さな杭を体に打ち込まれた段階で、致命傷になりうる。

シヤナの瞳術では、トネリの時間を巻き戻せはしないのだ。

「わかっているよ。それにこいつは、僕の一族が倒すべきだと思う。一つ答えろ、お前の名は何という」

シヤナの援護に回っていたトネリだったが、相手の力量と男のチャクラを感じ取り、表情が変わる。自身の周囲に無数のチャクラ球を展開。それらを男に目掛けて発射する。360度から襲い掛かる無数のチャクラ弾の包囲網。

それらに囲まれた男は、トネリを見て少し驚きの表情をしていた。

「お前、まさか、あの女の血筋か」

「僕の質問にだけ答えろ」

包囲していた光玉の一つを爆発させるトネリ。その威力は起爆札の何倍も強力であり、それらが100にも近い数で囲んでいる。脅しではなく、男を殺せるだけの力があると誇示する。そしてシヤナと自分を守るように泡が展開されており、杭を打ち込む不意打ちは通用しない。

そして、男もトネリのチャクラの質から、彼のルーツを悟る。そし

て、肩を震わせながら笑う。

「何がおかしい」

「くく、いや失敬、私の名前は、ジゲン。そう呼ばれている。お前たちは、トネリにシヤナだったな。ここで殺すには惜しいな」

「出来ると思うか？」

「ああ、少名毘古那での制圧が出来ないなら、力で圧倒すればいいだけの事」

男がそういった瞬間、男の姿がトネリ達の前から消える。完全包囲したはずなのに、瞬時に消えた男をトネリが探すが見つからない。

「何処だ」

その隙が命取りとなる。男は、少名毘古那の能力で、蟻よりも小さくなくなっていただけだった。

そして、包囲網を正面から抜けたジゲンは、空を飛びながらトネリに急接近。自分を捉えきれていない彼を守る泡のガードを貫通。そして、内側に入り込んだことで元のサイズに戻る。既に回避も出来ず、ジゲンの拳を食らうしかない。

少名毘古那での奇襲がなくとも、ジゲンは強い。

「悪いが、お前はこれで終わりだよ。若き大筒イイ」

「粒遁・螺旋輪虞」

「銅輪転生爆」

完全な不意打ちを行ったジゲンだったが、先見の万華鏡写輪眼を発動していたシヤナには、彼の行動が手に取るように見えていた。小さくなり、トネリを襲うことを把握していたシヤナは、迷うことなく、未だに見たジゲンの侵攻経路に螺旋輪虞を置いた。

それは元のサイズに戻ったジゲンの腹部を捉え、吹き飛ばす。吹き飛ばされたジゲンを感知したトネリは、ジゲンを包囲していたチャクラ球を雨のように落とし始める。螺旋輪虞を受けたジゲンはすぐに体を小さくし、螺旋輪虞から離れ、宙を飛びながら距離を取ろうとする。

小さくなる能力があると聞いていたため、吹き飛んだ方向に絨毯爆撃による面制圧攻撃を仕掛けた。

「粒遁・天輪乱舞」

トネリの意図を察したシャナも、同じく粒遁の砲撃をジゲンの逃げている位置に降り注がせる。

（あの小娘、先にあいつを殺すか。奴の瞳術、青い写輪眼とは何なのだ）

絨毯爆撃を全て回避するジゲン。そして、爆撃の少ない地点を見つけ其処に飛び込む。そして、再びシャナ達に接近し、体術による攻撃を決める。

「ここに来るのはわかっていた。銀輪転生爆」

（今度はお前か、大筒木トネリ！）

爆撃の少ない地点はトネリがあえて作った地点であり、誘い込まれたジゲン。彼を今度は見逃さないとトネリが、泡遁のチャクラ球を高速で回転させ竜巻を作り出す。その威力はすさまじく近づくものすべてを切り刻んでしまう。

だが、そんな攻撃で怯むジゲンではない。トネリの展開した術を少名毘古那で縮小。つむじ風程度の規模に抑え、トネリに殴り掛かった。

「ほう」

「ぐ、舐めるな」

ジゲンの高速移動を気配だけで捉えたトネリは彼の拳を右手で受け止め、左手に作り出したチャクラ球を叩きつけようとする。シャナの粒遁・螺旋輪虞を真似たような技にジゲンは「猿真似だな」と、少名毘古那による縮小で回避する。

突然小さくなったことで、攻撃を外してしまうトネリ。諦めずに、二撃目を振るおうとするが、小さくなっているジゲンが高速で動き回り、攻撃が当てられない。

そして、シャナも迂闊な攻撃は、ジゲンごとトネリに攻撃を当ててしまうため、援護に入れない。

ジゲンの目的は、シャナの迂闊な攻撃である。シャナが迂闊な攻撃を仕掛けてきたら、すぐにターゲットをシャナに変えるつもりだ。スピードもパワーもジゲンが上であり、二人の厄介なフォーメーション

さえ崩せればそれでいいのだ。

「トネリ！ 二時の方角」

「わかった！ 天輪転生爆」

「ぐぶあ」

即興で作った螺旋丸のようなトネリの術は、何故か元のサイズに戻り、明後日の方向に拳を繰り出していたジゲンの脇腹に命中する。攻撃をくらったジゲンは、口から血を吐きながら吹き飛び、地面に横たわる。受けるはずのないダメージが、彼の体を蝕んでいた。

（何故だ。私は、小さくなっていた。なのに気が付けば元のサイズで、拳を繰り出していた。どういうことだ。いや、違う。……また貴様か、うちは!!）

ジゲンが、顔を上げればシャナの左目に浮かぶ歯車が回転している。先程とは逆の目による瞳術であると、ジゲンは結論付けた。

「うん、私の術だつてばね。今度はなににしたかわかるつてばね？」

シャナの左目の瞳術。こちらも右目と同じタイプであり時間を進める能力である大年神<sup>わおとしかみ</sup>。進められるのは、視界で20秒以上捉えた相手の行動のみと狭い範囲であり、相手がどのような動きをするかあらかじめ分かっているなければ、ノーモーションで相手の攻撃をくらうこともある禁術。

正確には、目で見た相手の10秒〜1分後の動きや位置、状態を、今と入れ替える術である。術の発動前に発動し、発動後の未来と入れ替える事で術の発動を不発にさせたり、相手の行動を先読みし、敵が術を解除したタイミングを取り寄せる事が出来る。

ただ、位置や状態を入れ替えているだけなので、術が実際に発動したわけではないのでチャクラなどは入れ替える前と変わらない。

だが時間制限のある術やオンオフする系統の術には、これ以上ない切り札になる。こちらにも莫大なチャクラ消費が必要であり、多発はできない。さらにこれまでのうちの歴史でこの術を扱えたものはない。不遇な術として記録に残されているほどだった。

あまりに相手任せであり、相手の未来を読むことが出来なければ、抜群のタイミングで発動が出来ないからだ。



だが先見の写輪眼を持つシヤナだけが、正しく瞳術を扱える存在となつた。

余裕そうに振舞うシヤナだが、ジゲンは自分より強いのは間違いない。そして、万華鏡の瞳術を連続で使わされ、チャクラの残りが少なくなっているのも事実。

（今度はなんだ？ 時を加速でもさせたのか、私の時間だけを、いや、飛ばしたのか）

ジゲンは答えにたどり着いていた。だが、辿り着いたからこそ、シヤナという存在と自分の相性の悪さを思い知らされている。物を小さくすれば時間を戻され、自分を小さくすれば、元のサイズに戻る瞬間まで時間を飛ばされる。

これほど相性の悪い相手はいないだろう。

そして、大筒木一族と思わしき青年。少しづつだがジゲンの動きに対応し始め、少名毘古那の能力も正しく理解し始めている。

そしてなにより、ジゲンを追い詰めているのは、残り時間だ。

彼には戦闘に制限時間があり、ことごとく能力を無力化するシヤナと潜在能力の高いトネリ。この二人を倒し切る時間がもうなかったのだ。

元より、ある事情で全力の10パーセントも引き出せない状況下で相性最悪の相手と、憎き女の子孫であり大筒木一族の青年と耐久勝負など勝ち目はないだろう。

明らかに遊びすぎたと猛省しながら、何か策がない物かと考える。当初の予定は赤ん坊の奪取だ。そういえば、赤ん坊を何処へやったのか。そう考えた時、この戦場で唯一攻撃が向いていない方向がある。（仕方ない。こいつらは、あの赤ん坊を庇うだろう。そうすればこの解毒剤で交渉すれば、応じる他ない）

何も無い空間から猛毒の棘を取り出したジゲン。彼は、再び少名毘古那を使い小さくなりながら、高速で空を飛ぶ。狙うは、奴らが匿っている赤ん坊がいる場所だった。

「まさか！」

「まさか！」

ジゲンの突然の逃走にも見える行動。すぐさま意図を理解した二人は走り出す。それが罠であるとも知らずに。

## 温泉街事件 4

ジゲンは、シヤナ達が意識して攻撃をむけなかった森へと辿りつき、そこに安置されていた赤ん坊を見つける。

「やはり、ここに」

二人の攻撃頻度の最も少ない場所から割り出したのだが、それはドンプシヤだったらしい。ジゲンは、特製の毒を内蔵した黒い杭を構える。

それを赤ん坊に向けるより先に粒遁で加速したシヤナが立ち塞がる。ジゲンの攻撃から赤ちゃんを守るように、背で庇う。

（お前なら、そうすると思ったよ）

ジゲンは端から赤ん坊に攻撃するつもりはない。生意気な小娘であるシヤナなら、赤ん坊を狙えば身を挺して守ると踏んでいた。だからこそその行動。ジゲンは黒い棒をシヤナの背中に突き刺すべく、掌から射出。完全にシヤナの背中を捉えた。

（この毒はチャクラの流れを狂わせ、全身の筋肉を麻痺させる猛毒。2分もあれば肺や心臓が止まる代物だ。お前が時間を戻せたところで、その術には繊細なチャクラコントロールが必要なはず、なら、これで終わりだ）

ジゲンの放った黒い毒の杭は、赤ん坊を庇ったシヤナの背中、ではなく、更にそのシヤナを庇ったトネリの腹部に突き刺さった。腹を貫かれたトネリだが、シヤナ達に刺さらないように両腕で杭を止めた。

だが刺さった瞬間に猛毒がトネリを襲い、口から血を流しながら膝をつく。

多少の毒物くらいなら耐えきる自信があったトネリだが、この毒はまずいらしい。チャクラが掻き乱され、全身の経絡系を通りチャクラが細胞を自己破壊しているようだった。

「ぐく、がは」

「トネリ。お前なんで、私を庇ったんだってばね」

自分を身を挺して庇ってくれたトネリに駆け寄るシヤナ。その様子を見ていたジゲンは少し意外そうな表情をしていた。

シヤナが毒を食らうと思っており、大筒木一族のトネリが身を挺するとは一切考えていなかった。

だが、予定に変わりはない。

「その杭は特別製でな。刺さったものに猛毒を流す。今そいつは自分のチャクラに全身の細胞を破壊されているんだ。いくらお前でもチャクラを練れなければ、時間は戻せまい。それを見抜いてか、そいつが身代わりになったのだろう」

「トネリ……何の毒だつてばね！」

シヤナが威嚇するように睨めば、ジゲンは懐から青い液体の入った小瓶を取り出す。

「毒については言うつもりはない。だが、取引を提案しよう。だからそうだな、その忌々しい写輪眼を解除してもらおうか」

「駄目、だ、シヤナ、ゆだんしたら」

「まだ話せるのか。流石に頑丈だな。だが、お前の命は持つて後、2分。それまでにこの解毒薬を飲まねば死ぬ」

「ち」

「卑怯とは言わないでくれよ。これも大義の為だ」

ジゲンの言葉に、シヤナは躊躇しながらも万華鏡写輪眼を解除する。紫の瞳になったシヤナを見て。ジゲンは掌の小瓶を見せびらかしながら、シヤナに取引を持ち掛けた。

トネリは何とか立ち上がりとするが、全身の激痛とチャクラの暴走で、意識が飛びそうになる。

「まあいい。これでフェアな取引が出来るというものだ。何難しい事ではない。いたってシンプルだ。その赤ん坊とこの解毒薬を交換だ」

「ふざけるなつてばね！」

非人道的過ぎる取引。ようは、トネリの命を取るか赤ん坊の命を取るかという選択肢を迫られる。

「ふざけてはいない。悔しいが今の俺ではお前を殺せない。だからこそそのフェアな取引だ。俺自身お前と二度と関わりたくないと思わない、だから偽の解毒剤なんかを渡し、変な恨みを買うのもごめんだ」

「この子が欲しいだけで、悪意はないと？」

シャナの問いにうなづくジゲン。だがトネリに残された時間は短く、猶予はほとんどない。そして、ジゲンの言葉は彼の本音だった。全力が出せない上に、能力の相性が今生最悪の敵とあえて戦う趣味はない。

「好きだけ悩めばいい。だが時間は多くない。それに余計な手出しをすれば、解毒剤は、なしだ」

ジゲンの機嫌次第で少名昆虫古那により解毒剤の入った瓶は、消えてしまっただろう。シャナの御年神の発動も一度万華鏡写輪眼を解除したことで使えない。唯一出来るのは、未来視による選択肢の結末を見る事だ。

だが不思議と赤ん坊を渡す選択肢はない。ここでこの子を見捨てれば、シャナはなりたくもない木ノ葉の大人たちのようになってしまふと思つたからだ。

あんな下種になって生きるなら死んでしまった方がましだ。だがトネリを見捨てるのも人の道に反している気がした。

「後、30秒もないぞ」

時間があまりに足りない。こんな理不尽な状況になるとシャナは、何もかも投げ捨てて目の前の男を殺したい欲求が沸き起こる。赤ん坊もトネリも無視し、不愉快極まりない存在を踏み潰したくなる。シャナの中に宿るうちはの血による病か、父と母が死んだ際の心の傷か、ナルトを奪われた際の憎しみか、その正体はわからないが、シャナの中にいつまでも渦巻く黒い感情が顔を出し始める。

いつもはその感情が出た時、必死に振り切ろうとする。何故なら大切なものを失ってしまうから。

けれど今はどうだろう。見ず知らずの赤ん坊と、昨日会ったばかりのトネリ。優先度は限りなく低いのではないか。見捨てようが巻き添えにしようがシャナの生活に影響はない。

可笑しい言い訳が頭の中に流れる。それを否定しなければシャナの心は流されてしまう。なのにシャナの考えを否定する材料がない。

黒い衝動に突き動かされるように、シャナは手に抱いた赤ん坊をその場で手放しそうになる。必殺の一撃をジゲンに叩きこむ。そのこ

とだけが頭の中にめぐる。シャナの目が据わり始め、その目が写輪眼に変化しかける。

(何もかもどうでもよくなかったか。意外ともろいな)

掛かってくるというなら、相手せざるを得ない。面倒なことに変わりなく、残された時間でシャナ一人なら打倒できるかは微妙という状況ではあるが。

赤ん坊を投げ捨て、ジゲンに襲い掛かりかけたシャナ。だがふと彼女の視線の先に、ふわふわと浮かぶしゃぼん玉が映り込む。

その緑に輝く優しい光にシャナのどす黒い感情が引いていく。そして、意識がはつきりとしたシャナは、赤ちゃんを落とさないよう抱きなおし、ジゲンから距離を取るように後ろに飛んだ。

「ほう、逃走を選んだか。なら、この解毒薬は二度と手に入らない」

シャナの理性が勝った結果、赤ん坊の命だけでも守るという行動を見て、ジゲンは残念だと言いながら掌の上にある解毒薬の入った小瓶を少名毘古那で縮小しようとする。

シャナに自分の選択の愚かさを見せつけようとした瞬間、まさにその隙を見逃さなかったのは、トネリだった。

「金輪転生爆」

「くそが、この死にぞこないが」

完全なる不意打ち。瀕死のトネリが命を燃やして発動した術。トネリの特異なチャクラが金色のチャクラ刀となってジゲンの手首から先を切断した。

どうせ助からないなら足掻いてやろうというトネリの意地が、ジゲンに一矢報いた瞬間だった。腕を切り落とされたジゲンは激昂し、トネリを睨み付け、止めを刺そうとする。

この不意打ちをトネリはあらかじめシャナにシャボン玉のチャクラ球で伝えていた。シャナの意識を闇から救った光は、トネリの仕込んだ幻術の一種であり、彼の言葉を伝えたのだった。

右腕を斬り落とされ、頭に血の上ったジゲンは、残った左腕から黒い棒を生やし、トネリの心臓を貫こうとしていた。

(僕もただでは殺されない)

残り10秒。暴れまわるチャクラ以外の残った全てのチャクラをカウンターの金輪転生爆に向ける。刺し違えてでもこの、自分と同じ大筒木一族の男を仕留める。その覚悟で迎え撃つトネリ。

「トネリ。お前は私が助けるってばね」

逃げたはずのシヤナ。それが一人で舞い戻っていた。正しくは、シヤナが影分身を使い、赤ん坊とトネリの両方を救う道を選んだ。何故なら、シヤナの未来視では、どうあってもトネリの反撃という未来はなかった。

なのに、トネリは赤ん坊を救い、トネリ自身を救う未来を切り開いた。シヤナに準備する時間を与えた。

(また、見つけたってばね。運命を変える人)

これまでの、ナルト、八雲に続く三人目の未来視の結末を変えた人間。

そんな人間を簡単に殺される訳にはいかない。赤ん坊は、影分身が安全な場所に移動させた。ならばジゲンを倒し、トネリを救うのみ。

とはいえ、シヤナのチャクラも残り少ない。粒遁・螺旋輪虞も決定打にならない。ではどうするか。

「トネリ。借りるってばね」

シヤナは、トネリがシヤナにメッセージを伝えた泡遁のチャクラ球をつかみ取り、それを螺旋輪虞の要領でシヤナのチャクラを混ぜ込みながら高速回転させる。

頭が沸騰する寸前までシミュレーションした未来視で唯一完成した新術。ぶくぶくと膨張を繰り返す泡遁のチャクラ球が完成する。緑色に光り輝く球体をシヤナは、ジゲン相手にぶつける。

「くらえー！ 泡遁・螺旋輪檻！」

背後からの奇襲攻撃。それをまともに受けたジゲン。

反射的に少名毘古那で体を縮小することで攻撃を受け流そうとしたジゲン。だが、気が付けば彼の体は緑に輝く謎の空間に囚われていた。

「なんだこっちは？」

ジゲンは、自分を包み込む緑の空間の壁を殴りつける。だが高密度でザラザラとした強固な壁に弾かれる。何が起きたかわからないジゲンだったが。ようやく自分が結界のような術に囚われていると気が付いた。

「まずい、元のサイズに戻らねば、いや、待て」

ジゲンのパワーでも簡単に脱出できないシャボン玉の檻。元のサイズに戻ろうにも、檻が破壊できなければジゲンの体が圧力で潰れてしまう。そして、檻を小さくしようにも、少名毘古那を使えば、ジゲンを取り囲もう檻全てが縮小し、やがて彼を押しつぶしてしまうだろう。

さらに、空間そのものが高速回転を始め、ざらざらの鑢のような壁が少しづつ縮小してくる。

土壇場でジゲンを無力化する術を完成させたシャナ。彼女はジゲンの切り落とされた右腕の傍に有った解毒薬を回収し、宙に浮いている緑の光を放つ新術、泡遁・螺旋輪檻を見つめる。

これはシャナの持つ術では珍しい封印術。泡遁の膜で取り込んだ相手は、強固な壁に閉じ込められ、シャナの螺旋輪虞のエネルギーを伴った内壁によって最終的に削り潰される。

「ふざけるなあ!!!」

泡遁・螺旋輪檻の中で大暴れするジゲン。彼の力なら脱出も十分可能だろう。だが、それを許しはしないのが、トネリだった。

「金輪転生爆!」

「おのれえ!!」

小さなシャボン玉に囚われ、逃げ場のない彼に対して文字通り決死の金輪転生爆を放った。回避不可能の状態で、トネリの大地すら穿つ威力のチャクラ刀を受けたジゲン。必死に抵抗するも、木っ端みじんに消し飛んでしまった。

「ふ、終わった、ね」

「トネリ!」

毒が回りきり、地面に倒れ伏しそうになった彼をスライディングで駆け付けたシャナが支える。



## 温泉街事件5

力尽き、倒れそうになったトネリを受け止めたシヤナ。

既に解毒剤を手に入れていたこともあり、すぐにそれを飲ませようとしていた。

だが、トネリが口を開かず、薬を飲んでくれない。それどころか吐血し、口から血を流している。

「トネリ、早く飲まないと死ぬってばね」

「……」

もはや、口を開く力すらないのかもしれない。シヤナは写輪眼でトネリの様子を確認したが、既に意識はなく、心臓の鼓動も弱まり、肺は機能を失いかけている。

神経毒とチャクラを暴走させる毒の複合毒。その効果は恐ろしく、トネリの命を刻一刻と蝕んでいる。心音が小さくなっており、トネリに無理やり薬を飲ませようとするも、飲んでくれない。

「飲むんだってばね！ トネリ」

必死になるシヤナだが、トネリの体温が徐々に下がっていく。こんなときどうすればいいか、そう考えたシヤナは、自分で解毒薬を飲む。そして、トネリの唇に自分の唇を重ねた。

これしか方法がなかったため、咄嗟に取った行動。そして、トネリに口移しで解毒薬を与える。そうしてようやく薬を飲み込めたトネリ。だがすぐに回復はしないのか量が足りないのか、目覚めない。

「死なせないってばね」

口移しの際、口に入った血を拭いながら、シヤナは再びトネリを救おうとする。

再び薬を口に含み、口移しで飲ませていくシヤナ。シヤナの心が闇に飲み込まれた際、トネリのチャクラ球から与えられたのは、不意打ちを行う合図と彼の遺言だった。

『君とは昨日出会ったばかりだけど、君との時間は僕の人生にとってかけがえのない時間だったと思う。』

もつと君と話をしたかった。

この気持ちがおかしくないが、君が危ないと思った時、既に体が動いていたんだ。この男は僕の命をかけて連れていく。だから、安心してくれ。

シヤナ、君の未来に、月の光が共にあらんことを。』

そう伝え、相打ち覚悟でジゲンに術を発動したトネリ。そんなメツセージを聞かされ、見捨てる選択肢が消えてしまったシヤナ。なんて馬鹿な男だろうと思いつつも、彼の作戦を利用する形でジゲンに勝利した。

男というものは意地っ張りだと知っているつもりだったが、死に際まで格好をつけるとは思わなかった。

だが格好つけたなら最後まで格好つけておけと思った。

一日しか共に行動していかないが、シヤナは彼を認めていた。性格的には、紳士然として物腰が柔らかいが、人の気持ちの分からないトネリ。一方、自分の気持ちや考えを口に出すことを厭わないシヤナ。お互いに会話しているうちに、トネリは自分とは全く違う考えを持つ女の子という存在を認識する。

シヤナも自分の話を真剣に聞いてくれ、質問してくるトネリをかわいいとすら思い始めていた。

同い年の男の子と一日中過ごすという経験はシヤナにはない。唯一仲のいい男子がトルネだが、トルネとは違ったタイプのトネリは、話しやすい。

トルネの事が嫌いな訳ではない。良き仲間であり、良き理解者であるが、大人っぽいトルネといると、シヤナは自分の子供っぽさが浮き出てくるのだ。それで叱られるのだ。八雲もどちらかという姉さん位置であり、二人に叱られることも多い。

けれど、トネリは何と言うか、自由にさせてくれる雰囲気心地いい。無関心かと言えばそうではなく、意識は向けてくれるが、シヤナのやりたいことを察してくれているのだろうか。わからなければ聞いてきて、それを素直に答えられるテンポがいいのだろうか。

人間として、好意的に捉えられたトネリ。シヤナは自分の好きなものや人は何があっても守る。

(死なないでくれってばね)

「ん、ん？」

何度目かの口移しを行っていると、トネリが目を覚ました。少しづつ解毒薬が効いて行き、意識が覚醒したのだった。だが体中に力が入らず、シヤナも彼が起きたことに気が付かずに口移しを行っていた。

突然迫るシヤナの潤んだ魅惑的な唇が自分の唇に当てられ、何が起きているのかわからなかったトネリ。だが口に感じる柔らかさやシヤナの香りを意識すると、顔が真っ赤に燃え上がりそうになる。

「しゃ、しゃな！」

「あ、トネリ。目が覚めたってばね！」

自分が何をしているのか知ったトネリは顔を真っ赤にしながら「離れて」と告げる。トネリの解毒が間に合った事に喜んだシヤナの抱擁を受けたトネリ。

よかったと笑うシヤナに対して、トネリは酷く困惑しており、事態の収束まで少しの時間を有したのだった。

トネリの蘇生から1時間後。シヤナはトネリの体を支えながら温泉街に戻ろうとしていた。

「それで、あの子のお母さんは無事だったんだね？」

「うん。影分身が山小屋を探して、捕まってる人を見つけたの。後は、病院に赤ちゃんと一緒に送り届けたってばね」

やることはやったのだと胸を張るシヤナ。

「君はすごいね。あと少しだけ離れて貰えると」

「なんで顔真っ赤なんだってばね」

それは君のせいだよと言いたかったトネリ。間違いなくトネリは、シヤナを意識してしまった。特に最後の口移しは、決定打となった。

異性どころか人間すら父親以外ほとんど関わったことのないトネリに、シヤナの口付けは刺激的すぎた。

自分にこんな一面があると思わなかったトネリは、酷くうろたえていた。

「本当にごめんね。人質にされた挙げ句、その、きみの、その」

「ハッキリ言うってばね」

この子は、やっぱり滅茶苦茶だと思いながら、トネリはシャナの耳元に口を近づけボソツと言葉を発した。

「え、チュー？ え、わたしが？ 私チューなんてした覚えが……あ」  
トネリの言葉を聞いて、シャナが少し顔を赤くする。いくらシャナでもキスくらいは知っている。それを酷く恥ずかしく感じる程度の羞恥心もある。

あれは口移しであり、口付けではないと否定するシャナ。父と母のキスを見てしまい、母からキスは本当に好きな相手にだけしなさいと教えられたことを思い出した。

「ノーカンだつてばね」

「そうだね。そうしよう……あ、シャナ。ごめん、どうやら父さんの部下に見つかったらしい」

シャナの照れる表情を見ていたトネリだったが、父親の差し向けた傀儡達の気配を感じ、シャナとのお別れが来たのだと察した。

「じゃ帰るのかつてばね」

「うん。心配もさせてしまったしね。一度帰らなくてはいけない」

もつと話や術の修行をしたかったシャナ。だが彼が帰るといいうなら仕方ないのだろう。どこか遠いところから来たというトネリ。

次会うことは可能かもわからない。そんなシャナの顔を心眼で見つめて、トネリはシャナの手を取った。

「もし僕がまた、この地に訪れたとき、また会って貰えるかい？」

「うん。また会いたいってばね」

そんな質問をされたシャナは、鮮やかな月の光ようにはにかんだ。その姿を見たトネリは、彼女の顔を目で見てみたいという思いにかられ、片膝についてシャナの手に口付けをした。

「なら、これを受け取ってほしい」

トネリに口付けをされた手を見て呆然と立ち尽くすシャナに、彼は懐から取り出した小さな勾玉のような宝石をあしらったブレスレットを着けた。

右手にブレスレットをもらったシャナは首をかしげる。

「それは、僕がこの地に降りる際に、光るんだ。すぐには無理かもしれないけれど、それが光つたら月に向けてほしい」

そうすれば僕はまた君に会えるからと告げたトネリ。再び会う約束を取り付けたトネリは、シヤナから離れ、森にいるという家族の元へと帰った。

シヤナは、月の光に反射するブレスレットを見ながら、「綺麗だつてばね」と上機嫌に宿へと帰ったのだった。

また会える約束を信じて。

――

自分を迎えに来た傀儡達に囲まれたトネリ。

「あの地上人の記憶を消さなければなりません」

上級格の傀儡がトネリが地上にいた記憶を消すと進言するも、トネリはその手をつかんで止める。

「問題ない。彼女と約束をしたんだ。それを忘れられたくはない」

「なりません。大筒木一族の最後の直系であるあなたの情報は、地上人に」

あくまで命令の遂行を目指す傀儡をチャクラで吹き飛ばしたトネリ。

「今は気分が良いんだ。だから一度は許そう。だが二度目はない。彼女は、僕の大切な人だ。手を出すな」

その命令に逆らえない傀儡達は、本来の使命である記憶の消去を取り止め、トネリと共に月へと戻っていった。

（いつか、君を迎えに来られたらいいのに。まずは父さんの説得かな。必ず、また会おうシヤナ）

月に住む大筒木一族のトネリは、月へと帰ったのだった。

――

温泉街から遙か離れた他国の洞窟内で、息切れをした男が横たわっていた。

それはシヤナとトネリが倒したジゲンという男そのもの。彼は生きていた。それも無傷で。

「心象転写の術。便利ではあるが、力が全く出せない。だからあの二

人に遅れをとるのだ」

シヤナ達と戦っていたのは、生け贄を用いて自分の姿と能力を転写する術で作られた体だった。

便利な術だが欠点も多く、チャクラの消費が激しい上に使用時間の制限、性能の低下など数多くある失敗忍術だった。

シヤナとトネリは強かったが発展途上。全力のジゲンなら勝てていたはず。だが強すぎる縛りの中で敗北を喫した。

なによりあのシヤナとか言う小娘の能力は厄介極まりなかった。

組織の長であるジゲンにタオルを渡し、赤ん坊はどうするのか尋ねる部下。

「もうあの赤ん坊は諦めた。元より適合率は低い。あのうちのは小娘が出てくるのでは、割に合わない」

心底シヤナのことが嫌いになったジゲン。少なくとも全力を出せるまでは、近寄らないことを心に決めていた。

温泉街の事件は、これで幕を閉じたのだった。

## 中忍選抜試験 本戦前

シヤナがトネリと共にジゲンと戦っていた時、木ノ葉の里では、祖父が倒れたと聞いて帰ってきた八雲が疲れて眠っていた。幸いに病気ではなく、階段で突然ふらついて転げ落ちたというのが真相だったらしい。

自室で眠る八雲。その無防備な彼女を闇討ちしようとして潜んでいる忍が居た。

（あなたに恨みはありませんが、僕が大蛇丸に捨て駒ではないと示すためには、対戦相手を減らさなくてはいけないんです）

その人物は音隠れの忍、ドス・キヌタだった。彼は自分たちが大蛇丸の捨て駒だと理解するなり、その復讐を兼ねて大蛇丸の計画をめちゃめちゃにするつもりだった。

そのためには、彼に自分の力を見せつける必要があり、優勝は出来なくとも勝ち上がる必要がある。だが、自分の実力では全力で戦っても2戦目はきつい。だからライバルを減らそうという考えに及んだのだが、第一試合の相手である八雲が里を離れており、彼女を呼び戻すために、彼女の家族を襲撃。

眠らせるつもりだったが、思ったよりも大ごとになるも、結果的に八雲が里に戻ってきたのは幸い。さらにドスが恐れるシヤナは里を離れている好機。

「命を奪うつもりはありませんが、本戦は辞退してもらいましょう」

音による攻撃は、文字通り証拠を残さない暗殺に最適。不意打ちとなれば何人たりとも避けられない。第四班の幻術姫と呼ばれる八雲だが、幻術使いは総じて直接戦闘に弱い。

直接戦闘の面に関しては、他の二人よりも劣る。

だからこそ、この作戦を実行したのだが、彼の唯一の過失は、シヤナの能力を知らない事だろう。

満月の夜に襲撃を決意し、姿を現した時、彼の背後に音もなくうずまきシヤナが現れる。

「それは聞けない相談だつてばね」

「なに!?…なぜあなたが」

いるはずのない人物。その人物が背後に現れ、ドスは心底恐怖しながら後ずさる。非常にまずい状況下で、彼は自分の死を理解してしまった。

なぜ彼女が此処にいるのかはどうでもいい。自分が彼女の仲間を攻撃するというタブーを目撃してしまった。逃げようとした瞬間、回り込んだシヤナの膝蹴りを食らい、武器である音を増幅する忍具を粒遁のチャクラ刀で破壊される。

「とりあえず、動くな」

「っ、つよい」

瞬く間に無力化され、仰向けに倒れたドスを踏みつけるシヤナ。腕を組みながら青い写輪眼が夜の闇の中で目立っている。

「実力差は、はつきりしていた。絶望的なほど。」

「なんでこんなことしたってばね」

「それは、……」

青い写輪眼に睨まれ、嘘は通用しないと理解した。観念したドスは、自分の目的をシヤナに話した。シヤナは何も言わずにそれを聞いていたが、彼が話し終わるとシヤナは踏みつけていた足を退かした。

「お前の事情は分かった。けど、八雲の邪魔をするのは許さない」

「は、はい。申し訳ありません。本戦は責任を取って辞退させて」

「駄目だってばね」

「え」

本戦は辞退するというアイデアを拒否される。

「八雲は、今回の中忍試験に真剣に取り組んでるってばね。あの子の邪魔をするのも許さないし、試合の回数が減るのも好ましくない。だから、お前はいらぬことを考えず、修行でもしてろってばね」

ドスが下手に暗躍すると、中忍試験が中断されるまたは、延期される可能性がある。そんなのはごめんだと言うシヤナ。そして、正々堂々戦うのなら、ドスが八雲たちに勝っても文句は言わないと告げる。

試合に挑み負けるのは八雲が悪いのだ。けれど、その試合の邪魔す



らするのなら、ここで殺すと告げる。

自分はお前の行動を終始見張っていると告げるシヤナ。自分の目論見が甘すぎたと後悔するドスだが、この場を見逃してもらえらう言葉に、疑問を覚える。

「どうして、見逃してくれるんですか？」

「気まぐれと、八雲の試合の為」

そう言ったシヤナは、ドスが頭を下げた立ち去ろうとした瞬間、彼の腕を掴んで止める。

「な、なんですか」

「お前、今日泊ってる部屋に帰ったら死ぬってばね」

「は？」

「試合までは身を隠すことをお勧めするってばね。信じないのは自由だけど、賢明なお前ならどうするかはわかるってばね？」

突然意味不明な事を口にするシヤナ。だけど、シヤナの表情は至極真面目であり、妄言とも言い切れない。なにより、シヤナのような人間が他里の忍相手に冗談を口にするとも思えない。

彼の生存本能と長年の勘がその言葉を受け入れる道を選んだ。

「わかりました。恩に着ます」

そう言いながら、その場を離れていったドス。その姿を見送ったシヤナは、自室で何事も知らずに眠る八雲の姿を見た後、影分身である自分を解除した。目的は果たした。

丁度、シヤナがジゲンを倒し終えたタイミングで八雲の安全を伝えられたのだった。

その後、翌日になってからドスが音の下忍三人で借りた部屋に向かえば、部屋には誰もおらず、嫌な予感を感じた彼は、シヤナの言う通り本戦まで姿を隠すことになった。

そして、数日後、温泉を満喫したシヤナは、木ノ葉に戻るなり八雲の家を訪ね、彼女の部屋に招かれていた。

こじんまりとした部屋にテーブルがあり、其処にお茶と渡したお土産のお菓子を並べてもらう。

これまで何回も来た部屋なので、特に緊張などはない。家を訪ねるなり足を怪我しただけで無事だった八雲の祖父に挨拶し、八雲の部屋でくつろぐシヤナ。

「本当にごめんねシヤナ」

「気にしないでいいってばね。それなりに楽しめたから、感謝してるってばね」

実際かなりシヤナなりに楽しい旅行となっていた。ジゲンとの戦闘の緊張感など、彼女の戦闘意欲を刺激するよい切欠だった。ただ今度八雲と一緒に最後まで楽しめたらいいなと思っていた。

「あれ、シヤナそんなブレスレットしてたっけ？」

シヤナがお茶を飲んでみると、八雲がシヤナのしているブレスレットに気が付く。装飾品は基本つけないシヤナが付いているのが珍しく尋ねる。

シヤナは、なんて説明しようかと悩んだが「温泉街で知り合った男の子にもらった」と素直に告げる。

「ふーん、そうなん……え？ シヤナ、なんて言った？」

「八雲が帰った後ね、理由があつて男の子と一緒に行動してて、最後にこれ貰ったんだってばね」

八雲は、ものすごく心配しながら「ナンパされたの？ え、対策は教えたよね？ それ貰っただけ？ 他に何かされたりしてない？」と肩を掴みながらシヤナに問い詰める。

すごい力でゆすられるシヤナは、必死に言葉を選びながら説明していく。

赤ちゃんの事やその子を狙う犯人がおり、そいつと戦ったことなどを。相手の強さについては、一切告げない。絶対怒られると思ったからだ。ただ、トネリはすごく強く、優しく、話しやすかったと、説明していく。

「それで、その子にブレスレットを貰ったと？」

「うん。また会う約束したってばね」

そこまで聞いた八雲は頭を悩ませる。

予想をはるかに超えてロマンチックな事態に巻き込まれており、相

手の男の子の反応から、シヤナを女性として意識してるのは明白。赤ちゃんを保護したり、シヤナと一緒に行動していたことから、悪い人ではないと思う。だがシヤナの恋愛関係の情緒は本当に幼い。

このままでいいのかと保護者目線から考えている八雲。

そんな八雲にシヤナが爆弾発言を追加する。

「何かされた訳じゃないけど、その、結果的に自分からチューはしたつてばね」

「……………え？」

シヤナの発言を頭で理解するのに10秒ほど有した八雲。シヤナの表情を見れば少し照れているのか赤くなっている。なんとというか、甘酸っぱい雰囲気を感じ取った八雲は、その後、悲鳴のような大声を上げる事になった。

「ええええええええええ!!!」

「うるさー」

シヤナのキス発言に、再び八雲は肩を掴んで揺すり始める。三半規管にダメージを負いそうなシヤナ。その後、根掘り葉掘り事情を説明させられたシヤナ。

シヤナの説明を聞いて、治療行為だと理解はしたが、おそらく相手の男性はそうとは思っていない。むしろ、嫁にでも迎えに来そうな様子だと思った。

そして、シヤナも治療行為だとは思っていない。三歳児だったシヤナに春が来ている。間違いなく。思春期に足を踏み入れたのだ。だから少し恥ずかしいのだろう。

その成長を喜ぶべきか、本能で行動しているシヤナに保険体育を教えるべきか悩む八雲。そして何より、八雲の心を掻き乱したのが。

(シヤナに追い抜かれた！)

まだファーストキスの経験のない八雲。まさか、シヤナに追い抜かれるとは思っていなかった。今まで、シヤナの心配をし続けていた八雲だが、恋愛面ではシヤナの方が一步も二歩もリードしてしまった。その事実にも苦しみ悶える。

馬鹿にしていたわけではないが、謎の危機感にかられる。

自分はトルネに対する告白もまだなのに。むしろトルネにどう思われているかもわかっていない。

「シャナ、今度大切なことをお勉強しようね」

とりあえずシヨックは忘れて、シャナのレベルアップに全力を注ぐと決めた。そして、今度会うというなら絶対に相手を見極めようと決めていた。

「今度その人と会うなら、紹介してね」

「うん。わかったってばね」

男性からもらった装飾品を大切そうにしているシャナの様子から、シャナもまんざらではないと感じ取った。特にシャナが強いと評価する時点で、相当腕が立つのだろう。

強い相手が好きなシャナにはぴったりだろう。今度紹介してもらった時に、考えようと後回しにした。八雲に口を出す権利はないが、親友として相手を知りたいと思うのも当然なのだ。

「それで、シャナは残りの期間どうするの？」

「特に予定ないってばね。あ、でも新術の開発はしたいってばね」

「また？ シャナ本当に術開発するの得意だよね」

「真似してるだけだってばね。八雲も修業するんだってばね？」

「うん。けど、内容は内緒かな。でも本戦で当たったら、私はシャナを倒すつもりだよ」

シャナを倒すと宣言する八雲。シャナもその言葉通りに受け取る。

八雲と本気の戦闘もひどく楽しそうだと感じた。八雲との全力の勝負は実に胸が躍りそうだと微笑む。

負けるつもりは一切ないが、退屈するような余裕はないだろう。それがいい。

「本戦、楽しみだってばね」

「お互い頑張らなきゃね」

二人は、その後木ノ葉の里をぶらつきながら解散。そして、時が流れ、中忍選抜試験の本戦が開催される日になった。

## 中忍選抜試験 本戦

いよいよ中忍選抜試験の本戦当日。

木ノ葉の里で開かれる大規模なイベントには、各国の大名や忍、観光客なども集まり、非常に盛況な状態となっていた。

ただし、里の中に他国の人間が溢れかえると言うことで、警備の面では非常にデリケートな状態となり、現場はピリピリしていた。

観客たちは、会場に足を進めながら今日の本戦の内容について会話をしている者たちがほとんどだった。

今年は粒ぞろいということで、本戦の内容を予想した賭け事も行われており、その予想が非常に難しいとギャンブラー達にとっても興味深い催しとなっていた。

今年は誰が勝ち残るか、そんな話が里中で起こっていた。特に有名な人となった第四班のメンバーは、人気が高く、砂漠の我愛羅率いる砂の忍達も人気が高い。

だが、観客たちが一番見たいと思ってきたのが、うずまきシヤナとうちはサスケの対戦だった。うちは一族の名は、一族が滅んだ後も色褪せることなく人々の評価に残っており、その生き残り2人の対戦という、一生に一度しかないような対戦は、観客たちの期待を大いに高める。

天才と言われる、うちはサスケと元うちは一族であり、青い閃光と呼ばれるシヤナの対戦は、それだけで人気が高い。

そして、本戦開始前に会場にたどり着いたシヤナ。先にたどり着いていたトルネと八雲と遭遇。そして、第四班の隊長であるヤマトも3人を見送りに来ていた。

「あ、ヤマト」

「いい加減、隊長つてよんでくれないかな。まあいいや。三人共、今日は頑張るんだよ。僕は任務で試合が見れないけれど、君たち三人なら必ず合格できると確信してる」

かなり時間的にギリギリだがヤマトは三人の晴れの舞台に足を運びたかったのだ。

「はい。頑張りますヤマト隊長」

「うん。八雲、待ちに待った舞台だからね、悔いのない戦いを」

頷いただけのトルネと「優勝するってばね」と勝利宣言をするシャナ。二人の様子を見て安心したヤマトは任務に向かってしまう。

「トルネ久しぶりだったってばね」

「そうだな。ほとんど一月ぶりか」

シャナはトルネに話しかける。

「また強くなったってばね？」

シャナは写輪眼でトルネの姿を観察する。全体的にチャクラの流れがスムーズであり、体格も少し良く、身長も伸びているようだ。なにより体術型のトルネの身体能力の向上は、全体的なステータスの上昇を意味する。

実際トルネもほとんど山籠もりのような修行で、自分の腕を磨いていた。

何故なら自分と同じスタイルのリーが、シャナにはかなわなかった事実。それが彼に更なる精進を決意させた。

「当然だ。お前や八雲に、俺は後れを取るつもりはない」

「楽しみだってばね」

「シャナ。私たちはまず第一試合を勝たないと当たらないよ？ それにサスケ君との試合なんだから。油断したら、負けちゃうかもよ」

「天地がひっくり返ってもありえないってばね」

自分の弟子とはいえ、あんまりではないかと思うが、おそらく彼女の予想通りなのだろう。油断しているわけでもなく、ただ事実を述べている。

超実力主義のシャナらしい回答。

ただ、シャナの様子から全く期待してない訳ではなく、サスケの成長を心から望んでいる様子だった。

「時間だってばね」

「行くか」

「うん。二人とも、絶対に負けないからね」

八雲の珍しい挑発にトルネは、「自信満々だな」と答え、シャナは

「ま、期待してらるってばね」と挑発し返す。なんやかんやで相性のいい第四班は、待ちに待った中忍試験本戦へと進んだのだった。

試合会場にたどり着いたシャナは、歓声で沸く観客を無視して他の参加者たちを眺める。

その中にはドスがおり、シャナを見るなり深く頭を下げてきた。そして我愛羅は、戦いたくてうずうずしているのか、少し興奮気味にも見えた。

そして、木ノ葉のルーキーたちもそろい踏みであり、ナルトに向かって手を振るシャナ。シャナに気が付いたナルトは、口を尖らせながら、明後日の方向を見る。

「な、ナルト」

弟に無視されたことで膝から崩れそうになるシャナ。慌てて八雲とトルネに腕を掴まれ、起こされる。こんな晴れの舞台で何をやるのかと小言を食らう羽目になる。

どうにか立ち直ったシャナだが、弟子であるサスケが居ないことに誰より先に気が付いていた。

「サスケ君いないね」

「謎」

なぜ来ていないのか。あの子の性格なら逃げるなんてことはない。なのに、何かあったのではと、不安がよぎる。サスケを狙っている人間、大蛇丸が居る以上、可能性がないわけではない。

だが、10日に一回見た未来視では、サスケの表情からそんな様子は見受けられなかった。

さすがに詳細はわからず安否の確認だけしか出来ないが、無事ではあったはず。

（探しに行った方がいいってばね？）

シャナやナルト達がおろおろしていると、本戦の試験官である不知火ゲンマが注意を促す。

「おろおろすんな。しっかりと胸を張ってその顔を、客に見せ付けよ。この本戦、お前らが主役だ」

ナルトは、罵倒や侮蔑の目以外で、大勢の人間の注目を集めるのは初めてだった。今日この場に限りナルトを見る目は、九尾の化け狐ではなく、中忍試験本戦まで勝ち進んだ忍に対するものだった。

そのことに胸を熱くしたナルト。

そして、シャナは全く違う受け捉え方をしていた。

(まるで見世物だってばね。反吐が出る。こいつらの生活の為に、ナルトやお父さんお母さんが犠牲になったと思うと、やりきれないってばね)

木ノ葉の人間に対する感情は、似ているようでいて正反対な姉弟。弟は、木ノ葉の住人に認められたいという思いを持つ中、姉の方は、恨みの対象としか見ていない。シャナの裏切られに裏切られ、翻弄され続けたが故に出来た心の傷は、決して癒えないものだ。

かつてダンゾウが危惧していたように、シャナの実力が向上するほど里に対する脅威となるリスクも増大しているのは事実だった。

彼女を木ノ葉に繋ぎ止めているのは、弟の存在と僅かながらにも強固な仲間達の絆のみ。里に対する思いやりや、忠誠心は皆無。

そして彼女の恨みの根源ともいえる木ノ葉の上層部。そのトップである火影を睨む。

火影と風影に用意された特等席にて、三代目火影は試合会場に並ぶ忍達を眺めていた。そして、自分を睨み付けるシャナの視線に気が付いた。

「火影様を睨むなど、少し注意してきます」

火影の護衛についている上忍の並足ライドウは、火影の護衛役ということもあり神経を張り巡らせていた。そして火影に殺気を向ける存在が、本戦出場者のシャナだと気が付き、注意しに行こうとしたが、煙管をふかしている三代目に止められる。

「止さんか。それに、あの子の恨みは当然の事。儂はシャナの恨みは甘んじて受け入れるというておろう」

確かに三代目は護衛達にそう報告していた。それだけのことをしたのだ。木ノ葉を守るためという大義名分を笠に、少女の心を引き裂



いてしまった。

実際に手を出すわけではない。その程度の理性はある。なら思う存分、感情をぶつける対象になってやらねば、シヤナは本当に爆発してしまうだろう。

(すまんな四代目。こんなことくらいしかしてやれんで)

シヤナの殺気を肌に浴びていると、ようやく砂隠れの長、風影が到着する。

「これはこれは風影殿」

火影として同盟国の長である風影を迎え入れた三代目。その後、中忍試験を始めるにあたって、うちはサスケの不在が取り上げられたが、予定通りに進め時間に間に合わなければ、失格にすると言った。

そして、いよいよ中忍選抜試験が開催された。ルールは予選と同じ、何方かが負けを認めるか死ぬまで。そして審判が勝敗の宣言をするまで。

「それでは、第一試合。うずまきナルトと日向ネジ以外は、下がれ」

審判の指示に従い、参加者たちがぞろぞろと試合会場から離れ、天才、日向ネジと元落ちこぼれ、うずまきナルトの対戦が今始まったのだった。

## 中忍選抜試験 本戦2

うずまきナルトと日向ネジの対戦が始まる。シヤナは知らないが実は、ナルトにとってこの戦いは死んでも負けたくない試合。

予選にて、日向ネジは、従妹である日向ヒナタに対して、精神的に追い込みを掛けながら、彼女を瀕死にまで追い込んだ。才能という絶対的な運命を盾に、ヒナタを苦しめ続けた。

ナルトは倒れていったヒナタの努力と意地に誓い、日向ネジを必ず倒すと宣言していた。

「何か言いたそうだな」

「前にも言ったろう。ぜってー勝つー!」

ナルトの宣言に、ネジは柔拳の構えを取りながら、白眼を発動する。そして、ナルトの目を見て自分を信じ切った目だと認識。

ナルトはネジに勝つつもりでいる。それは間違いない。だがネジとて、うずまきナルトに負けるつもりは微塵もない。彼を倒し、その後には控える対戦相手を倒さなくてはいけないのだから。

才能は、絶対だ。過去に敗れたのはネジの能力が未発達だったから。今の自分なら第四班の人間にだって負けはしない。その自信があった。

ネジを破れるのは、それこそネジ以上の才能を持った奴らだからこそだ。少なくとも、悪くはないが、落ちこぼれだったナルトに負けることなどない。

「そうこなくてはな。その自信に満ちた目が、どう変わるのか楽しみだ」

「ごちやごちやいってねえで、始めようぜ」

ナルトの声と共に、試合開始の合図が出され、ナルトは影分身の印を結ぶ。

30人近い数の影分身を繰り出したナルト。その瞬間会場中が、大いに興奮の渦に包まれる。影分身は上忍クラスの術であり、それを下忍のナルトが使いこなし尋常でない数を出したことで、木ノ葉の忍達も驚いている。

「ほう、影分身とは考えたな」

影分身は本体と同じ分身を作る術。故に白眼の能力をもつてしても本体を見極めることはできない。そして本体でなければ、柔拳は効果がなく、術の阻害も意味をなさない。

「二「俺を舐めんなんてばよ！」二」

30人近い影分身と共に、ナルトはネジに向かって攻撃を仕掛けた。

だがナルトの攻撃は、効果がなかったのだった。一斉に襲い掛かったナルト達だった。何人かの攻撃を回避し、体捌きで往なすがとても処理しきれなくなったネジ。そこで、彼は全身のチャクラ穴からチャクラを放出しながら体を高速回転させることで、ドーム状の高速回転するチャクラの盾、日向一族に伝わる秘伝の奥義・八卦掌回天を披露。その防御力はまさに鉄壁であり、ナルトの影分身を全て消し去る。そして、影分身が全滅させられ、本体であるナルトの渾身の拳も回天によって弾かれ、大きな隙を晒してしまう。

「んな」

「お前はあの女の弟らしいが、予想通りの出来損ないだな」

体勢を崩されたナルトに急接近したネジ。ナルトは影分身を追加しようとするも、既にネジの距離となっていた。

「柔拳法・八卦六十四掌!!」

ネジはナルトに対して全身の点穴について、チャクラを一切練れなくする日向一族の奥義を食らわせる。ネジの技を受けたナルトは、吹っ飛び地面に倒れる。どうにか、生来の頑丈さでもって立ち上がるがチャクラが一切練れず、絶体絶命に追い込まれる。

既に勝負あったと見たネジは、ナルトを見下しながら、「降参しろ」と伝える。

「これでわかっただろう。お前は火影になんてなれない」

「急になんだったばよ」

「この目があると分かってしまうんだ。その人間の素質というやつが。いいか、火影というのは一握りの才能に選ばれた者だけがなれる

ものだ。誰しものが努力すれば成れるというものではない」

ネジはさらに続ける。これ以上ナルトに攻撃するつもりはないのか、ナルトの心を折ろうとしている。

「それが運命というものだ。お前だって本当は理解しているし、身に染みてわかつたはずだ。越えられないものがあると。落ちこぼれは、所詮落ちこぼれ。人は決して変わりはない」

だからもう諦めろと。決して超えられない才能の壁が立ちふさがり。それに無理に挑む必要はないともとれる言葉。それはナルトというよりも自分に言い聞かせているように聞こえたナルト。

「だからもうやめておけ、お前に恨みはない」

「うるせー、俺にはあるんだってばよ」

才能の壁。そんなものはわかってる。ナルトだって自分が才能ある忍だとは思っていない。天才のサスケや、それを上回るかに上回る姉。そんな人間達と一緒に過ごして、才能の壁を感じないわけがない。

そのたびに劣等感が襲い、必死に追いつがるも二人はどんどん離れていってしまう。誰よりもナルトはそれを理解しているだからこそ努力した。

「逆に聞くけど、何でお前はそんなにつえーのに、全部見透かすような目をして、あんなに頑張ってるヒナタを精神的に追い込むような真似をした！」

ナルトの怒りはそこだった。実力で倒されるなら仕方ない。だがネジはあえて不必要なまでにヒナタを精神的に追い詰めた。

「お前には関係のない話だ」

「ヒナタを馬鹿にして、落ちこぼれだと馬鹿にして、宗家だか何だかしんねえけどな。人を落ちこぼれ呼ばわりするくそ野郎は俺がぜってえ許さねえ」

ナルトからすれば到底許せるはずもない。その言葉を聞いて、ネジは渋々ながら日向一族の恨みの歴史を語り始めた。

日向一族の宗家と分家の格差。宗家により刻まれた呪印は、まさに呪いであり、鳥籠。自由などなくただ宗家のために生きていくしかない

い運命。そしてその運命により、父親が犠牲となった過去。それらを話しながらどれほど宗家を恨んでいるかを語る。

真に運命に翻弄されるものであるネジ。その言葉を聞いてナルトは、彼に対する認識を改めさせられた。

「わかっただろう。運命には抗えない。大人しく負けを認める。お前の傷だって軽い訳じゃない」

「いいや、お前には、絶対に負けねえ。自分の言ったことは曲げねえ。それが俺の忍道だ」

「聞いた事のある言葉だな」

「お前みたいな運命なんだの、そんな逃げ腰野郎に、負けねえ」

ナルトの強情さにネジが冷静さを欠いて、柔拳で攻撃を繰り返す。胴体に一発貫つたナルトは、内臓へのダメージで吐血する。そして地面に倒れ、ネジがこれで終わりだと立ち去ろうとした時、再び意地だけで立ち上がる。

「お前は、わからないのか。人間には生まれた時から避けられない運命というものが存在することを」

これ以上やれば死ぬだろう。だから最後の警告のつもりだった。チャクラも練れず、ダメージもひどい。正直立ってるのがやつとのナルト。頭を巡らせように、才能の壁という強大な敵を前に、どうすればいいかわからない。

諦めたくない。その思いがあるのに今一步踏み出せない現状。だが、観客席で自分を見守っているシャナが目に入る。

シャナは声を出さずに、口だけ動かして彼に言葉を伝えた。

『それだけなの？』

明らかに侮蔑の目だった。興味などないと言わんばかりの目。非常に冷たい目がナルトに向けられる。だがナルトには彼女の真意が読み取れた。

シャナはこう言っているのだ。そいつを倒して、自分の所に来いと。さもなければナルトは一生その立ち位置から動けはしないと。

このタイミングで応援でなく、発破をかけるあたり、実に姉らしいと感じた。けど折れかけていたナルトの心に火がともる。

「お前の言うこと、わかるってばよ」

「なら」

「んで、それが、なに？ カツコつけんじゃねえよ。お前だけ特別じゃねえんだ。ヒナタだってお前と同じように苦しんでたんだってばよ。宗家なのに認められない自分を必死に変えようとして、血反吐を吐きながらお前と戦ったんだ。」

お前だつてそうだ。宗家を守る分家が、試験だからってヒナタをあんなにしてお前だつて運命に抗おうと必死だつたんだろ」

運命に翻弄されたのが自分だけだと思ふな。逃れられない運命にナルトはいつだつて抗つてきた。運命という言葉で全部諦めてしまふネジには、やっぱり負けたくない。

（化け狐。力を貸しやがれ!!）

チャクラが練れないなら、ある所から持つてくればいい。ナルトは、印を結びながらチャクラを引き出そうと足掻く。その様子を見たネジが「馬鹿か」と侮辱するがそんな言葉を気にしている暇はない。

ナルトは何度も九尾に話しかけながら、必死にチャクラをひねり出そうとする。

【いいだろう】

ナルトの声に九尾が答えた。その瞬間、堰き止められていたナルトの経絡系に暴力的なチャクラが流れ込み、点穴をこじ開ける。突然チャクラが巡り始めるさまを白眼で観察していたネジは、ナルトの体にめぐる生きていようなチャクラに驚愕する。

本来ならあり得ないことに、普段冷静なネジは、慄いていた。

「なんだ、お前は」

全身から赤いチャクラを迸らせ、それが九尾の尾の形を取り始める。そのオーラのようなチャクラを纏うナルトは、チャクラだけで周囲に風を巻き起こし、ネジに向かって拳を突き出す。

「いくぞー！」

（なんだあれは、あれがチャクラなのか）

見たこともない力。その力を前に、ネジは最大限の警戒を露にする。そして、ナルトが今まで以上の速度で横に駆け出し、ネジに手裏

剣で攻撃を仕掛けた。

観戦場所でナルトの様子を見ていたシヤナは、ナルトの体中にめぐるチャクラを見て、その表情を凍らせていた。

「シヤナ、血が出てるよ」

「おい、どうした」

シヤナが無言でナルトを見ている際、手すりを握っていた手に力が入り、握りつぶすほどの握力が発揮されていた。それはシヤナの恨みと憎しみの表れであり、制御できない感情の暴走で握りつぶした手すりの破片で出血していた。

八雲の言葉に気が付いたトルネがシヤナの手を手すりから離そうとするが、外れない。

「シヤナ。どうしたの。トルネ君」

「わかってる」

多少力づくでシヤナの腕を解放したトルネ。シヤナは、ナルトを殺してしまいそうな目で睨みながら、二人の戦いを見届けている。

シヤナの豹変に、八雲はとんでもない気配を察知。すぐにシヤナの目を手でふさぎ、彼女を落ち着かせるために、観戦室の奥に連れていく。

「シヤナ。歯ぐきからも血がでてる。お願い落ち着いて」

「……なんで、封印が弱まった？ いや、ちがう、なんで、何で、あの力を、ナルトが自分から、……」

シヤナはナルトが九尾の力に手を出したことに戦慄していた。そして、すぐにでも封印しようと考えたが、ナルトが自分の意志でそれを引き出したことに、彼女の価値観が大きく揺らいでしまった。

今まで九尾に触れることなく育ててきたはずなのに、ナルトは九尾を認識し、チャクラを引き出すことに成功している。

なぜだ。

誰かが教えなくては、そんなこと思いつくはずがない。ナルトが両親を殺した化け狐の仲間になったようで、シヤナの中の大切な弟が憎き仇に染まっっていくような感覚を感じる。

シヤナの勝手な感情ではあるが、シヤナにとっては明確な裏切りだった。

中忍試験など関係ないと、ナルトをすぐに半殺しにしてしまいそうになった。九尾なのかナルトなのかわからなくなり始めた。九尾や仮面の男に対する感情をシヤナ自身も甘く見ていた。

九尾のチャクラを見ただけで、大切なものが無価値に変わりかけ、破壊したい衝動に襲われた。自分はやはり狂っていると思った。トルネと八雲が引き離してくれなければ、何をしていたかわからない。

「まさか、自来也……あいつか」

最近ナルトの修行を見ていたのは、ゲコ仙人こと自来也。彼がナルトに九尾の力を引き出すことを教えたというなら納得がいく。そして同時に、シヤナを裏切った裏切りものだと言うことになる。

黒い感情が止まらなくなり始めた時、八雲が優しくシヤナを抱きしめる。八雲の胸に包まれ、景色が一変し花畑のような場所が変わる。八雲の温もりと花の香りに、シヤナの意識は少しだけ穏やかになり始める。

「何があつたかわからないけど、落ち着いてシヤナ。ここには敵はいない、シヤナの味方だけだから」  
「うう」

「シヤナにとつてはとても大変なことがあつたんだよね。それはわかつたから、ゆっくり深呼吸しよう」

八雲に促され、深呼吸をするシヤナの目からは涙が流れていた。ぐすぐすなくシヤナを決して警戒させないように落ち着かせる八雲と、誰も入ってこれないように入り口を見張るトルネ。

不安定になり始めたシヤナを支える二人の存在こそが、シヤナにとつての切つても切れない絆だった。

シヤナ達が席を外した後、ナルトは、九尾のチャクラで身体強化を施し、高速移動でネジを翻弄する。そして、ネジに対して40人近い影分身を披露。

「化け物が」



チャクラを封じたのにチャクラを扱い、あろうことか強くなる存在相手にネジは、八卦掌回天での防御を選択する。だがナルトの影分身は先程よりも攻撃力が上がっているのか一発一発が重く、ネジを苦戦させる。

だが影分身の攻撃をしのぎ切れればナルトと言えどもチャクラ切れはするはず。その思いから回天を続けるネジに対して、ナルトは影分身たちに風遁・旋風玉を作らせる。九尾のチャクラで強化された赤い旋風玉を構えて、次々と特攻していく。

「無駄だ。俺の回天は、絶対に破れん」

「ああ。お前の回天は、やぶれねえ。けどな、その回転そのものを止めたらどうなんだってばよ!!」

ナルトの影分身たちが次々に旋風玉をぶつけて消えていくうちに、ネジの回天の速度が急激に落ち始めた。

(まさか)

「旋風玉はお前を倒す技じゃなくて、逆回転でお前の回転を止めるよ。うなんだってばよ!!」

影分身によって速度を落とされ始めるネジ。旋風玉の回転は、八卦掌回天の回転とは逆方向であり、それらが衝突することで八卦掌回天が止められる。

その隙を見逃さず本体であるナルトがクナイを持って突撃する。

「日向の憎しみの運命だか何だかしんねえがな！ お前が無理だっていうならもう何もしくなくていい。俺が火影になってから、日向を変えてやるよ!!」

「うおおお！」

ナルトの一撃に、意地でチャクラを放出しながら迎え撃ったネジ。二人のチャクラのぶつかり合いは大爆発を起こし、二人とも吹き飛ばされる。

「ぐぐぐ」

吹き飛ばされたネジは、どうにか起き上がる事が出来たが、ナルトは地面に突っ伏して動かない。直接ぶつかったナルトより、回天が少し残っていたネジの方がダメージが軽かったのだ。とはいえ、ネジも

満身創痍で白眼も解除されていた。

どうにか立ち上がったネジは、動かなくなったナルトを見下ろしながら、感想を述べた。

「悪いがこれが現実だ。お前はよくやったがな」

そう言った時。ネジの足元の地面が割れ、中からナルトの拳が飛び出してきた。ナルトは影分身を地上に残し、本体は穴を掘ってネジの足元に移動。そのままアツパーを繰り出すことでネジを完全にノックアウトした。顎に一撃を貰ったことで、動けなくなったネジを逆に見下ろすナルト。

全身ズタボロになりながらも、ナルトはあきらめなかった。

「からだか」

一歩も動けなくなったネジ。自分が負けたことを実感した。

「影分身か、お前の得意忍術だったのに、油断した」

勝ったと思い込み、完全に警戒を解いたところを狙われた。決してあきらめない奴だと分かっていたのに、もう諦めたのだろうかと自分の基準で相手を評価してしまった。

「俺ってば、アカデミーの卒業試験に落ちてるんだ。何故なら卒業試験の内容が、俺の一番苦手な分身の術だったからだ。

運命がどうかか、変われねえとか、そんなつまんねえ事めそめそ言ってるんじゃないねえ。お前は俺と違って天才なんだから」

ナルトはすでに何度も運命を乗り越えている。諦めない意思こそが運命を変える切欠だと知っているから。

「勝者、うずまきナルト」

勝利宣言されたナルトは、観客たちの労いの声援を聞き、今まで一度も味わったことのない感情に笑いながら、Vサインを返していた。

## 中忍選抜試験 本戦3

ナルトとネジの戦いは、大いに盛り上がり非常にやりにくい状況の中で、ドスは試合会場に立っていた。

形だけの仲間だった二人と結局会うことはできず、人知れず身を隠していた彼だが、会場の中に大蛇丸がいる事は予想していた。

安否はわからないが、シヤナの言うことを素直に聞いておいて正解だというのは、理解できた。

そのことに恩を感じないほど、彼は無礼な人間ではない。同時に自分を裏切り使い捨ての駒にした大蛇丸に対する憎しみは本物だった。

今回の試合相手は、鞍馬八雲。幻術使いの忍で、その腕前は見事という他ない。他の面は伸び悩んでいるが、幻術のスキルの面では、木ノ葉一といっても差し支えない。

そんな彼女だが確かに、来ていたはずなのに、姿が見えない。先程まで姿を見たのだが、第一試合を見ているうちに見失ってしまった。なにやらシヤナと騒いでいたのは聞こえていたが、よく見るとシヤナやトルネもその場にいなかった。

会場も選手が出てこないことで困惑している様子だった。

「すみませんー！」

少し遅れるようにして八雲が走って駆け付け、遅れたことを審判に詫びていた。

そして、ようやく試合が開始されようとしていた。

「試合前に聞きたいのですが、写輪眼の方は、なにかあったんですか？」

「え？ あゝ。大丈夫だよ。よろしくね」

音隠れの人間がシヤナの身の心配をすることに違和感を覚えたが、悪意のある声色ではなく純粹に心配しているようで八雲は無事を知らせる。実際シヤナは落ち着きを取り戻し、平静を取り戻していた。少し一人にしてほしいと言うので、試合が迫っていた八雲は、彼女の言葉を聞いたのだ。

そして、試合開始の合図が出されるなり、二人はおのれの武器をそ

れぞれかまえる。ドスは、シヤナに壊された後新調した音響忍具を構え、目を瞑る。そして、目を瞑ったドスの姿に指輪を引き抜こうとしていた八雲の手が止まる。

「あ、そういうことか」

「ええ。僕は音だけであなたの位置や動きがすべて把握できる。僕の耳は特殊でしてね。幻術使いのあなたと戦うにあたって、僕は視覚に頼らない。そして」

幻術使いの八雲に対して、目を瞑ることはある意味効果的だ。幻覚に位置する幻術は、主に相手に対して幻を見せる事で幻惑する。だがそれを封じられれば、音や別の感覚に向けた幻術を使うしかない。その段階で幻術使いの手札は数多く減らされることになる。

さらにドスは、自分の音響忍具を指で弾き、自分の全身に微弱な音波を流し始める。

「これは、幻術返し之音版です。これで音による幻術は僕に効かない。行きます」

視覚と聴覚による幻術を防いだドスは、八雲の心音目掛けて走り始める。八雲は指輪を外して炎の幻術を見せるも、ドスはそれを無視して突っ込んでくる。ドスと八雲ではドスの方が動きが早く、瞬く間に距離を詰めてくる。

だが途中で立ち止まる。すぐさま本命の幻術を発動しようとしていた八雲が固まる。

「え」

「僕だつて期間中何もしなかったわけじゃない。僕は木ノ葉中に潜みながら、音による情報収集を欠かさなかった。そして、あなたの五感を操る幻術の事は調査済みです。距離を取れば問題ない」

幻術使いの弱点は接近戦だと言われるが、八雲にはそれは当てはまらない。だがドスはあらかじめ行った情報収集にて、弱点を探っていた。

対策をきっちり行い、八雲を相手に勝ちに来ている。そして音の中心距離攻撃を八雲に行うことで、勝負をつけに来た。

(もらった！)

ドスが音響忍具を弾こうとした瞬間、彼の耳に八雲が印を結んでいくような音が聞こえる。ここにきて忍術かと警戒するが、音の方が早いと高を括るドス。

「迅遁・先駆。鋼遁・金剛」

音で八雲の位置を察知していたドスは、彼女の心音を見失う。そんな筈があるかと自分の耳を頼りに八雲の意図を探そうとした瞬間、彼の腹部に衝撃が走る。

「が」

たまらず目を開けたドスの視界に映ったのは、鋭い蹴りを自身にお見舞いしている八雲の姿だった。信じられず幻術かと思った矢先、八雲は目にも留まらぬ速さで動きながら、ドスに体術を叩き込んでいく。僅か数秒の間に何発も、女性とは思えない鈍器のような拳と蹴りを貰い続けたドス。

リサーチには一切なかった八雲の体術。動きはお粗末なものだが、速さと手足の硬度からくる打撃は、ドスに反撃を許さない。

当然驚いていたのは、ドスだけでなく、会場にいた木ノ葉の忍たち全員である。

衝動を抑え込み、平静に戻ったシャナとそれに付き添っていたトルネも、八雲の動きを見て困惑していた。

会場中が驚いている中で、八雲はドスの顎を蹴り上げた。その動きはまるで、表蓮華の初期動作であり、力はないが、その速さでもって彼の顎を砕かんばかりの威力となり、彼の意識を完全に刈り取った。

ドスが抵抗すらできずに、体術のみで圧倒され、審判が動かなくなったドスと両手両足が黒く染まっていた八雲を見る。幻術使いとばかり聞いていた少女の動きにゲンマの判断も遅れる。だが唯一理解できるのがこの光景が幻術ではないと言ふことだろう。

審判が勝利宣言をしてくれず、両手両足が通常の肌の色に戻った八雲は、恐る恐るクナイを構えて、攻撃した方がいいのかとゲンマを伺う。

「勝者、鞍馬八雲」

「よかつた〜」

会場がドン引きした試合。幻術姫と呼ばれる八雲の幻術を使わな  
い強引な戦闘にやや空気がおかしいことになっていった。

八雲は、会場の人々に頭を下げながら、観戦室へと戻っていった。

上から八雲の試合を見ていたシヤナとトルネは、八雲の術を見たこ  
とがあった。

「シヤナ。お前は見えたか？」

「ぼつちり見たってばね。待って、八雲がなんであの術を？」

「あの事件以降、感知タイプになっただけかと思っていたが、どうやら  
隠し玉を持っていたようだな。それも、とんでもないものを」

トルネは額から汗を流していた。八雲が使用した術と印は、間違い  
なく卑留呼の取り込んでいた血継限界そのもの。卑留呼より遥かに  
精度は落ちているようだが、それでも見間違えるはずがない。

どうやら、卑留呼に取り込まれかけた八雲は、少なからず卑留呼の  
スキルを宿すことになったようだ。

八雲の試合前の自信に溢れた態度は、この隠し玉があつてのものだ  
ろう。だが、二人にとっては頭を抱える内容となっている。

八雲の幻術を食らわなかったために、速攻勝負を考えていたのに、八雲  
は速度についてこられる。これは厄介なことこの上ない。

「あ、二人とも、私、試合勝利したよ」

「おめでどう八雲。とんでもない手札を隠し持っていたな」

「うん。二人が考えてそうな事はわかるからね。二人との試合まで内  
緒にしとこうと思ってたんだけど、あの音隠れの人、徹底的に対策し  
てきたからつい」

文字通り二人を倒して、優勝する気だった八雲。手の内を明かさ  
ず、切り札にするつもりだったらしい。だがシヤナだけは八雲の体を  
心配して、彼女の姿を写輪眼で観察している。

「体は大丈夫なの？」

「大丈夫って言っても、シヤナは誤魔化せないか。私もこれが出来  
るって知ったのは、最近なんだ。それで当然、リスクもあるよ」

現に八雲は、今凄く体調が悪い。元々持っていなかった血継限界を使っている代償なのか、チャクラの消費量も桁外れであるし、なにより持続時間が10秒ほどなのだ。

だが、そんなリスクを負ってでもシヤナやトルネの横に並べる事がうれしく、修行を積んだ。八雲にとつてのライバルとは二人の事だったから。

「けど、私に手加減はいらないよ。正面から叩き潰してあげるから」  
二人が八雲の体調を気にして手を抜いたら、絶対に許さないと脅す八雲。もとより手加減をする余裕はなく、二人とも目を見合わせて頷くしかない。

その後、カンウロウ vs 油女シノの試合は、カンクロウが辞退したことで不戦勝となり、八雲の対戦相手がシノとなる。

そして、シヤナとサスケの試合が繰り上がってきたが、サスケはまだ会場に到着しておらず、本来なら失格という扱いになるはずだったのだが、風影や観戦客たちの圧に負けた火影が順番を一試合だけずらすと宣言。

そして、奈良シカマルとテマリの対戦が行われる。

結果は、巧みな戦術を駆使したシカマルが勝利目前まで迫るも、ギブアップするというまさかの結果に終わる。

シヤナからすれば、非常に興味深い分析と戦略タイプの忍だったのだ、戦いたかったのだが、彼曰く「勝ってもこの後化け物しかいねえ」とギブアップしてしまった。

そして、いよいよシヤナの試合の番が回ってきた。名前を呼ばれたシヤナが試合会場に出向いていくと、そのタイミングを待っていたとばかりにサスケとカカシが登場。

「いやー遅れてすいません」

カカシが審判や観客に謝罪し、遅れてきたサスケを見たナルトが会場まで下りてきて、サスケに「おせーってばよサスケ」と口にした。ポロボロだが、澆瀨としたナルトの表情を見たサスケは「その面、勝ったのか」と尋ねる。

「もちろん」

ナルトはそう答えた。サスケもナルトが日向ネジに勝てると思っ  
ていなかったのか、素直に「やるな」と答える。そして、サスケはシャ  
ナを写輪眼で睨み付ける。サスケの対戦相手は、シャナであり、ナル  
トはサスケの肩に手を置きながら、最大限の激励を送った。

「ぜってー、勝って、上がってこいってばよ」

「ああ。待つてろ、ウスラトシカチ」

そう言いながら、ライバルとの対戦を宣言する。だがサスケにとつ  
ては、この試合こそが最大の関門。下忍最強であり、自分の師。うず  
まきシャナとの試合なのだから。

ナルトが観戦室に戻っていきなり、シャナはナルトが応援してくれ  
ないことに目を伏せながらも、サスケを青い写輪眼で睨む。

「震えて、怖いのかってばね？ 棄権するなら、今のうちが良いってば  
ね」

「ほぎげ。これは武者震いだ。ようやく、この場に立てた。お前を超  
えて、俺は、一人前になれる」

師を超える戦い。修行ではなく明確な敵としての争い。怖さより  
も期待がサスケの心を満たしていく。会場も、うちは一族、写輪眼同  
士の世紀の対戦に、ヒートアップし、サスケとシャナのコールが始ま  
る。

「舞台は整った。いくぞ、シャナ！」

「胸を貸してやるってばね。出し惜しみなく、全部出し切れってばね」

試合開始の合図がなされ、二人の忍は、ぶつかり合うのだった。



## 中忍選抜試験 本戦4

試合開始と同時に、シヤナとサスケは互いに虎の印を結び同じ術を発動する。

「火遁・豪火球の術！」

両者ともに口から火球を吐き出し、会場の中心で衝突させる。その火力に会場が熱気に包まれるが、牽制でしかない術。

二人は同時に、手裏剣とクナイを投げて攻撃を仕掛ける。うちには伝わる手裏剣術を用いた争いであり、手裏剣を弾いての反射や、ワイヤーでの操作術など、縦横無尽な手裏剣術で会場を魅了していく。

だが、両者ともに手裏剣では決着がつかないと思ったのか新たに印を結び始める。

「粒遁・天輪」

「雷遁・蒼鷹」おわたか

シヤナは最初から決めるつもりで粒子砲を頭上に生成。その狙いをサスケに定め次第発射する用意をしている。一方、掌から雷遁のチャクラを迸らせるサスケ。そのチャクラはサスケの腕に止まる青い鷹のような姿を取り、サスケの「行け」という指示に従い、猛スピードでシヤナに向かって飛翔する。

雷の速度で飛んでくる雷の鷹を迎撃しようと、シヤナが天輪を発射するが、シヤナの攻撃を見切ったとばかりに回避し、接近してくる鷹。「そういうことか」

迫りくる鷹を跳んで回避したシヤナ。まっすぐ進んでいたサスケの術だが、よく見れば雷遁のチャクラがサスケの腕から伸びており、それを操作することで遠隔を可能としている。遠隔操作された雷遁の鷹は、次から次にシヤナを追い詰めようと飛び交ってくる。

「粒遁・天翔」

体捌きで攻撃を避けながら、サスケとの距離を詰めるべく、粒子と成って加速する。その速度は雷遁の鷹を置きざりにし、サスケとの距離を詰め、同時に展開したチャクラ刀を振り下ろそうとした。シヤナ

の纏っていた粒子が散り、彼女の姿があらわになった時。

(見えてるのが、お前だけだと思ふな)

写輪眼を持つサスケは、シヤナの動きを完璧に洞察していた。

サスケの渾身のカウンターが、シヤナを捉え、彼女の体を宙に蹴り上げた。シヤナの動きを完全に見切ったサスケの一撃を食らったシヤナは、空中で体勢を立て直し、軽やかに地面に降り立つ。

そして、彼女の目の前に、サスケの一撃で外れてしまった額にあったゴーグルが落ちる。そして、オレンジのレンズ部分が砕ける。

サスケの一撃は、惜しくもシヤナの額当て代わりにゴーグルのみを蹴り上げていた。だが、間違いなくシヤナは、サスケの一撃を貰ってしまった。

自分の足元に落ち、割れてしまったお気に入りのゴーグル。オビトの真似をしてつけていたそれが割られてしまった。だが不思議と、シヤナの顔に浮かぶのは笑みだった。悲しい気持ちもあり、強者である自分が一撃を貰ったことが、屈辱でもあった。

だが何よりも、胸に満ちるのは期待と、喜びだろう。

「何を呆けてる。俺の力は、ここからだ」

ゴーグルを眺めていたシヤナを不審に思うも、サスケは、重りを外した際のロック・リーに匹敵する速度で走り出した。その驚異的な速度で、相手を翻弄する。さらに雷遁の鷹も繰り出しており、シヤナの逃げ道を無くす。

ここで決めると超高速体術と雷遁のコンビネーション攻撃を仕掛けたサスケ。どういう訳かシヤナは動かない。サスケの写輪眼は、シヤナが動いていないのは幻術でないのも見えており、既に回避も間に合わないことを察した。

遂に届いた。その思いから全速力でシヤナに接近する。

「うちはサスケ。次の段階を見せてやるってばね」

シヤナがそう口にした瞬間、サスケの目の前にいたシヤナが忽然として消え、サスケは首筋に猛烈な衝撃を受け、地面に倒れる。

サスケはシヤナが消えたとしか認識できていない。だが、サスケの背後に突然現れたシヤナを狙い、雷遁の鷹が迫りくる。その一撃さえ

当たればいいと思った矢先。

シヤナの手元が見えなくなり、雷遁の鷹がかき消された。サスケの写輪眼でも追えない腕の動きであり、僅かにシヤナのチャクラが活発になった痕跡だけが見えた。

だがシヤナの傍で倒れている状況がまずいと察した彼は、すぐにその場を離れようとしたがシヤナの蹴りを受けて、サスケの体は会場の壁に叩きつけられる。

叩きつけられながらも、シヤナから一切目を離さないサスケ。だが、サスケの写輪眼では、視認できない速度でシヤナは印を結んでいた。

雷遁の弾丸と、風遁の刃がサスケを襲う。サスケは壁を登ることでその攻撃を回避する。

「印が見えない」

しかし、写輪眼の力をもつてしても見えない領域を見せつけられ、シヤナの忍術のレベルの高さが解らなくなる。シヤナは体術と幻術も使えるが、一番得意なのは何をおいても忍術である。

「こんなので心折れてくれるなつてばね」

興に乗ったシヤナ。弟子であるサスケの予想外の成長を前に、抑えていた実力を披露してもいいと判断した。そして、次から次に、会場の壁を駆け抜けるサスケを狙い、風遁、火遁、雷遁の術が発射されていく。チャクラ消費の少ない簡単な術だが、明らかに出が早すぎるため、ガトリングの機銃掃射に追い掛け回されるサスケ。

今まで見てきたシヤナの戦い方に、こんな無茶苦茶なものはない。明らかに隠していたのだろう。

一方的なシヤナの攻撃に、会場中は言葉を失い、静まり返っていた。1分ほど、逃げ回っていたサスケだったが、ついにスタミナが切れ、攻撃をくらってしまう。一発食らっただけで、次から次に発射される忍術の弾丸を受け続け、爆炎に包まれるサスケ。

サスケの姿が見えなくなり、術の発動を止めたシヤナ。

「サスケエエ!!」

「サスケ君!!」

観戦席でナルトとサクラがサスケの名を呼ぶ。誰もがサスケが死んだと思っていた。

「声がでかいんだよ。ウストラトンカチ！」

しかし、サスケは死んではいなかった。術を食らう瞬間、自分のチャクラを最大限左腕に込め、はたけカカシのオリジナル忍術である千鳥を発動し、そのエネルギーでシャナの牽制の忍術を防いでいた。

そして、千鳥の稲妻を迸らせ、爆煙を払ったサスケは、シャナへの最短距離を、足の裏のチャクラの反発も利用した過去最高速度で接近する。

雷の性質変化を凝縮し、高速で相手に叩きこむ一点特化の突き。単純が故に、高威力のその術は、サスケがこの一月の間に学んだ必殺技だった。壁や床を削りながらシャナに一撃を見舞おうと加速する。

対するシャナは、右手に小型の粒遁・螺旋輪虞を発動。サスケの千鳥を正面から迎え撃つ用意をしていた。二人の距離が2mほどに迫った時、両者は自分の術を相手に振るった。

「千鳥!!」

「螺旋輪虞」

千鳥と螺旋輪虞が激突。互いに相手を破壊しようとするエネルギー同士がぶつかり合い。数秒間拮抗していたが、シャナとサスケの体が同時に吹き飛ばされる。最大威力の千鳥はシャナの螺旋輪虞と完全に相打ちの形で消え去り、衝撃波で吹き飛ばされ地面に横たわるサスケ。

対して、吹き飛ばされながらも体勢を立て直し、倒れているサスケを見下ろすシャナ。勝敗は決したと言えるが、シャナも無傷ではない。

「カカシの術か。正直、威力を測り違えたってばね」

シャナは螺旋輪虞の威力をもつてしても防げなかった千鳥によって、右手が僅かに裂かれ、出血していた。ポタポタと流れる血。サスケの成長度合いが面白く、冷静さを欠いた結果が傷を負うことなら、甘んじて受けるしかない、痛む右手を眺める。

必死に立ち上がろうと足掻くサスケだが、術の使い過ぎによるスタ

ミナの枯渴が、彼を立ち上がらせる事が出来ない。

「勝者、うずまきシヤナ」

意地だけで立ち上がるうとしたサスケ。だが、地面に突っ伏してしまふ。その姿を見た審判が、シヤナの勝利を宣言した。

うちは同士の戦いは、シヤナの勝利に終わったのだった。

## 木ノ葉崩し

シヤナとサスケの試合はシヤナが勝利をおさめたが、会場はシヤナの能力に絶句していた。

木ノ葉の忍達は、改めて、うちの力の片鱗を知り、シヤナの戦い方を見ていた三代目火影や、審判のゲンマ、はたけカカシなど、四代目火影と関係の深い人間は、サスケの背後を取ったシヤナの粒遁・天門を見た時、彼女の父であるミナトの姿と重なって見えた。

試合に集中していた風影も、試合内容に非常に興味津々といった様子だった。

試合を見ていた三代目火影も思わず体を乗り出して、見ていた。(あれは、二代目様とミナトの術か。誰から教わったわけでもなく、自力で辿り着いたのか)

シヤナの使う螺旋丸のような術、実際に螺旋丸を見よう見まねで構成した螺旋輪虞と飛雷針の術のシヤナ版である天門など、ミナトと同じ戦い方をするシヤナ。

木ノ葉の人間は誰もシヤナに術を教えていない。そんな中で15歳の少女が、四代目火影と同じ術を編み出したという事実は、忍の才に愛されたという表現では足りないだろう。

試合を終え、負けたサスケは自分の足で起き上がり、観戦場に向かっていった。シヤナはサスケに言葉をかけようにも、かえってあの子を傷付けるだけだと、無視を決めた。

勝者が敗者を慰めることほど、屈辱はないだろうから。

「ぶっ」

観戦室に戻ったシヤナは、トルネと八雲の視線にVサインで答えた。

シヤナの試合が終わり、残った我愛羅とトルネの試合が行われる。

「おい、お前、大丈夫か？」

審判が試合会場に訪れた我愛羅の様子を見てそんな言葉を口にする。トルネから見ても様子が変で、何かぶつぶつと呻いているかと思うと、試合開始の合図を待たずに砂を纏い始める。そして、砂をトル

ネに襲い掛からせた。

「おい、お前」

トルネは瞬身の術で砂を回避。

「審判。手を出してきたのは相手だ。始める」

トルネは追撃のように襲い掛かってくる砂の腕を瞬身の術で回避し、砂の殻に包まれようとしていた我愛羅に強烈な正拳突きをお見舞いした。砂の盾を貫通した一撃必殺の一撃だったのだが、妙に固い砂の殻に威力を殺され、致命傷になっではない。

だが、何かを行おうとしていた我愛羅の行動を阻止できたらしく、砂の殻の中から追い出された彼は、何故か消耗していた。

体へのダメージもあったのだろうが、明らかに精神的に疲労している様子。

相手の調子が悪いのは、可哀そうに思うが先に始めた以上、叩き潰すつもりで前に出ようとした時だ。

突然、試合会場全体に白い羽が舞い降り始めた。その羽根が目に入った瞬間強烈な眠気に襲われる。その眠気に負けて、次々と試合会場にいた人間が眠りについていく。

我愛羅が何かをした訳ではなく、むしろ、会場にいた誰かが行った幻術だと言うことに、木ノ葉の実力者たちは気が付いて、幻術を解く。

観戦場所から試合を見ていたシャナと八雲は、会場にかけられた幻術を解除して、観客席に向かっていた。明らかに無差別な幻術での攻撃を仕掛けた相手を探すためだ。

観客席では中忍以下一般人は全員幻術に落ちており、深い眠りに入っていた。そして、試合会場ではすでに音隠れの忍達と木ノ葉の忍が争っており、これが誰かの悪戯ではなく、意図的に起こされた攻撃だと発覚する。

そして、試合会場では、乱入してきた砂の上忍相手にトルネとゲンマが応戦している。

「全員の幻術を解除しようか？」

八雲の幻術なら前任の幻術を上書きできる。だがシャナは青い写

輪眼を使い、周囲を観察した後首を横に振る。音の忍の数が多く、彼らは全員殺意を持って向かってくる以上、戦闘状態となった現場に民間人が溢れかえった上に、パニック状態になれば、足を引っ張られる。敵も眠った人間は敵として認識しておらず、眠らせたままの方が都合だろう。

「八雲！」

シャナの説明を聞いていた八雲の背後から、クナイを持った音の忍が襲い掛かる。だが、シャナが瞬身で接近、粒遁の刃を纏ったチャクラ刀で音の忍の首を刎ねる。

そして八雲は、仲間を殺られ3人でシャナを狙っていた音の忍に最強幻術・天花乱墜を発動。殺意を持って仲間を襲う侵略者に灼熱のマグマに飛び込む幻術を見せた。彼らは幻術の中でマグマに焼かれ、現実世界でも脳が焼け死んだと誤認。体中から発火しながら、その場で大やけどを負って死亡した。

瞬時に4人を仕留めた二人は、シャナの「ナルトの所に行く」という言葉に従って、ナルト達の居る場所に向かって走り出す。

粒遁・天翔で試合会場を縦横無尽に駆け巡りながら、敵の首を切り落としてく。首と泣き別れした躰が無力に地面に横たわる光景を作りながら、侵略者を駆逐していく。その速度と正確さ、そして、下忍とは思えない殺害に対する躊躇の無さ。

青い光になり、超高速で動き回る光景は、木ノ葉の忍達にとっては心強く、敵からすれば光を見た瞬間死が訪れる悪夢だった。

そして、音の忍達の中には突然体が発火するものや、何もされていないのに全身傷だらけになり、死んでしまう正体不明の攻撃があり、次第に士気が低下していく。

ナルト達を見つけたシャナ達。ナルトとシカマルとサクラ、そして小型の忍犬が会場の壁に空けられた大穴から出ていく光景が見えた。

「シャナに八雲か」

「お、すごいな。俺も負けてられん」

ナルト達を行かせたのは、音の忍と交戦していたガイとカカシだった。二人と合流したシャナは、近くにいた音の忍を粒遁・天翔の高速



移動で蹴散らしながら、同じく敵と交戦するカカシに話を聞いた。

「砂の忍を追ったサスケの増援か。わかった」

サスケは、我愛羅達が逃げた後、その後を油女シノと追跡。ナルト達は、サスケたちを連れ戻す任務を与えられたという。本格的な戦争状態に入った事で、下忍であっても可能なら動員しなければならぬのは理解できる。

シヤナはカカシの話を聞いて、未来視を使用。どうやらナルト達が死ぬことは滅多な事がない限りなさそうだと判断。

とはいえ、砂漠の我愛羅の中にいる何かが出てくれば、危険だと言うことも感じていた。だが、シヤナにはそれよりも優先しなければいけない事情があった。

それは、現在何度もシヤナが自動で見せられ続ける未来。八雲やトルネが死に掛けるまたは死んでしまう未来があると言うこと。

方法を誤れば、死が訪れる事象。それが迫っており、シヤナはそのことに意識を向けるしかない。

その原因となるのは、現在、試合会場の天井の上に張られた結界。その中で向き合っている三代目火影と大蛇丸が原因と言わざるを得ない。今は話し合っているようだが、すぐに戦闘が始まってもおかしくない。

シヤナの未来視は大蛇丸の術によって三代目が早々に死んでしまい、その後、会場にいる忍達の命が危機にさらされる未来を映す。その危険度といえば、絶望的と言わざるを得ず、9割の木ノ葉の上忍が死ぬだろう。

(あの無能な火影め。私が援護に行くしかないってばね)

三代目火影が嫌いだ。見殺しにすることに抵抗はない。ここで死ぬなら死んでもいい。だがその死が、仲間たちの命を脅かすリスクになるなら、助けるしかない。苦渋の決断だがシヤナは、三代目火影を助ける事に決めた。

この会場で一番強いのはシヤナか、トルネの師であるマイト・ガイやカカシだろう。だが彼らではこの後、起こりうる不幸に相性が悪い。

「シャナが思考を巡らせながら、戦闘を行っていると、カカシから指示が出される。」

「お前達、第四班も下忍だが、特例として中忍昇格を認める。ここからは、正式な戦闘員として木ノ葉の忍としての使命を全うしろ」

下忍は本来今回の戦争で戦闘に参加させてはいけない。普段なら避難させるべきだが、貴重な戦力を捨てる訳にもいかず、上忍としての権限で戦闘の正式な許可を出す。

「了解しました。それで、どうすればいいんですか？」

八雲の問いに、音の忍の頭部にクナイを突き刺したカカシが答える。

「木ノ葉の土地を土足で荒らした奴らを一人残らず、皆殺しにしろ。戦争だからね、手加減は一切いらぬ」

「わかったってばね」

カカシの許可も下りたことで、シャナが本格的に戦闘に参加を始める。迎撃戦から殲滅戦へと行動が変化したシャナの動きはさまざまだった。鬼神のごとく、試合会場を舞いながら次々に軀を量産していく。

そのシャナの動きに追いつく存在が現れる。その存在は、逃げ出そうとした音の忍に強烈な拳や蹴りを叩き込み、反撃にクナイや手裏剣を投げた相手に対しては、軽く肌に触れながら、通り過ぎていく。

そして、その人物の攻撃を受けた音の忍達は、全員悲鳴を上げ、体中が紫に変色しながらのたうち、一分もしないうちに屍になった。

「トルネ。下はどうなったってばね」

「審判がやるといっていた。俺は上を担当しろと指示を受けたんだ」

音の忍達を毒殺したのはトルネだった。トルネの体術は超強力だが、毒蟲を用いれば掠れば死が決まる必殺拳となる。その猛威は、こうした戦争状態でも振るわれる。

毒殺と首との泣き別れ、そして幻術による精神と肉体の死。もとより異名まで与えられた第四班の面々は、戦争にてその才能を最大限開放させてしまった。

「二人とも、いつものフォーメーションでお願い」

「わかったってばね。トルネだけ試合、まともにしてないんだから、体力ありあまつてるよね」

「仕方ないだろう。まあメインは任せてもらおう」

態勢を立て直そうとトルネとシヤナが背中合わせで戦っている隙間に八雲が配置されており、幻術で音の忍や砂の忍を幻惑、または近づいてきたものを焼死させる。

手あたり次第に殺しながら、敵の戦力をそいでいく三人。その姿を見ていたカカシとガイも奮闘を始める。拮抗していた戦況が、有利に変わったこともあり、流れに乗って押すことに決めたからだ。

3人共試合中は明らかに手加減しており、いざ殺し合いとなれば、その実力は上忍クラス。下忍だとたかをくくっていた音の忍や砂の忍は、地獄を見る羽目になった。

一番厄介な幻術使いの八雲を護衛するトルネとシヤナの動きが激しく近寄れず、忍術などの遠距離攻撃はシヤナに防がれ、強引な接近は毒使いの体術師であるトルネによって沈められる。

そして、時間がたてば殺傷能力のある幻術に嵌められるという地獄だった。

ある程度の人数が減り、後は残った残党を狩ればいいという状況になった事でシヤナは行動を開始する。近くで戦っていたトルネに話しかける。

「八雲の事、守ってほしいってばね」

「急にどうした」

突然八雲の事を任されたことで困惑するトルネ。困惑しながらも相手の首をへし折っているのは、さすがと言わざるを得ない。

「私は三代目火影を殺してくるってばね」

「は？」

「間違えた、心の声が出たってばね。例の奴で、三代目が死んじゃうから、援護に行きたいってばね」

突然の裏切り発言に啞然とするトルネの顔を見てシヤナが笑う。だがシヤナが親友である八雲を託せるのは、信頼できる仲間であり友達であるトルネか隊長であるヤマトだけだ。

シヤナの目は、信頼に溢れ、彼の背中を叩いて、両手を合わせて、屋上へと光になって飛んで行った。

シヤナがどこかへ行った事に気が付いた八雲が、トルネに「どこいったの?」と尋ねる。

「役目を果たしに行った。俺たちは俺たちの出来る事をしよう」

「うん。ペース上げていくよ」

シヤナが欠けたことで八雲とトルネのギアが上がり、必然的に敵対する相手の犠牲者が増えたのだった。二人が戦闘を終える頃には毒に侵され、体中が焼け爛れた変死体が大量に転がることになった。

シヤナが屋根の上に張られた結界に粒遁・天翔で突っ込んだが、結界は破れずに弾かれる。

体を粒子化していたため、結界の炎に焼かれることはなかったが、中々に強固な結界は、シヤナの道を阻んでくる。

突然シヤナが現れたことで、結界により見守るしかできなかった暗部たちの視線が向けられる。

「よせ。我々でも突破できなかった強力な結界だ」

印を結び、明らかに結界を強行突破しようとするシヤナに注意を促す暗部。だが、シヤナは「お前らみたいな雑魚には無理だつてばね」と一蹴する。

見てることしか出来ない力無き忍になど、シヤナは端から用はない。シヤナは粒遁・天輪を発動。結界を破るために発射する。

「来やがったなウシチチ」

「木ノ葉の閃光ぜよ!」

「破られんなよ!」

「ああ」

結界を張っているのは、第二試験の死の森で襲ってきた奴らだった。やはり大蛇丸の部下だったかと考える。だがシヤナの発射した

天輪も彼ら四人の張った結界を貫けない。結界に阻まれ霧散してしまふ。

シヤナの姿を見た4人は、呪印を解放し、姿かたちが異形のそれとなり膨大なチャクラを纏っていた。突然怪物のような風貌になった4人を写輪眼で観察するシヤナ。4人が張った結界にめぐるチャクラもすさまじく、易々と破れる物ではないと理解する。

三代目と話していた大蛇丸もシヤナの登場を見るなり、事を起こそうとチャクラを練り始めていた。それに対抗するように三代目も鎧姿となつて戦闘を開始しようとする。

「仕方ない。……」

シヤナは、愛用するチャクラ刀に粒遁のチャクラを纏わせる。チャクラ刀を二刀流にしたシヤナは、それらを合わせる。二つのチャクラ刀が混ざった事による効果か、膨大なチャクラを纏った全長100mにも及ぶ馬鹿でかい光の刃が形成される。

その光景に、音の四人衆は、全員決死の覚悟で結界にチャクラを流し始める。そして、暗部たちは、啞然とし、大蛇丸と三代目もその光景に動けずにいた。

「粒遁奥義・天羽々斬」

シヤナの持つ術の中で現在最大の火力を誇る一撃。巨大化させた粒遁の刃が結界に振り下ろされ、四人衆の努力もむなしく、結界に巨大な亀裂を入れられてしまう。トネリの使っていた金輪転生爆をパクったシヤナのオリジナル術。

その威力はすさまじく、四紫炎陣の結界を物理的に打ち破り、シヤナは結界が再生するより早く結界内に侵入。

「なぜ入ってきたのじゃ」

「里の長が易々と囚われるなつてばね!! 面倒だつてばね!!」

侵入し、三代目の傍に行くなり彼を罵倒する。本当に嫌いなのだ。彼の人間性などを考慮せず、火影という存在そのものが嫌いになつていくシヤナ。その彼を助けるために戦わなければいけない状況に、心底腹が立った。

そして、事の原因である大蛇丸を青い写輪眼は、捉えている。

「無茶苦茶ね。三代目、その子は、あなたにも制御できない様子で」  
「黙れウワバミ」

「短気ね。元々あなたも相手するつもりだったし、丁度よかったかしら」

大蛇丸を今すぐ殺してしまおうと考えたシヤナだったが、大蛇丸が印を結び、地面から柩を口寄せする光景を見て深く観察してしまう。

そして、彼は「ここでは手狭ですね。予定通りおやりなさい」と口にする。

大蛇丸の指示に従い、音の四人衆がそれぞれ膨大なチャクラを用いて、結界ごと時空間忍術で別の場所に転移させた。

「ここは、どこだってばね」

「どうやら、里の外に連れてこられたようじゃ」

突然、荒野のような場所に空間移動させられたシヤナと三代目は、周囲を確認する。どうやら木ノ葉の里の顔岩のある断崖の上だと言うことがわかる。

場所が移動するなり、結界の規模が遥かに巨大なものになっており、広大なフィールドが用意されていた。

大蛇丸は、準備が整ったとばかりに術を発動。

「口寄せ、穢土転生」

(まずい。なんとしても3つ目だけは止めねば)

三代目はその術を見て何かを悟り、口寄せを封じる印を結ぶ。その成果もあって、「初」「二」と書かれた柩だけが口寄せされ、「四」と書かれた柩だけは阻止された。これだけは止めねばと考えた三代目の判断は正しい。

もし、口寄せされていた場合、シヤナが敵に回る可能性すらあったからだ。

三代目が対抗術を発動したことに気が付いた大蛇丸は「残念ですね」といやらしく笑っていた。

「シヤナの前でそれを使うとは。愚劣極まったな」

「感動の再会を演出してあげようと思ったんですけどね。まあいいでしょう。この二人も、うちのはの末裔と三代目火影様には、因縁深い相

手ですから」  
大蛇丸の切り札。穢土転生が発動された瞬間だった。

## 木ノ葉崩し 2

大蛇丸の口寄せした柩が開き、中から顔色が悪くところどころひび割れている赤い甲冑と青い甲冑姿の二人が現れる。

あきらかに生きた人間ではない二人の男たちは、ふらふらと歩きながら柩の外に出て、周囲を観察している。

そして、三代目火影を見るなり、青い甲冑の白髪の男が話し始めた。

「久しぶりよのオ、サル」

「ほお、お前か。年を取ったな猿飛」

白髪の男に続いて赤い甲冑の恐ろしいまでのチャクラを持った男が猿飛に話しかける。そして、話しかけられた三代目火影は、二人に頭を下げながら「このような形で、ご兄弟お二人に再会するとは」と残念がっていた。

ピリピリと肌に突き刺さるようなプレツシャー。シャナがこれまで感じた中でも一番ヤバい威圧感。いつも強気のシャナも警戒心を強くし、青い写輪眼で二人を観察する。赤い甲冑の男のチャクラもだが、青い男の醸し出す気配が、何よりも気に入らないと感じたシャナ。「ジジイ。こいつら何者だつてばね」

「お前も見ることがあるじやろう。儂とお前の父以外の顔岩を」

そう言われシャナは、二人の正体が誰か改めて理解した。この二人は、木ノ葉の里を作り上げた初代火影、二代目火影だと言うこと。

シャナの嫌いな里を築き上げた張本人たちが、黄泉から舞い戻ったというのだろうか。

「穢土転生か。禁術でわしらを蘇らせたのは、この若造か」

二代目火影が、術者である大蛇丸を見てそう告げる。そして、穢土転生というワードを聞き、初代火影が残念そうな顔になる。

「そうになると、ワシらは、貴様と戦うことになるわけか」

「ご覚悟ください」

「おっと、仕上げを忘れていました。どうせなので、本来の姿に戻っていただきましょう」

大蛇丸は、懐から取り出した札を初代と二代目の頭部に埋め込む。



そうすれば二人の顔に生気が戻り始め、ひび割れが少なくなる。

「く、なんとという縛りだ。意識があるのに、動けん」

「精度を落として、ワシらの抵抗を防いでいるか」

初代と二代目は抵抗しようとするが、両手で印を結び、二人を支配することに集中している大蛇丸から逃れられない。生前であれば、万全の状態であれば、大蛇丸の縛りでも突破出来た二人。だが大蛇丸は、二人を縛ることに全力を出すことで、劣化しているとはいえ初代と二代目の完全な支配を可能とした。

シヤナとの邂逅で改良された穢土転生。大蛇丸はその場から一步も動けないとはいえ、戦乱の世を縦横無尽に暴れまわった火影たち二人を操れるならおつりがくる。

相手が相手なだけに三代目火影もすでに戦闘態勢に入っている。シヤナも同じく戦闘態勢に入る。二人はようやくシヤナに意識が向いたのか、初代が注意を促す。

「娘、木ノ葉の忍だな。ワシらに近寄るな。自分の意志では止められん」

明らかに年若い忍であり、このままでは殺してしまうと逃げ隠れる事を指示する。だがシヤナはそんな意見を聞かない。そして、大蛇丸も初代の言葉を否定する。

「お二人には三代目とあの子も相手してもらいますよ」  
「貴様」

そして、誰よりも目ざとい二代目火影は、シヤナの目を見て驚きの表情となっていた。

(あの目、写輪眼か。青い輝きの写輪眼は、聞いた事がない。いや、なによりも、あの目つき、間違いない)

二代目はシヤナの目つきが、うちはある男と重なって見えた。彼の兄である初代火影もよく観察すれば気が付くだろうが、女子であるシヤナの心配しかしておらず、気付くことはない。

もし彼の想像通りなら、この娘の力は、自分たちにも劣らない。

死後の世界でとんでもない爆弾が木ノ葉に仕掛けられているなど思ったところだが、大蛇丸の縛りが厳しくなり、初代と二代目は完全

な戦闘状態へと移行される。

縛りに抗えず、目の前の三代目とシヤナを殺すための兵器となる。  
「来るぞシヤナ」

三代目の声に答えないシヤナ。彼女は自分の高鳴る鼓動と、高揚感に戸惑っていた。まるで待ち望んだ相手と出会ったかのような。赤い甲冑の方を倒したくて仕方ない。

頭の中がどうやって相手を倒そうかという戦闘一色に染まっていた。同時に、白髪の方には、深い憎しみを感じてしまう。初対面の相手なのに、親の仇のように憎しみがあふれ出すのが止まらない。

流石に、九尾や仮面の男に向けている悪感情を、初対面の二代目火影に向けてるのはおかしいと思うが、衝動が止められない。

こんな経験は初めてであり、酷く困惑してしまうシヤナ。だが油断できる相手ではない。初代火影は、既に走り出しており、こちらに向かってくる。初代の体術を三代目が迎え撃つ形となり、シヤナは必然的に二代目の相手をすることになる。

二代目は、水遁の印を結んでいる。

「水遁・水龍弾の術」

二代目火影は、水遁の龍をシヤナに向けて発射する。シヤナは、咄嗟に火遁の印を結び、火遁・豪火球の術で迎え撃つ。相性の悪い術だと頭で理解はしていたが、最大火力でもって拮抗。水遁と火遁のぶつかり合いで水蒸気が辺りを包み込んだ。

水蒸気は濃く、視界は最悪だが、写輪眼の瞳力の前では、視界はクリアだった。霧に包まれた中で二代目は、10本近いクナイを投擲。だがそれは、明らかにシヤナの位置を大まかに狙っただけにすぎず、見てから回避が容易だった。

投げられたクナイを回避し、攻勢に出ようと粒遁・天輪を発射した瞬間。シヤナの写輪眼は、クナイに刻まれたチャクラの刻印を認識。優れた写輪眼を持つシヤナだから認識できた。

天輪の粒子砲を時空間忍術で回避した二代目。その移動先はシヤナに投げられたクナイに刻まれたマーキングであり、回避と同時にシヤナの背後を取った彼はクナイで彼女を切りつけようとする。

これが二代目火影の写輪眼対策に編み出した術。シヤナの父であるミナトと同じ術であり、二代目火影の考案した時空間忍術、飛雷神の術。

「飛雷神斬り！」

写輪眼の対策として、背後を取るといふ戦法がある。だがこれは二人など人数が多い場合にのみ有効な戦術。しかし、二代目火影は、飛雷神の術により、いつでも背後を取る事が出来る。その刃が、シヤナの背中を切り裂こうと迫る。

飛雷神の速度は、写輪眼でも見切れるものではない。見えたところで、防御も回避も間に合わない。決定的な死がシヤナに迫る。

父と同じ術を使う二代目火影。忍一の速さを誇ったと言われる、その凶刃がシヤナを切り裂く寸前。シヤナは走馬灯のように父ミナトの姿を思い出した。

そして、二代目火影の周囲を漂う粒遁のチャクラを目印に、飛雷神と同じ原理の時空間忍術、粒遁・天門を発動。

(なに?)

飛雷神斬りを行った二代目の背後に瞬間移動。目の前のうちはの娘が、自分の考案した飛雷神を使うと思わず彼の動きが止まる。その隙をつくように、シヤナの掌で瞬時に構成された粒遁・螺旋輪虞が彼の胴体を捉え、吹き飛ばした。

カウンターのタイミングが完璧で、初見で飛雷神斬りを打ち破ったうちはの少女に、攻撃をくらった二代目や大蛇丸も感心してしまった。

シヤナが指を弾いて螺旋輪虞の輪を拡散させる瞬間、二代目の体は、飛雷神の術で移動し、致命傷は避けられる。

対象を失った螺旋輪虞は、結界の壁に激突し、結界を揺るがしたのちに霧散する。

地面に突き刺さったマーキングに飛んだ二代目は起き上がり、シヤナの姿を観察する。螺旋輪虞によって、彼を構成していた塵芥の体が崩れていたが、すぐに塵が集まり始め回復していく。

その様子から不死身なのかとシヤナが考える。

「その、じゅつ、誰に教わった」

「四代目火影。私のお父さんだつてばね」

シヤナの目は、青い万華鏡写輪眼となっていた。二代目は、四代目火影という存在が自分の術を継ぎ、それを娘である、うちはの娘に伝えていくという事実には時代に流れを感じた。うちはは対策の術が回り巡って、うちはの娘。それも、戦乱の世で、忍の神と謡われた初代火影、千手柱間のライバルだった男、うちはマダラと全く同じ目をする存在に受け継がれているのだから。

そして、シヤナの身のこなしは、明らかにうちはマダラのそれと合致する。長年戦ってきた二代目がそう思うのだから、違くない。

シヤナは、全身から粒子を散布しながら、次の手を打とうと考える。二代目の術が、飛雷神なものには驚かされたが、戦闘開始と同時に先見の写輪眼を発動していたシヤナ。そのおかげで写輪眼殺しともいえる二代目の戦術を先読みできた。

父と同じ術を使う相手。どちらが速いのかはわからない。だが、シヤナが信じるのは忍界最速の火影、木ノ葉の黄色い閃光だ。シヤナはその名を受け継ぐ木ノ葉の青い閃光。決して負けられない。

「そうか」

「お前はなんかむかつくつてばね」

飛雷神と粒遁・天門による時空間忍術同士の戦いが始まったのだつた。

## 木ノ葉崩し 3

三代目を体術や木遁で追い込む初代火影は、傍目にシヤナの動きや目を見て、考え込んでいた。

「猿飛」

「なんですか、この状況で」

すさまじい金剛力によって三代目を追い詰める初代火影だが、疑問を口にしてしまう。三代目火影は、火遁、風遁、水遁、雷遁、土遁の五大性質変化を織り交ぜ、初代火影に放つが、全て木遁にて防がれてしまう。稀に命中するも、穢土転生の体は、すぐに再生を始める。

「あの娘、うちは一族なのだな」

「左様ですぞ」

「父は誰ぞ？」

千手柱間も、シヤナを見てみると、かつてのライバル、うちはマダラの姿が重なって見えた。それは偶然ではないほどに。もしやマダラの子孫なのかと勘繰るが、「わかりませぬ」と三代目が否定する。実際分らないのだ。

シヤナは鬼の国で発見された、うちは一族ということ以外謎に包まれている。

「どうして、ですか、ぐお」

「そうか。あの娘は、マダラと同じ目をしておる」

「マダラですと!?!」

マダラという言葉聞いた三代目は、驚きながらも初代から距離を取り、口寄せの術を発動。

「口寄せ、猿猴王、猿魔!」

「なんだこの状況は」

口寄せされたのは、人間と同じサイズの大猿であり、彼は大蛇丸の姿を見るなり「あの時殺しておかなかったからだ」と注意しながら、三代目の指示に従い変化を行って、如意棒へと変化する。

金剛如意を構えた三代目は、迫りくる初代火影と改めて対峙する。初代の言葉を聞いて、シヤナの才能は、あのマダラを元に行っているの

なら説明がつくと考えた。

金剛如意を構えた三代目の勢いはすさまじく、初代火影の体に一撃を入れ、彼の体を弾き飛ばした。そして、金剛如意を急速に伸ばすことで術者である大蛇丸自身に攻撃を仕掛けようとした。

「木遁秘術・樹海降誕」

しかし大蛇丸がそれを認めるはずもなく、瞬時に初代火影を操作し、彼を守るように木遁忍術を発動。何もなかった大地から地形を変えるほどの大木が現れ、大蛇丸を守りながら、三代目火影や遠方で戦っていたシヤナ達にも襲い掛からせた。

その規模が、同じ術を使うヤマトとは桁違いであり、防御と攻撃、そして木々による拘束と何重もの役割をこなしていた。

「く（いかん。狙いはシヤナか）」

三代目は迫りくる木々の津波に対して、金剛如意の檻を作成することで耐えるが、その檻ごと樹海に飲み込まれてしまう。身を守ったつもりが、初代と二代目の両方がシヤナに向かう最悪の事態になってしまった。

すぐさま抜け出そうとするも成長を続ける木々に阻まれ、すぐに脱出できない。

二代目火影と飛雷神対決をしていたシヤナ。内から湧き上がる憎悪が、シヤナの動きをより洗練させていく。

「水遁・水断波」

口から水遁の水圧カッターを発射する二代目。その攻撃を受け止めることは不可能であり、シヤナは飛んで回避する。だがその瞬間、瞬身の術で距離を詰めてくる二代目。素早い動きで拳を振るう相手に、シヤナは同じく体術で応戦。

拳を蹴りで封じ、そのわき腹に膝をお見舞いする。そうして、二代目の体が離れた瞬間。シヤナの右足と左手首が消し飛んだ。

「!？」

接近戦に持ち込まれた段階で、シヤナは気が付かないうちに、起爆札を死角に貼り付けられていたのだ。それを爆破され、手足を失って

しまう。

だが、シヤナがダメージを食らうと同時に、彼女の右目の万華鏡写輪眼の瞳術、御年神が起動。自分の手足が吹き飛ばされる前まで時間を戻し、五体満足になった段階で、お返しとばかりに新技である泡遁を発動した。

「泡遁・銅輪転生爆だつてばね」

完全にトネリの使ったチャクラ球での絨毯爆撃の完全コピー。チャクラ球の数は、トネリより少ないが、即効性のある術であり、威力も申し分ない。

見たことのない攻撃に、全身を爆破された二代目火影。不意打ちに對して不意打ちを行ったシヤナの攻撃は、見事に二代目を捉えた。

爆発の威力が高く、泡遁のチャクラ球に触れた二代目の胴体や、手足が吹き飛ぶ。だが穢土転生の体は時間がたてば回復してしまうだろう。とはいえ、破壊の規模が大きく、少しの間は戦闘不能状態だろう。

だが、残った首だけで二代目火影は奇襲攻撃を行った。

「おっと」

口から水遁の千本のような物を、ノーモーションかつ、シヤナの写輪眼でもチャクラの動きが洞察できない状態で発射した。その術は、水遁・天泣。チャクラが練れない状態で、体が動かせなくとも発射できる奇襲用かつ、暗殺用の忍術。

その不意打ちはうちは一族の人間でも、対処できない殺傷能力と奇襲性を誇る。

だが、シヤナは、その天泣を咄嗟に発動した、須佐能乎の腕でガード。須佐能乎の強固な守りに突き刺さりはしたが、シヤナは一切のダメージを受けていない。

軽く防いだ様子と、自分の戦法を知り尽くしているような戦い方から二代目は、うちはマダラと戦っているような錯覚を起こしていた。本来であれば奇襲攻撃の際に、事前に知らせる事も出来る。二代目や初代火影の動きを縛ることに集中し、人格を完全に縛っていない大蛇丸のミスだろう。

相手が純粹に木ノ葉の忍なら、二代目火影は、シヤナを逃がすことを考えただろう。だが、戦っているうちに確信していく。このくノ一は、木ノ葉にとって脅威となる存在であると。

そして、首だけになった二代目火影に、シヤナは召喚した須佐能乎の拳を叩き込み、彼の存在を一時的にだが無力化した。

だが、二代目を無力化した直後、三代目火影の動きを封じた初代火影の樹海降誕の猛威が迫る。

「火遁・業火滅却」

迫りくる樹海の氾濫に対して、全てを燃やしてやろうとシヤナは最大火力の火遁を発動。初代火影の秘伝忍術を正面から燃やし尽くそうとしていた。

「ぬうんー！」

樹海降誕を正面から燃やされる初代火影は、さらにチャクラを籠め、木々を増やしていく。対するシヤナも火遁の威力を高め、樹海の津波を業火の防波堤で蹴散らしていく。

その火遁の威力や冴えに、初代火影の表情も変化する。懐かしき友の姿を見たからだ。だがこの状況は楽しめる物ではなく、木ノ葉の為に戦った自分たちが木ノ葉に牙をむくために利用されているのだ。

そして向かい合うのは、まだ子供のくノ一。実力は、確かだが、まだ発展途上。ましてやこちらは、死ぬことのない穢土転生の肉体。死ぬぬ上に、操り人形という状況。手加減すら許されず、木ノ葉の若き芽を摘んでしまう。

拮抗していた状況下で、大蛇丸はさらにシヤナを仕留めようと縛りを強化した。

「そろそろ、お開きにしましょうか」  
(く、おのれ)

遂に人格までも縛られてしまった初代火影は、樹海降誕中に木遁分身を使う。そして、2人の木遁分身が走り出し、シヤナに接近。至近距離で木遁・皆布袋の術を発動。地面から、数百にも及ぶ木遁の手が現れ、それらが側面からシヤナを襲う。

流石に正面だけで手いっぱいだったシヤナ。迫りくる皆布袋の術



をどう対処するか、先見の写輪眼で最適解を探す。既に3分近く戦闘しているシャナは、脳が沸騰しそうだった。二代目の不意打ち戦法の前に先見の写輪眼を解除できず、消耗してしまっている。

チャクラには余裕があるが、正面から迫る初代火影によるチャクラ量によるごり押しには、勝てない。単純な出力の差で負けてしまっているのだ。そして、うかうかしていると、既に下半身が再生している。二代目火影が参戦してきてしまう。

「須佐能乎!!!」

不意打ちの二代目に火力馬鹿の初代火影。なんて面倒なタッグだろうかとうんざりするシャナ。だがこの緊張感と強敵との戦いを楽しんでる自分がある。一歩間違えば、シャナの命の灯火は、吹き消されてしまう。

だがなんだろうか、線香花火は落ちる寸前の輝きが一番激しいように、シャナの命は、この瞬間、最も輝いていた。

シャナは、12年前の九尾と対峙した時以来の、須佐能乎の完全顕現を行った。骨組みだけだった6本腕の須佐能乎が筋繊維を纏い、更に鎧を纏う。九尾よりも巨大なチャクラの阿修羅像が顕現。両サイドから迫りくる巨大な木遁の手を6本の内、4本を使った剛腕のラツシュにより、瞬く間に破壊しつくしていく。シャナの須佐能乎は、第三形態に到達していたのだ。

通常、須佐能乎は第二形態で独自の武装を纏うものだが、シャナの須佐能乎は、多腕の阿修羅型。その拳こそが武器であり、精密動作性や腕を高速で動かすスピードは、最高クラス。

ラツシュで木遁分身を術ごと打ち破った須佐能乎は、正面からくる樹海降誕にも6本の腕のラツシュで反撃。すさまじい破壊の嵐が、樹海降誕の術を正面から打ち破り、術者であるシャナが前進したことで、木々を薙ぎ払いながら高速で進行。

多腕の高速ラツシュを止めようと、本体である初代火影が木遁・木龍の術を発動。

現状使える最大の術であり、呼び出された木遁の龍は、尾獣ですら拘束し、チャクラを吸い取る強力な術。

「邪魔だつてばね」

巨大な須佐能乎に襲い掛かった木龍だったが、シヤナの操る須佐能乎の強烈な拳を顔面に受けて、砕け散る。ラツシユの速さ十一発の重さが異常であり、チャクラを吸収するより早く砕かれてしまったのだ。

木龍があつさり砕かれたことで、守りのなくなった初代火影。全盛期なら、シヤナを圧倒できたが、穢土転生の彼は、今出せる全力を打ち破られた。

強烈な須佐能乎の拳が、初代火影の体を粉みじんに吹き飛ばした。忍の神といえども、至近距離で振るわれるシヤナの須佐能乎の剛腕は、回避できない。

二人の火影を一時的とはいえ、無力化したシヤナの姿を見て、大蛇丸は本能からくる死を悟ってしまう。彼の想定を超えて、シヤナが急成長してしまったのだ。いや、大蛇丸が無理に追い込んでしまったからこそ、シヤナの潜在能力が本格的に開花したともいえる。

「化け物め」

「おまえに、いわれたく、ないつてばね」

シヤナは、ゆっくりと須佐能乎を纏いながら大蛇丸に近寄っている。そして、須佐能乎の右側の3本の腕が巨大な螺旋輪虞を形成し始める。それを大蛇丸に向かって放とうとしている。

しかし、短時間での成長は、体に負荷をかけ過ぎていた。

「ぐくううう、ああああ」

突然シヤナは、両目の痛みと全身の軋むような激痛に膝をついてしまう。そして須佐能乎が解除されてしまう。痛みに悶えるシヤナは、血涙を流しながら、身動きが取れなくなってしまふ。先見の写輪眼の代償と、須佐能乎の過負荷が一気にシヤナを襲った結果だった。リミッターを外した代償は、シヤナのこれまでの人生で最もひどい痛みだった。

戦闘中にもかかわらず、泣き出してしまう程の痛みを襲われるシヤナの背後に、再生を終えた二代目火影が現れる。

動けないシヤナの周囲に起爆札を投げ、彼女の体を爆風で吹き飛ば

す。まともなガードも回避も出来ないシヤナは、どうにか転がって距離を取るが、爆風と爆炎を食らい、火傷と裂傷を負って、動けなくなってしまう。

シヤナが動けなくなった後、二代目火影が手に持つクナイを振り下ろしたのだった。

「ぬうん！」

だが、二代目の一撃がシヤナを仕留めるより先に、樹海から脱出した三代目火影の金剛如意がクナイを弾き、二代目の胴体を破壊した。ギリギリのタイミングで間に合った三代目火影。シヤナの時間稼ぎのおかげで解決策を導き出せた。

二代目の体から起爆札が現れるのを見た猿飛は、シヤナの体を抱えて、距離を取る。

「大丈夫か。シヤナ」

「く、ううううう、おかあさん、おとうさん、あああ」

あまりの苦しみと痛み、そして脳が悲鳴を上げる程酷使した結果。シヤナの意識は混濁していた。父と母に助けを求め、空に手を伸ばす始末。

年とはいえ、守るべき少女に守られ、地獄の苦しみを味わわせる羽目になってしまった。それで何が火影か。三代目は、古い先短い命を捨て、大蛇丸の野望を止めると覚悟を決めた。

「影分身の術」

三代目は、残り少ないチャクラをさらにすり減らして影分身を行う。そして、禁術の印を結んでいく。穢土転生に対抗する切り札。うずまき一族に伝わり、四代目火影が九尾を封印する際に用いた封印術。

「屍鬼封尽」

己の魂を対価に、対象の魂を死神の腹に封印する屍鬼封尽が発動したのだった。

影分身たちは、体を碎かれ再生中の初代と二代目にしがみ付き、動きを拘束。準備は整ったと、術を開始した。

痛みと熱にうなされるようなシヤナは、三代目の術を青い写輪眼で

見ていた。彼の背後に現れた、般若のような死神の姿が、気を失ったシャナの見た最後の光景だった。

そして、その日木ノ葉崩しと呼ばれる大蛇丸率いる音隠れと砂隠れによる戦争行為は、多数の犠牲者を出しながらも木ノ葉の勝利となった。その代償は多く、後に戦場で倒れるシャナを保護した火影直属の暗部達は、腹に封印を刻まれ胸に刺し傷のある三代目火影の亡骸を持ち帰った。

火影とシャナが消えた後、火影岩のある断崖まで辿り着いていた彼らがシャナの奮闘や三代目の最後を見届けていた。初代と二代目火影を封印し、大蛇丸の両腕を封印した所で、力尽きたという。

だがその最後は、火影らしい死に様だったと伝えられるのだった。大怪我をし、死に掛けていたシャナが病院に運ばれ、目を覚ましたのは、3日後だった。

## 終戦

大蛇丸の用意した穢土転生で蘇った千手柱間と扉間を相手にし、怪我と術の後遺症で倒れたシヤナ。

3日間も眠りについていて彼女は病院の一室にあるベッドの上で目を覚ました。

「姉ちゃんー!」

「シヤナ!」

シヤナが目を覚ますなり、彼女の手を握っていたナルトが涙を流しながら、飛び込んでくる。シヤナは、突然弟が飛び込んできたことで驚くが、自分の無事を心底喜んでる姿にほっとしてしまう。

ナルトは、三代目の葬儀を終えてからも目を覚まさなかったシヤナの病室に寝泊まりしていた。死んでしまうかもしれないなかつた姉の姿を見て、失うことに憶病になっていた。

姉が目を覚ましたことで安堵し、大粒の涙を流していく。泣きじやくる弟の頭を撫でながら、シヤナは病室を見渡せば、目を真っ赤にはらした八雲がいた。

「馬鹿シヤナ。無茶して、こんなボロボロになつて」

「八雲、何があつたつてばね?」

状況がさつぱりのシヤナ。あの後どうなつたのか尋ねれば、八雲とナルトが、木ノ葉崩しの顛末を説明。戦争は木ノ葉の勝利で終わり、砂隠れは降伏したという。ナルトもサスケを止めに行く任務中におそらく人柱力である我愛羅と戦闘。激戦のすえ、勝利を収めたという。

今回の戦争で多くの忍が亡くなり、三代目火影も命を落としたと伝えられる。三代目が死んだと聞き、シヤナは「三代目は死んだか」と特に興味なさげだった。

彼が死ぬことはわかつていた。これは避けられない流れだった。問題は三代目が、初代と二代目に敗れた後、解き放たれた火影たちが木ノ葉を襲う未来だったのだ。

そうならば、シャナがどう頑張っても、被害を避けられない。だからこそ、二人まとめて倒す必要があったのだ。

だから概ね、上手く行った。最後まで戦えず、三代目に命を救われたことだけが悔しくて仕方なかったが。

そして、木の葉崩しが終結した後、病院に運ばれたシャナを心配して八雲とナルトが病室に交代で泊まり込んでいたという。他にもお見舞客が居たのか、部屋中に果物などが置かれていた。

泣き止もうとしているナルトの頭をポンポンと撫でながら、シャナは、彼を安心させようと話し始める。

「姉ちゃんは絶対にナルトの前からいなくなならないから。少なくとも、ナルトが必要ないと言うまでは」

心配で仕方なかった。目覚めてくれたことが何よりうれしかったナルトは、誰にかまうこともなく泣き続けた。その声につられて八雲もまた泣きそうになった。シャナが目覚めず、彼女もシャナとの別れを思い浮かべ、何度も涙をながしたのだ。

だが、シャナは帰ってきた。

八雲は、上半身を起こしたシャナを抱きしめる。急に抱き締められたシャナが困った表情になるが、人をあれだけ心配させたのだから、困ればいいと思った。そしてこれだけは言いたかった。

「おかえりシャナ」

「……ただいまだってばね」

泣き疲れて眠ってしまったナルト。彼の寝顔を久しぶりに見たシャナは、慈愛に満ちた表情で弟の成長を喜んでいた。

そして、リンゴを？いてくれる八雲に目を向ける。

「それで、中忍試験はどうなったんだってばね」

戦争で中断されてしまった試験。八雲の夢である一族の復興が遠のいてしまったのではないかと心配する。木ノ葉では中忍試験はしばらく開かれないだろう。となれば、八雲の体調を考えると、何年後になるかわからない。

だがシャナの心配をよそに、彼女は嬉しそうに微笑んだ。

「私とシャナとトルネ君は、中忍昇格だって。後は、奈良シカマル君も」

「え」

「戦争中の活躍と、試験の内容と、戦争中に、カカシ先生達からの緊急昇格もあって、そうなたらしいよ」

特例中の特例だったが、一時的に中忍になった彼女たちの活躍は、里の上層部も無視できるものではなく、一時的ではなく正式な昇格が決まったらしい。特に今の木ノ葉は戦力が低下しており、それを補う面でも第四班を昇格させるしかなかった。

ネームバリエーもあり、戦争中に一騎当千の活躍をしていた八雲とトルネ、大蛇丸の撃退に貢献したシャナ。彼女たちを下忍にしておくことは、里にとってデメリットしかないらしい。

部隊長クラスな中忍の素質についてだが、トルネの人間性と冷静な判断力は、隊長に必要なものであり、八雲は、体力面に難があるも、経験豊富でシャナという猛獣を飼い馴らす才能もあり、適格。

性格に難のあるシャナだが、彼女の場合は、一度受けた任務は、何が何でもやりぬく責任感は評価されており、やはり特出した戦闘能力は、上も無視できない。

そして、八雲からさらに話を続けられる。

中忍に昇格した八雲たちだが、里では特別上忍の推薦が来ているらしい。里もなりふり構ってられないのだろう。

「めんどいから辞退するってばね」

「もつたいないよ」

「お金に困ってないし、下忍でも十分なの。でも、中忍になっちゃったか」

特別上忍などめんどくさい。それが本心ではあるが、中忍昇格は、避けられないだろう。けれど、八雲が無事に昇格できたことは、不幸中の幸いだと思った。八雲の願いであった衰退した鞍馬一族の復興は、順調に進んでいるのだ。

素直におめでとうと伝えれば、彼女もお互いにねと返してきた。

その後、目を覚ましたナルトは木ノ葉の任務で里の復興の手伝いが

あるからと、家に帰ってしまった。一月ぶりの弟との触れ合いが終わったシヤナは、病室のベッドの上で酷く落ち込んでいた。

そして、更に彼女を絶望の底に陥れる事態が発生するのだった。

シヤナが目を覚ました次の日、里の復興作業を手伝っていたヤマトやトルネが見舞いに訪れた。里の復興に駆り出されたヤマトは、少しげっそりしていたが、病室の扉をノックして、中に入る。

「シヤナ、目が覚めたんだって……え」

ヤマトが見たのは病室のベッドに腰かける八雲の腹部に抱き着いているシヤナの姿だった。何をやっているのかわからず混乱するヤマト。思わず隣にいたトルネに尋ねてしまう。

「あの二人ってそういう関係だっただけ？」

「いや、違うと思いますよ」

「違うんだよね。そうだよね」

見てはいけないものを見た気持ちになったヤマトだったが、トルネが冷静になるよう言い聞かせる。ヤマト達が入ってきた事に気が付いた八雲が振り返って「あ、二人とも」とシヤナの頭を撫でながら出迎える。シヤナは未だに、八雲から離れず一言も言葉を発していない。

病室の椅子に腰かけた二人に八雲が説明を始める。明らかにおかしいシヤナの様子には理由があった。

「実は、ナルト君が自来也様と里を離れる事が決まっちゃって。弱り切ったシヤナが、甘えてくるようになったんです」

「うー」

八雲に密着して、唸り声をあげるシヤナ。全力で八雲に甘えており、八雲は身動きが取れずに「はいはい」とシヤナの背中を摩っていた。

とことんポンコツ化した理由は一つだった。大蛇丸との戦いで不覚を取り、大怪我をした屈辱や後遺症による不調、さらに追い打ちのよう、ある人物が見舞いに来た。

その人物は、ゲコ仙人こと、自来也。



彼は、八雲やナルトが帰った後、静かに病室を訪れた。見舞いのため、手土産を持つての登場だったが、病室に入った自来也を見るなり、シヤナは写輪眼を発動。この場で殺してやろうかと、螺旋輪虞を発動。小型だが、病室内でそんなものを食らえば、自来也とてただでは済まない。

部屋に入る前から、シヤナに襲われることを予期していた自来也も掌に、チャクラの球体を作り出す。それは、シヤナの父であるミナトが考案した術。螺旋丸であり、シヤナが何度も再現しようとした術である。螺旋輪虞も螺旋丸を習得しようとした結果生まれた術であり、シヤナの最も欲していた術だった。

それを自来也が披露したことに、シヤナは驚愕する。

螺旋輪虞と螺旋丸の双方が衝突。威力が互角だったためか、お互い相殺する形となる。相殺されたことで自来也の顎を殴ろうとしたが、全身の経絡系と関節に激痛が走り、写輪眼が解除されてしまう。

そして、体に力が入らずに前のめりに倒れる。

「おっと」

病室で倒れそうになったシヤナを抱えた自来也。動けなくなったシヤナをベッドに寝かせ、自分も病室の椅子に腰かける。シヤナが戦えなくなった状況だからこそ、落ち着いて話をするべきだと思ったのだ。

「どのつらさげて、きたってばね」

病み上がりで無理にチャクラを使ったことで、体調が悪化したシヤナ。動きたくても動けないので、悪態をつくしかない。精いっぱい恨みを込めて自来也を睨み付けるが、彼はシヤナの殺気に怯まない。孫娘の反抗期を見守るような目で見つめる。

「ボロボロだのオ」

「……」

「お前が言いたいののは、ナルトに九尾のチャクラの使い道を教えたことか」

その通りだった。ナルトの中の九尾は、シヤナにとって不倶戴天の敵。その力をナルトが使った原因は自来也だ。もしかしたらナルト

が九尾に乗っ取られる可能性もあり、ナルトが九尾を求める可能性だつてある。そうなれば、シヤナの復讐は果たせなくなる。

ナルトから九尾を引き離すことがシヤナの目的の一つだった。だがナルトは九尾を抜かれれば死んでしまう人柱力である。故に方法を模索している最中なのだ。

なのにシヤナの九尾に対する感情を知っている自来也が、ナルトを九尾と接触させた。

「なんで、よけいなことするつてばね。私の気持ち知ってるはずなのに!!」  
「なんで、九尾なんか、あんな化け狐なんかの」

「それが、ナルトの為だからだ」  
自来也は一切躊躇することはない。明確にナルトにとって必要な事が何かを考えていた。

「そんなこと、ないつてばね」

「いやある。お前の気持ちはわかっている。だが、ナルトは人柱力だ。あの子の中にある九尾の力、あれはナルトにとって最大の武器となる」

「いやだ。絶対ダメ。だめ。やだ、そんなの、だめ」

九尾がナルトの中にも耐えられないのだ。なのに、それをナルトが使用する。まるでナルトが穢されていく感覚なのだ。憎さと怖さ、この世にあのおぞましいチャクラが溢れ出るだけで、鳥肌が止まらない。

シヤナの心の病は、九尾のチャクラを見たことで深刻なレベルになつていた。

ナルトが強くなるために九尾の力を使う意味は解っている。理性では、ナルトが九尾を利用することは、おかしい事ではないと分かっているのだ。けれど、3歳のあの日、シヤナの胸に宿った黒い炎が身を焦がす。おかしいという自覚がある事が、余計にシヤナを苦しめる。

シヤナの狼狽えた姿を見て、自分の予想より遥かに悪化しているシヤナの症状を理解する。うちは一族は心に闇を抱えやすいとは聞いていた。だが、シヤナのそれは、危険な領域だった。

幼き頃のシヤナを知る自来也。人見知りで、怖がりで、泣き虫で、優しかった彼女の姿。初めて出会った時、自分の姿を見て、町中に響くくらい大泣きした光景は、今でも思い出深い。

そんなシヤナが、変わってしまった。力を求め、憎しみに振り回され、誰に対しても敵意を抱く。九尾事件や環境が、あの優しかった少女を今の状態に追い込んでいる。

弟であるナルトに対する愛情は本物だが、このままでは成長するナルトとシヤナは必ずすれ違ってしまおう。もし本当に行き違った場合、シヤナの心は完全に壊れてしまいかもしれない。そうすれば、シヤナはうちの例に漏れず、力を持ったまま悪に染まるかもしれない。

自来也は、シヤナの頭をその大きな手で撫でた。慰めるような、大好きだった自来也の手。シヤナの様子が少し安定し始める。

「ナルトの事を真に思うのなら、九尾のコントロールは必須だ」  
「……なんで、そんなこというんだってばね」

「四代目の封印式を見たが、あれはナルトに九尾の力をコントロールさせる目的があった。お前の父もナルトなら九尾をコントロールできると信じていたんだろう」

四代目の名前を出せば、シヤナが少しだけ暗い表情になる。だが、シヤナにナルトが九尾をコントロールする修行の面倒を見させるのは酷というもの。だからこそ、自来也は今日ここに来たのだ。

「ナルトを、ワシに預けてみんか？」  
「？」

「お前がナルトを愛し、育てていることは知っている。だが、お前はお前であり、ナルトはナルトだ。お前の方法だけでは、あの子の成長を妨げることになる」

一族の違いは、大きい。血が全てとは言わないが、うちの血の濃いシヤナは自然にうちとはとして力をつけた。だからこそ、うちはでないナルト向けの修行というものが難しいのだろう。弟子を奪う形になってしまおうが、自来也は、自分が責任をもってナルトを育てるといふ。

自来也は、四代目の師であり、その力はシヤナもよく知っている。

そして、シヤナが今現在不安定なのは、シヤナが一番よく知っている。一時的だが、ナルトを自分に預けろという自来也の言葉にシヤナは、少し思案した。自来也が言うには、五代目火影候補である綱手を探す旅にナルトを同行させたいという。そこでナルトに修行をつける事と、今後ナルトの中の九尾を狙う組織の話を知らせた。

里からの許可は出ているが、彼はシヤナの元に訪れた。それが礼儀でありシヤナの気持ちの整理をつけてやることが自分の役割と思っただからだ。里に振り回され人間不信になったシヤナを、自分まで裏切りたくはなかった。

「さっきの術」

「ん？ ああ螺旋丸か」

「螺旋丸……、お父さんの術」

ようやく名前の知れた術。シヤナは自来也がその術を使った事に驚くが、自来也もミナトと似通った術を使うシヤナに驚かされていた。

「それをナルトに教えて」

「ん？ なぜだ？」

螺旋丸をナルトに教えろというシヤナの言葉に疑問を感じる自来也。

「今のナルトには絶対使えない術だってばね」  
「ほう」

「ナルトに螺旋丸を教えられたら、認めてあげるってばね、ゲコ仙人」  
絶対に不可能な難易度の術。それを教える事が条件だというシヤナ。出来ないことを出来るようにさせる。この奇跡のような所業を行えなければ、九尾の使い方を教えるなど不可能だ。

シヤナは彼を試しているのだ。自来也が、自分やナルトの事を考えてくれていることはわかった。けれど感情の整理がつかない。だから条件を出した。自分を納得させるために。

「ふむ。いいだろう」

「だったら、もう行って。私今はゲコ仙人、嫌いだってばね」

嫌われてしまったらしい。だが、シヤナの許可も下りたことで、自

来也は病室から出ていこうとして、思い出したかのように、懐から本を取り出した。

それをシャナの足下に置いた。

「しばらく入院生活だからな、ワシの著書だが、ミナトも好きだと言ってくれた一冊だ。読んでみたらどうかのオ」

「お父さんが？」

シャナは、渡された本を眺め、表紙にある文字を読んだ。

「イチャイチャパラダイス？」

「え!? ちつがーう! 間違えた。これは間違いだ」

真剣に渡す本を間違えた自来也。慌てて「ド根性忍伝」と書かれた本を手渡し、イチャイチャシリーズを回収しようとするが「こっちも面白そう」と言われ、返してもらえない。

何度言っても返さないシャナに「18歳未満は、読んじやいけねえの」と言ったため、シャナは「じゃ18歳になったら読むってばね」と答えた。

その言葉に複雑そうな表情で、渋々部屋を出ていった自来也。その日、シャナは気持ちの整理をしながら、夜空を眺めて過ごした。

そんなことがあり、八雲が訪れたタイミングで全力で甘えているのだ。

気が強いと言われるシャナだが、本来の性格は、人懐っこい性格だった。普段はそんな姿を見せないが、自来也との話や、ナルトとのしばらくの別れ、怪我や体調の悪化などが重なり、甘えたがりの性格が表に出てきた。

弱ると甘えたがるシャナの弱点を知っていた八雲。これまでも何度か八雲にだけ見せていた弱点。

その面倒を見る八雲と甘え続けているシャナの姿が、ヤマト達が見たものだった。弱れば弱るほど、甘えん坊になるシャナの特性から、今現在は本当に弱り果てていると八雲は言う。

そんな様子を見ていたヤマトは、何とか納得。お見舞いついでに伝える事があつただけだからと、用件だけ伝えてすぐにトルネと共に復

興に向かった。

シヤナの体調が回復次第、第四班はツーマンセルでしばらく、任務を受ける事になると伝えられた。主に男性陣と女性陣で分かれると伝えられた。

弱っているシヤナには、八雲が必要だろうとヤマトも判断した。

「ヤマト、ごめんだってばね」

「隊長だよ。とは言わないから、今は体と心を休める事だけ考えるんだよ」

そう言つてヤマトは、部屋を出たのだった。

シヤナが回復したのは、1週間後だった。そして、里に訪れたうちはイタチの存在、はたけカカシとうちはサスケの両名が意識不明となった事実が人づてに伝えられたのだった。

## 月の皇子

夕方前にうちはサスケの病室に訪れたシヤナ。シヤナは、意識を失ったサスケの額に浮いた汗を拭きとってあげていた。

ナルトが自来也と共に、五代目火影候補の綱手を探す旅に出た後、サスケの御見舞いはシヤナの日課になっていた。

なぜ今になってイタチが現れたのか、それはわからない。そして、イタチは何故、サスケを苦しめるような真似をしたのか。

彼の計画は知っている。サスケに自身を殺させることで、英雄に仕立て上げるといふ台本。

「サスケの気持ち以上にそんなものが大事だつて言うのかつてばね」

サスケの側にいるシヤナからすれば、理解できない感情。いや、理解はできるが、自分には出来ない不幸塗れの自己犠牲といえる。

サスケの御見舞いには、班員の春野サクラなども訪れてるようでありよつちゆう訪れる必要はないが、特にやることもなく面倒を見てしまう。

自来也は果たしてナルトに螺旋丸を習得させる事が出来るのだろうか。ただ、彼にならナルトを預けても大丈夫という確証があった。彼は強いという確証があった。悪い大人でもなく、真剣にナルトの事を考えてくれている大人だ。

シヤナとの意見の擦れ違いも、ナルトの事を考えた故の相違。

会いたくないのは、シヤナの意地である。

「お前の減らず口が聞けなくて退屈だつてばね」

サスケの部屋の空気を入れ替えた後は、シヤナはその場を離れる事にした。

今日の任務は、午前中に終えており、自由時間をどう過ごすか考えていた。任務の内容も八雲と一緒にアカデミーの訪問という訳の分からない任務だった。

なんでも最近目まぐるしい活躍をしているくノ一のシヤナ達に、生徒たちの面倒を見てほしいと依頼があったとか。そんなことしてる場合なのかと思つたが、八雲が乗り気だったため、仕方なく受理。

アカデミーに初めて足を運んだシヤナは、ここがナルト達が通っていた学び舎かと眺め、八雲も同じように校舎を観察していた。二人とも通えなかった同士で、目新しい光景に考えるところがあつた。

学校の教師たちに迎えられ、集められた生徒たちに紹介された。中には知っている顔（木ノ葉丸たち）がおり、心底怯えられてしまう。

そんな状況下でも、一応役割を果たそうと簡単な体術の指導や基本忍術の指導を行う。授業中に木ノ葉丸がおいろけの術を使い、海野イルカを倒そうとしたが、ギリギリでこらえられていた。シヤナはナルトの開発したおいろけの術の継承者が居たことに驚くも、まだまだ研鑽が足りないと思本を見せ、元々スタイルがいいシヤナより、更に声色気に溢れた美女に変化。そして、魅力を振り撒くポーズとわざと相手の体に触れる事による接触を加えた改造型おいろけの術を披露。見事にイルカどころか、男子生徒たちをダウンさせた。

その後は、子供たちの前で下品な術を使ったためか八雲にこれまで一番本気で怒られ、本気で泣いてしまい。昼ご飯の給食を生徒たちに慰められながら食すという辛酸を味わった。

そんな時間を過ごしたシヤナ。後は、日が暮れるまでという時間をどう過ごすか悩んでいた。通っていた映画館も戦争で半壊し、現在は稼働していない。正直暇をつぶす手段がなかったシヤナ。自来也にもらった小説は読破したものの、熱血ど根性系は、シヤナの趣味ではなかった。

ただ、登場人物がナルトということから、ナルトもこんな忍になれればいいのとは感じた。

木ノ葉の里は変わった。特にシヤナが変わったと感ずるのは、木ノ葉の人間のシヤナを見る目だろう。化け物のように見る目や憧れるような目、怪しむ目、疑う目、視線や思惑は違うとも、注目という形でシヤナの存在を見透かそうとする。

その視線がひどく鬱陶しく感じた。もとよりその目線は多かったが、最近めつぽう増えた。

視線にストレスを感じながらも復興中の木ノ葉を歩いていたシヤナは、自分のブレスレットが光っている事に気が付く。一月ほど前に



出会った青年、トネリのくれたブレスレットが光っており、まだ黄昏ではあったが、月が出ており今日は満月だったのだ。

シヤナは彼の言葉を思い出し、ブレスレットの光に導かれるように、日が暮れ誰も居ない木ノ葉の自然公園に足を運ぶ。そして、ブレスレットの光が一際強くなると、公園の池の写った月が一際輝いた。眩しさに目を閉じていると、自分の背後に気配を感じ、拳をお見舞いしようとする。

だが、その気配の人物は「驚かせてすまない」とシヤナの拳を優しく受け止めた。

「二月ぶりかな、シヤナ」

「本当に現れるんだってばね。てか、その頬どうしたの？」

シヤナの背後に現れたのは、不思議な雰囲気を持つ青年、トネリだった。シヤナとの共闘からちょうど一か月後に現れた彼は、顔中ロボロの姿であった。最近のものではなく、少し時間は経って居そうだが、端麗な顔が可哀そうなことになっていた。

「いたっ」

シヤナが、トネリの頬に触れると痛むのか、少し彼の表情がこわばる。

「シヤナ？」

「ふふ、痛むってばね？」

何故かトネリの反応を見て、傷を突くシヤナ。非常に性格が悪いと自覚しているが、ついやってしまう。何度か突いていると、手を取られ、止められる。

「君ってそんな性格だったかい？」

「いろいろあったんだってばね」

本当に色々あったのだ。むしろ、明らかに他国出身のトネリが今の木ノ葉に居ることがおかしい。

よく考えると侵入者のような気がしたが、未来視が警告して来ない以上、問題ないと判断。

二人で話しながら公園の池に面した木にもたれ掛かるトネリ。そんな彼と話しているシヤナは、うちではでもなく、木ノ葉の青い閃光で

もなく、ただの15歳の女の子であるシヤナとして接してくれるトネリを気に入っていた。

木に凭れるトネリの膝に勝手に頭を置いて寛ぐシヤナ。当然トネリは、顔を赤くして驚くが、そんな顔が可愛いのか、シヤナはトネリの頬を撫でていた。そして痛がる様子にケラケラ笑っていた。

シヤナが退かないとわかると、トネリも諦めたのか二人で誰も居ない公園内で寛ぎながら、話したかったことをお互いに口に始めたのだった。

## 月の皇子 2

トネリに里の戦争の話をするれば、彼は何と愚かなと呆れていた。どんな生活をすれば、木ノ葉の里の戦争を知らずにいられるのかと悩むシヤナ。

「本当に愚かな。何故チャクラを戦争にしか使えないんだらうね」

心底戦争をする人間の気持ち的理解できないトネリ。その筆頭で戦争をしていたシヤナの事を悪く言うような発言と態度にシヤナがむくれる。

「いたい、いたい」

「お前はいつも、忍がどうのというが、その筆頭は私だと忘れていないかってばね？」

「君の事を悪く言ったつもりは」

そう言っているのだから仕方ない。反戦主義だか知らないが、側面しか見ていない彼の言葉は、戦うことが大好きなシヤナにとつては癪に障る物だ。シヤナは反撃にトネリの傷跡を突き続ける。

「チャクラは忍術の為にあるものだってばね。そりや戦争に使うつてばね。術とは戦いの中で進化してきたんだから」

「違うんだ。チャクラとは本来」

「それに、私は好きだけど、戦争つていうのはさ、皆がしたい訳じゃない」

シヤナが話し始めると、トネリはシヤナの放つ新鮮な言葉に耳を貸してくれた。シヤナが彼の一族の嫌う最も卑しい存在だと理解したうえで。

「皆が皆武器を持ちたくて持つてるわけじゃないってばね。自分勝手な奴、勘違いした奴、どうしようもない奴が勝手に始めたんだってばね」

シヤナがシヤナなりに考えた戦争の仕組み。戦いたい人間などいない、などということはない。だが戦いたい人間は少数だろう。だが、その少数が存在するせいで武器を持つことを強いられた人間は多いはずだ。戦わなければ奪われ、虐げられるからだ。

抗うためには力が要る。なら武器を手取るしかない。そして抗い抗い、抗い続けた末に、戦いたくない人間と戦いたい少数の争いの規模が大きくなり、戦争になるんじゃないかという考え。

ある段階を超えたことで、守ることも攻める事もごちゃ混ぜになり、今の戦乱の世が生まれたと語るシヤナ。思想や感情、過去や未来、あらゆる要素が重なり、戦乱となってしまうた。

チャクラを戦争に使うことを嫌悪するトネリの意見はまっとうだが、まるで星の人々が全員争いを求め、自分たちで滅びる事を望んでるように言うのはおかしいと彼の考えを否定するシヤナ。

シヤナが思いのほかしくりとした考えを持っており、思ったより思慮深い一面に、底知れない不安を覚えたトネリ。

「君は、そこまで考えているのに、戦いを止めないんだね」

「私は、好きだとはつきり言えるから。強くなることも、力を振るうのも好き」

だとすれば、矛盾の塊はシヤナということになる。戦いは愚かだと思っている反面、愚かでも、そんな自分を誇りに思っていると。シヤナにとって許せないのは、弱い自分。

すべて奪われたからこそ、取り戻すために必要だった力。奪われないために、求めたのが力なのだから。その力を実感できる戦いが、好きだ。

シヤナは、酷く達観した表情で、戸惑いを隠せないトネリの臉を撫でる。この無垢な青年は、シヤナの中に燃える黒い炎を知りはしない。シヤナの人生は、託された弟を守るためと、九尾と仮面の男への復讐で出来ている。今話した両者の側面を持っているのがシヤナなのだ。

戦復讐いたくて仕方守のない女性と戦りいたくなくて仕方たのない女性。その二つが混在しているのがシヤナだ。

今こうして彼に向けている感情は何だろう。シヤナという女性にとって必要のない寄り道のような時間。八雲たちと過ごしているかけがえのない時間であっても、シヤナの本来の目的の邪魔となるなら、彼女は切り捨ててしまう。

いつかは自分から壊れてしまう存在、それがシヤナだ。けれども矛盾を抱えながらも、今を必死にあがき、悩み、誰よりも美しく生きているのもシヤナなのだ。

自分を見上げながら、怪しく笑う彼女にトネリが惹かれて仕方ないのは、その泥にまみれた中でも美しく一際輝く彼女の輝きに無い筈の目を奪われたからだろうか。

「野蛮だなんだというトネリも、どう考えても喧嘩の痕だらけだけだ？」

「それは、その、うん」

今度はトネリが話を始めた。彼も、自分の一族の決まりに異を唱えたという。そして、父と喧嘩になり、ほぼ一方的に敗北する形となったという。ただ、一族の掟に反した彼を許さず折檻した父だが、鳥籠の中から、一時的にでも扉を開けようとした息子の事を、誇りに思うと言っていたらしい。

(なんで、ここまでボコボコにするんだってばね?)

やりすぎではないだろうかと思案するが、トネリはどこか納得しているので話を聞く。初めての反抗に思うところがあつたのか、父から地上に降りる許可は貰えたらしい。何が掟に違反したかについては、シヤナの考えは、ジゲンとの戦闘だと思っていた。

実際は、既に決められていた約定による彼の結婚相手についてだった。

あろうことか、一族最後の末裔にして残された最後の一人であるトネリ。彼は、彼の一族にとっては、認められない宿敵のような一族、六道仙人、大筒木ハゴロモの子孫である、うちは一族の娘に好意を抱いてしまった。

それはあからさまで、報告を受けた父に問い詰められ、白状した。叶わぬ思いであり、先祖を裏切る行為であると、忘れるよう進言した父だが、トネリは拒否。次期当主である息子の我儘に教育を施すも、父の知らない頑固さのあつたトネリは、反抗。

一族と父親としての葛藤から「勝手にしろ」という言葉が出て以来、トネリは自由だった。

今の痛みの代償に、会いたくて仕方のなかつた彼女に会えるのだから、安いものだと思うのがトネリだった。

二人で話を続けていく。前と同じく、シヤナはトネリから泡遁の術を一つだけ伝授されていた。今回に限っては、シヤナからではなくトネリからの提案だった。起爆札で大怪我をしたシヤナの心配をして、泡遁の盾を教えると言ったのだ。

それはありがたいシヤナだが、いくら何でも明らかに血継限界を幾つも伝授されるのは忍びない。盗むならまだしも、丁寧に指導されると申し訳なさが出てくる。

それを伝えれば、トネリは首を横に振る。

「君が怪我をしないことより、大切な事なんてない」

「ええ〜。うーん」

なんかとても恥ずかしいことを言われている気がするシヤナ。正しい返しを思いつかず、結局技を一つ伝授してもらったことになった。熱心に指導され、チャクラの泡の盾を使えるようになったシヤナ。

そして、トネリの帰る時間となった。短い時間だけど会えてよかったと微笑むトネリ。今度はいつになるかわからないが、また会いにくるといふトネリの姿を見て、シヤナは咄嗟に彼の胸ぐらを引っ張った。屈むような体勢になったトネリは、唇に感じたことのある感触とシヤナの香りを感じる。数秒後に解放された彼は酷く狼狽える。

「シヤナ、きみ、え、また」

「へへ。私も会えてうれしかったってばね」

「と、きみって、ほんとうに、もう……あー!」

少し照れ臭そうな顔のシヤナは、呻きながら月の光に消えていくトネリを見送る。

こういうお礼の仕方を映画や昔家で見たことのある彼女。それを真似してみたのだが、光に消えていく彼の顔が真っ赤になっているのを見て、酷く満足感を得ていた。

他の人間にならこんなことしない筈。いや、弟にはしたいと思うが、今すぐにでもしたい。

(私、トネリを、ナルトと同じ弟と思ってるってばね?)

思考が斜めの方向に向かいかけたが、ほんのり赤い頬と普段とは少し違う心臓の鼓動が、シヤナに語りかける。それが何なのかを。シヤナも本心では気が付いていた。

(んな、訳ないってばね)

トネリがどうやったのか消え、一人になったシヤナ。公園で一人になった彼女は、誰も居ない場所で一人呟いていた。

「お母さん、私、お父さんみたいな優男系がタイプだったってばね」

母が居たら爆笑してくれただろう。父は隣で落ち込んでいそうだ。そんなことを考えながら、家に帰る彼女の姿は、月に愛された女神のように綺麗だったと通行人たちが語ったという。

## 大激突

トネリとの再会から一週間後。

シヤナとトルネと八雲の三人は、砂隠れの里の国境にいた。海に面したそんな場所に彼らが居るのには理由があった。

里から重大な任務を受けていたからだ。

それも中忍昇格と同時に、中々にリスクな任務を与えられていた。

その任務の内容は、木ノ葉と戦争後降伏した砂隠れの里と新たに同盟を結ぶにあたって木ノ葉からの要求を届ける任務。

「明らかに適任じゃないってばね」

要は使者として使わされていると言うことだ。そんな政治色の強い任務は嫌だと思ったシヤナだが、事情があったのだ。

まだ木ノ葉の里は砂を信用しきれず、砂から持ち掛けられた対談への返答を持っていく使者に、何があっても帰ってこられるであろうシヤナが選ばれてしまった。シヤナは嫌がっているが、木ノ葉の英雄扱いされており、政治的にも、シヤナを向かわせることで砂に対する威圧と同時に、アピールするのだ。

木ノ葉は現在も、英雄を使者に送れるほど国力を持っていると。

もし砂が裏切れば、シヤナは砂で暴れて報復してこいと言われていた。木ノ葉の上層部のご意見番たちにそう指示されたシヤナだが「却下」の一言で任務を放棄しようとした。

ご意見番たちは、その事に激怒し、自分の立場をわかっているのかと説教しようとしたが、シヤナの写輪眼に睨まれ、言葉に詰まる。

だが、八雲とトルネがシヤナを抑えながら、意見書を届けるだけでいいなら受けると宣言。無駄な争いを助長するような発言をしないでほしいと懇願。

「我々は、あなたたちご意見番が偉かろうが知った事ではない。ただ、シヤナを牽制するような態度はやめていただきたい。貴方達が何もしてない間に、彼女は命をかけて戦っていたんだ。その功績は、皆に認められたものです」



里は、反抗的なシヤナが英雄扱いされるのを望んでいない。だが裏付けされた経歴が、シヤナを英雄にした。そのことが気に入らないのだろう。そう感じたトルネは、上層部に警告した。

強く反論したトルネの姿は、シヤナ達からも意外だった。一番冷静で責任感の強い彼が、里の上層部に噛みついたのだから。

その後、シヤナ達の不遜で傲慢な態度に腹は立てていたが、ご意見番二人も他にも仕事があり、それを水に流した。

国境まで行けば、砂の使者が意見書を受け取る手はずになっている。だがすぐには帰れず、砂のメンツもあり何日かは、持て成しという名の滞在することになるという。だが、砂の国境に近づいた時、何か嫌な胸騒ぎを感じていた。

「トルネ君、シヤナ、少し休憩したいかな」

「わかった。今日はかなり頑張ったな」

「二人のスタミナの半分でも欲しいよ」

「私もお腹空いたってばね。お鍋食べたい」

国境に向けて歩いていたシヤナ達だが、連日の移動のせいで疲労がたまった八雲が早めにギブアップ。その願いを聞いて、二人も荷物を下ろして、休憩をとる事にした。焚火を起こし、食事も済ましてしまおうと3人で鍋を囲む。味付けと調理はシヤナが担当し、即席ながらも納得のいく味が出せた。

食事を終え、見張りも兼ねて、2人が起きて残り一人が眠ることになる。くじでトルネが一番目に眠ることになり、シヤナと八雲は見張り役となった。

トルネから離れた場所で二人で時間を潰していた。

「面白くない任務だったばね」

「今回は政治色強すぎだよね。私もなんか緊張してやだなって思う」

「でも、久々にトルネと任務だったばね。八雲さんはその点についてどう思ってるってばね?」

「どうとは?」

シヤナからの質問の意図がわからない八雲。

「最近距離が出来てるから、一気に近づくとチャンスではないかと」

「シヤナからそんな、言葉が出たことに驚愕だよ。今日地震起きない？」

シヤナに自分の恋愛の心配をされている八雲。まさかあのシヤナがそんな話をしてくると思わず、感知に集中してトルネのチャクラを感じ取る。どうやら熟睡しているらしい。

「だって、ヤマトも言ってたってばね。あの二人もどかしいって」

「嘘嘘嘘！　なんでヤマト隊長まで知ってるの？」

八雲がトルネを好きな事を知らない人間はいないだろう。シヤナとしても早くくっついてくれないかなと思う程に。稀に三角関係などと言われ腹が立つのだ。トルネの本心はわからないが、彼は八雲を誰よりも大切にしているだろう。

シヤナだって負けるつもりはないが、親友の愛を向けられているのは間違いなくトルネであり、彼はそれを受けるに値する人間だ。だが紳士的な彼は、適切過ぎる距離感を取る。それゆえに距離を詰められないのだ。

(キスでもすれば、丸く収まるんじゃない?)

シヤナがそう心で思いながら実は口に出してしまう。それを聞いた八雲がバシバシと顔を真っ赤にしてシヤナの肩を叩き始める。

「え、口に出してたってばね？」

「———!!」

バシバシと叩かれ続けるシヤナ。だが、八雲は長年の親友であるシヤナの心境の変化に、ある考えが浮かんだ。

「もしかしてさ、シヤナ、最近キスした？」

「した」

「え、誰と？」

八雲が尋ねれば、シヤナは前に話した青年だと素直に話した。親友が同じ相手とキスしたと聞き、シヤナを問い詰める。だが、シヤナは八雲と違い、恥ずかしいことをしたとは思っていない。キスは少し気恥ずかしいが、愛情表現だと知っているからだ。

父と母もよくしていた。

「じゃ、付き合うの？　彼氏彼女になるの？　結婚するの!？」

「飛躍し過ぎだつてばね！」

シヤナは何故か月で、トネリがくしゃみをしたことを感じた。シヤナは自分の気持ちナルトや八雲に向ける気持ちとは違うものを感じたと伝えた。それが恋であると考え、その感情に向き合うと口にしたシヤナ。まだ進展はしていないが、嫌われてはいないはず。

だから今後どうなるかはわからないと告げるが、八雲は違った。  
(絶対両想いだよ)

親友の恋は、いろいろと難しそうながらも、シヤナはどんな困難も乗り越えるだろうと思った。自分も負けたくないなと思った八雲。物想いにふける八雲の頬を指で突いたシヤナ。

「私は応援してるとばね、八雲の初恋」

「うえーん、シヤナが大人のお姉さんみたいだよ」

「お姉さんが相談に乗ってやるってばね」

「うぐ、……あのねシヤナお姉さん、私ね」

同い年で、恋愛なんて一生しなれないと思ってたシヤナの変化。その変化に追い抜かれてしまった八雲は複雑だったが、素直にうなずく。シヤナの冗談に乗っかり、八雲も軽い気持ちで相談していく。

そんな会話をしていた時、シヤナは遠くからの視線を感じ、振り返る。急に振り返ったシヤナに八雲は何かあったと感知を始めるが、何も感知できない。

だが、シヤナは、海の方角を凝視し、暗い夜の海の海面に浮かぶ、青の輝きを目視する。それは写輪眼でなければ見えない距離だったが、シヤナはその青い光が目だと気が付いた。

何故なら、暗い海で輝く青い光と夜でも輝くシヤナの青い写輪眼の輝きが同じだったからだ。そして、それは間違いなく青い写輪眼と青い写輪眼だった。

「八雲、トルネを起こして！」

妙なプレッシャーを感じ、シヤナは粒遁・天翔でその光に接近する。八雲から離れ、海を駆け抜けたシヤナだったのだが、突然、海に壁のようなものが現れ、シヤナの量子化した躰が激突。一方的に弾かれたシヤナは、海面に落下する。

どうにか着地できたが、シヤナの写輪眼には結界のようなものを展開している人物が写った。水面の上にも結界を展開し、その上に立っていた。

「私と同じ眼をした奴が居たのね。ハイドが私の生まれ故郷かもしれないと言ったけど、あながち間違いじゃないのかしらね」

右目は閉じられ左目に青い写輪眼を持ったシヤナより年上の女性。年齢は20くらいだろうか。薄い黄色のショートボブで、衣服は異国の白銀の鎧のような姿だった。全く見たことのない系統で、文化圏の違いを感じる。顔立ちは、端麗だが表情に狂気が宿っており、閉じられた右目に火傷の跡があった。

そして、その胸と両手の甲に、凄まじい密度のチャクラを宿した鋏石を装着していた。

「貴方、この国の人かしら？」

「違う。お前は何者だ。何故、写輪眼を持っている」

「シャリンガン？ 私の目の名前なのね。そう、なるほどね。ここが故郷なのかな」

顎に手を当てながら、何かを考えている女性。シヤナは、相手の正体がわからず、警戒心を高めながら女の周囲を観察する。何重にも張り巡らされた結界忍術を展開しており、その一つがシヤナの粒遁を防いだ。

「そうだ、自己紹介するわね。私の名はラビリンズ」

名を名乗った瞬間、女が独特な印を結ぶ。そうすれば、無数の結界の柱が、海面から浮上してくる。それらがシヤナに向かって襲い掛かってくる。シヤナは、火遁の術で迎撃するが、炎はすべて結界で作られた柱によって寸断される。

仕方なく体捌きで避けていく。

「あれ、見えるの？」

女の使う結界忍術はすべて、目視できない。目視できるのは、写輪眼などの特殊な瞳術を持つ者だけであり、シヤナがその技を回避しているのを見て、驚いていた。そんな人間は初めて見たからだ。見えないう盾が見える相手がいることは想定外だが、女は瞬時に攻撃方法を変

更。

点ではなく面として結界忍術を膨張。シヤナは、高速で迫りくる結界の壁を避けられず、結界に激突。そのまま勢いよく吹き飛ばされる。

だが、瞬時に泡遁の膜を全身を守るように展開。全身をシャボン玉で覆うことで衝撃を無効化。距離を取ったことでシヤナのターンとなり、粒遁・天輪を発射する。3発同時に発射された天輪だが、女の周囲に展開されている結界に阻まれ、弾かれてしまう。四角い結界の角度を変え、角の部分でシヤナの粒子砲の威力を分散させる女。

さらに元々の結界の強度も高く、シヤナは粒遁奥義・天羽々斬で一刀両断にしようと考えるが、あの術は時間が必要であり、その隙を探る。

「厄介ね。この国の兵士は。カミラたちにも教えてあげなくちゃ」

シヤナの粒遁の光と、ラビリンズと名乗った女の使う結界忍術の打ち合いが始まる。結界を瞬時に柱状に展開し、それらを音速で飛ばす女性。シヤナでなければ回避できない攻撃を次々仕掛けながら、ラビリンズもすばしっこいシヤナを捕まえる手を考えていた。

そして、二人で粒子砲と結界の柱を打ち合っていたが、やがてシヤナの動きが止まってしまう。

「体が、重い」

「中のあるものを押しさえつける結界だから当然よ。」

凄まじい重力に動けないシヤナは、女が発射していた結界の柱の意図を知る。攻撃ではなくシヤナを閉じ込める新たな結界の支柱となっていたのだ。

身を守るのではなく中にいる人間を縛る結界。ここまで立て続けに結界忍術で戦う忍を見たことのないシヤナ。むしろ、結界メインで戦える忍など皆無だろう。未知の敵であり、シヤナやコダマと同じ青い写輪眼使い。

その正体を探る前に、動けないシヤナの体が縮小を始めた結界に押しつぶされ始める。そして、シヤナの体が煙に変わる。

シヤナは火遁の段階で影分身と入れ替わり、水中を泳いでラビリン

スに接近。結界ごと女を始末しようと至近距離で螺旋輪虞を発動。もう片方の手には結界を砕いたのちに、止めに使うチャクラ刀が構えられる。

「粒遁・螺旋、く」

「お姉さん、甘くはないんだよ?」

しかし、螺旋輪虞を発動するより早く、女の青い写輪眼が背後のシヤナを捉える。その写輪眼は、文様がウロボロスのような自分の尾を飲み込む蛇のような万華鏡写輪眼だった。にっこり微笑まれたことで死を悟ったシヤナは、今できる全力の防御である須佐能乎を展開。

その選択は正しかった。ラビリンスの体を守るように、巨大なチャクラで構成された巨人が現れる。それは間違いなく須佐能乎であり、女の展開するそれは、斧を持ち、牛のような角を生やした巨漢だった。「須佐能乎だつてばね?」

「そんな名前なのね」

須佐能乎同士の戦いとなり、斧をふり下ろしたラビリンスの橙色の須佐能乎。それを6本の腕で受け止めたシヤナの須佐能乎。結果は、シヤナの須佐能乎の腕が砕けるといふパワー負けをしてしまった。すさまじいパワーを誇るシヤナの須佐能乎を上回るシンプルな怪力。それがラビリンスの須佐能乎の個性なのだろう。

攻撃を受けるのではなく、弾くべきだったと後悔するシヤナ。しかし、シヤナの須佐能乎は形を保てず彼女の体が大海原に投げ出されてしまった。

そして海に沈んでいくシヤナ。

「逃げられたわね。私と同じ力に目、興味深いわね」

海に逃げたシヤナを眺め、しゃがみながら頬に手を置いているラビリンス。だが、ラビリンスは自分の展開する結界に突き刺さったシヤナのダガーを見つけた。吹き飛ばされる寸前に、シヤナが粒遁のチャクラを込めて投げたそれは、彼女を守る結界を何枚も貫いて突き刺さっていた。

ただでは転ばないシヤナらしい攻撃に、ラビリンスは驚きながら刺

さっていたダガーを手に取る。

「面白い武器ね。お姉さんあなたの事、気に入っちゃったわ。また会えるといいわね」

ラビリンスはシャナのやっていたチャクラの動きを真似して、ダガーにチャクラを流す。そうすればダガーの刃を覆うように結界の刃が形成される。その刃をうつとりと眺めながら、自分を最後まで睨んできた歯車のような文様の万華鏡写輪眼を思い出す。

その負けん気の強そうな顔は、必ず再戦を挑んでくるだろうと彼女に感じさせていた。

## 大激突 2

正体不明のラビリンスとの交戦で、いつもより早い撤退を選んだシヤナ。シヤナは直ぐに浜まで上がり、先行したシヤナを連れ戻そうとしていたトルネたちに合流。

「もしかして砂の襲撃だったの?」

「また戦争をする気なのか?」

シヤナが一応無事だったため、シヤナの交戦した相手について考察していた。シヤナも相手が結界忍術に近い技を使うことと、青い写輪眼を持っていることを伝えたが、何のヒントにもならない。

ただ、砂隠れの襲撃ではないと思えた。シヤナが手古摺るほどの実力者を木ノ葉崩しの際に投入しないのは変だし、写輪眼の事を本当に知らなそうだった。何より姿恰好が、砂隠れのある風の国の文化とはかけ離れている。使った術にしても、何かがおかしい。

濡れた体をタオルで拭きながら、シヤナの誘導で3人は、砂隠れの里に向かう。

シヤナの感じていた嫌な予感の正体はあれだったのだろうか。

シヤナが撤退した理由は相手の未知数さゆえであった。見たことのない系統の結界忍術を使い、それを攻防一体に仕上げるスタイル。さらに万華鏡写輪眼を宿し、瞳術は謎のまま。さらに青い写輪眼という特徴から、何らかの能力があると、シヤナとコダマの例から導き出される。

(二つつ分かるのが、あの女は、私やコダマと同じくらい強いと言うこと)

戦ってみてわかった。不意打ちなどの戦略も豊富で、戦闘技術にも隙がない。攻防一体の術を高いレベルで扱い、うちは一族の切り札も使える。あろうことか須佐能乎に関しては、シヤナの須佐能乎よりもパワーがあると来た。

先見の写輪眼を使う手も考えたが、女の背後に、何か武装した巨大軍艦のようなものも見えており、女一人に全力を出せば息切れしてしまう。



故の撤退であり、シヤナとしては苦渋の決断だった。だがあそこで戦えば、余計な被害が増えるとも言えた。一先ず砂隠れに向かうことに決めた。

可能であれば外洋から武装勢力が来たことを伝えようとも考えた。

唯一の気がかりが、自分の右足にある空っぽのホルスター。

(みんながくれたダガーなのに)

誕生日にもらったチャクラ刀のダガーをラビリンスに取られたことが悔しい。完全な不意打ちで投げてしまったが、仕留める事は出来ず、回収されてしまった。あれはシヤナの宝物でもあり、取り戻したいと考えていた。

あくまで勘だが、あの女とも近いうちに戦うことになるはず。

3人で砂に向かっていると砂隠れの海岸線があわただしい。夜だというのに、騒がしく、戦闘を行っている様子だった。それも大勢が戦っているらしい。

「戦闘してるの?」

シヤナ達から見て砂の忍達が戦っているのは、異国の大型鎧を纏った人間離れた巨体の兵士たち。武器も巨大なメイスやハンマーであり、なかなかお目にかからない武装をしていた。その軍勢と砂の忍達が交戦していた。

戦闘状態の他国の忍達に加勢するかどうか悩まれた。

明らかに劣勢な砂の忍達が徐々に押され始める。相手の兵士たちは命が惜しくないのか、特攻を繰り返し、砂の忍達は相手を警戒しながら徐々に前線を下げられている。このままではあつという間に劣勢となるだろう。

「シヤナ、八雲!!」

シヤナと八雲が戦闘を観察していると、遙か遠くから跳躍してきた異国の兵士がハンマーを振り下ろしてきていた。瞬時にトルネが渾身の拳を鎧兵士の胴体にお見舞いする。鍛え上げられた剛拳は、金属の鎧を陥没させ、その巨体を数十メートル吹き飛ばす。

だが殴ったはずのトルネは、その感触に違和を感じていた。鎧の中が何と言うか、まるで粘土のようで、内臓や骨といった人間として必

要な器官を備えていなそうだったのだ。

トルネが盛大に敵を撃破すると、砂の忍達もシヤナ達に気が付く。そして、敵国の兵士たちもシヤナ達に向かって襲い掛かり始める。

トルネが八雲を抱え、シヤナと一緒に砂の忍達のリーダーらしき男の所に飛ぶ。

「お前たちは？」

「木ノ葉からの協定の意見書を持ってきた忍だつてばね」

「君たちがそうか。すまないが、今は正体不明の敵との交戦中だ」

それはそうだろう。敵の規模も決して小規模ではない。本格的な侵略と見ていいだろう。シヤナはトルネに目配せすると、トルネは八雲を下ろして、砂の忍に交渉を持ち掛ける。

「我々も加勢したい。奴らは無差別の攻撃を繰り返している。どうか砂での戦闘許可をいただけませんか？」

低姿勢で頼むトルネ。迎撃は自己防衛で行うが、撃退は別。他国の忍であるシヤナ達が好き勝手暴れば、戦争の火種になりかねない。そう言った面は苦手なシヤナは、トルネに交渉を頼んだのだ。

現在劣勢であり、国境線を突破される危機に瀕する砂の忍達。木ノ葉からの使者は、青い閃光、毒蓮華、幻術姫の三名。木ノ葉崩しの際は、砂と音の忍に痛手を負わせた彼らだが、善意での協力を持ち掛けてくれている。

自国を守るためには、例外となる決断も必要。

「是非お願いしたい。どうか、ご協力を」

「了承した。シヤナ暴れていい。八雲はどうだ？」

シヤナはトルネの指示に従い、夜に輝く閃光となって戦場に舞い降りた。恐怖心が全くない鎧兵士だが動きは単調。何体集まろうとシヤナの敵ではない。粒遁の刃を纏ったチャクラ刀で次々に両断されていく。

暴れるシヤナの一方で相手の異質さゆえに、八雲の幻術が効果があるのか尋ねたが、八雲は首を横に振る。どうやら相手は、幻術の効かない存在らしい。そうなると著しく戦闘能力が低下する八雲。

だが八雲はトルネに「心配しないで」といって、親指を少し噛み切っ

て血を流し印を結ぶ。

「忍法・口寄せの術」

八雲が地面に手を押し当て口寄せした生き物は、巨大なシャコガイのような生き物であり、強固な貝殻に無数の棘が備え付けられていた。人一人を軽く呑み込めそうなほどの巨大な貝を口寄せした八雲。

「口寄せ？ いつの間に」

「中忍試験用だったんだけどね。見せる間もなく終わっちゃって」

元々、準備期間の一个月の間に、自分の弱点克服の目的で探し出した口寄せの契約動物である。卑留呼から引き継いでしまった血継限界はリスクが高いので、本戦でシャナ達と戦うならこの子を使うつもりだったのだ。

幻術使いで有名な忍に、二代目水影の存在がある。彼はハマグリのような口寄せ動物で幻術を使ったと言う。一流の幻術使いが、幻術を使う貝類を口寄せする例は多いらしく、八雲も感知能力を生かして見つけ出したのだ。

「あの鎧の兵士を倒して、七宝」

八雲の契約した口寄せのシャコガイの名は、七宝と命名された。言葉は話せないが、知能が高いらしく八雲の指示を聞き、彼女を守るように口内に匿うなり、全身の棘を発射した。

発射された棘は、人間サイズのものであり、軽々と鎧兵士の体を貫通して地面に縫い付ける。そして発射した棘は、すぐさま再生をはじめ、次弾を装填した。

どうやら全く問題ないらしい。防御力も高く攻撃能力も十分という便利な口寄せ動物に守られる八雲は安全だろう。本来なら、シャコガイも幻術を使う蜃気楼も出せるらしい。

「敵を減らす必要があるな。一気に行くとしよう」

毒はおそらく効果がない。なら剛拳で粉砕するしかない。トルネは、足の重り代わりの鉄芯を外し、瞬身の術でシャナの後を追う。そして、迫りくる鎧兵士を次から次に拳で制圧していく。

シャナ達が加勢したことで、流れが変わる。一気に侵入者を押し出す流れとなり、更に増援も駆けつけてきた。

浜辺一帯の砂が一気に舞い上がり、意思を持ったように鎧兵士たちを襲い始める。その術を見たことのある面々は、国境線の戦いに馳せ参じた人物、砂瀑の我愛羅の姿を捉える。

## 大激突 3

砂が津波となつて鎧兵士たちを襲い、砂の忍達の盾となっている。砂を操るのは砂隠れの我愛羅だった。彼は砂に乗って移動しながら、戦場で好き勝手に暴れているシヤナ達を見つける。

砂を足場に螺旋輪虞を連発しているシヤナの傍に近寄る。

「何故お前達が戦っている」

「私たちも襲われたんだってばね。戦闘許可は貰ってるから問題ないでしょ?」

「……不運だったな」

砂に派遣された直後に襲われているシヤナ達を気遣つたつもりだった。だがシヤナはその言葉を強く否定する。

「運が悪いのはあいつらだってばね」

シヤナの言葉を聞いた我愛羅は呆れるように鼻で笑い「そうだな」と返す。シヤナ達に続き、我愛羅まで参戦したことで敵は撤退に追い込まれる。

鎧兵士たちが次々に海に飛び込んで消えていく。その様子に砂の忍達は大声で歓喜の声を上げる。だが我愛羅は何故か、違和感を覚えていた。

そんな彼の肩をシヤナが叩く。

「まだ終わってない。最大限で浜を防御するってばね。はやく!」

シヤナの指示に従い我愛羅は、砂浜の砂を巻き上げ、巨大な砂の盾を形成する。その判断は正しかった。我愛羅の盾が完成すると同時に、沖合に停留していた巨大な異国の戦艦から大砲が撃ち込まれたのだった。次々に打ち込まれる大砲の前に、砂の盾が破壊され、大勢が吹き飛ばされていく。

その中で、シヤナは発射される弾丸を粒遁・天輪で迎撃していくが、砲撃の数が多いため、捌ききれない。八雲は、口寄せ貝の七宝の独断で、地面に潜り身を隠すこととなった。

残ったトルネは、飛んでくる弾丸を側面から殴ることで、軌道をそ

らしていた。それでも敵の攻勢は激しく、部隊長の指示に従い、撤退を余儀なくされた。

撤退することが決まり、シヤナが地面に潜った八雲を大声で呼べば、砂浜に潜っていたシヤコガイが現れ、八雲を口から出した後に消える。

シヤナが八雲の手を取り、二人で砂の忍に続いて撤退する。砂の忍達が撤退したのを見たのか、海からキヤタピラを携えた山のような兵器が上陸する。その兵器の動きは早く、下手すればキヤタピラに踏みつぶされてしまう。

「なんなのあれ？」

「皆目見当もつかないってばね」

シヤナと八雲が走っていると、砂に乗った我愛羅が「乗れ」と指示してくる。厚意に甘え、我愛羅の砂に乗ることで素早く移動する事が出来た。見たことのない兵器に逃げるしかできなかつたシヤナ達。

一夜が明け、昨日の戦闘の激しさを砂浜の惨状が語っていた。上陸した兵器は、途中にあった村や町を引きつぶしながら進み続けた。その様子を砂の忍達が追跡しているが、今現在連絡がない事から、追っ手は消された可能性があつた。

シヤナ達は、砂隠れの忍達が緊急で用意した前線基地に案内される。

そこでは、老人姉弟が実質的な責任者だつた。彼らはシヤナ達を見るなり深く観察していた。

緊張した面持ちの八雲の様子を見るなり、老人の弟が話しかけてきた。

「すまん、木ノ葉の使者の方」

「いえ、こちらこそ、とんでもないタイミングで訪れてしまつて」

八雲が老人の謝罪を断るなり、老婆の方が「本当にタイミングが悪いの」と嫌味を言う。その態度に腹を立てたシヤナが前に出る。

「ほう、うちの生き残りか」

「婆は引つ込んでろってばね」

「あのナメクジ娘よりも生意気な娘じゃな」

八雲を馬鹿にするような態度に立腹のシヤナ。シヤナの言葉を聞いた老婆は、笑う。

「ワシらとて隠居していたいんじゃないがな、誰かのせいでおちおち隠居もしてられんのじゃ」

誰かといっているが、それはおそらく木ノ葉のことを言っているのだろう。この老人は木ノ葉を心底嫌っているらしい。目を見ればわかる。明確な敵意と悪意を持って接している。この老婆の世代なら、第二次忍界大戦の経験者といったところだろう。

積み重なった恨みは、晴れる事はない。

「自業自得だババア。お前らが力も無く噛みついた結果だつてばね」  
「止せシヤナ」

協定を結びに来たというのに、目の前の老婆とシヤナの相性は悪い。このままでは戦争の火種になってしまうとトルネが止める。一方で老婆の弟だという人物も「姉ちゃんや、其処らへんにしとけ。今は木ノ葉と争ってる場合じゃない」と姉を嗜める。

「チヨバア。問題は、あの鎧どもだ。敵をはき違えるな」

「偉そうじゃな我愛羅」

「過去の遺恨よりも今の敵だ」

話を聞いていた我愛羅の後押しもあり、話が進められる事となる。シヤナ達の持ってきた意見書は、無事受理された。一応は任務完了となったが、木ノ葉に帰ろうにも、今現在敵対勢力の正体がわからず海岸線から木ノ葉に帰るのは危険ということになり、溪谷を通るルートを勧められた。

砂としても木ノ葉と争うわけにはいかず、彼らが無事に帰す必要があったのだ。

だが、戦争とは非情なもので、今シヤナ達が待機している前線基地に敵の巨大兵器がまっすぐ向かっていると伝令が入る。それも避難経路として指定された溪谷側から。今現在、前線基地の戦力は万全とは言いがたく、それでも食い止めようと忍達を向かわせているが、敵の中に手練れがいるらしく、戦況は芳しくない。

伝令を受けた我愛羅が「俺が行く」と宣言。

「仕方ないから、私たちも行くってばね。どのみち溪谷の方角に向かうためには、あのデカイ兵器を蹴散らさないといけないうってばね」

撤退するために攻勢に出るといふシャナ。どのみちラビリンズという女の事も気になっている手前、調査もしたかった。自分と同じ青い写輪眼の正体も気になって仕方ない上に、愛用のダガーを取り戻さないといけない。

ついでにと、シャナは自分が戦った敵についても情報を開示した。すると、話を聞いていたチヨバアと呼ばれた老婆が思い当たる節があると口にした。

「第二次忍界大戦のおり、岩隠れに間宵一族という結界使いの一族がおった。お前の戦った相手がそうとは限らぬが、似通っておる」

「ああ。おったな姉ちゃん。でも、あの一族は、二代目火影と戦って絶滅したんじゃないか？」

老人二人は懐かしいというように語る。結界を使う既に滅んだ一族。その一族とうちは一族の血を継いでいるのだろうか。気に入らない相手だが、戦争を経験し、シャナから見ても実力者である二人の言葉は注意深く聞いておくシャナ。

しかし、その一族を亡ぼしたのがこないだ戦った二代目火影というのは運命だろうか。偶然にもシャナには、ラビリンズ及び間宵一族の使う結界忍術に対する答えが浮かんでいた。

結果的に我愛羅と共に、地上を走る兵器の破壊を許可されたシャナ達。特例ではあるが、砂としても渡りに船であった。条件としてはシャナ達の自己責任という形だが、木ノ葉に帰るためには他国の勢力を叩くしかないのだ。

我愛羅と行動を共にすることになったシャナ。

シャナは、我愛羅の顔を覗き込むように見ていた。その視線に気が付いたのか我愛羅が疑問をぶつけてくる。

「なんだ？」

「なんて言うか雰囲気変わったってばね。憑き物が落ちたみたい」

シャナが素直に感想を述べれば、彼は空を見上げながら「そうだな」



とつぶやいた。我愛羅が変わった原因は一つだ。木ノ葉崩しの際に仲間を守るために命懸けで挑んできたうずまきナルトの影響だろう。お互いに尾獣を宿す人柱力であり、相手の痛みを理解したうえで、自分の仲間を死んでも守ると言った彼の言葉に心を動かされたのだ。

自分を殺せるほどの強者を殺すことでしか生を実感できなかった我愛羅は、他者を思いやることを学んだ。

「お前の弟のおかげだ」

「ナルトの？ ふーん」

何があつたかは詳しく知らないシヤナ。だが血生臭い狂人だったが我愛羅はどこにもいなくなってしまった。一度戦ってみたかったのだが、今の我愛羅は無駄な戦いはしないだろう。中忍試験で戦っておけばよかつたかと後悔していた。

「まだ私と戦うつもりあるってばね？」  
「ないな」

我愛羅が釣れない性格になってしまい悲しいシヤナ。だがシヤナとは違い自分の闇を乗り越えた彼を、シヤナは評価していた。みんなそれぞれの道を進んでいくのに、シヤナだけは過去から抜け出せないのだから。

我愛羅に連れられ溪谷にたどり着いたシヤナ達。まだ敵の巨大兵器の姿は見えていないが、探すことに苦労はしないだろう。溪谷の険しい道も我愛羅の砂のエレベーターで軽く乗り越えた一行。

便利な術だなと感心していた八雲。何度も礼を言いながら、運んでもらっていた。

そして、敵を探しながら進んでいると、溪谷にかまえられた村が焼き払われている現場に遭遇する。そこには鎧兵士もおり、巨大な陸上兵器も存在していた。

侵略者になすすべもなく蹂躪されていく村人が逃げ惑う。だが、鎧兵士たちは攻撃の手を止めない。

しかし、その巨大なハンマーが赤ん坊を抱いた女性の頭部を潰すより先に、砂の盾が砂の兵士の攻撃を阻む。我愛羅は、村人たちを庇い

ながら戦いに参戦する。

「村人を避難させる。お前たちは、奴らを減らしてくれ」

守りに関しては誰よりもうまい我愛羅。彼の指示にうなずいて第四班は戦闘を開始する。砂が逃げ惑う人々を守り、燃える村を消火していく。

シヤナ達が現れたことに気が付いた鎧兵士たちは、ターゲットをシヤナ達に変更。トルネとシヤナの二人は速度で彼らを圧倒。速すぎて反応できない鎧兵士たちに起爆札をつけたクナイを投擲する。

痛覚や臓器がないとはいえ起爆札の爆発は防げないのか、次々に戦闘不能となっていく。

「あ、ありがとう」

「礼はいい。戦いの邪魔だ。避難しろ」

村人から感謝の言葉を受けた我愛羅だが、彼らが居れば全力が出せないでそっけなく対応する。そして、村人たちが戦闘区域から避難したのを知ると、鎧兵士が守る巨大な兵器への攻撃を開始する。

「流砂瀑流」

両手を合わせ、チャクラを多大に消費することで膨大な砂の奔流を巨大な兵器を飲み込める規模で放つ。その質量と範囲は反則級で、地形すら変える術にシヤナ達第四班も戦闘を中断して退避する。

砂の濁流によって進路を塞がれた巨大な兵器は、なすすべもなく呑み込まれかける。だが、突如発生した巨大な結界によって砂は阻まれてしまう。

「なんだ？」

突然、砂が何かに阻まれたことで我愛羅が警戒心を強める。唯一その結界を目視出来たのは、写輪眼を持つシヤナだけ。チャクラを目視出来るシヤナでなければ見えない結界という術を見たことで、彼女はにやりと笑う。

「ライジングサンダー魔導昇雷撃！」

シヤナの笑みに答えるように、突然空から緑色の雷のようなエネルギーが降り注ぐ。シヤナ達はそれを回避し、我愛羅は砂の盾で降り注ぐ膨大なエネルギーをガードする。そして雷による攻撃が止むと同

時に、巨大兵器から、白銀の鎧を纏った少年とラビリンスと名乗った女が現れ、その背後にも鎧姿の女性二人が現れる。

先ほどまでの鎧兵士とは違い、こちらが本隊なのだろう。明らかに全員が異質なチャクラのようなエネルギーを身に宿している。シヤナの写輪眼からは、そのエネルギーは人間の練るチャクラとは違ったものに見えた。

「あらら、あなたは昨日の」

「ラビリンス」

「覚えてくれたのね。お姉さん嬉しいわ。またあなたに会えて」

ラビリンスは、シヤナを挑発するようにシヤナから奪ったダガーを見せびらかす。

## 大激突 4

ラビリンス含む4人と対峙することになったシヤナ達。

シヤナ以外の三人も、青い写輪眼を持つラビリンスの姿に驚いていた。それは相手側も同じく、シヤナの目を見て驚いている様子だった。

「ラビリンス」

「昨日の子ね。皆、気を付けた方がいいわよ。この子私と同じくらい強いから」

ラビリンスが仲間にも忠告する。ラビリンスの実力は、相手側でも飛びぬけているのか、全員が臨戦態勢に入る。

白銀の鎧を着た少年は、ラビリンスの傍で剣を抜いて話しかけていた。

「貴方が警戒しろという程の相手なのですか？」

「そうよテムジン。この子は私がやるけど、他の相手も強敵に違いないわ。なんせ、4人で私たちを止めに来てるんだもの」

テムジンと呼ばれた少年は、剣に緑の雷の性質変化に似たエネルギーを纏わせる。そのエネルギーは先程牽制に放たれた攻撃だと分かる。

シヤナ達が警戒していると、ラビリンスが独特の印を結ぶ。それは攻撃の開始の合図であり、彼女の地中に作り出した結界柱が地面からシヤナを奇襲した。写輪眼によって結界のチャクラを視認できるシヤナは、透明の见えない柱を回避。

雷遁を纏わせた手裏剣を仕返しに投擲する。

だが涼しい顔でラビリンスは、自身を守る4重にも重なった結界で攻撃を受け止める。

「砂漠枢……厄介な結界だな」

シヤナの攻撃をみえない結界で防いだラビリンスを見て、我愛羅が砂を操って攻撃を仕掛ける。相手を飲み込もうとする砂だったが、目に見えない結界に阻まれ、対象を拘束する事が出来ない。

「本当に見えないんだな。シヤナしか、ラビリンスの相手は出来なそ

うだ」

トルネは、冷静に相手の能力を観察してそう評価した。先程の攻撃も防御も全く見えない結界を用いたものだと言うことはわかるが、見えない上に奇襲性に富み、防御力も鉄壁という厄介な相手だ。なれば見えるシヤナが相手するのが正しいだろう。

少なくともトルネにとって相性の悪い相手と言わざるを得ないのだ。

シヤナとラビリンスの戦闘が始まるなり鎧姿の少年が剣を構えながら、シヤナに襲い掛かる。みすみす不意打ちを許すほどトルネも甘くはない。テムジンに走って追いついた彼は、テムジンの剣の腹を殴り、軌道を逸らさせる。

体勢を崩したテムジンの顔面に拳を振るうが、緑のオーラに包まれたテムジンの速度が急加速する。拳を空ぶったトルネの背後に回り込み、剣を振るう。

「なに!？」

「速いな」

胴体を捉えるはずだったテムジンの剣は、トルネの左肘と膝に挟まれ、受け止められる。

一瞬だが、テムジンの胸のあたりが光ったと思えば、緑のチャクラに包まれ、運動能力が格段に向上している。

テムジンの攻撃を防いだトルネは、開いた右腕を振るおうとするが、テムジンの剣から放たれた雷のチャクラに吹き飛ばされる。

吹っ飛ばされたが体勢を立て直し、テムジンを観察する。そして、雷のチャクラを受けて焼け爛れた自分の掌を確認する。痛みはあるが、戦闘には支障はない。

だが、テムジンの纏うチャクラは厄介で素手での攻撃は、自分がダメージを負うだけだろうと判断。トルネは、風遁の印を結ぶ。

「風遁・竜巻装」

両腕と両足に竜巻のような風遁の術を纏うトルネ。トルネの様子をうかがっていたテムジンは、剣に纏ったエネルギーを放つ。

「マジックサンダー  
ライジングサンダー」

「魔導昇雷撃」

迫りくるエネルギーをトルネは、竜巻を纏った両腕を突き出し、攻撃を弾いていく。竜巻は小さいながらも強力で、テムジンの放った一撃を正面から削り取ってしまった。竜巻を手足に纏い、打撃攻撃の貫通力と防御力、殺傷能力を向上する術がトルネの使用した術だった。雷の性質変化には、風の性質変化が有利だが、正体不明の騎士が使う技にもその法則は当てはまるらしい。

相手の攻撃を完封したトルネは、自分の判断が間違っていないと知り、攻勢に打って出る。

風を纏ったトルネがテムジンとの白兵戦に移行する。シャナとラビリンズ、テムジンとトルネが戦闘をはじめ、残った鎧姿の美女二人は、それぞれ我愛羅と八雲に襲い掛かる。

一人は蝙蝠のような姿に変化し空を飛んで上空から八雲たちを狙う。

「わ」

「油断するな」

我愛羅の砂が空から強襲する敵の攻撃を防ぐ。砂に阻まれ、更に砂に捕まりそうになった蝙蝠のような姿になった女は、高度を上げる。空を飛んで逃げる女を我愛羅の操作する砂が追いかけるが、もう一人の女が腕に電撃を纏いながら突っ込んできた。

我愛羅の砂の盾が自動で女の攻撃を防ごうとしたが、女の攻撃は砂の盾を貫通し、我愛羅の体を捉えて吹き飛ばす。

「他愛もない」

我愛羅の体を殴り飛ばした女は、自分の勝利を確信したが、視界が突然歪みはじめ、自分が殴った我愛羅の体が消える。

「馬鹿ランケ、何処殴ってるんだい！」

空で一部始終を見ていた蝙蝠女が電撃を纏った拳を虚空に振るつた仲間を見て激昂する。仲間の声で自分がまやかしを殴ったと知る女は、周囲を確認しようとしたが時すでに遅し。大量の砂が四方八方から襲い掛かり、彼女の体を包み込んでしまう。

砂の圧力によって身動き一つできなくなったランケと呼ばれた女を見て、我愛羅は自分の隣にいる八雲を見る。

(幻術か。今の一瞬で……相変わらず恐ろしい精度だな)

蝙蝠女の攻撃を我愛羅が防ぐと同時に、八雲は残ったランケと呼ばれた女に幻術を掛けた。その内容は、我愛羅達の位置を誤認させるというもの。相手はそれにまんまと引掛かり、我愛羅の砂に捕まる決定的な隙を晒したのだ。

上空にいる蝙蝠女も捕まえようと、周囲の砂を操り上空へと攻撃する我愛羅。だが、捕まえたはずの雷女の様子がおかしかった。

「我愛羅君、あの人、すごいチャクラを放出してる」

「わかっている。あんたは、下がっていてくれ」

砂で拘束された女が、膨大な電力の放出とともに脱出してしまう。砂の中から出てきた女は、酷く醜いゴリラのような怪物に変化していた。強靱な肉体と雷のエネルギーでバリアーを作っている怪物に我愛羅が砂を向けるが、雷のバリアーに阻まれる。

我愛羅は八雲を庇う様に出で、両手で砂を操作して怪物に変化したランケを捉えようとするが、彼女の放つ雷に砂を霧散されてしまう。

「まだ終わっちゃいないよ」

「肉体を変化させてパワーを増幅する体質か」

「私の荷電障壁殻ブラズマボールには、もうお前の砂なんて通用しないよ」

女はそういうと巨大な体に見合わない速度で駆け出す。我愛羅は何重にも砂による防壁を構成するが、それらがまるで意味をなしていないかのよう貫かれる。再び我愛羅を巨大な拳で殴り殺そうとしている。我愛羅は八雲と自分を乗せた砂を動かし、距離を取ろうとする。

だが、上空から蝙蝠女が雷の弾丸を口から発射、地上では爆走する巨人の拳が迫る。どうにか距離を取ろうとしているが、敵の方が我愛羅の砂より速い。

八雲も蝙蝠女と巨人の二人に幻術を発動するが、どうやら特殊なチャクラが全身に流れ続けており、幻術返しと同じくチャクラが乱れ続けているので、効果が薄い。

我愛羅は背中にいる八雲だけでも離そうと砂を動かそうとするが、

八雲が印を結んでいる。それは幻術の印ではなく、雷遁と風遁の複合の印。

「厄介な雷は私がかするから、仕留めなさい我愛羅君！」

唐突に命令された我愛羅だったが、八雲は勝利を確信している。故に従うことに決めた。印を結び終えた八雲は、両手を伸ばしながら術を発動する。

「嵐遁・嵐鬼龍!!」

かつて卑留呼が使った血継限界の術。幻術の効かない相手に対抗するために、八雲が習得した卑留呼の宿した4つの血継限界の一つ。不幸中の幸いともいえる卑留呼の術の継承。その猛威は、巨大な積乱雲となって空を飛ぶ蝙蝠女と地上を走る巨人女両方に襲い掛かった。

「なんだいこれは」

「ち、ちからが」

黒い雷雲は、雷を纏う巨人から雷のエネルギーを奪い取り、空を飛ぶ蝙蝠女も突如発生した嵐の暴風に煽られることで空を飛べなくなる。

一方、嵐を発生させる規模で術を発動した八雲は、全身から冷や汗が出るほど消耗しきっていた。だが、倒れる程ではなく体はまだ動く。それに、今の八雲には偶然とはいえ、心強い協力者がいる。

「砂瀑大葬」

「いやー!!」

積乱雲に電気エネルギーを吸収されたランケには、もう砂を防ぐ術はない。我愛羅は、流砂瀑流によって足元に積もった莫大な砂を利用。その砂でランケを包み込み、一気に圧力をかけて押しつぶした。断末魔を上げながら一瞬で潰された中を見た蝙蝠女は、どうにか空中で体勢を立て直そうとするも、時すでに遅かった。

「絶対に逃がさない」

我愛羅の操る砂で上空まで移動していた八雲は、手の触れそうな距離で必殺の五感を騙す幻術、天花乱墜の術を発動。幻術返しをしようとも、八雲の天花乱墜の術を至近距離で食らえば、抜け出すことはできない。



「なんだ、これ、いや、いや、あがあああ」

八雲の幻術にはまった蝙蝠女は、全身のありとあらゆる箇所がねじ切れる幻覚を見せられる。その幻覚に騙された脳は、実際に肉体を捻じ曲げる程に稼働させ、関節を自分の筋力によって粉碎。無理やり壊されたりミッターのせいで全身の筋肉が蝙蝠女を殺す武器となってしまう。

そして、その痛みで悶えながら、自分の首を自分の首の力だけでへし折った蝙蝠女は、地面へと落下していった。

その惨たらしい最期を見て、我愛羅も少し同情していた。

「ふふ、無様なものね」

地面に落下し潰れた女を見下ろしていた八雲は、不敵に笑っていた。酷く滑稽だと足で何度も踏みつけ、踏み躪っていた。その様子を見ていた我愛羅は、八雲の手を取って止める。

「そこまでにしておけ」

我愛羅が制止すると、八雲はきよとんとした表情で呆然としていた。

「あ、ごめん。ちょっと意識が飛んでたみたい」

チャクラの使い過ぎが原因だという八雲だが、意識が混濁している様子はなかった。あまり八雲の事を知らない我愛羅でも様子がおかしいのはわかった。

「シヤナ達を探しに行かなきゃ」

仲間を心配し、救援に向かおうとする彼女の後姿を見て、我愛羅は少し身震いしている自分に気が付いた。僅かにだが、我愛羅が八雲の腕を掴んだ時、彼女の顔が変化しているように見えた。

（まるで般若のような怪物だった……、あれはなんだ）

我愛羅には八雲の顔が、角の生えた般若のような怪物に見えていたのだった。しかし、他里の忍である八雲の事に介入する権利はない。それにまだ敵は残っている。今はその殲滅が最優先だった。

## 大激突 5

シヤナとラビリンスの戦いは、死闘という他なかった。

高速で動き回るシヤナに対して、結界の防御を固め砦のように完全の態勢で攻撃を仕掛けていくラビリンス。シヤナの牽制に行う生半可な攻撃では結界に阻まれる。

かといって大技を披露しようにも、地面からはやしてくる結界の柱と結界を飛ばしてくる遠距離攻撃。さらに逃げ道を塞ぐように檻のように結界が展開され、戦い難いことこの上ない。

「そのダガー返せってばね！」

「え？」

シヤナは、粒遁と瞬身の術を駆使してラビリンスを翻弄しながら叫んだ。何故かお気に入り武器のようにシヤナのチャクラ刀を持っているラビリンス。

それは自分のものだから返せと叫ぶ。戦闘中に子供みたいなことを言うシヤナにラビリンスはきよんとする。

「いやよ。お姉さんこれ気に入っちゃったんだもの」

「大人しく返せば、命だけは助けてやるってばね」

会話しながらも無数の結界柱を地面に展開、シヤナの命を摘み取るうと的確な攻撃をしていく。シヤナの動きは素早い、写輪眼を持つラビリンスには、スローに見えてしまう。それでも仕留めきれないのは、シヤナも写輪眼を持ち、ラビリンスの術を洞察できているからだ。

互いに術と速度で命を取り合ってるが進展がない。シヤナは、火遁や粒遁・天輪での攻撃も仕掛けるが、結界に阻まれる。

一方で万全の防御態勢のラビリンスも遠隔攻撃では、シヤナを捕まえきれない。詰将棋のように追い詰めていくはずなのに、最初の一手で射程圏外に逃げられる。感が良いにしても程がある。

(もしかしてだけれど、この子も何かが見えているのかしら。私の糸と同じような何かが)

シヤナが未来を見えるように、ラビリンスにも人には見えないものが見えている。それは糸だった。人と人、物と物、何かと何かの繋が

りを糸のようなビジョンで視認できるといふものだ。それは確かな繋がりであり、簡単に切れる事のないではない。特に思い入れのある品物であれば、その執着が糸の強さと強度に影響を及ぼす。

僅かな物からでも相手につながる繋がりを通れば大元にたどり着けるといふもの。戦闘には役に立たないが、何かを探すことに於いて彼女より優れた人間はいないだろう。

そして、彼女にしかない能力は、まだあった。

「命は助けてやるって、お姉さんより弱いあなたが言うセリフじゃないわ」

「嘘！」

そう言いながら、距離を取って戦っているシャナの心臓と自分の持つダガーに伝う糸を、手練り寄せた。すると、シャナの体が凄まじい力で引き寄せられる。シャナの写輪眼でも一切感知できない引き寄せにより、距離を強制的に縮められる。抗えない引力によって、砦と化したラビリンスの結界に引き込まれる。

何か術を使われた訳でもない。なのに引き寄せられる状況に、理解が追いつかないシャナ。

「粒遁・大玉螺旋輪虞!!」

引き寄せられる力に抗うことはできない。なら利用してやるまでと、シャナは引き寄せられた勢いを利用して加速。右手に通常の3倍はある巨大な螺旋輪虞を構成し、ラビリンスの結界を打ち砕こうとする。

(機転が早いわね。この子、本当に油断ならぬわ)

ラビリンスが10枚にも及ぶ結界を展開し、防御態勢を取るが、シャナの繰り出した粒遁・大玉螺旋輪虞がその守りを次々に粉碎していく。あつという間に残り一枚となった結界。

「終わりだつてばね！」

最後の結界が砕け散り、無防備なラビリンスの体に巨大な螺旋輪虞が触れそうになる。勝利を確信したシャナだが、その青い写輪眼は、突然未来を映し出した。シャナの意志にかかわらない本当の緊急時に発動する未来視。それが写したのは、シャナの右腕が肩から切断さ

れ、次の瞬間に首が体と泣き別れする未来。

突っ込み切る直前で制止したシヤナ。するとシヤナの右手にあった大玉螺旋輪虞が切断され真つ二つになる。

「あれ、なんで、躲せたのかしら？」

（こいつ、遠距離タイプじゃない。ガチガチの接近戦タイプ）

シヤナはラビリンスの実力を読み違えていた。結界を用いた防御と遠距離攻撃主体の相手かと思っていたが、シヤナのダガーを用いて作ったチャクラ刀を振るい、シヤナごと螺旋輪虞を一刀両断仕掛けた腕から推察するに、近接タイプだと判断した。

相手の戦闘スタイルから勝手に接近戦は苦手だと思い込んでいたシヤナは、自分の頬が切られていることに気が付く。

シヤナが攻撃をかわしたことに違和感を覚えたラビリンスは、結界と同じ性質の刃を構えながらサーベルの構えを取る。

ラビリンスに対抗してチャクラ刀を構えるシヤナ。だが、剣を構えたラビリンスに隙が見つからない。下手に動けば、剣術では圧倒的に劣っているシヤナでは勝てない。たったの一振りを見ただけだが、剣術という分野において、ラビリンスを超える存在はいない。そう思わされるほど、惚れ惚れする腕前だった。自分に振るわれたのに、つい眺めたくなるような太刀筋だった。

「貴方お名前は？」

「……シヤナ」

「シヤナか。お姉さんこれから本気出そうと思うんだけど、色々話したい事、あるわよね？」

自分が本気を出せばシヤナが死んでしまう。だから、今のうちに話を済ませておこうという提案。酷く舐められたものだと憤るが、ラビリンスは、シヤナが戦った中で上位に位置する実力者。実際殺される未来もあり、彼女の言葉は自惚れではない。

そして、ラビリンスも自分と同じ青い写輪眼を持つシヤナに興味があるのだろうか。

「参考までに聞きたいのだけれど私達、姉妹って訳じゃないわよね？」  
「さあ。知らないってばね」

顔は似ていない。同じなのは青い写輪眼だけ。シヤナ自身自分のルーツを知らない。気が付けばあの忌々しい場所で虐げられていたのだから。ラビリンスも自分の過去を知らない一人だった。物心ついたころには、海を渡った先にある大陸で生きていた。

幼少から、繋がりの糸が見えたラビリンスは、その能力で自分の家族を探したことがある。だが糸は、細く掠れており、海を渡っていたため見つけれなかった。

だがこの数年の間に、自分から伸びた4本の糸に気が付いた。戦争の絶えない大陸の生活に辟易としていたラビリンスは、理想郷を築くというハイドの思想に賛同し、莫大なエネルギーを秘めた鉱石、ゲレルの石の鉱脈を大陸を渡りながら探していた。

そんな中で、3人ほど青い写輪眼を持つ少女と出会った。

一人は、白い長髪にバンダナを巻いた大柄な老人と赤毛の少女と旅をする車椅子に乗せられた幼い少女。全身を包帯で覆われ、僅かに覗くその青い写輪眼には、深い絶望の色があったのが印象的だった。そしてその身に何かどす黒い物の怪を宿していた。あの時は戦闘にならず、正直ほつとしていた。得体のしれない力を持つ子の名前はリトラと呼ばれていた。

一人は、傭兵稼業に勤しむシヤナと同じ年くらいのマント姿の女性だろう。なんと表現するべきか、まさに百獣の王だった。国家を跨いで手配されるほどの戦闘狂で、生きる事が戦う事というような奴だった。心底戦いを楽しみ、自由に生きている印象だった。

自分の力を試すためなら、国家にも喧嘩を売るような奴だった。名前は、グライア。こいつとの死闘でシヤナが須佐能乎と呼ぶ能力に目覚めた。

一人は、なんとというかアホの子だった。黒髪のツインテールを翼にして音速で飛行する少女。名前はコダマ。突然移動要塞に突撃したあの子は、大海の中心で方向がわからない、迷子になったと泣き喚きながら、警備兵を蹴散らして、移動要塞の一隻を沈めた。こちらとしても防戦だったのだが、敵対行為に対して敏感なのか、ラビリンスが追い払わなければ、計画が頓挫していた可能性もある。

自分と同じ目を持つラビリンスを見て、妙に懐かれたのが印象的だった。ハイドが組織に引き入れようとしたが、彼の目を見るなり「おじさん、性格悪いね。それに戦争を無くすのに必要なのは理想郷じゃないんだよ。世界に与える痛みだよ」と語りながら、どこかへ飛んで行った。

そして残った一人が、シヤナだ。全員と出会ったラビリンスは、何かの繋がりを感じていた。

## 大激突 6

戦法を接近戦に切り替えたラビリンスは、シヤナの想像よりも強かった。剣術の面では絶対に勝てない才能の差を見せつけられ、切り傷が増えていくシヤナ。何度もチャクラ刀同士で切り結びながら、致命傷だけは避ける。

万華鏡写輪眼の瞳術の使用も、チャクラ消費の重さから迂闊に使えない。

(結界を捨てたラビリンスが此処まで強いなんて、想定外だつてばね)  
「逃がさないわよ」

接近戦ではじり貧だと考えたシヤナだが、ラビリンスは繋がり糸を掴むことでシヤナを引き寄せる。強制的に引き寄せられるせいで、シヤナは自分のペースを取り戻せない。

自分のペースに持ち込んだラビリンスは、一息すらつかせぬ勢いでシヤナを追い立てていく。

縦横無尽に振るわれる刃は、シヤナの写輪眼をもつてしても見切れない。

「火遁・豪火、ちっ」

仕切り直そうにも、術を発動する隙がない。ラビリンスの写輪眼は、片目ながらもシヤナの僅かな動きも見逃していない。

シヤナは、チャクラ刀を振りながら、周囲に粒子を散布していく。

「防戦一方ね。けど、守ってるだけじゃお姉さんに勝てないわよ」

「誰が守るだけだつてばね！」

シヤナは、ラビリンスの背後に散布した自分のチャクラ粒子を目印に自分を口寄せした。粒遁・天門によってラビリンスの視界から消え、背後に回り込んだシヤナ。ラビリンスは強いが忍術を知らない。故に時空間忍術という術を想定していない。

そして、シヤナの天門の元となった飛雷神の術は、うちは一族の写輪眼に対する対抗策として編み出されたものだ。

その効果は絶大だった。

「螺旋輪虞!!」

背後に回り込み、瞬時に掌に発生させた螺旋輪虞をラビリンスの無防備な背中に叩きこんだ。螺旋輪虞を叩き込んだシャナだったが、彼女の目は驚愕に染まっていた。

(こいつ、咄嗟に背後に剣を)

螺旋輪虞が直撃する寸前。シャナが消えたことで唾然としたラビリンスだが、背後からの気配に僅かに反応。剣を背後に向かって振り、螺旋輪虞の輪っかの部分だけを破壊した。だが本体である球体の部分は健在であり、ラビリンスの鎧を砕きながら、彼女の体を吹き飛ばした。

吹き飛ばされたラビリンスは、溪谷の崖の部分に激突した。輪っかの部分の持つ切断を防いだとしても、直撃を受けたラビリンスは無事ではないだろう。

忍術についての不慣れさが、ラビリンスの敗因だった。彼女が忍を熟知していれば、シャナが殺されていた可能性がある。確かな手ごたえがあつたため、写輪眼を解除しようとしたシャナだったが、背筋に走る殺気に印を結びながら振り返った。

ラビリンスが叩きつけられた絶壁の土煙が瞬時に晴れる。

「なんだってばね、それ」

土煙の中から現れたのは、火傷によって閉じられていた左目が開かれ、緑に強く輝く義眼が覗いていた。そしてその義眼から溢れ出るエネルギーがラビリンスの体を循環。そして頭部に牛の角を思わせる結晶の角が発生していた。

先ほどまで戦っていたラビリンスとは、様子が明らかに違う。

危険な臭いを察知し、先見の写輪眼を発動したシャナ。その未来視は、幾千万ものシャナの死が待ち受けていた。

莫大な雷エネルギーを纏うラビリンスの目がシャナに向けられた瞬間、シャナは粒遁・天翔を発動。とにかく距離を取ろうと、全力での退避。その場から逃げようとしたシャナを見たラビリンスはその場から消える。

「雷牛彗星（アステリオス）」



シャナの先見の写輪眼で見切ってもよけられない速度。亜音速で移動する粒子となったシャナを後から追いかけて追い抜くラビリンスは、まさに稲妻。雷そのものとなって移動する彼女は、距離を取って天翔を解除し振り返ったシャナの首をチャクラ刀で切断した。

粒遁に追い抜かれると思っていなかったシャナは、雷そのものとなって移動する自身を上回るラビリンスの一撃を受け、真っ赤な鮮血を首のあった所から散らすこととなった。咄嗟に須佐能乎を発動もしたが、須佐能乎ごとく一刀両断される。そして、電撃となったラビリンスが通り過ぎた後、電撃によつて焼かれてしまった。

シャナの亡骸が地面に落下する様を見たラビリンスは、地面に降り立って義眼を閉じる。すると、ラビリンスの姿が元に戻り、膝をついて肩で呼吸をしていた。

消耗が激しいのか、シャナにもらった一撃が響いているのかはわからないが、すぐには動けない様子だった。

「危なかったわ。けど、お姉さんの勝ちね。切り札は最後まで取っておくものよ」

勝利を宣言したラビリンスだが、次の瞬間口から吐血をしてしまう。

脇腹に食らった螺旋輪虞のダメージは、意外にも深刻で、彼女を蝕んでいた。できれば殺さない事も考えていたが、そんな余裕はなかった。特に最後の不意打ちは、どうにもならなかった。須佐能乎を出す事も間に合わない。故に切り札の一つをきらされた。

「ごめんなさいね、お姉さんあなた相手には手加減してあげる余裕なかったわ……うるさい、私は、そんなの望んでないわ。黙ってて」

シャナを殺してしまったことに少し後悔していたラビリンスだが、突然一人で誰かと話し始め、その存在を拒否していた。

戦場がかなり離れてしまったため、すぐにでも仲間と合流にするため戻らなくてはいけない。

ラビリンスは、傷口を手で押さえながら、その場を離れた。

ラビリンスが離れて少しすると、首を斬られたシャナの亡骸が土く

れに変わる。そして、地面に隠れていたシャナが這い出てくる。

全身土まみれになりながら、地面から這い出てきたシャナは、両膝を地面について吐きそうになっていた。今回は本気で死に掛けたのだ。殺気を感じた瞬間に、瞬時に土分身を発動。そこで入れ替わっていたシャナ。未来視の中で唯一生存できる方法がそれだった。

土分身のシャナは、本体が隠れている間に粒遁で距離を取って、ラビリンスの術を見極める役割だったのだが、一瞬で倒されてしまった。

土分身は、土を媒介にしているので破壊されても消滅はしない。死体を偽装し、ラビリンスを遠ざける事が出来た。弱っているラビリンズに奇襲を仕掛ける手も考えたが、未来視が不安な未来を映すため断念。あまりにも死の未来が多すぎるため、シャナの精神がごっそり削られた。

だが、ラビリンスの手のうちの一つを解明できた。ラビリンスの変化した姿は、実質的な強化状態なのだろう。チャクラの性質的には、木ノ葉崩しの際に、大蛇丸の護衛をしていた4人衆の変化に似ている。その変化によって膨大な雷の性質のチャクラを蓄電していた。そして、恐るべきは雷そのものになって移動する術。雲隠れの雷影も雷遁のチャクラを纏うと聞いたが、ラビリンスのそれは違う。

雷そのものとなった彼女の速度は、まさに稲妻。シャナの粒遁すら超える速度で移動できる。速度で初めて負けたシャナ。

生き残るためとはいえ、逃げ隠れる事を選択させられた。正体不明故に、少しづつ攻略していくしかない相手だが、シャナのプライドは深く傷つけられ、不意に涙が流れる。地面を何度も殴りながら、息を整えていく。

(一先ず合流するってばね)

シャナは、ラビリンズを警戒しながら、八雲たちと合流を目指した。その後、八雲と我愛羅の二人に合流したシャナだったが、テムジンという少年と戦っていたトルネが行方不明になったと聞かされた。

## 大激突 7

八雲から聞かされた話では、テムジンとトルネは概ねトルネが優勢だったらしい。だが、テムジンは、次第に能力を開花し始め、トルネと激しい体術戦となっただけらしい。

そんな状況下で、突然敵の要塞から砲撃が始まり、八雲は傍にいた我愛羅の守りによって無事だったがトルネとテムジンの両名が爆撃に巻き込まれ、溪谷を落下。行方不明となった。

その話をしている八雲は終始泣いており、シヤナが慰める事となった。

「トルネなら問題ないってばね、砲撃で死ぬような奴じゃないから」「でも、でも」

「嘆いていても何も始まらないってばね。トルネを探すしかない」

シヤナが励ましていると、話を聞いていた我愛羅が話しかけてきた。彼の傍には連絡用の伝書鳩が控えており何かのメッセージを受け取ったのだろうか。

「敵を見失ったことから、砂から一人増援が来る。誰かを探すことに関しては、うってつけの奴だ」

「増援？」

「お前達なら知っている奴だ」

我愛羅にそう言われ、我愛羅の仲間を思い出すが、探索に向いている人間が居たのだろうかと首を傾げる。その後、意外な人物と遭遇したシヤナ達は、溪谷で行方不明になったトルネの搜索を始めたのだった。

一方。溪谷での戦いで爆撃に巻き込まれたトルネは、溪谷の下に流れる川に落下していた。そして、下流まで流された彼は、偶然通りかかった流れのキャラバンの住人に拾われ、命を救われていた。

キャラバンの統率者である老人の指示で治療を施され、全身包帯姿になったトルネ。彼の治療を担当してくれた女性が、トルネの手袋を外そうとしたところで、制止する。

「外さないでほしい。俺の手は毒がある」

「あ、はい」

非常に驚かれたが、自分でも変な体質だと思うのでその反応は、気にしていない。むしろ、見ず知らずの自分を介抱してくれたことに感謝しかない。だが仲間の事が心配で早くこの場から離れなければという考えが頭をよぎる。

そして、何よりも警戒しなければいけないのは、自分の隣で包帯を巻かれて眠っているテムジンと呼ばれた騎士の存在だろう。

どうやら彼もトルネと同じく砲撃に巻き込まれ、川に流されたのだろう。仲間からの容赦のない砲撃に晒されていた。その時の表情は哀れで、酷く同情もしてしまった。

忍たるもの、任務の為なら、仲間を犠牲にしなければいけないこともあると理解はしている。だが、実際に見せられると、辛いものがある。

やがて、夕飯の時間となりトルネは、キャラバンのリーダーらしき老人と食事をする事となった。

「お前さん、木ノ葉の忍かね」

「はい。そうです」

「木ノ葉の里は少し前に戦争があったと聞いたが、まだ続いているのか?」

移住の民である彼らは、寄る町々で情報を得るため、最新の情報を知らないのだ。トルネはすでに戦争が終わり、別の任務中に戦闘に巻き込まれたと説明。もう一人の少年がその相手だと伝える。だが、中立を宣言した老人は、キャラバンにいる間は、争いごとはなしにしてくれと懇願してきた。そうしてくれれば、二人とも別々の村に連れていくと約束してくれた。

村につけば、木ノ葉との連絡手段もあるだろうと説明された。

「お前さんも、頼むぞ」

「……」

老人は、眠っていたはずの騎士、テムジンに話しかける。彼は目を覚ましており、武器を探していたが、老人の話聞いていたためかト

ルネと争うつもりはなくなったらしい。彼も仲間の元に戻らなければいけないのだろう。

だが、仲間達から攻撃されたことはまだ、彼の心にしこりを残しているようだった。

第三者の介入で、停戦せざるをえなかったテムジンとトルネ。仕方なく同じ鍋の料理を食べていると、テムジンはトルネを観察していた。

「なんだ？」

「……お前に聞きたいことがある」

テムジンは、トルネと向き合いながら質問をしてきた。敵であるテムジンの問いに答える義務はないが、このキャラバンに助けてもらった以上、下手に刺激しない方が争いにならないと判断。

「答えてもいい。だが、俺の質問にも答えてもらう」

情報を交換することが条件だというトルネ。少しテムジンの表情が硬くなるが、すぐに頷いた。

「なぜ、俺を庇った？」

いきなり核心をついてくる質問。その答えは、なんといいばいいのかトルネを悩ませた。戦闘中、トルネはテムジンを倒す直前まで追い込んだ。不思議な力を使うが、研鑽度合いで言えばトルネの方が圧倒的に上だった。

しかし、戦闘中、テムジンの乗っていた地上要塞からの砲撃が始まるなり、呆然と立ち尽くしていた彼を見たトルネ。

酷く傷ついたような、信じられないといった表情で戦闘中にもかかわらず立ち止まっていた。そのままではあつという間に砲撃に晒され死んでしまう。放っておけばよかった。そのはずなのに、トルネは、砲撃の雨を掻い潜りながら彼を助けてしまった。

その結果が今の状況なのだが、何故助けたかと聞かれれば、一つしかない。

「お前が哀れだったからだ」

「っ」

自覚があったのだろう。戦闘中にショックで固まってしまった自

分に。プライドが高そうだと思ったがそのようで、不機嫌な表情になっっていた。

「今度は俺の番だ。お前たちは何ものだ」

「我々は」

そこから、テムジンの語りが始まった。彼は、海を渡ってきた異国の住人だという。彼は、ハイドという名の指導者の下に集まった同志たちの組織であり、戦争のない理想郷を作るために海を渡ってきたという。

（戦争のない理想郷。そんなものが本当に可能だと思っているのだろうか）

「お前達が使っていた力、あれはなんだ？」

テムジンからの質問。チャクラや忍術のない文化圏出身の彼には、忍の存在そのものが珍しく見えるのだろう。チャクラについても説明したのち、彼の持つゲレルという力についても質問した。

ゲレルの石という鉱石の持つ力であり、それをを用いる事で強大な力を得られるという。テムジンの肉体にもゲレルの石が移植されており、それにより力を得ているという。

「お前、これからどうするつもりなんだ」

「俺はハイド様の元に戻る」

「殺されるかもしれないぞ。実際お前を切り捨てた奴だ。死んだことにして、新しい人生を歩むのも可能はずだ」

トルネがそういえば、テムジンは激昂しトルネの胸倉を掴んだ。

「ハイド様は、そんなお方ではない。きつと事情があつたんだ。……それに俺は、戻らなければならぬ。仲間が待っている」

その言葉に嘘はないだろう。トルネは、必死な表情の彼に謝る。

「お前もハイド様に会えばわかるはずだ。あの人は偉大なお方なんだ。お前たちの持つ不思議な力にも興味がある。どうだ、俺と一緒に行かないか？」

「無理だな」

命の恩人であるトルネに提案をしたテムジンだが、すげなく断られる。断られると思っていたようで、それ以上は何も言っていないテム

ジン。そんな彼とトルネの話は遠くで聞いていた老人は、飄々としたいつもの表情から一変。

深刻な表情となっていたが、その事実には気が付く者はいなかった。

## 大激突 8

その後、テムジンとトルネの二人は移動するキャラバンに同行させてもらっていた。驚くことに一晩で傷が治癒してしまったテムジン。その治癒の早さに、ゲレルの石というアイテムの存在が本物であると確信したトルネ。

無事に近くの村まであと少しというところまで来た段階で、キャラバンは、野生の狼の群れに狙われてしまった。

大人達が木の棒などの武器を持って追いつこうとするが、当然効果が薄い。

命を救われた恩があるためトルネは怪我を庇いながらも、狼たちと追いつこうと伝えた。

「ぎゃー!!」

しかし、タイミングが悪かったのか、大人達に交ざってダチヨウを安全な場所に移動しようとしていた子供が居た。狼に驚いたダチヨウが暴走し、子供を背に乗せたまま、キャラバンから離れてしまう。その光景を見ていた狼達が一斉に追いかける。

いくらダチヨウが速いとはいえ、子供を乗せたままでは、長くは逃げきれないだろう。

「俺が行くー!」

トルネが追いかけるというより先に、白銀の鎧に身を包んだテムジンが飛び出した。その後ろをトルネも追いかけるが折れている肋骨が痛むため、いつもの速度が出せない。数分間テムジンの後姿を追いながら、トルネは森の中で横たわるダチヨウの死骸を目にする。

間に合わなかったと思っただが、すぐさまテムジンが動いた。

「木の上だ!」

「たすけてー!」

「生きていたか」

子供は、木の上に登ることで如何にか逃げ延びていた。だが狼たちは腹を空かせているのか、木の上にいる少女を囲んでいた。



剣を抜いたテムジンは、素早く狼たちの懐に入るとその首を次々に切断していく。

トルネも毒手を解放し、一撃で狼たちを沈めていく。やがて、生き残った狼たちは、トルネとテムジンに恐れをなして逃げ出した。

狼が居なくなつたことで子供が木から降りてくると、テムジンが怪我の有無を確認していた。

「怪我はないか」

「うん、こわかった。こわかったよー」

なきじやくる子供に戸惑っている様子だったテムジンだったが、子供を慰めるように頭を撫でていた。その姿を見ていたトルネは、彼が悪人ではないと感じた。

（根はこちらなのだろうか。なら、奴の言うハイドという存在が怪しいと見える）

彼から聞かされたハイドという存在。理想を語る一方で、実力行使を厭わないという。テムジンを含む配下には、ゲレルの石の移植による改造を行い、適合しない者は、別の装置を用いて、遠隔操作式の兵士とするらしい。

それも子供ばかりを徴用しているらしい。軍の規模にしては大人が圧倒的に少ない。

泣き止んだ子供連れ、徒歩でキャラバンへ戻ることになった。疲れたのか子供が寝てしまい、テムジンは子供を抱えながら歩いていた。

「新たに一つ聞いてもいいか」

「なんだ」

「お前たちの求めているのは、争いのない理想郷だと言っていたな。実際にお前はそう望んでいるんだろう。だが、お前たちのやり方は戦争を助長するだけだ。それがわからないのか？」

「何かを成すためには多少の犠牲はつきものだ。大義を成すための尊い犠牲、ハイド様はそうおっしゃられた」

そう言いきつたテムジン。だがその顔には迷いがあつた。頭で理解していても、納得できないところがあつたのだろう。

「お前自身はどう思っているんだ」

「なに？」

「それはお前の主の言葉だろう。納得していない様子だったからな」

テムジンは不機嫌そうな顔になる。トルネ自身も敵である彼と何を話しているのだろうかと感じたが、言葉を止めるつもりはない。

「平和のために犠牲を必要とする理想郷、俺は御免だ」

どの世界にも似たような思想はあると感じた。大勢を生かすために、少数を切り捨てる。だがそんなことを続けても平和などこないだろう。忍として生きてきたトルネには、それがわかっていた。

キャラバンに戻る最中に、異変に気が付く。何故か火が上がっており、何者かに襲われた様子だった。動物たちは全て倒れ、キャラバンの住人たちは一か所に集められた状態でテムジンの仲間である騎士たちに囲まれていた。

キャラバンの長は、髪長い鎧姿の女に捕らえられており、その横にはシャナを苦戦させたラビリンスという青い写輪眼を持つ女もいた。

テムジンが仲間の元にかけていく。トルネは咄嗟に身を隠して様子を窺うことにした。

「フガイ、ラビリンス、何故ここに」

「テムジン。生きてたのか。しぶとい奴だねえ」

「テムジン、どれだけ心配したと思っているの。お姉さん、一瞬たりとも安心できなかったんだから」

フガイと呼ばれた長髪の女は、テムジンの姿を見て意外そうな顔をしていたのみだが、ラビリンスは違った。すぐにテムジンに駆け寄ると、彼の無事を確認していた。

「俺はなんともない。それよりも、どうやってここがわかったんだ。それに、何をしているんだ」

聞き耳を立てていたトルネは、テムジンたちの会話を聞いてしまった。

ラビリンスと名乗った女の能力で、ゲレルの鉞脈の位置を記された

書物との縁を辿っていった結果、このキャラバンに辿り着いたらしい。テムジンとの再会は全くの偶然だという。

ラビリンスは、同郷であるテムジンの搜索をしたがっていたらしいが、何度も何度も砂の忍との戦闘が勃発。本来の目的であるゲレルの鉱脈を知る一族の探索を最優先にさせられたという。

そして、偶然にもトルネとテムジンを救った彼らこそが、ゲレルの鉱脈の手がかりを知る一族だという。

故にキャラバンの長老である老人が、手荒な方法で情報を聞き出されているのだ。

(助けに行こうにも、今の状態で、何処までできるか)

恩人である上に、強力な兵器に転用できるゲレルの石の鉱脈をテムジンたちに回収されることは、木ノ葉の忍として、その大陸に住むものとして見逃せない。

だが、怪我は治っておらず、敵にラビリンスが居る段階で、勝機は薄い。どうするべきかと悩んでいると、フガイと呼ばれた女が鼻を動かしながら、隠れ潜むトルネの方向を見た。

「おや、ネズミが居たようだね」

匂いで場所を探知されたことで、トルネは戦闘態勢に入った奴らに完全に狙われることになった。僅かな迷いで、奇襲の機会すら失ってしまった。

心臓の音が、いつも以上に高鳴り、冷や汗を流しているのを感じた。

## 大激突 9

隠れている事に感づかれたトルネは、こちらから打って出るかと思案していた。だが相手側の戦力からして、全滅させることはできない。よくて一人だけを葬れると言ったところか。

(さて、どうする)

一步一步近づいてくる女。すでに戦闘態勢で、顔が犬のように変形していた。変化の術とは違う肉体変化のようなもので、昔戦ったコダマも似たようなことをやっていた。

絶体絶命かと思われた時、青い光が彼の眼前を通り過ぎた。そして、光は仲間との再会で油断していたテムジンを吹き飛ばすと真つすぐにラビリンスへと飛んだ。

「しつこいわね貴方」

「お前を殺して、私の宝物を返してもらうってばね」

青い光を結界で受け止めたラビリンスは光の正体である少女を青い写輪眼で睨む。同じく青い写輪眼を持つうずまきシヤナもラビリンスを睨み付ける。何度か交戦している二人だが、決着らしい決着はついていない。執拗に追跡を続けるシヤナにラビリンスもいい加減、堪忍袋の緒が切れそうだった。

シヤナも自分の忍具を奪ったラビリンスを逃すつもりはない。そしてなにより、最強である自分に、本能的に勝てないと思わせた屈辱を晴らさなければいけない。

互いにチャクラ刀を構え、火花を散らし始める。突然の戦闘開始に反応の遅れたフガイ。彼女はラビリンスの助太刀をしようと、駆け出す。

(感謝するシヤナ)

その隙を逃すトルネではない。脇腹を庇いながらも飛び出し、豪快な回し蹴りを叩き込んだ。

「くそっ」

忍犬並みの嗅覚でトルネの接近を察知したフガイは、直撃する寸前

にガードするが、トルネの一撃で岸壁に叩きつけられてしまう。瓦礫に埋もれたフガイを見たラビリンスは、青い光となって連続攻撃を仕掛けてくるシャナを剣術で捌きながら、得意の結界を足元に展開。

空中に階段を作り、距離を取ろうとする。シャナが追いついてきたと言うことは、すぐに彼女の仲間も合流するだろう。

そうなれば、戦況は一気に不利になる。ようやく再会できた弟分であるテムジンの身柄の回収は難しい。彼はシャナによって意識を奪われ動けない。

シャナの写輪眼はラビリンスの一举一動を正確に観察している。ラビリンスの意識がテムジンに向けば、人質に取られかねない。

(青い写輪眼を持つ女は、何でこうも厄介なのかしらね)

「フガイ!! 引くわよ!」

奥歯を噛みしめながら、撤退を選ぶラビリンス。ハイドの言う理想郷、その目的のために流された血は計り知れない。だが、ようやく悲願が叶おうとしている。

ラビリンスの声に応えるように、谷中に響くような爆音で狼が吠えた。瓦礫を蹴散らし、中から、狼人間が姿を現す。そのあまりの音にトルネとシャナは耳を塞ぐしかない。

その隙に、ラビリンスの作った結界による階段をフガイが駆け上がっていく。その顔は人間に戻っており、ラビリンスの撤退に不服といった表情である。

「なぜ逃げるんだい! 目的の場所はずすぐそこだっていうのに!」

「だからよ。今は、慎重すぎて損はないわ。ようやく悲願が叶うのよ。取りこぼしてしまった、あの子たちの為にも……、必ず成就させる!」

撤退を開始したラビリンスとフガイ。ラビリンスは谷に置き去りにしてしまったテムジンの姿を見つめながら、どうか無事でいてと願う他なかった。

そして、思い出すのは、剣を取った時の記憶と誓い。

数年前に、忍文化のない大陸で拾われ育てられたラビリンス。傍には、何時も子供たちが居た。年下の面倒をよく見た彼女に懐いた子供

達は多く、平和に暮らしていた。その中にはテムジンや彼の友達もあり、彼女は、村の子供たち全員を家族のように愛していた。

だが、理不尽な暴力というものは突然牙をむく。野盗によって平和だった村は、壊滅させられた。その襲撃は酷いもので、女子供問わず皆殺しにされた。助けられるだけ助けようとしたラビリンスだが、戦う力の無かったラビリンスに救える命などなかったに等しい。

目の前で子供たちの命が奪われ、自身も片目を奪われ殺されかけた。だが、ラビリンスには、うちへの血が流れており、大切な家族の死は、彼女の力を開花させるに十分だった。

激情のままに力を振るい、テムジンたちだけでも救う事が出来た。だが、少女の身に突然湧き起こった力の代償は重い。瀕死の重傷を負ったラビリンスは、ただテムジンたちだけでも救えたことに満足だった。だが、テムジンたちや彼女を救い出した男が居た。

それがハイドという男だった。彼は孤児となった3人を拾い、傷の治療や衣食住を与えてくれた。他にも孤児がおり、彼はそんな身寄りのない子供たちを引き取り育てていた。

そして、自らの理想を語り、戦争による不幸を無くしたいという願いに力を貸してくれと頭を下げた。テムジンたちは、その理想に共感し、手を貸した。

一方、怪我と須佐能乎の後遺症により自分で立つことも出来なくなり、衰弱していたラビリンス。彼女は自分の命が長くないことを悟っていた。

そんな彼女の病室にハイドは訪れた。ハイドは、ラビリンスの弱り果てた手を掴むと、語りかけてきた。

「どうか、あなたの素晴らしい力を、私に貸してはくれませんか？」

人格者だと知っているのに、男の目に底知れない恐怖を抱いたラビリンスだったが、彼の目的は素晴らしいものだど理解できた。もし自分が健康であれば、手伝いたかったと伝えた。

だが寿命が短いゆえに、何もできないと伝える。自分に出来る事は、大切な家族（村の生き残りである二人）を彼に託すことだけだと。だが彼は、ゲレルの石に適合すれば、治ると伝えてきた。そのため

は、苦痛に耐えねばならないが、自分の力でテムジンたちを守れると伝えられた。

大切なものを守るため、なによりも戦争による犠牲者を増やさないため、ラビリンスは兵器となる覚悟を決めた。

ゲレルの石は、彼女の失われた右目に埋め込まれ、完全に適合。テムジンと同じく、体の変質もなく力を純粋なエネルギーとして使用できた。その効果は靦面で風前の灯火だったラビリンスの命は、再び強く燃え上がった。

傷も完治し、暇があれば戦闘能力を磨き続けた。ラビリンスの中に宿る血筋が結界術を発現させ、天より授かった剣の才能も合わさり、天下無双となった。

だがいくら強くとも、ラビリンスに守れるものには限界がある。守ろうとしても、戦った孤児たちを救うことはできなかった。彼女に出来る事は、彼らの身を案じ、可能な限り戦うのみ。

何度泣いただろうか。理想郷を求め散っていった命に対して、彼女は陰で涙を流した。そして、自分たちの行いによって散らしてしまった命に対する罪悪感も彼女を襲う。

だが、託された願いと背負うべき贖罪が彼女を突き動かした。理想郷に至る。ゲレルの鉞脈を見つけ、その力でもって争いを無くす。究極の世界平和こそが、彼女の目的となった。

ラビリンスたちが去った後、襲われたキャラバンに八雲が合流した。無事だったトルネを見つけた八雲は感極まり、トルネに抱き着き大泣きしてしまった。トルネは肋骨の痛み能耐えながら受け入れた。そして何度も無事だと念押しし、彼女をなだめる事になった。

そして、泣き止んだ八雲と、テムジンを縛り上げ、キャラバンにいた幼子をあやしていたシャナを傍目に、トルネは意外な人物と向き合うことになった。

「まさか此処でお前と会うとはな」

トルネの前にいる人物は、顔を包帯で包み、蓑を纏った忍。

「覚えていてもらえて光栄です。今は音ではなく、砂の忍ですがね」

トルネの前にいたのは、中忍試験で会った音隠れの下忍の一人。腕に装着したスピーカーを使った音使い、ドス・キヌタだった。だが彼の言葉通り額当ては、砂隠れのものだった。彼こそが砂から我愛羅の代わりに派遣された忍。

「話せば長くなりますが、僕は、シヤナさんに命を何度も救われた。だから、個人的に貴方達に協力を申し出たのです」

シヤナによって大蛇丸の魔の手から命を救われたドス。路頭に迷った彼だったが、大蛇丸への復讐とシヤナに対する恩義から、あえて砂隠れへと亡命した。大蛇丸の情報や自らの命を糧に、砂に足を踏み入れ、報復を込めた酷い拷問にも耐えた。

そして、一切の自由と命を砂に預ける事で、どうにか受け入れてもらえた。そんな彼の初任務が、あろうことか恩人であるシヤナの応援人員だったのだ。彼はトルネの搜索を手伝うために、馳せ参じたのだった。

今も全身に刻まれた呪印によって、何時でも命を奪われる状況下だが、恩返しと功績を立て、砂の忍と認めてもらうためには好条件だった。そして彼は並外れた聴覚によって、トルネを探し出したのだという。

そんな彼の身の上話を聞き、警戒しながらも協力者を得られた第四班の一行。

彼らは気絶したテムジンが目覚めたのち、キャラバンのリーダーである老人から改めてゲレルの石に対する話を聞かされるのだった。



## 大激突 10

テムジンが目を覚ますなり、何かを知っている老人が、ゲレルの石に纏わる事実を伝え始める。シャナ達はそれを静かに聞いていた。

今回の異国からの侵略の原因であり、彼らの目的を知ることが今後  
の対策に役に立つからだ。

キャラバンの住人たちは、元を辿ればテムジンと同じ一族の末裔だった。彼らは、海を渡ったテムジンの一族とは違い、この地に残り、ゲレルの石の秘密を守ることを一族の使命としていた。

そもそもゲレルの石とは、テムジンの先祖が見つけ出し、自在に扱えた力。一族の王家だけが偶然見つけたゲレルの鉱脈から、ゲレルの石を精製出来たという。

ゲレルの力は凄まじく、戦いの力のみならず、あらゆる病を治し、作物を作り、寿命すら超越せんとするほどだった。その力で以てかつては強大な国すら築いたという。

だが人々は強大なゲレルの力を求め争い、やがてはゲレルによって繁栄した国すら滅んでしまったという。そして生き残った者たちは、ゲレルの鉱脈を封印したという。戦争で潰えてしまった、ゲレルの石に適合し、ゲレルの鉱脈をこの世から消滅させる事のできる者が現れるまで、見守ることこそが、キャラバンの一族の宿命だった。その事実が記されたゲレルの書を持ったのが、海を渡ったテムジンの一族だった。だが、彼はその事実を知らず、ゲレルの書の存在も知らないという。

その場にいた誰もが聞いた事のない伝承だが、実際にゲレルの石は存在する。テムジンの胸やラピンスの義眼がそれだった。

ならば、その強大な力を持つ鉱脈が、この大陸のどこかに封印されているのも事実なのだろう。

老人は決して、ゲレルの鉱脈の封印を解いてはならぬと念を押したが、テムジンは「むしろ覚悟が決まった。ゲレルの鉱脈は何として

も見つけ出す」と言った。

彼の態度に腹を立てたのか、シヤナが立ち上がりテムジンの頬を殴った。殴られたテムジンは口から血を吐くも、不敵に笑っている。そんな彼の胸倉を掴み上げたシヤナ。

「その耳は飾りだつてばね？　大陸が滅んでしまうような兵器を何故求めるってばね」

「ちゃんと聞いていたさ。どれほど強大な力だろうと、それは力ではない。要は使う人間次第だ」

「あれは、人間が持つべきではない力じゃ。決して、目覚めさせてはならぬ」

老人の言葉に対して強い決意を込めた目でテムジンは、話し始める。

「どんな力だろうと、ハイド様なら正しく使う。……争いは不幸しか生まない。なのに、誰かが上に立ってやらないと争いを止められない連中もいるのだと、ハイド様はおっしゃった」

彼は語る。ハイドの言葉は正しく、その願いこそが、あらゆるものを犠牲にしても叶えなければいけない悲願だと。戦争のない理想郷を作る。そのためには、どんな手を使ってでも石を手に入れる必要があると。

そして、テムジンは全身から雷状のエネルギーを発し、シヤナと自分を縛った縄を吹き飛ばし、唾然としていた老人を捕まえる。そして、老人の首を叩いて気絶させる。テムジンの狙いはゲレルの鉱脈の在りかを知っているであろう老人だったのだ。

無抵抗を演じていたテムジンの暴挙に、シヤナ達が臨戦態勢を取る。瞬時に首を落とそうとしたシヤナ達をトルネが手で制止する。

まさかの自分を庇うかのような行動に、テムジンが困惑している。「なんのつもりだ」

「二つだけ聞かせてくれテムジン。お前たちの言う戦争のない理想郷、そのためには、尊い犠牲もやむを得ないと言っていたな」

「ああ」

「仮に理想郷が実現したとして、お前は心から、亡くなった仲間達やお

前たちによって奪われた命に、顔向けできるのか？」

忍であるトルネには、やはりハイドの言う理想郷が理解できない。尊い犠牲の上に成り立つ、平和。その美しくも歪な願い。

どうやったって、この世から争いは消えない。だからこそ忍が生まれた。忍が必要のない世界。それを考えた事のある忍は多いだろう。そして、誰もその答えに至っていない。

誰もが自分の中や世界に矛盾を感じているからだ。もし、そんな方法があるとすれば、酷く極端な方法にならざるを得ない。トルネはハイドの目的を理解できていた。ゲレルの石を求める理由がなんであれ、その使い方は一つだ。

だからこそ、目を覚まさせてやりたかった。目の前の少年に。心から争いのない世界を求めているテムジンだからこそ。

彼は己が最も望まないことをするために、利用されているのだと。だが、その洗脳ともいえる崇拜は、テムジンの視野を狭めている。

「と、とうぜんだ。俺達は、自分でそれを選んだ!!」

「本当にそうか？ 他の選択肢がお前達にあつたと言うのか？」

「黙れ！ ハイド様の理想を邪魔するなら、誰だろうと殺す」

なんと見事な洗脳だろうか。助けた孤児に己の夢を語り、力を貸してほしいと願う。その状況下で、子供たちは、自分の意志で決断したと勘違いするのだろう。そしてその勘違いはやがて本物となり、そのものを縛る首輪となる。トルネはこのやり方を知っていた。

木ノ葉の暗部、根で行われている洗脳方法に、これと似たものがあると聞いた事があるからだ。

テムジンは、トルネの追求と目から逃れるように、光玉を地面に投げつけ、逃走を開始する。シヤナ達なら、その逃走を事前に防ぐことも出来た。

だが、トルネが彼らを行かせなかつたのだ。いつも任務を優先する彼らしくない行動に一同は、トルネの言葉を待つしかなかった。

「トルネ君、どうしたの？」

八雲の追求は当然と言える。トルネも自分らしくないと考えていた。

「元音の忍であるお前なら、追跡できるな？」

「ええ。もちろん」

「すまない。だが、アイツの事を助けてやりたくなつた」

もし自分が暗部に入っていれば、テムジンのようになっていたかもしれない。暗部でいる事を誇りに思い、どんな事であろうと罪を罪とも思わずに重ね続ける。それは、悲しい事だ。自分の気持ちを正直に語ったトルネ。

八雲は「なんだかわからないけど、トルネ君が我儘言うなんて、よっぽど助けたいんだね」と理解を示す。

「興味ないってばね。そろそろ追いかける。敵も総力で来ると思いうってばね」

シヤナは、ぼつさり切り捨てる。シヤナの目的は、ラビリンスとの決着のみ。ゲレルの鉱脈を前にすれば、ハイド率いる軍勢は、出し惜しみなく戦力を投下する。そうすれば、決着のついていなかったラビリンスとの戦いにも終止符が打てる。だからこそ、トルネの勝手な願いを邪魔するつもりもなかった。さらに心の内ではトルネが我儘を言っているだけでもないともわかっていた。

ゲレルの鉱脈を狙うハイド達。奴らを倒したとしても、大陸を吹き飛ばす兵器など、忍五大国が放置するはずがない。それを火種に戦争になる可能性もある。

だからこそ、老人の話で、ゲレルの石を消滅させられるテムジンとゲレルの鉱脈へ向かわせたのだ。この世からゲレルの鉱脈を消してしまうために。

「世界が減ぶかもしれないのに、暢気な人達ですね」

第四班の傍に控えるドスキヌタがそう零した。そして、テムジンの足音を頼りに、第四班とドスのフォーマンセルがゲレルの最終争奪戦へと向かったのだった。

一方で巨大な要塞で移動をしていたハイド率いる軍勢も、テムジンからの信号を受け取り、ゲレルの鉱脈へと進路を進めていた。その指揮を執っているのは、椅子に腰かけ、右目に眼帯をした恰幅のいい中

年男性。優しげな表情をした彼は、テムジンの齎してくれた功績を喜び、手元にあつた書物を眺める。その人物こそが、テムジンたちの崇拜するハイドだった。

ハイドは、己のガントレットに埋め込まれたゲレルの石を撫でながら、怪しく笑っていた。

「いよいよですね。ようやく、悲願が叶います」

その表情は、テムジンたちが信じ、崇拜する理想郷を追い求める男のものではなかった。怪しく笑い、瞳の奥に宿るのは明確な欲望だった。

## 大激突 11

テムジンが老人を誘拐、そして場所を聞き出したゲレルの鉞脈の在り処。

そこにたどり着いた時、彼はようやく悲願が成就するという喜びよりも、トルネの言葉が頭の片隅から離れなかった。

（俺は間違っていない。ハイド様なら、破壊の力を平和の力へ変えてくれる。……なのに）

これまで犠牲にしてきた仲間たちの顔が頭に浮かび上がる。彼らの死を無駄にしないために今日ここまで来たというのに、正しい事なのかわからなくなった。

テムジンは自分の不甲斐なさに苛立ちながらも、ゲレルの鉞脈が封印された古代遺跡へ足を踏み入れる。時代を重ねながらも繁栄の名残を感じさせる遺跡。その奥へ進み、ようやく何かの施設らしい広場にたどり着いた。

足場に古代文字が刻まれた広場で、ハイドの到着を待っていると、何者かの気配を感じて振り返るテムジン。

背後を見ればクナイを持ったトルネが存在していた。彼はそのクナイをテムジンの首に向け、ただ静かに「投降しろ」と告げた。

投降などしてたまるかと剣を構えようとしたテムジンだったが、トルネの回し蹴りを受けて地面に横たわる。

剣を取り落とし、ここまでかと思われた時、遺跡の壁を突き破り巨大な移動要塞が姿を現す。

その正体は、テムジンの仲間だ。警戒し距離を取ったトルネ。

そして、移動要塞のハッチが開き、中からラビリンズと狼人間のフガイ、そしてハイドが姿を現した。ハイドの姿を目にしたテムジンは跪く。

「ハイド様、ゲレルの鉞脈はこの下です」

「よくやってくれましたテムジン。おかげで理想郷はもう目の前です。では、皆さん参りましょう」

ゲレルの鋤脈に進もうとしたハイドに対して、火炎弾が飛来する。奇襲ではあったが、その炎は、ラビリンスの張った結界に阻まれる。そして、火炎を発射したのはシャナであり、敵意？き出しの目をハイドやラビリンスに向ける。

「おやおや、随分と失礼なご挨拶ですね。たしか、シャナさんでしたか？　話は聞いていますよ」

「私も話は聞いてたけど、こんな胡散臭いおっさんだったとは思わなかったってばね」

「いい加減しつこいわねシャナ。ハイド、この子は私が相手するから、先に行つて頂戴」

ラビリンスもシャナとの因縁に決着をつけたいのか、一番厄介な奴の相手を買つて出る。シャナも望むところといった様子で「待つてたつてばね」と受けて立つ。

ラビリンスが戦うのなら心配はいらない。そう考えたハイドだったが、突然トルネに呼び止められる。

「貴様に聞きたい。ゲレルの石を手に入れて何をするつもりだ」

「何つて、テムジンから聞いていませんか？　理想郷を作るんですよ。争いのない弱いものが虐げられない世界をね」

そう答えるハイド。だがトルネはその男の目を見て確信に至つた。

「その割には、やっていることが真逆に見えるが？　無抵抗な村やキャラバンを襲いながら、よく言えたものだな」

「仕方ないのです。全ては真の正義を成すための布石です。私たちも此処に来るまでに、多くの犠牲を払いました。全ては、争いのない理想郷を作るための尊い犠牲なのです」

トルネは反吐が出そうだった。この目の前にいる理想を語る醜悪な男に。

「尊い犠牲か。お前を慕い、募つた子供達を、そんな言葉で片づけるのか」

「わからない人ですね。何かを成し遂げるといふのはそういうことです。理想郷を作ること、私たちが仲間の共通の夢なのですから。そのためには多少の犠牲は、仕方ないの、でグゥ」

そう断言したハイド。彼にトルネは飛び掛かっていた。第四班で一番大人しい筈のトルネの突然の行動。隠れ潜んでいた八雲やラビリンズと向かい合うシヤナですら驚かされた。そして、強烈な一撃がハイドの顔を捉え、彼を床まで殴り飛ばした。

「ハイド様!!」

テムジンがハイドの駆け寄ろうとした時、ハイドから謎のエネルギーが発生。ハイドを殴りつけたトルネを吹き飛ばし、壁に叩きつける。

「やってくれますねえ」

起き上がったハイドは、口元の血を拭いながらトルネを睨み付ける。一方壁に叩きつけられたトルネも起き上がり、ハイドに敵意を露にする。

「お前の言葉全てが薄汚れているな。綺麗な言葉で繕わなければ、お前の本性が露になるのか？ ならば大したものだ」

「随分と好き勝手言ってくれますね」

「仲間とは、共に進むもの。それぞれが違い、それぞれが別の道を歩もうとも、決して切れぬ繋がりがりだ。お前のように切り捨てる事しか考えない仲間など、仲間じゃない。少なくとも俺の仲間を、俺は決して切り捨てたりはしない」

感情的になるトルネ。子供の頃、その毒蟲の影響で孤独の中にいた。だが、ある日仲間が来た。そして仲間と歩み仲間を守るために強くなった。自分の力を頼りにしてくれる仲間、自分を必要としてくれた仲間、そして同じようにトルネは第四班の仲間たちを家族だと思っている。

だから許せないのだ。目の前の男が。守るべき仲間を踏みつけ、それを当然のように語る男が。

ハイドとトルネが向き合っていると、自由になっていた老人が足元の装置を起動。遺跡が動き始める。

「何をした」

テムジンが隣にいる老人を問いただせば、老人は深刻な表情で「石を消滅させる。あんなものは存在していかん」と告げると、彼らが居



た場所のみ、エレベーターのように地中深くへと降下し始めた。彼らが降下すると直ぐに巨大な蓋のようなものが現れ、進路を塞いだ。

「石を消滅させる？ そんな方法何処にも」

ハイドは、老人の言葉を聞き、持っていたゲレルの書を開くが、そんな記述はない。怒りを露にしながら、降下した老人たちを追い、巨大な蓋を素手で粉碎した。そして宙を浮きながら、降下を始めた。

「ハイド様!」

残されたフガイという女が要塞で向かうべきだと告げるが「間に合いません。露払いを頼みました」とハイドが告げる。そして、彼の指示を聞いたフガイは、鎧兵士たちにトルネの排除を命じる。

そして、天井を突然見上げ、狼人間へと変身するフガイ。

「私は、こここそ隠れてるやつをやろうかね!!」

彼女の鼻はすでに、隠れている八雲とドスの二人を見つけていた。そして、巨大な咆哮を上げると、その音でもって壁を破壊した。

「ばれてたの!?!」

「一先ず距離を取りましょう。貴方の幻術もこう距離が遠くちや効果が薄い筈です」

ドスの判断に従い、追跡してくるフガイから逃げる二人。一方、残されたトルネに襲い掛かる鎧兵士たち。だが、頭に血が上っているトルネは、上着を脱ぎ去り、その鍛え上げられた肉体を露にしながら、剛拳にて一撃で粉碎していく。

そして、地中奥深くへ向かった老人、テムジン、ハイドを追って壁を蹴りながら追跡する。

狼人間であるフガイは、匂いで決して相手を逃がしはしない。徐々に距離を詰めていく。もとより持久力に難のある八雲が疲れから移動速度が落ちる。その様子を見ていたドスが迎え撃つ判断を下す。音で相手を察知するドスも正確にフガイの位置を把握している。このままでは逃げ切れないと考え、どうにか迎撃しようと話す。

その提案に八雲も賛成を示した。八雲一人が見通しのいい場所に

陣取る。

「おや置いて行かれたのかい。可哀そうに」

「可哀そう？ 私か？」

八雲を舐めているフガイ。実際、八雲からは強者特有の匂いは感じられない。血の匂いがしないのだ。一ひねりで首を引き裂いてやろうと襲い掛かったフガイ。だがその爪は、突如硬化化した八雲の肌に弾かれる。

金属のような固さになっている八雲の肌は、鋼遁によって齎された防御力を持っている。すぐさま、幻術を発動しようとした八雲だが、フガイが野生の勘から大きく距離を取る。

「え」

（こいつ、何かヤバい。まあいい、私の咆哮で吹き飛ばしてやる）

幻術に失敗した八雲。身構える彼女だが、爪が通じない八雲に接近戦をする気のないフガイ。息を大きく吸い込み、破壊力のある咆哮を放った。

このままでは、フガイの咆哮が硬化したとはいえ体重の軽い八雲のことなど吹き飛ばしてしまうだろう。だが八雲の手にあつた指輪の2つはすでに外されていた。

それは、フガイが八雲に急接近した際に外されたもの。

「待ってましたよ。お手柄ですよ八雲さん」

突然、何も無い位置からドスキヌタが姿を現す。フガイの鼻では、はるか遠くに逃げていた彼が急に目の前に現れた。その事実には驚きながらも、必殺の咆哮の射線上に立っているドスごと八雲を吹き飛ばしてしまえばいいと、フガイは安心した。

フガイの必殺の咆哮を、中忍試験の時より巨大化した籠手で受け止めたドス。彼は片手で印を結びながらフガイの咆哮を吸収していく。そして、フガイの咆哮が止むまで吸収し続け、彼女が息切れしている様子を愉快そうに見ていた。

「君の技が音でよかった。音であれば僕が最大活用できるからね」

フガイは、状況が理解できず枯れた声で尋ねる。八雲には聞こえないがドスの耳ならはつきり聞き取れた。

「八雲さんの幻術で、僕の姿と匂いを、君の五感から隠してもらったのさ。音に関しては僕は自分で消す事が出来るからね、君に気付かれずに接近しただけだ」

八雲が任されたのは、防御とドスの隠蔽。音で相手の行動を把握できるドスは、フガイが接近戦を止め、音による攻撃に切り替えた瞬間に、移動。莫大な音を音の忍術で吸収したのだ。

そして、ドスの持つ籠手は、吸収した音を何倍にも増幅する装置である。物理的な破壊力を持つ咆哮を何倍にも増幅すればどうなるか。それも音の操作によって方向を決められる彼から逃げる事は出来ない。

「く、くそがああ!!!」

フガイの叫びは、ドスが自慢げに籠手から撃ち返した咆哮によって彼女ごと消し飛んだ。すさまじい勢いで吹き飛ばされたフガイは、激突し崩れた岸壁に潰されたようだった。

「決め手は、負け犬の遠吠えですかね」

「使い方へんじやないかな？ それより行くよ」

危なげなく勝利した八雲とドス。彼らは、トルネにある事を頼まれていたのだ。一つは、砂への連絡。これはドスが担当。もう一つは、テムジンから聞かされていた、戦争に利用されている子供たちの救助だった。

二人はその作業に取り掛かるのだった。

## 大激突 12

「うおおお!!!」

「腕を上げたわね!」

ラビリンズとシヤナは、誰も居なくなつた空間で火花を散らしていた。影分身を使い、粒遁と体術の波状攻撃を繰り返すシヤナに、結界と剣術による防御でしのぐラビリンズ。以前シヤナの使つた天門による奇襲攻撃を警戒してか、自分の背後を結界で守っている。

そして、瞬間移動することを知つてからか、己の能力である繋がり糸を常に注視し、糸の方向が急転換した場所にシヤナが居ると把握した。シヤナもシヤナには見えないが何かしらの目印にて、ラビリンズがシヤナの場所を把握していると察知していた。

それ故に天門での奇襲は、完全に防がれてしまつていたのだ。

だがラビリンズの方も余裕というわけではなかった。

この子、どんどん早くなつてないかしら。それがラビリンズの感想だった。何度も何度も影分身を撃破していくうちに、シヤナの動きが早くなつているのを感じていた。

閃光となつて縦横無尽に駆け抜けるシヤナの動きをラビリンズは万華鏡写輪眼でしっかりと捉えている。だが徐々に早くなり、洗練されていく動き。

既に結界ではとらえられず、剣術によるカウンターを狙っているラビリンズ。間合いに入つてくれば一撃でケリがつく。それをわかつてか、分身による攻撃と自身は遠距離戦を徹底している。消耗を狙っているのだろうか。

(舐められたものね)

「多重影分身の術!」

十字に印を結び、弟の得意忍術である多重影分身を発動。10人にも及ぶ分身を発動したシヤナ。一気に数で押し切るつもりなのか。ラビリンズは瞬時に多重結界を発動。何枚もの結界で身を守るが、螺旋輪虞を構えた影分身たちの猛攻に一枚また一枚と破られていく。

(確か、須佐能乎だったわね)

結界が持たないと悟り須佐能乎を発動したラビリンス。牛の角と巨大な斧を持った須佐能乎が現れ、影分身達はいつせいに距離を取る。

「無駄よ」

ラビリンスの操作により、咆哮を上げながら彼女の須佐能乎は、鎖が付いた巨大な斧を振りまわした。遠心力で加速し範囲の広がった斧がシャナの影分身を粉碎していく。そして、本体であるシャナ一人が取り残される。

もう逃がしはしないと鎖を手繰り寄せ、それと同時にシャナのダガーとの繋がり糸を手繰り寄せた。空中で引き寄せられたシャナにラビリンスは無慈悲にも須佐能乎の斧を振り下ろした。

「それと戦いたかったってばね!!」

シャナも須佐能乎を発動。巨大な巨人が6本の腕で振り下ろされた斧を白刃取りした。前回は押し負けたがシャナの須佐能乎のパワーもラビリンスの須佐能乎に負けてはいなかった。

ギリギリと須佐能乎同士が鬨ぎ合う。斧を引こうにも押し切ろうにも六本の腕でがちり掴まれた刃が動かない。らちが明かないとラビリンスの須佐能乎が片腕を離して拳を振るう。

「貫ったってばね」

力が弱まった事で余裕が出来た多腕にてラビリンスの須佐能乎の拳を受け止め、斧を弾き飛ばし、シャナの須佐能乎の攻撃が始まった。6本腕の連撃は、ガードするラビリンスの須佐能乎を滅多打ちにしていく。角が折れ、徐々に？がされていくラビリンスの須佐能乎。

あまり得意ではない須佐能乎を使ったのは間違いだったと後悔するラビリンス。

新たに結界を展開するが、そんなものは障子のように須佐能乎の拳に破られてしまう。

(まずい。アステリオスを使おうにも、須佐能乎と同時に使えない) 切り札をきれいな状況に追い詰められ、こんなことならもつと早くに仕留めておくべきだったと考えるラビリンス。彼女は、命の危機に

瀕した。

——— 生きたいか？

ラビリンスの頭の中で声が聞こえる。戦いにヒートアップしていると聞こえる声。この声に従った時、ラビリンスは意識が薄れ、酔ったような、どこか現実離れた気持ちになる。

しかし、その時のラビリンスの強さは、破格で、まさに天下無双のようだったと伝えられた。だが同時に仲間であろうとも殺してしまっていた危険性があり、彼女はこの声を嫌った。自分が何かに侵食され、変っていく事に恐怖を覚えた。

なにより、仲間に手をかけて求められない事が怖かった。だが今は仲間はいない。

——— この俺の力を貸してやろう。この、ママーの力をな。

ラビリンスの目が据わり、右目の義眼（ゲレルの石）ではなく彼女自身のチャクラが解き放たれた。そして、青い写輪眼が赤く染まった。

「は？ なんだってばね！」

突然、ラビリンスの須佐能乎が形を変える。牛の角が亡くなり両面宿儺のような二面四腕の須佐能乎へと変化。シャナの須佐能乎の攻撃を捌き、カウンターに拳を入れてきた。

その動きに驚かされたシャナ。そして、ラビリンスの須佐能乎が印を結び、火遁業火滅却を発動。シャナを須佐能乎ごと吹き飛ばした。その衝撃によって須佐能乎が解除される。同時にラビリンスの須佐能乎も解除。

シャナは術を使ったラビリンスに驚愕する。例の斬撃を警戒し先見の写輪眼を温存していた故に、この結末は想定外。そして、シャナの目に映ったラビリンスは、赤い本来の写輪眼だった。

「急に、どうしたってばね」

「楽しい戦いだっただけけれど、これで終わりよ。うぐ」

ラビリンスが頭を押さえ苦しむ。そして、少しふらついたのちに、シャナを襲ったのは寒気だった。突き抜けるような殺気により、足か

ら力が抜けそうになる。それと同時に心が高鳴り始める。シャナの心を置き去りにし、血がたぎり始める。

シャナがバクバク鳴る心臓の音と一緒に聞いたのは、ラビリンスの声なのにラビリンスらしくない言葉だった。

「まさか、あの時の気まぐれが、こんな面白い結果を生み出すとはな。おい小娘、お前は目覚めていないのか？」

突然謎の質問をされるシャナ。だが、この口調と話し方に覚えがあった。シャナに突然語りかけてくる声だ。正体は不明だが、何かに導くような声。その男の気配が目の前のラビリンスから感じられる。「お前はいったい何？　なんで私やラビリンスの中にいるってばね？」

シャナが珍しく狼狽えながら質問をする。

「それは秘密だ。第一、ここで死ぬお前が、知る必要はなからう。くう、邪魔しないで」

ラビリンスは、頭の中の声に従い自らの左目の万華鏡写輪眼を確認するなり、印を結ぶ。すると、シャナとラビリンスの周囲の空間が歪み、薄暗い空間へと場所を変えた。

空間転移のような術を食らったシャナは、周囲を見渡すが、周囲には迷路のようにラビリンスの結界が展開されており、術者である彼女の姿も見えなかった。

だが、空間中に響くようにラビリンスの声が響く。

「奥義・無情迷宮。ここは私の万華鏡写輪眼の瞳術によって作られた異空間。出る事は叶わない。私が解除するか、死なない限りね」

ラビリンスの左目の万華鏡写輪眼の瞳術は、威御路(おのごろ)。相手と自身を異空間へ転送する術である。一時的に相手を連れ去る事が出来る術だが、発動中は自身も空間から出られず、移動も出来ない。強制的に一对一に持ち込むのみの術。

その名の通り迷宮を生み出した彼女は、ここでケリをつけるために右目のゲレルの石を解放。ゲレルのエネルギーを纏い頭部に牛の角を思わせる結晶の角が発生していた。その莫大なエネルギーを攻撃力に変換したラビリンスの最終奥義、雷牛彗星(アステリオス)の発

動準備に取り掛かる。

一言でいえば、凄まじい速度の居合。だがそれ故に対処が出来ない。シャナの天翔の速度すら超える一閃は、回避不能。シャナはその恐ろしさを知っている。

先見の写輪眼では見切れない。首が泣き別れする未来を見たシャナは、先見の万華鏡写輪眼を発動。無数の未来を見て、自分に取れる最善策を決行せざるを得ない。ラビリンスの雷牛彗星のタメを利用し、影分身を発動。ターゲットを分散させる。

赤い写輪眼となり、瞳術を発揮したラビリンスは繋がりを見る能力が使えない。だが、迷宮自体はラビリンスの結界忍術で構成されており、相手の移動を阻害し、正確に探知する事が出来る。そして、直線が多く、ラビリンスの雷牛彗星を最大限に生かせるようになる。

「ふうん。けれど無駄よ。雷牛彗星!!」

雷を纏った怪物が迷宮内を逃げ惑うシャナ達をむさぼり食らうために駆け出した。粒遁の高速移動を用いたシャナの影分身達は、雷の速度で移動するラビリンスから逃げられず一体また一体と刈られていく。

その処理能力の速さから、本体であるシャナの首が泣き別れするのもそう遠くない。先見の万華鏡写輪眼を用いているシャナでも、回避は出来ない。

徐々にシャナの死の未来が増えていく。避けられない未来は今現実として迫っていた。

(やばい、本当にヤバいってばね。何か方法が、方法を考えないと、なのになのに)

シャナは、消えていく影分身達の経験値を得ながらも、対策が思いつかないでいた。迷宮内に粒子を拡散させる事は難しい。風の流れがなく、粒子はその場に留まってしまふ。故に天門での移動も、効果が薄い。明らかに居場所を探知している相手に、何時まで逃げられるかもわからない。

八方塞がりだ。今回は、隠れる事も叶わない。元々は、広い空間などで天門を用いた時空間忍術にて、雷牛彗星を攻略するつもりだっ



た。だが、こう狭い場所に誘い込まれば、それも叶わない。

怖い。恐怖がシャナに降りかかる。このまま負ける。シャナの万華鏡の瞳術を使っても、すぐにチャクラが無くなってしまう。

今持てるシャナの術では、この状況を攻略できない。

もう終わりかと思った時、手元にトネリから貫った数珠が目に入る。そして、自分が無意識に握っている第四班に貫ったチャクラ刀に目を向ける。頭に浮かぶのは、仲間達やサスケにトネリ。そして何よりも大切な、ナルトの顔。自分には帰る場所があり、会いたい人たちがいる。ラビリンスの強さに弱気になっていた自分を捨て、シャナは息を整える。生き抜くことを決めたシャナの青い万華鏡写輪眼は輝きを強くする。奇しくも、うちはの血に身を委ね赤い光を強くしたラビリンスとは真逆だった。

すると突然、目の前に扉のようなものが現れる。それはシャナの見た幻覚だったのかわからない。だが、入ることを戸惑う彼女の背後に、クシナとミナトの姿があった。優しく背中を押されるような感覚と共に、父と母の懐かしい感触を感じたシャナは、不安を振り切って扉を潜った。

—— 巫女よ。巫女の血を継ぐ者よ。

突然、シャナの頭に、聞いた事のない女性たちの声がする。そして、見たことのない光に包まれた世界が目映る。恨みや戦いを煽る声とは違う、慈しみに満ちた世界が広がる。

その世界の中心で、シャナに語り掛けたのは、あった事もない女性だった。シャナと同じ顔で、紫色の瞳をした女性。

「誰？」

—— 私は先代の巫女、弥勒。

まるで鏡を見ているように自分に似た姿の女性は、幽霊のように透けているが、其処に確かに存在していた。もしかして、自分の本当の母親なのかと尋ねそうになる。

—— 貴方は、巫女のチャクラを持っている。

「巫女のチャクラ？ 私か？ 私は巫女の家系だつて言うのかつては

ね」

———「そうです。未来を見る事の出来る力、そしてもう一つ、巫女の力があるのです。」

「未来を見る以外にも？」

未来視の能力、うちは一族にも無いその能力の正体を初めて聞かされたシャナ。そして彼女にはもう一つの能力があると伝えられる。弥勒は、次代の巫女の一人であるシャナに力を伝えるために、時を渡ってきたという。

シャナの中でうちはと巫女の力が存在し、普段はうちはの力が大幅を占めていた。だが彼女の中で、今ようやく巫女の血が強まったことで会いにいられたという。

弥勒によつて伝えられた巫女のチャクラの性質は、話を聞いていたシャナの表情を明るくさせた。その本質に、シャナは形を与えるだけだと伝えられる。

———「巫女の力によつてつらい道を歩むことになるかもしれない。けれど、私たち歴代の巫女は、いつも貴方達、次代の巫女を見守っています。」

「ありがとうございますね」

巫女との邂逅は、現実では一秒にも満たなかつたらしい。それは幸いだった。だが、先見の万華鏡写輪眼が数秒でラビリンスが来ることを知っていた。

巫女のチャクラを解放するため、胸に手を当て、静かに己の中の鍵をこじ開ける。

「解！」

十数年間に及ぶ人生の中で、初めて解放されたシャナの巫女のチャクラ。解放と同時にシャナの顔に文様が現れ、天女の衣のようなものが出現。後光のようなものが出現する。

慣れないことをしているせいで、体から力が抜けそうになるが、意地で持ち堪える。

弥勒によつて聞かされた巫女のチャクラの性質。それは何よりも

ある術を得意とする事実だった。シャナが憧れる波風ミナト。彼の強さをシャナは求めていた。

そして、もう一人憧れていた人がいる。それこそが、シャナの愛する母であるクシナ。

「鬼ごっこは終わりよ!!」

シャナのチャクラが変化したことを感じ、大慌てで飛んできたラビリンス。雷を纏い、雷そのものとなってシャナに切り掛かる。狭い通路で、回避は難しく、速度では絶対に負けない。シャナの姿が変わったことに警戒をするが、何をされても一閃で切り伏せる。

「そうだってばね、これで終わりだってばね」

天女のような姿に変わったシャナが手を振るうと、高速で移動していたラビリンスが急停止する。纏っていた雷も消失し、身動きが取れなくなったことで、ラビリンスは混乱する。だが彼女の万華鏡写輪眼が捉えたのは、自身を縛り上げるチャクラで作られた無数の桃色の鎖。

シャナの背中から生えたそれは、鋭い剣先が付いた鎖であり、ラビリンスの展開した結界を貫き、網のように展開されていた。

シャナの展開した鎖の網に引っ掛かったラビリンスは、まさかの罠に驚く他無かった。その強度は凄まじく、ゲレルの石で身体能力と出力を上げていたラビリンスの雷牛彗星を完全に封じたのだ。

猛牛を縛り上げた鎖は、力任せに暴れる彼女の自由を許さない。角から電撃を発するラビリンスだが、シャナの展開した鎖がチャクラを吸収していく。

「ぐうう、なんなのよ!!」

「お前がうちはと、別の一族の末裔のように、私も巫女の一族でもあるらしいってばね」

動けない苛立ちから、叫ぶラビリンス。シャナにあった巫女のチャクラとは、本来闇の魔獣を封印するために封印術に特化したものだった。シャナが習得していない術の一つが封印術であり、たとえば、その才能があろうとも知らない術は使えない。

だがシャナは知っていた。唯一ともいえる封印術を。シャナの母

であるクシナは、うずまき一族。膨大なチャクラと生命力を持ち、なによりも封印術を得意とした一族だったという。

その母と同じく封印術に特化したチャクラを持つ事實は、シヤナに喜びを与えた。父の術だけでなく、母の使っていた封印術、金剛封鎖をシヤナも継承できたからだ。細かい所や基本構造は違うが、シヤナは母の使った金剛封鎖をコピーし、今ラビリンスを縛り上げた。

九尾すら縛り上げる母の術は、ラビリンスという猛牛を縛る封印術として、受け継がれた。粒遁封印術・金剛天鎖として。

「お母さん。私はやっぱり、お母さんの娘だつてばね」

「離せ!!.. あああ!!..」

自慢の剣術も腕を拘束されれば無意味。忍であるシヤナに警戒せず突っ込んだのがラビリンスの敗因といえる。電撃を放ちながら暴れるラビリンスの傍で、巫女のチャクラに馴染んだのか、いつもの姿に戻るシヤナ。

そして、シヤナは残り少ないチャクラでもって、右手に螺旋輪虞、ではなく螺旋丸を初めて生成する。

「私一人じゃお前には勝てなかった。私が勝てたのはお父さんお母さんのおかげだつてばね」

「ああああ!!..」

鎖で縛りあげたラビリンスに対して、シヤナは螺旋丸を叩き込んだ。螺旋丸の直撃を受けたラビリンスは、血を吐きながら吹き飛ばされ、ゲレルの強化状態は解除、写輪眼も青に戻り、その後、意識を飛ばした。

「てむ、じん、みんな、な、ごめ、ん、ね」

シヤナが最後に見たのは、ラビリンスが涙を流した姿だった。

ラビリンスが敗北すると同時に、ラビリンスの瞳術も解除され、シヤナとラビリンスは元居た空間へと戻っていた。

「シヤナ!!..」

その広場には、ドスと八雲が避難させたハイドに利用されている子供たちが横たわっていた。八雲たちも突然現れたシヤナとラビリンスに驚くが、膝をついて動けないシヤナに駆け寄る八雲。気絶してい

る様子のラビリンスを見たドスが止めを刺そうとしていた。

だがそれをシヤナが止める。

「何を？」

「そいつには聞きたいことが山ほどある。拘束だけして、生かしておくってばね」

シヤナなら迷わず殺すと思ったのだが、シヤナの願いを無下にすることも出来ず、指示に従うドス。何度も殺し合った仲だが、シヤナはラビリンスが悪人だとは思えなかった。とはいえ、危険人物には違いない、シヤナはラビリンスが取り落とした、己のチャクラ刀を愛おしそうに回収した。

後は、ハイドを追っていったトルネの帰りを待つだけ。

## 大激突 完

老人によつて地底遺跡の最下層に連れてこられたテムジンは、老人の奇襲によつて僅かに出血させられてしまう。

とはいえ老人の力でかなうはずもなく、すぐさま払い抜ける。

老人の狙いは命ではなく、テムジンの持つ王族の血だと語った。テムジンたちがいる場所こそが、封印の間と呼ばれる場所であり、その場所には、ゲレルの鉱脈を消滅させるために、ある口寄せの術式が仕込まれているという。

ゲレルの鉱脈をハイドに渡す前に、一族の末裔として心中を選んだ老人だったが、彼らを追っていたハイドが間に合い、掌から衝撃波を発して老人を吹き飛ばす。

「危ない所でしたね」

「ハイド様！」

現れたハイドに駆け寄るテムジン。そしてトルネや今の老人を吹き飛ばした力について尋ねれば、彼は自慢げに右手に装備されたゲレルの石を見せつける。

「素晴らしい力です。本の通りですよ。手を触れることなく物を吹き飛ばせる」

ハイドは石の力を使い、周囲の壁を攻撃する。新しいおもちゃで楽しむように力を振るうハイドの姿に、テムジンは硬直する。そして、話を聞いていた老人がハイドに向かって怒鳴りつける。

「その本というのは、ゲレルの書の事か！ 貴様、いったいどこでそれを手に入れた！」

「やだな。流れの商人から買っただけですよ」

「そんな偶然がある物か！ さては貴様怪しいと思っておったが、ゲレルの石を手に入れるために、テムジンの村を!!」

老人は、確信していた。この男の手段を択ばない残虐さを。そしてその手段がどれだけ卑劣な事かを。

「何を疑っているんですか。世界平和を求める私が何故そんなこと

を」

「平和を望むものがゲレルの石など望むものか!？」

「私は争い全てを治める力が欲しい。ただそれだけですよ」

小馬鹿にしたような態度を取るハイドだが、老人は敵意をむき出しにし、テムジンは混乱していた。二人が話していると、封印の間の床から謎の装置が盛り上がってくる。それを見つけたハイドは駆け寄り、「これは鉦脈への鍵、本の通りだ」と喜ぶ。

「ならん！　ぐあああ」

「おやおや、尊い犠牲が増えてしまった。いつも上に立つ者は残酷な選択を迫られるものです」

ゲレルの石で老人を吹き飛ばしたハイドは、仕方のない事だと言いながら、動けない老人に止めを刺そうと右手を向ける。面白半分に老人を攻撃したハイド。その攻撃を見ていたテムジンは、咄嗟に盾を展開して老人を庇った。

ゲレルの力同士の反発で不発に終わったハイドの攻撃。彼は不満そうにテムジンを叱る。

「ハイド様、ゲレルの鉦脈を手に入れた今、このような無力な老人など捨て置けば」

「そういうことではないのです。的の前に立たれると邪魔なんですよ。おどきなさいテムジン」

ハイドの言葉に従えないテムジン。その様子を見ていたハイドは落胆したように、テムジンへと右手を向ける。そして、テムジンを吹き飛ばした。攻撃を受けたテムジンは、ハイドを力なく見つめる事しか出来ない。

「失望しましたよテムジン。貴方は所詮、ご両親と同じ下等なものだったのですね」

「え、ハイド様？」

テムジンの目に映るハイドの姿が、過去に村を襲い皆の命を奪った奴らの一人と重なる。そんな筈はないと心が否定するも、頭の冷静な部分が、少しづつ真実に迫ろうとする。

「本当に哀れな餓鬼だ」

そして、ハイドの放った言葉が、過去にテムジンの両親を殺した存在と一致する。瞬間、テムジンの心は軋みあがった。自分の親の仇、そして争いの元凶こそがハイドであると。自分はそんな事実にも気が付かず、利用され、他者や仲間に犠牲を強いていたのだと。

「そんな、だったら、俺たちは、何のために!!」

「その顔、気が付いたようですね。そうですね、全く親の仇とも知らず、よく懐いてくれました。実に可愛い手駒でしたよ。でも石の在り処はわかった。もうあなたは不要なんですよ」

高笑いしながら、その本性をさらけ出したハイド。石の力による活性化で全身の筋肉が膨張、灰色の肌となり人型の怪物へと変貌した。その姿こそが彼の真の姿であり、腐った性根の表れだった。トルネの言葉通りであり、ハイドの裏切りを予見していたテムジン。怒りに燃えあがった彼は、ゲレルの力を引き出しながら、ハイドと向き合う。「逃げる! こいつは俺が倒す」

「無茶じゃテムジン」

老人を逃がし、自分は此奴と心中してでも仕留めると宣言するテムジン。それを止めようとしたが、テムジンは飛び出した。既に剣はないが、ゲレルの力を放出しながら、ハイドへと殴りかかる。しかし、テムジンの渾身の一撃は、ハイドの背中に展開する球場の物質が変化した盾に防がれる。

そして、頭部を掴まれ、床にたたきつけられる。血を吐きながら倒れるテムジン。起き上がろうとするが、すぐに距離を詰めてきたハイドによって踏みつけられる。

「ちようどいい。この力を試す練習台にして差し上げましょう」

そう言いながら、テムジンの体を蹴り飛ばすハイド。明らかに遊んでいる様子でテムジンを甚振る。石の純度からくる出力差によって、押されるテムジン。さらに老人を庇いながら戦う彼に、勝ち目はないだろう。

一人では決して。

「木ノ葉剛力旋風」

ハイドの顔面を強烈な蹴りが襲い、その体を吹き飛ばす。その声の



主は、木ノ葉の忍である油女トルネ。彼は拳を構えながら、テムジンをもう片方の手で起こす。トルネに差し出された手を掴んだテムジンは起き上がる。

そして、トルネへ詫びる。

「トルネ。お前の言ったことは正しかった。仲間を犠牲にした夢などあつてはいけなかった」

「それに気付けただけでも、お前は成長しているはずだ。来るぞ」

トルネの渾身の攻撃をくらいながらも、すぐに復帰したハイド。

トルネに吹き飛ばされ、天井に激突した拍子に天井が？がれ、ゲレルの鉱脈が姿を現す。その力がハイドに流れ込み、彼の折れた首の骨までも再生したのだ。

完全再生したハイドは、素早い動きによつて接近戦を仕掛けてくる。それに毒虫を使うため、手袋を外して応戦するトルネ。相手の打撃を捌きながら何発か拳を入れるが、ハイドの防御力と再生能力の前では、ダメージにならない。

「おや、なんですかこれは、ウイルスですかね。けれど、ゲレルの石の前には無意味ですよ」

トルネの毒蟲が殴られた箇所から感染を始めるが、ゲレルの石のエネルギーによつてナノサイズの毒蟲は死滅。破壊した細胞も瞬く間に再生されてしまう。

そこでテムジンも参戦し、二人で打撃を仕掛けるが怪物へと変身したハイドの身体能力は人間を超越している。テムジンをゲレルの力で吹き飛ばし、一人になったトルネに対して背中 of 球体を変形させた攻撃を仕掛ける。硬質化した球体が刃となって襲い掛かり、それらを回避し、後ろに跳んだトルネ。それに追従するハイドだったが、トルネが修行用に足に巻いていた重りを投げつけたことで、その重さで地面に叩きつけられてしまう。

(速さで一気に行く)

毒が通用しないなら、体術で圧倒すればいい。重りを外したトルネは、高速体術によつて、ハイド以上の速さでヒット&アウェイを繰り返す。

返す。目にも留まらない速度で繰り出される拳と蹴りは、本来のトルネの膂力と合わさり、ハイドに重い一撃を与えていく。

自分より速いトルネに追いつけようとするとするハイドだが、動きを捉えられず一方的に打撃を食らう羽目になる。

いくら頑強でも、その力は永遠ではない。このまま削り切ろうとハイドを背後から殴った時だ。ハイドのしていた右目の眼帯が取れ、次の瞬間トルネの拳がハイドによって受け止められてしまった。全く反応できなかったはずのハイドに攻撃が止められ、驚くトルネ。

「何」

「ふふふ。何か使えるかもと、思って手に入れておいてよかったですよ。ラビリンスは本当に役に立つ」

ハイドの隠された右目にあつたのは、青い写輪眼だった。それも文様が変化した万華鏡写輪眼であり、ハイドはそれを右目に移植していたのだ。ラビリンスとテムジンの村を襲った際、ハイドは暴走し暴れまわるラビリンスの力を見ていた。そして、仲間が奪ったラビリンスの写輪眼を回収。

秘かに移植することで、その目に写輪眼を宿していた。ただチャクラを扱えないハイドには写輪眼は使えなかったが、ゲレルの石を使うことで自身を活性化した今なら、写輪眼を使用できるのだ。瞳術を扱う術はないが、強化された肉体に、凄まじい洞察力と観察力を持つ万華鏡写輪眼が合わさった事で、無敵の怪物へと進化したのだ。

写輪眼によってトルネの動きを完璧にとらえたハイド。トルネを殴り飛ばし、さらに加速した彼の高速体術を回避していく。

(当たらない)

攻撃が当たらなくなり、苛立つトルネだったが、ハイドが突然カウンターで繰り出した肘を脇腹に食らってしまった。負傷していた場所であり、痛みで動けなくなったトルネの後頭部をハイドが殴りつけ、地面にバウンドした彼をゲレルの力で吹き飛ばす。

「トルネー」

吹き飛んだトルネが壁に叩きつけられる直前で、テムジンがキャッチするが。脇腹を押さえるトルネは、息が出来ないようだった。

「この目はすごいですね。君が脇腹を庇いながら戦っているのが一目瞭然でした。さて、非常に楽しい催しでしたが、そろそろ幕引きですかね」

動けないトルネを庇うように盾を展開したテムジンが前に出る。その姿を面白がってハイドがテムジンに向かってゲレルの石のエネルギーを放出。受け止めたテムジンが潰れるまで放出し続けるつもりなのだろう。

「助けに来て、このありさまとはな」

「お前が居てくれてよかった。頼む。あいつを倒すために、力を貸してくれ！」

防御力を割いて、テムジンは動けないトルネにゲレルのエネルギーを譲渡した。テムジンが戦うよりもトルネを万全にすることが、勝利につながるかと確信したからだ。

ハイドと同じくゲレルの石の力を再生に注いだことで、トルネの体はかつてないほど活性化する。それによって折れていた肋骨が治癒し、痛みがなくなっていく。

「くっ、トルネ。俺達の、無念を、怒りを、願いを、お前に託す」

全エネルギーをトルネに向かって放出したテムジン。

だがそのせいで押し負けたテムジンは、ハイドのエネルギーによって吹き飛ばされる。

「泣けますね。クズ同士の助け合い、命のリレーですか」

「他者を利用し、切り捨てるだけのお前にはわからないだろう。託し、託される事の意味など」

復活したトルネは、全身に毒蟲を展開する。それによって肌が紫に染まる。そして気絶したテムジンから授かったのは、治癒だけではない。顔の布を取り払い、素顔を晒したトルネ。その全身には、ゲレルの力が漲っていた。

「ゲレルの力を受け取ったのですか。だが、多少強化されたところで私との差は縮まりませんねえ！」

写輪眼を過信し、止めを刺そうと接近するハイド。トルネの速度は見切っている。故に一撃で終わらせようとしたはずなのに、トルネが

視界から消える。

どこに行つたのか、目で追うより先に背後に回り込んでいたトルネの拳によつて背骨を粉碎される。

「げええ、は、がは、く、なぜ」

「シンプルな話だ。俺がお前の目で追えない速度で動いただけだ」

トルネの肌は、赤く染まつており、それは八門遁甲、第六門『景門』を開けたことによる限界を超えた体術だった。通常状態で敵わなくとも、トルネには毒蟲を利用した八門遁甲があり、それを6門まで開放。それによりリミッターを超えた力を引き出した。

ゲレルの石の力で再生するハイドだったが、突然、殴られた箇所から激痛が走る。その個所を見れば、トルネの毒蟲が感染している。

ゲレルの力でもう一度死滅させようとしたが、毒蟲の動きは一切収まらない。

「どうやら、毒蟲も活性化できるようだな。お前は不死身かもしれないが毒蟲もまた不死身。永遠に苦しむ運命だ」

ゲレルの力で活性化された毒蟲はハイドにも通用する。そして毒蟲を受けたハイドは永遠に痛みを浴びながら生き続けるだろう。だが、それだけでは足りない。今のトルネが破壊した部位は再生できないことが分つた事で方針が決まる。

力を振り絞りゲレルの石のエネルギーを全てトルネに放つたハイド。だがトルネは瞬時に懐に潜り込み、ハイドの顎を蹴り上げた。体術奥義、蓮華の予備動作であり、空中に蹴り上げられたハイド。

顎を粉碎され、身動きも取れない。そんな中で、トルネは必殺の奥義を発動する。超高速で腕を振るい相手に猛打と、それによる摩擦熱による炎を浴びせて焼き尽くす大技、朝孔雀のトルネ版。まるで炎の蜂の大群のように押し寄せる毒拳の連続。

「鬼火蜂!!」

毒と炎の打撃は、ハイドの全身を粉碎しながら毒を広め、彼に断末魔を浴びせる暇もなくゲレルの鉱脈へと叩き込んだ。全身の骨が砕かれ、ハイドはもう身動き一つとれない、無様な生命体として、永久に生き続けるだろう。毒虫たちにとっての、餌として。

戦いが完全に終わり、トルネを強化していたゲレルのエネルギーも底をついた。八門使用による筋肉痛で動けないトルネ。

だが安心することはできない。突如、遺跡が崩れ始めたのだ。

「まずい、ゲレルの鉦脈が活性化しておる。鉦脈の封印が解けたのじゃ。このままでは大陸が吹き飛ぶ」

戦いを陰で見っていた老人が声を上げる。その声を聴き、テムジンが立ち上がる。

「どうすれば止められる」

「止められないんじや」

「なら、最初に言っていた消滅させることは?」

テムジンは老人の最初の目的を思い出す。それであれば可能だと告げる老人。だがそのためには、王家の血を持つテムジンが一人、次元の穴を口寄せし、鉦脈と共にこの世から消えるリスクがある。

それを聞いたテムジンは、酷く落ち着いた表情で「なるほど」といった。憑き物の落ちた顔を見たトルネが止めようとするが、テムジンは動けないトルネを気絶させ、老人にゲレルのエネルギーを与え、トルネを連れて逃げるように伝えた。

—————

老人とトルネが脱出したのを見届け、ゲレルの鉦脈の封印を行うために一人残ったテムジン。罪を重ねた自分出来る罪滅ぼしとして、これ以上ふさわしいことはないだろう。そう考えながら、己の犠牲で以て次元の穴を口寄せする。

大陸を吹き飛ばす暴走したゲレルの鉦脈は口寄せされた次元の穴へと吸い込まれ、徐々に消えていく。そして、術式の中心にいるテムジンもまた崩れていった足場と共に次元の穴に吸い込まれていく。

そのはずだった。

「一人で全部背負うんじやないわよ!!!」

突然未知の力によって、次元の穴から引き揚げられたテムジン。その後聞こえてきたのは、ラビリンスの怒声。シヤナとの戦いに敗れたラビリンスだったが、砂の応援として現れた我愛羅によって、子供達と一緒に地上まで避難させられていた。そして遅れて地上まで逃

げた老人によつてテムジンが始末をつけるという話を聞き覚醒。

シヤナ達に警戒されながらも、テムジンを助けさせてほしいと地を這いながら懇願。

その姿を見たシヤナと共にテムジンの救出活動に出たのだ。ラビリンズとテムジンの強いつながりによつて紡がれた糸は、次元を超えて二人を繋ぎ、彼を異次元から生還させたのだった。

—————  
ハイドによつて齎された混乱は終幕を迎えた。

テムジンたちは、砂の里で尋問を受けたのち、故郷へと帰される事となった。本来であれば戦争犯罪者として裁かれるはずだが、ハイドの洗脳による被害者であり、多くが未成年だという事、実際に残虐な行為に手を染めていたメンバーは全滅。

事の真相を知るのは、第四班と我愛羅とドスのみ。報告を改竄することは難しくくない。砂としてもゲレルの鉱脈などという危険物があつた事実を隠し通したく、真相を知る者を減らしたかつた。だが子供達に手を出せば、秘密は暴露するとシヤナが脅したことで、認められた。かなり強引な交渉だが、木ノ葉に立場的に弱い砂は、これ以上厄介ごとを増やしたくなく、出国を許可したという。

テムジンは仲間達と再会し、元の大陸で新しく平和を求める方法を探すという。今度こそ犠牲を払わない方法で。第四班も彼らを見送る事となった。

そのせいで大幅に木ノ葉への帰国は遅れたが、事の顛末を知るためには仕方なかつた。

テムジンたちの船の出港時間となつた後、その船の船首では、シヤナとラビリンズが、話し合っていた。お互いの人生や知っていることについて。何日も前から少しづつじっくりと話し込んでいた。

「青い写輪眼の秘密はわからないわ。私も生まれつきこうだったのだから」

「謎のままか」

「もしかしたら他の子達なら、知ってるかもしれないけれど、難しい話

ね。ただ、私達には確かな繋がりがある。だからこうして出会ったのだと思うわ」

青い写輪眼持ちは他にもいる。コダマ以外の二人にもあった事があるラビリンズだが、二人には気をつけろと念を押す。リトラとグライア、特にグライアとは全力で殺し合ったらしい。結果は、雷牛彗星での奇襲で片腕を奪ったらしく、酷く恨まれているという。

噂では、忍五大国に向かっていているらしく、会う可能性が高いという。二人で話していると船の汽笛が鳴り、出港時間を知らせる。

「いろいろあったけど、こうして話せてよかったわ。謎は謎のままだけれど」

「うん。わかったってばね。故郷に帰っても元気で過ぐすってばね」

シヤナがそう言つて船から立ち去ろうとした時、ラビリンズはシヤナの手を掴んで抱き締めた。突然の行為に困惑したシヤナだが、やがて大人しく受け入れた。敵同士ではなく、今は同じ境遇を持つ者として二人は接していた。

そこでようやく二人は、自分たちの関係を理解したのかもしれない。ラビリンズは確信した。自分とシヤナには、血のつながりが存在すると。いざ話してみれば、シヤナとラビリンズの相性は良かった。数日とはいえ共に過ごしたことで、ラビリンズにはシヤナが本当の妹のように思えた。逆にシヤナは、ラビリンズ相手に妙な安心感があつた。他の子達とも分かり合えばよかったと後悔するラビリンズ。

「体には気を付けて。何かあれば何時でもお姉さんの国に来ればいいわ。シヤナ、私の妹」

「姉ぶるなつてばね！」

「最後にもう一つだけ。あの声に耳を貸さない方がいいわ。私のように乗っ取られる可能性があるから」

シヤナへの忠告を終え、別れる事になったラビリンズ。

シヤナは少し照れ臭そうにしながら、ラビリンズたちの出港を見送った。新しい繋がりに対して、よりよい未来が訪れる事を祈って。

## 里抜け

シヤナ達が長い時間をかけて木ノ葉の里に戻った時、里は大きく変わっていた。

新しい火影が就任しており。その五代目火影は、千手綱手、伝説の三忍の一人である医療忍者だった。

里に帰るなり彼女へと顔出しを強いられたシヤナ達。シヤナは新しい火影という彼女が気に入らず、機嫌が悪かった。だがそんな感情など、関係ないとばかりに、ある事実が火影によって知らされた。

「なんて言ったってばね?」

「先日、うちはサスケが里を抜けた。それにより下忍による追跡班がサスケを連れ戻しに向かった。だが思ったよりも敵の戦力が強く困難を極める。すぐさま、応援に向かってくれ」

綱手の命令を聞くより先に、シヤナは火影室を飛び出した。下忍の追跡班にナルトの名前があったからだ。そして相手は、大蛇丸の部下であるという。シヤナは大蛇丸を知っており、部下の技量もある程度把握している。下忍だけでは、とても相手にならない。早く助けに行かなければ、そしてサスケを連れ戻さねばとシヤナの足が動く。

シヤナの後を追うように、八雲をおんぶしたトルネが追従する。

「シヤナ、やみくもに探しても見つからないよ!!」

「ナルトとサスケの位置ならわかるってばね!! 早くいかないと取り返しがつかないことになるってばね!!!」

酷く興奮したシヤナは、八雲とトルネに先に行くと言え、粒遁を發動。空を亜音速で飛びながら、未来視で見た終末の谷へと向かう。シヤナの未来視では、ナルトとサスケが殺し合う未来が映っていたのだ。

なぜ殺し合うことになったのか。それは、サスケの中にある闇が原因だろうか。うちはイタチとの再会は、サスケの中に眠っていた闇を呼び起こさせた。

イタチはサスケに殺されるために、弟を追い込むようなことをして



いる。そんな馬鹿なことは止めさせるはずだった。サスケには、兄殺しなんて言う悲しい道を歩ませたくなかった。

だからこそ、鍛え上げた。うちのは闇なんて求めなくても良いように。

けれど、サスケは大蛇丸の所に行くことを選んだ。それは、彼が力を求めたが故に。

ナルトは、サスケを心の底から止めたかったのだろう。友達でありライバルであり、兄弟であるサスケを助けたかったのだろう。

未来視の中で、ナルトとサスケの闘いの風景が映り込む。互いに忍として。繋がりを絶たせないため、繋がりを断ち切るために、死力を尽くして戦っている。

「こんなことの為に、お前たちを鍛えた訳じゃないってばね！」

ナルトとサスケ、二人の弟子のあまりに悲しい忍組手。

空模様が変わり、雨が降り始める。粒遁での長距離移動によって、チャクラが少なくなったシヤナは、地面に降りて終末の谷を目指す。

九尾のチャクラによる衣をまとったナルトと、呪印状態2になったサスケの螺旋丸と千鳥のぶつかり合いは、僅差にてサスケが勝利。額当てに一筋の傷をつけられるも、ナルトの意識を刈り取ることで、サスケが勝利した。

互いに谷を流れる滝に落ちるが、意識のあつたサスケが岸にナルトを引き上げる。

本当にナルトとは奇妙な縁だった。いつも突っかかってきて、好き勝手するこいつの事が鬱陶しかった。けれど、何時からか、俺の黒く染まった世界に、こいつが居るようになった。

気が付けば、常に隣にいた。それが何時しか悪くなくなって、いつも見下していた此奴の事を、頼もしいと思えた。

俺たちは知らずのうちに、友だったのだろうか。お前は俺を友だと言った。里を捨て、全てを断ち切ろうとした俺に、お前は友だと言った。そして兄弟だと。

その言葉を笑うことは、出来なかった。

「だが、俺は、お前との繋がりも、捨てる。あの男を殺すために」  
何気ない日々を幸せだと感じていたサスケ。復讐者として生きてきた筈なのに、その復讐心が薄れていた。このまま風化してしまうのではないかという程に。

だがそんな甘い夢はすぐに冷める。ナルトを迎えに来たという、イタチの登場。消えかけた復讐心に火が付き、全力でもって挑んだが、俺の積み重ねてきた時間など、アイツの前では塵に等しかった。そして、奴は俺に、俺という存在の意味を、再認識させてきた。

悔しいが俺は、イタチの言う通りに、復讐にしか生きられない。ナルト達と木ノ葉で修行して、イタチを超えられる未来など来ない。

何故なら、うちのは最強の瞳術、万華鏡写輪眼を持つイタチ相手には、同じ目を持つしかない。だが、その為には、最も親しい友を殺す必要があった。

俺にとって、それはナルトでしかない。

「ナルト」

力尽き、動かないこいつの首を少し絞めれば、その息の根を絶てる。そうすれば、俺はイタチと初めて同じ世界を目にする事が出来る。腕が少しづつナルトの首に伸びそうになるが、すぐに止めた。

頭に浮かぶのは、父さん母さんの記憶、そして、うちはイタチへの復讐心。だが、アイツの思い通りには、ならない。

(俺は、俺の方法でアンタを超える)

どんな手を使っても必ず。そう決め、国境を越えようとした時、背後に気配を感じる。大雨で、正確な正体はわからない。だが何故だろう。俺にはお前だと、確信があった。

「早かったな、シヤナ」

俺にはもう一つ断たなければいけない繋がりがあった。ナルトに駆け寄り、その姿を見たシヤナからの殺気で、身動きが取れなくなる。ナルトの事を、何より大切にしているこいつだからこそ、俺を許せないんだろう。

だから、こいつの留守を狙った里抜けだったんだが。

「そこから一步でも先に進めば、殺す」

「お生憎様、俺はもう後戻りできない」

一歩進む。すると、何かが俺の頬をかすめた。僅かな痛みと血の流れる感触が頬を占める。こいつが帰ってきたのは想定外だ。今の俺にシヤナに抗う術はない。

「里に戻れ。拒むなら、お前の全身の骨を砕いてでも、連れ帰るつてばね」

こいつら姉弟は、同じようなことを言いやがる。特にシヤナは本気で言っているんだろう。今にも巨大な何かに握り潰されそうだ。振り返ることはできない。今後ろにいるシヤナの顔を見る勇気はない。

「サスケ。なんでナルトをここまで」

「俺は復讐者だ。家族だの、仲間だの、友達だの、俺には必要がないものだった。全部、全部、全部！」

だからやった。俺の中の迷いを消し去るために。

「俺は大蛇丸の所に行く。そして、うちの仇である、イタチを殺す！」

その邪魔は、お前にだつてさせない」

もう止まらない。決して止まる事などあつてはならない。たとえお前に今殺されようとも、俺の意思は変わらない。俺が俺として生きるためにも、うちはイタチを殺す。それが全てだ。

シヤナの警告を無視し、前に一歩踏み出し振り返った。さあどんな顔をしている。怒りに満ち、俺を殺そうとしているのか。だが俺を鍛え上げたお前には、俺が力の使い方を間違えたとして裁く権利がある。

俺の後ろにいたシヤナは、泣いていた。青い写輪眼で俺を見ながら、涙を流していた。その表情は、耐えきれないと言ったようで、酷く、痛ましいものだった。

なんでお前が、そんな顔をするんだよ。なんで、俺みたいなのやつのために、泣いているんだ。

今まで見たことのないシヤナの顔。その哀れみにも似た感情は、俺に対して向けられている。

「もう、何を言ってもダメなのかってばね」

「……ああ」

「大蛇丸の所に行けば、お前は私の敵だつてばね。それが何を意味するか、本当に分かっているのかつてばね！」

わかっている。

シヤナは、右手に螺旋輪虞を発動する。この場で俺を殺して始末をつけるつもりだろうな。だがここで引き下がったら、俺は二度と前に進めない。

「この、この、この」怒りに任せて、俺に術を振るおうとしているシヤナ。だが、その目と向き合つて分かった。やっぱり、この人は、小さかった頃から、俺の事を見守ってくれていたシヤナ姉だった。

冷たく、いつも俺の事を避けていたのに、見守ってくれていた。俺が変わり、あんたも変わったと思つていたのに。あんたは変わつてなかつたんだな。

「行かせてくれ、姉さん」  
「っ」

俺の言葉で、シヤナの動きが止まり、術も霧散する。卑怯だとは思ふ。だが利用するしかない。シヤナは、昔に俺の事を実の弟だと勘違いしていた。正しくは、ナルトに会えない寂しさを、俺の傍にいる事で誤魔化していた。

だからだろうか、シヤナは俺を見捨てたことはなかつた。ナルトと暮らす事になった後も、こいつは俺を弟として見ていた。本人は無意識だったのかもしれないが。だから何時も助けてくれたのだろう。アカデミーに入るよりも前、イタチの居ない日、寂しさに泣いていた俺の傍には、シヤナが居た。

そして今も。

「この、ばか」

シヤナは俺への攻撃を止めた。そして、別れを惜しむように抱擁した。再び涙を流しながら、俺の額に触れるシヤナ。僅かにシヤナのチャクラを感じた。何かしらの術を仕込んだのだろうか。

「好きにするつてばね。お前を止める気にはなれない。私はナルトを連れて、里に帰る」

シヤナは、俺から視線を外し、倒れているナルトの頭を自分の膝に

乗せ、静かに撫でていた。見逃されたことに困惑しながらも、俺は音隠れの里に向かう。

背後からすすり泣くような声が聞こえ、静かに「ありがとう」と告げる。俺にはそれしかできなかった。

—————

サスケを追っていたカカシは、終末の谷で弟を抱きしめながら泣いているシャナの姿を発見した。シャナに事情聴取すれば、駆け付けた時、サスケは既におらず、ズタボロのナルトを見つけたという。その様子に気が動転してしまい、サスケの追跡は困難だったと説明した。

正式な任務ではないが、シャナが任務に失敗した初めてのケースだった。

サスケ奪還のメンバーは、それぞれが生存しつつも痛手を負い、失敗に終わった。皆が自分の力不足を実感し、新たに修行に取り組むこととなる。

大切な存在を救えず、サクラとの約束を守れなかったナルト。止める選択が出来ず、茨の道に進むことを許してしまったシャナ。サスケを大切に思いながらも、その方向性が真逆だった二人。

ナルトは比較的早く復帰。サクラとの約束、サスケを連れ戻す事は絶対に諦めない。そう宣言し、ナルトを鍛え上げる約束をした自来也が「サスケを忘れろと、賢い選択をしろと」告げるもそれを拒否、「サスケを諦めるのが賢いってことなら、一生バカでいい」と宣言。

そのひたむきに諦めない姿に感化された自来也。

「バカには不可能でも、大バカになら可能かもしれんな」

ナルトは、自来也の下で3年修行することが決まり、修行の準備が整うまでの間、木ノ葉で幾つも任務を請け負うこととなった。

一方でシャナは、里の戦力低下が深刻な事から、里の警備へと回されていた。下忍が里抜けしたことで、里の警備力不足を知った周辺国からスパイや忍の侵入が懸念される。故に割り振られた仕事だった。

## 未知の来訪者

サスケが里を抜けてしばらくした後、シヤナは、里の周辺の警備任務に従事。

シヤナが今日の当番であり、見回りをしていた。

周囲を警戒しながら探索しているシヤナの表情は、ものすごく不機嫌だった。不満が顔に溢れ出ており、声の掛けづらい雰囲気を出しており、同じエリアを警備する忍達からは避けられていた。あからさまに接触を避けるようにゴーグルを装着しているシヤナは、口がむくれていた。

### (ナルトの馬鹿)

シヤナの不機嫌な原因はナルトだった。サスケとの死闘の後、自来也の下で何年も修業を積む事になった彼だが、それを聞かされたシヤナとナルトは大喧嘩をした。

ナルトの気持ちは理解できるが、シヤナとしては心配で仕方なく、自分で守れる場所においてほしいという思いが強かった。

だが意志の固いナルトと過保護なシヤナの間で意見が合わず、感情的になり珍しいほどに互いを罵倒しあってしまう。口喧嘩から発展し、現在は互いに干渉することなく、別居状態。

意地っ張りの二人は、仲直りできていなかった。

そんな状態で任務に従事しているシヤナは、本当に機嫌が悪く、殺気立っていた。

(何年も修業って何だっつばね。姉ちゃんの気も知らないで)

イライラしながら木々を飛び回るシヤナ。ストレス発散も兼ねて、動いていないと落ち着かないのだ。そうして、時間が過ぎていく中、

異変が起こった。

シヤナの未来視が突然発動。無意識の発動であり、それも今までにない不思議な感覚をシヤナに与えた。世界が捻じ曲がるような感覚と共に、頭痛に襲われるシヤナ。

「これは、なんだってばね。未来が、捻じれた？」

酷い頭痛と共に、不安定になる未来視。只でさえ悪かった機嫌が一気に悪くなる。そんな時だ、森の奥で爆発音が聞こえる。無視する訳にはいかず、急行するシヤナ。

爆風で吹き飛ばされたオレ。

眉間を除いた額を覆うような角を持った男が、赤い釣り竿のような武器を向けながら、宙に浮いてこちらを見下ろしている。

「まずは一人目。あの人と逸れてくれて助かりますよ」

男は勝ち誇りオレを見下し、この場で始末する気らしい。実力差があり過ぎて、オレ一人じゃこいつには勝てない。悔しいけど、もうチャクラも使い切っちゃった。それに肩も外れたのか動かない。

「では、やようなら」

男の武器である魚籠から、火の玉がまっすぐに俺へと飛来する。もう避ける事も出来ない。

「ちくしょう、父ちゃん」

目をつぶり、自分の死が訪れるのを待つしかできない。だが、突如背後から何者かの気配を感じた。

「火遁・豪火球の術」

男の放った火球を、突然現れた女性が火遁で相殺した。クリーム色の髪にオレンジのゴーグル、青い忍装束をしたくノ一が、空に浮かぶ男と対峙する。

「お前、何者か知らないが、私の弟に手え出すな!! ぶっ殺すってばね！」

女性は、両手にチャクラ刀を構えながら、空に浮かぶ男に切り掛かった。光を放ちながら、オレが敵わなかったアイツと切り結ぶ姿。怒りを露にしながら、青い閃光が、奴とぶつかり合っていた。

赤いチャクラと青いチャクラが火花を散らす。

「ってばね? 変な口癖、だってばさ」

それが意識を失う直前、オレが抱いた感想だった。



## 時の操り手

うずまきシヤナは、得体のしれない相手と戦闘に突入していた。

白い肌に、独特の衣服。そして白眼のような目をしている男。何処かトネリと似た格好で、空に浮かびながら、魚籠から色んな属性の術を放ってくる。そして執拗に手に持ったチャクラで作ったであろう釣竿で背中を狙ってくる。

そのチャクラと存在感故に、先見の写輪眼での未来視を用いて戦闘を行う。こいつは許せないし、背後には、倒れているナルト。何故ナルトが森にいるのかはわからないが、こいつに襲われた事は間違いない。

背後から釣り針に刺される未来を察知。すぐに粒遁の刃で払いのけると、男は訝しげな顔になっていた。

「このオレの技を初見で見抜くなんて、あなた何者です?」

「答える義理はない」

無数の手裏剣を投擲。先見の写輪眼で相手の動きを観察するシヤナ。チャクラで作られた釣り竿で、シヤナの投げた360度から迫る手裏剣の穴に針を通し、全て空中に固定する。チャクラ糸で固定された手裏剣を竿捌きでシヤナに返す男。

「銅輪転生爆」

「おや、それはあの人の」

手裏剣を迎撃するために、泡遁の弾幕を張るシヤナ。全ての手裏剣を撃ち落とした時、手裏剣の隙間を縫って赤い釣り針がレーザーのように迫る。

(これに捕まるとチャクラを抜かれるってばね)

先見の写輪眼はあえて攻撃をくらった未来を映し出し、その攻撃の危険性を知らせる。僅かに胸を反らすことで釣り針と糸を回避。お返しにと両手を合わせ、粒遁・天輪を発射。

「おっと」

男は、ギリギリで攻撃を回避したが、頬から血が流れている。その

事実に驚きながら、挑発的な笑みを浮かべる。

「流石ですね。麗しいお嬢さん、あなたに興味が湧きましたよ」  
「黙れ」

「少し本気で遊んであげましょう」

男はそういうと、目をかっぴらいた。そして、男の白眼のような目が変化。赤い眼球全体に波紋のような文様と写輪眼のような勾玉が浮かんでいた。今まで見たことのない瞳術にシヤナも最大限の警戒を現し、ゴーグルの中で写輪眼を万華鏡写輪眼に変化。

得体も知れず、内包するチャクラも異質で膨大。そんな相手に油断をするシヤナではない。

男の背後に突如空間の裂け目のようなものが発生。それに男が飛び込むと、周囲から男の気配が消える。万華鏡写輪眼で注意深く観察するが、男がどこに行ったのかわからない。警戒しながら周囲に粒遁の粒子を散布する。

(時空間忍術。仮面の男と少し違うが、似たような術だつてばね)

シヤナは、九尾事件の時の仮面の男を思い出し、脳が一切の感情を排除。チャクラ刀を右手に構え、相手を殺すことに全意識が集中する。あの時の男とはチャクラが違う。だが、似通った術を使い、写輪眼のような目を持っているコイツを無関係だとは言い切れない。

シヤナが全意識を集中していると、シヤナの背後に音もなく空間の裂け目が出来、男が今までで一番早い速度で竿を振るう。

シヤナの顔面に背後からの奇襲攻撃が迫るが、シヤナは振り返ることで紙一重で回避。お気に入りゴーグルに男の攻撃で罅が入るが、シヤナの両目の万華鏡写輪眼は、不意打ちを回避されたことで表情の固まる男を捉えている。隙を逃さないと、男の展開した空間の裂け目にチャクラ刀を差し込んだ。

男は、目を狙ってきた一撃を後ろに回避し、異空間の入り口を閉じようとした時、シヤナが火遁を異空間に放つ。入り口を閉じたもの

の、自分の空間が炎に覆われ、たまたまなく飛び出した男。

シヤナから距離を取った場所に開いた異空間の裂け目だったが、男の想定とは裏腹に、シヤナの先見の写輪眼の前では、時空間忍術の効果が薄い。

不意打ちは食らってから躲し、当たる攻撃だけを行う。それが許された彼女は、男にとって天敵だった。異空間から顔を出した男。シヤナが居ないことに気が付き、周囲を探ろうとしたが遅い。

「粒遁・螺旋輪虞！」

「うえー！」

男の出現場所を未来視で割り当てたシヤナは、粒遁版、飛雷神の術である天門で空間移動。男の出現地点の真上の粒子と入れ替わり移動。真下に現れた男に螺旋輪虞をクリティカルヒットさせた。

はずだったのだが。シヤナが仕留めたはずの男は、螺旋輪虞が抉った地面の何処にもいない。僅かに頭痛がし、それに意識を取られたタイミングでシヤナの胸を赤い針と糸が貫通する。身動きが取れなくなったシヤナは、僅かに動く首を動かし、自分の真横で竿を振り下ろした男を睨む。

男は、拍手しながらシヤナの健闘を褒めたたえる。

「素晴らしい。実に見事なものでしたよ」

確かに当てたはずなのに。分身でもなく本体に当てたのだ。だが、男は気が付けば別の場所にいた。まるで何事もなかったかのように。シヤナを見下ろす男の目は、先程までの赤ではなく青くなり、勾玉も消失していた。

目を切り替えているように見えたシヤナ。相手の能力をなんとなくだが、理解し、ほくそ笑むシヤナの姿に男が訝しげな眼を向ける。

「何がおかしいんです？」

「おかしいってばね。だって、こんな偶然早々ないってばね」

釣り針で男がシャナのチャクラを抜き取る寸前。シャナのゴーグルが砕け散り、青い万華鏡写輪眼が姿を現す。そして右目の瞳術である御年神《みとしのかみ》を発動。右目の万華鏡写輪眼の文様が回転し、シャナの姿が霞のように消える。

僅かに時を巻き戻す能力により、男の攻撃をなかったことにしたシャナ。攻撃をなかったことにされ隙の出来た男に、右腕だけ展開された須佐能乎の右ストレート叩き込んだ。

しかし、男も手練れ中の手練れ。竿で須佐能乎の攻撃をガードすると、空中へ飛びあがって距離を取った。男はシャナの青い写輪眼を見て、とんでもないものを見たという表情になっている。

「これは、何という事でしょう。青い写輪眼ですか。一族でも、ほとんどいない突然変異のはずですが……それにオレと同じ系統。モモちゃんなんかよりも、はるかに有望ですねえ。一族にあなたがいてくれたら、親役になりたいくらいですよ」

「はっ」

「いえ、こっちの話です」

シャナは男の表情を見て、男が自分の能力に気が付いていると悟る。シャナも男も、同じ『時』を操る瞳術使いなのだ。系統は違うようだが、互いに似たようなことが出来る。だからこそ両者揃って、相手の攻撃を無効化して見せたのだ。そして、自分の能力があるからこそ、時間の巻き戻しなんて発想に最初に行きついている。

何かを考えている男。シャナも次の手を考えている。先見の万華鏡写輪眼のおかげで戦えているが、タイムリミットは30秒もない。チャクラ消費よりも情報量で脳が沸騰寸前になっている。はやく決着をつける必要があるのだ。

「貴方を攻略するのは骨が折れそうです。能力の相性的にも最悪でしょうしね。一先ず引いて差し上げます。私の目的は、あくまで狐ですからね」

「逃がすと思うってばね?」

「ええ。本気になれば、オレが勝つに決まっていますからね。でも、本当に貴方には興味が湧きました。またお会いしましょう」

男はそう言い残すとその場から消える。後を追う気力はシヤナに無く、万華鏡写輪眼を解除。元の瞳に戻しチャクラの回復を急ぐ。少なくともナルトをあの手から守れたのだから。

そう思い、気絶して横たわっているナルトの様子を見ようとしたシヤナ。

「え、ええ、えええ!!」

自分が命懸けで助けた人物は、黄色い髪に頬に髭のような跡などナルトの特徴を残しながらも、ナルトとは違う子供だった。弟を愛してやまないシヤナが、初めてナルトを間違えた瞬間だった。

まさかの人違いに、困惑するシヤナだが、倒れている子供を見捨てる事も出来ない。

「とりあえず、家に飛ぶってばね」

少年を背負い、シヤナは自分の部屋に試験的にストックしているチャクラ粒子へ、天門の術を発動した。その瞬間、少年ごとシヤナの姿は、木ノ葉の森から消えた。

## ボルト

「ん、え、あれ、いつて」

シヤナが時空間忍術で連れ帰ってしまった少年が目を覚ます。肩に痛みを感じながらも、部屋を見渡し周囲の確認を行う。全く見覚えのない部屋のベッドで寝かされており、朦朧としていた意識が覚醒し始める。

少年は、気絶する直前の光景を思い出した。師匠と逸れ、強敵と一対一となり、負けてしまった。そして止めを刺されるかという場面で、何かがあった気がする。

自分は何故こんなところに来たのだろうか。

「やっべ、父ちゃんが！　いつてえ」

自分の目的を思い出し、大慌てで飛び出した少年であったが、肩が痛むため蹲ってしまふ。よく見ると肩に包帯が巻かれているので、誰かから治療を受けているようだ。

少年が騒いだことで家の主が、風呂場から現れた。

「思ったより起きるの早かったってばね。肩の調子はどう？」

シャワーを浴びていたのか、バスタオルを体に巻き、頭を拭きながら現れた女性。その蠱惑的な姿に、少年は顔を真っ赤にして固まる。刺激が強すぎたのだ。

少年の反応を見て、女性はようやく自分の格好に気が付き、すぐに着替えて出てくる。

警戒している少年に「安心しな。私は敵じゃない」と言いながら、お茶を用意し、向き合うようにカーペットに座った。

「さて、話を聞かせてもらおうってばね」

「話って、そういうえ俺、ウラシキに襲われて、それで、なんで助かってるんだってばさ」

少年は、死を覚悟していた。ウラシキというのは、少年が直前まで戦っていた強敵の名。そいつに命を狙われたというのに、生きている

事が不思議で仕方なかった。

「君を襲ってた奴なら、私が追い払ったってばね」

「え、ウラシキを追い払ったって、姉ちゃん一人で？　あり得ねえってばさ」

なんとも信じ難い発言。目の前にいる女性が、五影をも凌駕する相手を追い払ったとは思えない。疑わしいと言った目を向けてしまった少年。テーブルに肘を突きながら、「そういう反応は新鮮だっばね」と返す女性。

自分の実力にも自信でもあるのか、強さを疑われたことに意外そうにしていた。

一方少年は、気絶する直前の記憶を思い出し始めていた。確かに目の前の女性が、割り込んできた記憶がある。だが、その時、女性の目は青い光を放っていたはず。だが今は紫の瞳をしている。

「あの薄気味悪い竿使い、ウラシキって言うんだっばね」

「そうだっばさ」

「ん？　てばさ？　変な口癖だっばね」

女性にそう言われ、少年がムスツとする。

「そっちだっば、変な口癖だっばさ！　てばねてばねって」

「私の何処がおかしいんだっばね」

明らかに両方とも独特な口癖である。だが、二人とも妙に親近感がわいていた。両者共に知っているのだ。特徴的な口癖を持っている人物を。なんだかその人物と会話している気分になっていた。

「とりあえず、君の名前を教えてほしいってばね」

「名前、名前。ボルト。ボルトだっばさ」

少年の名はボルトと言うらしい。素性を尋ねるがどうも言いにくいらしい。まあ何か事情があるのだろうか。敵に追われていたことと戦闘の跡からして、この子は忍だろう。それがシャナの見解だ。

「ボルトだっばね。私はシャナ」

「シャナさんか。よろしくだっばさ」

ボルトとの自己紹介を終えたシャナ。ちょうど弟であるナルトが帰宅したのか、隣の部屋が騒がしくなるのを感じる。いつもなら晩御

飯を作って持っていくのだが、今は喧嘩中。好きにしたらいいと、放置を決める。

本来はナルトの分の夕飯だが、お腹を空かせたのか腹の虫の鳴ったボルトに振舞うことにした。むしゃくしゃするのでとびつきり手の込んだ料理を用意する。

「すっげー、これ食べていいの……いいんですか？」

「召し上がれ」

シヤナは、初めて会った少年を持て成すほどお人よしではない。だが、見れば見る程弟にそっくりで、父親にも似ている少年を他人だと思えない。可笑しな感覚だが、シヤナは自分の勘を信じている。この子は自分が守らなければいけない存在であると、どこかで理解している。

そして、今現在もシヤナを襲う慢性的な頭痛。未来視は使えるが、その未来に何かが起こっているのか、常に痛みが生じる。時間の流れが著しく乱れているのだろうか。そんなタイミングで現れたボルトの存在と、あの奇妙な男。どうにも偶然とは思えない。

「ごちそうさま」

「お皿は置いておいて、あれ」

シヤナが自分が洗うというより先に、ボルトが皿を運んで洗い物をすると言ってきた。

(馬鹿弟より可愛げがあるってばね)

ボルトはご馳走になった上、洗い物までさせられないと言うので、シヤナは彼に任せて、リビングで寛いでいた。食事を終えたボルトは、用事があるので出ていくと言い出す。だがもう深夜で、敵の存在もあるためシヤナが許可できないと伝えた。

そして、シヤナはウラシキと言う男について聞き出せるだけ聞き出すことになった。ボルトとは敵対した勢力であり、その実力は忍の最高峰たる影にも劣らない筈だと教えられる。

ウラシキなんて実力者は聞いた事がない。だが、シヤナは相手の能力と余力を残した態度から、あながち間違いではないと感じている。(能力の相性で、私が有利だったのもあるってばね)



時を戻すなんて無茶苦茶な能力に時空間忍術。竿の能力も相手を一撃で戦闘不能にする反則じみたもので、身体能力も計り知れないだろう。先見の万華鏡写輪眼を使っても仕留めきれなかった事から、実力は申し分ない相手。シヤナでなければ、今の木ノ葉でアイツに勝てる戦力はないかもしれない。

(あくまで勘だけど、あの男はまた来るってばね)

「けど、オレはいかなくちゃ」

「とりあえず、今日は泊っていくってばね」

里はサスケの里抜け以降警戒状態。子供とはいえ夜遅くに一人で歩いていては、怪しまれる事この上ない。シヤナに説得され、日が昇ってから出かけると約束した。妙に過保護な人だと思いつながらもボルトは、シヤナの真剣な眼差しに、折れるしかなかった。

そして、シヤナのベッドを使うわけにはいかない、シヤナが何か言う前にソファアを陣取って眠るボルト。寝相が良くないのか、すぐに掛布団を蹴飛ばしている彼を見て、シヤナは掛布団をかけ直してあげた。

—————

シヤナがボルトに掛布団をかけ、自分のベッドで眠る姿を、遠くから観察する視線が一つあった。

月明りもない夜に気配を消しながら、木ノ葉の住宅の屋根にたたずむ存在。闇に溶け込む黒いマントを羽織り、黒い帽子、そして同じく黒い髪の毛で左目を隠した男がそこにいた。

見回りの忍達にも察知されない見事な隠密で、彼はシヤナの部屋で眠るボルトを眺めていた。

「厄介なことになったな。ボルトが無事なのは幸いだが、この時代、この里の人間と接触してしまったか」

男は、右手で小さな亀のような人形を眺める。そして、懐にしまうと、ボルトを保護したシヤナをどうするか思索していた。彼は、自分をこの場に移動させた原因である、亀のような形である時間移動法具であるカラスキが残したメッセージについて考えていた。

『ここは、過去の木ノ葉であること。未来から来た事実を誰かに伝えてはいけない。この時間の人間には、あまり干渉しない事。それらを守られなければ、未来が変化してしまう危険性がある』

彼とボルトは、未来の世界でウラシキの企みを阻止するために、戦ったが、時間移動の最中の戦闘でボルトとウラシキが逸れてしまい、彼だけが別の場所に移動してしまった。ウラシキと同じ場所に移動したボルトが危険なため、里中を探索したが、何故かボルトは木ノ葉のくノ一の元で保護されていた。

(しかし、よりによってナルトの隣人か。それに)

男は、ボルトを保護した女性を見て、一切思い当たる事がなかった。あんなくノ一が木ノ葉に居たのかという疑問。全ての木ノ葉の忍を知る訳ではないため、たまたま知らない忍だったのだろうか。

「お前、何者だってばね」  
「何」

ボルトと同じ部屋にいたはずのくノ一が、男の背後を取って、チャクラ刀を向けている。油断していた事は事実だが、この時代の里に、自分の背後を取れる忍が居るとは思いもしなかった。

「あの子を狙っている奴がもう一人いるとは、あの子もお前も何者だってばね」

「あの子を保護してくれた事には感謝するが、それは教えられないな」  
瞬時に腰の刀を抜いた男は、雷のチャクラを刀に流し、背後のくノ一のチャクラ刀とつば競り合う。二人の刀がぶつかった瞬間、男のマントがなびき、左腕が存在しないことがくノ一の目に入る。バチバチと互いのチャクラ刀が干渉し、音と光を放つ。夜にこれだけ騒げば、他の忍達も駆けつけてくるだろう。

「場所を変えるってばね」

男の刀を弾き、そのマントを掴んだ瞬間。粒遁・天門によって二人ともその場から消える。

うちは

時空間忍術によって移動した男とシヤナ。男は瞬時にシヤナを払いのけ距離を取りながら、移動した場所を確認している。

シヤナは、木ノ葉の忍が救援に来ることで足手纏いが増えるのを防ぐ。シヤナの粒遁・天門は、シヤナのチャクラ粒子と自分を入れ替える事で瞬間移動する忍術。

父である四代目火影や開発者の二代目火影と違い、マーキングの必要がなく。戦闘で粒遁を使用すれば、その段階で移動先を精製できる。ただ弱点としてマーキングの必要がないという事は、マーキングそのものが出来ないという事。

直接教えられた術ではなく、自己研鑽の結果編み出した術故の問題点。父のようにあらかじめマーキングした箇所に飛ぶという事が出来ない。シヤナの粒遁は、空気中では時間がたてば消えてしまう消耗品。

なので、マーキングへ移動をすることで退避や誘導が出来た飛雷神とは、違う。だが、シヤナの粒遁を残しておく方法を開発した。

ランプのような器具に粒遁の粒子を集め、外気に触れさせなければ保存できる。それをシヤナは、自室とこの場所にだけ、配置していた。どちらも一回きりの移動となってしまうが、それで十分だった。

「なんだこの場所は」

「安心しろってばね。ここは木ノ葉の増援なんて来ない。今は閉鎖された、うちはの修練場だつてばね」

かつて、ここで修行していたシヤナ。共に修行した仲間との思い出がある場所。シスイは死に、イタチは一族を亡ぼし里抜け、サスケも里を抜けた事で、この場所を管理するのはシヤナだけ。故に里からの応援はこない。

つまりは好きだけ暴れられるという事。そして、ボルトから引き離す目的も成功している。

「うちはの修練場だど?」

男は今自分が居る場所を聞き驚きながら、周囲の様子を眺め、手裏剣の跡が残る木を見て、何か物思いにふけっている。しかし、戦闘態勢に入ろうとしているシヤナを警戒し、刀を構えざるを得ない。

彼からすれば、ここでの戦闘は全く本意ではない。だが木ノ葉の忍としてシヤナが戦う必要があるのは理解している。

「何故お前がこの場を」

「私が、管理してる土地だからだつてばね」

シヤナが管理しているというと、実に不思議そうな視線でシヤナを見る男。

「なぜ、滅んだ筈のうちは一族の土地をお前が管理している」

「私がうちは一族だからだつてばね」

シヤナが青い写輪眼状態になると、男が目を大きく開きながら狼狽える。シヤナとしては、かなり他国にまで名前が売れている自覚があったのだが、目の前の男は、知らないらしい。

しかし、木ノ葉に侵入した相手が、木ノ葉の里の不祥事である、サスケの里抜けで、うちはの生き残りがシヤナだけになったニユースを知らない違和感。

現にシヤナが近頃、木ノ葉から離れられないのも、唯一残つたうちはの血筋を保護するためだ。

「うちはの生き残りだと？ 俺、いや…うちはサスケが最後の生き残りではなかったのか」

「ある意味では、そうだつてばね」

シヤナの言葉に男の表情がこわばる。

「元うちは、今の名は、うずまきシヤナ。そういう意味では、うちは一族は壊滅してゐるってばね」

「うずまき、シヤナ?」

「もう話は良いってばね。いざ」

ここでようやく男は、自分の抱いていた違和感の正体にたどり着いた。だがそれを整理するより先に、手裏剣を両手に構えたシヤナが、攻撃を開始する。手裏剣を投擲、それらを避けた男だったが、手裏剣にかけられたワイヤーによって木に拘束される。

うちはに伝わる操手裏剣の術と青いとはいえ、見事な写輪眼を見て、男はシヤナが真にうちであると理解した。ワイヤーを刀で切断、拘束から抜け出すが、シヤナの猛攻が止まらない。瞬時に印を結び火遁・豪火球の術を放つ。

それを迎撃する目的で、刀を地面に刺し、片手で印を結ぶことでシヤナより強力な火遁・豪火球の術を放つ。  
(片手で印を、それに火遁の威力)

二つの豪火球が修練場で爆発。その爆炎にまぎれ粒遁・天輪の粒子砲を発射したシヤナ。直撃させるつもりだったのだが、男はシヤナの攻撃を見切り、横に回避。刀を拾い、シヤナを切りつけてくる。シヤナも両膝に装備したチャクラ刀で受け止める。

金属の響く音が修練場に響き、シヤナの青い写輪眼は、闇夜で光る赤い瞳と向き合う。

「お前、その写輪眼、それに黒髪とさっきまでの黒目、やっぱり、うちは一族だってばね」

「……手荒なことはしたくなかったが、時間の流れにどう影響するかわからない。お前の記憶を消させてもらう」

男が写輪眼で彼より身長が低いシヤナを見下ろす。刀を押し込む力が強まり、臂力で劣るシヤナが押される。そして、体勢を崩された

タイミングで蹴りを腹に食らう。

「ぐう」

男の動きがマントで隠れており、蹴りを見切れなかったシヤナ。腹部を押さえながら距離を取る。本格的にシヤナを倒すつもりなのか男の猛攻が始まる。自分のマントで体を隠し、見切りにくい攻撃を続けてくる。さらに雷遁を纏い、加速する男。シヤナも粒遁で加速し、二人が光の線を描きながらぶつかり合う。

(悔しいけど、この身のこなし、私より強い)

粒遁の天翔での高速移動は愚か、時空間忍術である天門での奇襲攻撃も、男は見切ってきた。的確に対処されていくシヤナの手札。

「やはり飛雷神の術か、その年で使えるとはな」

最近、自分より強い相手が多いことに苛立ちを覚えるシヤナ。全てにおいて頂点に立つとは思っていないが、自分より優れる格上がいることは、シヤナには許しがたい事。常に手段を変え、強敵を打倒してきたシヤナだが、そろそろ自分の力不足を感じ始めている。

そして、シヤナには決定的な弱みが発生している。

(長時間の万華鏡での未来視、ここにきて、響いてくるつてばね)

シヤナの独自の術である未来視は、ウラシキとの戦闘中で酷使した影響で、使用できなくなっていた。無理に使用すれば、脳が限界を超える危険性がある。故にシヤナは写輪眼のみで、格上の相手をせざるを得ない。

誰よりも強くありたいというシヤナの焦燥感は、写輪眼を使う謎の男との戦闘中に、極限の集中力となって力となる。

シヤナの生存本能が、うちはの血が、彼女の瞳力を強めていく。

男の動きを観察し、理解し、模倣し始める。男の方は動きが次第によくなるシヤナに気が付いている。

「うずまきシヤナとか言ったな。ということとは、うずまきナルトとは、親戚かなんかか?」

「弟だつてばね!」

男の繰り出した蹴りとシャナのコピーした男と同じ蹴りが衝突する。鏡のようにシャナと男が同じ技を振るい、同じ剣術で対等にぶつかり合う。相手が自分より強いなら、自分より強い相手の技術を盗み始めるシャナ。徐々にだがシャナの動きのレベルが上がっていく。

シャナは気が付いていないが、彼女の能力が爆発的に上昇するのは、命の危機が迫るか、自分より遥かに格上と対峙した時なのだ。  
(このくノ一、俺の動きをコピーし始めている。早く決着をつけなければ、今の状態ではきついな)

男は自分に課せられたハンデを想定し、ここで決めようと大きく前が出る。その目が六芒星の万華鏡写輪眼へと変質。須佐能乎を発動し、紫色のチャクラの巨人の拳でシャナを拘束しようとする。シャナも同タイミングで万華鏡写輪眼に切り替え、須佐能乎を発動。

二体の須佐能乎がぶつかり合った。

## 未来のサスケ

男の須佐能乎とシャナの須佐能乎ががちり取っ組み合う。未来視が使えない状況では、万華鏡写輪眼の瞳術を効果的に使えないシャナは、あえて封じていたのだが相手が万華鏡となれば、そももいかな

い。

「この時代に須佐能乎まで使える使い手とはな」

「お前はさつきから何を言ってるってばね！」

次で決めようと、男が前髪で隠れた左目にチャクラを集中し始める。一方でシャナは、男の動きを観察する中で、ある事に気が付き始めている。チャクラの質や年齢、体格などは違うが、シャナが間違えるはずがない事実があった。

でもそんな筈がないと、考えを振り切り、須佐能乎を解除。男の懐に潜り込みながら、粒遁螺旋輪虞を叩き込もうとした。

「神羅天征」

回避不能で、須佐能乎ごと破壊しようとしたシャナだったが、気が付いた時には螺旋輪虞が消し飛び、シャナの体も不思議な力によって吹き飛ばされ、背後の大木に激突した。そのダメージから動けなくなり、意識が飛びそうになる。先見の写輪眼を使わなかったことで、不意打ちをもろに食らったシャナ。

唇を噛みしめながら、意識を保とうとするが、体が動かない。

謎の力を使った男もチャクラ切れがちかいのか、ふらついて左目を押さえている。

「ま、まけた、くない、もっと、もっと」

ナルトではないが、ボルトの存在も守るべきものとして認識しているシャナ。自分が倒れれば、守れない。動かない体に鞭を打って、無理やりチャクラと力を引き出そうとするシャナ。だが男が動けないシャナに近寄る方が早い。

「やめておけ、無理にチャクラを引き出せば、最悪死ぬぞ」

「……偉そうに、……、どのつら、さげて、いう、ってばね、………サ



スケ」

「何を」

意識を保つことに集中するシャナは、ほぼ無意識に男に対して言った一言が、彼の動きを止めるに至った。シャナの呼んだ名前、それはサスケだった。つい先日里を抜けたはずの彼が帰ってきているはずがない。それもシャナよりも強く成長した姿で。

だが動きの癖や、術から見てもサスケの面影が常に過っていた。

「悪いが、俺はお前の知っている、うちはサスケじゃない。そして、俺はお前を知らない」

シャナの予想は当たっていた。男の正体は、うちはサスケ。だがシャナの知るサスケではなく、未来のサスケだった。それも、シャナの居る世界とは別の時間の流れから来たサスケ。

ボルトを助けてくれた事には礼を言うと言げ、シャナの記憶を消そうとした時、サスケの懐から『警告・警告』と音声がかかる。

サスケがシャナの記憶処理を止め、懐から亀のような道具を取り出す。

「なんだ、カラスキ」

『うちはサスケ様、一つお伝えすべきことがありました。この時代から帰るために、チャクラを充填する必要があり、待機状態になっていましたが、この時代は、サスケ様の居た未来とは別の次元に存在し、時間移動の為のチャクラを収集できません』

カラスキと言われた亀は、未来でウラシキの手によって時間移動を行っていたが、時間移動中のウラシキとの戦闘が激しく、座標が大幅にずれ、過去は過去でもシャナ達の居る次元に迷い込んだという。本来の時間軸から離れたことで、カラスキの機能にも影響が出ているという。

時間移動のチャクラの充填が出来ず、このままでは未来に帰る事も出来ないという。

「他に方法はないのか？」

『あります。この時代で唯一、時間軸の違う存在のチャクラを頂ければ、可能です』

そんな存在を探すことは不可能に近い。実質サスケは元の世界に帰れないことを意味している。

『そちらにおられる、大筒、いえ、うずまきシヤナ様は、時を超える魂を持つております。彼女のチャクラを充填してもらえれば、本来の運用が可能です』

「時を超える？ 待て、お前はこの時代の人間と関わるなど言っていないかったか？」

サスケの質問に無機質な声でカラスキが回答する内容は、サスケの想定外の答えだった。

『大筒、いえ、現うずまきシヤナ様は、未来を見る事の出来る、時の流れに逆らうチャクラの持ち主です。唯一の例外として、彼女は未来を伝えても、タイムパラドックスが起きない特異点となっております。彼女に協力を得る事がサスケ様やボルト様が未来に帰れる条件となっております』

未来を見る能力、信じられない力だが、現に過去に来るといふ不思議体験はしているのだ。なら、未来を知る能力者が居てもおかしくないだろう。

問題は、その協力者を倒してしまったことだろう。

カラスキの話を聞いていたシヤナは、別の可能性を歩んだサスケの姿を眺めていた。そして、里を抜けた後のサスケの未来にも、目の前の彼のように強くなる未来があるのだと考えていた。

「で、どうする、ってばね」

カラスキの話から、圧倒的に優位な立場だと分かったシヤナは、困惑気味の顔をしているサスケに嫌らしい笑みを向ける。シヤナの知るサスケではないが、サスケはサスケ。別の時間軸だろうが年上だろうが、関係ない。

弟分の扱いなど、百も承知しているのだ。

「うずまきシヤナ、た、頼む。俺達に協力してくれ」

「ため口？」

「うずまきシヤナさん、俺達に協力して、くだ、さい」

苦虫を噛み潰したような表情のサスケに、気分をよくしたシヤナ

は、笑いながら気絶した。サスケは、気絶したシヤナの様子に溜息を吐きながら、彼女を背負う。

(俺の居た木ノ葉にはいなくノ一、不思議だが、こいつの写輪眼は、あの男を思い出させた)

未来のサスケは、15年も前の戦争を思い出し、其処で戦った強敵の姿が、シヤナと被った事を思い出していた。背中にある軽い体に降りかかるであろう重荷に、同情しそうになる。

だがサスケの居た世界とは違うため、彼女や木ノ葉の歩む未来が同じとは限らない。だが、なんと言うのか、妙な感覚を感じたのだった。

## 父と子

二連戦で疲れ果てていたシヤナは、結局次の日寝坊した。

一方でよく眠れたボルトは、家主のシヤナを起こさないように置手紙を残して、サスケと合流するため過去の木ノ葉の里を出歩こうとしたが、扉の前で待機していたサスケと合流。

二人は、ウラシキの狙いである、過去のナルトを探そうと木ノ葉の里を散策する。だが、既に家にはおらず、ラーメン一樂などにも居ない事から、搜索は難航していた。

「父ちゃん何処にもいないってばさ。サスケさん、他に当てはねえの？」

「ない。俺が知ってるアイツの行動範囲はすべて回った」

少年時代のナルトの行動範囲など、サスケが殆ど知るはずがない。地道に探すしかないのだろう。サスケは、ここが自分の居た世界とは違う場所だと知っているが、ウラシキの狙いであるのが、サスケの知るナルトでなくとも、ナルトである事には違いがない。

そして、九尾が存在している以上、大筒木の人間に九尾を回収される事の危険性は理解している。だからこそナルトを守るという当初の目的を果たそうとしていた。そして、元の世界に帰るために、シヤナにはカラスキを渡しておいた。

彼女が持っているだけでチャクラが充填できるからだ。

シヤナ自身もウラシキの狙いがナルトであると聞かされ、回復次第直ぐに駆け付けると言っていた。想定外だが、頼りになる人間を味方に付けられたサスケ。

「もうどこにいるってばさー！ うわ」

よそ見しながら歩いてきたボルトが誰かにぶつかり、二人そろって倒れてしまう。

「ちゃんと回り見ろってばさ」

「そつちこそ、んな所に突っ立ってるじゃねえってばよ」

(最悪だ)

ボルトとぶつかつたのは、黄色の髪に青い瞳オレンジの服を着た少年、彼らの探していたナルトだった。ナルトの姿を見たボルトが「父ちゃん」と零してしまふ。

「はあ？ 何言ってるんだってばよ」

「あい、いや、なんでもねえ」

流石に子供時代の父親に、自分は未来からきた息子だと伝えられない。なんというべきか悩んでいると、遠くから全力疾走する老人が現れる。

「何やつとるんだナルトオ、早く逃げるぞー」

「あ、エロ仙人」

エロ仙人こと、伝説の三忍の一人である自来也は、何かに追われているようで、必死に走っていた。

「追われているのか？」

「そうだー！ー！」

彼の背後に10人ほどの人影が見える。ボルトが前に出て「俺に任せろってばさ」と宣言するなり、自来也は握り絞めていた双眼鏡を渡すなり、ナルトを引き連れて走り去っていく。

そして、残されたサスケとボルトだったが、自来也を追いかけていた集団に覗き魔だと疑われたのだった。自来也が女湯を覗きそれがばれて逃げていたのを庇ってしまった二人は、犯人の特徴である大人と子供の二人組という特徴から木ノ葉の警務部隊に引き渡されそうになる。

だが、犯人である自来也とナルトの二人組を捕まえた五代目火影、千手綱手が二人は無実だと伝え、誤解を解いてくれた。だが、サスケとボルトは、余所者であり、今の木ノ葉の里としては二人の自由を許可できないとして、ナルトと自来也に監視を行うよう命じた。

結果的にナルトを身近で守れるようにはなったが、サスケは木ノ葉に自分を知る人間が多すぎると、姿を隠すことになる。残されたボルトは、ナルトと共に行動することを余儀なくされる。

そして、ナルトに案内された場所は、昨日ボルトが泊めてもらったシヤナの家の隣だった。

「またここかよ。てか、隣に住んでるんだな」

「ん？ 何が？」

「いや、昨日隣の部屋のシヤナさんにお世話になったんだってばさ」  
シヤナの部屋を指さすボルト。すると、ナルトがひどく驚いた表情で「昨日のお前だったのか」とボルトを指さす。

「昨日、姉ちゃんの家から、知らない奴の声がすると思ってたんだってばよ」

ナルトが怒りながら睨んでくるのでボルトが落ち着けと宥める。

(このころの父ちゃん、シヤナさんが好きだったのかな？)

父親の過去の想い人など知りたくなかったと勘違いしているボルト。だがナルトから隣に住んでいるシヤナとは姉弟だと教えられる。その事実にはボルトは驚く他なかった。

(父ちゃんに、姉ちゃんが居たなんて聞いたことないってばさ。俺の伯母さんになるってことか。いや待てよ)

未来で一度もあった事のない人物。父親が姉を紹介しないなどありえない。となれば、未来で生まれたボルトが知らない理由は何だろうかと思案したが、深く考えると嫌な事実にとどり着きそうで、考えるのを放棄した。

そして案内されたのは、カップ麺の食べた跡などが散らかった部屋。

「なんで一人暮らししてるってばさ？」

「うーん、俺ってば父ちゃんと母ちゃんが居なくて、ずっと一人で暮らしてたんだ。ただ、何年も前に姉ちゃんが帰ってきてから一緒に暮らしてんだ。」

まあ部屋は別だけど、基本は二人で生きてきた」

「そっか」

何か事情があるのだろうかと深くは詮索しないボルト。やがて二人とも腹の虫が鳴いたのでナルトがシヤナに隠れて秘かに買い溜めしていたカップ麺を食べることになる。

子供の頃から好物は変わらないんだなと呆れるボルト。だが、何故姉弟で一緒に食事しないのかと尋ねられたナルトは、眉間にしわを作

りながら説明する。

「今俺と姉ちゃんは、紛争状態なんだってばよ」

「え、なに？ 姉弟喧嘩か？」

ボルトの問いにナルトは頷く。シャナの部屋にいた時、妙に食材が多いと思ったが、元々はナルトと食べる材料だったらしい。そして二人は喧嘩中。

ただ部屋がお隣なので、不干渉を貫いているらしい。これまでも何度かこういう事があったというナルト。

ただ今回は、シャナの怒りが凄まじいらしく、仲直りも出来ていないという。

「喧嘩の原因は何だってばさ」

「俺ってば、エロ仙人と一緒に長い修業に行こうと思ってるんだってばよ。けど、姉ちゃんがそれを認めてくれねえんだ」

いつまでも自分を子ども扱いし、ナルトが求める修業を許可してくれないシャナ。ナルトの保護者はシャナなので、自来也としても勝手につれていくわけにもいかないのだ。シャナなら自力で連れ戻しに来るかもしれないし、誘拐で訴えられると里は捜索隊を出さなければならぬのだ。

自来也の準備もそうだが、シャナの許可がなければ修行に出れないナルト。そこで説得を試みたが、互いに譲らぬ主張でヒートアップ。やがて、「俺の本当の姉ちゃんじゃないくせに」と言ってしまったナルト。その時のシャナの顔は怖くて見る事が出来なかった。ただ、そこから何日も口を利かないし、シャナもナルトを透明人間のように扱った。

(うわー、こじれにこじれてるってばさ)

父親とおそらく伯母の喧嘩の原因は互いに対する思いやりからくるものだったのだ。だからこそ、こじれて大事になってしまったという。どうにか解決する方法はないかと考えながら、夜になり用意された布団で眠ろうとしたボルトだったが、ナルトがボルトに聞きたいことがあるという。

「俺の事よりさ、お前の家はどんな家なんだ？ 父ちゃんとか母ちゃ

ん居るんだろ？」

父親と母親がおらず、普通の家庭を知らないナルトからすれば、父親や母親の居る人間の話を聞いてみたいのは当然かもしれない。今でこそシヤナと言う家族がいるナルトだが、父親や母親の存在が恋しくないかと言えはそうではない。

シヤナに父と母の事を聞いても、覚えていないと言われるので余計にである。

「俺の父ちゃんは、なんか皆にすっげー頼りにされているみたいなんだけど、忙しくてあんまり家に帰ってこないんだ」

「ふーん、そっか」

ボルトの家族の話を興味深そうに聞いているナルト。

「けど、家にいる時は気が抜けてるのか何時もダメダメだよ」

「駄目駄目？」

ボルトは笑いながら、父親の失敗談を話した。彼の妹の誕生日に疲れから誕生日ケーキをひっくり返したエピソードを。それを聞いたナルトは想像してけらけら笑っていた。

「そりや確かに駄目駄目な父ちゃんだな」

ボルトは内心「あんただけだな」と突っ込みを入れながらも、家族の話を近づけた。それを聞いていたナルトは家族の話をして楽しそうなボルトを見て、幸せそうだと感じていた。

「けどさ、そんな父ちゃんでも嫌いじゃねえんだろ？」

「……ああ。嫌いじゃねえよ」

父親の子供時代との団欒は、両者ともに心に温かなものが残るものとなった。やがて、両方が寝入ったのだった。

ボルトとナルトの二人が団欒を終え、寝入った後。ナルトとシヤナの家の天井には、見張りの目的で潜伏していたサスケが居た。

ウラシキが既にこの時代にいる以上、何時仕掛けてきてもおかしくはない。だから見張りをしているのだが、一向に現れる気配はない。

「ご苦労様だつてばね」



サスケの背後に籠を持ったシャナが現れる。その頭には、カラシキを乗せておりなんとも間抜けな姿だが、シャナのチャクラがなければ未来に帰れないため、協力してもらっている立場のサスケ。突っ込む事も出来ず、シャナが差し出してきた籠を受け取るしかない。

「なんだこれは」

「お夜食だつてばね。おにぎり握つたの。おなかで良かったんだよね？」

サスケの好物は把握している。いけ好かない態度の子供だったサスケだが、好物くらいは食べているときの反応で知っているシャナ。別の未来のサスケとはいえ、好物は同じだろうと思ひ、差し入れを作ってきたのだ。

サスケは、本当にこの人物は幼少の自分を知っているのだなと感じる。だが、シャナが居てもこの世界の自分が里を抜けた事実は変わっていない。変わらないものは変わらないのだろう。

里を歩き情報収集して知った事実だが、目の前の少女は、かなりの有名人だという事。武勇伝が里や里の外にまで轟いており、実力も折り紙付きだという。もし自分の少年時代にシャナが居れば、力を求めていたころの自分なら嫉妬で、大蛇丸の所に行っていただろうと考える程に。

やがて、シャナが眠いと言つて部屋に帰る。残されたサスケは、貰ったおにぎりを食べながら、木ノ葉の夜を眺めていた。

## 九尾の封印

ナルトと一緒に里を散策していたボルト。ナルトと一緒に木ノ葉の下忍たちとの交流なども体験したが、この時代にいるはずのサスケには会えていなかった。

その事について尋ねるもみんながはぐらかしていた。

そんな様子を見ていて察しの良いボルトは、最近里抜けした下忍と云うのがサスケの事だと考えていた。そのことを夜にサスケに尋ねれば肯定された。

だからこそ、サスケは細心の注意を払って過去での行動を行っているのだという。サスケは過去の事には関わるなど言い、姿を消してしまふ。

その次の日、ナルトが自来也に修行をつけてもらおうと言い、木ノ葉の里の外に出してしまう。流石に一人きりはまずいと思い、サスケとボルトもついていく。

監視対象なのに好き勝手に出歩いているサスケにナルトが苦言を零す。その言葉にサスケは困り顔だが、ナルトは修行の邪魔するなと言いながら、自来也を探そうと森に入った。

その直後、サスケが空を見上げる。奴の気配を感じ、視線を向けた先にいたのは、ナルトを狙う大筒木ウラシキ。彼は空を飛びながらナルト達を見下ろす。

「やっと見つけましたよ。さて、お邪魔虫共々刈り取ってあげましょうか」

「ボルト！ ナルトを連れて逃げろ」

サスケが刀を抜き、ウラシキに攻撃を仕掛ける。ウラシキは空中で回避すると、自慢のチャクラの釣り竿を振るい、何が起こったかわかっていないナルトを攻撃。チャクラを抜き取る釣り針を腹部に受けたナルト。このままでは、チャクラを抜かれてしまい、九尾の力が

奪われると危惧したボルトとサスケだが、意外にもチャクラが抜き取られることはない。

「あれ？ どういうことです」

ウラシキの方も想定外と言った様子で、何も引つ掛かっていない針を眺めている。一方、攻撃を受けたナルトは、心底怒りながらウラシキにクナイを構える。

「何者か知らねえけど、攻撃してくるような奴はぶっ飛ばしてやるってばよ」

「おい待て、ナルト！」

サスケが止めようとしたがナルトが先に飛び出してしまう。少年時代のナルトが、未来で他国の影たちも圧倒するウラシキに勝てるはずがない。

影分身を足場に飛び上がり螺旋丸を繰り出したが、ウラシキの竿によって弾かれ、バランスを崩した隙に糸で拘束されてしまう。

「チクショウ、はなせってんだ」

「やかましい人ですね」

ウラシキは糸を操作してナルトの口を塞ぐ。身動きの取れないナルトを救助しようとボルトが飛び出す、螺旋丸を空中で回避され、更に距離を取られてしまう。悔しい表情で空を見上げるサスケとボルトの傍に、自来也が合流する。

ボルトが螺旋丸を使用した光景を見て驚いた彼だが、ナルトが何者かに誘拐されている状況の方が問題であった。

「何があったー！」

自来也も合流し、4対1となるが、一人は捕まり3人は迂闊に攻撃すればナルトに当たってしまうため遠距離攻撃も出来ない状況。ウラシキはナルトを回収したことで戦う必要がないと、腰に下げた魚籠から巨大な岩を幾つも放ち、3人を巨大なドームに閉じ込める。

動けないためウラシキを睨むしか出来ないナルト。

「……」

「貴方が馬鹿で助かりました。幼い頃から頭の切れる人かと思ってたんですが、そうでもないみたいですね」

ウラシキがそういういながら、ナルトを連れて空を飛んでいく。ウラシキの使った土遁は、強固なもので、ボルトの螺旋丸程度では脱出は不可能。その隙に遠くに行くというのは正しい。そして、ナルトから九尾のチャクラを抜けない原因を探らなければならない。

空を飛んでいくウラシキとナルトを観察する視線が一つあった。  
(嫌な予感がしたから、来てみたけれど、ギリギリセーフみたいだつてばね)

木ノ葉の里で警護の任務が割り振られていたシャナは、体調不良を理由に休暇を貰うために火影室を訪ねていた。一応任務として与えられた役割なので、穴をあけるなら、連絡しなければとシャナの責任感が仕事をしてしまった。そのため遅れてしまった。

(サスケは何をやってるってばね)

ウラシキとナルトが木ノ葉の郊外にある洞窟に入った所で、シャナは気配を消しながら様子を探る。ウラシキの実力は、未知数の為、先見の写輪眼は必須。だが時間制限のある先見の写輪眼を先に切っては、時間稼ぎにしかない。

すぐにでもナルトを助けたいが、格上相手に無作為に挑む無謀さは知っている。心を殺し、息を潜め、サスケが合流するのを待つのが得策。

そのはずだったのだが、シャナも思いもしない事が起こった。

瞬きをする僅かなタイミングで、洞窟中に充満したチャクラ。何事かと目を開いたシャナが見たのは、洞窟を崩落させる赤き獣の咆哮だった。

## 4本目

崩落した洞窟から自力で脱出していたウラシキ。彼は空高くに飛び上がりながら下界を見下ろす。

「失敗しましたね。まさか狐がこれほどとは」

彼はナルトを拘束。動けない彼の中の九尾の妖狐を引きずり出そうと、封印式の中に入った。そこで無理やり九尾の封印を解き放とうとし、その力によって弾き出された。

運の悪いことにはじき出される瞬間に九尾の封印を少し緩めてしまい、封じられた九尾のチャクラが漏れ出したことでナルトの様子が激変。

苦しみながら赤いチャクラの衣に包まれ、チャクラの尾の数が一気に4本目に達した。その瞬間、ナルトの皮膚は剥がれ、理性は消失。朱い血のようなチャクラが体表を再構築。荒れ狂う獣となって襲い掛かってきた。

咄嗟にガードしたウラシキだったが、ナルトの4本の尾が追撃にと襲い掛かり、その衝撃波で洞窟が崩れてしまった。そこから抜け出し、九尾がどうなったのか確認すると、彼はにやりと笑ってしまった。

「これはこれは、面白いことになってますね」

ウラシキが晴れた土煙の中に見た光景は、明確な殺意を持ってナルトと戦っているシャナの姿だった。

—————

洞窟の崩落に巻き込まれたシャナは須佐能乎を使い瓦礫を粉碎。無傷で地表に出たのだが、シャナの頭にはウラシキの存在やナルトの救助なんて考えは消え去っていた。

その写輪眼はこれまでで一番憎しみに染まり、怒りと抑えきれない衝動で歯を噛みしめ、爪で自分の腕を血が出るまで引っ掻いていた。自傷しなければ、痛みがなければシャナは自分が自分の制御を失うと本能的に察していた。

洞窟で感じたチャクラ。間違うはずがない。チャクラに混ざった悪意と憎悪。あのチャクラをシヤナは一瞬たりとも忘れたことがない。忘れられるはずがない。

シヤナからすべてを奪い、弟であるナルトの中でのうのうと生きている害獣。シヤナの人格を歪める原因となったあの、畜生の存在を。そして、大人しくナルトの中にいればいいものを、こうして隙を見て外に飛び出してきた獣。

「はあ。はあ……、はは、ふふ……きゅうううびいいいいい——  
——!!!」

うずまきシヤナ、うちはシヤナ、いや波風シヤナの宿敵である九尾の妖狐がナルトを突き破って這い出ているように見えた。シヤナは人柱力と戦った経験はない。故にナルトの今の状態を知る事が出来ていなかった。

ナルトの封印が解け、九尾が表に出てきたようにしか見えなかった。さらにシヤナの写輪眼では、今のナルトのチャクラが九尾のチャクラにしか認識できず、弟が死んでしまったかのように感じていた。冷静さを保とうとしていた理性が消え去る。

ナルトが殺されたと思い込んだ彼女は、九尾をこの場で殺す事しか頭になかった。理性を失い、10数年も心の奥で燻っていた黒い炎が表に現れる。これまで須佐能乎の第2形態までしか披露していなかったシヤナだが、憎しみが臨界点を超え、第三段階へと到達。

尾獣クラスの巨大な須佐能乎がシヤナの力によって具現化する。シヤナの怒りを象徴するように阿修羅型の須佐能乎は、憎悪の面を被っていた。

4本の尾を持った状態のナルトは、自分を見下ろす須佐能乎を見上げ茫然としていた。しかし、野生の本能からか迎え撃つべく、チャクラを口の前で凝縮していく。膨大なチャクラの巨人に対して膨大なチャクラの塊を放ったナルト。

発射された尾獣玉と呼ばれる尾獣たちの奥義は、シヤナの須佐能乎の拳によって粉碎される。だがナルトは無尽蔵ともいえるチャクラでもって高速で移動しながら尾獣玉を何発も発射していく。

「ちよこまかと、潰れる!!」

「——!!」

巨大な須佐能乎を使い、6本の腕で尾獣化したナルトを九尾だと思  
い込み捻り潰そうとするシヤナ。守りは厚く、攻めは苛烈なシヤナの  
須佐能乎は、使用者の怒りを表すように嵐のように暴れる。

しかし、須佐能乎は使えても完全に使いこなせていないシヤナの体  
は、須佐能乎によって細胞レベルで負荷を負っていく。通常なら気絶  
してしまうような痛みの中、血涙を流しながら、シヤナは戦い続けて  
いた。

あまりの怒りによって痛みが麻痺。目の前の九尾を殺す事だけに  
意識が集中。対峙する九尾の力に吞まれたナルトも手強いためか激  
戦へと至ってしまう。

理性を失ったシヤナと意識のないナルトの姉弟喧嘩は、互いの存在  
を否定するように苛烈になっていく。その様を上空で見守っていた  
ウラシキだったが、さすがに九尾が殺されてはまずいとナルト側に加  
勢しようとした。

背後に回り込み釣り針を使うことでシヤナの力を奪おうとしたの  
だ。

「失せろ」

(なんて才能だ)

シヤナは、九尾と対峙しながらノールックでウラシキの釣り針を須  
佐能乎の腕で掴み取り、油断していた彼に須佐能乎で作り出した巨大  
な大玉螺旋輪虞を叩き込んだ。一切の躊躇なく叩き込まれた技にウ  
ラシキは全力でガードをするも瓦礫へと吹き飛ばされてしまう。

理性を失いながらもシヤナは、ウラシキの存在を意識から外してな  
どいかなかった。弟が九尾に飲み込まれた原因であるウラシキは必ず  
殺すつもりで九尾の後に取っただけ。そして、突進してきた九  
尾を須佐能乎の腕で受け止め、その尾を残った腕で掴むと、九尾を地  
面に何度も叩きつける。

何度も振り回されチャクラの尾が千切れたことで九尾は吹き飛ば  
された。

「ウオオ」

土煙を払いのけた5本目の尾が飛び出そうな九尾と向き合うシャナ。赤黒い体を覆うように骨のようなものが形成され始めている。

対峙するシャナは両目から血を流し、口や鼻などからも流血が止まらなくなっていた。

(もうお前だけ、九尾い)

酷使された体とは裏腹に、抑え込んでいた感情の発露が伴う解放感がシャナを包み込んでいた。ようやく復讐が叶うという喜びからか、口には笑みが浮かび上がりそうになる。憎い相手と対峙しているのに、澁澁とした気持ちになる。

ふと自分のほほに触れたシャナは自分が血まみれなのを知る。

「ふふ、はは、あはは」

闇に落ちるのは一瞬だった。闇こそが揺りかごであるように、シャナは黒い感情の中で穏やかになっていく。ようやく九尾を殺す事が出来る。その羨望の前では、ナルトが死んだかもしれないという悲しみを感じる事が出来なかった。悲しみよりも憎しみが勝ってしまった。

もう誰も止められないかと思った時、ナルトが螺旋丸の修業で綱手より貰った胸元の首飾りとシャナの腕に巻かれたトネリに渡された数珠が緑の光を放つ。まるで共鳴するかのように放たれた力は、九尾の動きを縛り、優しい光でシャナを覆う。

戦闘中に光に包まれたシャナは、動けなくなってしまった。一方で光によって縛られている九尾は藻掻いているがシャナの持つ数珠と共鳴した初代火影の首飾りの力に抗えない。両方とも太古から存在する宝具の様なもので、首飾りは尾獣の力を抑え、数珠はシャナの心の闇を払う。用途は違うが、奇跡のような偶然が二人の戦いを止める。

うちは一族の事をよく知っていたトネリから贈られた数珠は、彼女の心が闇に落ちかけた時、自動で働くよう術式を組まれていた。光り輝く月と水紋一つない水と言う幻術がシャナの前に現れる。

ほんの一瞬だけだが、戦闘と復讐から切り離されたシャナの意識。



(私は、何をしていたってばね。いや、そんなことより、ナルトは?)  
九尾の事よりもナルトに意識が向いた時、シヤナの先見の写輪眼が発動。ナルトの未来を映し出す。これはナルトが生きている事を表している。

先程とは違い、復讐よりもナルトの救出に意識を向ける事が出来た。すると幻術が解除され、激痛と共に目の前に九尾によって苦しむナルトの姿が目に入る。

「トネリ、ありがとうだってばね」

とんでもない事を仕出かしかけた。自分の手でナルトを殺しかけた事をシヤナは、一生忘れられないだろう。だが手遅れになる前に救ってくれた存在に感謝を述べながら数珠に口づけするシヤナ。

初代火影の首飾りの力も弱まり、やがて九尾が暴れ出す。それより先にとシヤナは、胸に手を当てる。

「解!」

戦闘用ではなく、シヤナの魂に眠る巫女のチャクラを開放。シヤナの体から無数のチャクラの鎖が生成され、それらが5本目の尾を出したばかりの九尾を縛り付ける。粒遁封印術・金剛天鎖が尾獣化したナルトから邪悪な九尾のチャクラだけを吸収していく。

「ギョオオオ、オオ」

元々魔獣を封印する巫女のチャクラは、完全に封印が解けていない状態の九尾であれば、瞬間に封じてしまえる。九尾のチャクラを吸い取りながら強度を上げていく鎖の前に、ナルトは尾が2本になっていた。まだ意識は戻らず本能のまま暴れているが、これ以上の暴走の可能性は低いだろう。

「ぐふ、ぐふ、あれ? からだ、が」

だが、須佐能乎の限界を超えた使用の代償が響いてくる。身動きが取れなくなり、口から血を吐いて咳き込むシヤナ。膝をついて立ち上がれなくなった彼女から伸びる鎖が砕けてしまう。

「ウオオ!!」

(体が、動かない。ナルト、ごめん)

縛りが無くなり隙を見て襲い掛かってきたナルト。シヤナは迎え

撃つことはできず、ナルトの鋭利になった爪で貫かれそうになる。一度殺そうとしてしまった後悔からか、シヤナは本能からくる反射行動すら封じてナルトを受け入れようとした。

もう目の前の存在を九尾とは認識していない。自分の弟が苦しんでいるのだから、助けなくてはという思いだけだった。

そして、血が舞い上がった。

## 血の呪縛

シヤナの前で血が飛ぶ。その血液はシヤナのものではなく、シヤナとナルトの間に割り込んだボルトの血だった。

「何やってんだってばさ、父ちゃん」

無防備なうえに、ナルトを受け入れようとしていたシヤナを庇い、九尾化したナルトの爪で手の甲を切り裂かれたボルト。痛みにも負けず、ナルトの胴体を抑え、目を覚ますように声をかけている。だが暴れ出したナルトに力で負けて弾き飛ばされてしまう。

「うわぁ」

「ボルト！ やめろナルト」

狙いをボルトに変えたナルトが追撃しようとするが、雷鳴と共に駆け付けたサスケの蹴りによって吹っ飛び、すぐに起き上がろうとするも、背後に忍び寄っていた自来也が札を額に貼り付けるなり、九尾のチャクラが霧散する。

自来也があらかじめ用意していた封印術が効果を発したのだ。九尾のチャクラが無くなったナルトはその場で意識を失い、自来也に受け止められる。

無事にナルトが保護されたのを見て、シヤナも前のめりに倒れそうになる。それをサスケが受け止める。

「ナルトにやられたのか？」

「……違う。……」

血まみれのシヤナを心配するサスケ。しかし、ナルトにやられた傷は一つもない。全て自分の感情を抑えられずに起こした自傷に他ならなかった。目からの出血や吐血の痕跡を見たサスケは、シヤナの出血が須佐能乎による負荷であると見抜いた。

ナルトを誘拐された彼らは、激しい戦闘を繰り広げたシヤナの須佐能乎を見て駆け付けた。だがサスケは失念していた。シヤナが須佐能乎を使えようとも、この時代にうちは一族が少ない以上、須佐能乎の代償を打ち消す事の出来る万華鏡写輪眼。肉親の万華鏡を移植す

ることで覚醒する永遠の万華鏡写輪眼を発現しているはずがない。

シヤナは須佐能乎を使えはするが使いこなせない。ならば、須佐能乎について説明する必要があると考えた。

その後、ウラシキの安否を探ったが、奴は消えておりシヤナも仕留めてはいないと報告した。おそらく機を窺うつもりだろうとサスケと自来也も納得する。

ナルトの安全を確保し、ボルトの治療を終えた一行は、ナルトが目覚ますまで森で休んでいた。小川の水で血を洗い流したシヤナの傍には自来也が居た。深刻な表情をしているシヤナから話しかけてくるのを待つ自来也。

「自来也」

「もう昔みたいには呼んでくれんのかのう」

視線が気になり声をかけたシヤナだったが、子供の頃からの呼び方をしてくれなくなったシヤナに、時が経つには早いものだと言化す自来也。この人は昔からこういう人だと諦め折れたのはシヤナだった。

「私何のために生きてきたか、知ってる？」

岩の上で体育座りをしたシヤナはか細い声で尋ねる。知らぬはずがない。自来也はシヤナをよく知っている。幼いシヤナに降りかかった不幸とその後の人生を。もし自分に役目がなければ、引き取っていた。それほどまでに自来也はシヤナを大切にしていた。

だからこそ、知らぬはずがない。

「ナルトの為、ミナトとクシナの遺言の為、そして……復讐だな」

正解だ。

「私はさ、全部やり遂げるつもりだった。だから強くなったし、ナルトも取り返したし、守ってきた。全部全部、上手くやれる自信があった。私にはその力があるんだって。」

なのにさ、私、ダメだった。九尾化したナルトを見て、何もかも壊したくなった。ナルトを守るって言ってたのに、私は、私は、自分の手でナルトを殺しかけたんだってばね!!」

自分の腕を顔を決して上げないが、シャナは泣いていた。ぽつきり折れてしまったのだ。自分の中の大切な柱が。普段なら吐き出さなような弱音をシャナは吐きだし続ける。それほどまでに、自分がナルトを殺そうとしていた事実がショックだった。

憎しみの炎に吞まれ、大切な物ごと焼き尽くそうとした自分の黒い感情が何より恐ろしかった。

自分の体を自分の手で抱き寄り泣いている彼女の姿は、自来也からとても小さく見えた。

「お前はナルトを殺そうとした訳じゃない」

「同じだってばね。うちのはみんなが変わっていくのは何度も見た。けど、わたしなら、自分なら制御できるって思ってた。なのに、なのに、無理だった。自分がおかしくなってるって分ってたのに」

頭の片隅にあつた理性は消え、復讐を果たせる喜びを感じていた。父と母を殺した九尾を殺す達成感を前にして、二人の死に際の言葉は消え去り、なによりも愛している弟の死を望んでしまった。既にナルトは死んでしまったと思ひ込んだとはいえ、冷静になれば、わかつたはずなのに。

弟の安否よりも、復讐が勝った。父と母に加え弟まで奪った九尾に對する憎しみがシャナの全てを支配した。

そうなつてしまつたら、もう自分では止まれなかつた。うちは一族の大人達が、大切な人を無くし、変貌する様を見て育つた。どこか冷めた目で見えていたシャナだった。自分も昔とは大きく変わったと思ひながらも、闇に吞まれても一線だけは越えない自信があつたのだ。

結果は散々だ。むしろ何故うちが闇に染まりやすいのかを身をもつて知つてしまった。

「自分が怖いってばね。自分の中にある血が怖い。なんで、私はお父さんとお母さんの本当の娘に生まれなかつたんだろう。二人の本当の子供なら、こんなことにならなかつたのに」

滝のように涙を流すシャナ。そんな彼女の隣に静かに腰かけた自来也。

「だが、お前は自分の闇に勝つた。だからナルトは無事だった」

「……私の力じゃない。助けがあっただけだつてばね」

たとえそうだとしても、シヤナの優しさが最後には、ナルトを救ったのだと自来也は続けた。確かに写輪眼の瞳力に比例した闇をシヤナは抱えている。けれど、その闇を払うだけの心の強さ、それをシヤナは持っていると感じる自来也。

この子が本当に復讐だけに生きていたなら、ナルトは九尾ごと死んでいただろう。

うちの血が怖いというシヤナの言葉がそれを物語っている。

「お前は、確かにうちは一族だ。だがのオ、お前の此処には」

自来也は、頭を起こしたシヤナに見えるように自分の胸を指さして見せる。

「ミナトとクシナの想いがしつかり宿っている。胸を張れ、お前は誰が何と言おうが、二人の子だ」

誰だつて失敗はする。落ち込みだつてする。だがシヤナはそんなことで潰れてしまう子ではない。だからこそ、自身が過剰すぎるくらいシヤナに戻る事を彼は望む。

自来也の大きな手で頭をワシワシと撫でられたシヤナ。彼女は何も言い返さず、励ましをくれた彼に心で感謝した。

「それにウラシキの目的はまだ成就していない。奴を倒さん限り、ナルトの安全確保や修行の旅どころではないからな。お前には、しっかりと働いてもらわんな。なによりピチピチのお姉さんの店におちおち飲みにも行けんからのオ」

「台無しだつてばね。……ありがとゲコ仙人」

自来也とシヤナはサスケとボルトの元へ戻るのだった。

## 写輪眼

自来也に心境を吐き出したことで、幾ばくか安定を取り戻したシヤナ。戻ってきた自来也がボルトに対してナルトの九尾について説明するといい、彼女は残ったサスケに話があると連れ出された。

自来也とボルトから離れた場所で木に靠れながらサスケは、シヤナの青い写輪眼を見つめる。

「お前、万華鏡写輪眼は、何時から使ってるんだ？」

腕を組みながら質問してくるサスケ。写輪眼についてサスケから問い詰められることはよくあったため、別の世界かつ年齢が違っても根っこは同じかと笑いそうになる。

だが笑えば機嫌を悪くするだろうと、素直に答えてやることにした。

流石に3歳から開眼していると答えた時のサスケの顔は、笑えたという。

そして、強敵相手に使用してきたと答える。流石に両目に備わった瞳術までは説明しないが。特に須佐能乎について聞かれた為、それも3歳の時に発現したと答える。

「九尾か」とサスケは何か思い当たったらしい。

「それほど長い時間、万華鏡写輪眼を使用していて、視力に問題はないのか？」

「視力？ 別に」

シヤナの答えにサスケは酷く納得のいかなそうな顔をした。通常、万華鏡写輪眼は強力な瞳術の対価に、視力を失う諸刃の剣。なのにシヤナは万華鏡写輪眼を十数年使ってきたが視力の低下がないという。万華鏡写輪眼の視力の低下を無くすには、肉親などの万華鏡写輪眼を移植した永遠の万華鏡写輪眼を開眼するしかない。

となれば、シヤナの万華鏡は永遠の万華鏡写輪眼だという可能性がある。だがシヤナは目を移植したこともないという。そして、永遠の万華鏡写輪眼であれば須佐能乎のダメージは発生しない筈。

「妙だな。青い写輪眼、えらく中途半端だ」

失明と言うデメリットがない代わりに、須佐能乎の凄まじいダメージは残っている。元の世界にはない新しい写輪眼の存在に興味は湧く。だが全てが終われば元の世界に帰る身。深入りしてはいけなないと思いつつも、助言をしない選択肢はない。

「お前の須佐能乎だが、使わない方がいい」

「無理だと分かって言ってるってばね」

シャナの術で一番の防御であり、切り札である須佐能乎を使えなくなれば、戦闘能力は一気に低下する。だがシャナとしても強敵相手に須佐能乎を使い過ぎて自覚はある。そして、戦闘中や戦闘後に襲い掛かる苦痛に、いつも苦しめられている。

「使えば使うだけ、お前の寿命を縮める事になってるもか？」

「長生きしたいとは思ってないってばね」

善意からの忠告だと理解している。だがシャナは一つでも戦う手段を増やしたい。だから素直に聞いてあげる事は出来ない。

長生きしたいと思わないというのも本心だ。死ねない理由は多いため、生きるために足掻くことはやめない。だが生きたい理由はシャナにはなかった。

ナルトを育て、両親から貰った想いをナルトにも与えてあげたい。ナルトを守り、彼を狙うものを退ける。

そして、憎き九尾の妖狐を殺す事。それが終わった後をシャナは考えていない。

友達や好きな人と生きていくという未来もあるだろう。けれど、全てを失ったシャナに、そんな人生が歩める自信がない。自分の気持ちに素直になっても、その不安だけは拭えない。

「お前の動きは上出来だ。だが、もう少し無駄を省けば、劇的に変わるだろう」

自分より上に領域にいる人間のアドバイス。シャナにとっては珍しい体験だった。幼少期からずば抜けた才能を持っていたシャナにアドバイスできる人間は僅かだった。瞬身の術を教えたシスイが一番シャナを見ていたと言える。



強すぎたが故に師に恵まれなかった。師になれる人材が木ノ葉にはいない。唯一自来也のみが術を教える立場だったが、シヤナは教わるというよりも盗んでしまった。

「無駄って何だってばね」

「お前は動きが早いが、太刀筋に関しては、自己流で癖が強い。首だけを狙うのは効率的かもしれないが、いい目を持つ相手なら、簡単に見切られる。剣の型が少なく、慣れてしまえばカウンターがしやすい」  
剣など学んだことがない。実際、剣術においてラビリンズの足元にも及ばなかった。サスケの指摘通り、カウンターで何度首を切り落とされそうになった事か。

「剣なら教えてやれる。ウラシキが来るまでに時間もあるだろう。時間があれば来い」

自分の弟子の未来の姿に教えられるのはどうなんだと思っただが、修行を見てくれる相手がいる事が少なかったシヤナは、了承した。実際問題、力不足と成長の停滞を感じていた彼女にとっては、渡りに船だった。

謝礼は、腰のポーチに入っているカタスキへのチャクラの充電で払うことにした。

## シヤナの修業

ウラシキが消息不明な今、ナルトを守るために5人は、木ノ葉の外で待機することになる。ただ待つだけでは、時間の無駄になる。

そこで自来也から提案されたのは、修行だ。ナルトとボルトは何故か似通ったチャクラを持っており、二人で新しい螺旋丸の開発に取り掛かる。他人と一緒にチャクラを練って螺旋丸を作るのは、通常の螺旋眼よりもはるかに難易度が高い。

だがこの修業を達成すれば、チャクラの繊細なコントロールを得られる。それは螺旋丸を主力にする二人にとって、術の発動速度の向上や精度に直結する。

そう考え二人でチャクラを練っているのだが、上手く行かない。

「やっぱりだめだ」

「おいおい、お前ちゃんとかチャクラ練ってるのか？」

「お前こそコントロールが雑だつてばさ」

「なんだと!？」

「んだよー」

修行中何かあればいがみ合い始める二人。すぐに自来也が止めに入り修業を再開させる。察しの悪いナルトとは違い、ボルトは幾ばくか理解度が高い。そのため修業が進まないという事はないが、二人のチャクラ量の差やコントロールの精度などが問題となり、なかなか進まない。

一方で実質的に対ウラシキの戦力候補となっているシヤナは、サスケと洞窟内で剣戟を響かせていた。真っ暗な光一つない洞窟で両手にダガーを持ったシヤナが、刀を構えるサスケと戦っている。赤と青い写輪眼だけが光源となり、洞窟で交差する。

何度も刃同士が火花を散らす。何十も打ち合うが、片手のサスケに二刀流のシヤナが追い詰められている。機動力を生かした剣術を使うシヤナだが、進行方向を何度も塞がれ、刃を置かれることで自分から傷を負ってしまう。

先見の写輪眼はウラシキ用に取っておくため、自分の実力のみで肉薄するが、何度も地に転がされるシャナ。

(届かない。後何手進めばいい?)

泥だらけになり、息を切らしながらもシャナは攻撃を止めない。遠慮なく全力で打ち合える敵と出会い、気分が良くなっていた。久々にモチベーションの上がる修行という事もあり、彼女の集中力は凄まじいものがあった。

本気で殺すつもりで打ち込んでくるシャナを捌くサスケ。殺気は本物で指摘した部分を修正し、彼の動きをコピーしてくるシャナは、一合一合の間に強くなっていく。

(この年齢でこれか。後数年もあれば、恐ろしく化けるだろう)

目の前の少女を育てる事が、英雄または怪物を生み出す博打に感じられる。迫りくるシャナの攻撃を刀で防いだサスケ。鋭い一撃でシャナの持つダガーを弾き飛ばした。弾かれ壁に突き刺さったダガーをシャナは気にも留めず、残った一本を粒遁のチャクラ刃に変え、切り掛かってくる。

刃渡りが変化した一太刀を寸前で見切り回避し、シャナの腹部に蹴りを食らわせ距離を取る。蹴りを食らったシャナだが、空中で体勢を立て直し、居合の構えを取る。

「少し休憩にする」

流星に息切れしてきたサスケ。もう一時間近く打ち合っている。ある程度のもりが没頭するシャナに付き合わされてしまった。

サスケの制止を見て止まったシャナ。汗だくになり、息も乱れているが目だけは戦闘状態から脱せていない。呼吸を整えながら、精神を鎮めようとしている。

「ナルト並みのスタミナだな」

「そうじゃない。いつもは術中心で消費するチャクラが多いけど、今は節約できているだけ」

忍術タイプのシャナ。最近は大技を乱発しすぎていた。だが、その甲斐もあってかスタミナ自体は大幅に向上している。成長期という事も合わせてシャナはまだ強くなれる。

ナルトとボルトが修行に疲れ、野営用のテントで眠りにつく中、サスケと自来也そしてシャナによる話し合いが行われた。

自来也はサスケの正体を把握していた。確証はなかったが、長年の勘も馬鹿にできないとシャナは感じた。未来から来たであろう人間の存在を信じるのかとサスケが問うたが、未来を見れる人間がいるのだから戻ってこれる人間が居てもおかしくないと断言。

ウラシキの術についての考察も始まる。ウラシキの釣り竿によるチャクラの抜き取りに関しては、封印術によって防げるのではないかと考えられた。そして、大筒木一族と言う未知の人種の使う時空間忍術の説明も入る。

神出鬼没だが、サスケだけはあらかじめ察知できるらしい。シャナもナルトにアンテナを張っている為、未来視によって感知が可能だと伝える。

他にも未知の術をいろいろ持っているが、今度はシャナが情報を提示する。シャナがウラシキとの戦闘で知りえたのは、時間を巻き戻す能力。それを聞いたサスケは、未来でウラシキに感じていた違和感の正体を認識できたという。

「時間を巻き戻すというのはどういうことだシャナ」

「正確にはわからないけど、戦闘中100通りほど未来視で試行錯誤した結果、

文字通り攻撃をくらった事実をなかったことにする能力か、僅かな時間だけ自分だけ逆行し当たるはずだった攻撃を回避する能力だと目星をつけてる」

シャナの言葉を聞いた自来也は、夢のような能力に対しても真剣に考察。対抗する方法があるとした。シャナもシャナで自分ならウラシキの能力を無効化できる。

ウラシキの不意打ちはシャナとサスケが居る限りあり得ない。

「お前たちの情報のおかげで攻略は出来そうだ」

「どうやって攻略するつもりだってばね、ゲコ仙人」

自来也は、耳を貸せと二人を呼び寄せ、策を説明していく。それを

聞いた二人は、それなら確かに効果的かもしれないと賛同する。

自来也は、それでも備えが多いに越したことはない、ナルト達の修行の継続及びシャナの特訓は続けるべきだと言った。またあの疲れる修業が始まるのかと嫌そうだった。

その後ウラシキが現れたのは、数日後の事だった。

## ウラシキ襲来

ナルトとボルトが二人で修行に勤しんでいた時、ついに奴が現れた。自来也とサスケが食料調達のために離れた隙を狙ったの事だった。

二人の背後の空間が開き、その中から赤い輪廻眼を持ったウラシキが現れる。本人は奇襲のつもりだろう。影から釣り竿を用いてボルトから狙う。

そこに閃光となって割り込んだのはシヤナだ。チャクラの釣り針を粒遁の刃で切断し、容赦なく粒遁・天輪の印を結ぶ。一撃で仕留めるべく狙いを定めながらチャクラを練り込んでいく。

「早いですねえ。けど、その術で私を殺せるとでも？」

「粒遁・天輪！」

シヤナの粒遁を見たウラシキは腰の魚籠から5大性質変化の術を全て取り出し、シヤナに向けて放つ。シヤナも同時に集束した粒子砲を放つ。ウラシキの放った火遁・土遁・水遁・雷遁・風遁の攻撃をかき消し、ウラシキの体を捉える。

当たれば一撃必殺の威力がある。だが、爆発の中から姿を現したのは無傷のウラシキだった。両目の輪廻眼の色が青くなっており、嫌らしい笑みを浮かべる。

シヤナの写輪眼での観察では確実に当たっていたはずだ。

「姉ちゃん！ あの野郎、やってやるってばよ！」

「シヤナさん！ きやがったなウラシキ」

突然現れ大技をぶつけ合った二人にナルトとボルトの二人は出遅れながらもクナイを構え、助太刀しようとする。それをシヤナが手で制止する。

「動くな。私一人じゃこいつの相手はきつい。余計な事をするなってばね」

突撃しそうになった二人だったが、シヤナに止められては前に出れない。悔しそうにウラシキを睨み付ける事しかできない。

「賢明でしようね。貴方は強いですが、お荷物を抱えていては、勝てる物も勝てませんしね」

明らかな煽りだ。ナルトとボルトを怒らせるのが狙い。それに二人は乗ってしまった。

「ぶっ飛ばしてやる！ 影分身の術！」

「おい、待ってって、くそ！ 影分身の術！」

「チツ、バカ」

こらえきれず影分身を用いて飛び出してしまったため、シヤナは手裏剣で二人を援護するしかない。8枚の手裏剣を投げ、手裏剣影分身の術を使い何十枚にも分身させる。

20人近い影分身と手裏剣影分身の総攻撃を仕掛けた3人。だがウラシキの青い輪廻眼の能力で、どんな方向からの攻撃も彼を捉えられない。瞬間移動のように立ち位置を変え、知っていたようにボルトとナルトの攻撃を回避。シヤナの手裏剣も全て回避していく。

ナルトとボルトの影分身ごと攻撃しても回避されてしまう。

やがて攻撃の手が止まると、ウラシキは反撃として釣り竿を振るい竜巻を起こす。その竜巻にボルトとナルトの影分身は消され、吹き飛ばされてしまう。

「遊びはおしまいです」

「ぐあああ」

攻撃を終えたウラシキにシヤナが粒遁で接近。彼女の拳が顔面に当たるより先に、ウラシキの瞳術が発動。シヤナの攻撃も空を切るはずだった。シヤナが万華鏡写輪眼になるまでは。

「そうね」

「ぐつうう、馬鹿な」

瞳術による巻き戻しを、シヤナの瞳術によって強制的にかき消されたウラシキ。見続けた対象の10秒〜1分後の動きや位置、状態を、今と入れ替える術、大年神《おおとしかみ》。観察が必須の上、使いづらい術ではあるが、血継限界系統の特殊能力を持つ強力な相手には切り札となりうる。

現に、輪廻眼での巻き戻しをスキップされたウラシキは、シヤナに

よって左腕を切断されてしまった。斬られた腕を押さえながら、ウラシキが苛立っている。

油断していたとはいえ、まだ人間でしかないシャナに腕を切り落とされた屈辱は許しがたかった。

「時を進める大年神《おおとしかみ》ですか。時戻しの御年神《みとしのかみ》も持っている。厄介な人ですねぇ」  
(なんで、こいつ私の瞳術を)

シャナの術は、うちは一族に伝わる書物にしか記されていない。それも使用者が少なすぎて、ほとんど情報のない術だ。その名を知っている事が不思議で仕方なかった。だが戦闘中に気を抜くわけにはいかず、先見の万華鏡写輪眼を発動する。

未来を見ながら片腕に追い込んだウラシキと切り結ぶシャナ。チャクラ刀とチャクラの竿による激しい打ち合い、印を結ぶ暇もない。

「少し腕を上げましたか」

「お前は物理的に腕が落ちたつてばね」

徐々に加速していく二人の攻撃。ナルトとボルトは、二人の戦いに割り込めない。二人は拮抗しているようで、実質ウラシキの方が有利だった。片腕相手に未来視込みで拮抗しており、制限時間のあるシャナが押し切られるのも時間の問題。

さらにシャナの瞳術を把握されたことでウラシキ相手に不意打ちは成立しない。

「あなたを殺したくはないんですがねぇ！」

チャクラ刀とチャクラの釣り竿で切り結んでいたウラシキは、竿から釣り針を射出し、ナルトとボルトに向かって攻撃を仕掛ける。未来視でウラシキの不意打ちを見たシャナは、すぐに釣り針を迎撃するためにウラシキから離れる。

しかし、それがウラシキの狙いだった。

卑怯にもナルトとボルトを執拗に狙うウラシキ。先見の万華鏡写輪眼で全ての攻撃を捌いてはいるが防戦一方となる。やがて、チャクラ刀を釣り針と糸によって巻き取られ、振るえなくなる。



「やられっぱなしでいられるかってばよ」

ナルトが姉に代わって突破口を開こうと影分身を作った上で螺旋丸を作成。そのまま駆け出そうとしたが、ウラシキの魚籠から雷遁の術が飛び出し、ナルトを襲う。ボルトを庇っていたシャナは敵の攻撃を正面から受けそうになっていたナルトの姿にチャクラ刀を捨て無策にも飛び出してしまふ。

術での迎撃は間に合わず、自分の体を盾にしたシャナ。須佐能乎の第一段階で防ぎ切ろうとした彼女だが、ウラシキの放った雷遁は刃の形となり、シャナの須佐能乎を貫通。

「かはっ」

自分一人だけならどうにでもなった。ナルトとボルトを庇いながら戦うというハンデは、シャナの胴体を貫く。死ぬほどではないとは言え、まともに術を受けたシャナは、口から血を吐く。

防御力が一番低いとはいえ、須佐能乎の守りを貫通され、手痛いダメージを負ったシャナ。すぐに御年神を発動してダメージを巻き戻そうとしたが、自分に刺さった雷遁の刃から電撃を受ける事で苦痛に顔が歪み、瞳術に集中できない。

「御年神は、厄介ですからね。けど、今の状態じゃ使えませんね」

「くっ、ボルト、ナルト、逃げるってばね」

シャナの瞳術をシャナより知り尽くしているウラシキ相手に、シャナは巻き戻せる時間の限界が来てしまう。もうダメージをなかったことにすることはできない。片腕を持って行けたが、こちらも手痛い代償を負ってしまった。この傷では、ウラシキを倒せない。

「姉ちゃん、姉ちゃん！」

「逃げるってばね！ 風遁・烈風掌」

印を結び風遁の刃で、ウラシキの雷遁を切断。さらに柏手を打つことで突風を発生させる烈風掌で攻撃を仕掛けるが、ウラシキの竿の一振りでかき消される。腹を刺されたシャナは、もう動けないだろう。立ち上がるうとするが、足に力が入らない。

才に溢れ、他里にまで轟く忍者である彼女だが、耐久力に関しては並の人間でしかない。骨が折れれば動けず、胴体を刺されれば立ち上

がれない。故に完成した未来視での無傷の立ち振る舞い。だが守る物があるシャナは、身を挺してしまうのだ。

ウラシキは、それを見抜いていた。

「まあ二人は別ですがね」

ナルトとボルトは動けなくなったシャナを連れて逃げようとする。だがそれを見逃してくれるウラシキではない。シャナという障害が居ない今、下忍の二人を殺すことなど赤子の手をひねるより簡単な事だろう。

ウラシキとの実力差を前に、ナルトとボルトは相手を睨んで歯を噛みしめる事しかできない。特にナルトは自分の独断のせいで姉が重傷を負ってしまった事実がある。

## 覚悟

絶体絶命というタイミングだが、シャナの稼いだ時間はしっかりと生かされていた。

「火遁・炎弾！」

「火遁・豪火球の術！」

買い出しに出ていたサスケと自来也が騒ぎを聞きつけ、全速力で戻ってきた。二人は、膝をついているシャナとボルトとナルトから、ウラシキを引き離すために火遁を放つ。横やりを入れられたウラシキが攻撃をかわすと、炎は彼とシャナ達を引き離す壁となる。

炎にさえぎられたウラシキにはサスケが刀で肉薄し、自来也が子供たちの保護に入った。

「無事かお前ら」

「シャナさんが、刺されて」

腹部を抑え動かないシャナの様子に自来也がすぐさま傷の確認を行う。脇腹を刺されたシャナは出血をしているが、内臓はぎりぎり外れている様子だった。だがこのままでは、出血多量で死んでしまう可能性があった。

ボルトはともかく、ナルトも精神的ショックがあるのか、顔色が悪い。

しかし、それよりもシャナが優先だった。

「ゲコ仙人、ナルト達を、おね、がい」

「喋るな。く、傷が深いな」

シャナが手で押さえているが、思ったよりも出血が多い。すぐに自来也が強い力で傷口を抑える。痛みからかシャナがぐぐもった声を上げるが、止血が優先だ。

「こりや治療せんといかん。ナルト、ボルトは後ろを頼む」

「あ、ああ」

「ナルト。しっかりせんかナルトオ！」  
「いて」

何時まで経っても血まみれの姉の姿に動けないナルトを自来也が殴る。殴られてようやく動けるようになったナルト。頬の痛みで血まみれの姉と言うシヨックから抜け出し、ボルトと共に自来也の後ろを警戒する。

炎の向こうではサスケとウラシキが火花を散らしている。此処にいては、巻き添えを食らうと考えた自来也は、シャナの体を抱え、森に逃げる。

自来也に同行してナルトとボルトも森に入り、残されたサスケはウラシキ相手に時間を稼いでいる状態となる。

森の奥で土遁を用いて作った洞窟内で、自来也はシャナの治療をしていた。傷を焼き、消毒と包帯を巻くことしかできないが、シャナはそれを必死に耐えていた。

応急処置ではあるが、それが出来ずに死んでいく忍は多い。どうか出血も止まったが、シャナは流した血が多く無理は出来ない。体力の消耗も激しくシャナ自身、戦力から外れてしまったことを悔いていた。

「落ち着いたか？」

「う、ん。ゲコ仙人、ナルト、どうしてる？」

汗だくになりながら、シャナは自分が庇った弟の様子を尋ねる。ナルトの前で初めて傷を負ってしまった。ナルトにとって唯一の家族であるシャナの負傷は、間違いなく彼の心に傷を残した。ナルトの表情を見て、シャナはそれを知った。

カツコ悪い所は見せなくなかった。それがシャナの本音であった。そして、家族が目の前で傷つき、血まみれになる恐怖は彼女が一番知っている。だからそんな思いをさせたくないかった。

「あいつは大丈夫だ。すぐに立ち直る。あれでも、ナルトは木ノ葉の忍で、儂の弟子だからのオ」

弟子のケアは師匠がするものだ、孫娘のようなシャナを落ち着かせる。この場所はサスケと予め決めていた集合場所で、ウラシキにサスケが勝ったなら、ここに来るはずだが、気配はない。

少しでも体力を回復するよう増血丸と兵糧丸と水を飲ませ、入り口を見張っているナルトとボルトの所にむかう自来也。

自来也の姿を見て駆け寄る二人。

「シャナの奴は、もう大丈夫だ。無理をしなれば、すぐに治る」

その言葉にほっとしたのもつかの間、自来也はナルトに対して「話がある」と彼を入り口まで連れていく。残されたボルトは、自来也にシャナの傍にいてくれと頼まれる。

「ナルト。後悔していてもシャナの傷は無くなったりせん」

「わかってるってばよ。ただ、姉ちゃんの血で手が真っ赤になって、頭がぐちゃぐちゃで、もう何が何だか」

幼少期に孤独の中にいたナルトは、繋がりを求め、それが切れる事を何より恐れる。もし、シャナが死んでしまったら、ナルトの心は壊れ、九尾の力を解き放つてしまう可能性がある。

自来也は混乱している弟子の肩を強くつかみ、目を合わせる。

「忍の世は、いつ誰が死んでもおかしくない。明日はお前が死ぬかもしれんし儂が死ぬかもしれん。今回はたまたま助かったが、シャナが死に掛けたのも事実だ」

「……死」

「それがお前にとってどれほどショックだったかは理解しているつもりだ。だから責めはせん。だが、今は戦闘中だ。下忍と言えどもパニックになってる暇はない。相手は強敵で、お前がパニックになっている間に、また誰かが倒れるかもしれない」

「そんな」

「お前は、忍だ。後悔してる暇があるなら、少しでも事態を好転させる方法を考えるしかない。今からはシャナはお前を守れない。むしろ、お前がシャナを守るために何ができるのかを考えるんだ」

忍耐えろと自来也は言い聞かせる。彼ならそれが出来ると信じているからだ。我武者羅に突っ込むだけではだめだ。シャナを守るという使命を言い聞かされたナルトは、少しだけ息を整え、自分出来る事をした。

それはウラシキの能力について自来也に伝える事だった。それが

今のナルトに出来る最善だった。

「心配、かけたってばね」

「こつちこそ、シヤナさんのいう事聞かなくて、それに何度も庇ってもらって」

自分たちが出しゃばらなければ、シヤナが大怪我をすることもなかったと理解しているボルト。そんな彼の言葉を否定するように首を横に振るシヤナ。

「大人が、子供を守る、あたりまえ、だから。ボルトのお父さんだって、きつとそうだってばね」

ボルトとサスケは未来から来ている。ならナルトとそっくりな子供であるボルトの正体など、とつくに知っていたシヤナ。本来は存在しない未来の甥っ子であるボルトの事を守って怪我したとしても、シヤナに後悔はない。

未来の、ボルトの父になったナルトなら、何があっても守り抜こうとするはずだから。根つこの所は人間変わらないものだ。

ナルトを守り、ナルトの守る物も守りたいと思うのは、シヤナにとつては当然の事だった。

「父ちゃんは、そんなんじや、ないってばさ」

「ふふ、本当にそっくりだ、ってばね、絶対、元の世界、に帰らせ、てやるってばね」

「なんでシヤナさんが」

ボルトと会話していて、シヤナは少しリラックスしていた。きつきまで死に掛けていたとは思えないほどに。頭を撫でてやれば照れて、すぐに離れようとするが、シヤナの怪我に気が付き大人しくしているボルト。

そんな優しい子の頭を撫でながら、撫で心地がナルトと同じで、やっぱり親子なのだとしヤナは笑う。そして、未来から来た彼らを家に帰すことを誓う。

そして、戻ってきたナルトと自来也から、サスケが戻ってこない事から、ウラシキ相手に手古摺っている可能性を示唆され、この場所が

見つかるとも時間の問題とし、作戦を伝えられる。

## ウラシキ攻略戦

自来也の想像通り、ウラシキとサスケの戦いは、チャクラを奪われていたサスケが圧倒的に不利で、谷底に一緒に飛び込んだものの、取り逃がしてしまう。それどころか、意識を失ったサスケ。

サスケを振り切ったウラシキは、逃げたナルト達を白眼で追跡していた。空を飛べる彼と白眼の組み合わせは、あつという間にシヤナ達を見つけるに至る。

自来也とボルトとナルトの3人は、既に洞窟から出ており、迎え撃つような形で向き合う。

「おや、かくれんぼかと思いましたが、潔いですね」

「いいか、二人とも、計画通り動くんだぞ」

「おう、わかってるってばさ」

返事をしないナルトだが、自分の額当てを強く締め付け、気合を入れた目には、対峙するウラシキを圧倒する何かがあった。舐めて掛かっていたウラシキだったが、ナルトの目を見て、嫌な予感がした。

遊ぶつもりだったが気が変わったウラシキ。すぐに邪魔者を始末しようと釣り竿を構える。戦闘態勢に入ったことを確認したナルトは、影分身の印を組む。

「じゃ狐、貰いましょうかね」

「やってみろよカス！ お前だけは、絶対にぶっ飛ばしてやる。多重影分身の術!!」

莫大なチャクラを練り込み、千人近い影分身を生み出したナルト。周囲一帯がナルトの影分身に覆いつくされ、その数と規模にウラシキも驚いていた。

「「「「うちの姉ちゃんが刺された恨み、千倍にして返してやるってばよ!!」「「「「」

「行くぜ皆!!」

本体であるナルトの号令と共に、雪崩のようにナルト達がウラシキに殴り掛かる。実力差があれど、数は強さだ。人海戦術によってウラ



シキに挑むナルト。

「数だけは立派ですねぇ」

釣り竿と糸で次々影分身を攻撃し消していく彼だが、影分身達が螺旋丸を作り猛アタックしてくるため、一度空に逃げようとする。

そこに影分身の風遁で自分を飛ばしたボルトの螺旋丸が牙をむいた。

「貴方も居ましたね」

「忘れんなってばさ」

螺旋丸を釣り竿で受け止めたウラシキだったが、動きを止まった隙について自来也の火遁が彼を包む。

「あまいですよ」

炎に包まれたウラシキだったが、青い輪廻眼の能力で何事もなかったように、空中にいるボルトの背後に移動。魚籠から取り出した水遁で胴体を貫いた。貫かれたボルトは影分身でダメージはないが、特異な術を前に嫌な汗をかいている。

だが、ナルトの攻撃は止まらず、次から次に螺旋丸で特攻を繰り返す。そして、明らかに当たった攻撃ですら、気が付けばウラシキが消え、奴に有利な立ち位置で姿を現す光景を目にする。しかし、爆撃のように攻撃を仕掛けるナルトの影分身達によって、瞳術を何度も使用させウラシキの術を完全に見抜いた自来也。

指を噛みきり口寄せの術を発動。その瞬間周囲の空間が暗闇に包まれる。

「なんです、ここは」

次第に光が灯ると、周囲は肉の壁に覆われ、足元は胃液のような強酸性の液体が流れていた。

「忍法・蝦蟇口縛りの術。ここは妙木山の大型蝦蟇の腹の中だ」

「なるほど、胃袋の中ですか、あなた面白い事をする」

「お前の術は時間を巻き戻す事だというのは、わかっている。だが戻しても数秒が良い所だ」

「それが何か？」

「となれば、お前はもうこの蝦蟇の胃袋から時間を戻して出る事は出

来んということだ」

依然と余裕な態度のウラシキだったが、自来也の背後にいるナルトの影分身たちが一斉に襲い掛かる。その攻撃を瞳術による巻き戻しで何度も回避し、魚籠から取り出した火遁の炎で全て焼き払うウラシキ。自来也は、蝦蟇の胃を変形させて、炎から身を守らせる。

「この程度で私を追い詰めたつもりになるなんて、哀れですね」

元々火を噴く蝦蟇の内臓は燃える事はなく、火遁に耐えはしたが、ナルトの影分身達はほとんど全滅した。チャクラによるごり押し戦法も封じられ、ナルト達に打つ手がないかと思われた。

「ぐふ、え、なんです、これは、ごふ。ごぼ」

得意げに立っていたウラシキが血を吐き出して蹲る。本人も自分に何が起こったのかわからず、不安が顔に現れている。

「かかったな。此処は腹の中と言うたろう。此処は酸性の毒で満たされておる。ちよつとの間なら我慢も出来ようが、お前は何度も時間を遡り、繰り返した。だからこそ、毒が全身に回ってるんだ」

毘を仕掛け、ウラシキの能力を逆手に取った自来也。

「下等生物が、なまいきなあ！」

「ボルト行くぞー！」

「おうー！」

怒りに身を任せ攻撃をしようとしたウラシキだが毒が回り、体が痺れていつもの動きが出来ない。その隙を見逃さず、螺旋丸を作ったナルトをボルトが風遁で吹き飛ばし加速させる。

加速に乗ったナルトの螺旋丸は、ウラシキの体を捉え、背後の岩山まで吹き飛ばした。螺旋丸をもろに食らったウラシキを追跡する3人。

崩れたがれきから起き上がったウラシキの姿と表情を見て、3人が固まる。

「もう、遊びは終わりだ。ここからは、一方的な殺戮だ」

凄まじいまでの殺気を放ち、自分の腰の魚籠を掴んだ彼は、その籠の中のチャクラごと魚籠を食らう。自分の武器を目の前で食べた男の異様さに、何が起こるかわからない不気味さに警戒するナルト達。

「足りねえ、ふふ」

取り込んだチャクラでは不足だったウラシキは、あろうことか自分の両目の輪廻眼を指で抉り、それを食らった。

「自分の目を食ったのか」

「なんだってばよ、こいつ」

「ナルト、ボルト！ 奴にはまだ何かある。油断するでない」

長年忍をやってきた自来也は、自分が此処で死ぬと察知した。ウラシキが何をするかはわからないが、これは非常にまずい。勘が此処から逃げろと忠告してくる。

そして、その予想は正しかった。莫大なチャクラを食らったウラシキは突然繭の様なものに包まれる。そして繭から飛び出した時、ウラシキの姿は大きく変貌していた。額に黄色い目が現れ、頭部には羽の様なものがあり、風貌も一変している。

だがその目に宿るのは強い怒りと憎しみであり、肌を感じるチャクラがウラシキが化け物に変化したことを伝えてくる。

## 切り札

純白の鳥の羽のような姿に変わったウラシキは、切り落とされていた腕を再生し、翼に変え飛翔する。その飛行速度は忍であるナルト達が捉えきれないほどで、上空から蹴りを放つ。

ナルト達より先に動いていた自来也が彼らを抱え後ろに跳んで回避する。するとナルト達の居た場所に叩きこまれた拳が地面を穿ち、凄まじい衝撃を伝える。もしあの場に立っていれば木っ端みじんにされていたと感じるナルト達。

「まだ力の調整がうまくいかねえか」

（あやつ、チャクラ全てを身体能力を含む攻撃力に回したか。となれば、このままでは罅り殺される）

正面からの接近戦では、命を絶やすだけだと判断した彼は、印を組み土遁・黄泉沼を発動。地面に降り立っているウラシキの足を沼に沈め動きを阻害する。しかし、そんなものは時間稼ぎにしかない。「さて、その爺とガキは殺すとして、うずまきナルト、お前だけは罅り殺してから九尾を引きずり出してやる」

「そんなことさせる訳ねえだろ」

「お前なんかに殺されてやるかってばよ」

本当は怖いのだろう。だがボルトとナルトは立ち向かうと決めている。師である自来也も腹を括るしかない。

「相手は一筋縄ではいかん。儂が先導で、奴を討つ。遅れるなよ」

火遁の印を結んだ自来也。得意の火遁忍術を放ち、黄泉沼で動けないウラシキを攻撃する。だが、ウラシキは時間を戻す時空間忍術を使用しないどころか、火遁の術を口で吸いこんでしまった。そして、沼から馬鹿力で脱出したウラシキ。

「何!? こいつ、時空間忍術は使えんようだが、さつきより遥かに強くなっておる」

高速で接近したウラシキを迎え撃つべくボルトとナルトが螺旋丸で畳みかける。だが二人の螺旋丸を両手の掌で受け止め、逆に二人を

吹き飛ばしたウラシキ。スピード、防御力、攻撃力の全てが、別次元に存在している。

「忍法・乱獅子髪の術」

吹き飛ばされたナルトとボルトをチャクラで伸ばした髪で受け止め、さらにウラシキの体を拘束する。

「こんなもんで俺が縛れると思ったのか、雑魚」

自分を縛る髪を力だけで引きちぎり、自来也の髪を掴んで引き寄せる。髪を引かれる痛みに顔を歪めるが、其処は歴戦の忍。引き寄せられた勢いを利用し、螺旋丸をウラシキに叩きこんだ。ナルト達よりも強力な螺旋丸を食らったウラシキだったが、片手でガードしきつてしまふ。

「とつととくたばれや！」

「ふ」

「エロ仙人!!」

強烈なパンチを受け、岸壁に叩きつけられた自来也。更に追い打ちにとウラシキが追撃を仕掛け、奴の腕が自来也の胴体を貫通する。完全に致命傷を負った自来也にナルトが悲鳴のような声を上げる。

「ギャーギャーうるせえな。お前は最後だ九尾。お前の目の前で大切なもの全部ぶつ壊してやりや、怒りで九尾も出てくるんだろ？」

自来也がやられた瞬間、ナルトから九尾のチャクラが溢れ出る。ウラシキの予想通りナルトの怒りは九尾のチャクラを引き出すにうつつけだ。自来也を殺したので、次はボルトでも殺してみようとした時、致命傷を負わせた自来也が腕をつかんで離さない。

「この死にぞこないがあー！」

苛立ったウラシキはさらに強力な爪での一撃を自来也に食らわせる。体が真つ二つになった自来也だが、彼は笑っていた。その表情を捉えたウラシキは薄気味悪さを感じる。そして、彼の予感は的中。自来也の体が煙となって消えた。

ウラシキが倒した自来也は影分身だったのだ。

「あん？ 何時、影分身と入れ替わってたんだ」

流石に影分身との入れ替わりのタイミングがわからないウラシキ。

だが、その答えは、得意げに笑うボルトによって齎された。

「最初からだってばさ」

「あん？」

「自来也のおっちゃんは、最初から分身だったって言ってんだってばさ。俺とナルトは、それをお前に気付かせないための囮だったんだってばさ」

ボルトの言葉通りなら、まんまと踊らされていたことになるウラシキ。だが納得がいかない。

「なら、お前らはあの老いぼれに捨てられただけじゃねえか。」

師を馬鹿にされたナルトが前に出ようとするが「待っててばさ」とボルトが止める。彼らは見捨てられてなどいない。むしろ、自分たちで志願したのだ。本来はシャナとサスケの仕事だった時間稼ぎの任を。それをやり遂げた二人は、後は待つだけなのだ。

伝説の三忍、自来也のとおっておきの秘策を。

「誰が老いぼれかあ」

突然自来也の声が周辺に響き渡る。

「まさか儂の事じゃあるまいな？ 北に南に西東。斉天叶わぬ三忍のく白髪童子蝦蟇使い！ 泣く子も黙る色男！ 自来也様たあくワシのことよ！」

口上と共に空より舞い降り、地面を大きく揺らしながら着地したのは、本体の自来也。それも通常の姿ではなく、赤い隈取が顔に現れ、瞳は蝦蟇と同じ横一文字となり、少しだけカエルのように顔が変化している。そしてその両肩には、小さな老夫婦の蝦蟇を乗せた状態。

明らかに異質で、それでいながらもいつもと比べ物にならないチャクラを誇る今の自来也の状態を、仙人モードと言う。

通常のチャクラは身体エネルギーと精神エネルギーで練られるが、今の自来也はさらに自然エネルギーを取り込んだ仙術チャクラを纏っている。仙術チャクラを扱うものを仙人と言い、使う術を忍術改め仙術と言う。

その仙術をマスターしたものは、既存の忍術・幻術・体術の全てを大幅に強化することが可能。

その強化状態こそ、仙人モードであり、自来也の切り札だ。だが準備には莫大な時間がかかり、その時間をナルト達に稼いでもらったのだ。

そして、彼の肩にくっついている蝦蟇の夫婦は、妙木山の仙人蝦蟇である。自来也の仙人モードを支える存在である。

「自来也ちゃん。耳元で叫ばんといってくれや」

「自来也の小僧、今度叫んだら殴るさかいな」

どうやら耳元で口上を叫んだ自来也に苛立っている様子だが、目の前のウラシキを前にして意識を外すことはない。

正体は不明だが、自来也が呼び出すほどの相手となれば、油断はできない。

「いや、すみません。ですが、今は勘弁願います。あいつは、油断一つできませんので」

「ぶつぶつと、本体が出てこようが同じなんだよ」

ウラシキが我慢できずに飛び出してくる。最速の拳を振るう。その一撃で十分だと判断したんだろう。だが、仙人モードは危機察知能力や探知能力まで格段に向上する。速いだけの拳など軽く受け止めてしまえる。

左手でウラシキの体術を受け止めた自来也。彼が驚く暇も与えず仙人モード独自の怪力の籠った回し蹴りを叩き込む。

「何?！」

体がくの字に曲がり蹴り飛ばされたウラシキだが翼を使って体勢を立て直そうとしたが、両翼を自来也の肩に張り付く蝦蟇が伸ばした長い舌で絡め取られ、逆に引き寄せられる。

「自来也ちゃん!」

「小僧!」

「仙法・超大玉螺旋丸!!!」

半径2mはあるかという超巨大な螺旋丸を作り出した自来也。両腕を舌で縛られたウラシキに防ぐ手段はなく、自来也の必殺の一撃を受けてしまう。

「ぐあああああ!!!」

両腕を引かれ、胴体を押し出されたウラシキの両腕は千切れ、きりもみ回転しながら吹き飛ぶ。そして、何度も地面にバウンドしながらも体勢を立て直せるのは、ウラシキの強さに他ならない。地面を踏ん張って威力を逃がし、両腕を失いながらも闘志は失っていない。

そして、失った両腕はすぐに生え始める。並外れた生命力に、蝦蟇の夫婦も驚くしかない。

「あれを受けて、無事とは、なんなんじゃアイツは」

「タコじやあるまいし、腕が何度もポンポン生えてたまるか」

「わかりません。だが非常に厄介な相手と言うのは事実ですよ」

腕を再生したウラシキは、生えたばかりの腕を動かしながら自来也を睨む。流石にダメージは残っている様子だが、決定打にはならなかったらしい。

「もう勘弁ならねえ!!!」

イライラが最高潮に達したらしく、チャクラの砲弾を作り出し自来也に向かって発射し続ける。急な遠距離攻撃だったが夫婦蝦蟇が風遁と水遁を発動し相殺。仙人モードの自来也が正面からウラシキとぶつかり合う。

「すげえ、あれが伝説の三忍」

「けどエロ仙人だけじゃ、アイツは倒せねえ。ボルト、あれをやるぞ」  
「あれって、そうかよ。ああ」

ナルトの言いたいことはわかった。仙人モードであっても、太刀打ちするのが限界だろう。現に拮抗しているようで、死に物狂いで命を繋いでいる様子だ。もしウラシキを倒すなら、自分たちしかない。だが普通の方法じゃだめだ。

ボルトは一度ウラシキの仲間を倒したことがある。それは父であるナルトとの合体忍術。あれを繰り返せるなら、勝機はある。

だがそれには二人のチャクラを合わせなければならない。しかし、ナルトはチャクラの使い過ぎで九尾のチャクラが漏れ出してしまっている。それを抑えようとしてナルトのチャクラの流れが滅茶苦茶になっている。

だから、ボルトは手を差し出しながら力を抑えると言った。



「全部俺が受け止めてやるってばさ、だから全力で来いってばさ」  
「へへ、応ー！」

ボルトの目を見て、信じろと言う彼の意思に答えたナルト。九尾を抑えるのではなく、力を引き出し、二人で螺旋丸を作り始める。九尾のチャクラとナルトのチャクラ、そしてボルトのチャクラが重なり、相乗し、巨大な螺旋丸を作り出していく。

修行の成果とナルトに負けない根性を見せたボルトは、ナルトの膨大なチャクラをコントロールしていく。しかしそんな大技に気が付かないウラシキではない。

自来也を相手しながらも直ぐにボルトたちへ攻撃を始める。無数のチャクラ弾が彼らを襲う。

しかし、その攻撃は横から飛んできた無数の火炎弾によって迎撃される。

「今度はなんだ?!」

「やはり生きておったか」

自来也とウラシキの目線の先には、うちはサスケが居た。こちらもボロボロになりながらもナルト達の援護に駆け付けた。チャクラ温存の為に接近戦を自来也に任せ、火遁でウラシキを攻撃していくサスケ。

「お前達は自分の術に集中しろ。こいつは俺たちが止める」

「次から次にい」

蝦蟇夫婦と仙術の組み合わせに、写輪眼持ちのサスケの援護が加わり、決定打を出せないウラシキ。最初のようなキレもなく、超大玉螺旋丸のダメージは、予想以上に大きかったと見える。頼りになる師たちに守られながら、ナルトとボルトは互いのチャクラを共鳴させる。

二人の想いが重なり、必殺の螺旋丸が誕生する。

「天須波流星命・竜宮!!」

ウラシキが翼で突風を起こしてサスケと自来也を吹き飛ばす。

さらにボルトたちを先に仕留めようと、山のような巨大なチャクラのリユウグウノツカイが現れる。その口にはナルト達の作った螺旋丸の倍はあるチャクラ球が生成され、その威力で押しつぶそうとして

いた。正真正銘ウラシキの奥の手だ。

「怖いか？」

「いんや、全然。お前こそビビってんじゃねえか？」

「馬鹿言うな。今はなんていうかさ」

「わかるってばよ」

絶望的な状況に追い詰められながらもナルトとボルトは前に進む。

「負ける気がしねえってばよ（てばさ）!!」

親子による螺旋丸とウラシキの竜宮が衝突。衝撃波と暴風雨を発生させながら互いを否定しあう。しかし、火力面ではウラシキの方が上で、少しづつ押されていく。

しかし、弟子が踏ん張っていて、師匠が呆けているなどありえない。いち早く立ち上がったサスケと自来也。それぞれが出来る事をするしかない。

「自来也ちゃん油、儂が風遁、母ちゃんは火遁じゃ」

「唐揚げじゃな、任せとき！」

「お二方、行きますぞ。仙法・五右衛門!!」

自来也は、ウラシキ本人に超高温の油を放った。通常の火遁より勢いが強く、威力のあるそれはウラシキの肌を焼く。大やけどの激痛に苦しみ始めるウラシキ。

「準備は整った。受け取れウラシキ」

自来也とサスケの双方が火遁を使用し、上昇気流で真上に雨雲を生み出していた。そこで発生した雷を雷遁で誘導する秘術・麒麟。麒麟を発動すると、空にあった雷が龍の形となり、ウラシキの呼び出した巨大なリュウグウノツカイに噛みつき、食いちぎった。

大やけどを負い、術も弱体化させられたウラシキ。ナルト達は大人の援護を受け、ウラシキの術をはねのけながら向かってくる。

（ここは逃げの一手だ。チクシヨウ、このオレが）

空を飛べるウラシキなら飛んで逃げればいい。この一撃さえ躲せば後はどうとでもなる。

「粒遁封印術・金剛天鎖。好き勝手、やって、逃げれると、思うなつてば、ね」

自来也と共に洞窟に籠っていたシヤナ。自来也が仙人モードになるまでの間の一部始終を観察し、彼から真似をしてはいけないと伝えられた。そして、洞窟から出てきてはいけないと念を押されたが、シヤナは出てきた。

動かない体に鞭を打ち、木に靠れながらチャクラの鎖を精製。それらを操り、無防備なウラシキの体を拘束した。普段のウラシキなら、弱り切ったシヤナの術などで縛れない。だが今はウラシキも弱り切っている。

僅かなチャクラしかなくとも、弟と甥っ子にチャンスを与える事は出来る。

(行きなさい、ボルト、ナルト)

「これで終わりだあ!!!」

「ぎゅああああ」

遂にウラシキの術を突破し、ナルトとボルトの螺旋丸が直撃する。あまりの威力に強化されたとはいえ、ウラシキの体はバラバラになってしまった。あまりにもあつけない幕切れだが、自分より格下の相手に打ち取られたウラシキ。

ナルト達が全てが終わったと力尽き、気を失い、師匠たちが弟子の成長を噛みしめているタイミング。木陰に靠れながら、刺された傷を抑えるシヤナ。無理に術を使い、疲れ切っていた彼女だが、仕上げをしない訳にはいかない。

シヤナは、自分の目の前に転がる物を見る。

「しぶとって、ばね」

「ぜひゅ、ぜひゅ、ふふ、オレの、やぼうは、まだ、おわって、ない」  
肋骨より上だけになったウラシキが爆風で飛んできたのだ。恐ろしい事にまだ息があり、話す余裕もある。とはいえ、瀕死なことに違いはない。後は命が枯れるのを待つだけだ。九尾のチャクラを回収することはできない。

だが、大筒木には裏技がある。目の前には、優秀な器となりうる女がいる。触れる事さえできれば、後は器にしてしまえばいい。そう考

えていたウラシキ。

シヤナは止めを刺そうとダガーを片手に持っている。僅かなら接触も出来る。

(あと少し)

そう心で叫んだ時、ウラシキ以外の時間が止まった。表現ではなく、シヤナを含め世界の全てが止まってしまった。その異常事態に気が付いているのは、ウラシキだけだった。

(なんだこれは)

世界が止まり、色を失って、明暗しかない世界が広がる中で、足音が聞こえた。唯一動けるウラシキは視線をそちらに向ける。

そこには、大筒木一族特有の衣装の上に天女の羽衣を纏う女が居た。衣によつて顔が見えないが、そのチャクラはウラシキに抵抗する意思すら抱かせないものだった。

(大筒木の上の方が出てきた、何故こんな辺鄙な場所に)

真の恐怖にさいなまれたウラシキ。絶対的な力の差を感じ、このまま溶けてしまいたいくらいだった。そんなプレッシャーを放つ存在は、膝を曲げて、上半身しかないウラシキを見つめる。衣からわずかに覗く素顔を見た時、ウラシキの顔から表情が消える。

(まさか、そんな、ことが)

女性は、左手を伸ばし、シヤナに楔(カーマ)を刻もうとしていたウラシキの腕に指先で触れる。すると、ウラシキの腕が砂のように消えてなくなる。これは企みについての警告だろう。さらに軽く手を振り、シヤナにもチャクラを振りかけていた。

(バカバカしい。カーマを刻めば、全てを台無しにしてしまう所だ)

ウラシキはすべてを悟り、穏やかな表情になった。彼の顔から憑き物が落ちた瞬間、止めを刺そうとしていた女性の手が止まる。

(ええそうですよ。どうせ死ぬのなら、そうしますよ)

ウラシキの魂胆を見抜いたのか、女性は立ち上がり、霧のようなものに包まれ消えていく。最後に見えたのは、女性の右手の、大筒木一族に伝わる数珠の光だった。

時が動き始め、シヤナが止めを刺そうとした瞬間。

「あなたに、これを、さしあげ、ましよ、う」

突然ウラシキの体がチャクラの凝縮された小さな果実のような塊に変化する。シヤナは驚くが更に、果実が意思を持ったようにシヤナの数珠に吸い込まれていったのだ。そして、大怪我を負っていたシヤナは、いつの間にか完治しており、非常に困惑していた。

「え、なに、え？ どうなってるんだってばね！」

流石に気味が悪いシヤナ。だが、トネリから貰った数珠を捨てる訳にもいかず、最後のウラシキの目にも悪意がなかったことで、何かを預けられただけだと感じていた。

ウラシキが完全に消滅したことで、今回の騒動は終了となった。

## 未来への帰還

ウラシキの野望は潰え、全てが終わった次の日。

傷が完治していたシヤナは、里の人間に説明する手間が省けたとはいえ、釈然としていなかった。だがボルトとサスケが家に帰るためのチャクラが溜まったと、カラスキから連絡が入る。

シヤナのチャクラを吸収し、時間移動が可能となった事実は、彼らとのお別れを意味していた。

未来から来た二人は元の時間に戻る。これは避けられない運命だ。共に戦ったナルトと自来也にもお別れを言いに来たサスケとボルト。

自来也は、未来人であるサスケたちの正体を知っていたが、それが良くない事だと分かっていた。

「儂とナルトは、知らなくていい事を知り過ぎた。言っていることはわかるな？ 小説の結末は知らん方がいい」

「ああ。俺の術で、記憶を消す。それでいいんだな？」  
「頼む」

未来を知ることが許された人間は少ない。その掟を破ればどんな悪影響が出るかわからない。そう言われたサスケは、写輪眼で二人の記憶を消そうとしていた。唯一、シヤナだけが二人の事を覚えていて問題のない人物であるため、彼女には何もする必要がない。

記憶を消す前にナルトとボルトが何やら話していた。ナルトはボルトが家に帰ると聞き、とっておきのカップ麺をお土産に渡した。

「帰り気をつけろよ。父ちゃんと母ちゃん大事にしろよ」

「随分偉そうじゃねえか」

「今度会った時は俺が火影になってるだろうけど、また、一緒に一楽でラーメン食おうぜボルト」

「ああ。約束だつてばさ」

握手でお別れをする二人。残った挨拶はシヤナだった。シヤナは、ボルトの頭を撫でる。

「シヤナさん、その、あの」

「元気でねボルト。伯母さんもボルトの未来が明るい事を祈ってるってばね」

ナルトに聞こえないようにそういったシヤナ。ボルトは静かに「ありがとう、シヤナ伯母さん」とだけ告げた。本来いない筈の伯母。けれど彼女は、確かにここにいるのだから。

お別れが終わった事で、サスケはナルトと自来也に幻術を掛ける。二人の中から未来の情報とボルトとサスケの情報を消すために。

その瞬間、シヤナの頭痛の種だった時空間の歪みが小さくなっている。二人が眠ってしまったことで見送りはシヤナだけになる。

「世話になった」

「もつと感謝しろってばね」

サスケの別れの簡潔さに、呆れながらもカラスキを起動して、この時代から消えていく彼らを見送るのだった。

カラスキの展開した空間に入ったサスケとボルト。

『警告、警告、時間の歪みが想定以上に強く、元の世界との繋がりが途切れかかっています』

ウラシキが好き勝手やったことで、世界線がずれてしまい、元時代に戻れるかわからなくなったという。サスケは如何にかしろとカラスキに命令をするが、賭けになると告げられる。

それでも帰るしかない彼らは、強硬突破を命じる。そんなとき、カラスキとサスケとボルトしかない空間に、誰かが侵入。カラスキを優しく抱えていた。

「その恰好、大筒木か」

サスケが刀を抜いてボルトを背に庇う。サスケたちの前に現れたのは大筒木一族特有の衣装の上に天女の羽衣を纏う女。ウラシキの野望を打ち砕いた女性が、時間移動の領域にまで入ってきた。

サスケが攻撃しようとする、急にサスケの体が動かなくなる。正確には、前に進めないのだ。前に進もうとすると体が止まってしまふ。斥力や引力とも違う力に戦慄するサスケ。

「安心なさい。私は、あなたたちを帰す為に来たの」

女性が手を伸ばすと、閉じかけて居た時空間の歪みが開く。超常的な力を見せられた二人は、動けないが不思議と敵意は感じない。

無理やりこじ開けた歪みを指さし、カラスキに命令を下した。

『時間移動可能です。では、元の時代にお戻しいたします』

「お前は何者なんだ？」

時間移動が始まり、ボルトとサスケは本来の時間軸に転移した。

サスケの問いには、答えなかった。そして、半ば無理やり二人を元の時間に帰した女性。彼女が、頭の衣を取れば、クリーム色の髪と青い輪廻写輪眼が二人を見送る。

「さようなら、二人とも。もう、迷いこんじゃだめだってばね。……それにしても、後始末は本当に面倒だってばね」

二人に手を振りながら時空間の穴を塞ぐという神業を披露した女性は、そのまま時空間の流れの中に消えていった。

事件が解決した後、記憶を失ったナルトと自来也。事件の事を語らないシャナは、自分の修業不足や九尾に対する制御できない感情なども含め、二人の修行の旅を承諾した。

突然修業の許可が出たことに顔を見合わせて驚く自来也とナルト。心境の変化の理由は話せないが、数年の修業を許可するシャナ。たとえシャナが止めてもナルトは、決めたことは曲げない。

そう自分に言い聞かせながらも、内心弟離れできていないシャナ。月に一度か二度トネリが木ノ葉に内密に訪ねてくる日に、彼の胸で号泣しながら心情を訴えかけたことは誰も知らない。



## 秘密のボーイフレンド

ボルトたちの事件が終わり、木ノ葉の里は少しづつ安定を取り戻していた。大きな事件も起きず、忍達の尽力もあり、五大国最強の隠れ里の名目は少しづつ、回復していく。

そんな情勢の中、火影の執務室に集められた忍達が居た。

五代目火影の招集されたのは、うずまきナルト、春野サクラ、鞍馬八雲の3人が集められていた。突然の招集とメンバーにそれぞれ疑問を覚える。

「良く集まってくれたな。今日招集したのは、ある任務をお前達に請け負ってもらいたいからだ」

「また変な任務じゃないのかってばよ」

五代目火影の綱手を遮るナルト。だが自来也との修行の旅の準備期間中に受けたのはどれも微妙な任務ばかりだったのだ。今回もどうせ、というナルトの予想は当たっている。

しかし、サクラが五代目火影相手に愚痴をつづけるナルトの後頭部を叩く。

「この馬鹿、綱手様がまだ話してるでしょうが」

「痛いってばよサクラちゃん。あれ、そういえばなんで、八雲の姉ちゃんも呼ばれてんの?」

下忍だけでなく、中忍の八雲も呼ばれているのは確かに変だ。

「それについても説明する」

今は里は、終戦後の婚活ムードになっているらしい。特に若いノ一の婚姻も多く、里の減った人口が戻っていく一種の自浄作用ともいえる。それだけなら問題ないのだが、最近木ノ葉の里で若いノ一を狙ったスパイが蔓延っているという情報が入る。

手練手管でくノ一を惚れさせ、骨抜きにしたのちに機密情報を聞き出す手口だという。その被害を受けている人間が何人もいて里でも問題になっているという。

「それで、なんで俺が呼ばれたんだってばよ」

「この話には続きがあつてな、お前のよく知る人物が、次のターゲットかもしれないんだ」

綱手にそう言われ、ナルトはサクラと八雲をジト目で見る。

「違う。お前の姉、うずまきシヤナが次の狙いかもしれないという話だ」

「え？」

呆けるナルト。驚くサクラ。心当たりのありそうな八雲と言った面々。綱手は本題に入ると話をつづけた。

元々は里内でくノ一を狙ったスパイの話が上がったただけだったが、其処で話に上がってしまったのが他でもないシヤナだった。

里の人間達もシヤナの性格と悪評は、把握している。年頃とはいえ、色恋とは程遠い彼女に疑いが掛つたのは、木ノ葉の大名家の跡取りのせいだった。全く接点がないような人だが、木ノ葉の大名家は、第四班を気に入っている者も多く、護衛の指名依頼が良く来る。

そのこともあつて第四班のメンバーは、破格の依頼料によつて裕福なのだ。そこで知り合つた大名家の坊ちゃんシヤナに一目惚れしていたらしい。

その入れ込みようは本気で、興入れの話を持ち掛けてきたほどだと言う。木ノ葉の上層部は、当然貴重な戦力と血継限界を持つシヤナを手放したくない。

そして、シヤナ自身も興入れの話は断つたのだ。それだけなら大名家の若君の失恋と言う話なのだが、その断り方が問題だった。

「私、彼氏がいるから大名家には行けないってばね」

そうぶつちやけたシヤナ。その場しのぎの方便かと思われたのだが、大名家の若君は諦めがつかず、調査を依頼してくる始末。里としてはそんな依頼を受けるのはいかがなものかと思われたが、ここ最近のシヤナの行動と目撃証言が入った。

そこでタイミング悪くスパイ疑惑が絡んできたと言うわけだ。シヤナは里の機密は知らないが、うちは一族である彼女を籠絡すれば、それだけで血継限界が手に入る。力では無理でも、そういう方法もあるという事だ。

「嘘だつてばよ。姉ちゃん、そういうのわかんないタイプだつてばよ」  
一緒に暮らすナルトの証言。確かにナルトから見れば姉は、強さは桁違いだが、恋などしないタイプに見える。だが、それは女性陣に否定される。

「そんなことないわよナルト。シヤナさんだつて恋の一つや二つあつたつておかしくないわよ」

「でもさ、でもさ」

「ごめんナルト君。私、シヤナが好きで人いるつて話聞いてる」

ナルトの希望は八雲の援護射撃で鎮圧される。燃え尽きたように床に倒れるナルト。シヤナのブラコンと比例するようにナルトもシスコンなのだ。故に、姉に恋人がいるかもしれない事実は、彼の精神を大きく削り取る。

八雲の話聞いたサクラは「やっぱり」と興奮気味だが、そこで今回の問題点であるスパイの疑惑が浮かび上がる。正体不明のシヤナの恋人とは誰かという問題だ。

「木の葉の人間なら問題ない。だが、もし他里の人間や、スパイなどという事になれば、大きな問題につながる」

しかし、里の人間がシヤナを問い詰めた場合。起こりえるのは、彼女の怒りを買うことだ。任務以外では里の意向を無視するシヤナが、里を見捨て、抜け出す可能性だつてある。只でさえデリケートな問題で、色恋が絡めば忍と言えど人。

色恋が原因で里抜けが起こる例は数多く、紛争につながった事例すらある。そして、シヤナの血筋である、うちはがその悪い例の代表なのだ。

シヤナの実力を考慮すれば、止められる人間は木ノ葉にいないだろう。故にシヤナではなく、その恋人の方を調べる事になった。そこで集められたのが3人というわけだ。

情報の漏洩を防ぐため、綱手の弟子であるサクラ。シヤナと同じ班で彼女を裏切らない八雲、そして弟であるナルト。仮にシヤナにばれたとしても、彼女が手を出さない人選でもある。

「でも、火影様、さすがにシヤナの事を裏で調べるつていうのは、その」

「気持ちわかる。あくまで、スパイの調査と言う形で動いてもらいたい。もしシャナが被害者だとわかれば、お前なら説得も可能だろう」

うちはである事実を抜いても、シャナを欲しがる勢力は多い。そう言った手合いに武力以外で身を守る手段がないシャナは、堅牢に見えて藁の楯だ。そういったことを教えられる人間がシャナの傍にいない事が原因だが、元を正せばシャナの人間不信は、木ノ葉が原因。

「わかりました。けど、スパイじゃなかったら、私はシャナの恋を応援しますからね！ 二人とも行こう」

八雲は綱手にそう伝え、サクラが動けないナルトを引つ張って執務室から出ていく。昔の八雲なら、火影相手にこんな言葉は残せない。シャナと一緒に成長したのが原因か、悪い所が移ってしまったのかもしれない。

八雲たちが居なくなつたことで、静かになつた執務室。綱手は窓の外を見る。

「何故お前までショックを受けているんだ自来也？」

綱手の視線の先には、シャナの話聞いてショックで四つん這いになつている自来也が居た。ばれないよう潜んでいたが

「何故も何もあるか、儂にとつてあの子は、孫のようなもので、儂立ち直れないかもしれん」

本気で落ち込んでいる自来也。自分の愛弟子の愛娘。血の繋がりはないが、小さい頃から可愛がつている子が成長し、好きな人がいるという事実は、彼に大きなショックを与える。

「もしシャナを狙つたスパイなら、儂が直々に始末してやる」

「お前は別の仕事があるだろうが。……あくまで女の勘だが、シャナはつまらない男に惚れるような女じゃないさ。さ、お前はお前の仕事をしてこい」

綱手に仕事をしろと追い立てられ渋々、木ノ葉を離れる事になる。次、自来也が戻つた時がナルトとの修行の旅に出る時だ。

## 秘密のデート

任された任務を素早く片付け、木ノ葉に休暇届を出したシヤナは少し浮かれていた。機嫌よく鼻歌を歌いながら家事を終え、出かける支度をしている。

「これでいいかな」

忍装束ではなく、八雲に教えてもらった服屋で買った私服姿のシヤナ。今日はトレードマークであるゴーグルをしておらず、代わりに頭にサングラスを載せていた。余所行きのお嬢さんと言った格好のシヤナ。珍しくおめかししている理由は、一つだろう。

弟は、朝早くから任務に出掛け、誰も居ない部屋に行つてきますとだけ告げ、部屋を出るシヤナ。そんな姿を追跡している存在が居た。

(姉ちゃん)

非常に複雑な心境ながらも、姉を騙す悪党が居れば、ぶん殴つてやろうと考えているナルト。そのためには、姉を追跡するしかない。けれど、自分のやることがおかしいと感じる理性はあるため、酷い葛藤を抱えている。近くにはサクラも控えており、インカムでの連絡を取り合っている。

一方で八雲は、一人木ノ葉の繁華街にいた。大体の被害報告が繁華街で声をかけられたと証言があり、ターゲットが現れるのを待つ作戦の様子。

ターゲットの特徴だが、変化の術を使っているのかいろんなタイプの男性であり、唯一の共通点が右腕に刺青があったという報告だけだった。感知タイプの八雲なら相手が変化を使っていればすぐに探知できる。

二手に分かれての捜査が始まった。

大通りを通り、木ノ葉の自然公園に歩みを向けるシヤナ。それを追跡するナルトとサクラ。明らかなデートスポットに向かう姉にナルトが戦慄。サクラもサクラで少し楽しそうにしている。

「ちゃんとオシャレして、お化粧もきちんとしてる。これは間違いないデートね」

「絶対デートじゃないってばよ」

「あんたもしつこいわね。ほら、あの噴水で待ち合わせしてるのよ」  
「うぐ」

ナルトの希望的観測は、サクラによってばつさり切り捨てられる。しかし、シャナが公園についてから誰も来ないのだ。待ち合わせをしているようだが、相手が来ない。まさか悪い男に騙されているといううわさが本当なのかと、二人の頭に過る。

仮に相手が来たとしても許容できないナルトだが、姉を待たせた上で、放置するとあれば渾身の螺旋丸を叩き込んでやると意思が固まっていづく。

「そのシスコン、早く卒業した方がいいわよ。あれ、誰か来たみたい」  
「あいつが、姉ちゃんの」

サクラが噴水に腰掛けているシャナに近づく男性に気が付き、その様子を観察し始める。シャナが待っていたのは、遠くからで顔が良く見えないが、銀髪でシャナと同年代の男性。

「なんか、顔が良く見えねってばよ。サクラちゃんはどうか？」  
「変ね。私も顔は見えてるのに、ぼやけて見えるって言うか」

サクラとナルトは遂に現れた男の顔を拝もうとしたが、何故か認識できない。

「でも、シャナさん嬉しそうね。あの人、あんな表情もするんだって」  
「……（本当に、楽しそうだってばよ）」

どこか胸の内に寂しさを覚えたナルト。二人に血の繋がりは無い。二人を繋ぐのは、家族の絆だけだ。けれど、姉に新しい家族が出来た場合、自分はどうなるのだろうかという不安が彼を襲う。

「……大丈夫よナルト。シャナさんの事だから、彼氏ができてあんなの事は、誰よりも大切にしてくれるわよ」

ナルトの心境を察したサクラがフォローを入れる。シャナとの会話は、数える程しかないが、ナルトから聞いた話で彼女の弟に対する溺愛具合は知っている。

「シヤナさんたち動いたわよ」

「へへ、わかったつてばよ」

シヤナ達が移動し始め、繁華街の方角へ向かったのでナルト達も後をつけていく。シヤナ達は、繁華街の劇場に足を運んでいた。

「意外と、デートコースしつかりしてるわね」

「姉ちゃん、映画とか好きだからなあ」

公開日には、休暇を取ってまで出掛けるくらいにはまっている趣味である。何度も何度もナルトは誘われた経験がある。ただ対象が映画館に入ってしまった以上、追跡が困難になる。

「サクラちゃん俺らも中に入らねえと」

「うーん（サスケ君とこういうところ来てみたかったなあ）」

ナルトに手を引かれ映画館の中に入ったサクラ。シヤナに気付かれないように、変化で変装し、一番後ろの座席に座ることでシヤナと謎の男を観察する。

映画が始まる前に、シヤナが男と何かを話して談笑している。シヤナの方が映画について何か伝えているらしく、パンフレット片手にはしゃいでいるようだ。

デートを楽しんでいる姿を見て、ナルトが体を掻きむしっている。

「あんたどうしたのよ」

「なんか、こう、小っ恥ずかしいというか、むず痒いって言うか」

非常に重症なナルト。みっともないからやめなさいと嗜めるサクラ。そして、二人が入った映画館の隣の茶屋で寛いでいるシヤナとトネリの姿があった。

「シヤナ、映画見なくてよかったのかい？」

銀髪に全盲のため目をつぶっているが美形なトネリ。普段の大筒木の衣装では目立ったため、予め用意した服を着ている。今日はシヤナから、デートに誘われて月から舞い降りていた。

心眼によって映像も認識できるトネリは、シヤナの案内の下、映画館へ来ていたのだが、誰かが後をつけている事を察知。

それを彼女に伝えた結果、影分身に映画を鑑賞させ、撒くと言う作

戦を決行した。

「映画が終わり次第、影分身に消えるように言っただけでばね。そしてら経験値だけが戻ってくるから、映画と同時に別の事も出来てお得だっただけでばね」

「なるほど」

影分身を用いたダブルデート作戦。術を考案した二代目ですらたどり着けない領域だろう。一度のデートを二倍楽しめる。

お茶を飲みながらご機嫌のシャナは、里の観光をしようと提案。

二人で昼間の木ノ葉の里を歩く。トネリが自分の一族に伝わる幻術でシャナと自分への認識を薄くしていることで有名人のシャナでも普通のカップルにしか見えない。

「私、実は、こうやって里を巡ったことないんだ」

「それはまた、どうしてだい？」

理由は単純だ。シャナは、自由が制限されていたし、自由になった後は、木ノ葉の事が嫌いだったからだ。シャナから奪うだけ奪った里に楽しみなどなく、強くなることにしか興味がないう子供時代を過ごした。ある程度成長してから、ようやく娯楽や息抜きを知り、少しずつ里に対する嫌悪感も薄れてはいる。

全員が悪人に見えていた時代から、気に入らない人間とそうではない人間と分別できただけ成長と言える。

しかし、嫌いなことに変わりなく、あえて、里で遊ぶという事をしなかつた結果なのだ。

たまたま辿り着いた場所で祭りが開催され、初めて出店というものを経験中の二人。シャナもお祭りに来た経験などなく、月に住んでいるトネリは言わずもがな。

手裏剣投げの出店では、現役忍者であり手裏剣が得意なシャナが最高得点をたたき出す。ただ、ボウガンを用いた射的では、全弾外すとという醜態をさらす。

「あの店絶対、細工してるってばね」

「そうかな？ 僕は普通に取れたんだけど」

「もう一回、やってくるってばね！」



「もうやめた方がいいよ」

4回もチャレンジして一発も当てられないという結果に終わる。一方でトネリは何でもそつなくこなしていた。その結果、きちんと商品を受け取っている。それが悔しくて何度もチャレンジしてしまったのだ。

食事も出店で済ませようと決め、どうせなら家で食べれないものを集中的に買っていくシヤナ。その途中で、初めて見た綿あめに視線が惹かれる。

「綿あめって、不思議だつてばね。なんで砂糖がこんな雲みたいにな」  
「地上の食べ物はどれもユニークだね。テーブルマナーもいららないなんて新鮮だよ」

綿あめを食べて偉く感動しているシヤナ。一方で異文化に触れ、驚いているトネリ。彼は月の大筒木一族として由緒正しい血統で跡取りである。食事も豪華な料理が多く、祭りの食べ物のような立ち食いするものは、経験したことがない。

二人で初めての体験を重ねていく。新鮮味とお祭りの雰囲気を満たす。

「金魚か」

「そんないっぱい取って、どうするつもりだつてばね」

金魚すくいにチャレンジし、その後は休憩のため人気のない場所です座る二人。

金魚すくいで一匹しか取れなかったシヤナと違い、トネリは20匹程取ってしまった、貰った袋がいっぱいになっていた。大量の金魚を持って余っていたトネリ。彼は何を思ったのかその場で袋を破り、掌から発生させた泡の中に金魚を泳がせた。

泡の中は水で満たされており、窮屈そうだった金魚たちは、泡に守られながら空を悠々と泳いでいた。

「何その変な使い方？ 金魚鉢の術？」

「元々狭い水槽から出られたのに、さらに狭い場所に入れられて可哀そうで」

決められた生き方しかできない金魚に自分を重ね合わせている。

自分は大筒木ハムラの一族出身で、定められた運命を全うすることに誇りを持っている。だがそれと同時に他の人生に憧れてしまうのも人の性だ。

シヤナに出会わなければ、こんな考えはしなかつただろう。偶然出会い、トネリの人生に唯一といってもいいほどの刺激と羨望を与えてくれる少女。

父親以外には、傀儡しかいない生活に訪れた嵐のような彼女。何度も会い話をしたり、交流を深める内にトネリは自分の気持ちが恋だと知った。父に初めて会った女性だから意識しているだけだと言われたが、それは違う。

彼女と時を重ねるごとに、愛しさが膨れ上がってくる。良い所も含めれば悪い所もある。だが、全てひっくるめて愛しいと感じていた。

今日のデートも、シヤナから誘われたことで父の反対を押し切って昼間から地上に降りている。

トネリの泡に入り空を泳ぐ金魚を「綺麗だつてばね」と眺めるシヤナ。

(君は僕の正体を知ったら、どういう反応をするんだろうか)

月の大筒木一族は、大筒木ハゴロモの作った時代を見定め、それをリセットする役割を持つ一族。過去に何者かが月に封印されていた外道魔像を口寄せしたことで、地球のリセットに舵を切ってしまった。そんな中で、唯一の跡取りであるトネリが、ハゴロモの一族の末裔であるシヤナに好意を持っている。

これは一族に対する裏切りだと言われた。トネリには、一族が地上の日向一族に求めた許嫁が居る。本来ならその女性を月に招き入れ、地上を一掃するはず。

(だが、出来ない)

一族の使命と同じくらい、譲れないものとなっている。

「トネリ、トネリ」

「あ、ごめん」

後回しにしているだけと分かりながらも、彼女との時間を大切にしたいと、今に集中した。シヤナが時計を見て、そろそろ映画が終わる

頃だと言った。影分身達が自分で術を解除すれば、その経験は本体へと帰ってくる。

だから、映画の感想でも話そうと言われ頷く。

そして、実際に映画館で映画を鑑賞した影分身達が消える。そして、映画館での記憶が流れ込み、シヤナとトネリは二人とも、顔を真っ赤にした。

「っ!?」

隣に座っていたシヤナが飛び上がり、パニックになっている。一方でトネリも影分身の経験を感じ、どうすればいいのかわからなくなった。

「なにやってるんだってばね、私とトネリの影分身!?!」

シヤナ達の影分身は、映画を本体に代わって鑑賞。その内容がアクションと恋愛映画の融合だったため、変に意識しあう二人。特にラブシーンを見てから、気まずかった。そして、その興奮が冷めぬまま映画を終える。

どうせ消えてしまう影分身である自分たち。どうせだから本体に悪戯をしないかとシヤナ（影分身）が持ち出した。押しに弱いトネリ（影分身）も、少し面白そうだと思ったのか、映画が終わり、ナルトとサクラも外に出たことを確かめ、消える前に、映画のような深いキスをした。

2分以上もの間、キスしていた二人は、笑いながら消え、その小っ恥ずかしい感情と経験が本体に流れたのだ。

二人とも唇を押さえ、艶めかしい感触に悶えている。シヤナはよくキスをするが流石に、ディープキスの経験はない。ものすごく恥ずかしくなり、トネリより悶えている。

「もう二度と影分身デートしないってばね!」

「賛成。これは良くない」

影分身でのデートは盛り上がった影分身が暴走する。その副作用を身に染みて体感、二度とやらないと誓う。その後は互いに互いを意識し、どうしても口元を見てしまう。

やがて、トネリが帰らなければいけない時間となる。影分身達のせ

いで映画の感想どころではなく、少し惜しい気持ちになったシヤナ。今日は彼女からキスする事も出来ず、いよいよ別れが迫っていた。

「楽しかったよシヤナ。また一緒に出掛けたいと思うよ」

「私もだつてばね。それで、その」

顔を真っ赤にしているシヤナを見て、トネリが笑い、次に覚悟を決めたような顔になる。急に真面目な表情になったトネリに驚くシヤナだが、彼に抱き寄せられ、そのまま唇を奪われた。影分身達とは違い、短いものだったが、力強く抱きしめられシヤナは抵抗できず、彼の思うままになっていた。

ようやく解放されたシヤナは、何が起こったかわからず困惑している。

「シヤナ。僕は、君の事を愛している。だから、約束する。必ず君を迎えに来る」

(ええ！・嘘、トネリってこんな)

二人の関係の主導権を握っていると思っていたシヤナ。なのに想定外の反撃を受け、彼に感じたのは嫌悪ではなく、頼もしさと愛だった。主導権を握られるのは嫌いだ、彼の場合は嫌な気がしない。

そして、母クシナとの会話を思い出していた。

お父さんとの出会いについて、普段は優しくして少し頼りない人だったけど、いざというときは意志が強く本当はすごく頼れる所に惚れてしまったと。

「私も、トネリ好きだつてばね。本当に」

「よかった。では、また月の出る夜に」

とんでもない爆弾を投下してトネリは、時空間忍術で月へと帰ってしまった。残されたシヤナは、夕焼け空でもはつきり見えるほど顔を真っ赤にしながら、帰路に向かうのだった。

一方でスパイ事件の顛末だが、こちらは比較的早く解決していた。捜査に乗り出そうとした八雲に声をかけてくる輩がいた。その人物がトルネにそっくりだった。

しかし、トルネとは違い軽薄そうで、馴れ馴れしい。相手の好みにドンピシヤな姿に？化す術なのだろうか。

自分の好きな異性がピンポイント過ぎて恥ずかしくなった八雲はスパイの誘いに乗り、疑似デートをすることになった。

だが被害者たちと違い、好きな相手の姿でも、中身が違いすぎて腹が立つ八雲。相手は彼女が照れているだけだと勘違い、更にスパイからしても八雲は美人で好意を抱き、路地裏に誘い強引に口付けを迫った。

(女の敵！)

八雲が幻術で生き地獄を味合わせようかと思ったとき、路地裏にトルネが慌てて駆けつけた。

また偽物かと八雲が怒るが、現れたトルネは、男の胸倉を掴み、怒鳴りつけた。その声と態度で本物だと勘付いた八雲。男は抵抗したが八雲が「逃さないで」と叫ぶなり、弾丸のように一撃で制圧。

その後、木の葉の警らに引き渡される運びとなる。

何故トルネが助けに来たかといえば本当に偶然だった。ガイ先生が任務で不在の為、代わりにガイ班の面々と任務に出たトルネ。

戦闘能力とスタイルが師であるガイと同じため無理なく運用できると言うことで臨時に部隊長を務めることが多かった。そしてガイ班との任務を終え、家に帰ろうとしていた。

その時、八雲が見覚えのない輪郭が歪む男と一緒に路地裏に入っていくのが見えた。

何やら幻術のようなものを纏う男に連れられていく彼女を見て、追いかけていけないと走り出し男を取り押さえたのだった。今にして思えば、思考を放棄した突発的行動だったと反省する中、八雲が無事で良かったと安堵する自分がいる。

お互い任務終わりということもあり、久しぶりに食事に誘われた八雲。棚からぼた餅な展開にも、チャンスを逃す事がないよう喰い付き、二人で夕飯を食べに行った。

そして残ったサクラとナルトペアはというと、シヤナに追跡を振り切られ、任務の続行が不可能となる。

唯一わかったことは、シヤナにボーイフレンドが存在すると言う事実のみ。それだけで人生が終わったようなショックを受けるナルト

をサクラが励ましていた。そしてあまりの落ち込み様に見かねた同期の忍び達が焼肉に誘い、いつもの調子を取り戻すのだった。

もちろん火影へ報告をするも、綱手は相手がスパイでない以上、個人の色恋に介入は無用だと上層部と大名に白紙の報告書を叩きつけたらしい。

そして、全てが解決したと思われたとき、火影のデスクの上にある任務の依頼書が置かれていた。

「まだ任務があったのか……これは」

綱手が取った依頼書には、護衛の任務が記されており、内容はある映画撮影の為、雪の国へと向かう際の護衛と書かれている。

だがただの護衛ではないようで、BランクからAランク任務に引き上げられ手練を要請されていた。

綱手は、それに心当たりがあった。

「雪の国か。確か、他の大陸国で悪名高い女傭兵グライアが雇われたという噂が原因か」

もし噂が本当なら、今出せる最大戦力を投入せざるを得ないだろう。そう考え綱手は、第7班の資料とシヤナの資料を手を取った。

## 雪姫忍法帖

朝早くの火影の執務室。そこには、部屋の主である五代目火影とシズネ。そして、任務のために呼び出されたはたけカカシが待機していた。

「雪の国、の護衛ですか」

「そうだ。木ノ葉の中で雪の国での任務経験があるのはお前だけだ。そこでお前達第七班が選ばれたというわけだ」

「なるほど。ですが、護衛となると、最低フォーマンセルが基本です。今、第七班は」

うちはサスケが抜けて以降、七班の人員は一人欠けている。護衛対象が居る以上、基本である人数は確保したいというカカシ。それを見越してか、綱手が時計を確認する。

窓を見る綱手。

「来たか」

「嫌だったけど、来てやったってばね」

時間通り窓枠から侵入してきたのは、うずまきシヤナ。絶対に火影室には扉から入らない彼女の行動に順応しつつある綱手とシズネ。褒められた行為ではないが、シヤナは忍としては有能であり、任務もすべてこなしてきた経歴を持つ。

上層部はシヤナの素行と忠誠心の無さを問題視するが、元は綱手も跳ね返りである。彼女に臍を曲げられるよりは、任務に大人しく従事してもらおう方が得策だろう。

「綱手様、何故シヤナが？」

「そいつが4人目だからだ」

「何の話だってばね？」

顔に疑問が浮かぶシヤナにシズネから説明が入る。シヤナは第七班の助っ人であり、護衛任務に就いてもらいたいという。ナルトやカシと任務なんてやったことがない。

「何故私なんだってばね。中忍やそれこそ下忍だって、手の空いてる

「やつはいるってばね」

己惚れている訳ではないが、うずまきシャナの実力は木ノ葉でも有数。中忍であるものの、護衛任務は主に大名などの要人ばかり。少なくとも下忍が選抜されるような任務の護衛には過剰戦力だ。

「特に理由がないなら、私は」

「最近、雪の国で不穏な動きがあるらしい。かなりの危険人物が出入りしているらしくてな。そのタイミングで雪の国の依頼が来た。木ノ葉としては、護衛対象が有名な人物であるため、最善を尽くして護衛をしたい」

因果関係は不明だが、きな臭い事には、変わりない。カカシが居たとしても第七班では力不足の可能性があるという事だ。そんな任務にナルトを向かわせる事自体反対なシャナ。だが反対するなら自分で守ってみると言う綱手の視線に腹が立つ。

それに危険人物と言うのが気になるシャナはその人物について尋ねる。

「いい質問だ。その人物は、海を渡った先の大陸で国際指名手配されている女だ。つい最近、忍五大国にも手配書が届いた。主に略奪と殺戮を生業としている傭兵でな。名をグライアという。姿などは、まだ調査中だが、噂が真実なら、とてつもない脅威となるだろう」

シャナは綱手の口から出た名前に、心当たりがあつた。女傭兵グライア。ゲレルの石事件の際に戦った強敵ラビリンス。彼女が戦った事のある強敵であり青い写輪眼を持つという情報を聞いていた。

シャナ、コダマ、ラビリンスに次ぐ青い写輪眼の持ち主。それが雪の国にいるという。ラビリンスの話から実力はラビリンスと同等。ならばシャナが同行するのは、必然ともいえる。もしかしたら、シャナの出自に関する答えを持っている可能性もある。

「当然、杞憂の可能性もある。だが、お前にとつても悪い条件じゃないはずだ」

「なんで?」

綱手が得意げに任務の詳細を伝える。護衛対象のリストを見せた所、グライアについて深刻な顔になっていたシャナが満面の笑みに



なっていた。

「これ本当だってばね？ 嘘じゃないってばね?!」

「ああ、今回の護衛対象は、風雲姫の映画撮影班とキャスト達、そしてお前に頼みたいのは主演女優の」

「富士風雪絵だってばね〜!! やったー! やったやった。これサインとかもらっても良いってばね? いいってばね? ミッチー、キンちゃん、ヒデローもいるし。それにマキノ監督もいるってばね!」

嬉しさのあまり子供のようにはしゃぐシャナ。大の映画好きであり、風雲姫シリーズの大ファンであるシャナ。今回の護衛はその風雲姫シリーズの撮影グループなのだ。憧れの女優や俳優、そして監督など、興奮が尽きないのか、今まで誰にも見せたことのない位、足踏みしながら喜ぶシャナ。

忍びやってくるよかつたと本気で思っていた。

「想像以上の喜び方だな」

「シャナ、まだ綱手様が話してるから、落ち着きなさいな」

「とりあえず、任務は受けるという事でいいな?」

「うん。私、五代目のこと勘違いしてたってばね。滅茶苦茶嬉しいってばね」

なんと現金な奴だと呆れる面々。出発は今夜の船だと伝えられ、カシとシャナは火影室を後にした。これまでで一番愛嬌よく、扉から出ていったシャナ。

手まで振って退室した彼女を見ていたシズネがポツリと感想を零した。

「なんというか、意外ですね。あの子にあんな一面があるなんて」

「良くも悪くも自分に素直なんだろう。好き嫌いがはっきりしているから、態度に出るんだな。自来也の言っていたことが少しわかったよ」

綱手の知るシャナと自来也の知るシャナには大きな格差がある。それをシャナを可愛がっていた自来也のフィルターだと思っていたが、善意には善意を、悪意に悪意で応える彼女故の格差だったのだ。

木ノ葉が嫌い、大人が嫌いだという思いは、それだけ傷付けられて

きたシャナなりの仕返しなのだ。逆に愛情を注ぎ、優しく接してきた自来也は、シャナからも信頼され、愛着を持たれている。

「この任務が終われば、ナルトと自来也は木ノ葉を離れる。だから、あの子を木ノ葉に繋ぎ止めるのは、キチンと向き合う必要があるな」  
「そうですね」

火影室から出た二人。昔馴染みだが、個人的な接触はなく、今回は久しぶりに会話を行っていた。

「お前と同じ任務は初めてだな」

「そういえばそうだってばね。……カカシは、まだお墓参り行ってるんだってばね？」

「ああ」

オビトとリンの死後、カカシは毎日墓参りに行っていた。シャナも何度も墓参りに行っている。だがうちは一族に預けられ、ナルトと共同生活するまでは疎遠になってしまった。

だが、日を見ては両親の墓参りと同時に墓参りしているシャナ。そのたびに添えられた花がカカシの用意したものだと思っていた。

生き残ってしまった自分を罪人のように思い、償うように墓に足を向けるカカシ。彼を否定することは出来ない。

「この任務が終われば、ナルトは自来也様と旅に出ると聞いているが、お前は平気なのか？」

「平気だと思っ？」

どう考えても平気じゃないだろと睨むシャナ。許可を出した手前止められないが、本心では、行ってほしくない。けれど、男の子には、女にはわからない考えがある。そして、ナルトの人生を決めるのはシャナではない。

シャナと言う檻の中には、ナルトは大空に飛び立てない。

「せいぜい、私のありがたみを知りながら枕濡らせばいいと思ってるってばね」

「ふっお前らしいな」

「そういえば、任務だけど、そのグライアって奴が本当に出てきたら」  
全ての戦闘を自分に任せろと言うシャナ。援護しようと思わず、護衛対象の安全だけを考えてほしいと願うシャナ。カカシは強いが、慣れない共闘などして、勝てそうな相手ではない。

何事も起きないのが一番だが、妙な胸騒ぎを感じているシャナ。これが俳優や女優に会える興奮でない事は、彼女が一番理解している。「それは隊の隊長に対する進言と取るべきか？」

一応、カカシを部隊長としている為、シャナの上司と言う形になるカカシ。シャナの発言は、任務を遂行する上で我儘ともとれる。

彼女の実力は理解しているが、独断先行を許す事はリスクである。部下であるナルト達の手前、そんなことを許可することは褒められたことじゃない。

「幼馴染のお願い？」

「……場合による。だが、前向きに考えておくよ。俺はこの後ナルト達に任務を伝えに行くが、お前はどうする？」

「決まってる。サイン色紙買いに行くつてばね！」

真面目な空気が消し飛んだ。なのにシャナは至ってまじめだという。

その後、本当に色紙を買いに走っていったシャナの後姿を見送るところになったカカシだった。

## 雪姫忍法帖2

風雲姫の撮影のために護衛として雇われたナルト達。サクラとナルトは、カカシより待ち時間の間、映画を見ておくように言われ、天井にチャクラで張り付きながら鑑賞。

エンディングに近づくにつれ、興奮したナルトのせいで映画館を追い出されてしまう。

「もうあんたのせいで追い出されちゃったじゃない。はあ、助悪郎役のミッチー様の活躍をもっとみたかったのに」

「ごめんだってばよ。けどさ、なんでカカシ先生ってば、この映画を見とけなんか言っただってばよ？ まあすげー面白かったけどさ」

確かに疑問は残る。任務と映画のかかわりが解らなかった。しかし、その答えはすぐに訪れる。映画館の裏で時間を潰していた時、何処からともなく馬の蹄の音が聞こえ、その方向を見れば馬に跨り颯爽と駆け抜ける風雲姫が居た。

それは見間違いではなく、風雲姫の衣装姿の富士風雪絵が何かから逃がっているのだ。そして、彼女の通り過ぎた後を、鎧姿の男たちが同じく馬に跨り追っていく。

見るからに怪しい連中にサクラとナルトは目配せし、彼らを追った。

忍の脚力なら馬に追いつくことなど容易い。逃げる風雲姫を追う男達を見つけたナルトは、影分身の術を使い人海戦術で男たちを抑えていく。

「何？」

突然加勢に入ったナルトに驚く雪絵。だが、好都合と考え馬を走らせていく。

「決して逃がすな！」

眼鏡をかけた老人が、雪絵を追うよう命じるも、彼の背後にはサクラがクナイを抜いて立っている。首筋にクナイを向けられ完全に動きを封じられる。

「ナルト、影分身を置いて、風雲姫の所に行きなさい」

「わかったってばよサクラちゃん」

本体のナルトがサクラの指示で逃げていった風雲姫を追いかけていく。サクラは残ったナルトの影分身達を指揮し、縄で拘束していく。すると、騒ぎに駆け付けたカカシが現れる。

「カカシ先生？」

「あらら、サクラ、すぐに縄をほどいてあげろ。その方たちは今回の依頼人だ」

「嘘!」

ナルトが風雲姫を追いかけて走っていると、川で馬に水を飲ませながら休息している風雲姫が居た。

「お怪我はありませんか姫？ なんちゃってな。姉ちゃん風雲姫だよな、俺さ俺さ、感動して涙が止まらなかったってばよ」

「何あんた？」

突然現れたナルトを警戒する彼女。だがナルトは今見た映画の感想を述べながら、勇気を貰ったと感謝を伝えている。

「あんたの映画見てるとき、ぜってえ諦めねえって思えるんだってばよ。だからさ、だからさ、俺も絶対火影になってやるんだ」

「私は風雲姫なんかじゃないわ」

「わかってるってばよ。女優の雪絵さんだよな。俺ファンなんだ、サインくれってばよ」

「私はサインはしないのよ」

「ええ、頼むってばよ。うちの姉ちゃんもあんたのファンで、自慢してやりたいんだってばよ」

しつこくサインをねだるナルトに雪絵は明確に怒りを表す。

「私のサインなんか貰ってどうする訳？ 結局どこかに置き忘れてほこりをかぶってるだけの、何の役にも立たない物じゃない！ 馬鹿みたい」

そう言い残して雪絵は町の方に走って行ってしまおう。ショックで固まったナルトは追いかける事が出来なかった。

事情を説明されたサクラは、カカシの案内で撮影現場に待機していた。

現場では主演である雪絵が逃げ出したことで、撮影がストップし全員が休憩を取っていた。そして、手荒な手段を取ってしまったことを謝罪するサクラに、雪絵のマネージャである三太夫が誤解を招くようなことをした自分に非があると返す。

スタッフとの顔見せも一応終わりかと思われた時、撮影スタジオで走り回っていた人物、うずまきシヤナが胸にたくさんの色紙を抱えて戻ってくる。

「シヤナ、はしゃぐのはわかるけど、程々にね。これ任務だから」

撮影スタジオに入るなり、色んな役者にサインをせがみに奔走。ようやく戻ってきたと言うわけだ。護衛対象の顔を覚え、逆に覚えてもらうには理想的な動きではある。

「後は、風雲姫の富士風雪絵さんのサインだけだつてばね」

「雪絵のサインは、難易度が高いぜお嬢ちゃん」

雪絵はサインをしない上に、ファンに塩対応で有名だ。それを忠告してくれたのは、この風雲姫シリーズの総監督であるマキノという老人だった。

一番最初にシヤナがサインをもらった人物である。

「噂は知ってます。でも、プライドの高い女優の富士風雪絵、私のイメージ通りです」

「ハハハ、そこまで言ってくれるファンは中々居ないだろうな」

マキノ監督にだけ敬語のシヤナ。火影や里の上層部にすため口や暴言の尽きない彼女を知る者が見れば驚くだろう。

シヤナの想像する富士風雪絵は、本人に近いイメージでそこが良いという。本来ファンをないがしろにすれば嫌われるはずだが、稀に本性そのものを受け入れるファンが現れる。

（こういう子は、大切にしなければいけない。それにしても、この子が木ノ葉の里一番の手練れとは、世の中映画よりも面白い事が多いもん

だ。こりやなんかに使えらって、勘が騒ぐな)

「おい、そういえば、出そう出そうと思つて没になつたキャラが居たよな」

「あ、ああ。そうですね。え、なんで急にそんな話を？」

その場のライブ感で映画を製作し大成功してきた監督は、自分の勘を信用している。

それを実行に移すために、隣の助監督と相談を始める。

監督たちが話し合っている間、サクラは壁に貼られた雪の国の写真を眺めている。そこには、綺麗な氷の絶壁が映っている。

「それは、雪の国の晶壁さ。なんでも雪絵のマネージャーの三太夫さんが言うには、春になれば虹色に輝くんだとか」

「虹色に？ すげい」

「だが、それはあくまで噂。あの国には春はこない」

「それってずっと雪つてこと？」

俳優の一人がサクラに説明するが、その言葉を否定するカカシ。過去に雪の国に行ったことのある彼は、雪と氷に閉ざされた国の事を語る。

すると、他のスタッフたちも雪の国について知ってることを教えてくれる。

「でも雪の国つてかなり貧しいんじゃないか？ 前の城主がカラ

クリ好きで、財政破綻したとか」

「まじかよ。暖房位あるんだろうな？ 俺寒い所苦手だぜ」

「だったらお前も雪絵みたいに逃げ出したらどうだ」

スタジオ自体は明るい雰囲気に含まれている。スタッフや俳優たちの仲もいいのだろう。唯一、主演である彼女を除いて。

「うずまきシヤナさん、少しお話いいですか？」

「え？ はい、何ですか？」

サイン色紙をファイルで保護したシヤナはリュックに大切そうに詰め込んでいると、助監督から相談があると呼び出されていた。その間にカカシとサクラと雪絵のマネージャーは、ナルトと雪絵の回収のためスタジオの外に出たのだった。

### 雪姫忍法帖3

ナルトとサクラのおかげで追手から逃げきれた雪絵は、服屋で服を購入後、夜のバーで酒に溺れていた。

何かから逃げるように、何かを忘れ去ってしまいたいかのようになり、酒を飲み続けていた。自分の首に掛かった六角形の水晶を眺め、臭い物に蓋をする様にすぐさましまおう。

「あ、見つけたってばよ」

「なによ、またあんた?」

「うわ、酒くさ」

ナルトがバーに入ってくる。その後ろから合流していたサクラや三太夫が入ってくる。

「雪絵様! 何をやっているんですか! もうすぐ雪の国行きの船が出てしまいます!!」

「三太夫……、私いかないわよ」

「何をおっしゃっているんです」

「だから、私、風雲姫を降りるって言ってるの。よくあるじゃない、続編で俳優が変わったりだとか」

どうしても雪の国に行きたくない彼女。グラスを片手に役を降りると宣言する。その言葉にマネージャーである三太夫が怒鳴る。

「だまらっしゃい! 雪絵様の他に風雲姫が務まるはずがありません! それに此処で降りてしまったら、業界で仕事なんてできなくなってしまうです」

「いいじゃない、別に」

「仕方ありませんね」

「え? あ」

全てを諦め、何が何でも逃げ出したいという態度が出ていた。時間が迫る以上、ここで説得を続ける余裕はない。

いつの間にか雪絵の背後に回り込んでいたカカシが、左目の写輪眼を使用。幻術で眠ってもらい、彼女を三太夫が支える。多少手荒だ



が、仕方がない。

そうして確保された雪絵は、ナルト達によって船へと運ばれるのだった。

少し場所を離れた雪の国。雪の国の城の一室では、城主である風花ドトウという大男が玉座に座りながら、部下の報告を受けていた。

彼の配下は、雪忍と言う特殊部隊であり全員が特殊な鎧を身に纏った精鋭である。大柄の男と女性、そしてそのリーダー格の男がドトウへ報告を行っていた。

「女優、富士風雪絵は、風花小雪であることは間違いありません」

「六角水晶も持っていたか？」

「はい。部下の報告から、間違いないかと」

「長きにわたり探していたがようやく、か」

さらに報告が続く。

「小雪には、あのはたけカカシが護衛についているようです」

「へえ、因縁の対決して訊ね。面白そうじゃない」

女性はカカシと因縁がある、リーダー格の男を見て笑う。だがリーダー格の男は深刻な表情でさらに続けた。ここからが大切な報告だからだ。

「そして、もう一人、うずまきシヤナが護衛についていると報告が上がりました」

「誰だそれ？」

大柄の男は情報に疎いらしく尋ねる。それを馬鹿にしたように女性が耳打ちをする。

「木の葉の青い閃光よ。聞いた事あるでしょ」

写輪眼のカカシに加え、青い閃光を護衛に付けているという話は、ドトウ達にとっていい話ではない。雪絵を狙っていることがバレる前に対策されたと考えるべきだろうか。雪忍たちは、精鋭ではあるが噂に聞くシヤナの実力が本物なら計画にとって大きな支障になる。

本来であれば。

「タイミングとしては、上々と言ったところか。だな？ グライア」  
ドトウの視線の先にあるテーブルで、酒と肉を食べている女性が居た。彼女こそ悪名高い女傭兵、グライアなのだ。大食なのか皿が何枚も積まれている。そして、容姿や服装が特徴的だった。

全体的に赤で紫のメッシュが入った特徴的な髪。それをハーフアップにしている。顔は目が覚めるような美人で、ブラウンな瞳で少し目つきが鋭い。身長は160前後で年齢は15歳くらいだろうか。服装が忍五大国や雪の国でも見ないような特徴的なもので、将校の軍服のようなデザインでマントを身にまとっている。更に右腕が見るからに機械の義手であり、肩と掌に陰陽のシンボルが備え付けられている。

これは過去にラビリンスと戦った際に切り落とされた腕を、雪の国の技術で作ってもらった義手で補っているからだ。彼女はドトウの言葉に目を向けるとにつこり笑う。

「せやで。何の問題もない。ウチが自分ら側についてるんやから、心配あらへん」

「しかし相手は青い閃光だ。お前の実力と言えども、信用ならん！」  
雪忍のリーダーである男が無責任なことを口にするグライアを嗜めようとするが、グライアの目がブラウンから青に変わる。そして、左手に持った現代で言うピストルランチャーのような筒がついた武器の引き金を引いた。すると筒から圧縮された高密度のチャクラがレーザーのように発射される。それを正面から受けてしまった雪忍のリーダーは、チャクラの鎧と言う雪の国独自の技術で作られた忍術幻術を無力化する装備で受け止めるも、あまりの出力の高さにチャクラの障壁ごと吹き飛ばされ壁に激突する。

「く」

「ナダレ！ グライア、あんたね」

リーダー格の男を庇うように前に立つ女性だが、グライアの青い写輪眼を見て恐怖からか足が震えている。ダメージを受けたナダレは、グライアを睨むも、攻撃した彼女は一切気にしていない。

「実力が心配や言うから、こうして納得させてあげたんやで？ 閃光

なんか、花火なんか知らんけど、ウチが相手したるいうてんねん。自分らは、自分の仕事の事だけ考えとき。それでええな、ドトウのおつちちゃん」

「ああ。その右腕にはかなりの金がかかっている。その分もしっかり働いてくれ」

「はい」

実力で相手を黙らせるのがグライアの処世術だった。異国育ちの彼女は、金で雇われれば国家転覆などにも力を貸し、好き放題暴れる存在だった。女で子供だったことで舐められることに我慢ならず、欲深く、他人の持つている物が欲しくなる悪癖を抱えた彼女は、まさに人の形をした災害。

自分の欲を満たすため戦い、奪い、滅ぼしてきた。破滅的な思考をしながら、人としての営みを理解し、溶け込もうとする異常者だった。

チャクラの鎧を障壁ごと吹き飛ばす銃火器と言う忍社会に無い武器を持ち込む彼女。過去に六道仙人が大陸を渡った際に作り上げた宝具であるチャクラ砲・護琉魂（ゴルゴン）を武器に戦う彼女。

世界を放浪しながらの目的は失った腕の再生とラビリンスへの復讐だった。そのため大金を払って海を渡ってきたのに、結果はラビリンスたちと入れ違い。

だが、暴れているときに雪の国の城主に雇われ、その対価に作ってもらった義手は儲けものだった。

（それに、青い閃光とかいう女、ウチと同じ目を持つとるらしいな。ラビリンス並みに楽しめる相手ならええんやけどな）

新しい腕を試すにはもってこいの相手だと、彼女は秘かに楽しみにしていた。

## 雪姫忍法帖4

カカシによつて眠らされた雪絵が既に出港した船の上で目覚め、その状況に声を上げる騒動の数十分前。

船は貨物船であり、映画のセットも兼ねており、朝から忙しく撮影の準備が進められている。そんな中特に忙しく動いているのが、メイクや衣装を担当する女性スタッフだった。

激しく駆け回りながら用意を整えていく。その熱意はもはや殺気と言つても差し支えなく、男性スタッフから護衛であるカカシとナルトも恐れる程だった。

「まさかこんなことになるとはね」

「まさかのまさかだつてばよ」

スタッフが大忙しなのは、急遽追加された登場人物のメイクの為である。そして、彼女たちの力作が完成し、スタッフの前にお披露目される。

「羅刹役のシヤナさん、準備終わりました〜」

スタッフに連れ出された人物は、ばっちりメイクを施され、黄色い着物を纏つたシヤナだった。状況に困惑しているのか、少し不安げで頼りない。だがスタッフたちがシヤナの顔を見ると「「おー!」」と声を上げる。化粧と髪型のせいか、20歳くらいの大人っぽい女性に見える。

そして、シヤナの姿を見た監督が自分の勘は間違つてなかつたと自慢げである。

「綺麗つすね。まさか想定してた羅刹のキャラピッタリつすよ」

「役に会う女優が居なくて没になったが、最終章の撮影でこんなぴつたりな娘さんが現れるなんて、やっぱりお天道様は見てるつてことだな」

「うわ〜、シヤナさん本当に綺麗。……カカシ先生? どうしたの?」

「いや、その大変身しててびっくりしてな」

カカシは、シヤナの姿を見て、物思いにふけていた。

(ミナト先生にも、みせてやりたかったな。あのちんちくりんが、もうこんなに立派に)

何故か娘が嫁に行く前の父親のような心境に浸るカカシ。思わず涙が出そうになるが、そもそもなぜこんなことになったかと言えば、昨日の監督の思い付きが原因である。

うずまきシヤナと会ってみて、この子は使えると思った彼は、風雲姫シリーズの没キャラを掘り起こし、彼女に役のオフアールを行ったのだ。

しかし、シヤナは乗り気ではなく「映画は好きだけど、自分が出たとは思わない。むしろ、自分が出たら作品が崩壊してしまう」と即断した。だが、決して譲らぬ姿勢で説得され続けたシヤナ。二時間も粘られたうえに、監督の作品の試写会への招待と雪絵のサインを確約されたことで、渋々承諾してしまった。

それからはあれよあれよという間に着飾られ、今の状態になっている。

そして、シヤナの準備が終わったタイミングで昨夜に拉致同然で連れてこられた雪絵が目覚め、大きな声で今の状況に突っ込んでいた。

雪絵は目覚めると、船の上で観念したのか台本を読みながらメイクを施されていた。やがて富士風雪絵は、誰もが知る風雲姫へと変わっていった。

そして、役に入り込んだ彼女は、もはや別人と言っていいだろう。唯一の問題である泣きの演技は、目薬で代用しているが、それ以外は本物と言える仕上がりがだった。

その様子に感動しているシヤナは、隣に座るナルト達にその感動を伝えている。

そして、いよいよシヤナの出番が来る。

演技は素人のシヤナが、どのような演技をするのかスタッフ一同も注目している。

(えっと、えっと、なんだっけ、監督に言われたことは)

すぐにセリフが出ず、危うくカットになるかと思われたが、シヤナは監督に指示された言葉を思い出していた。

『お前さんは演技はしなくていい。ただ、自分がどれだけすごいかを  
見せつけるだけで構わない』

風雲姫一行の前に現れた新たな敵、羅刹。それを演じるシャナ。  
役者たちに向き合うシャナの雰囲気が一変する。自分こそが強い  
と言わんばかりな強気な瞳で、風雲姫一行を獲物として睨む。

演技だと分かっているのに、役者たちは冷や汗をかき、向けられた  
殺気に戸惑う。

「風雲姫、それにその一行。其方らの活躍は聞いてはいるが、それもこ  
こまで」

「姫様御下がりくださいー！」

「ここは我らが」

俳優たちが演技に入り、武器を向けるが、その瞬間羅刹は目の前に  
おらず、瞬身の術で背後に回り込みながら、衣装の小道具である大き  
な団扇を風雲姫に向ける。

「!?」

「さらばじゃ風雲姫」

「そうはいきませんー！」

「まだ、目は死んでおらぬか。よかろう、決着はこんな狭い船の上でな  
くともよい。先に行って待っておるぞ」

振り下ろされた団扇を、風雲姫が剣で受け止める。そして、剣を払  
いのけられ、船の船首まで距離を取った羅刹。たがいに向かいあう風  
雲姫と羅刹。風雲姫と睨み合い、何かを察したのか羅刹が団扇を振る  
い、突風が発生し彼女の姿が消えるという場面でカットが入る。

「おおー」

「合成なしでここまでできるなんて」

「シャナさんお疲れ様です!!」

スタッフたちは、合成技術もなしに実力だけで映画の演出をやつて  
のけたシャナに感動している。瞬身や風遁を使い、優れた身体能力で  
場面を盛り上げた様は感動だろう。忍で言えば当然の技術でも、彼ら  
からすれば、魔法のように映った事だろう。

役者たちも本物の殺気や、現実離れた動きに終始気圧されてし

まっていた。

「これで、よかつたつてばね？」

「ああ。羅刹の強者の風格と風使いってキャラクターを完璧に表現出来た。それにもう一ついい事があった」

マキノ監督はシャナの演技を称賛した。寒気すら感じさせる存在感と自信を發揮したシャナ。映画を彩る要素としては完璧であったし、役になり切る才能があったのか、演技も問題ない。さらにいいポイントが、富士風雪絵に起こった変化だろう。

シャナとのシーンを撮り終えるなり、すぐに台本に目を通し、演技のイメージを改めて見直している。真面目に撮影に取り組む姿勢が見られ、スタッフも驚いている。

「どうやら、嬢ちゃんの演技が雪絵の役者魂を刺激したらしいな。あいつは、どう振舞おうが根っからの女優だ。それが画面から存在感を奪われそうになって、危機感から覚醒したんだな。おう、雪絵が燃えているうちに進めるだけ進めるぞ」

監督の想像通り、雪絵はシャナの本物の強さを見せられたことで、役者魂に火が付いた。主役は私であり、風雲姫としても役者としても負けられないのだと。雪の国に行くことを拒んでいた雪絵はおらず、いつも以上に役に入り込み、実力を發揮していく。

ただ問題は、ライバル判定されてしまったシャナが雪絵から役に入り込むため、役と同じく敵として距離を置かれたことだろう。雪絵の大ファンのシャナは、物理的に距離を取られ、話しかけられないことで深く絶望していた。

そして、一日の撮影が終わり、次の日の朝に問題が起こった。

## 雪姫忍法帖5

雪の国に向かう船は、突然目の前に現れた冰山によって進路を塞がれ、立ち往生していた。巨大な冰山が目の前にそびえたつ姿は、何とも幻想的でありながら、吹き抜ける風は冷たく彼らを拒んでいるようでもあった。

そんな絶景を見た監督は、映画の神様が舞い降りたと、このシチエーションを利用しない手はないと、上陸を決定。船の上から降りた撮影班は、それぞれが準備を行い、ナルト達は周辺を警戒しながら撮影を眺めていた。

寒さにも負けず、撮影に取り組む彼らを見ながら火遁で焚火を起こしているシャナが居た。シャナが手軽に火を起こせると知ると、スタッフたちが火を求めて群がっていた。

「撮影に、護衛に、火種って大忙しだね、お前」

「寒い寒い寒い。もつと着込みたいけど、この衣装の上からはおれないんだってばね」

寒さと格闘し、カカシがスタッフから貰ってきたココアを口にするシャナ。初めての極寒に心底震えている。

「風邪ひかないようにね。お前、風邪引くと一気に動けなくなるってヤマトから聞いてるから」

「ヤマト、余計なことを」

シャナと組むにあたってヤマトと偶然出会ったカカシは彼から、シャナの手綱の握り方を聞き出していた。基本的には自由にやらせる事、どうしても必要がある場合は、理由も添えて簡潔に伝える事。そして、シャナの体調不良についてだ。

年に一、二回ほど任務中に体調を崩したシャナ。体調を崩すと悪化しやすい体質なのか、いつも重病化してしまう。故に体調管理は、何よりも大切に行っているという。第四班は、もう一名も虚弱体質が居たのでなおのことだろう。

「無理はするなよ」



「わかってるってばね。あ、ナルト！ こっち来て」

「うああ、急にくっ付いてくるなってばよ。姉ちゃん！」

寒さに堪えきれなくなったシャナは、ナルトを招き、彼を後ろから抱き締める。ナルトはスタミナの塊であり、その影響か体温が高い。故にナルトを天然の湯たんぽにしてしまったシャナ。当然ナルトは抵抗するが、万力のような力ではがみ付くシャナを引きはがせない。体温と同時に弟を補給する傍ら、シャナは空を見上げていた。

未来視が発動したわけではない。だが、妙な胸騒ぎを覚えたのだ。

「姉ちゃん？」

突然シャナが黙り込み、空を見ているせいで、ナルトも心配になって声をかける。だが弟の声が聞こえないほどシャナの胸に込み上げる不安。何かが来るとシャナの第六感が警鐘を鳴らす。そして、それを裏付けるように、シャナの未来視が自動で発動。

何かの襲来を予知した。

「来る。カカシ!!」

シャナの叫びとほぼ同時に、冰山から視線を感じたカカシが起爆札付きクナイを投擲。爆発に撮影スタッフたちが唾然としている。

「何してんだあんだ!？」

「全員下がって！ 敵襲です」

カカシの警告と同時に爆発の中から、白い忍装束を纏った忍者が現れる。

「ようこそ雪の国へ」

「お前は」

現れた雪忍の男、狼牙ナダレの顔を見たカカシは、過去に彼と戦った事を思い出す。そして、一段と警戒を強めるが、雪忍は、彼だけでなく大柄の男性や女性も姿を現す。

「歓迎するわよ、小雪姫。六角水晶は持ってきてくれたかしら？」

「小雪姫だと?...ナルト、サクラ、雪絵さんを守れ、全員船に戻って!!」

雪忍の女性が何かに酷く怯えている雪絵を見てそう呼ぶ。その名に覚えがあり驚くも、冷静にナルト達に指示を飛ばす。スタッフたち

も事の異常さに気が付いたのか、船への退避を始める

シヤナにも命令を下そうとしたが、既にシヤナは飛び出している。高台にいる雪忍の女性に狙いを定めている。その手にはクナイが握られている。

衣装のせいで忍具を携帯できなかったシヤナは、傍にいたナルトから拝借した武器を手に先制攻撃を仕掛ける。

「火遁・鳳仙花の術」

「こいつ、役者じゃないのかい!!」

印を結び火遁で先制攻撃をするシヤナ。炎は、雪忍の持つチャクラの鎧が発生させる障壁によって相殺される。だが写輪眼でチャクラによって障壁を作っていると見抜いていたシヤナは止まらない。

まっすぐ向かってくるシヤナと距離を取ろうと女性は、鎧の背部にある翼を展開して空に飛びあがる。上空に飛ばれたことで攻撃が空振りする。

「水遁・燕吹雪」

「銅輪転生爆」

空に飛びあがった雪忍、鶴翼フブキは、印を結んで燕型の氷を発生。それを用いてシヤナに襲い掛からせる。上空にいるシヤナは、攻撃を回避できないと思われたが、泡遁の印を結んだシヤナ。燕の群れと泡の弾幕が衝突。

空中で爆発が起こる。

「奇妙な術を使うじゃないかい」

見たこともない系統の術にフブキは興味を引かれるが、空中と言う圧倒的優位に立っている彼女からすれば、シヤナのあがきも無意味だと思っていた。しかし予想は大きく外れる。

「粒遁・天空（てんくう）」

粒遁の粒子を集束し翼のように変化させ空を文字通り飛んだシヤナ。天翔による高速移動はあくまで直線に進むだけだが、天空は、長期の空中戦を可能とする術。コダマの飛行能力をモチーフに秘かに開発していた術で、空中の吹雪に接近。虚を突かれた彼女に接近戦を仕掛ける。チャクラの障壁によって粒遁の翼は消え去るが、ゼロ距離

に接近したシャナに翼は必要ない。

蹴りを叩き込み、体術は有効だと確認。続いて回し蹴りで敵の脇腹を蹴り、その反動を利用して一回転し反対側から殴り、相手の上に回り込んで腹部にクナイを突き刺したうえで、クナイの柄に回し蹴りを叩き込んだ。

「獅子連弾！」

「ぶはあ」

サスケの体術奥義をそのままコピーし、フブキを地面に叩きつけ、その命を奪う。クナイで腹部を突き刺されたことが致命傷となり、そのまま命を落とす雪忍。シャナは返り血で顔を赤く染めるが、本人は無傷である。

「よくもフブキをー！」

「止せ！」

突然仲間の命を奪われたことで激昂し、巨大アームの付いた大男が殴りかかろうとするが、ナダレに止められる。噂通り規格外の戦闘能力を誇るシャナを前に悪戯に攻撃を仕掛ける訳にはいかない。

そして、加勢しようにもナダレには、はたけカカシが襲い掛かってくる。その相手に追われ、シャナの相手までして居られない。接近してきたカカシとクナイでぶつかり合うナダレ。

「くっ、随分と威勢のいいのを仲間にしたようだなカカシ」

「運良くな」

クナイで何度も火花を散らせながら雪絵から遠ざけられる。それがカカシの狙いであり、主戦力のシャナとカカシで敵の殲滅、および味方が逃げる時間稼ぎをする腹積もりだった。残った大男も雪絵をガードするナルトとサクラ、そしてシャナを前にして前に出れない。

奇襲したつもりが、一気に追い込まれているのは雪忍たちなのだ。忍術に関してはチャクラの鎧で防げるが、シャナは接近戦も得意とするスピードタイプ。雪で足がとられるとはいえ、パワータイプの冬熊ミゾレでは、動きを見切れない。

だが、彼らにも威勢のいい仲間はあるのだ。

「フブキのお姉ちゃん早速死んでるやん。だから、言うたのに」

「また変なのが增えたつてばよ」

氷山の天辺から飛び降りてきた将校姿の女性。彼女は帽子を深くかぶっており、表情が見えないが、シヤナの足元に転がるフブキを見て嘆いていた。左手に謎の武器を持っているが、それが何かわからない。女性は、ザクザクと雪道を少しづつ下りながら、ナルト達に接近してくる。

女がニヤリと歯を見せた段階で、ナルトが動く。

「多重影分身の術！」

20人近くに影分身を行い、女に向かって一斉に走り出す。ナルトが得意とする影分身での攻撃と様子見だ。ナルトの影分身達が自分に迫ると、女は深くかぶっていた帽子を空高く放り投げた。紫で赤のメッシュが入った特徴的な髪が露になり、何よりも彼女を特徴づける青い写輪眼がナルトを捉えた。

(え、これって姉ちゃんの)

青い写輪眼は、姉しか見たことがないナルト。まさか2人目が居るとは思わず虚を突かれてしまう。その隙を見逃す相手ではない。女性には手に持った銃器をナルトの頭部に向け容赦なく引き金を引いた。

ピストルランチャー型の宝具から発射されたチャクラ砲は、ナルトの頭部を吹き飛ばし、背後にいた影分身達を貫通。実体を保てず煙になつて消える影分身。

残つた影分身達が手裏剣やクナイを投擲するが、彼女の身にまとうマントによつてすべて弾かれ、秒間10発に近い連射で放たれるチャクラ砲で数秒で撃ち抜かれる。写輪眼によつて正確無比に撃ち抜かれ、次はお前だと本体であるナルトに銃口を向ける女。人相手に撃つ威力ではない上に、弾速も速く、連射も利く武器に狙いをつけられれば、回避は忍でも難しい。

女は無慈悲に引き金を引き、銃口からチャクラ砲が発射される。

「粒遁・天刃」

メインウェポンであるチャクラ刀を持たないシヤナは、ナルトから借りたクナイに粒遁のチャクラを流し、仮の武器とする。そして、粒遁の刃でナルトに向かって発射されたチャクラ砲を正面から一刀両

断してみせた。

シヤナが弟を狙われたことに腹を立てながら、同じ青い写輪眼を睨むが、女は連続で十発もチャクラ砲を連射し、シヤナとナルトを襲う。ナルトとサクラそして雪絵を守るために前に出たシヤナは、粒遁の刃でチャクラ砲を斬って弾いていく。連続で発射されたチャクラ砲を捌き切る姿に女は感心している様子だった。

「これで終わり?」

「へえ。やるやん自分」

シヤナと女は相手の出方を探りながら、次の手を考えている。

「あんたも綺麗な目をしてるねんな。あの女にも似てるし、不愉快やわ」

「片腕持つてかれたんだって?」

女の言葉にかぶせるように、義手である彼女の過去を語るシヤナ。その言葉を聞いた瞬間、女の表情が一変する。

「あの女とおうたんか? あのくそ女剣士はどこや?」

「さあ」

銃口を向けながらシヤナを脅す女。シヤナは瞬き一つせずに、一歩女へと歩み寄っていく。

「力づくで聞きだしてみればいいってばね。ラビリンスに勝った私に、勝てればの話だけどね」

シヤナが宿敵の名を告げた瞬間、引き金を引いた女。銃口から発射されたチャクラ砲を首を数センチずらす事で回避し、踏み込んでいく。やがてシヤナの間合いになり、銃を持つ女の不利な距離となる。

限界まで距離を詰められ、首に刃を当てられる。だが、女は嬉しそうに笑うのみ。

「あんたがラビリンスに勝った? 冗談は程々にせなあかんで。お前には無理や」

「グライア。お前に無理でも、私には出来たんだってばね。あいつの雷牛彗星」

首に刃を向けながら、耳元でそう囁くシヤナ。シヤナらしくない相手への煽り。明確に悪意を持ってグライアに接する。対するグライ

アの目にも明確に悪意が宿る。

特にラビリンスの名が出てから機嫌が悪い。

「あの技の名前も知ってるってことは、本当にあの女に会ったんか」

「少し前に」

「ということは、あたしらの関係も聞いとるんやな？」

「だから？」

青い写輪眼持ちの不思議な繋がり。ラビリンスの繋がりを見る目によって紡がれた運命。5人の瞳術使い全員にある、血の繋がり。経緯はどうあれ、青い写輪眼使い全員は、姉妹という事になる。それぞれが持つ能力から、別腹の可能性が高いとは聞いていた。

そして、長女であるラビリンスの勘だが、次女グライアと三女シャナの相性は最悪だという事だ。

それを聞かされていたシャナは半信半疑だったが、グライアと出会ってみて理解した。

自己肯定感と全能感にあふれ、何よりも負けず嫌い。執念深く、恨みはどれだけの時間が経とうと忘れない。目を見ればわかる。

こいつは、似たタイプだという事が。

(だからこそ、気に入らない。私は此奴が嫌いだってばね)

(むかつくわあ。事実か確認する必要はないけど、ラビリン스에 勝ったって言うんやったら、手加減はいらん)

銃を下したグライアの様子を窺っていたシャナ。だが、自動で発動する未来視によって、自分の胴体が吹き飛ぶ未来を見て、顔色が悪くなる。銃使いのグライアに有利な距離を取ったと思ったのは間違っていた。

本能からくる回避行動によって後ろに大きく飛ぶと、シャナの立っていた位置を刃渡り3m、幅1mの壁のような剣が通り過ぎた。

人の扱うサイズではない剣を義手による怪力で振り回したグライア。更に銃を持っていた左手には、鞭のような武器が握られている。それらの武器は口寄せの術によって彼女の手元に現れていた。

これまで戦ってきた青い写輪眼使いは、全員特殊能力による戦法を主にしていた。だが、グライアは違うようだ。

(こいつは、忍術を使う、忍者相手の戦い方を知ってるやつだ)

自分と同じ忍術使い。それがグライアだ。元々は忍術のない文化圏育ちだが、雪の国に来たことで、数日で忍術について理解し、会得してしまった。自分の欲に貪欲であり、知識欲を満たすために、修行なく忍術をマスターした。

それがグライアを国際指名手配前よりも遥かに成長させる原因になっっていた。

「自分、名前は？」

「シヤナ。うずまきシヤナ」

巨大な剣を振り上げ、鞭を構えるグライア。彼女を正面から迎え撃つべく粒遁の刃を通常の二倍近い刃渡りにするシヤナ。

「私がお姉さんやろうからな、妹に先手は譲つたるで」

「姉面すんなってばね」

グライアの挑発に乗り、シヤナが駆け出す。

## 雪姫忍法帖6

鞭と大剣という異色の武器使いとシヤナが戦闘を開始。シヤナにも一切余裕がないのか、ナルト達からグライアを引き離すことで手一杯。

雪絵を逃がそうとするサクラとナルトだが、冬熊ミゾレがスノーボードの様なものを使い雪道を滑走してくる。そして、雪絵は雪忍たちの姿を見て恐れからか、動けないでいた。

「どけ小僧！」

「どかねえってばよー！」

雪絵を守りに前に出たナルトがクナイを投擲するがチャクラの障壁に弾かれ、巨体のミゾレによって殴り飛ばされてしまう。ナルトを排除し、雪絵を狙って腕に付けたアームからワイヤーを発射。それで捕獲しようと試みるも、サクラが前に出て攻撃を阻止。ならばと腕力で圧倒しようとする。

クナイを構えるサクラだが、実力差から守り切れる可能性は低い。

「姫様!!!」

「三太夫、まさか、あなた」

雪絵を避難させようとマネージャである三太夫が駆け寄るが、その顔を見て雪絵は何かを悟る。自分を姫と呼ぶこの男の正体が何であるかを。すつと足の力が抜け、動けなくなる雪絵。

だが、それを好機とミゾレが猛スピードで接近するが、先程吹き飛ばされたはずのナルトが赤いチャクラを放ちながら接近。

スノーボードの速度を超え回り込んだ彼は、巨体のミゾレとがっつり組み合う。

「なんだ、この力」

「ぜってえ、手は出させねえってばよー！」

遙かに小柄であるナルトにパワーで押されるミゾレ。ナルトは九尾のチャクラを引き出し、瞳が紅く変色していた。不気味な力を使うナルトを警戒し、彼が距離を取ると、遠くで水遁と氷遁で撃ち合っ



いたカカシが合流する。

「無事かナルト」

「う、うん。けど、先生、アイツらの鎧なんか変だつてばよ」

「あれはな」

カカシの言葉をカカシを追ってきた雪崩が遮る。

「これは、チャクラの鎧だ小僧」

「チャクラの鎧？」

「そうだ、チャクラの鎧は、装着者のチャクラを増幅し、様々な術を強化してくれる。体の周りにはチャクラの壁が作られ、貴様らのチャクラを無効化する。つまり、どんな忍術、幻術も通用しない」

「出鱈目だつてばよ」

「真実だナルト。だが、俺の知っている奴より、遥かにパワーアップしている」

カカシもナダレ相手に有効打がないらしい。ナルトとカカシの二人とナダレとミゾレが向き合い、戦況が膠着する。その隙に逃げねばとサクラと三太夫が雪絵を起こそうとする。

「姫様早く船へ。このままでは御命が」

「嫌よ！ 死んだつていい！ 絶対に雪の国になんかに行かない！」

酷いパニックとストレスからか雪絵は意識を失ってしまう。無理にでも運ばねばと三太夫とサクラが雪絵の体を支えながら船へと向かう。だがそうやすやすと逃がしてくれる雪忍ではない。

「氷遁・一角白鯨」

「デカイ。逃げろサクラ、ナルト！」

雪崩が印を結ぶと、海から巨大な氷の一角が現れる。かなり大規模な氷遁で質量によって相手を叩き潰すものだろう。空高く飛び上がった一角がカカシ達に迫る。

「最後まで撮り続けろ！ 写真屋の意地を見せてやれ！」

船に逃げるスタッフたちだが、何故かカメラは回し続けており、戦闘を撮影していた。だが、彼らは十分逃げられる位置にいる。しかし、ナルト達は危険だ。

ナルトは横で影分身を使い、螺旋丸を作成、カカシも雷切の構えを

取り、どうか一角白鯨を相殺しようと思っていた。

しかし、空高く飛び上がったはずの一角は、瞬時に黒い炎に包まれ、地上で発射された光線によって撃ち抜かれ、瓦解する。バラバラになり、黒い炎によって氷でありながら燃え尽きた白鯨。何事かと一同が視線を炎と光の出所に向けるが、地響きと共に何度も激しい衝撃波が彼らを襲う。

「グライアの奴！ うおおお」  
「くそ」

そして、丁度雪忍たちの真上の氷山が崩れ、雪崩が彼らを飲み込んだ。

「今のうちに引くぞナルト」

「わかったってばよ！」

影分身で人数を増やしたナルトが、サクラや雪絵、三太夫を抱えて船へと避難を開始する。殿になったカカシは、先程の攻撃とチャクラから、シヤナがヒートアップしていると悟り彼女の帰りを待つ。だが、船は就航し、距離を取ろうとしている。このままカカシが残ったとしても、ナルトとサクラでは雪忍の相手は出来ない。

やむを得ず、シヤナを置いていく決断をするしかない。

「カカシ先生！ 姉ちゃんは」

「あいつはまだ戦闘中だ。だが、すぐに戻ってくるはずだ」

「そんな！ え、なんだってばよ、あれ」

カカシが海面を走り抜け船に乗り込むと、先程まで戦場となっていた氷山に無数の光の矢の雨が降り注ぎ、次には黒い炎が全てを包み込んだ。逃げて居なければカカシも危なかっただろう。

(シヤナ、大丈夫なのか)

ナルトには問題ないと言いながらも、やはり残るべきだったかと考えがよぎる。

黒い炎によって松明のように燃え上がる氷山。その中で何度も黒い炎やチャクラ砲、光の矢や粒子砲が交差している。だが、一際豪快な爆音と衝撃波が出航中の船を震わせる。

船が大きく揺れ、転覆するかと思われた。

「うわああああ」

「神さまああ！」

「監督う!!」

「振り落とされるな！　そして死んでもカメラを手放すな」

船に掴まりながら、冰山を見たカカシは、冰山の中でぶつかり合う二体の須佐能乎を目にする。写輪眼持ちのカカシにしか見えないが、6本の腕を持つ須佐能乎と三叉槍を持った須佐能乎が激突し、衝撃によって冰山が崩れ、海の藻屑へと変わった。

どっちが勝ったのかもわからず、シャナの安否が不明となる。誰もが息を？んだとき、空から何かが船のマストを直撃。すると滑り落ち、床に転がった。

追手かと思ひ、カカシがクナイを構えるが、床に転がり汗だくになり肩で息をしているシャナを見て、緊張がほぐれる。

「無事だったか。まったく、心配かけてくれるなお前達姉弟は」

「ぜえ、ぜえ、ほんきで、しぬかと、おもった、つてばね、みず、ちよう、だい」

「あ、はい。これ飲んでください。後、兵糧丸も一緒にどうぞ」

雪絵を安静な場所に寝かせ戻ってきたサクラは、ボロボロになっているシャナに水筒と薬を渡し、習いたての医療忍術でシャナの怪我を治療をすると言ひ始める。

軽い怪我なら治療できるといふ彼女を信じてシャナも身を預けている。少し落ち着いたところで、カカシはシャナからグライアの話の聞き出した。

## 雪姫忍法帖7

少し時間をさかのぼり、戦闘を開始したシヤナとグライア。粒遁の刃は鋼鉄であつても熱で切り裂く必殺の刃。故に巨大な剣を盾にするグライアを剣ごと両断しようと企んだ。

しかし、シヤナの刃は、グライアの義手が展開する高密度のチャクラ障壁によって打ち消される。雪忍よりも遥かに出力の高いチャクラの鎧義手によって、通常のクナイでの戦闘を強いられてしまう。だが速さで圧倒すればいいと、巨大な剣を盾にシヤナの攻撃を防ぐグライアに肉薄する。

金属と金属がぶつかり合う。巨大な剣と鞭と言う接近戦には不利な装備のグライアを持ち前の機動力で押していくシヤナ。だが、シヤナの写輪眼は、口元に笑みを浮かべるグライアをしつかりと捉えていた。

(何か来る)

シヤナの予想通りグライアの巨大な剣が、本性を現す。彼女のチャクラによって赤く発光した剣は、幾重のパーツに分離、重力に逆らつて無数のプレートがグライアを取り囲む。

「剣じゃないのか」

「誰も剣なんて言うてへんで、これはウチのお気に入りの一つやで」

柄だけを残して宙に浮かぶ無数のプレート群になったグライアの武器は、彼女の意思に応えるように高速でシヤナへと飛来する。磁遁に似た能力で、シヤナに襲い掛かるプレート。これも遺跡から彼女が発掘した宝具である。持ち主の意思で自由自在に組み合わさり、盾にも剣にも飛び道具にもなる万能の武器、須天王。

「くそっ粒遁・天輪」

近距離戦を挑めば、プレート群に四方八方から襲われるため、後ろに引いたシヤナは、チャクラの障壁を貫通できると未来視で知った天輪の印を結ぶ。生半可な威力では防がれるが、最大限チャージすればグライアを倒せると知った。

様子見をするグライアはシャナの邪魔をしなかった為か、一撃必殺の最大チャージした粒子砲を放つことに成功。

「踊りや、獲恤」

粒子砲に対して鞭を振るったグライア。只の鞭に亜音速で迫る高温の粒子砲を受けきれないはずがない。当然ただの鞭ではなかった。グライアの鞭は、粒子砲に触れるなり、それを吸収。鞭が変化し、シャナの粒遁と同じ物質を纏う鞭に変化する。

それをシャナに向かって振り回す。

(これは、まずい)

身をかがめて鞭を避けたシャナだが、髪の毛を鞭に切られてしまう。鞭によって腰までであった髪が肩までの長さにされ、グライアを睨む。

「粒遁やつけ？ これええな」

粒遁の威力を楽しむように鞭を振り回すグライア。鞭の扱いは達人級で触れただけで氷山が真つ二つになり、人体など紙のように切り裂いてしまう武器を振り回し、シャナを追い込んでいく。

シャナは写輪眼で鞭の軌道を見切りながら回避に徹する。迂闊な攻撃で敵の武器を強化してしまい、緊急に対策を練らなければいけない。

グライアの振るう鞭は、触れたチャクラを吸収し、その術の性質に変化するという性質を持っている。だから遠距離攻撃は、鞭に吸収され、今のように鞭の威力を底上げしてしまう。

近距離は、無数のプレートによる防御と攻撃の雨、中距離は、鞭による休みのない攻撃、そして更に更に距離を取れば。

「なら、護琉魂や」

シャナが鞭の攻撃を回避していると、十分な距離を取れたため、再び銃を用いて射撃を開始するグライア。遠方から一撃必殺級の射撃が連射されては、シャナでも回避しきれない。

「粒遁・天翔!! 影分身の術」

チャクラ砲の連射を、青い閃光となった高速移動で空中に回避。更に影分身を使用し、3人に分身する。空中に飛んだシャナを写輪眼で

捉えていたグライアは、その速度に驚くが、反応できない訳ではないと高を括っていた。

だが分身したシャナがそれぞれ違う術を使ったことで、動きが変化する。

「火遁・業火滅却」

「銅輪転生爆」

「粒遁・天輪」

咄嗟に出せる最大火力で3つの属性を放つシャナ。グライアは、その段階で粒遁・天輪のみを同じ属性になった鞭で弾き、残った泡遁の絨毯爆撃を展開したプレートで相殺。残った高火力の炎を右腕のチャクラの鎧で受けとめる。

雪原を全て包み込むような火力に包まれながら、チャクラの障壁によつて身を守るグライア。

(一つの属性しか盗めへんのバレたか)

相手の術を盗む鞭。だが、当然弱点もあり、術の規模や数によつては吸収できない。特に複数の属性での同時攻撃であれば、どれか一つしか一度に盗めない。どの術を保持するかは選べるので、強力な術を吸収すればそれを保持するのが正解だろう。

だが、初見でその弱点を攻略してきたシャナに対する警戒心が強まる。

「けど、甘いで、ええ術なんやけど、私の右腕は特別やさかい、チャクラの無駄遣いや」

通常のチャクラの鎧なら業火滅却で貫通できたかもしれない。だが、グライアの義手は、放浪の中で見つけた古代遺跡の発掘品を幾つか流用した特注品。特に出力に関しては、雪忍のものよりも4世代は進んでいる代物だ。

「ん？ っほっかはっ、？ しもた！」

チャクラの鎧で身を守っているはずなのに、急に眩暈が起こり、息苦しさが彼女を襲う。何十秒も周辺一帯を炎に包まれていれば、当然、酸素が無くなるのだ。知らずのうちに酸欠状態に追い込まれ、それが狙いだと気が付いたグライアは、展開したプレートを組み合わせ

スケボーのような足場にして、空を飛ぶ。一刻も早く酸素を確保せねばと炎を抜け出す。

「待ってたってばね。粒遁・大玉螺旋輪虞」

先見の写輪眼でグライアが炎からの脱出に選ぶポイントを把握していたシヤナ。すでに巨大な螺旋輪虞を作り上げ、絶好のタイミングでジャンプし酸素を求めて飛んできたグライア目掛けて、それを叩き込んだ。

炎で視界が悪い中、突然上からたたき込まれた大玉螺旋輪虞。その破壊力を正面から受け止めてしまったグライア。チャクラの鎧の障壁が瞬時にひび割れる。

「やってくれるやんけ!!」

自分のチャクラを義手のコアに流し、チャクラの障壁を強化していくが、遅い。一度ひび割れた障壁を修復は出来ない。一点集中の破壊力の前に障壁が砕け、グライアの体は地面に叩きつけられるように飛ばされ燃え盛る炎へ落ちていった。

影分身を消し、地面に着地したシヤナ。高火力の出し続けで息切れしながらも、炎に包まれたグライアの最期を看取る。

「むかつく、せつかく、伸ばしたのに……」

短くなってしまった髪を触りながら、柄にもなく悲しんでいた。理由があつて伸ばしたわけではない。ただ、好きであこがれの人を真似ただけだ。なのに、泣きそうになる。自分の感情が理解できず、困惑するシヤナ。

「安心しいや、すぐに首も落としたりさかい」

「お前、まだ」

炎の中から平然と脱出してきたグライア。大玉螺旋輪虞を受けながら、衣服が少し破れただけで本体にダメージが入っていない。

「プレートと鞭を犠牲にして耐えたってばね?」

軽傷な理由は明白だった。シヤナの大玉螺旋輪虞を二つの武器を犠牲にして、威力を殺したのだ。チャクラの鎧に二つの武器を犠牲にし、さらにクナイ程度なら簡単に弾ける素材でできた軍服で防ぎ切ったのだろう。

その証拠に、グライアの持つ鞭は、柄しか残っておらず、厄介なプレートも元は100枚近くあったのに3枚しか残っていない。

「そうやで」

「じゃ、残ったのはあの筒だけだつてばね。すぐに終わらせてやるつてばね」

残る武器は、チャクラ砲を連射する無茶苦茶な筒だけ。それさえ攻略すれば、グライアは丸裸も同然。右腕の義手も所々ひび割れ、破損している事から先程の防御力を発揮は出来ないはず。

そう思い何かをされる前にクナイで首を搔つ切つてやろうと前に踏み出すが、シヤナの写輪眼は、不審なグライアの動きを目で追う。何も持っていないかった掌で壊れた義手を撫でれば、義手の傷が無くなる。さらにプレートを撫で、最後に鞭の柄を撫でる。

義手と同じくバラバラになっていた武器が時間を巻き戻すように再生する。再び無数のプレートと属性を纏う鞭をシヤナの迎撃に当てるグライア。

「くっそ、お前の能力、御年神か」

プレートの攻撃を後ろに飛んで回避、中距離になり鞭の連打が迫るが、冷静に粒遁の刃を纏わせたクナイで弾いて飛び跳ねながらグライアを観察する。

「御年神言うん？ 覚えとくわ」

鞭とプレートでの攻撃を止めたグライア。その両目は、ターゲットスコープのような模様の万華鏡写輪眼へと変化している。その両目の内どちらかの能力なのだろう。シヤナと同じく時間を戻す御年神を宿しているのは。

相手が万華鏡になった段階でシヤナも万華鏡写輪眼を発動。瞳術での戦いには瞳術で対応するのがシヤナの対写輪眼のセオリーだ。

「自分は歯車か。いろいろ模様が違つておもしろいやね万華鏡写輪眼言うんわ」

「基本は千差万別だつてばね」

万華鏡を使われる前に倒せる予定だったのに、グライアの想定以上のしぶとさに、チャクラの残りが半分を切つてしまっているシヤナ。



何度もチャクラ砲を放っているグライアは疲れた様子もない。それどころか常時チャクラ量に変化が見られない。

現在消費したチャクラ量だけでも、ナルトのチャクラ総量を超えているはずなのにだ。並外れたスタミナの弟よりも圧倒的にチャクラが多いというのだろうか。

何か種があると思い、その真相解明のため、シヤナは先見の万華鏡写輪眼の発動に踏み切ったのだった。

## 雪姫忍法帖 8

未来視をフルに使う先見の万華鏡写輪眼の発動は、シャナの命を救う英断と言わざるを得なかった。

発動と同時に、グライアが左目にチャクラを集めている事を察知。彼女の目から血の涙が流れ始める。

(やばい！)

シャナは危機的状況を察知し、全力で横に走り始める。シャナが動くと同時に、シャナの先程まで立っていた位置に黒い炎が発生。勢いよく飛んだ黒い炎は、背後の氷の壁に命中すると激しく燃え始めた。そう氷が燃えたのだ。熱で溶けるでも蒸発するでもなく燃えた。燃えた後に蒸発はするが、明確に本来燃えない筈の氷が燃えている。未来視で自分がそれを食らい、消えない炎によつて焼き殺される光景を見たシャナ。どうにか完全な不意打ちを回避する事が出来た。だが、グライアは距離を取っているシャナを仕留めようと、左目の瞳術、全てを焼き尽くすまで決して消えない黒炎を発生させる術『天照』を発動し続ける。

術者の視界の中でピントを合わせるだけで黒炎を発生させられる術で瞬身の術まで用いて高速で移動するシャナを追っていく。シャナの動きが早く、なかなか捉える事が出来ないが、周囲に引火した黒炎が徐々にシャナの逃げ場を奪っていく。

逃げ続けても、やがては逃げ場が無くなってしまいうだろう。氷山が少しずつ黒炎に吞まれ始める。氷の壁を盾にし、逃げるだけでは勝てないと判断したシャナは素早く印を結び粒子で構成された弓を空に目掛けて構える。

「粒遁奥義・天弓!!」

通常の粒遁よりもチャクラの消費量が多いが、抜群の制圧力を誇る新術を空に放つ。天に放たれた矢は、雲の上で無数に分裂を始め、それらが一齐に戦場に降り注いだ。

空から降り注ぐ矢の雨。グライアは警戒しながら自分の半径1m

範囲にチャクラの障壁を発生させ、それらを防いでいく。幸い範囲攻撃の為に威力は低い。粒子の矢は、障壁に弾かれてしまう。

だが、あまりに降り注ぐ矢の数が多く、グライアの視界は、光と舞い上がった雪で殆どゼロだった。

（この技は、煙幕の代わりか？ いや、それにしても、何をしてくるか想像ができへん）

シャナが忍である事は理解している。だからこそ、無駄に術を使う女ではないとプレートと障壁の内側に展開。360度どの方向からの攻撃も防ぐ万全の構えをとる。さらに鞭を蛇腹剣のように収縮し、接近戦用の武器を作る。

やがて、矢の雨がやみ始めた時、グライアの障壁を幾つもの爆撃が襲う。しかし、障壁の内側にプレートを張り巡らせたグライアの防御力は鉄壁。生半可な術では突破は不可能と言える。範囲や応用性に関して、やや劣るもののラビリンスの結界術にすら匹敵すると自負するグライア。

だが、シャナの狙いは、その防御を貫くことではなかった。

突然、グライアの足元の雪が盛り上がり、地面からシャナが飛び出し、クナイが油断していたグライアの首を狙う。

「くっ!!」

足元に注意を払っていなかったグライアの間隙をついた奇襲攻撃。奇しくも万華鏡写輪眼の動体視力により、首を切り裂かれる前に身をよじって回避。不安定な体勢ながらも、蛇腹剣でシャナに反撃を仕掛けようとする。

「螺旋丸」

「ぎゃあアア!!」

しかし、チャクラの障壁の内側に入り込んだシャナ。障壁の内側であれば、術を無効化されない。雪を掘り進み、障壁内に入ったシャナは最速で発動可能な螺旋丸を作成。カウンターよりも早く、グライアの腹部に螺旋丸を叩き込み、彼女の体をその威力で吹き飛ばした。

螺旋丸の直撃は、グライアの鎧のような軍服をもつてしても防げず、衣服が裂け、明確なダメージを与えている。

雪のクッションによって致命傷にはならなかったが、それでも一撃入れられたのはデカい。

雪でうずくまっているグライアが恨めしそうにシャナを睨み付ける。

「随分可愛い悲鳴だったばね」

「う、ぐ、く、殺す！　ぶち殺したるわああああ!!」

怒髪天と言った様子のグライア。須佐能乎を発動し、巨大な三又鉾を持った巨人を生み出す。うちは一族の持つ最大級の奥義である須佐能乎を相手にするには、シャナも同じく須佐能乎を使う他なかった。

シャナの六本腕の須佐能乎と三又鉾を縦横無尽に振り回す須佐能乎の激突。その衝撃波だけで周辺の氷山が崩れ始める。

(こいつ、強い)

須佐能乎は、何方にとつても切り札である。しかし、素早い槍捌きで連撃を仕掛けるグライアと多腕から繰り出す連撃で迎え撃つシャナ。二人とも攻撃力や手数と同じで、決定打にかける。

二人ともその事実は理解済みで、隙を窺いながら須佐能乎で繰り出せる最大火力の為のチャクラを練っていく。

必殺の一撃を放つ準備が整ったのは同時であり、互いに大きく後ろに飛んで距離を取る。

「粒遁・須佐能乎螺旋輪虞」

「トリシユーラ!!」

シャナの阿修羅型の須佐能乎が3本の腕でようやく抱えきれ程の螺旋輪虞を作成し、投擲。対するグライアの須佐能乎は、三又の鉾が彼女のチャクラで発生した竜巻を纏い、それを投擲。

巨大な螺旋輪虞と嵐を纏った鉾の激突は、周囲のものすべてを吹き飛ばす規模の爆発をおこした。

「あかん！」

「くそ、足場が」

互いに火力勝負を仕掛けたが、二人の技が衝突した余波で足場にしていた氷山が遂に崩壊。二人ともバランスを崩し、巨大な氷山が崩れ

上から降り注いでくる。

このまま戦い続ければ二人とも極寒の海に沈んでしまうだろう。不本意ながらも仕切り直すしかないと察する。先に須佐能乎を解除したグライアは銃口をシャナに向けながらも、すぐにその場から逃げ出した。

「次は殺すつてばね」

シャナも早く逃げなければと須佐能乎を解除し、粒遁・天翔の印を結んで上空へ急加速。空から船の場所を確認し、其処にもう一度、天翔で接近。船のマストにぶつかる形で合流したのだった。

何が起こったのかを説明したシャナは、サクラに傷を治療してもらいなり、与えられた部屋のベッドで泥のように眠ってしまった。身体的にも精神的にも疲労困憊だったのだ。さらに須佐能乎の代償も当然シャナを襲い、気絶するように眠ってしまったのだ。

グライアとの戦闘の話を聞いたカカシは酷く深刻な表情となる。

「姉ちゃんがあんなにボロボロになるなんて」

一方でナルトもショックだった様子。

「それだけ強い相手だったという事だ。お前やサクラはあのグライアとかいう女を見たら絶対に戦うな」

「けど、それじゃ」

「断言する。あの女は、俺よりも強い。シャナでなければ、相手する事すらできないだろう」

力の差は歴然だ。今回はたまたまシャナが同行したおかげで、拮抗したが、シャナが居なければあの場で全員殺され、富士風雪絵は連れさられていただろう。

「そうよ、ナルト。シャナさんと互角かそれ以上の相手に無理に挑んで死んだらどうすんのよ」

適材適所と言うものがある。ナルトは納得がいかない表情だが、従うしかない。忍において実力差は、そのまま生死に関わる。命を張るべき場面は、確かにあるが、その時が来るまでは生きざたなくても生き残る選択をするべきなのだ。

その後、今後の話をするため、気絶した雪絵とシヤナが目覚めるまで、3人は見張りをしながら夜が明けるのを待ったのだった。

## 雪姫忍法帖9

前日の戦いの疲れが取れぬまま、目を覚ましたシヤナ。ちょうどサクラが呼びに来たところだったので船の一室に集められた。

事情を聴くためだ。明らかに相手は、映画の主演女優や撮影スタッフに襲い掛かってきたわけではない。

全てを知っているのは、雪絵のマネージャーである三太夫只一人だろう。

全員の視線に耐えながら、三太夫は、明らかに彼女を睨んでいる雪絵に申し訳なさそうに事の顛末を話し始める。

女優富士風雪絵は、偽名であり本当の正体は、雪の国の先代当主の娘、風花小雪であるという。彼は先代の家臣でありクーデターによって雪の国を乗っ取った風花ドトウを倒すべく、雪の国から逃げ延びた小雪を探していたという。

そして、ようやく小雪が富士風雪絵と言う名の女優として生きていることを知った彼は、雪絵のマネージャーになり、こうして雪の国に連れ帰る事が目的だったのだ。

映画撮影云々も、雪絵をこの国に連れてくるための口実に過ぎなかった。

利用してしまったことについて土下座しながら詫びる三太夫。だが、どうしても雪絵と共に雪に国を取り戻さなければいけないかったと告げる彼の切羽詰まった様子には誰も何も言えなかった。

雪絵こそが彼らにとっての希望であり、明日なのだ。

彼は雪絵に対して再び頭を深く下げ、懇願する。

「小雪姫様、ドトウめを打ち倒し、この国の新たな主君となって下され!! この三太夫、命に代えても姫様を御守りいたします! どうか! どうか!!」

雪の国の民を救うため、共に立ち上がってくれと言う三太夫。その言葉を隣で聞いていたナルトは、既にやる気満々のようだ。明らかに任務の範疇を超えた仕事になるが、三太夫の話聞いた今彼には、彼

らを放っておくという選択肢などない。

「ここはみんな一丸となってドトウを打ち倒すと信じていた。

「嫌よ、そんなのはお断りよ」

「しかし、雪の国の民雄が」

「そんなの関係ないわ。お断り」

雪絵の言葉は誰よりも冷たかった。雪に閉ざされたのは国だけでなく、雪絵の心もものだ。

「いい加減諦めなさいよ。あんたなんか頑張ったってドトウに勝てる訳ないじゃない！ 馬鹿じゃないの！」

「諦めろなんて、簡単に言うんじゃないよ。このおっちゃんはその命をかけて夢を叶えようとしてんだ。馬鹿呼ばわりする奴は、俺が絶対許さねえ！」

「ナルト君……」

何があるうとお断りだという雪絵の言葉と態度に、ナルトが机を叩いて立ち上がる。ナルトの言葉と三太夫の言葉に感銘を受けたのか、監督であるマキノが語り始めた。

「諦めないから夢は見られる。夢が見られるから未来は来る。ふん、いいね。風雲姫完結編に相応しいテーマじゃねえか」

「監督？ まさか撮影続けるつもりですか!?!」

「だから言ったじゃねえか、この映画化けるって、考えてもみろ。本物の姫様を使って映画を撮るなんて、そうあるチャンスじゃねえだろ」  
「ちよつとー」

監督の言葉にスタッフたちも大きな賭けだと理解し始めているらしい。雪絵だけが周り意見が食い違い、酷く狼狽えている。

さらに追い打ちをかけるように護衛である力カシは、既に選択肢は一つしかないと告げる。敵に正体が知られた以上、逃げ切るのは不可能。ならドトウと雪忍を倒すしか道はない。

もう逃げる事はできないと宣告された雪絵の表情は、絶望の底にいるようだった。息をしているはずなのに、呼吸ができないような息苦しさに倒れそうになる。

「よっしや！ 風雲姫は雪の国に帰って、悪の親玉をぶっ飛ばす。



ハッピーエンドだってばよ」

そんな彼女の味方はいなかった。一人を除いては。

「行くか行かないかを決めるのは雪絵さんだつてばね。マネージャーのおじさんや雪の国の民がどうか、それが雪絵さんの命をかける理由にならなくない？」

シヤナだけが雪絵の肩を持つ。満場一致と言った空気が少し変わっていく。

「シヤナ姉ちゃん何言ってるんだつてばよ。三太夫のおっちゃんの話聞いてなかったのかつてばよ」

「聞いてた。だから、なんでその人の夢の為に、雪絵さんが危険な所に行かなきゃならないんだつてばね？ それに彼女は騙されて連れてこられた。勝手につれてきてもう逃げ場がないから、戦ってくれ？ あまりにも虫が良すぎるつてばね」

「なんで、そんなこと言うんだつてばよ！ それに風雲姫の姉ちゃんだって、本当は」

ナルトがシヤナの言い分に腹が立ったのか、ズイズイと雪絵に向かって歩いて行く。シヤナは雪絵を庇うようにナルトの前に立つ。

「それに私たちの任務は、撮影の護衛だつてばね。あえて護衛対象を危険地帯に進ませるのが、護衛のやる事だつてばね？」

「そうはいうが、敵に狙われている以上、俺達は逃げる事は出来ない。これは事実だ」

「私なら、雪絵さんを連れて逃げる事も出来るつてばね。雪絵さんが狙いなんだから、映画スタッフの皆さんも少しは安全だと思うけど？」

シヤナは、自分の力なら雪絵を逃がせると宣言する。しかし、シヤナの消極的な態度に業を煮やしたナルトが、彼女の襟首をつかんで怒鳴る。

「そんなこと言つて、姉ちゃんは本当はこえーだけなんだろ！ あいつが強くてもう戦いたくないつてなつてただけだつてばよ!! また、つえー奴がいたら逃げて、何度も逃げるのかよ。俺は、そんな姉ちゃん、見たくなかつた」

グライアとの戦闘で負傷したシヤナ。それ故に逃げているのだと憤る。ナルトの中でシヤナは、常に最強だった。だから、そんな腑抜けた姉を見たくない。その思いでいっぱいだった。弟から見損なわれているシヤナだが、『馬鹿ね』と言いながら、ナルトの腕を捻りあげる。折れる寸前まで捻りあげられたナルト。

「う、ぐう」

「シヤナさん、折れちゃう！ やめて!!」

サクラが制止しようとしたが、シヤナはナルトの胸部に小さな螺旋丸を食らわせ、壁まで吹き飛ばした。威力を抑えられているとはいえ、ナルトは胸を押さえて動けなくなってしまう。流星に部下を攻撃されたとあつては、カカシもシヤナ相手に武器を向け得ざるを得ない。

「落ち着けシヤナ」

クナイを向けられ、カカシに威嚇される。だが、シヤナはカカシの威嚇を無視する。サクラに介抱されているナルトを見下ろしながら、シヤナは言葉を紡ぐ。

「別にグライアの相手をするのは、問題ないってばね。今度やれば私が勝つから。けれど、私がグライアの相手をしたら、雪絵さんを守れる戦力がない事がわからないってばね？ 感情に従って動くのは勝手だけれど、お前は弱いのがナルト。

夢を見るのは構わない。夢を追うのも構わない。けど、死んだら終わりなの。自分に出来る事と出来ないことを見誤れば、死んじゃうのよ」

今こうして無様に蹲っているように。そして、シヤナの言葉は、ナルトだけでない。サクラやカカシにも深く突き刺さる。ここまで言うて理解できない彼らではない。シヤナは雪絵が行くと言わない限り、協力しないと宣言している。

任務の放棄にも見えるが、この場合、正統性はシヤナにある。映画スタッフの護衛が、一国の国取りに変化しているのだ。それを続行する理由も義務もシヤナにはない。

第七班は、依頼人の事情や心境に寄り添う傾向がある。それは隊長

であるカカシの人柄ゆえだろう。だが、シヤナは第四班の人員。任務は可能な限りやり遂げる責任感はあるが、その責任感は、今回ナルト達と意見を別つ溝となっている。

「雪絵さん、少し外の空気を吸いに行くってばね」

「え、ええ」

雪絵の手を引いて出ていくシヤナ。その後ろ姿を見送った全員。最初に言葉を発したのは、マキノ監督だった。

「おつかねえな。けど、確かに気合を入れるには、覚悟をしなきゃならねえ。三太夫さんよ、少しだけ、雪絵に考える時間をやってくれねえかな」

「……そうですね」

雪絵の性格を知っていれば、彼女がどういった選択をするかはわかり切っていた。しかし、雪絵にシヤナが味方した以上無理強いは出来ない。

その後、シヤナと甲板に出ていたシヤナと雪絵が戻った。そして、雪絵から告げられたのは皆が想像にしない言葉だった。

「嫌だけど、進路を雪の国に進めていいわ。けど、私が戻るって言ったら戻って」

キャラクター紹介（オリジナルor原作改変組）挿絵追加

名前 うずまきシヤナ

忍者登録番号・012587

誕生日・12月24日（推定15歳）

血液型・O型

身長 162.5cm

体重 43.9kg

好きな食べ物・おにぎり（梅干し） 稲荷寿司 温野菜

嫌いな食べ物・納豆 白子

趣味 忍術開発 映画鑑賞 お菓子作り

闘ってみたい相手 波風ミナト 青い写輪眼の姉妹

好きな言葉 強さ 弟・

性質変化 風 雷 火（土遁と水遁も使用は可能）

血継限界 先見の写輪眼（万華鏡を含む） 粒遁（正確には血継洵

汰）巫女術（封印特化型）

二つ名 木ノ葉の青い閃光

名前 鞍馬八雲

忍者登録番号・012588

誕生日・10月10日（15歳）

血液型・A型

身長 158.5cm

体重 41.5kg

好きな食べ物 甘い物 果物・

嫌いな食べ物 辛い物

趣味 絵を描くこと

闘ってみたい相手 うずまきシヤナ 五代目火影

好きな言葉 友達

性質変化 水 風

血継限界 天花乱墜 卑留呼の血継限界

二つ名 木ノ葉の幻術姫

黒髪のポニーテールに和服のような忍装束を着た女性。手の指全てに指輪をつけている。

名前 油女トルネ

忍者登録番号・012589

誕生日・5月20日（16歳）

血液型・B型

身長 175.5cm

体重 62.8kg

好きな食べ物 天ぷら・

嫌いな食べ物 らっきょう・

趣味 昆虫採集

闘ってみたい相手 マイト・ガイ

好きな言葉 仲間

性質変化 風 土

秘伝忍術 毒蟲 八門遁甲

二つ名 木ノ葉の毒蓮華

黒い忍装束と黒い手袋、マスク姿。体格が良く、筋肉質で高身長。

名前 コダマ

忍者登録番号 なし・

誕生日・不明（11歳）

血液型・O型

身長 135.0cm

体重 25.0kg

好きな食べ物 お菓子 レバ刺し・

嫌いな食べ物 野菜・

趣味 旅行（空を飛んでの移動）

闘ってみた相手 うずまきシヤナ

好きな言葉 一日三食

性質変化 五大性質変化 陰陽遁

血継限界 読心の写輪眼 身体変化or自己再生 サトリ化

二つ名 生物兵器

黒いツインテールに折り紙の髪飾りをつけた可憐な少女。暁のコートを着ている。背中にはぬいぐるみや人形が良く背負われている。

名前 ラビリンス・ドル・エンバ

忍者登録番号・なし

誕生日・12月24日（18歳）

血液型・O型

身長 162.0cm

体重 45.0kg

好きな食べ物 サンドウィッチ・

嫌いな食べ物 ピクルス・

趣味 刺繍

闘ってみた相手 うずまきシヤナ グライア

好きな言葉 一撃必殺

性質変化 雷

血継限界 繋がりの写輪眼 ゲレルの石 間宵一族の結界忍術

二つ名 鉄壁のラビリンス

右目は閉じられ左目に青い写輪眼を持ったシヤナより年上の美麗な女性。薄い黄色のショートボブで、衣服は異国の白銀の鎧。

名前 グライア・キッド

忍者登録番号・なし

誕生日・12月24日（17歳）

血液型・O型

身長 165.0cm

体重 46.0kg

好きな食べ物 ソーセージ ハム

嫌いな食べ物 わさび

趣味 遺跡巡り

闘ってみたい相手 ラビリンス

好きな言葉 弱肉強食

性質変化 炎

血継限界 青い写輪眼 残りは不明

二つ名 国崩し

赤髪のメッシュが入った特徴的な髪。それをハーフアップにしているきれいな女性。将校の軍服にマントを身にまとっている。更に右腕が機械の義手である。

## 雪姫忍法帖10

シヤナによって外に連れ出された雪絵。

「どうして、私なんかの味方をしたの？」

雪絵はシヤナに問わねばならなかった。当然問われると思っただのか、背中を船の壁に預けながら、床に座り込んだシヤナは空を見上げる。

「だって、誰かに何かを決められるって、気分悪いじゃないですか」

それだけは御免だと言わんばかりの表情。一切雪絵に敵意はなく、シヤナは雪絵に同情しているようだった。

「それだけが理由な訳？ うそでしょ。あのうるさいチビ、弟なんですよ？ なのにあそこまで」

シヤナは外に出る直前、ナルトを痛めつけていた。仲の良い姉弟だというのは雪絵から見ても理解できていただけに、血も涙もない折檻にはドン引きしている。

それに、誰かに決定権を持たれるのは気分が悪いという意見には同感するが、それだけで自分の味方をするはずがないと疑う雪絵。

「世間知らずの弟を躰けるのも姉の仕事だってばね。それにナルトは、護衛対象である貴方を、危険に晒すような選択を強要しようとはしました。そんな大馬鹿は、多少痛い目にあっても仕方ないと思いません？」

それこそが真実だと言わんばかりだった。シヤナの表情を見れば、雪絵もこれ以上疑えはしない。そして、シヤナの目を見た瞬間、自分と同じものを感じ取ってしまった。雪絵は腰を下ろし、シヤナの隣に座る。

「貴方も同じような経験があるのね」

「そうだってばね。私も周囲に勝手に人生を狂わされた人間だつてばね」

雪絵と同じく、シヤナも大人達によって人生を歪められた経緯がある。シヤナはその時の恨みを忘れていない。木ノ葉の里の大人達と



いう大多数に対し、シヤナは憎しみを抱いている。特にシヤナが嫌うのは、“里の為”という全体主義だ。シヤナは完全な個人主義者であり、木ノ葉の里を守るために行われる少数の切り捨てを嫌悪する。

社会的に見れば、シヤナの存在は不穏分子でしかないだろう。だが、シヤナにとつてはその生き方しかできないのだ。そうしなければ自分や大切なものを守れないのだから。

「でも、あなたは私とは違うのね」

「……私は強いから。私は自分の力で、大人達をはねのけたってばね」  
雪絵とシヤナの違いは力の有無だ。雪絵は逃げる事しかできないのに対して、シヤナは抗うことを選んだ。運命に翻弄される以外に共通点はないと言える。

「いいわね。今の私より選択肢が多くて」

「選択したいんだってばね？」

シヤナは雪絵が逃げる事を選ぶのは当然だと思っていた。だが、雪絵が零した本音のような言葉にひっかかりを覚えるシヤナ。シヤナに突っ込まれた雪絵は、「そんなんじゃないわ」とすぐに否定する。

するとシヤナは雪絵に跪いて手を取る。

「逃げるのなら、私が安全に連れ帰ってあげられる。だけど、ずっと逃げ続ける事になるし、私はずっと守ってあげられない」

当然だろう。シヤナは木ノ葉の忍で、護衛任務に従事しているだけ。木ノ葉に逃げ延びれば、迂闊に手は出されないだろうが、もしドトウの命令でグライアが攻め込んでくれば、木ノ葉は壊滅してもおかしくない。

シヤナはグライアの実力を、そのレベルだと感じ取っている。シヤナであれば逃げおおせる事は可能だが、他のものでは雪絵を守れはしない。

「もし、立ち向かうなら、私が命に代えてもあの女傭兵を倒すってばね」

敵側の最高戦力であるグライア。同じ目を持つ異国育ちの姉。彼女さえ対処できれば、雪絵の生存確率は向上する。しかし、姉との戦闘中は、全神経を集中せねばならず、雪絵を守れない。

その場合、ナルト達に護衛を任せる事になるが、雪忍の練度や規模からして、確率は五分五分と言ったところだろう。

命をかけるには、分が悪すぎる。だが、ナルト達が言ったように勝利すれば、雪絵は国家の当主として台頭し、怯えることなく自由を得られる。

「何、あんたも結局あいつらと同じってわけ？」

結局は雪の国に行けと言うのかと、怒りを顕わにした雪絵がシャナの手を振り払おうとするが、シャナが雪絵の手を離さない。

「違うってばね。選ぶのは雪絵さんだってばね。私は雪絵さんの意思を優先すると誓うってばね。逃げるならいつでもできる。けど、進むのなら今しかないと伝えたかっただけ」

「どういふことよ」

雪絵の問いにシャナは、酷く邪悪な笑みを浮かべる。これは悪魔との取引ではないかと言うように。

「今雪絵さんは、うずまきシャナと言う世界でも類を見ない刃を持つてるんだってばね。敵は雪忍、相手はドトウ。けれどそんな奴らを蹴散らしてしまえる絶対の力を握っている。けれど、握っていられるのは僅かな間のみ」

「だから、有効に使えと？」

雪絵の問いにシャナは頷いて答える。

「貴方がそこまで雪の国を救いたい理由ってなによ」

シャナは、三太夫の夢を否定している。人の命を勝手に賭けた彼を軽蔑し、侮蔑した。だからシャナに雪の国に向かうメリツトなどない。もし向かったとしてもグライアと戦わなければいけない。シャナは勝つと言っているが、結果はどうなるかわからないのだ。

「正直、言うど雪の国も三太夫さんも、どうでもいんだってばね。ただ私は最近、歯応えのある相手がいなくて退屈してたんだってばね」

突然告げられた言葉。出まかせではなく本心からの言葉。シャナは、心からグライアとの再戦を望んでいた。フィールドの関係で開きになったが、決着をつけたくて仕方ないのだ。自分の強さを存分に発揮できる相手は、稀であり、久々に歯応えがある相手が姉なのだ。

このチャンスを逃せば次、何時戦えるかもわからない。  
だから戦いたい。今度は全力で。

「もう一つは、どうしても欲しいものがあって、雪絵さんに恩を売つと  
こうかと思っただってばね」

シヤナは、雪絵に耳打ちするようにシヤナが雪絵に求める物を伝えた。  
伝えられた雪絵は、なんだか馬鹿らしくなったのか大きいため息  
を吐きながら、カラカラと笑いだした。

「弟に馬鹿って言ってたけど、あなたも相当馬鹿ね」

「心外だつてばね！」

雪絵は、なんだかバカバカしいと言った様子で笑いながら、シヤナ  
の手を強く掴む。自分の悩みなど、シヤナにとっては暇つぶしの延長  
線だと断言された。世間知らずの子供の戯言と言つてしまえばそれ  
までだが、シヤナの強さに対する自尊心は、彼女の人生の過酷さゆえ  
のもの。役者である彼女は、シヤナが嘘を言っていないと感じ取れた  
のだ。

特にシヤナの欲しいものがくだらな過ぎて、怒る気力も沸かなかつ  
たのだ。

だが、結局は賭けだ。富士風雪絵の人生をかけた大博打。それを選  
ぶのは雪絵だとシヤナは断言してくれたのだ。他の撮影スタッフや  
三太夫、木ノ葉の忍達とは違い、シヤナは雪絵の選択を求めたのだ。  
「……いいわ。貴方の大口に乗ってあげるわ。貴方がいる以上、安全  
なんですよ？」

「保証するつてばね」

「……喜ばないでよ。自分が凄く馬鹿なことしてる気になってくる」  
「そんなことはないつてばね」

なんでこの子の自分に対する好感度は、ずっと高いんだろうと疑問  
に思う雪絵。

「せいぜい頑張つてよ」

「わかったつてばね」

二人きりの短い会話だったが、少しだけ前向きに進むきっかけに  
なったのだつた。

## 雪姫忍法帖 11

雪絵が協力したおかげで雪の国に上陸出来た一行は、スノーモービルのような車両で移動しながら、撮影を行っていた。

まさに雪国と言った様子で一面の雪に覆われた風景に、一同は感動すらしていた。そして、元々鉄道が通っていた長いトンネルを抜けた場所を撮影場所を選んだ。

雪絵も一切逃げ出すことなく、撮影に協力していた。上陸前まで怯えていた彼女とは打って変わった様子に、一同は訝しむが、強い意志が目に見えていた。

だが未来や明日と言った生きる力とは真逆な、どす黒い輝きを放っている事に気が付いたのはカカシくらいだった。

雪絵を説得したらしきシャナにコーヒを持ってきたカカシ。

「どう説得したんだ？」

「してない。ただ、選択肢を広げてあげただけだつてばね」

「そうか。それと、ナルトと仲直りしなくていいのか？」

カカシは、明らかにシャナと距離を取っているナルトの事を話した。シャナの折檻を受けてから、悔しさと怒りで一切関らなくなった二人。正直やりにくいことこの上なかった。

「問題ないつてばね」

仲直りを今する必要は感じていない。カカシもシャナが何を考えているのか把握できていない。

「それより、そろそろ、気を引き締めた方がいいつてばね」

静かだった旅路はもうすぐ終わるといふシャナ。すでに敵のお膝元まで来ている以上、接触は時間の問題だろう。シャナも常に忍装束を身にまとい、戦闘態勢を整えている。

前回は、忍具もない状況での戦闘で消化不良だが、今は十全の状態で見守る。故にシャナは獲物が向かってくるのを大人しく待っていた。

（お前が私の姉なら、あの決着で満足するはずないつてばね。今も決

着をつけたくくて仕方ない筈。この血の滾りを前に、じっと待つなんてできないってばね)

シヤナは自分の心臓が高鳴っている事に疑問を感じていない。強者と戦うとき、いつも高鳴る心臓の音だからだ。これまで戦ってきた強者との胸の躍るような時間が、戦いなのだ。本質的に戦いを求める性があるシヤナ。

特に血が滾るのは、ラビリンスやコダマとの戦闘だ。死の恐怖がすぐそばにあるのに、楽しくて仕方なかった。そして、グアイアは、シヤナからしても久々に相手する強敵。

「愉しみ」

「何か言ったか?」

「何でもないってばね」

うっかり口に出してしまった本心。それを誤魔化しながら、温かいコーヒーを口にしてしていると、シヤナの未来視が不吉な未来を映し出した。ほんの数秒後の未来だが、自分たちを見下ろしながら、不敵に笑うグライアの姿が映る。

そして、同時に異変が起こり始める。

「なんだ、急に線路が?」

「雪が解けてるのか」

映画の撮影中に、先程まで雪に埋もれていた鉄道の線路が姿を現し始めたのだ。とつくの昔に廃線になった鉄道が姿を現し困惑する一同。だが三太夫さんだけがいち早く反応し、線路に駆け寄る。

「これは、チャクラだ。微量のチャクラで雪を溶かしている。こうしてはいられない! 皆さん!! 逃げてください!! 私は、助けを呼んできます!!」

三太夫は避難を伝えるなり、大慌てで雪道を走っていく。彼の言う応援とは雪の国の先代当主に仕えた家臣たちの事だろう。彼らと合流する地点が近いと言っていたので、もうすぐやってくる脅威に対する戦力にでもするつもりなのだろう。

三太夫の言葉に従った撮影班は、すぐに身を隠す行動に出た。

一方で木ノ葉の面子は、いつ来るかわからない敵襲に備え、それぞ

れが配置につくことになるのだが、ここで一つ問題が発生する。

「あれ、大変です!! 雪絵が居ません!!」

スタッフの一人が雪絵の姿がないと告げる。先程まで撮影していた筈なので遠くには行けて居ないだろうが、撤収作業中のどさくさに紛れて、逃げ出したのだろうか。

「皆さんは避難しててください。シヤナ、この足跡を追って雪絵さんを連れ戻してください。サクラとナルトは俺と一緒に」

状況を判断し、一番早く一番強いシヤナを雪絵の捜索に向けるカカシの指示だったが、シヤナが「無理だつてばね」と命令に異議を申し立てる。

シヤナの視線の先、数百メートルの位置にある巨大な雪山があり、その天辺に佇む存在がシヤナをこの場所に縛り付ける。シヤナの異変に気が付き、カカシもその視線を追えば、シヤナが太腿のホルスターからダガーを取り出した理由が一目瞭然だった。

(グライアが来ていたのか。こうなつてはシヤナを動かせない)

「ナルト! 雪絵さんを頼む。サクラ警戒しろ、敵はもうすぐそばまで来ている」

「はい!」

「わかつたつてばよ」

ナルトは、雪絵の足跡を追ってトンネルに駆け込んでいく。カカシとサクラも防衛のための配置に着く。唯一命令を受けていないシヤナだったが、アイコンタクトでカカシに自分の行動を伝える。苦渋の決断だが、グライアの相手はシヤナにしかできない都合上、取れる択は一つ。

シヤナは青い閃光となり、一直線に雪山の頂上に飛んだ。それを待っていたと言わんばかりに、チャクラ砲がシヤナに向かって発射されたのだった。対するシヤナも粒遁の粒子砲で迎撃。青い写輪眼持ち同士の第二ラウンドが始まったのだった。

## 雪姫忍法帖12

雪山の頂上でぶつかり始めたグライアとシヤナ。シヤナは両手にチャクラ刀を持って、グライアの銃から放たれるチャクラ砲を切り裂いていく。

「逃げんとよう来たな。正直、逃げられることも視野に入れてたねんけど」

「お姫様が行くって言ったから」

激しい弾幕を掻い潜りながら、シヤナがずんずんと接近して来る。前回と同じく複数のプレートを展開し、蛇腹剣も構えている。だが、一度攻略した手札がシヤナに通用することは稀だ。

間合いを把握し、性質を理解したシヤナは、臆することなく向かってくる。それを理解しているのか、グライアはプレートと蛇腹剣を口寄せの応用で仕舞い、別の武器を取り出した。

「はっ」

その武器を見たシヤナは思わず間拔けな声を出してしまう。

「潰れるや」

グライアが持っているのは、人間一人よりも大きいサイズのハンマーだった。それを軽々と片手で振るい、シヤナを叩き潰そうと振り下ろす。シヤナが間一髪で横に置避けたことで攻撃は地面に命中する。

シヤナが避けたハンマーの一撃は、触れた雪の積もった大地を衝撃だけで吹き飛ばし、回避したはずのシヤナも振動でバランスを崩す。

その重量は明らかに見た目以上であり、それを軽々と振り回すグライアの猛攻は続く。自分より大きいハンマーを高速で振り続け、当たるところか掠るだけで体が吹き飛ぶような攻撃を連打してくる。

シヤナもチャクラ刀でグライアの隙を狙って攻撃を仕掛ける。だが、チャクラ刀はグライアのチャクラ障壁によってかき消され、ただのダガーとしてしか機能しない。

そんな状況下で縦横無尽に振るわれるハンマーの前に、シヤナも思

い切った接近が出来ない。

「ちよこまかと」

近接戦を仕掛けるグライアだが、シャナが距離を取り始めれば万華鏡写輪眼の瞳術、黒炎を発生させる天照を順次発動してくる。

「逃げ場無くなつていくで、シャナ」

「わかつてるってばね！」

徐々に黒炎が周囲を覆い始めシャナの逃げ場を奪っていく。一撃必殺の天照だったが、シャナは未来視で常に発生個所を予知している。だから命中することはない。だがグライアは、シャナの素早さを封じる目的で天照を発動し続けており、いずれ回避不可能な瞬間が訪れる。

グライアの狙いはそれなのだ。そして、周囲に天照の炎が展開しているせいでシャナの十八番である粒遁・天門が発動できない。通常の飛雷神の術と違い、粒子を目標に跳ぶためマーキングを施す必要のない術だが、粒子すら燃えてしまう炎が周囲に散らばっている状況では、飛んだ瞬間に、天照に突っ込むことになりかねない。

だから、正面戦闘を行うしかなく、遠距離戦も不可能。なのに凄まじい力でハンマーを振るうグライアの周囲に近寄るのは、竜巻に飛び込むのと同義。

(こいつ、本当に隙が無いってばね)

(必死に隙を探してるようやけど、そんな時間も与えへんで)

徹底的なインファイトを選択するグライア。徹底的に前に出る彼女の表情は、好戦的かつ扇情的だ。グライアの好戦的な性格と生半可ではない強敵と戦い、そして攻めに徹する自分のリズム感が合わさった事で、歯止めの利かない暴力の嵐がシャナに襲い掛かっている。

万華鏡写輪眼で随時シャナの動きを観察しながら、乱舞を繰り返すグライア。シャナも先見の写輪眼では既に対応できず、先見の万華鏡写輪眼に切り替えては、相手の動きを観察している。

先見の万華鏡写輪眼の使用は、シャナの脳にダメージを与える代物であるが、一撃貰っただけで頭が吹っ飛ぶような攻撃を前に出し惜しみは出来ない。



「シッ！」

振り下ろされたハンマーを回避し、シヤナがダガーをグライアの首目掛けて振るう。彼女は体をのけ反らせることで直撃を回避するが、首に一筋の切り傷が浮かび上がっている。自分が切られたと気が付いたグライアは、横に薙ぎ払うようにハンマーを振るうと、ハンマーを投げ捨てる。

「次はこれや」

笑いながらグライアは、レイピアを口寄せしシヤナの目を狙って刺突を繰り返す。シヤナは両手のダガーで刺突を弾いていくが、刺突を正面から受け止めてしまったタイミングで、グライアが笑う。

「爆ぜろや」

「ぐ、く」

レイピアの先端で受け止めた瞬間、触れた部分が爆発した。突然の爆発だったが、先見の万華鏡写輪眼で奇跡的に予知できたことで後ろに飛んだシヤナ。爆発を体で受ける事はなかったが、シヤナの大切なダガーが砕けてしまった。

咄嗟に万華鏡の瞳術で時を巻き戻そうとしたシヤナだが、そんな時間もチャクラの余裕もない。触れた部分を爆裂させるレイピアがシヤナに迫る。

（よくも！）

宝物を破壊された怒りからか、シヤナはレイピアを屈んで回避しながら前進。グライアのチャクラ障壁の中に潜り込む。しかし、一度それを食らった彼女が何の対策もしていない筈がなかった。

レイピアを持つ右手に対して、左手には小型の盾を装備していた。奇襲で術を発動されても、それを受け流せる特殊な防具だった。

「見えてるってばね！」

一撃も直撃を貰っていないが、先見の使い過ぎで鼻血を流すシヤナが、グライアの無防備な顎を蹴り上げた。全く予想外の動きと、自分の盾で視界を塞いでしまったことが災いし、クリーンヒットした一撃は、シヤナより背の高いグライアの体を宙に浮かび上がらせるには十分だった。

そして、飛び上がったグライアの背に追従するようにして影舞踊を行う。

「獅子連弾!!」

そして繰り出したのは、うちはサスケが中忍試験で編み出した体術奥義。写輪眼持ちとはいえ背後からの攻撃全てを見切ることは不可能。最初の回し蹴りでグライアの脇腹を蹴り、その反動を利用して反対側から殴りかかる。それには義手でガードが間に合ったグライア。しかし、シヤナが上に回り込み腹に回し蹴りを叩き込む動作までは読めなかった。

「ぐふ」

腹を蹴られ、地面に叩き落とされたグライアは、吐血しながらシヤナを睨んでいる。そして天照を発動し、シヤナに強制的に距離を取らせた。

そして、すぐに起き上がった彼女は、口を拭いながら追撃を思案しているシヤナに殺意の籠った目を向ける。

「ごほ、ち、体術って奴かいな。けど、それで勝負は決まらへんで!!」  
すかさず天照が発動。黒炎がシヤナに向かって飛んでくる。シヤナは、当然のように黒炎の発生場所を予知していたので回避できたが、内心嫌な想像をしてしまう。

(おかしい、どうなってる)

天照を回避したシヤナを追いかけるように、連続して天照を発動するグアイア。さらに須佐能乎まで発動し、須佐能乎の持つ三又鉾をシヤナに投擲してくる。

「須佐能乎!」

須佐能乎の攻撃に対して、シヤナも須佐能乎を発動。飛んできた三又鉾を6本の腕で掴み取る。だが、次から次にグライアの三又鉾の投擲が始まる。それらを的確に須佐能乎の拳で弾いていくシヤナだが、当然ながら須佐能乎は、ノーリスクで使える術ではない。

チャクラの消費も激しく、細胞にダメージを与えながら発動し続けるシヤナ。それに対して一切勢いが劣らないグライア。

(なんで、こいつのチャクラは、減らないんだ)

シヤナの予感はずまに的中していた。連続で発動し続ける天照、須佐能乎、そしてグライアの使用する武器は全て多大なチャクラを消費する代物だ。シヤナは、グライアのチャクラ量を写輪眼で観察した結果自分と同じくらいだと予想を立てていた。

だが結果はどうだろう。永遠と大技を連打し、勢いの衰える事のないグライア。

チャクラを間違いなく消費しているのにもかかわらず、彼女のチャクラ量に一切変化が訪れていない。最初は、彼女の口寄せする特殊能力を持った武器からチャクラを抽出しているのかとも思ったが、そのどれもが使用時に莫大なチャクラを奪う代物だと、シヤナの写輪眼は見抜いていた。

何かカラクリがあるのだ。だが、その事実にたどり着くのが少し遅すぎた。グライアのペースに合わせて術を発動していたシヤナだったが、今明確にチャクラの総量に差が出てしまう。

長期戦に持ち込まれれば、シヤナのスタミナが先に尽きてしまうのは明白だった。

(一体どこからチャクラを吸収してる?)

シヤナの未来視、巫女のチャクラ。コダマの読心、形態変化。ラビリンスの繋がり、の可視化、ゲレルの石。これまでの青い写輪眼持ち、特殊な能力を持っていた。グライアにも特殊な能力があつてもおかしくはない。だがその正体を洞察するには、グライアの情報が少なすぎる。

「いふ」

須佐能乎の反動が、ついに内臓まで傷付け始める。そのせいで吐血したシヤナ。だがグライアの攻めは一切緩むことはない。

須佐能乎と須佐能乎の対決だが、シヤナに続いてグライアも吐血を始めている。どうやらグライア自身も代償を克服は出来ていないのだろう。

だが、血を拭いながら、深呼吸をするグライアの様子をシヤナの写輪眼は見逃さなかった。

グライアが大きく深呼吸すると、チャクラ量が回復し、あろうこと

かシヤナが与えたはずの打撲の跡や傷が回復し始めていたのだ。

(まさか、自然界にあるチャクラを吸収しているってばね?)

まるで以前自来也が使っていた仙術のように、自然界からチャクラを吸収しているという仮説を立てたシヤナ。だが、自来也の話で聞く仙術とは、チャクラの吸収速度が違い過ぎる。さらに、傷が回復していくのも不可解だ。

このままでは謎を解く前に時間切れが来てしまう。今このタイミングでの決着は、不可能と感じたシヤナは、須佐能乎内で火遁の印を結ぶ。

「火遁・業火滅却!!」

口からグライアの須佐能乎ごと周囲を包み込む火炎を噴き出す。その炎に飲み込まれたグライア。須佐能乎の耐久力の前に火炎は意味をなさないが、視界から姿を隠すことは出来た。

「また目くらましか。けど、今度は……あ?」

再び奇襲攻撃が来るのかと警戒していたグライア。業火滅却が周囲で燃えていた天照の黒い炎に燃やし尽くされたことで、視界が開ける。

しかし、シヤナの姿はどこにもない。

「逃げたんか」

警戒心を緩める事はないが、少なからずグライアの攻撃の射程範囲にシヤナの姿がない事は確信した。須佐能乎を解除し、シヤナが立っていたであろう場所に目をやる。

シヤナが立っていた場所から足跡が一切ない事から、瞬間移動のよきな術で逃げたのだと推測できた。

「便利な術持つてるな。けど、次は逃がさへんで、シヤナ」

シヤナの逃走に対し、若干腹を立てながらも不利になれば、引くことが出来る相手の冷静さは評価したグライア。雪の国にいる以上、シヤナとの決着の機会はすぐに来るだろうと、自分を納得させたグライア。そんな彼女はマントを翻しながら、雇い主の元に戻る。グライアが万華鏡写輪眼を解除すると同時に、周囲を飲み込みかけていた黒い炎は消え去り、其処には何も残っていなかった。

一方、撮影班の車両内に設置していたチャクラ粒子を入れていたランプへと粒遁・天門で飛んだシヤナ。非常用に脱出先を用意しておいて正解だったと思いつながら、急に現れたシヤナに驚く撮影班を他所に、ひと悶着あつたらしきカカシ達と合流した。

カカシ達によると雪忍達の戦闘車両が線路より現れたという。三太夫が応援として呼び出した雪の国のかつての家臣たちによるクーデター派が手助けに現れたものの、人数も戦力も圧倒的に劣る彼らは、ドトウ達によって壊滅。

三太夫も残念ながら敵の攻撃の前に命を落としてしまったという。さらに一瞬の隙を突かれ、飛行船に雪絵が攫われ、それを追ってナルトが飛行船に飛びついて行ったというのだ。

一方でシヤナもグライアと戦闘があり、相手の危険度がシヤナの想定以上かもしれないと報告。ナルトが無茶をしたというのに、意外と冷静なシヤナの様子をサクラが疑問に思っているが、シヤナは別段心配はしていなかった。

もしナルトに命の危機が迫るのなら、シヤナの予知能力が発動したはずだからだ。だが、それが無いという事は、痛い目にあつても命に別状はない。雪絵の救助に出て、捕らえられたのだろうと想像するシヤナ。

だが、雪絵が誘拐された段階で彼女が殺されている可能性があるのではと、質問するサクラ。だが、シヤナが首を横に振りながら、ポケットに隠していたあるものを取り出す。

それは、雪絵が持っていた水晶のネックレスだった。

「相手の狙いは、雪絵さんではなく、この六角水晶だつて言つてたつてばね」

「お前、何故それを」

「保険だつてばね。保険」

シヤナは、雪絵との話し合いで、彼女の命を守るための保険として

六角水晶を預かっていたのだ。そして、雪絵にはある物を手渡ししていた。それは土遁で作った水晶の偽物ともう一つの保険だった。

その保険が雪絵の手にあり、六角水晶をシヤナが持っている以上、相手は迂闊な事は出来ないだろう。

「奴らも偽物に気が付いて、二人に手荒なことはしない筈だつてばね」  
「そうだとして、どうやって奪還するつもりだ？ 例の国崩しは、お前の手にも余ったのだから？」

カカシが痛い所についてくる。グライアとシヤナの戦いは二度にわたって決着がつかなかった。仮に空所作戦を決行したとしても、成功確率は高くない。

むしろ下手すれば、雪絵やナルトの命綱である六角水晶を奪われかねない。

青い写輪眼の使い手は、どれもこれも化け物揃いである。全員が初戦では、決着をつけられなかった。むしろ、強さで言えばシヤナより上位に位置している可能性がある。

「次で決着がつくつてばね。そして、私が勝つ。だから心配するなつてばね」

未来視を使ったわけではない。だが、シヤナは、自分が負けるとは微塵にも思っていない。シヤナは、本質的には分析型の忍である。強敵と戦う際、徹底的に相手を観察し、相手の出方や手札を出させた上で攻略する。故に初戦よりも、連戦を得意とする傾向がある。未来視も合わせり、相手からすれば出す前に手札を知られている状態に陥る恐怖の存在。

これまでも強敵との戦いはそうやって制してきた。だが、グライアも偶然か同じタイプだった。徹底的に武装を使い分けながら相手の出方を見つつ、有効な武器をチョイスしては攻め方を変化させる。戦えば戦う程、手強くなるタイプだった。

シヤナは回避に重きを置き、グライアは防御力に重きを置くという違いこそあれ、相手の手札を枯らすスタイルなのだ。次に戦えば、シヤナのあらゆる手段を封じてくるつもりだろう。

(どんな手段を選ぼうが、アイツの想像を超えてしまえばいいだけ

だつてばね)

冷静に救出作戦について考えを巡らせながらも、興奮を隠しきれていないシヤナ。サクラは、カカシと話している最中にふと、シヤナの顔に浮かぶ喜びの表情に鳥肌が立った。明らかに状況は最悪なのに、強敵との再戦に打ち震えるようなシヤナの顔。

この人は、何処か壊れているんだろう。それがサクラの感想だった。だけれど、それゆえに強く眩しいのだろうかと考えてしまった。

この人が大丈夫だと言えば大丈夫なのだろうかと納得してしまう。

そして、シヤナとカカシの救出作戦について、傍観しているしかなかったサクラもある役を買って出ると言い、作戦が纏まったのだった。

奪還作戦は、今夜に決まった。

### 雪姫忍法帖13

ドトウにより連れ去られた雪絵と彼女を追っていたナルトの両名は、彼の城の牢屋に囚われていた。

「ぐく、ぐあああ、畜生」

ナルトは、両手を鎖で吊り上げられた状態で、必死に鎖を解こうとするが、少しでもチャクラを練ろうとすると、彼の腹部に装着された機械によって発せられる電流に苦しめられる。

その様子を雪絵は冷めた目で見ていた。

なぜこのようなことになったかと言えば、雪絵を誘拐したドトウ達だったが、雪絵の持っていた六角水晶が偽物だと発覚。その事に腹を立てた矢先、ナルトが無謀にも救出に飛び込んだが、雪忍達によって制圧。さらにチャクラを奪う装置を装着されたことで忍術を奪われてしまったのだ。

そして、二人は人質として牢屋に拘束されたのだ。

「なんでそんな無駄なことするのよ」

「無駄って、思ってたねえからだ」

冷めた目で見える雪絵を他所に、ナルトは自分の靴に仕込んだ鑢を口で取り出すことに成功する。腕力や忍術での脱出が無理なら、道具を使えばいい。勉強の成績は悪いが、こういった切り替えの早さがナルトの強みではある。

口に鑢を啜えながら懸垂をして手錠を削っていくナルト。

「本当に、馬鹿ね。まるで、来ない春を望んだ、父様のよう」

無駄な行動を続けるナルトを見て、雪絵は今は亡き父を思い出す。春の来ない雪の国の主でありながら、春の訪れを信じてやまなかった父。

「は、はあ。春が来ないって何だよ？ あの前親分も言ってたけど」

懸垂につかれたナルトは、息を整えながら雪絵の言葉に疑問を持



つ。雪絵と一緒に捕まる際に、ドトウも雪の国には春が来ないと言っていた。

「昔、私の父が言っていたのよ。信じ続ければ、春は必ず訪れるって。けど、雪の国に、春が来ることは英永劫ないわ。結局、春を見ることなく父は死に、私は、逃げた。逃げて逃げて、自分自身に嘘をついて……、こんな私には、偽りの自分を演じる女優くらいにしか、なれるものがなかった」

雪絵の自嘲気味の語りに、ナルトは何も言わなかった。彼女が何も考えず、今のようになったのではないとだけ理解できた。

一呼吸置いたナルトは再び、鑢で手錠を破壊しようと足掻く。少し手錠に切れ目が入ったと思った瞬間、ナルトの啞えていた鑢が口元を離れ、床に落ちてしまう。

「ほらね、そんなことをしても、意味はないのよ」

「諦めたら、楽だもんな」

万事休すなナルトだったが、その目は死んでおらず、雪絵の目を真つすぐ見つめ返していた。

「誰も俺なんか気にかけてくれなくて、世の中に俺の居場所なんかないんだって気がしてた。けど、諦めないで生きてたら、家族が出来て、仲間が出来て、いいことがあった!」

チャクラを練りながら、拘束から抜け出すとするナルト。腹部のチャクラ制御装置による激しい電撃に晒されながらも、歯を食いしばる。

「諦めちまったら、夢も何もかもそこで終わりだ!!」

「やめなさい! あなた死んじゃうわよ!」

雪絵の制止に耳を貸すことはなく、ナルトは不敵に笑う。

「あなたの父ちゃんや、三太夫のおっちゃんの間違ってねえことを、俺が、証明してやるってばよ」

「あなた」

その瞬間、ナルトの手錠が壊れ、ナルトは地面に着地する。

「じゃ、助けてやつからよ」

ナルトがそう言いながら檻に触れた瞬間、電流が流れ彼の体を吹き

飛ばした。まさかの電流にあっけにとられたナルト。それを見ていた雪絵は「本当に、馬鹿ね」と言いながら立ち上がる。そして、ポケットから小さなビンのようなものを取り出し、それを檻の鍵に投げつけた。

投げつけられたビンは、カギに命中すると小規模な爆発を起こし、それを破壊した。

「え?」

「出ようと思えば、いつでも出られたのよ。あなたのお姉さんがくれたコレでね?」

ポケットからもう一本のビンを取り出した雪絵は、ナルトの檻に向かって投げつける事で、簡単に檻を破壊してしまう。その手際にナルトが呆然とさせられる。

「で、どうするの?」

「行く、行くってばよ! (姉ちゃんのせいで、俺めっちゃカッコ悪いってばよ)」

顔を真っ赤にしながらも、雪絵の手を引いて脱出を行うナルト。確かにカッコ悪い姿を見せたが、実際雪絵は脱出する事すら諦めていた。それでもナルトの勇気を見せられたことが彼女が前に進む要因となったのは事実だった。

ナルト達が檻を抜けて、通路を駆け抜けていくと、彼らの前に雪忍が現れる。雪忍を見たナルトが先手必勝と格闘戦を仕掛けるが、雪忍はそれを躲し「ナルト、俺だ」と変装を解いて正体を明かす。

「カカシ先生」

雪忍に化けたのはカカシだった。彼らは雪絵達を追ってドトウの城に攻撃を仕掛けていたのだ。

カカシがナルトに予備の忍具が詰まったバックを投げ渡す。それを受け取ったナルトだったが、警備の雪忍達に見つかる。

「シヤナ」

カカシがインカム越しにシヤナの名を呼ぶと、青い閃光が雪忍達を横切り、その首が体と泣き別れしていく。奇襲作戦でシヤナの役割は機動力と攻撃力を生かした陽動と敵の人数を減らす事。カカシとサ

クラがナルト達の捜索を行っていたのだ。

「無事でよかったてばね」

「雪絵さん、ナルト！」

「姉ちゃんにサクラちゃん」

サクラとシヤナも合流を果たす。

「カカシって言ったわね。あなた、本物の六角水晶を持ってるの？」

「ええ。シヤナがすり替えていたものを預かっています。これはあな  
たが持つていてください」

カカシは懐から六角水晶を雪絵に手渡す。それを受け取った雪絵  
は覚悟を決めた顔で「こっちよ」と逃げ道を案内していく。

## 雪姫忍法帖14

雪絵に連れられ、一同が巨大な空間に足を踏み入れると、其処には、敵の頭であるドトウが鎮座していた。

「苦勞だったな小雪」

ドトウの登場に一同が警戒を強めていると、雪絵が一人彼の元へと走り出した。それを止めようとカカシが手を伸ばすが、雪忍のナダレがクナイを投擲、カカシの道を阻む。シヤナならいけるとかと目配せするが、シヤナは首を横に振る。

何故なら、ドトウの玉座の傍には、グライアが佇み、シヤナを注視しているからだ。

ドトウの元に駆け寄った雪絵は、迎え入れられるようにドトウの元に歩み寄る。そして、六角水晶を手渡した。突然の行動に一同は言葉を失う。その静寂の中にドトウの高笑いが良く響いた。

雪絵が一同に振り返る。

「みんな忘れてたのかしら、私は女優なのよ」

「その通りだ。全ては雪絵が計画した事。この女は、自らの助命の為に、お前たちを捨てたのだ。哀れだな、木ノ葉の忍達よ」

雪絵の裏切りに「なんでだっばよ！」とナルトが悲痛な声を上げる。

「だから、言ったでしょ。私は、女優なんだって!!」

「ぐ、小雪、貴様」

小雪は、完全に油断しきっていたドトウの腹部を隠し持っていた小刀で貫いた雪絵は裏切ったのではない。裏切った演技をしただけなのだ。父の仇であり、三太夫の仇であり、この雪の国の仇であるドトウを倒すために。

雪絵に刺されたドトウは、驚きながらもその太い腕で雪絵の首を鷲掴みにする。

「小娘が、生意気によくも」

雪絵の細い首など簡単にへし折ってやるとドトウが力を籠める。

「雪絵の姉ちゃん!!」

「わかってたのよ、なると、ここにかえってくるときは、しぬときだった、けど、あなただけは、つれていく」

雪絵が死力を尽くしてドトウの体を押しやり、足を踏み外したドトウと雪絵は3階にも相当する高さの玉座から飛び降りる事になる。

「ナルト、走るってばね!!」

ドトウと雪絵が落下すると同時に、シャナがナルトに指示を飛ばす。声を聞いた瞬間には走り出していたナルト。落下すれば最悪死ぬ高さ。故に考えている暇はない。

「あかんで、感動のシーンは静かに見るもんやで」

策もなく駆け出したナルトにグライアのチャクラ銃の銃口が向けられる。発射されれば、ナルトの頭部は消し飛んでしまう。迎撃しようにもシャナは印を結ぶ時間もなく、既に間に合わない距離にいる。

だが、グライアの写輪眼は、口角の上があったシャナの表情を見て、引き金を引けなかった。彼女の生存本能からくる勘は正しかった。突然、シャナの姿が煙となつて消える。

玉座に足を踏み入れたのは、シャナの影分身だった。そして、影分身が消えたことで得た位置情報を本体であるシャナが経験値として得る。

本体であるシャナはドトウの城の外にて、クナイ2本を使い、粒子刀同士を共鳴させ巨大な粒子の刃を形成していた。一太刀で巨大な城を一刀両断できる規模の術を発動。

「粒遁奥義・天羽々斬!!」

戦闘に参加せず、チャクラを練りあげ術の精度を高めた一撃必殺の刃が、城の外からグライアを狙って振り下ろされた。

城を両断する一太刀は、城にいた雪忍達のチャクラの鎧など意に介さず蒸発させ、グライアへと迫る。完全な不意打ちに天井を見上げたグライアは、チャクラの鎧ではなく、須佐能乎を顕現させることで対処する。第三形態へ到達した須佐能乎で粒子の刃に拮抗しようとするが、強固な須佐能乎の体をシャナの粒子刀は、溶断してゆく。

「くそおお!!」

グライアは、須佐能乎ごと城の床を突き破って、地中へと叩きつけられた。

奇襲攻撃に成功したシャナは、息を整えながらナルト達の救援に向かおうとした。

「雪絵の姉ちゃん！ しっかりしろってばよ」

「ナルト？」

雪絵にいち早く駆けだしたナルトは、彼女を受け止める事に成功していた。そして、意識を失っていた雪絵が覚醒すると怒鳴る。

「姉ちゃんは死んじやいけねえ人間なんだってばよ」

「けど、私にはあれしか国の為に来る事が」

「そんなの逃げてるのと一緒だってばよ」

心中を咎めるナルト。その言葉に罪悪感を感じたかのような雪絵だったが、次の瞬間、刺されたはずのドトウが起き上がり、ナルトを殴り飛ばした。

「こんな玩具みたいな刀では、儂は殺せん」

着物を脱いだドトウの全身は、黒いチャクラの鎧にて覆われており、刃が刺さることはなかったのだ。彼は小雪を抱えこむ。

「これが最新式のチャクラの鎧だ。なんだ、グライアはやられたか？

まあいい。では小雪、行くとしようか、虹の向こうへ」

ドトウのチャクラにより鎧の背部にある翼が展開し、空へと勢いよく飛翔した。シャナの作った城の切れ目から外に出て行く。

「待てー！」

ナルトがロープ付きのクナイを雪絵目掛けて投擲。雪絵はそれを受け取るように腕に巻き付ける。そして推進力を得て飛び出したドトウに引っ張られるようにナルトも空高く飛び上がった。

それにタイミングを合わせるように、シャナの破壊した城が崩落を始める。

「先生、ナルトが」

「サクラ、一先ず外に出るぞ」

崩落に巻き込まれては敵わないと力カシとサクラも城の外に抜け

出した。そして、空を飛んでいくドトウを確認し、それを追おうとする。

「おっと、これより先にはいかせん」

「ナダレ」

サクラとカカシを阻むように崩落から逃げ延びていたナダレと冬熊ミゾレの両名が立ち塞がる。

「カカシ先生、こっちの男は私が相手します」

「く、無駄だ小娘が」

ナダレの相手をカカシに任せ、大男であるミゾレにクナイを投擲しながら、距離を取るサクラ。それに乗ったミゾレは、スノーボードのような器具に乗り雪を駆けていく。

「威勢のいい部下だなカカシ。だが、すぐ死ぬことになるぞ。助けなくたっていいのか？」

「サクラは、とても強い子だ。心配はいらないよ。それよりも、お前自身の心配をしたらどうだナダレ」

カカシの挑発に乗るように、ナダレも飛び出し二人は、何度も刃を交えながら雪山を登っていく。

一方、崩れた城の跡で、雪忍達に囲まれていたシヤナ。生き残った雪忍達に包围されながらも、善戦は続ける。だが必殺の術を最大威力で発動したためか、チャクラで火傷してしまい、術の精度は落ちてしまう。そして、距離を取りながら忍具で攻撃してくる連中に時間を稼がれてしまっていた。

本来なら雪絵を追いたいところだが、粒遁の発動がしばらくできなくなっており、回復を待つしかないのが現状だった。

「まあこのくらいの数なら、問題ないってばね」

「なんだ、うああ」

「うあああ」

「ぐあああ」

少しづつ刈り取ればいいと、殺気を向けた時。突如、チャクラのフィールドが城の跡地全体を追う規模で展開された。どこから発生したのかわからないほど膨大なチャクラで展開されたチャクラ障壁。ドーム状に展開されたそれは、シヤナを包囲していた雪忍達のチャクラの鎧に干渉。それによって破損したチャクラの鎧が爆発。

元々、チャクラの鎧の発するチャクラ障壁同士が衝突すると、オーバードロードして爆発するという弱点があった。それによって雪忍達は自分を守る鎧によって爆死して全滅した。

しかし、ドーム状に展開されたチャクラ障壁は健在であり、莫大なチャクラで展開する大元は、無事という事だ。

馬鹿げた出力で、しかも一方的に他のチャクラの鎧を破壊する特別製のチャクラの鎧。

シヤナは血の気が引くのを感じ、ちらりと地べたを見た。

すると、地響きと共に地面から、全身ボロボロのグライアが這い上がってきた。

「お前、何で生きてるってばね」

軍服は、焼け爛れ、体中に火傷を負いながらも、グライアは生きていた。手加減なく一撃で殺すつもりで発動した術の奇襲攻撃。それすら凌がれるのは想定外と言わざるを得なかった。

ダメージは甚大な様子だが、戦闘は可能らしい。

肩で息をしながら、グライアは役に立たなくなった衣服を脱ぎ棄て、お腹を出したインナー姿となる。

「実際危なかったわ。けど、天照で粒子を燃やしたのが功を奏したって訳やな」

「く」

須佐能乎では、天羽々斬を防げなかった。そこでグライアは、瞬時に自分が生き残れる“可能性”を青い目の写輪眼が持つ能力で導き出した。シヤナが知らないだけで、グライアにもあるのだ。人とは違う彼女だけの視界が。

シヤナの未来を見る先見の写輪眼とは違い、もしもそうだったらという可能性（パラレルワールド）を見る事の出来る能力。並行の写輪



眼。それがグライアの能力。

条件が多いものの、グライアはシヤナと全力で戦い勝った可能性を見たのだ。シヤナと違い、オートで発動せず、見る可能性も指定しなければいけないが、その精度は完璧と言えた。そこで天羽々斬を破った世界線を見たことで、粒子刀を黒炎で燃やすことで自身の蒸発だけは防いだのだ。

とはいえ、黒い炎で大火傷しており、無事とはいかなかった。

「もう、回復してらってばね」

「ああ。これが、チャクラを馬鹿食いする服が燃えたからな。こんな火傷、2分もあれば治るで」

以前戦った時と同じく、グライアのチャクラは、徐々に増幅し始め、生命力が高まったのか傷が煙を吹きながら回復していく。人間離れた再生能力と瓦礫に埋まりながらも腕力のみで這い出てきた怪力。グライアの能力の一つなのだろうが、彼女の言う通り衣服を捨てたことでチャクラの増加が著しい。

そして、今こうして話している間にも、常人なら死んでもおかしくないチャクラを放出して周囲をチャクラ障壁で覆っている。

そのチャクラ量はまさに無尽蔵と言える。シヤナは回復させてはいけないと術を発動しようとするが、術が発動しない。

「今までの障壁と違って、これは内側で術を発動できなくする機能や。私の障壁の中で術が発動できると思うなや」

「お前、本当にめんどいってばね」

銃口を向け、引き金を引いたグライア。万事休すかと思われたが、カチンと引き金が鳴るだけで、チャクラ砲が発射されることはなかった。

「嘘やん」

何度も引き金を引くグライアだが、チャクラ砲は、発射されない。どうやら障壁内では、グライアの使う武器の機能も効果を失ってしまふのだろう。一度も試したことのない機能を使ったことで、その副作用を理解していなかったグライア。

ぶつつけ本番がここにきて、マイナスに働いた。

「今だ」

シヤナは、グライアの特種な武器が機能しないなら、チャンスがあるとクナイを持って駆け出す。猛スピードで接近するシヤナを見たグライアは、拳を握り、地面を殴りつける。

すると、地面が吹き飛び、クレーターを形成する。その際に飛来した瓦礫を見切って回避していくシヤナ。

回避しながら、これまでのグライアの戦い方を考察する。これまで使ってきた武器や防具はすべて、常人なら即死するチャクラ消費量のアイテムばかり。それを使用できなくなった事で弱体化するかと思われたが、その予想は外れ。

無駄遣いできるほど、いや、無駄遣いしなければならぬほど莫大なチャクラを全てフイジカルに振る事が出来るとすれば。それは、シヤナのそれを遥かに凌駕する。

瓦礫に視界が防がれた瞬間、距離があったはずのグライアが一步で接近。五代目火影綱手に匹敵するかと思われる怪力で瓦礫ごとシヤナに拳を振るつた。

怪力の一撃で砕け散った瓦礫が散弾銃のようにシヤナに襲い掛かる。

身のこなしでそれを避けるが、グライアが地面の瓦礫ごとシヤナに蹴りを放つ。地面をえぐる蹴りを受ける訳にはいかないと、瓦礫を回避し、煙幕を張って身を潜めるシヤナ。

僅か一秒間の攻防だが、シヤナが圧倒的不利なのは、明確だった。

「隠れたか」

瓦礫を殴り、地面をえぐる蹴りを放ったグライアの手足はボロボロだったが、彼女の細胞は自己再生を始める。

最終決戦が今始まった。

## 雪姫忍法帖15

ドトウと雪絵を追っていたナルトだったが、空を飛んでいる最中にロープがバレたことで空から突き落とされたナルト。偶然森に落ちたことで死ぬことはなかったが、足に怪我を負ってしまい、足を引きずりながら雪絵達が飛んで行った方向を進んでいた。

だが深雪の中を足を引きずって移動しては、間に合わない。

「このままじゃ」

ナルトに焦りが見え始めた時、森の中を大型のスノーモービルに乗った監督やスタッフが現れた。現れると思っていなかったメンツの登場だったが、監督はナルトの顔を見るなり「乗れ！」と指示を出す。

それにうなずいたナルトは、すぐに乗り込み、雪絵達が向かった方向を指さした。

一方、ミゾレと森の中で戦闘していたサクラ。クナイを何本も投擲するが、障壁に弾かれるだけで決定打にかける。

「無駄だと言っているだろう！」

スノーボードで雪道を滑走するミゾレは、逃げるサクラを追い詰めていく。やがて息が切れたのかサクラの移動が止まり、諦めたと思っただのかスノーボードを降りる。

「ようやく観念したか小娘。まあいい、一撃で楽にしてやる」

ガントレットの装着された腕を上げ、言葉通りサクラを一撃で殺そうとする。だがサクラはあきらめたわけではない。只集中するために、足を止めたに過ぎない。

(集中、集中よサクラ。綱手様の教えを思い出すのよ)

深呼吸しながら、全身のチャクラをコントロールしていく。医療忍術に必要な繊細なチャクラのコントロール。それを攻撃に転ずる術を。彼女の師は何度も見せてくれた。なら、それに応えないわけには

いかない。

今はまだ実戦で使える段階じゃない。だからこそ、成功率を上げるために、動きが遅い大男を選んだ。一步一步油断して迫るミゾレ。サクラに抵抗する術はないと確信し、舌なめずりまでしている。

その間にもチャクラを練り上げるサクラ。

「死ねえ!!!」

「しゃーんなろー!!!」

サクラの頭部を砕こうと振り下ろされた一撃を躲し、練り上げたチャクラを、瞬時に拳に集中させることで爆発的な怪力を生み出す綱手の一撃の模倣。模倣でしかないが、綱手も認めるチャクラコントロール力を持つサクラのそれはオリジナルと比べて威力こそ劣るが、再現度は高い。

「ぐおお、あ、ぐ」

必殺の拳は、チャクラの鎧では防げない。もろに胴体に受けたミゾレの内臓は破裂。即死しながら吹っ飛び、木々をなぎ倒しながら、森に沈んだ。

「ぐ、ううううう、あ、うだが、く」

慣れない怪力によって腕が破壊され、複雑に骨折し、サクラも悶絶する。けれど、自分一人だけで初めて敵を倒したことで、ナルトやサスケにおいていかれた自分ではないと確信を得た。

「待っててナルト」

サクラは、敵を倒し、ナルト達を追うのだった。

一方雪山で戦っていたナダレとカカシの両名は頂上付近で戦闘を行っていた。

「真似事だけでは、俺には勝てんぞ」

「そうだな。だったら、俺のオリジナルを見せてやる。雷切」

カカシは印を結び、雷切（千鳥）を発動。相手を葬るため、加速する。猛ダッシュしてくるカカシを迎え討つため印を結ぶ。

「氷遁・狼牙雪崩の術」

雪山の雪が狼型の雪崩となってカカシを襲うが、カカシの雷切はその狼たちを貫きながら瞬く間に、ナダレに接近。

チャクラの障壁によって防がれはしたが、その貫通力と威力によって、ナダレのチャクラの鎧が破損する。

「惜しかったなカカシ」

鎧が壊れてもまだ勝機はあると油断していたナダレだが、二人の戦闘によって発生した余波で本物の雪崩が発生。それに巻き込まれた二人は雪山を落下する。

その隙にカカシはナダレを背後から抱え込む。

「何を？」

「たどえ忍術幻術が効かなくとも、忍者には体術がある。お前はその鎧に頼り過ぎた！」

体術奥義である表蓮華をナダレに仕掛け、その首を地面に叩きつける事で相手を絶命させたカカシ。ナダレの遺体は、名前の通り雪崩に吞まれてしまった。

写輪眼の使用でへばりそうな体に鞭を打ちながら、ナルト達の元に向かおうとカカシも雪道を移動し始める。

## 雪姫忍法帖16

雪絵を誘拐し、雪の国に封じられた秘宝を手に入れようと雪の国の晶壁へたどり着き。そこに鎮座する装置に六角水晶をはめ込んだ。

だが、ドトウの期待していた宝は、存在しなかった。

雪と氷に覆われた周辺に、温かな風が吹き始め、氷が解け、雪解け水が流れ始める。

「暖かい。これって」

「発熱機だと!? こんなものが風花の秘宝だと言うのか」

目的のものが無いとして、苛立ちを見せるドトウ。彼は雪絵の襟首をつかみ上げる。

「吐け、小雪!! 本物の秘宝はどこにあるのだ!!」

「し、しら、ない」

「ふざけるな!!」

雪絵の頬を殴打し、怒りを顕わにするドトウ。雪絵も絶体絶命かと思われた時、遠くからナルトの声が響いた。

「雪絵の姉ちゃん!!」

撮影班のスノーモービルで滑走してきたナルト。彼はスノーモービルから飛び降りると足の痛みを堪えながら走り出した。

「忌々しい。氷遁・黒龍暴風雪」

黒い竜の形をした雪を放つ術でナルトを攻撃するドトウ。直撃を貫き空に打ち上げられ、地面に激突するナルト。

「ナルトオ」

悲痛な雪絵の声が響くが、すぐにナルトは起き上がった。

「これくらい、なんともないってばよ」

「ナルト駄目よ。これ以上やったら、死んでしまう」

雪絵はもう止せと止める。だがナルトは諦めない。

「俺を信じる。あんたが信じてくれるなら、俺は絶対、負けやしねえ!」

覚悟を決めた男の目。そのナルトの目を見た時、雪絵はシャナとの

会話を思い出した。

「貴方が強いのはわかるけど、あの坊やは正直荷が重いんじゃない？」  
シヤナの弟であるナルトでは、雪忍には勝てないだろうと考えた雪  
絵。だが彼女の言葉にシヤナは少し切なげに微笑む。

「何よ」

「あの子は弱いつてばね。それは認める」

「だったらなぜ笑うのかと問う。」

「けどね、あの子は一度言ったことは諦めない。それに約束は絶対に  
守ろうとするの。あのこの諦めの悪さだけは、私以上なんだつてば  
ね」

「え？」

「だから、ナルトの事は、信じてくれていいつてばね。自分の言ったこ  
とは、曲げない。それがあの子の忍道なんだから」

「自分の言ったことは曲げねえ、それが俺の忍道だつてばよ！」

ナルトの意地に呼応するように、ナルトのチャクラがあふれ出して  
くる。チャクラの制御装置をつけながら、それを凌駕するチャクラの  
量にドトウが警戒しながら、息の根を止めようと走り出す。

鎧によって強化された身体能力で仕留めようとしたが、その一撃を  
ナルトは片手で受け止める。

「なんだと」

「雪の国は、お前なんかには渡さねえ！」

瞳が赤くなり、ナルトのチャクラも赤く染まる。そしてナルトの腹  
部にあった制御装置が破損。それによって噴出したチャクラによつ  
てドトウは吹き飛ばされる。その際に、チャクラの鎧に罅が入った。

九尾のチャクラを引き出したナルトに恐怖したドトウ。

「今までの借り、何倍にもして返してやるつてばよ。影分身の術」

「ふざけるな!!! 氷遁・双龍暴風雪!!」

影分身で数十人に分身したナルトは、一斉にドトウに飛び掛かる。  
迎え撃つドトウは、暴風の竜巻を発生させ、影分身をすべて破壊して

いく。

「くくく、終わったか」

一撃によって影分身全てを消し去り、勝利を確信したドトウが笑う。だが、彼は雪に紛れて影分身と螺旋丸を作っていたナルトの気配によろやく気が付く。

「まだ終わってねえよ。おわりってえのわな。正義が勝って悪が負ける。ハッピーエンドに決まってるんだってばよ」

どこまでも諦めないナルトの姿。その戦いを見た雪絵。

「ナルトオ。私信じるわ。あなたは、風雲姫が認めた、最強の忍者よ！」

「んな事は、わかってらあい」

ナルトと影分身が走り出す。その手には螺旋丸を完成させる。そして偶然にもドトウが起動した発熱機によって齎された一時的な春によって聳え立つ雪の国の晶壁の氷が剥がれ、七色の光を反射。

それらから集まった光がドトウの視界をくらし、ナルトの螺旋丸を七色に染め上げる。

「七色のチャクラ、嘘」

「くらえ螺旋丸!!!」

映画と同じチャクラを纏った螺旋丸を持つナルト。くらんだ目でナルトの攻撃が見えなかったドトウは、その体に螺旋丸の一撃を食らう。

「あああああああ」

チャクラの鎧は壊れ、直に一撃を受けたドトウは、高速回転しながら雪の国の晶壁へ激突。その氷が彼によって完全に？がれたことで、風花の秘宝の真の姿が現れた。

それは立体映像による草原や草花の投影。春の来ない雪の国に疑似的な春をもたらす機能だった。

その映像には、幼い日の雪絵と父の会話が残っており、その映像を見た小雪は、ついに凍った心を溶かし、涙を流す事が出来たのだった。戦い終えたナルトは、その場でやり切った表情で気を失ったのだった。



## 雪姫忍法帖17

ナルト達が戦いを終えた頃、グライアとシヤナの戦闘も佳境に差し掛かっていた。

莫大なチャクラを用いて体が壊れる事すら躊躇しないグライア。対峙するシヤナは、手裏剣術による牽制で隙を見出そうとする。

「いくら逃げてても、ウチを振り切れると思うなやボケ」

「化け物が」

超人的な再生能力を持つグライアは、シヤナの投擲する手裏剣の雨を全身に受け止めながらも、最短距離で接近する。

破壊そのものとなった彼女の拳は、大地を砕き、蹴りは空を切る。そんな兵器の攻撃を紙一重で回避するシヤナ。幸いな事に、シヤナのチャクラコントロールや未来視は、忍術を無効化するフィールド内でも問題なく使用できる。

猛烈な勢いで攻撃を仕掛け続けるグライアにカウンターで裂傷を与えていく。

「今更、クナイなんぞで」

突き出された拳を横に回避しながら、腕の腱を切断する。だが、グライアの斬られた腕は煙を上げながらすぐに動き出し、シヤナの髪の毛を掴もうとして空を掻く。

（腱を斬っても数秒も止まらない。それどころか回復速度や膂力がうなぎ上りしてる。こいつ、無敵だつてばね？）

術を使えない状況下で、グライアを殺す方法が思いつかないシヤナ。先見の写輪眼を使っている今、グライアの攻撃を貰うことは皆無だが、それには限りがある。

距離を取って仕切り直す事も出来ず、一方的なデスマッチを挑まれる。

「は、は、は、は、ぐうう」

（あいつ、なんで、いや、もしかして）

シヤナは、全神経を集中してグライアを観察していると、ある事に

気が付いた。その考えは瞬く間にシヤナの中で吟味され、一つの結論にたどり着く。何度も何度も攻撃を仕掛けるうちに、全身から湯気を立ち昇らせるグライア。

その表情は切羽詰まっており、動きが早くなるのに比例して荒くなっている。

まるで、爆発寸前の火山のようだとシヤナは考えた。そして、そのエネルギーはどこから来ているのかと思案すると、心当たりがあった。

(こいつの無限にも近いチャクラの供給源。ようやく確信が行った)

シヤナの人生の中で、グライアと似たようなことをしていた人物が居たのだ。巨大な瓦礫が投擲され、それを飛んで回避。両目でグライアを深く観察し、笑みが浮かぶ。

「ぜえ、ぜえ、何笑ろてんねん」

肩で息をしながらグライアがシヤナを睨む。

「グライア。お前の能力、一つだけ解読できたってばね」

「あ？」

「お前は、自然界のチャクラを燃料にしてるな？」

シヤナの指摘にグライアの表情が少しこわばる。シヤナがグライアの正体に照らし合わせたのが、自来也の仙人モードだった。自然界のチャクラを取り込み、自身のチャクラと混ぜ合わせる事で仙術チャクラを生み出す技術。

それならグライアの怪力や頑丈さにも納得がいく。自来也からの説明と一度しか見たことがなく、紐づけに遅れたが、確定だ。

だが仙人モードとの違いは、グライアは自然のチャクラをそのまま吸収し、それを利用しているところだろう。その吸収速度は、仙術の比ではない。けれど、グライアは、仙術チャクラを練れていない。故にコントロール出来ているとは言えない。

彼女の戦闘スタイルは、無駄にチャクラを浪費する火力のゴリ押し。それが戦法ではなく、吸収したチャクラでパンクしないための策だとすれば、納得がいく。

「そして、お前の一見無敵のような力、けれど、それがお前の弱点だっ

てばね」

「ほう」

「お前、その無限のチャクラを自分の意志で放出できないってばね？ お前は強くなってるんじゃない。爆発しそうになってるだけだつてばね」

シヤナの指摘は正解だ。

グライアは、自然界の莫大なチャクラを肌を通じて吸収する特異体質。正確には、“龍脈”を通じて無制限にチャクラを引き出せるのだ。

シヤナが鬼の巫女の血を引くように彼女の血には、特殊な一族の血が流れている。龍脈の時すら超えると言われるチャクラを扱える彼女だが、大きな欠点が存在した。

龍脈からチャクラを吸収は出来ても、それを自分の意志で制御できないのだ。それ故に彼女は自分の居た国を焼いたのだから。忍術で多少は消費できるが、それはダムの水を蛇口で抜くようなもの。忍術は、チャクラだけあつたとしても集中力や苦手なチャクラコントロールが必要。忍具は全て、失敗作や欠陥品で、とにかく自分の体のチャクラを抜く性能が求められた。

吸収量は、彼女が望もうが望ままいが日に日に増大していく。それは、グライアの武器でもあり命を脅かす毒でもあつた。

そして、今現在、義手以外の忍具は機能を停止。義手のチャクラ消費だけでは追いつかなくなったグライアは、自滅寸前だったのだ。

「だったら、私はお前が自滅するまで待てばいいってばね」

相手が自滅まで秒読みだというなら、ここでシヤナの目的は時間稼ぎに変わる。そうすれば、シヤナが自動的に勝つ。完全に王手だと確信したシヤナ。だが、そこで、ふと脳裏にコダマやラビリンスの顔が浮かぶ。

敵対し殺し合い、それでも和解できた。そんな前例があつたのだ。

「グライア、ここまですべてばね。私の勝ちだ。だから、もう」

(何を言ってるってばね私は!?)

突然、グライア相手に休戦を告げてしまう。先程まで、命のやり取

りに昂りを感じ、何があろうと殺そうという絶対な殺意があつたのにもかかわらずだ。

グライアさえ抵抗しなければ、シャナは彼女の暴走するチャクラを抑え込んでしまえると考えてしまった。

好敵手であり、自分の全力を出しても壊れない相手だからか。いや違う。

「なんや、急に。おまえ、もしかして、同情しとるんか？」

シャナの言葉に酷く傷ついたような顔をするグライア。シャナも自分が何故こんな感情を抱くのか理解できない。だが、シャナの中にある感情が、思考を鈍らせてしまう。

“殺したくない”

「ラビリンスも、同じような顔しとったわ。ウチの腕を切り落とした後にな。けどな、ウチを……、舐めるなよ小娘」

シャナの同情心からくる停戦に腹が立ちすぎて、憎悪に染まるグライアの心。心臓が高鳴り、グライアの写輪眼が青から深紅に染まる。そして、“誰か”の声がグライアの心を支配した。

「お前、あの声か!？」

グライアの赤い写輪眼と向き合った際、ラビリンスとの戦いで向かい合った彼女たち姉妹の中にいる誰かがグライアを支配したと理解した。頭の中で聞こえる男の声。それに身を任せたのだ。顔はグライアなのに、気配や威圧感が別物となっている。

そして、話し方が一気に変わるのだ。

「お前が何を言っているか知らないが、この体の持ち主である小娘は、停戦なんぞ望んでいない。求めるのは血で血を洗う命のやり取りだ」  
自分の胸を指さすグライア（を乗っ取った人物）。そう宣言するなり、トップスピードでシャナに拳を振るう。先見の写輪眼で不意打ちを見ていたシャナは、一発目は回避。だが、グライアにあるまじき洗練された体術が、連撃として迫る。

一発貰っただけで致命傷になりかねない怪力でありながら、一発一発が正確で、明確な殺意を持って振るわれる。

シャナが耐えきれずクナイで反撃をするも、掌でクナイを受け止め

るグライア。

「この体のコントロールに慣れていないとはいえ、俺の体捌きを見切るとは。良い目を持って生まれたな」

「あぐ、ああああ」

掌で刃を受け止めたグライアは、そのままクナイを握るシャナの腕を掴み、逃げられなくする。そして、上半身にガードを行ったシャナの動きを見て、下半身狙いにシフト。ローキックで右足をへし折られてしまう。

折られた足を押さえながら、シャナがグライアを見れば、足を振り上げていた。両手と片足で後方に跳び、蹴りを回避したシャナ。そんな彼女に追撃を入れようとグライアが不気味に迫りくる。

「戦場では情けは命取りだ。そんなことも教わらなかったのか小娘？」

明らかに自分を格下だというような目線。人格が変わるだけでも戦闘力に影響が出るとは思わなかった。シャナ自身も頭に響く声に耳を貸せば、力が手に入るかもしれない。

そんな甘い考えに行きつきかけた。

「まあいい。お前を始末したのち、他の連中も皆殺しすればいいか」

グライアの口からそんな言葉を聞いた時、体が動いていた。城の瓦礫の中に埋もれていた刀を掴んでいた手がグライアの左足首を切断した。

「お？」

足を切り落とされ、バランスを崩したグライアに、刀を投擲。刀はグライアの肩を貫く。

「いい目だ」

片足を失ったグライアだが、既に体が再生を始めている。しかし、傷の再生速度が上がっているという事は、もう限界なのだろう。グライアの体が発火し始める。

「どうやら、臨界点を超えたらしい。今の一撃が引き金となったか。こうなっては、俺でもコントロール出来ん」

偶然の反撃。仲間を弟を殺すと発言された段階で、シャナの殺意の

スイッチが入った。思考するより早く体が勝手に動いただけだったが、それがグライアの体を追い込んだ。

体中から炎が上がり、グライアは諦めたかのように立ち尽くす。もうこの状態になれば身動きすら取れないのだ。

「ぐ、ウチの体で勝手すんなや。ふふ、この戦いウチの勝ちや」

ギリギリになってグライアの意識が戻ったのだろう。足を折られたシャナでは、グライアの自爆からは逃れられない。故に勝利だと確信したらしい。

グライアの自爆は、辺り周辺を炎と爆風が襲う大規模なもの。ちょうど、ドトウの城くらいの敷地なら、吹き飛ばす規模である。そして、自爆はグライアにとって死ではない。

死にたくなるような苦痛と苦しみを味わうが、活性化した彼女の体はそんな地獄の中でも死ぬことを許してくれない。瀕死にはなるが、何度も生き延びてきたのだ。

ただ、自爆するたびに、苦痛は強くなりグライアの寿命を大きく削るデメリットがあった。

「じゃあな、シャナ!! うあああああああああああああああああああ  
ああ!!!」

グライアが吸収したチャクラで豪炎と共に吹き飛ぶ瞬間、シャナは折れた足で立ちながら印を結んでいた。チャクラ障壁によって術が使えない中でも、先見の写輪眼は、勝機を見出していた。

チャクラを練り、術が発動できないだけで、忍術を発動寸前にまで持っていく事が出来る。

そして、爆発に巻き込まれる寸前、グライアの義手が遂に悲鳴を上げ、忍術を封じるフィールドが消え去る。

まさにコンマ一秒。その時間を見逃さないのが未来視である。

「粒遁・天翔!!!」

忍術が使用可能となったシャナは、自身の体を粒子に変え上空へと亜音速で移動。爆発に巻き込まれることなく空へと逃げ延びた。

「粒遁・天空(てんくう)」

上空に跳び落下し始めたシャナは粒子の翼を纏って滞空。右手に

螺旋輪虞を形成する。そして、炎が収まるところを見計らい、一気に急降下。

爆心地へと強襲をかける。

「くそ、生き延びたんか？」

全身に致命的な火傷を負いながらも、意識を失っていないグライアは、息も絶え絶えで上空から接近するシヤナに銃を向ける。自分の炎で焼け焦げているが、チャクラ銃として機能はするようで引き金と同時に、チャクラ砲がシヤナへと発射される。

「粒遁螺旋輪虞!!」

翼を携えたシヤナは、右手の螺旋輪虞で砲撃を弾きながらグライアに必殺の一撃を叩き込んだ。満身創痍のグライアにシヤナの攻撃を防ぐ術はなく、螺旋輪虞を受けて吹き飛ばされた。だが、砲撃によって螺旋輪虞のリングが砕けていたので、斬撃を負うことはなかったのが幸いか。

勢いよく吹き飛ばされたグライアは、氷壁に叩きつけられ、崩れてきた雪と氷に埋もれてしまった。

シヤナは、自分の折れた足を万華鏡写輪眼の瞳術、御年神で随感を巻き戻す事で治療。グライアが復帰してくる可能性も視野に入れ、警戒する。

しかし、いくら待ってもグライアは氷から這い出てこない。

「死んだってばね？」

恐る恐る、グライアの埋もれている個所に足を運べば、シヤナはがつくりと尻もちをついた。

「しぶとすぎるってばね」

既にそこには、彼女はいなかった。だが、氷壁を掘削したのか、かなり奥深くまで抜け穴が出来ており、逃走したのは間違いないようだ。完全に螺旋輪虞を当てたというのに、瞬時に劣勢を察して敗走したらしい。

あの女を殺したくないと思ったのは事実だが、完全な決着はつかなかった。

今回の事で、ラビリンズと同じく、グライアのターゲットになって

しまったのは明白だった。

「あー、しんど」

雪に寝転がり、シヤナは強敵との戦いからくる疲労感に、目を瞑った。



## 雪姫忍法帖 完

その後、ドトウは倒され、雪忍達も滅ぼされ彼の築いた雪の国は、滅亡。

主権は、雪の国の正当後継者である雪絵改め、小雪へと継承された。風花の遺した発熱機によって、疲弊していた雪の国の民たちも、一時的な春を迎えた。

独裁者であるドトウを打ち倒し、春をもたらした小雪姫を国民たちは大いに歓迎したのだった。

雪の国の民族衣装に身を包んだ小雪は、国民たちへの御披露目を終え、今回の功労者である木ノ葉の忍達とパーティ会場で談話していた。激戦から一週間ほど療養した面々は完全に復活していた。

「あの装置だけど、まだ未完成だったのよ」

「じゃ、また冬に逆戻りなんですか？」

そう簡単に国の気候を変える事は出来ない。けれど小雪は嬉しそうに話を続ける。

「けれど、これからも研究を続けていけば、雪の国はいずれ春の国と呼ばれるようになるわ」

不思議と今の小雪なら、本当に可能なのだという説得力があった。だが国家当主となることが決まった事で、サクラはせっかく売れている女優を辞める事になって残念ですねと口にする。

「え!?! やめちゃうってばね!?!」

隣で稲荷寿司を頬張っていたシャナが驚愕の声を上げる。大ファンで命がけで戦ったのに、その女優が辞めてしまうなんてあんまりだと言った表情になる。流石のナルトでも当然だつてばよと理解していた。

しかし、小雪の返答は、予想外のものだった。

「何言ってるのよ。雪の国の当主も女優も両立させるわよ。此処で諦めるなんて馬鹿みたいじゃない。じゃ、またね」

そう言った小雪の手元には、完結したはずの風雲姫シリーズの続編

の台本が握られていた。そして、打ち合わせがあるのか映画の撮影班の面々の元に向かつていくと、途中で大勢の色紙を持った子供たちにサインを強請られていた。

かつては、サインなんて何の価値もないと切り捨てていた彼女だが、今は心から嬉しそうにサインを書いていた。

「え、嘘」

「すごい人だな本当に」

「雪絵の姉ちゃん、変ったってばよ。ますます、ファンになるってばよ。つて、サイン貰つとけばよかったってばよ」

第七班の面々が感想を零していると、途中で何かを思い出したかのように雪絵が戻ってきてシャナに色紙と写真を手渡した。

「え？」

「約束のサインよ。それに、ナルト。貴方の分もね」

シャナの手には、風雲姫シリーズ関係者のサイン色紙。そしてナルトには、病室で眠っているナルトの頬にキスをした風雲姫の写真。写真には『あきらめずに火影になってね』と記されていた。

「どうせなら、もつとカッコいい写真にしてほしかったてばよ」

「家宝にしますってばね!!」

二人の姉弟の声が会場に木霊するのだった。その声を聴いて雪絵は本心から微笑むのだった。

その後、完結編風雲姫は全世界で公開。本物の忍者の戦いを収めた映画は、爆発的な大ヒットとなる。そして、謎の登場人物(シャナ)も人気になり女優が誰かと人々は噂したが、木ノ葉の青い閃光その人だと結びつくことはなかった。

一方、その頃、鬼の国で。劇場ではなく、広大な敷地を持つ城の天守閣でも、ある女性とそのお供達が映画を見ていた。

「足穂(たるほ)。どうなっておるのじゃ。この女、どう見ても私じゃ。なぜ私と同じ顔をした女が映画に出ておるのじゃ」

映画に登場するシャナを見て驚愕している少女がいた。そばに控

える足穂と呼ばれた眼鏡の男性も同じくおどろいていた。

「どうして紫苑様が」

「なにかの悪戯か？ 民が私に対して嫌がらせをしておるのか？」

何故なら、男性の前で偉そうに振る舞う主は、シャナと全く同じ髪に同じ顔、同じ姿をしているのだから。違うのは瞳の色くらいだった。

「足穂様、もしかして、巫女の一族の関係者やもしれません」

「一応、調べてみましょう」

鬼の国でシャナの正体を探る動きが起こったが、映画関係者は、全員秘密を守ったため、正体がバレることはなかった。

ーーーーー3年後までは。

## 姉と弟 旅立ち

ナルトが自来也と共に修行の旅に出る前日。

ナルトは、里の外の修練場に立ちながら、姉を待っていた。腕を組み、静かに待つ彼を見守る人間が三名。

「いいの来自来也。出発前にこんなことをしていい」

一人は、木ノ葉の五代目火影である綱手。そして彼女の傍にるのは、自来也。

「ナルトの奴、修行に出る前にどうしても聞かなんだからな。それに、もしもの為にお前を呼んだんだ」

「ナルトが勝てると思ってるのか？」

綱手の質問に首を横に振る自来也。今日、ナルトとシヤナは、一騎討ちを行う。それは、旅立ち前にナルトが熱望した事だった。実力差は明確だが、彼にとつて目標である姉と本気で戦いたいという思いがあった。そして、忍になつて培つた自分の力を見せたいと考えたのだ。

その願いを聞いたシヤナは、少し思案するも了承した。そして、少し遅れてナルト達が待つ修練場に足を運んだ。彼女一人ではなく、八雲とトルネの二人を連れて現れた。

「二人とも、あつちで見てほしいってばね」

「はい。あ、綱手様、自来也様。ご無沙汰してます」

「失礼します」

八雲とトルネを連れてきた事に疑問を覚えた綱手たちだったが、何か考えがあるのだろうかと言わなかった。むしろ、二人とも任務帰りでシヤナに連れられていて疲れていないかと労う綱手。

「確かに消耗はしていますが、シヤナに頭を下げられては、駆け付けない訳にはいきません」

「そうか」

第四班の絆は、本物なのだなどと綱手を感じた。八雲たちは、綱手から離れた位置で決闘を見守るようだ。

そして、ナルトと向き合ったシャナ。ナルトは目を開けシャナの写輪眼を見つめる。

「姉ちゃん。来てくれてうれしいってばよ」

「決闘するんでしょ？ ナルトの願い通り、姉としてではなく、うずまきシャナとしてではなく、忍として相手してあげるってばね」

シャナは、額のゴーグルを取り外すと、八雲へと投げ渡した。それを八雲が受け取ると、額当てを額に装着し帯を締める。木ノ葉の忍として対等に戦う決意の表れだ。ナルトもそれを見て額当ての帯を強く締め直す。

「決闘の立ち合いは、儂が担当する。勝敗は相手が負けを認めるか戦闘不能になる。または、我々が止めにはいるまでだ。いいな」

「応！」

「わかった。さあナルト、好きなタイミングで始めなさい」

「多重影分身の術」

先手は譲るというシャナ。いつもなら腹を立てそうな言葉だが、これは決闘。相手が油断するならそれはチャンスだ。ナルトは、莫大なチャクラを練り込み、周辺を埋め尽くす1000人も影分身を披露した。

「え、すごい。何この数」

「チャクラが多いと思っていたが、これはすごいな」

八雲達も数に圧倒され、感想を零す。だが、ナルトが何人になった所で、シャナに勝てるとは微塵にも思っていない。此処でどう出るかが、命運を別つのだ。

「二「行くってばよ。うずまきナルト、二千連弾!!」三」

千人のナルト達がクナイを持って、一斉にシャナに襲い掛かる。一方シャナはどうやって対処しようか、ゆつくりと思索している。だが今日は、ある目的で来たため、戦い方を決めた。

（今日だけは、姉としてではなく、お父さんの代わりに力を見極めてあげるってばね）

シャナは、懐から以前ナルトに預けて以来、ずっと家に飾られていた、波風ミナトのクナイを取り出した。

(あれは、ミナトのクナイ)

特徴的なクナイを取り出し、それに粒遁のチャクラを纏わせていく。そして地響きと共に駆けてくるナルトの一人にクナイを投擲。それは油断していた影分身の体を貫通。頭部や胸部を貫く。影分身相手に手加減の必要はなく、未来視によって本体を殺すミスはない。故に殺戮が始まる。

「おらあ、え、あれ」

クナイを投げたシャナの足元から地面を掘り進んでいたナルトが現れ、その両足を掴む。それに合わせて他のナルトが攻撃を仕掛けたのだが、シャナの姿が消える。掴んでいた筈の足も消え、全体が混乱するが、シャナは投げたクナイの位置へと粒遁・天門の術で瞬間移動していた。

他の影分身達が瞬間移動したシャナを見つけ、一斉に襲い掛かるも、クナイを空へと投げたのち、瞬間移動して全体を空から見渡せる位置に移動。

ナルト達がそれを見て、クナイの位置に移動していると理解するが、理解してもどうにもできない。

「手裏剣影分身の術」

粒遁を纏ったクナイを投擲すると同時に、それを影分身させ数百本へと増やす。それらはナルト達を貫いて地面に突き刺さっていく。

「なんか、いつもの姉ちゃんの戦い方じゃねえってばよ」

「今度はどこに行ったんだってばよ」

フィールドを埋め尽くしたナルト達だが、天門の術によって神出鬼没なシャナに混乱している。クナイに飛んでは、周辺にいるナルト達の首や心臓を貫いていく。そして、ナルト達よりも、綱手と自来也の二人がシャナの戦い方を見て、驚愕していた。

二人とも知っているのだ。この戦い方を、この戦い方をする人間を。

「自来也。これは、黄色い閃光の戦い方ではないか」

「ああ。儂も今驚いておる」

シャナの戦い方は、明らかに四代目火影、木ノ葉の黄色い閃光と呼

ばれた波風ミナトそのものだった。ミナトの術をメインに据える忍であるシャナ。うちは一族の術や粒遁や泡遁など、レパートリーも多く、次世代型の閃光というスタイルが一変。

全てがミナトと同じ、木ノ葉の黄色い閃光スタイルで戦うシャナ。優劣としては、いつものスタイルの方が強いのだろう。けれど、その精度や練度は、ミナトをよく知る自来也ですら見間違えるほどだった。

マーキングを施したクナイを配置し、縦横無尽に瞬間移動で奇襲を仕掛けるミナトの動きを再現しているシャナ。

「クナイ抜いて、一か所に集めるってばよ」

何人も葬られ、ようやく立てた作戦は、瞬間移動先のクナイを拾って一か所に集める人海戦術を取るナルト。影分任の数で圧倒できる彼だからこそできる作戦だろう。

少しづつクナイを一か所に集められ、移動先が限定され始めるシャナ。クナイを投擲し、さらに移動範囲を広げようとするも、投げたクナイにナルト達もクナイで迎撃を始める。

(想定より、対応が早いってばね)

シャナの思考は、あえて父としてナルトを見極めようとしていた。暁のような連中に狙われるナルトにとつての及第点として父を選んだ。明らかに見積もりが高すぎるが、特殊能力はなく純粹な忍術だけで上り詰めた父に手も足も出なければ、生きていく事は不可能だというのがシャナの判断だった。

そして、彼の知らないお父さんの強さを見せてあげたかった。ナルトの実父がどれほど素晴らしく強い人だったのかを。自分がナルトに教えてあげられる父の話は、彼の強さだけ。今伝えられるのはそれだけなのだ。

自己満足だと思っただけでも、それが旅立つナルトに送ってあげられる餞別だった。やがて影分身達を半分削った段階で、マーキングを一か所に集められたシャナ。

「いくってばよ!!」

瞬間移動できなくなったシャナに肉弾戦を仕掛けるナルト。大勢

を相手にシヤナは、口でクナイを啞え一人でその攻撃を裁いていく。両手でナルトの攻撃をいなし、大立ち回りを見せていく。姉が強い事なんて百も承知。

少しでも隙を作ればいい。乱戦の中で螺旋丸を影分と共に作るナルト。そして完成したと同時に前衛の三人が煙玉で煙幕を形成する。

煙で視界を覆われたことで動きを止めるシヤナ。だが、未来視によつてナルトの動きを洞察。クナイを投擲する。

螺旋丸を携えたナルトに飛来したクナイは、螺旋丸作成に携わつた影分身がクナイで弾くことで軌道を上に逸らすことで防ぐ。螺旋丸を携えたナルトを飛び越えたクナイ。

シヤナも螺旋丸を形成して迎え撃つ。

「螺旋丸!!」

ナルトの繰り出す螺旋丸を見て、シヤナは感慨深い感情が胸に沸き上がった。

(やつぱりお父さんの子だつてばね。完璧な螺旋丸だつてばね)

本当ならシヤナが教えてあげたかつたが、彼は師の手を借り自分で体得した。弱く守るべき対象だつたナルトは、間違いなく成長している。それもシヤナの想定を超える速度で。

「けど、まだお前はスタートラインに立つただけ」

お互いに螺旋丸を繰り出すかと思われたが、先程投げて弾かれたクナイがナルトの背後に落下する寸前で天門を発動。ナルトの背後を取る形で彼の背中に不意打ちで螺旋丸を叩き込んだ。

「がはっ」

螺旋丸の直撃を受け、影分身は消失。天門、螺旋丸、手裏剣影分身の三つしか術を使っていないシヤナにナルト達は完全にペースを掴まれてしまつていた。

(飛雷神・二の段。自力で辿り着いているのか)

今の動きは、シヤナが見たこともないミナトの動きだつた。だが才能でミナトを超えるシヤナは、センスだけで飛雷神の使い方を体得していた。



「さて、次はどうするってば……そう、自分の意志で少しなら引き出せるのね」

シヤナが、ナルトに目を向けるといつもの青い瞳ではなく、赤い獣の目をしていた。忌々しい九尾のチャクラをナルトは引き出していたのだ。このまま戦っても勝ち目はないと判断したからなのかは不明だが、爪や牙が鋭くなり、赤いチャクラを迸らせるナルト達。

シヤナが九尾を嫌うように九尾もシヤナを嫌っている。故に力を貸し与えているのだろう。

「解」

九尾相手とはいえ、理性をどうにか保つシヤナ。首を撥ねてしまいそうな衝動を抑えながら、シヤナも自分の血に宿る力を引き出す。印を結ぶと同時に、シヤナのチャクラの質が変化する。感知タイプである八雲は、肌でその異質なチャクラを感じ取っていた。

一瞬だけ顔に文様が現れるが直ぐに消え、特殊なチャクラを身にまとうシヤナ。隠し玉があるのはナルトだけではない。

「ぐるる」

「せっかく力を引き出したんだってばね。睨み合うだけじゃもったいないってばね」

掛かって来いと手で招けば、ナルト達はそれぞれ赤い螺旋丸を作り上げ、一斉に押し寄せてくる。先程とは速度や威力も格段に上昇。

一方でシヤナは、冷静に待ち構え、得意げに術を発動した。

「粒遁封印術・金剛天鎖」

片手で印を結び発動された術。シヤナの巫女のチャクラを使用して作られた何十本もの鎖が彼女の背中から生え、蛇のようにうねりながら、九尾のチャクラを纏うナルト達に巻き付いてく。ナルト達が避けようとしても速度が速く、一度捕まると九尾の力で強化された躰でも引きちぎれない鎖。それらが次々にナルトに襲い掛かり、拘束していく。

「なんだってばよこれ」

「くそ、動けねえ」

「それに力が、抜ける」

抵抗として螺旋丸で迎撃を試みるが、鎖は螺旋丸でも破壊できなかった。そして、シヤナの鎖は、触れたチャクラを吸収して、強度を上げていく特別仕様。シヤナが持つ中でも最強格の封印術である。巫女のチャクラという特殊なチャクラを使う都合上、実は忍術を使用できない欠点が存在する。

巫女のチャクラは忍術に使用できず、使える術も金剛天鎖のみ。しかも切り替えは時間がかかるというデメリットも多い。

「あれは、うずまき一族の術ではないのか？　なぜ、うちは一族のシヤナがああ封印術を」

「あの子はクシナ似だからかの。性格だけでなく、術まで使えるのは初耳だが」

父親の術に続いて、母親であるうずまきクシナの得意とした封印術、金剛封鎖そっくりの術を使うシヤナ。二人の血を継いでいないにもかかわらず、二人の力は間違いなくシヤナの中で生きていた。

（喜べ、クシナ、ミナト。あの娘は、真正正銘お前達の娘だ）

ナルト達のほとんどを捕まえたシヤナは、指揮者のように手を動かし、鎖を精密操作していく。

「畜生、放せつてばよー！」

「縛殺」

鎖を完全にコントロールできるシヤナは、ナルト達から急激にチャクラを吸い取り、強度を上げたのちに締め上げる事で、数百の分身体を破壊した。あくまで両親の術に拘っても、ナルトを圧倒するその力。勝負あつたかと思われたが、影分身達を囿に、本体であるナルトは諦めずにチャクラを練っていた。

残った影分身は、10人にも満たない。

それらも鎖を操るシヤナによって、次々に消されていく。

「そろそろ終わりだつてばね」

「ああ。終わりだつてばよ」

影分身二人が、本体であるナルトを上空へと投げた。何をするつもりだと空を見上げながら、残った影分身を鎖で引き裂いたシヤナ。

上空にいるナルトは、最後の手段を取るほかなかった。指を歯で咬み、血を流すことで準備は整った。

「口寄せの術!! 約束通り頼むってばよ親ビン」

「まあええやろ」

上空で巨大な煙と共に、巨大な蝦蟇が姿を現す。蝦蟇は、木ノ葉崩しの際に呼び出され守鶴と戦った妙木山の巨大な蝦蟇、ガマ文太だった。彼は決闘前にナルトに頼まれ、口寄せされる約束を取り付けていた。対価は、彼の息子たちの世話と木ノ葉観光であった。

「ナルトの奴、ガマ文太を口寄せしやがった」

その巨体は、シャナを踏み潰す勢いで落下していく。流石にやり過ぎかと思われたが、シャナは動じることなく既に巫女のチャクラを解除し、万華鏡写輪眼を使用していた。

「悪いな嬢ちゃん!」

シャナが何かしようとするのを感じて、巨大なドスを振り下ろしたガマ文太。あらかじめ聞かされていたが、油断も加減も不要と一撃で止めに入る。

「須佐能乎」

超巨大なドスは、シャナの発動した第三形態の巨大な須佐能乎の腕で白刃取りされる。更に残った4本の腕がガマ文太の顔や腹を殴打する。

「ぐ」

「親ビン!!」

ガマ文太の巨体に匹敵するサイズの須佐能乎。その攻撃の重さは、ブン太でも何発も貰ったらダウンしてしまう程。すぐに距離を取るため跳躍し、印を結ぶ。ナルトは彼の頭から振り下ろされないようにしがみ付いている。

「水遁・水鉄砲」

巨大な蝦蟇の口から水球が発射される。対するシャナの須佐能乎は、6本の腕でそれぞれ別の印を結んでいる。

「なんじゃと!」

須佐能乎から繰り出されたのは、2種類の風遁の術、そして火遁。

竜巻のような炎と燃える空気の刃が水鉄砲を貫通し、ブン太に直撃する。両腕でガードするもダメージを負ったブン太が地面に着地すると、着地点には、シャナの須佐能乎が構えており、両腕を掴まれ、何発も拳を貰う。

「ええ気になるな！ く、ぐおおお」

仕返しにと強靱な舌で須佐能乎の顔面を殴打する。しかし、二撃目には、舌を腕で掴まれ、そのまま怪力によってハンマー投げのようにして投げられてしまう。

投げられ地面に叩きつけられる寸前に、ナルトを庇うブン太。彼の手で庇われたことでナルトは無事だが、ブン太の方は、限界だった。

「すまん、ナルト。骨が折れたようじゃ」

「いや、ありがとうだってばよ親ヱン」

シャナの強さが規格外過ぎて、手段全てが打ち破られてしまった。ガマ文太も消え、残されたナルトは、それでも諦めずに影分身を作り螺旋丸を作成する。一方でシャナも須佐能乎の代償からくる痛みで、すぐさま須佐能乎を解除。

どうにか耐えながらも、一步一步、ナルトに向かって螺旋輪虞を形成しながら駆け寄ってくる。ついに決着かと思われたが、自来也と綱手は、気が付いていなかった。

シャナの目は、既に弟を見る目ではなく、九尾を見る者にならなくなってしまった。戦いがヒートアップにするにつれ、九尾のチャクラを惜しみなく使うナルト。そのチャクラによって押さえつけていた憎悪の炎が、シャナの理性を焼いてしまった。

螺旋丸を作るもチャクラ切れで、ついに気を失い倒れてしまったナルト。勝負あったかと思われたが、シャナは止まらない。

既に決闘ではなく、シャナの頭にはナルトではなく九尾を殺す事しか頭になかった。このままでは、ナルトを殺してしまう。

もうシャナにも制御できない憎しみが体を奪い、九尾を殺そうとしていた。

「いかん！」

シャナの殺気に気が付いた自来也が術で動きを封じようとするが、

シヤナのトップスピードに間に合うはずがない。

「其処まで」

「シヤナ、落ち着きなさい!!」

自来也は間に合わない。だが、シヤナの様子の変化を機敏に感じ取れる第四班の二人は違う。シヤナの殺気を感じるなり、トルネと八雲は走り出していた。トルネは持ち前の速度で、シヤナの前に出て腕を掴み、術で加速した八雲は、シヤナの両目を掌でふさぎながら、彼女を落ち着けようと幻術に嵌めた。

シヤナの速度に反応できる二人だからこそ、間に合ったと言える。腕を動かそうにもトルネの膂力にシヤナが勝てるはずがなく、八雲の幻術によって九尾の気配は消え、シヤナの視界には、海岸が広がっており、憎悪の矛先を失う。

シヤナはわかっていたのだ。自分がナルトと戦えば、理性を失うと。だから、二人を呼んだのだ。自分が一番頼りにしている仲間を。

「……ごめん、もう大丈夫だってばね。ありがとう」

少しして落ち着いたことで、シヤナの理性が戻った。それを皮切りに、自来也によって姉弟の決闘の勝者がシヤナだと宣言された。

「やっぱ、姉ちゃんはすげえってばよ」

ナルトは、空を見上げながら手も足も出なかったことに涙していた。

決闘の後日。ナルトは、自来也と共に修行の旅に出る。シヤナはそれを見送ることはなかった。ただ、家から出ていくナルトに「必ず帰ってくるってばね」と抱擁を行った。

そして、木ノ葉の仲間達に見送られながら、彼は旅立った。

## 昇格祝い

ナルトが旅立ってから、一月。任務に勤しみ、気を紛らわせていたシヤナ。

だが久しぶりにヤマトから声を掛けられ、他の第四班のメンバーと共に料亭に連れてこられていた。お座敷の少しお高いお店であり、いったい何なのかとそれぞれが困惑していると、ヤマトは懐から3枚の封筒をそれぞれに差し出した。

「今日呼んだのはこれが、目的だよ」

三人共顔を見合わせながら、封筒を開封していく。そして、一番に反応したのは、八雲だった。

「え、先生。これって、もしかして」

突然泣きそうな声でヤマトを見る八雲。この反応は、想定内だと笑顔で頷くヤマト。すると八雲は隣にいたシヤナに感極まったとばかりに抱き着いた。

「やったよ。私、私達、今日から特別上忍だよ!!」

シヤナの用紙と八雲の用紙には、正式に木ノ葉から特別上忍への任命書が入っていた。目標だった上忍とほとんど変わらない役職への出世に、八雲は歓喜しているのだ。

中忍試験と違い、特別上忍への出世には、他の上忍や火影の推薦等が必須。さらに実力も秀でていなければいけない。

「よし、よし。良かったってばね八雲」

シヤナは、泣き出した八雲の背中を叩きながら、おめでとうと祝福する。あまり同じ任務に行けなくなった八雲。だが彼女は、積極的に任務をこなしていた。真面目に任務をこなし、臨時で班編成された下忍たちの面倒もしっかり見ていた彼女の事だ、里からの評価が高く、推薦は多くもらえたのは必然だろう。そして、里屈指の幻術のエキスパートであり、その研鑽も続けている。

ハンカチで八雲の涙を拭いながら、ヤマトを見るシヤナ。

「なんで私も?」

八雲の評価は妥当。しかし、シヤナは、自分が里の上層部に嫌われている自覚があつた。なら、中忍レベルで飼ひ殺しにするのが当然だと思つていた。

里としても下手に出世させると面倒なはずなのにと表情で語るシヤナ。

「まあ八雲は、多くの上忍から推薦があつた。逆にシヤナは、なんていうかな。僕やカカシ先輩の推薦のほかに、火影様や自来也様の推薦があつたんだ」

里の上層部の妨害を防いだのは現在の火影と伝説の三忍の自来也の推薦だつた。カカシとヤマトも評価が高い忍であり、上層部と意見は真つ向から別れてしまつた。

上層部は、シヤナの人格や部隊長としての資質を問うて来たが、一方で火影たちはシヤナの功績を挙げていつた。

公式で残っている記録だけでも凄まじいものがあり、最近では国際指名手配された犯罪者、グライアと交戦し、退けている。さらにナルトが旅立つた後の一か月の間に、秘かに木ノ葉を狙つていた白金一族と言う傀儡使い達を抹殺し、彼らが起動した念珠によつて封印されていた自動傀儡、名を『究極の傀儡』を単独で撃破。

未曾有のテロを防いでいる。むしろ上忍にするべきだという声も上がるほどだつた。

そこで打開案として、戦闘のスペシャリストとして特別上忍の地位が用意される運びになつた。シヤナには、下忍たちの戦術指南役なども任される予定となつている。

「ヤマト隊長。これはいつたい」

シヤナに丁寧の説明し、どうにか納得させたヤマトだったが、一番最後にトルネが疑問を口にした。彼の用紙には、上忍昇格の文字があつたからだ。

「それについては、僕は何も疑問に思つてないよ」

「あ、トルネ君、上忍になつてる！」

「え、なんでだつてばね？」

シヤナだけ少し不満気だが、ヤマトは何もおかしなことはないと言

明を続ける。トルネは、何度も班を率いた遠征任務に出ており、指揮能力や班員の管理能力も高く、優れた戦闘能力も併せ持っている。さらに人格も冷静沈着であり、忍として最も適性が高く問題が見受けられない。

里からの評価が一番高いのはトルネだった。彼に関しては、上層部も異論はなかったため、上忍への昇格が決まったのだ。

「俺には、荷が重いような」

「そんなことないよ！ トルネ君が隊長になった子達も、すごく頼りになったって言ってたよ」

「まあ、体術に関しては、私より強いのは認めるってばね」

同期のトルネが上司になってしまい不満なシヤナ。だが、隊長の適性が高いという説明に反論できない。自分自身、論外だと思っているからだ。逆に八雲は少し優しすぎるので、非情な決断は出来ない。

「ということ、今日は第四班の隊長である僕から、君たちの特別上忍、上忍祝いをしようと思ったんだ。好きなだけ食べてくれていいよ」

報告はこれまで。後は宴だと言わんばかりに、彼の合図で高級料理がたくさん運ばれてくる。それを見て3人共腹の音が鳴る。こういう所はまだ子供だなどヤマトは、子供たちの昔の姿を思い出した。

出会ったところから、恐ろしいほど戦闘力が高かった彼らだが、今となっては立派に成長したと感じ取っていた。ヤマトは、気を利かせたトルネにビールを注いでもらう。

一方、小皿にいろいろよそって食べている八雲と稲荷寿司を頬張っているシヤナ。

「本当にうちの班にトルネが居てよかったよ」

「俺もです」

第四班は、女性が強いいため、数が同等になる男が居てこれほど助かった事はないだろう。一番意見が合うのはヤマトとトルネなのだ。

「八雲、それとって」

「自分で取りなよ。もう」



「ありがとうだってばね」

男組は、信頼が厚い。そして女性陣も面倒見のいい八雲と少し甘えたりなシヤナでバランスがいい。つくづく自分は恵まれてるなど自覚するヤマト。

後数年すれば、彼らは里の中心人物となっていくだろう。里の年寄り達に、若く勢いのある新時代を止めることなど不可能だ。実際、戦闘力だけでいえば三人が里と戦った場合、里は壊滅するだろう。それくらいの才能が彼らにはある。

だからこそ、大人の自分が盾となり守り、正しく導きたいと思えた。「ヤマト」

「まだ隊長だよ。なんだいシヤナ？」

「お酒飲んでみたいってばね」

シヤナがヤマトのビールを指さす。だがヤマトは首を横に振る。

「まだ駄目だよ。成人してからの楽しみに取っておきなさい」

「けど、八雲のんじやったってばね」

「え？」

シヤナの言葉を聞いて、八雲の方を見れば、顔を真っ赤にした八雲がトルネに絡んでいた。八雲の傍には、ビールのビンが倒れており、おそろくかなり飲んでいる。

シヤナはヤマトに確認を取ったが、八雲はこっそり飲んでしまったのだ。

「ええねえ、トルネ君はさあ、わたしのこと、どうおもってるんですかあ？　ねえ？　はつきりいえよ！」

「水を飲むんだ八雲」

「ねえったらー！」

胸倉を掴んで馬鹿力で、自分より体の大きいトルネを振り回す八雲。一方、トルネは八雲を落ち着かせようとするが、無駄そうである。「やれやれ、とりあえず八雲を止めるの手伝ってくれるかなシヤナ」  
「酔うと、八雲私より力強いから、相手したくないのに」

流石に祝いの席で暴れさせるのもどうかと、3人で八雲を取り押さえ、水を飲ませれば、少しして意識が戻った八雲。

そして、色々ハプニングがありながらも三人の上忍昇格祝いは、幕を閉じたのだった。

## コダマ外伝 壺

生物兵器コダマ。暁に所属する少女であり、通り名通りの怪物である。彼女は今日もペインによって与えられた任務をこなすため、空を飛行していた。今日は巻物を、暁のメンバーである角都に届ける事だった。

暁一の飛行能力を持つ彼女は、その移動範囲の広さで、国外にもよく足を運んでいた。問題は極度の方向音痴と地図を見るのが苦手と言う弱点の為、寄り道が多い事だろうか。

そんな彼女は、渡り鳥に意識を取られ、目的地ではなく海岸にたどり着いていた。

そして、海岸にいる蟹を捕まえて食べていると、砂浜に打ち上げられている人間を見つける。

「おー。女の人だ。死んでる？ それに変な手」

水死体だろうかと近づくとコダマ。浜にいるのは、赤い髪に紫のメッシュの入った女性。黒い軍服を着て右腕が機械の義手だった。それが不思議で近付くと、気を失っていた筈の女性は目を覚ました。

起き上がった女性は、腰に巻いたガンベルトから銃を抜いて、コダマに向ける。そして、容赦なく引き金を引いた。そして発射されるチャクラ砲がコダマを襲う。

「ペー」

右手に持った巻物(?)を庇って左手を巨大な獣の腕に変化させたコダマは、チャクラ砲を力いっぱい弾いた。そして、攻撃してきた女性を敵と断定し、容赦なく巨大な爪で引き裂こうと接近を仕掛ける。

巨大化した手で攻撃を弾いて接近するコダマに何発もチャクラ砲を発射するが、平気で向かってくる彼女に下がりがら迎え撃つために、青い写輪眼を万華鏡写輪眼に切り替える。それを青い写輪眼で見ているコダマが、ピタリと動きを止める。

「須佐の」

「ああー！ー！！ おんなじ目だ！」

ビシツと女性を指さしながら、大声を上げるコダマ。突然の大声に、女性は動きを止めてしまう。そして偉く興奮気味に駆け寄ってくるコダマに、警戒心が緩んでしまう。

「なんて？」

「お姉さん、私とおんなじ目、ホラ！ 同じ！」

女性に駆け寄るなり、自分の目を指さして女性の目を指さす。確かに彼女の指摘通り、二人は青い写輪眼を持つ者同士だった。血継限界の中でも特に珍しい青い写輪眼持ちの二人。ぴよんぴよん跳ねながら喜んでいるコダマを見ていたら、毒気が抜かれたのか、女性は力なく地べたに座り込んでしまう。

特に毒気を抜かれた原因は彼女が大事そうに握っている物だろう。

「いろいろ自分には聞きたいことあるんやけど、まずはええか？」

「ええか？ ええか……いいよー！」

まっすぐに見つめあう二人。一触即発だったが妙に和やかな雰囲気気が漂ってしまう。

「なんで、大根持つとるん？」

女性が指摘する言葉をコダマは理解できなかった。そして、彼女の指さす自分の手を見てみると、なんと、大根を握りしめていた。

「え？ ええ——！！ なんで？ 巻物は!? どこ!? なんで大根持つてるの!?!」

どうやら大根を巻物と思いながら運んでいたらしい。とりあえず落ち着くように女性が宥め、少しづつ思い出すように提案する。そして、彼女は出発前の出来事を思い出していく。

「えーと、昨日の夜に、小南とデイダラとサソリに落とし穴掘って、悪戯したの」

彼らが帰ってくるって聞いて、集会場の入り口に落とし穴を掘って罠に嵌めようとしたコダマ。サソリは、事前に気が付いて失敗。盛大に睨まれ、尻尾で攻撃された。ただ、すぐに許してくれた。問題は残りの二人だったのだ。

落ちなかつたものの、落ちかけたデイダラがひどく怒って、爆弾片手に追いかけてまわしてきた挙句、コダマを捉えられないと知ると、彼女の部屋に侵入し、冷蔵庫のお菓子を全部持つて行ってしまったのだ。そのことに激怒し喧嘩になるもペインとサソリに睨まれる形で争いは終了。次は、頭からタライを落としてやると誓った。

そして、残つたのは小南。彼女は完全に油断していたため、落とし穴に見事に嵌り、可愛い声を挙げながら落ちてしまった。その声にコダマとデイダラが笑うと、氷のような表情で睨まれ命の危機を感じた。

小南もコダマにお仕置きしようとお菓子の没収を行ったのだが、既にもぬけの殻。なのでしばらくは、野菜生活をさせるという手紙と共に、野菜で冷蔵庫を詰められてしまった。

そして今朝、任務を貰い、おやつを持っていこうと冷蔵庫を開けた時にコダマは絶叫。お菓子の代わりに野菜なんて嫌だと叫ぶが誰にも届かない。冷蔵庫の奥まで探すが、お菓子が一つもなく絶望しながら飛んできたと言う。

「たぶんそこで大根と巻物が入れ替わつとるな」

泣く泣く大根をかじり始めるコダマの話聞いていた女性は、冷静に推理する。そして、この子はあほやと正しく認識した。年齢こそ10歳前後に見えるが、相当天然で知能は低いらしい。そのぶん、戦闘能力は高いのだが。

「大根甘くないよ〜コダマのチョコバー、どこ」

また取りに戻らなければいけないと、落胆するコダマ。女性は、目の前の子供を見ながら、周囲から愛情をたくさん受けて生きているのだと感じた。失敗を恐れず、好き勝手に悪戯までしているのだから、この子の周りはなんやかんや甘いのだろう。

実は忍五大国を脅かす規模のテロ集団とはさすがに知らない。

「攻撃して悪かったな。ちよつと、気が立ってて、それで、く、あかん」  
流星にこの子供から情報を引き出すことは難しいだろうと立ち去ろうとした女性だが、体に力が入らず倒れ込んでしまう。

「大丈夫？」

「命に別状はあらへん。けど、海で戦った時、毒で、痺れがな」

女性は、この大陸に渡ってくる際に乗っていた船を巨大な蛸の怪物に沈められたという。化け蛸は、容赦なく殺したのだが、その際に毒を食らってしまった。その毒によって船員たちは即死。女性は、死にたくても簡単に死ねない体質だったことで、死にはしなかったが、神経毒故に体がうまく動かないのだ。

いつになったら回復するかわからないが、おかげで海で何度溺れた事か。流石に体力が尽きて、海岸に打ち上げられたのだ。

だがこれで溺れ死ぬことはないとわかった。しかし、即死する毒と違い、麻痺させる系統の毒は、効果を発揮し続けるのが厄介でもある。「毒……、お医者さん呼んでくるね」

生まれつき毒が効かないコダマ。だが、常人は毒で死ぬことは知っている。自分の攻撃に毒があり、それが有効だと理解している。目の前の女性も平気だと言っているが、顔色が悪くどう考えても無事ではない。だから助けるために医者を探すことにした。

幸い上空で遊んでいた時、街らしき建造物を見つけている。ペインの任務が引つ掛かるが、この女性を助ける事を優先する。

「ええよ。別に」

「良くないよ。コダマ、お姉ちゃんの心が読めるんだから」

盛大に自分の能力を語るコダマ。冗談かと思ったが、コダマが嘘をつけるタイプでないのは、あつて数分でも明白だろう。自分を恨む人間は多く、賞金首になっている現状、まともに動けない今は、確かにまずい。

「コダマ。氣い付けや」

諦めて任せる事にした。青い写輪眼持ちである以上、女性は気が付いていた。コダマも自分と同じ血筋であり、妹である可能性が高い事を。

「うん。そういえば、名前は？」

「グライア」

コダマは生を聞くなり嬉しそうに笑う。

「グライアお姉ちゃんだ。コダマはコダマ、つて言います。では！」

かわいらしいツイントールが瞬時に巨大な黒い翼となって、一瞬で飛翔したコダマ。それに驚かされつつも、地面に横たわるグライアは、「あの子、ウチ以上になつとんな」と零す。

浜に打ち上げられていたのは、雪の国でシヤナと激闘を繰り広げた【国崩し】グライアだった。シヤナとの対決で不利を察して、敗走したものの、復讐するために忍五大国に渡ってきたのだが、その際に船で事件が起こり、後は海流に流されて来たのだ。

術は使えても忍としての技術は未熟であり水上歩行などが出来ず溺れてしまったのだ。

コダマが医者呼びに言った以上、下手に動くことも出来ない自分は少しでも体力を回復するため、目を瞑る。

(ラビリンズとシヤナ、あのクソ女とクソ妹は、心底嫌いやけど、あの子は結構かわいいな)

自分の姉妹との相性はどれも最悪で、殺したくなる相手だった。年が近い事もあるのかもしれないが、無駄に年上っぽく振舞うラビリンズや生意気なシヤナは、大嫌いだというのが感想だ。

だが、コダマは幼いためか、敵意を抱かなかつた。むしろ、心配になるくらい天然で、今も何かしていないかと考えてしまう。

国崩しと呼ばれ実際に、国を幾つも滅亡させてきた自分がなんともらしくないと自嘲する。

—————

グライアの治療法を探すため、近くにあった漁村に飛んで行ったコダマ。そこで、「お医者さん!!」と叫びながら、病院を探していた。

村に急に訪れた、少女に漁師たちは驚く。あわただしく村を行ったり来たりするコダマ。しかし、残念な事に村に専属の医者はおらず、少し離れた村に薬師が居るだけだと、伝えられる。

そんな彼女にある村人が思い出したかのように、話をしてくれる。「そういえば、村はずれの空き家に今、世界を旅しとる医術の先生がおったはずじゃ。あの大きな木の下じゃよ。」

白髪にバンダナをしたデカイ爺さんと赤毛にバンダナの坊主と、車椅子の嬢ちゃんとの三人組だからすぐわかると思うぞ。その人に見て

もらうとええ」

「ありがとう！」

かなりの俊足で、すぐの村から消えるコダマは、猛スピードで村はずれの空き家に向かうのだった。



## コダマ外伝 弐

医者を探すため走っていくコダマは、言われた通り大きな樹の下にある木製の小屋を見つける。

流石に突撃するほど、礼儀知らずではないコダマ。乱れた服装を整え、埃を払ってから入ろうとするが、偶然ポトリと袖から手裏剣が落ちる。

それを拾っている時間はないと、扉を開き、恐る恐る入る。

「あの〜お医者さんいますか?」

静かに扉を開け、中に入ったコダマ。だが中から返事はなく、誰も居ないのかと不安になるが、僅かに息遣いが聞こえ、その方向に目をやる。

木漏れ日が少し入る家の中は、閉め切っており薄暗く、暗闇の中に車いすに座る少女がそこにいた。

「あ、いた」

コダマの青い写輪眼は、暗闇でもはっきり見えていた。そして、車椅子に座る少女がコダマと同じくらいの年齢だと分かった。だが全体的に細く、白髪のようなだが所々血の様に赤い髪に民族衣装を着ているが顔や体中に包帯が巻かれていた。そんな姿ながらも顔は、酷く美しくコダマも見ほれる程だった。

だが、閉じられた目が開かれた時、コダマは命の危機を感じ取った。暗闇の中で光る青い瞳。それは写輪眼に他ならなかった。

そして、目が合った瞬間、読心術が使えるコダマが聞いた言葉。

『食らい尽くせ霊尾』

少女の体から半透明の細長い手のようなものが数十生え、それらが空き家中を覆いながら一斉にコダマに襲い掛かる。本能から回避行動をとったコダマは、空き家の壁を突き破って脱出。しかし、半透明の触手がコダマを追跡して伸びる。手には、無数の口が生えており、非常に不気味に映る。

動きは、特に速くはないが、数が多く、コダマは地面を駆け巡りながら攻撃をかわしていく。しかし、コダマが攻撃を躲したところにいた鳥が手に捕まる。半透明な手に捕まった鳥は、凄まじい速度でチャクラを吸い取られ、絶命する。獲物が死んだことで、鳥を放り投げた手は、元のターゲットであるコダマを狙う。

(捕まると、チャクラを食べられちゃう。なら遠くから)

チャクラを吸い取る手。数本であれば問題ないが何十本もの腕に捕まれば、コダマとて耐えられないかもしれない。そこで翼を生やし空を飛んで遠距離攻撃を仕掛けるコダマ。手の発生源である空き家目掛けて、羽手裏剣を投擲。

空に飛びあがったコダマを追いかけていた手だが、本体に危機が迫ったのを感じたのかコダマの羽手裏剣を迎撃していく。触手の部分で受け止めたり、掌で掴んだりと攻撃を防ぐ。とはいえ、運動性があまり高くないのか、空き家中をとぐるを巻くように守る行動をとる。

半透明と言えど、質量はあるのか触手に突き刺さり止まるコダマの羽手裏剣。何十本も発射される羽手裏剣。その鋭い切っ先は、鉄板すら貫通する威力を持つのだが、徐々に数が増え増していく触手の質量の前に全部止められてしまう。

そして、コダマが次の手を考えていると、空き家の扉から車椅子を触手で押して出てきた少女が現れる。その青い写輪眼は、コダマと違い深い闇に沈んでいる。

生命力にあふれたコダマと正反対の少女は、興味なさげにコダマを見上げる。

「……」

「コダマ、戦いたくないんだけど!? やめない?」

今は戦ってる場合ではない。そう言いながらも両腕を巨大化させ戦闘態勢に入ってしまうのは、目の前の少女が危険だと本能で察するからだ。コダマの人生でも怖いと思える相手が車椅子の少女だ。

「…………ごめん無理」

あっさり断られてしまった。何故か胸を押さえながら苦しそうな少女。しかし、彼女の発生させた触手たちは、空にいるコダマを追いかけて伸長を始める。空中戦では、コダマに勝てる忍はいない。コダマはトップスピードで触手を置き去りにしながら、少し悩んでいた。少女と目が合った時、本当は戦いたくないと少女は思っていた。だが実際は攻撃してきている。それがわからない。

「どうしよう。こまった」

はるか上空へ飛んだコダマは、重力に従って急降下。とりあえず相手を倒してしまうしかない判断。高速で落下するコダマに触手たちが迫りくるが、コダマはそれらを高速で回避しながら、本体である少女に強襲をかける。

少女の周囲の触手は、少女を守るようにとぐるを巻いて盾となる。コダマは巨大化した拳を握って、その盾を殴りつけた。

超スピードかつ怪力のコダマの拳は、少女を守る触手の肉壁を貫通しながら、一気に少女に迫る。

(チャクラ食べられてる)

触れただけでチャクラを食っていく食欲を持った触手によって、チャクラが吸われていくのを感じるコダマ。だがコダマは、暁で鬼鮫が称賛するほどのチャクラの塊。そうやすやすと空っぽになったりしない。

触手の壁を突破して、少女に攻撃が届くかと思われたが、突然少女の中から額に霊と書かれた黒い仮面をつけた白い大蛇のような長い体を持った怪物が具現化。少女を大切に守るように立ち塞がり、何本もの触手を束ねた巨大な腕で、コダマの拳を受け止める。

一本一本は人間の腕くらいの力だが、束ねればコダマの怪力を受け止める膂力になる触手。攻撃を受け止められ、さらに怪物に殴り飛ばされたコダマ。森の木々に激突し、気をなぎ倒しながら岩に背中を強打する。

「痛い、いたた、もう、もうもう!!」

少女は、本心で戦いたくないと言っている上、今も負けたと思っていた。なのに、少女の意思とは別に黒い仮面の怪物と触手がコダマに攻撃を仕掛けてくる。そのちぐはぐさに痛い攻撃を貰ってしまった。悪意を持って攻撃してくるなら、コダマもやり返すのだが。

少女は、無表情ながらもずっと心の中で叫び続けているのだ。

【ごめんなさい】【許して】【こんなことしたくない】【お願い、早く逃げて】と心から。

「コダマ、ちよつと本気出す！」

そう宣言したコダマは、印を結び始める。そして、周辺の木々を紙に変えていく。それらはコダマのチャクラによって操作され、巨大な折り紙の手裏剣へと形を変える。

「忍法・式紙の舞。紙手裏剣！ 風遁・烈風掌！」

高速で回転した紙の手裏剣は、少女と怪物に向かって飛んでいく。それらを触手がオートでガードしようとするが、回転し切れ味が高い手裏剣はそう簡単に止まらない。さらに追撃に風遁の術を放つことで回転力を上げるコダマ。

コダマは、日頃遊んでいるが、忍術の修行はまじめにやっている。うちは一族の才もあるのか、通常の忍術なら印さえ覚えられれば、すぐに使えるようになった。そこで一番長く一緒に居る小南に教えてもらったのがこの術だった。

「……霊尾」

コダマが攻めに転じたことで、防御を固めていく少女と怪物。紙手裏剣を束ねた腕で殴ることで防いでいく。だがコダマが畳みかけるように黒い翼から羽手裏剣を発射。

「火遁・豪火球の術」

イタチに教えてもらった火遁の術で羽手裏剣を燃やし、攻撃力を高める。コダマの炎を見た瞬間、少女が何かに怯えるように悲鳴を上げた。

「嫌、こない、で」

少女の声と共に怪物が少女の前に出て、触手を操作し、コダマの羽手裏剣をつかみ取っていく。触手はほとんどがチャクラで構成されているのか、炎で燃える事はない。

そして、炎は、チャクラを食う触手によって勢いを弱め鎮火。コダマの羽手裏剣だけが残る。無数の羽手裏剣を掴み防いだ怪物。だがコダマは、それを狙っていた。

「喝」

印を結びそう唱えた瞬間、コダマの羽手裏剣に混ざっていたトビウオの形をした粘土が爆発。何本も一斉に爆発したことで、怪物の体が大きくえぐれた。

これもデイダラに教えてもらった起爆粘土を用いた術だった。

## コダマ外伝 参

起爆粘土の爆発で大きく怯んだ怪物の懐まで飛翔し、仮面を殴り飛ばしたコダマは、残った少女に掴みかかった。

「ひ」

完全に勝負ありだった。怪物はすぐに再生を始めるが、コダマの方が早い。勝敗を分けたのは、コダマと少女の戦闘経験の差だろう。少女は、恐ろしく強い能力を持っている。だが自分より強敵との戦闘経験がない。それ以前に忍ですらない可能性がある。

逆にコダマは、戦闘経験豊富であり、戦闘IQは高い。

コダマの巨大な手で体を掴み上げられた少女。もとより体が弱いのか、まともに体を動かす事も出来ないらしい。そして、恐怖からか静かに泣き始めてしまう。表情は相変わらず無表情なのだが、コダマは心の声を聴いて狼狽えてしまう。

「やめておけ」

コダマは、攻撃されただけで殺したいわけではない。どうすべきか悩んでいると、森の奥から男の声が聞こえた。

振り返れば、バンダナをした白髪の老人が立っていた。彼の言葉の後すぐに、胸を押さえながら少女は、半透明の手や仮面の怪物を解除した。

「お前は誰だ？」

「コダマ。お爺ちゃん、お医者さん？　コダマお医者さん探して此処に来たの」

コダマは、少女を放して、老人に話しかけた。

「医者か確かにワシは、医者だ。なんだ、患者でもいるのか？」  
「うん。海岸にいる。診てほしいの」

コダマの言葉に少し思案し、周囲の様子を眺めながら老人は「案内しろ」とコダマに指示をした。どうやらグライアの事を治療してくれるらしい。だがコダマは、一目見ただけで、目の前の老人の事が大嫌いになった。

彼は心の中で語っていたのだ。

【アレを倒す子供か。それにあの服、暁とかいう傭兵集団のものか】  
【下手に断つて、戦闘再開ともなれば、ワシの計画の妨げになるな】  
【それにしても、役立たずな小娘め。また殺しを拒んで、実力の一割も出せなかったんだろうな。これだから、失敗作は】

老人の心の声を聴き、この場で殺してしまおうかと思ったコダマ。だがグライアを助けてくれるのは彼だけ。嫌々ながらもコダマを怒らせるつもりはないらしく、見逃す事に決めた。

「名前は？」

「ワシは、神農という」

老人は、倒れた車椅子を起こし、少女を座らせて車椅子を押そうとする。しかし、コダマが先に車いすを押すと言って彼をけん制した。そして、コダマは少女に名前を聞いた。

「……」

心臓を押さええながら、言葉が出ない少女。目を伏せてしまっており、心を読む事が出来ない。



「その子は、リトラだ。ワシの弟子の妹でな。今はワシが面倒を見ておる。リトラ、自分の口で話さんか」

「リトラの存在を明かすリスクはあるが、既に青い写輪眼持ちだとかっているのだから、下手に隠す必要はないか」

神農の言葉に、胸の痛みが引いたのかリトラは、移動する際コダマと会話をしていた。

「コダマね、今年で11歳なんだよ。リトラちゃんは？」

「…10歳」

コダマと打ち解け始めたリトラ。時々神農を見ながらも、リトラは車椅子を押してくれるコダマと会話をにつづけた。

「さつきは、ごめんなさい。手裏剣持ってたから、敵だと、思ってた」

「コダマビックリした。リトラちゃん強いんだもん」

「私も。びつくりした」

少しして海岸にたどり着いたコダマ達は、海岸で眠るグライアを見つける。神農は、異国の服装のグライアを不審に思いながらも、傷口や症状を観察し、猛毒の大蝮の仕業だとあっさり看破。解毒薬は、手元がないが麻痺を和らげる薬はあると、テキパキと用意を始める。途中目覚めたグライアが警戒するも、医者だと名乗り治療を施していく。

その間に、車椅子を軽々と担いで、砂浜を走り回るコダマ。リトラは車椅子に掴まりながらも、文句は言わない。

「リトラちゃん。私達と同じ目の人って、見たことある？」

「ある。他の国で、金髪の」

「ラビリンズお姉さんだ。私も会ったことあるよ。海で迷子になったら、色々あって戦う事になって、めっちゃくちや厄介だった」

事実である。戦闘になった際に、ラビリンスの属する軍隊の軍艦を何隻か沈めているのである。そう考えると、コダマは現状青い写輪眼を持つ4人全員と戦った経験がある事になる。

「でも、コダマ今日はびっくりしてる。青い写輪眼を持ったお姉ちゃんだけじゃなくて、妹も居たんだから」

「妹？ お姉ちゃん？」

「そう。コダマの方がお姉さん。おんなじ目持つてる人は、コダマの家族なんだよ」

それはコダマの理想でしかない。コダマはまだ知らないからだ。本当に血の繋がりが自分達にある事を。だが同じ目を持っている人間は、自分と同類だと理解しているが故に、自分を家族だというのだ。

「後ね、シヤナっていうお姉ちゃんもいるんだよ。優しいんだけど、ちよつと怖い人」

「ふーん。おもしろい話しとるな自分ら」

コダマがシヤナの話のリトラにしていると、麻痺が少しマシになったグライアが声をかけてきた。リトラは初めて見るグライアの目を見て驚いていた。

「奇妙な事もあるんやな。同じ目を持ったものが三人も集まるって」「グライアお姉ちゃん、この子はリトラ。私たちの妹！」

勝手に妹として紹介される。距離の詰め方が超特急クラスなコダマ。リトラの写輪眼にグライアも内心驚いていたが、コダマと同じく嫌な感じはしなかった。そのため、ラビリンズやシヤナと違い、好意的に接する事が出来た。

「ほな、よろしく。グライアや」

「よろしくお願いしますグライアさん」

「自分も偉いかわええな。こんな妹なら何人おってもええんやけどな。それに呼び方は何でもええよ。お姉さんでもお姉ちゃんでも」

「グラ姉！」

「ま、ええやろ」

素直で可愛らしいリトラに心を許しているグライア。今日だけで妹が二人見つかった。これでグライアも全員と顔合わせしたことになる。

素直なコダマとリトラは、可愛らしいと好印象だ。その分、シャナのはねつかえり具合が目立つのだが、シャナに一番似ているのはグライアなので同族嫌悪である。

グライアは、リトラの髪を触りながら、包帯塗れの顔を撫でている。

「こうして会えたのもなんかの縁やな。」

そして、何よりこの三人の合流に驚いているのは神農だった。

（小娘だけでなく、あの女もリトラと同じ目を持っているのか。グライアと言う名も、有名な指名手配犯か）

あわよくば、彼女たちも計画に引き込まうかと考えていた時。神農の気が付かないうちに、コダマが彼を下からのぞき込んでいた。そして、無邪気に笑いながらも、神農の胸倉を掴んで引き寄せる。

「おじさん、悪い人だね。けど、助けてもらったから許してあげる。だから、余計ないことしちやだめだよ」

もし余計な事をすれば、神農を殺すと口にしたコダマ。嘘を言えない彼女の本音を聞かされ、神農は固まる。自分の背丈の半分もない小

さな少女に、命を握られている。本気で戦ったとしても、勝てるかわからない。リトラを動員したとしても、グライアがいるのでは負けが濃厚だ。

屈辱に感じながらも、目的のために偽りの人生を歩んでいる神農は、それを飲み込んだ。

「当然だろう」

流石に諦めるしかない。だが、この雪辱は必ず果たしてやろうと心に決めていた。

「神農様、リトラ。こいつらは？」

グライアの解毒剤を作成する目的で、荷物を取りに空き家に戻ると、別行動していた神農の弟子である赤毛の少年が武器を構えながら、警戒していた。だが神農に「患者だ」と告げられ、釈然としない表情ながらも師匠を手伝わない訳にはいかない。

「これね、傀儡って言うてね。こうやってチャクラを使って動かすんだよ」

「凄い。可愛い」

リトラとコダマは、コダマが口寄せした小さな傀儡人形（サソリ作）を使って遊んでいた。恐ろしいのが、コダマの雑な説明でリトラも傀儡の術を使用できている事だろうか。

そして、治療薬を飲んだグライアは、副作用から眠りにつき、コダマもリトラと同じ布団で眠ることになった。患者とその付き添い、その二人ともが妹分であるリトラと同じ目を持っており、赤毛の少年

(?)は、何者なのか神農に尋ねる。

「医者には患者がだれであろうと救わねばならん。いつもそう言っているはずだぞアマル」

「すいません。ただ、リトラとの関係が気になって」

「……リトラの血筋なのは間違いないだろうな。だが心配することはない。あの子は、お前と一緒に居るさ」

「はい。ごめんなさい」

神農に自分の本心を指摘され、気まずそうにアマルは自分の寝室に向かった。

次の日の朝、グライアは空き家にいなかった。謝礼として、多すぎる程の金銀を置いて、旅立ったらしい。彼女の人生の目標はたくさんある。姉やシヤナに対する復讐。そして、自分の人生をつかみ取るという目的が。

グライアが居なくなり、落ち込んでいたコダマだったが彼女もまた、迎えが来た。

リトラ達と離れて、今から雨隠れの里に帰ろうかとした時、森から声をかけられる。

「何をしているコダマ」

「お、角都だ。えーと、巻物を角都に届けようとしてたんだけど、忘れちゃって」

角都と呼ばれた男は、木の陰から姿を現してコダマを見下ろす。任務をさぼって遊んでいた自覚があるのか、ぼつが悪い表情をしている。

「それならもうゼツから受け取っている。お前は、集中力に欠けているなコダマ」

「ごめんなさい」

申し訳なさそうに頭を下げるコダマ。

「……反省はしているようだな。だが、お前のせいで遅れた仕事だ。手伝ってもらうぞ。今日は賞金首どもの集会場がある。そこを襲うぞ」

「はい。終わったら、お団子食べたいです」

「ビンゴブックのsランク一人につき一皿だ……」

角都はいつもの事である仕事終わりのご褒美については何も言わない。そして、妙に調子のいいコダマを連れて、団子屋に行くことになった。呆れるくらい安上がりなので、角都は文句を言えないのだ。

そこでコダマは、団子を5皿食べ満悦だったという。そして、角都と一緒に観光しながら雨隠れに帰った彼女が家で秘かに書いている絵日記には、楽しい数日の事が書かれていたという。そして、次は五人でお団子が食べたいと書かれていた。

## 新たな出会い

「口寄せの術!!」 口寄せの術!!」

木ノ葉隠れの里、うちは一族の修練場で、ご飯を食べる事すら忘れ、ひたすらに術の練習をしているシャナが居た。

汗まみれになりながら、もう何時間術の練習をしているのかわからない。右手の指はもう血まみれになっている。

何故シャナが口寄せの術を練習しているかと言えば、昨日の任務が原因であった。

「これしか方法がないってばねー!」

シャナは、昨日の任務の際に、ものすごく大きなショックを受けた。任務で久しぶりに第四班で組んだのだが、敵の忍達が口寄せの術を駆使用する集団であり、八雲がシャコガイ型の巨大な口寄せ動物【七宝】を呼び出して応戦。

相変わらず口寄せ動物にあこがれのあるシャナは羨ましがっていたが、現状口寄せの術は八雲しか使えないとして我慢していた。

「口寄せの術」

そう思っていたのに。なんとトルネが初めて口寄せの術を披露した。トルネが契約した生き物は、炎を纏った巨大な百足【羅刹】。かなり強い口寄せ動物なのか、敵の口寄せ動物を八雲の七宝と共に蹴散らし、あつという間に制圧してしまった。

「あれ、シャナは?」

「見ていない」

そこで二人がシャナが戦っていないことに気が付いて、周辺を探すと、シャナが三角座りで岩の上で拗ねていた。

どうやっても契約できない自分に対する当てつけだと勝手に怒り、里に帰るなり絶対に口寄せを使ってやると修行に打ち込んでいた。だが、契約できない彼女が口寄せ動物を口寄せできるはずもなく、無駄に時間が流れてしまっていた。

くたくたになり、地面に座るシャナ。

(こればかりは無理だつてばね)

どうしようもない。時間の無駄だと分かっているのに、自分にだけ出来ないことがあるのが耐えられない。他の事に努力の時間を割くべきだと頭でわかつているが、プライドが邪魔をする。

「後、一回だけやって帰ろ」

明日は満月。そうなれば、トネリが木ノ葉に来るかもしれない。全神経を集中し、印を結んでいくシヤナ。最後だからとチャクラをふんだんに練り込み、地面に手を置く。

「口寄せの術！」

シヤナの術の発動と共に、シヤナの姿は、その場から消えてしまった。

「? え、暗。何処だつてばね」

突然真つ暗な空間に飛んでしまったシヤナ。流星に何が起こったのかわからず、困惑している様子だった。だが、明かりが欲しいと粒遁の印を結んで、暗闇を照らす粒子を放出する。光り輝く粒子が彼女の掌から空間に広がり、其処が密閉されたドーム状の空間だと判明する。

岩や木の根で構成された空間。人工的に作られたのか自然にできたものなのかは不明だが、空間の中心に聳え立つ巨大な大木が目に入った。光一つない空間なのに、立派に育った大樹。

不思議とその大木に手を触れてしまった。

「チャクラが!？」

木に触れた瞬間に、シヤナの体からごっさりチャクラが持っていられる。すぐに手を放し、後ろに跳んだシヤナ。警戒しながらクナイを取り出す。

【驚かせて済まなかった】

突然大木から声が聞こえ、目を凝らせば大木の中に全身真つ白な赤ん坊のような生き物がいた。大木に覆われるように一体化しており、不気味さが増している。だが赤ん坊の表情自体は温和で、シヤナを歓



迎しているようににこやかに笑っている。

「何者だつてばね。それに私のチャクラを奪つてどうするつもりだつてばね」

「吾輩は、チャクラがなくては動けない生命体なのだ。だが、ある日この大木と融合した際に、分離できなくなつてな。そして、災害によつてこの木は埋もれてしまい、最低限のチャクラすらなく何百年もこの場所に幽閉されていてな。偶々私に触れた新鮮なチャクラに思わず食いついてしまったのだ。」

しかしお前のチャクラを食つたおかげでこうして話せることが何よりの幸福だろう。吾輩は、他人に寄生してチャクラを吸い取りそのチャクラ性質となつて、その人物に成り代わる事も出来る生物であつてな。その特性から、チャクラを奪う能力を持っているという訳だ。だが今の一瞬では寄生は出来ないし、チャクラを少しもらつただけなので気にしないでくれ。

それにしてもこの、明かりは何なんだろうか。特殊なチャクラで構成されているのか？ 君の術か何かかな？

実に美しいものだ。光なんてものは、ずっと拝めなかったからな」赤ん坊は、飲まず食わずでも生きていける生命体であるが、光合成などの最低限の栄養確保ができなければ動く事も出来ないという。そして、赤ん坊を捕らえているのがこの大木。この大木は、植物や大地と一体化できる赤ん坊が偶然融合した植物なのだが、特殊な細胞を持っており、赤ん坊は身動きが出来ないという。

分離できなくなった赤ん坊は、何年も脱出の手段を考案したが、無駄に終わり、やがて深い眠りについていたという。

そこに偶然現れたシヤナのチャクラを食らうことで、活動が可能になったという。とはいえ、長年木と融合したせいで、運動能力は無くなり、こうして話す事しかできない生命体だと自嘲する。だが孤独が長すぎたのか、他者との話にも飢えているのかもすごくしゃべる。なんかいろいろと凄い話を聞かされ、嘘をついているのかと訝しむシヤナ。世界中の植物と融合し、あるものを探すために世界を監視するため活動したなど語り続ける。本来は、主である怪物を復活させ

るのが目的だったが、さすがに今はどうでもいいと吐き捨てている。一体何歳なのか不明だが、巨大な木と一緒に長き時を過ごしたという発言から、果てしなく高齢なのだろう。

人と話せるチャンスを逃すまいと、ずっと話し続ける赤ん坊。

【そして、名前を聞いていたか】

「うん。30分も前に聞いた質問だってばね」

聞き疲れて、地べたに座りながら話を聞いていたシャナ。ようやく質問に答える事にした赤ん坊。だが名前を考えた段階で、固有の名がないと発言した。

「どういうことだってばね？」

【ゼツという名はあるのだが、これは吾輩の種族を表すものであり、固有の名はない。それにこの木と融合し、吾輩はゼツとは違う生命体となっている。だから、どう名乗るべきなのか。そもそも名前とは本当に必要なのだろうか？

いや流石に呼び名があった方が君には呼びやすいのか。そういえば、私は私を一人の個体として認識したのは今日が初めてだったりするのでな。やはり名前はあった方がいいな。固有の名を与えられてこそ、吾輩は一つの生命体として確固たる存在になれるだから】

「良くしゃべるから、ジヨウゼツ（饒舌）なんてどうだってばね？」

名前を勝手に決めるシャナ。その名づけに赤ん坊は、にっこりと笑う。

「気に言ったってばね」

【ジヨウゼツ。吾輩に相応しいと言える。そういえば、君の名は何だったかな】

「シャナ。うずまきシャナ」

ようやく自己紹介が終わった二人。今度はシャナの事を聞きたいというジヨウゼツ。シャナが根負けして自分の事を話し始める。そうして、ジヨウゼツの会話に付き合っていたシャナだったが、さすがに時間が経過し過ぎている。

そろそろ帰らなければいけないと告げると、ジヨウゼツは少し寂しそうな顔をした。

「そうだな。吾輩のお喋りに付き合ってくれてありがとう。君の事は誰にも漏れる事はないから、安心したまえ」

「……また、動けなくなるの?」

正解だ。ジョウゼツは他者にチャクラを貰わねば、活動できない。不老不死に近いが、恐ろしく弱い生物である。

「そう憐れまないでくれ。君のような奇跡がまた起こると信じている。君が吾輩に希望をくれたのだから、これはそのお礼だ」

ジョウゼツが、残り少ないチャクラで、自分を拘束する大木から花を生やした。こんなことしかできないがと言つてのけるジョウゼツ。その花を受け取ったシヤナだったが、其処である違和感にたどり着いた。

「待つてばね。お前しれつと木遁使つたつてばね」

【木遁? これは、アシユラという小僧が使つていた術のはずだが。今の世では木遁と言うのか。新しい知識が増えた。感謝するよ】

シヤナは、自分が此処に飛んできたのは、こいつとの対面が運命であるのではないかと考えていた。口寄せの師であり、蝦蟇使いの自来也もシヤナと同じように、口寄せ契約せずに口寄せを使い、妙木山に飛ばされ、そこで蝦蟇達と契約を結んだという。

偶然に起こる現象。自来也はそれを運命だと説明していた。だからシヤナにもいつか契約できる機会が起こるかもしれないと慰めてくれた。

それが今なのでは、ないか。

そう考えた時、シヤナの脳は、ジョウゼツが語つた特性にたどり着く。

——吾輩は、他人に寄生してチャクラを吸い取りそのチャクラ性質となつて、その人物に成り代わる事も出来る生物であつてな。

シヤナは、無生物や自分のチャクラなら、口寄せできる。契約が出来ないだけで、口寄せの術は使用できる特異体質。一方、ジョウゼツは、寄生した相手のチャクラを吸い取り、そのチャクラ性質をコピーできるという。

寄生、チャクラ性質のコピー、口寄せ。いろいろな要素がシヤナの

頭の中で、噛み合い始める。そして、全てのピースが揃った時、シヤナの脳裏に浮かぶのは、ウラシキと戦っていた時に、両肩に蝦蟇を乗せ、圧倒的な戦闘能力を誇っていた自来也の背中。

にやりとシヤナの口角が上がる。

「ジヨウゼツ。お前、私に利用されてみないってばね？」

【……ほう】

シヤナの提案を、ジヨウゼツが了承したかは謎である。だが、その日木ノ葉に帰ったシヤナは酷くご機嫌だったという。

---

その日から、約3年の月日が流れたのだった。

## 疾風伝

### 新章開幕 暁と第四班

何年もの修行からナルトが帰還し、成長したサクラと共にはたけ力カシとの鈴取り試験を翌日に行うと決まったタイミング。

木ノ葉の国境付近。砂隠れの里との間にある山道。

その場所にあえて建てられた団子屋。砂隠れと木ノ葉の両方の特産団子を出しているお店であり、甘味好きから評価の高い、隠れ家的なお店だった。

そのお店に、二人の客が団子を注文していた。二人組は男性で、赤い雲のような模様が入った黒いコートを身にまとい、大柄の方が巨大な物体を背負っている。もう片方も竹笠を頭からかぶっており、正直目立つ。

「イタチさん、この店に来て大丈夫ですかね？ 一応、木ノ葉との国境ですよ？」

「問題ない」

店員がお盆で持ってきた茶を飲む人物、木ノ葉の名門うちは一族を一人で壊滅させた抜け忍、うちはイタチ。彼の言葉を聞いて肩をすくめながら団子を頬張るのは、霧隠れの怪人、干柿鬼鮫。暁と言う組織に属する二人。

鬼鮫はある事情からイタチが木ノ葉に近づくのを避けさせていた。しかし、今日は暁の任務でどうしても木ノ葉の領土を移動するしかなかったのだ。

幸い、彼の警戒してた事は起きなかった。

「お前は少し、用心し過ぎるな」

「昔からそういう性なのでね」

とりあえず、一息吐けそうなので鬼鮫も警戒心を解く。彼がそのまま警戒するものが何なのか。それは意外と近くにいた。イタチの座

る席の真後ろに座っていた女性が、椅子を傾け、イタチの背中に寄り掛かるような状態になる。

偶然そうなったのだらうと鬼鮫がお茶に意識を向ける。だが女性は、その状態から動かず、話し始める。

「木ノ葉に来るのは三年ぶりくらいだつてばね？ 元々老け顔だからあんまりかわってないつてばねイタチ」

「イタチさん!!」

「下手に動くな鬼鮫」

女性がイタチの名を呼んだことで、鬼鮫は自分の得物である鮫肌に手を伸ばす。しかし、当のイタチは酷く落ち着いている。

イタチは、写輪眼で周囲の様子を確認する。どうやら、背中に靠れかかる女性のほかに、2人の強者が客に紛れ込んでいるらしい。

だが自分に触れる女性の正体を知っているイタチは、少し黙った後、彼女との対話を始める。

「そういうお前は、随分……大人っぽくなったなシヤナ」

背中に靠れるシヤナを片手で起こして、向き合うイタチ。イタチを向き合うように座るのは、クリーム色の髪を腰まで伸ばし、三つ編みにして、額にはサングラスをかけていた。イタチの持つ赤い写輪眼と対を成すような青い写輪眼を持っている。

服装は、胸元が開いた青いパーカー(背中には、うずまきの家紋)に白いショートパンツ。インナーに鎖帷子を着ている。

イタチの知るシヤナは、何年も前のうちは一族襲撃事件の時であり、その頃と見比べれば、随分と大人になったなと言う印象を抱いた。かつての小さき少女の面影は残しながらも、美しい女性に成長していた。

イタチ以外でも、3年前のシヤナを知る人間なら、全員が全員、シヤナが女性らしく成長したと称するだろう。そして、何よりも目力や威圧感、遥かに凶悪になっている。一睨みで相手の戦意を喪失させかねないほどに、シヤナは強くなっていた。それでも表情はどこか明るく、過去にあった暗さは軽減されている様子。

「よく言われるつてばね。で、そっちの大きいのが、霧隠れの怪人？」

シャナの青い写輪眼で見つめられた鬼鮫。非武装の相手に対して、冷や汗をかいてしまう。

「木ノ葉の青い閃光に名を知られているとは、光栄ですねえ」

「意外と目が可愛いってばね」

「は？」

「気にするな。こいつの感性は、少し変わっているだけだ」

（イタチさん。それはそれで私に失礼では？）

シャナは鬼鮫に対する警戒を解いた。そして、古くからの知り合いに出会えたことに喜びながらイタチを向き合う。

「何故お前が此処にいる？」

「なんでって、お前たち暁で、話に上がらなかった？ 私が何をしているのか。お姉さくん、この砂団子追加で、後こっちの人には、甘草団子追加で」

イタチと話しながら、美味しかった団子を追加注文するシャナ。店員もシャナとイタチ達の只ならぬ雰囲気困惑していたが、一先ず争う気がないと知って安心していった。シャナがイタチの分も勝手に頼んでしまった。

だが、甘党のイタチは、その事に対して何も言わない。どのみち自分でも注文するつもりだったのだから。

そして、会話の中でシャナが言っていた、彼女がしていること。それは、暁にとって最も重要な事だろう。

「いいんですか、イタチさん。彼女は」

「問題ない。俺達がシャナの席を越えなければ、こっちは砂隠れの領土だ」

「貴方がそういうのなら、わかりました」

鬼鮫は持ち上げようとしていた鮫肌を地面に下ろし、椅子に行儀よく座り直した。そして、彼の隣の席でこちらを監視している二人の男女に目を向ける。

「貴方達2人も削り甲斐がありそうだったんですがね。その顔、ビンゴブックで見た事がありますよ、幻術姫と毒蓮華ですね」

「あはは、お互い連れには苦労させられますよね。一応戦闘は考えて

いないので、お団子を堪能しませんか？」

「俺たちは、別の任務の帰りに此処に立ち寄っただけだ。だから、この店を無茶苦茶にするつもりはない。だが、警戒はさせてもらう」

「ご自由に。私はゆっくりさせてもらいますよ」

鬼鮫の隣の席にいるのは、トルネと八雲だった。トルネは身長が伸び、180を超え、鍛え抜かれた体は、鋼を思わせる。それでいながら、隙一つない佇まいで、鬼鮫をして削り取れるかわからないと考えていた。服装は、全体的に黒い服で、顔を覆うようなマスクが印象的だろう。声に威厳があり、自信に満ち溢れている。もし戦闘となれば、制圧する自信があるのだろう

一方、八雲は髪型をショートカットにし、紫と黒と青の少し派手な着物を着ている。その着物袖から見える指には、指輪が備えられており、彼女の戦闘スタイルを物語っている。全体的に優しげな雰囲気を漂わせているが、その目や気配から、歴戦の忍である事は明白。戦闘の意思はないと言っているが、鬼鮫が少しでも怪しい動きをすれば、八雲は瞬時に、命を刈り取りに来る。強者特有の余裕すら感じさせる。

（木ノ葉の第四班ですね。一人一人が、ビンゴブックsランクの子達ですか。厄介ですね）

ナルトが旅立った後、わずか1年で八雲とシヤナも木ノ葉の上忍に昇格していた。解決してきた案件や敵対者が、どれも大物であり、その事実が彼女たちの出世につながっていた。

特に、第四班の面々の功績で新しいものは、鬼鮫やイタチが所属する暁のメンバーを4人殺している事だろう。暁は、3年の間に何人も追加でメンバーを増やした。全員がsランクの賞金首であり、特殊能力を持った強者たちだったが、全員木ノ葉の領土に足を踏み入れ、帰らぬ人となった。

岩隠れ出身の触れたものすべてを腐食させる人物が鞍馬八雲と戦闘となり、この世の恐怖全てを味わったような表情を残して無残に殺される。

雲隠れ出身の神速の剣を操る剣豪は、トルネと戦闘に入り、僅か3



分で殺されたという。

時空間忍術に長けた一族で、自身を最速の忍だと自称していた男は、うずまきシヤナにスピード勝負を仕掛けるも、僅か数秒で足を切られ、次に首を落とされたという。

一番新しいのが、電子という人間を沸騰させ瞬時に殺す特異な血継限界を持つ女は、シヤナとの戦闘でこの世から消滅した。

どれも中々強い忍だったが、全て第四班によって殺されてしまった。その為、木ノ葉の領域に足を踏み入れる事を禁じられる始末。あまりにリスクが高いのだ。一人一人が暁と同等かそれ以上の忍が集まったのが第四班である。

他には、シヤナの噂を聞いたデイダラが、ちよっかいをかけに行き、片腕と右足を失って帰ってきた事くらいだろうか。

そのため、新メンバーには、殺しても死なない男が選ばれた。

的確に暁の侵入を察知し、狩りに来るのが第四班と言うのが暁の認識である。だから、鬼鮫は警戒していたのだ。そして、予想通り第四班は、現れた。

今鬼鮫たちが襲われない理由はただ一つ。二人が砂隠れの領土に座っているからだろう。

酷い緊張感のある空間だが、当事者であるシヤナは嬉しそうにイタチと話している。

「イタチも昔より強くなったなら、私と戦ってみるってばね？」  
「遠慮しておく」

本心だ。イタチとシヤナが戦えば、何方が勝つかはわからない。だが、イタチはある目的のために死ぬ訳にはいかない。仮に勝てたとしても、手痛い代償を負うのは目に見えている。そんなリスクは負えない。

「いろいろ話したい事があるのに……私たちってば、立場が邪魔をするってばね」

「当然だな。忍とはそういうものだ」

「そうだってばね。……お前の目的はまだ変わってないってばね？」

シヤナの質問。イタチはその質問に目で応える。

「そう。お前、いい死に方しないってばね」

「それは、皮肉か？ それとも……例のあれか」

イタチは未来視を知っている数少ない人物だ。半信半疑であるが、シヤナが未来を予知できる可能性は、高いと考えている。なら、彼女の言うそれは、イタチの未来を示唆している。

「あの子の運命を狂わせたお前は、私が殺そうかと思ってた。けど、その顔色を見たら、やる気がそがれたってばね」

「お前の目はそこまで、見えているのか」

シヤナはイタチの抱えている問題に気が付いていた。そして、彼から醸し出される思想とその結末を予知している。だからこそ、止めるつもりはないと伝える。イタチはそのことに感謝した。

そして、今度はイタチからシヤナに伝える事があった。

「コダマがお前に会いたいと言っていた」

「2年前に会ったきりだってばね」

「お前はあの子に攻撃を仕掛けないんだな」

「あの子は強いってばね。それに、毒気を抜かれて、殺す気になれないんだってばね」

唯一木ノ葉領に足を踏み入れて無事で帰ってきたのが、コダマである。独断行動が多いコダマは、暁でありながらいろいろな勢力に味方も多いという謎な人脈を持っている。その所以でシヤナもコダマには、敵対していない。コダマがナルトを狙う組織にいる事はわかってはいるが、それでも見逃している。

それがシヤナの甘さなのか、力ある故の余裕なのかは謎だ。

それから少し話をし、シヤナ達が木ノ葉の里に帰ると言つて席を立った。その際に、シヤナは荷物から紙袋を取り出し、イタチに手渡す。

「これは？」

「故郷に帰りたくても帰れない哀れな男の為に、用意したお土産だってばね。八雲、トルネ、帰るってばね」

そう言い残しシヤナは茶屋を後にした。鬼鮫が、イタチの手元の紙袋を見て、それは何かと尋ねる。イタチもそれを探るために、紙袋を

開け、中を覗けば、中に入っていたのは煎餅だった。

「煎餅？　なんでこんなものを」

鬼鮫が訝しむが、イタチは煎餅を手に取り、口に運んだ。毒の警戒はしていなかった。シヤナは、毒殺など行う必要がないほど強いからだ。

そして、煎餅を食べたイタチの表情が少し、苦しげになった後、優しい顔になる。

「問題ないんですか？」

「ああ。お前も食べるか？　これは、うちは一族の煎餅だ。もうこれしか食べる機会がないぞ」

シヤナがイタチに渡したのは、かつてうちは一族に存在した名物、うちは煎餅だった。シヤナが子供の頃に好きだった煎餅であり、作り手はイタチが殺したため、失われた味だった。

しかし、シヤナは時間が空いた時に、誰も管理しないうちは一族の集落を一人で管理しており、其処で偶々見つけたレシピで復活させたのが、このうちは煎餅だった。

「懐かしい故郷の味だな」

今はもう帰れない故郷の味に、イタチは、残り少ない自分の人生を見つめ直すのだった。

## キャラ設定

名前 うずまきシヤナ

忍者登録番号・012587

誕生日・12月24日（推定17歳）

血液型・O型

身長 162.5↓166

体重 43.9 kg↓45.6

好きな食べ物・おにぎり（梅干し） 稲荷寿司 温野菜

嫌いな食べ物・納豆 白子

趣味 忍術開発 映画鑑賞 お菓子作り

闘ってみたい相手 波風ミナト 青い写輪眼の姉妹 うずまきナルト

好きな言葉 強さ 弟・

性質変化 風 雷 火（土遁と水遁も使用は可能）

血継限界 先見の写輪眼 粒遁 泡遁 巫女術（封印特化型）

二つ名 木ノ葉の青い閃光

・ステータス（基本5段階評価（超過あり）

【忍術】 10

【体術】 4.5

【幻術】 3.5

【賢さ】 4

【力】 3

【速さ】 7

【スタミナ】 5

【印】 5

【潜在能力】 10

名前 鞍馬八雲

忍者登録番号・012588

誕生日・10月10日（17歳）

血液型・A型

身長 158.5 cm ↓ 162

体重 41.5 kg ↓ 43

好きな食べ物 甘い物 果物・

嫌いな食べ物 辛い物

趣味 絵を描くこと

闘ってみたい相手 うずまきシヤナ 五代目火影

好きな言葉 友達

性質変化 水 風

血継限界 天花乱墜 卑留呼の血継限界

二つ名 木ノ葉の幻術姫

・ステータス（基本5段階評価（超過あり））

【忍術】 3

【体術】 1. 5

【幻術】 8

【賢さ】 5

【力】 1

【速さ】 1↘4

【スタミナ】 2

【印】 3

【潜在能力】 5

名前 油女トルネ

忍者登録番号・012589

誕生日・5月20日（18歳）

血液型・B型

身長 175.5 cm ↓ 185

体重 62.8 kg ↓ 75

好きな食べ物 天ぷら・

嫌いな食べ物 らつきよう・

趣味 昆虫採集

闘ってみたい相手 マイト・ガイ 油女シノ  
好きな言葉 仲間

性質変化 風 土

秘伝忍術 毒蟲 八門遁甲

二つ名 木ノ葉の毒蓮華

・ステータス（基本5段階評価（超過あり））

【忍術】 3

【体術】 5

【幻術】 2

【賢さ】 5

【力】 5

【速さ】 5

【スタミナ】 5

【印】 3

【潜在能力】 3

名前 コダマ

忍者登録番号 なし・

誕生日・12月24日（14歳）

血液型・O型

身長 135.0cm↓変化なし

体重 25.0kg↓変化なし

好きな食べ物 お菓子 レバ刺し・

嫌いな食べ物 野菜・

趣味 旅行（空を飛んでの移動）

闘ってみたい相手 うずまきシヤナ

好きな言葉 一日三食

性質変化 五大性質変化 陰陽遁

血継限界 読心の写輪眼 身体変化or自己再生 サトリ化

二つ名 生物兵器

・ステータス（基本5段階評価（超過あり））

【忍術】 5  
【体術】 5  
【幻術】 3  
【賢さ】 1  
【力】 10  
【速さ】 4  
【スタミナ】 5  
【印】 3  
【潜在能力】 測定不能

名前 ラビリンス・ドル・エンバ  
忍者登録番号・なし

誕生日・12月24日(21歳)

血液型・O型

身長 162.0cm↓164

体重 45.0kg↓48

好きな食べ物 サンドウィッチ・

嫌いな食べ物 ピクルス・

趣味 刺繍

闘ってみたい相手 うずまきシヤナ グライア

好きな言葉 一撃必殺

性質変化 雷

血継限界 繋がりの写輪眼 ゲレルの石 間宵一族の結界忍術

二つ名 鉄壁のラビリンス

・ステータス(基本5段階評価(超過あり))

【忍術】 0  
【体術】 5  
【幻術】 0  
【賢さ】 4  
【力】 5  
【速さ】 5〜10

【スタミナ】 5

【印】 0

【潜在能力】 10

名前 グライア・キッド

忍者登録番号・なし

誕生日・12月24日(20歳)

血液型・O型

身長 165.0cm↓170

体重 46.0kg↓48

好きな食べ物 ソーセージ ハム

嫌いな食べ物 わさび

趣味 遺跡巡り

闘ってみたい相手 ラビリンス うずまきシヤナ

好きな言葉 弱肉強食

性質変化 炎

血継限界 並列の写輪眼 龍脈の担い手

二つ名 国崩し

・ステータス(基本5段階評価(超過あり))

【忍術】 2

【体術】 5

【幻術】 3

【賢さ】 5

【力】 5

【速さ】 3

【スタミナ】 測定不能(10以上)

【印】 3

【潜在能力】 10

名前 リトラ

忍者登録番号 なし

誕生日・12月24日(13歳)



血液型・O型

身長 140.0cm

体重 30.0kg

好きな食べ物 綿あめ 蟹

嫌いな食べ物 納豆

趣味 読書

闘ってみたい相手 なし

好きな言葉 健康第一

性質変化 霊

血継限界 幽視の写輪眼 霊尾（零尾の亜種）半透明の手（精神工  
ネルギーのみで作られた物質化霊）

二つ名

・ステータス（基本5段階評価（超過あり））

【忍術】 2

【体術】 1

【幻術】 5

【賢さ】 5

【力】 10

【速さ】 1

【スタミナ】 5

【印】 2

【潜在能力】 10

## 再会

イタチとの再会を果たしたシヤナは、報告書を火影に提出しに行った二人と別れ、家に帰った。

「お腹空いたってばね。今日は、一楽にしようかな」

なんとなく外食しようという気分になり、軽い足取りで一楽へと向かったシヤナ。店の暖簾をくぐると店長のテウチと娘のアヤメが、シヤナを見て迫る。

「え、え、何？ なんだってばね？」

急に二人に詰め寄られ、何があったのか理解できないシヤナ。

「おいシヤナ。お前聞いてないのか？」

「だから何を？ 私何かやったってばね？」

木ノ葉の影ともいえる根の人間を5人ほど始末した事がバレたのか。他にも事件を引き起こした自覚はある。だがどれかわからない。二人に落ち着くよういうと、アヤメが答えをくれた。

「ナルト君よナルト君。今日帰ってきてるのよ。え、あ、はや!？」

「本当に閃光みたいに消えたな。まあシヤナの気持ちを考えるなら当然だな」

アヤメの言葉を聞くなり、シヤナは店を飛び出して、家に向かった。ナルトが帰っているなら、家しかない。そう考えた時には、粒遁・天翔まで使って玄関前まで辿り着く。

(ん？ 電気がついてない？ それに息を殺している?)

ナルトが家に帰ったと思ったが、冷静に侵入者の可能性を導き出す。シヤナは、ゆつくりドアを開け、中に入る。そして、部屋に入ると同時に気配を感じたりビングに瞬身で駆け込み、僅かな気配を漂わせる存在

に襲い掛かる。

「おわっ」

「動くな」

一撃で殺しはせず、ワイヤーで拘束し、床に押さえつける。そして、天井につるされた電球のひもを引いて電気をつける。

「あ？」

暗闇で写輪眼は光るので写輪眼を使わず裸眼での捕獲を行ったが、シヤナが縛り付けたものは、丸太だった。完全に捕まえたつもりだったのだが、どういう事だろうかと考える隙が生まれる。

その隙をつくように、冷蔵庫の陰から人影が現れシヤナの後頭部に固い何かを突き付ける。油断しすぎたかなと写輪眼を使おうとしたシヤナだったが、背後にいる人物が笑いだす。

「ひひ、へへ。一本取ったってばよ姉ちゃん」

シヤナの後ろにいたのは、ナルトだった。そして、シヤナが縛っていた丸太が煙を上げ、ナルトの形に変化する。どうやら元々ナルトは影分身で2人になり、シヤナが捕まえた方が瞬時に変化の術を使ったことで攪乱をしてきたらしい。

影分身と変化のタイミングがうまい事シヤナの隙を突き、背後からサララップの箱を突き付けたのが本体らしい。

二人のナルトがしてやったり顔で笑う。姉から一本取ったと喜ぶ姿は、まだまだ子供だ。だが、3年も経てば、男の子は立派な男になっていた。

シヤナは、成長したナルトの様子をよく観察しようとしたが、ナルト相手に舌を出して笑う。

「惜しかったってばね」

ボフィンという音と共に、シヤナが消える。そして、玄関がガチャリと開き、シヤナが入ってくる。

「ええ!？」

「姉ちゃんも影分身だったのか」

シヤナの本体は家の外に待機していた。そして、影分身が自分から消えたことで、内部の様子を知って入ってきた。そして、罫にはまったのは自分だったのかと嘆くナルトを抱きしめた。

「ね、ねえちゃん」

「おかえり、おかえりだつてばね、ナルト」

感極まったような姉の声。涙を流しながら自分の帰りを迎えてくれたシャナに、ナルトは抱き返す。姉弟二人で再会を擁擁で迎える。二人してしばらく再会を噛みしめ、ようやく離れる二人。

「ナルト。背、滅茶苦茶伸びたつてばね」

「へへ。昔は見上げてたけど、姉ちゃんと同じくらいだつてばよ」

3年間で大きく身長が伸びたナルト。彼の言う通り、いつも見下ろしていた少年の目線は今は、同じ位置にある。可愛い旋毛をもう拝むことは出来なくなつたと少し寂しいシャナ。

身長だけでなく体格も立派になっていた。現に、女であるシャナよりもナルトの方が体が大きいのだ。

「帰つてくるなら、連絡くれれば良かったのに」

「サプライズだつてばよ」

本当に見ない間に立派になった。

つもる話もある二人は、テーブルに腰かけて、対面する。ナルトは何から話したらいいかわからないと言つた様子だったが紅茶を淹れて、全部聞かつてばねと言つたシャナの言葉に従い、3年近くの修行について語っていく。

いろいろと驚く話もあつたが、いい時間を過ごせたのは間違いなさそうであるシャナ。自来也との修行は、ナルトの長所を伸ばす訓練が主だったようだ。影分身の使い方や、身のこなしの向上など。他にも解決した事件や、面白おかしい話など、ナルトの話は留まるところを知らない。

しかし、既に夕飯の時間になつていたこともあつてか、ナルトのお腹が大きな音を立てる。

「お腹空いた？ 今日はどうする？ ナルトの事だから、一樂のラーメン楽しんでたつてばね？」

今から一樂にラーメンでも食べに行くかと聞くシャナ。しかし、ナルトの返答は、想像しないものだった。シャナの提案に少し照れ臭そうにしながら答えるナルト。

「一樂のラーメンも夢にまで見てただけど、今日は、姉ちゃんの作っ

たご飯食べたってばよ」

一樂のラーメンはずつと食べたかった。だが今日だけは、姉の手料理の味が欲しかった。その素直な言葉を受けてシヤナが、涙ぐむ。シヤナの手料理は、基本的にクシナの味なのだ。シヤナは記憶している味を徹底的に再現するため、完成度は高い。

シヤナが一番好きな味であり、ナルトもその味を恋しがっている。「え、なんで、何で泣いてるんだってばよ」

「いや、何でもない。ただ、嬉しいこと言ってくれてるってばね。いいよ、今日は姉ちゃんが作ってあげるってばね」

涙を拭いながら、冷蔵庫を覗くシヤナ。あんな可愛いお願いをされたら断るわけにはいかない。そして、冷蔵庫の中の食材を取り出し、献立を鍋に決めた。

「ご飯作っちゃうから、お風呂入るってばね」

「俺も何か手伝うってばよ?」

「長旅の帰りだってばね。お前はゆっくり疲れを癒すってばね」

テキパキと作業していくシヤナの言葉に逆らえず、数年ぶりの我が家で寛がせてもらうことにしたナルト。そして、ナルトが風呂から上がり、シヤナの作った鍋を二人で平らげる。

そして、腹が膨れた二人は、夜遅くまで対話を楽しんだという。

## それぞれの成長

ナルト達が鈴取り試験を行うのとほとんど同時期。木ノ葉の郊外の密林では、うずまきシヤナと自来也が対面していた。

腕を組んでいる自来也に対し、シヤナはストレッチをしながらこれから起こる激しい運動に備えている。

「本当にやるのかシヤナ」

「やるよ。手加減一切なし、もちろん仙術も使ってもらうってばね」

準備運動を終えたシヤナは、写輪眼で自来也と向き合う。自来也は、心底嫌そうな表情だったが、これもシヤナとの契約なので逆らえない。

ナルトの修行が終わった後、シヤナとの手合わせを行う。これが約束だった。シヤナは身内であっても容赦ない。下手な事をすれば殺される。だからあまり乗り乗り気ではない。

3年の間でシヤナがどれほど強くなったか。それに興味もあった。「嫌そうな顔して、ずっとチャクラを練ってるの、気が付かないと思う？」

「お、バレとったか」

戦闘開始前に、仙人モードの準備に取り掛かっていた自来也。本気で戦うのなら、自来也には一切の手加減をする余裕はない。多少の外戦法も許されてしかるべきだろう。

孫ほど年が離れた女子相手に、卑怯だとは思いますが、忍の戦闘とはそういうものだ。シヤナもそれを理解しているのだろう。既に殺気を彼に向けている。

「じゃ、やるかの」

「いいよ。結構楽しみにしてたってばね」

そういうと、二人は瞬時に接近。お互いに掌に螺旋丸と螺旋輪虞を形成。たがい在必殺の一撃を繰り出し、それらが衝突。衝撃波が周囲を駆け巡り、体重の軽いシヤナが押し負けて吹っ飛ばされる。

飛ばされたシヤナは、空中で身を捻り、木の側面に着地。自来也の

出方を窺う。自来也は両掌を合わせており、準備は整っている様子だった。

そして、指の皮を紙きり口寄せの印を結んでいく。

「お、いきなりだってばね」

本気で挑んでくる自来也相手に嬉しくなったシャナは、自然と邪悪な笑みを浮かべる。強敵との戦いはいつも心が躍る。この楽しみのために暁を積極的に狩っているまでである。

シャナは自来也の口寄せに対抗するように、指の皮をかみ切る。そして、使えない筈の口寄せの印を結び、自分が足場になっている木に掌を向ける。

「口寄せの術!!」

ほぼ同時。二人が口寄せの術を発動し、煙が発生する。

口寄せの煙が密林に広がり、中から両肩に小さな蝦蟇老夫婦を乗せた自来也が現れる。既に仙人モードに入っており、目に隈取が現れていた。

「なんじゃ自来也ちゃん、いうとつた約束の日は今日かいな」

「ええ。個人的な戦いに巻き込んで申し訳ないですが、こちらも一切手加減できない相手です」

「それで、相手はどこなんじゃ?」

「一応目の前にいますな。只油断だけはないようお願いします」

通常よりも煙が濃い。直前に見たシャナの行動。それは間違いなく口寄せの術だった。口寄せ契約の出来ないシャナが口寄せを使う意味が解らない。だが、動物以外であれば口寄せできるシャナが、何らかの武器でも口寄せしたと判断する。

仙人モード特有の感知能力でシャナのチャクラしか感じない。

「ところでよ、自来也ちゃん」

「なんですかの」

印を結び火遁の準備をする彼に、老蝦蟇であるフクサカが質問をする。

「仙術の修行をつけてやったのか?」

「はっ。」

「わからんのか小僧。あの娘、仙術を纏っておる」

自来也が気が付かなかった事実には、二人は気が付いていた。煙が晴れて、中から出てきたシャナの様子がおかしかった。

いつものシャナだが、下瞼に隈取が現れていた。さらに服装も変わっており四代目火影のマントのようなものを纏っていた。四代目の服と違うのは、両肩と背中に刻まれる瞳のような文様とその下に9つの勾玉と言うデザイン。それだけの変化でしかない。

けれどそれは決定的な変化だった。

「ご明察。ばつちり、盗ませてもらったてばね」

シャナはこれを見せたくて仕方なかった。わざわざ時間を作らせてまで披露したのだ。自分はこれだけ強くなったのだと。

「その反応、教えておらんのか？」

「盗んだ言うところで」

姿を見て改めて理解した。シャナは、仙術をものにしていて。契約の出来ないシャナがどうやって契約し、口寄せ動物のいる里で仙術を学んだのかは不明。だが、言える事はシャナが、仙術を会得し、仙術モードになっているという事実のみ。

「はっ、これだから、時代の流れは、こわいのオ」

「さ、やろうつてばね。仙術同士、どうしようもない闘争を」

自来也は、右手に巨大な螺旋丸、仙法・超大玉螺旋丸を作成。それを繰り出そうと駆け出す。一方、受け止める体勢のシャナは、掌に巨大な螺旋輪虞を形成したかと思えば、それが圧縮され、潰れて円盤状に変形する。巨大な円盤を高速で回転させ始める。圧縮され、さらに高速回転させられたチャクラの円盤は、眩い光を放つ。

見ただけで、感じただけで理解した。この術はヤバいと。それは両肩の二人も理解しており、印を結んで迎撃の準備をしていた。

「仙法・超大玉螺旋丸!!」

「仙法・天機」

シャナと自来也両者の仙術が衝突。その余波で周囲のものはすべて吹き飛んだ。



ちょうど同じころ、滝隠れの里近くの山岳地帯。そこで、任務を終え里に帰る途中だった三人の忍がいた。2人の上忍と褐色肌に薄黄緑色の髪をした少女、名をフウと呼ばれた少女は、何者かの追跡に気が付き足を止める。

「何処のどなたか存ぜぬが、とつくに気付いてるぞ！」

追跡者を警戒し、出て来いと大きな声で威嚇する上忍。その声に反応してか隠れていた3人が姿を現す。

「へへ、俺はやめとこうつて言っただんだけ？ 殺せねえのはめんどくせえしな」

姿を現したのは、銀髪をオールバックにし、赤い巨大な鎌を持った男。頭巾とマスクで顔を隠した大男。二人は、黒地に赤雲の模様がある外套を纏っていた。その姿は、忍五大国でも問題視され始めた傭兵集団、暁のものと情報が一致していた。

暁の忍に警戒を強める二人の上忍。さらに彼らの背後には、黒髪のツインテールに青い写輪眼を持った少女が同じ衣装を身にまとって待機している。彼らは暁の飛弾と角都、そしてコダマ。コダマは3年前と姿があまり変化しておらず、変化と言えば背中にピンク色の飛弾と同じデザインの鎌を背負っているくらいだろうか。

「ねえねえ、このお姉ちゃんが人柱力なの？」

「そうだ」

少女は、マスクの男の袖を引っ張りながら尋ねている。奇妙な集団で警戒心をさらに強め、いつでも飛び出す準備を整える二人。しかし、フウだけは暢気に声を上げた。

「あー！ そのおじさん、ひよつとして元滝隠れ？」

フウは、マスクの男に指をさし、そう尋ねる。そのことに男は何も答えないが、彼の額当ては間違いなく滝隠れのもの。故に滝隠れ出身の彼女が知っているのは無理はない。

「あなた、知ってるっす。火影暗殺に失敗して、上役の心臓奪って里を抜けた角都先輩でしょ」

「お前そんなことしてたのかよ角都」

「昔の話だ」

フウは、無警戒で角都に近寄り手を差し出した。

「あつし、角都先輩に会ったら友達になってほしかったつす。最初は大人の友達からでよろしくつす」

「なあ角都、アイツ馬鹿？」

「さあ。里を抜けたのは随分と前だからな」

握手を求めるフウ。フウは、本心から和解を求めている。しかし、角都はそれに応える事はない。

「今日ここに来たのは、友達になるためではない」

「それは残念」

明確な拒否に少し落ち込んだような表情になるフウ。一方で、フウの手を握って友達になろうとしたコダマだったが飛弾が襟首をつかんで止める。

「馬鹿、おまえが友達になってどうするんだよ」

「飛弾に馬鹿って言われた!? 角都、飛弾がコダマを馬鹿って言った！」

「あー、うるせえうるせえ」

馬鹿とは何だと抗議するコダマと彼女の頭を片手で押さえてめんどくさそうにしている飛弾。彼らを見切つて、角都は、フウに向かって拳を振り下ろす。フウはそれを見切つて回避。さらに腰から虫の羽のようなものを生やして空を飛ぶ。

「ほお」

「うげ、飛べんのかよ」

空を飛んだフウをどうするべきかと考えている二人。さらに護衛についていた忍達もクナイを投擲。飛弾は、それらを鎌で叩き落とし、角都は硬質化した腕で弾く。

「フウ!! ここは我々に任せて、里まで逃げろ！」

フウは、七尾の尾獣を体に宿した人柱力。彼女を奪われるわけにはいかないと捨て身の応戦をかって出た。

「すぐ応援を呼んでくるつす!!」

敵の力量はある程度理解。今の自分では勝つのが難しいと判断し里に向かう事に決めた。空を飛べる彼女の追跡は困難で、二人が時間

稼ぎをするのなら、里にたどり着くのもすぐだった。

「ごめんね、お姉ちゃん。コダマ、尾獣を集めないといけないんだ」

(は？ あっしより上に?)

空は自分のフィールド。そう思い込んでいた。里の外を余り知らない彼女は、自分以外に空中戦を得意とする相手があると想像していなかった。

フウの上空には黒い翼を頭からはやしたコダマが先回りしており、巨大化した獣の腕で背中を殴りつけられたフウは、勢いよく地面に落下した。

地面に激突するも、意識を失っていないフウは、どうにか立ち上がって再び空に飛びあがる。

「頑丈だねお姉ちゃん」

「あっしもだてに人柱力じゃないっす」

フウは、腰から生えた虫の羽から、無数の鱗粉を放出し始める。それらは太陽の光を受けて反射し、コダマの視界を歪めていく。

「行くっすー！」

「こーいー！」

クナイを持って接近するフウを迎え撃つ形で、背負っていたピンクの鎌を振り回すコダマ。忍界でも珍しい空中戦が行われた。

接近しては互いに刃を振るい、火花を散らす両者。だが押しているのはコダマ。パワーに圧倒的な差があり、一撃が非常に重い。フウもこのままではやられると思ったのか、普段は行わない尾獣の力を引き出す。

「チャクラが噴き出してる」

チャクラの衣を纏ったフウとコダマの戦闘は、更に苛烈になっていった。

一方で上忍たちを既に殺し終えた角都と飛弾。二人とも一応賞金になるからと角都が死体を集めており、その横では飛弾が地面に血で円陣を描いて儀式を行っていた。

「なあ角都。コダマと人柱力、何処まで飛んで行ったんだよ？」 第一、

あのちびっこ一人で尾獣をなんとかできるのか？」

「お前が他人の心配とは珍しい。雨が降るな」

「ちやかすなよ」

「あいつは、お前より強い。それはお前が理解しているはずだ」

角都の指摘に苦い表情になる飛弾。初遭の際、角都と戦い、簡単に殺せない相手だと知った。互いに不死身の能力を持っており、痛み分けに終わったのは苦い思い出だ。だが、更にもう一人、飛弾の使う技を無効化する化け物が居るのは予想外だった。

飛弾は不死身の肉体を持っており、相手の血を舐める事で相手を呪い、自分に与えたダメージが相手にも与えられる回避や防御不可能な術を使う。

なのに、コダマは心臓を破壊されても痛がるだけ。むしろ、不可思議な現象に少し面白そうにしていた。流星にその能力にはドン引きした。

けれど、死ににくいだけで、尾獣みたいな規格外の化け物を相手できるかと言えば別だろうと思った矢先。

「飛弾。どうやら、激戦となっているようだ」

角都の言葉を聞いて、空を注意深く見れば、雲の中で馬鹿でかい二匹の怪物が戦っていた。

「んだよあれ」

空中を繰り広げていた二人だが、コダマによって瀕死に追い込まれたフウの封印が解けてしまった。それによつて完全に顕現した七尾の尾獣、七本の羽を持ったカブトムシのような怪物はその圧倒的な速度と膂力、質量でもってコダマを圧倒し始める。しかし、コダマも切り札である自分の本性を解放。尾獣並みの体躯と巨大な黒い翼、両手両足は、獣のようで、胴体は非常に細く、人間でいえば胸部に巨大な口がある。

怪物サトリの姿になったコダマ。その膂力と速度は七尾と並び、二体の怪物は、ぶつかり合つては傷を負っていく。

【楽しい!!楽しい!!】

3年前と違い、サトリの力を解放しても自我が失われていないコダマ。ただ、気分が高揚するようで常にハイになっている。そして、普段は抑え続けた力を発揮しても壊れない相手に興奮していた。最初は優勢だった七尾だが、カブトムシのような重装甲を規格外の膂力を持つコダマの変じたサトリによって鎧が少しづつ凹まされていく。サトリと化したコダマ相手に徐々に押され始め、いよいよ尾獣玉の使用を余儀なくされる。

苦肉の策として膨大なチャクラの塊を口の前に集め放つ尾獣の必殺技。食らえばコダマとて無事では済まない。

【粒遁・天墜!!】

サトリ（コダマ）は、胸部の巨大な口で粒遁の粒子を集束、圧縮した弾丸を形成。それを七尾に向かって発射。七尾もそれと同時に尾獣玉を発射する。威力自体は、七尾の尾獣玉の方が優れていたのか、コダマの粒遁・天墜が一方的に打ち破られる。

しかし、コダマの天墜は集束が異常に早く、何発も連射することで尾獣玉の威力を殺す。

相殺した後、さらに追撃で七尾に天墜を発射し続けるコダマ。一発一発の威力が高い攻撃を受け、七尾は自分の飛行能力を生かして逃走を始める。しかし、コダマはその大きな翼で獲物を逃がさず攻撃を続ける。

七尾も尾獣玉で応戦。二匹の怪獣は、互いに遠距離攻撃を行い空で無数の爆発が発生する。その爆煙に身を潜めた七尾は、特大の尾獣玉を用意し、次攻撃してきたコダマを撃墜する準備を整える。

【こっちだよ!!】

どこから撃ってくるかと待ち構えていた七尾だったが、サトリ（コダマ）の行動は接近戦だった。煙の中から強襲し、巨大な腕で七尾の用意した尾獣玉を掴むと、それを七尾の口に押し込んだ。

そして、威力の逃げ場を失った尾獣玉が炸裂。巨大な爆発が発生する。そして、爆発の中心から吹き飛ばされた二匹の怪獣は、高高度からの落下を始める。

【いてって】

尾獣玉を掴み、相手の口にねじ込んだサトリの腕は、吹き飛んでおり全身大火傷を負っている様子。だがコダマよりも重症なのは七尾だった。口内で尾獣玉を暴発させられ、完全に瀕死の状態まで追い込まれている。

コダマの作戦勝ちと言える。だが相手は尾獣の一匹。通常なら即死する攻撃だったが、すぐに意識だけは取り戻したのか、六本あった羽は四本も消し飛び、かろうじて飛べると言った様子で逃亡を図る。しかし、それを許さないと片腕のサトリが飛びつき、その巨大な口で残った羽を食いちぎり、咀嚼した。

飛行手段を失った七尾の尾獣とサトリ化したコダマは、そのまま重力に引かれ大地へと落下。凄まじい衝撃が山岳地帯を襲い、山崩れを引き起こした。

## 砂隠れ

サトリと化したコダマと七尾の戦いが終わり、周囲を砂埃が覆ったが、すぐに晴れる。

そこには、既に護衛を殺し終えた角都と飛弾が駆け寄ってきた。

「おーい、こども。生きてるか？」

砂埃が晴れると動かなくなった七尾の尾獣が横たわっており、サトリと化したコダマの姿が見えなかった。飛弾は、七尾の胴体に跳び乗って周辺を確認するがコダマが居ない。

「コダマ!! 返事をしろ!!」

意外な事に角都が声を上げながらコダマを搜索する。その怒声に飛弾も目を丸くしている。角都や飛弾そしてコダマは、不死身に近い能力を持っている。だが、七尾のような巨体に押しつぶされれば、死んでもおかしくはない。

心底心配しながらコダマを探索する角都の姿を飛弾は馬鹿にできなかった。

「く」

「どっかに吹っ飛ばされたんじゃないか? あいつ小さいしよ」

コダマが居ない事で腹を立てた角都が、硬質化した腕で七尾の胴体を殴る。それを止めず、飛弾は周辺を探してみようと提案する。新参者の飛弾から見ても、角都はコダマを特別視しているのは明白だった。相性がいいのか、それとも別の理由があるのかは不明だが明確に、不器用な男なりに可愛がっているのは事実。

(傍から見ると、孫と祖父だよな)

しかし、コダマは暁のリーダーが育成している私兵。任務中に行方不明となったとあれば、めんどくさい事になりそうだと頭を搔いている。

ムシヨムシヤ。

「ん? 何の音だ?」

七尾のしっぽのあたりから咀嚼音が聞こえ、飛弾は音の方向に足を

運ぶ。羽の裏側に気配を感じ、鎌を向けるが、咀嚼音の正体を知り肩の力が抜ける。

「おい、呼んでんだから返事しろよ」

「ムシャムシャ。ごめんなさい。コダマお腹すいちゃって」

音の正体は、七尾の羽をちぎって食べているコダマだった。とんでもないものを美味しそうに頬張っているコダマの姿に呆れた飛弾だったが、角都が凄い速度で駆け寄り、コダマの手を止める。

「うえ？」

「お前、尾獣を食ったのか？　すぐに吐きだせ」

尾獣を食したコダマに手遅れになる前に吐き出せと命じる角都だったが、コダマは驚いて飲み込んでしまう。角都は過去に尾獣を食べた人間を知っている。

その人物は、2位代目火影の生きていたころ、雲隠れの里の金閣銀閣と言う忍が九尾の腹に入ってその肉を食って生き永らえたという。だがその二人が特別なだけで、他の人間達は、尾獣の肉を食った瞬間苦しみながら死に絶えた。

コダマが得意な体質とはいえ、命にかかわる問題に違いない。

「う、ぐうう」

突然、コダマが苦しむような声を上げる。そして、赤いチャクラがコダマの全身からあふれ出し、彼女の全身を覆い尽くした。

「なんだこれ？」

「尾獣化したか」

飛弾と角都は後ろに飛んで距離を取る。そして、コダマを包んだ赤いチャクラによってコダマの肌が剥がれ、七本のしっぽを持つ赤い獣のような姿になったコダマ。それは人柱力が尾獣の力を引き出す際に変じる尾獣化だった。

死にはしないまでも七尾のチャクラに乗っ取られつとあれば、倒すしかない。戦闘態勢に入った二人だが、コダマが発した言葉で戦闘態勢は解除された。

「見てみて！　コダマ変身しちゃったよ!!　それに尻尾も6本も増えた！　これはスーパーパーコダマモードと名付けよう」



自分の姿を見て、滅茶苦茶はしゃいでいたコダマ。コダマは金閣銀閣と同じく、尾獣の肉を食い。その力を宿す事が出来たのだった。

(ありえん。リーダーは、何処からあの子を連れてきたのだ)

暁のコダマ。生物兵器のコダマが、尾獣の力を得たことは、暁の中でも大きな事件となった。そして、回収された七尾は、暁の持つ隠れ家へと連れ去られたのだった。彼らの目的を果たすために。

—————  
場所が変わり木ノ葉。修練場は荒れ果て、戦争でも起こったかという有様だった。

そして、修練場で大の字になって倒れている自来也が居た。仙人モードは既に解除され、両肩にいた仙人蝦蟇達も口寄せの限界時間が来たため帰還している。そして、彼の前に立っているのは、うずまきシヤナだった。

「かん、全、勝利だつてばね!!」

シヤナは仙人モードを継続しており、何か所か怪我はしているが闘は可能。一方手札を出し尽くした自来也はすっからかんでもう動けなくなっていた。

仙術を用いた闘争は、シヤナが勝つたのだった。その結果に酷く満足したシヤナはご機嫌だった。自来也は埃を払い立ち上がる。

(死ぬかと思つたわい。本当に、呆れるくらい強くなったのオ)

本気でやつても負けた事實は、彼に酷く老いを実感させた。若さと才能を持った少女の成長速度が、もはや過去でしかない自分を追い越すのは必然と言える。その結果は苦く、そしてすつきりとしたものだった。

そして、自分に勝つた少女は、駆け寄ってくる。そして、自分を見上げている。

まるで褒めてくれと言わんばかりに。そんなシヤナの頭を自来也は撫でてしまう。

「自力で仙人モードに至るか。シヤナ。一応、忠告だが、仙人モードは危険だ。あまり広めるのはやめておけ」

シヤナは自分の術や修行法を開示することがある。それは、主に仲

間達にだろう。だが、いくら優秀とはいえ、仙術は本来リスクが多い。習得する際も、仙人が修行を見ていてようやくある程度の安全性を確保できるのだ。それを独断でやったシャナは、他の人間にもその方法を伝授してしまうかもしれない。

そうなれば、修行の過程で死んでしまうものもいるだろう。

「え？ でも八雲とトルネは、マスターしたってばね」

「は？」

シャナの爆弾発言は、度肝を抜いた。そして、詳しく事情聴取したのち、彼女には念を押ししておいた。

（時代の流れは、本当に恐ろしいのオ）

自来也とシャナの模擬戦は、完全に終わり、同じころ鈴取り試験を行ったナルトやサクラ達とも合流して、全員で一樂に足を運ぶのだった。

砂隠れの砂漠の一面で、数十人に及ぶ砂隠れの忍達が無残な死体となって転がっていた。そして、その場所に唯一立っていたのは、赤毛の軍服姿の女性と？せ型の男。男は傀儡使いのようで土偶のような人体より一回り大きな傀儡人形を操作している。

「く、むかで、きさま」

「俺様の裏切りに気が付いたまでは、よかったが実力がその程度ではな」

「ほとんどウチがやったんやろがい」

男性の名はムカデと言う砂隠れの忍だったが、昨日目的のために砂隠れを裏切ったのだ。そして、地べたに転がっているのは追い忍達という訳だ。

女性は雪の国でシャナを苦しめた傭兵、グライアだった。彼女は銃型のチャクラ砲を携えながらつまらなそうに生き残った追い人の頭部を吹き飛ばす。

「これで追手は終わりかいな？」

「いや、俺達を見つけた段階で里に連絡を入れているだろう。だが、本

格的な追跡が始まるのはもつと時間をおいてからだろう」

ムカデは砂隠れの組織体制を熟知している。故に余裕が出来たと伝える。彼とグライアは目的を同じくして手を組んだ。本来なら、金にならないような抜け忍の護衛などしない彼女だったが、彼女にも事情がある。

彼女の持つ体質がもたらした力が、いよいよ彼女の命を蝕み始めたのだ。そのため3年間情報を集め、同じ情報を探っていたこの男と手を組むことにしたのだ。生きるために。

「それは結構。せやけど、こいつらはまた違うん？」

グライアがムカデの言葉に反論するように背後を青い写輪眼で観察する。

「すげーな、おいらたちに気がついてやがったぜ、うん」

「俺じゃなくててめえの下手な潜伏術のせいだろうが」

グライア達を遠くから観察していたのは、頭に笠、赤い雲の文様を携えた黒いコート姿の男性二人。片方は中年で背中から金属の巨大な尾が覗いている男、もう片方は若く金髪で左目にはスコープを装着している。

二人が姿を現すと、ムカデがいち早く反応し傀儡をけしかける。しかし、ムカデの傀儡が放ったクナイは、全て金属の尾で叩き落とされ、金髪の男が何かを放り投げるなり傀儡が爆発する。

「なんだと」

「このお粗末な傀儡人形。お前、傀儡部隊のムカデか」

「まさか、お前サソリか」

自分の傀儡が破壊されたことで驚きながらも口寄せの巻物を使い、さらに追加で土偶型の傀儡を呼び出すムカデ。だが、相手の正体が元砂隠れの忍であり上司だった赤砂のサソリだと理解すると及び腰になる。過去の経験から理解しているのだ。自分は傀儡使いとしても傀儡技師としても彼には勝てないと。

「どうやら里抜けしたみたいだな。お前みたいな臆病者が、どういう風の吹きまわしだ？」

「サソリの旦那。オイラたち、こんなところで道草食ってる時間ねえ

だろ。とつとつとやっちまおうぜ、うん」

「……、そうだな。好きにしろデイダラ」

金髪の男、デイダラがサソリの許可を貰って掌にある口から何十匹もの鳥形の粘土を取り出す。それらが彼の印によって動き始め、グライアとムカデに襲い掛かる。

「グライア!!」

早々に傀儡人形を破壊されてしまい、ムカデが頼れるのは、彼女只一人だった。彼女はチャクラ砲で向かってくる鳥形の爆弾を全て撃ち落とし、さらに、デイダラが砂に忍び込ませた蛇型の爆弾をチャクラで遠隔操作できるプレートを用いて串刺しにした。それらが爆発するのは同時だった。

「なんだと。オレの芸術作品が」

一度に20近い爆弾を破壊され、デイダラが驚く。だが、目を凝らしてグライアを観察した瞬間、表情が一変する。

「なんや、あいつ。顔真つ赤になつとるで?」

「わからん」

デイダラは、グライアの青い写輪眼を見た瞬間、自分が最も芸術を感じた瞬間を思い出していた。デイダラが暁に入った理由は、自分を勧誘しに来たうちはイタチの持つ写輪眼とその姿に芸術性を感じてしまったからだ。だが、真の芸術は爆発であり、他の物を認める訳にはいかないトリベンジ狙いで暁に入ったのだ。

だが、木ノ葉の里に任務で侵入したときに出会った、青い閃光との戦いで彼の中の価値観が歪んでしまった。

圧倒的な実力差によって片腕を切り落とされ、痛みと怒りで自分を見下ろす青い閃光を見上げた時、その青い写輪眼と輝く粒子、そしてその姿に芸術性を感じてしまった。素直に美しいと口に出してしまった。

そこからだろう、彼が青い閃光ごと、うずまきシヤナを意識してしまったのは。そして今日の前にいるのは、青い写輪眼を持った美しい女。デイダラは、その前を見てシヤナの事を思い出してしまった。故に頬が紅潮し、目をそらしてしまった。

その初心な姿を見てサソリが呆れる。デイダラが青い閃光について話す時は大体こうなのだ。明らかに異性として意識しているのは明白だった。

「おいデイダラ!! あいつは、青い閃光じゃない。呆けている場合か」  
「お、あ、すまねえサソリの旦那。似てたもんでな。というか、赤髪に青い写輪眼ってことは、こいつ、例の傭兵だな」

3年間でグライアの名前は、かなり浸透していた。戦闘能力が高すぎて個人でありながら軍隊に匹敵する彼女。特に小国に雇われる形で名を売っていた。当然傭兵である暁とは、商売敵であるが、グライアを知るコダマが戦闘力が自分以上だと称したために、手を出せなかった。下手に手を出せば手痛い代償を払うことになるからだ。

その評価は、サソリから見ても同意する他ない。自分たちと敵対しているグライアのチャクラや青い写輪眼の持つ眼力、そして雰囲気のみ小娘ではないと訴えかけてくる。

「で、どないするんや? 続けるか? 大人しく別れるか?」  
「……」

「ん? よく見たらその服、コダマの仲間か。なら、大人しく去りや」  
グライアはようやく、二人の服が自分の妹と同じだと気が付く。一応攻撃したのは、こちらからなので相手に戦闘継続の主導権を預ける。

ムカデは、サソリとデイダラが警戒している様子を見て、勝てるかと判断したのか「今だ殺せ」と指示しているが、グライアは従わない。  
仮に殺し合うことになったとして、負ける事はないと踏んでいるが、ムカデは死ぬだろうと思っているからだ。

「コダマの姉ちゃんが、ああいつてるけどよ、どうするサソリの旦那」  
「言うまでもねえ。行くぞデイダラ。俺達の目的は此奴らじゃない。それに、後の仕事も考えれば、ここでどちらかが死んでりや世話ねえ」  
サソリもグライアの戦闘能力を自分より上であると判断。故に本来の目的を優先すると告げる。実際、グライアは戦闘開始となれば、天照で周辺一帯ごと焼き払うつもりだった。

「何故逃がすんだグライア」

「こいつら殺したかて、手に入らんやろ？」

サソリとデイダラが横を通り過ぎるのをただ眺めているグライアに納得のいかないムカデであったが、彼女に睨まれて何も言えなくなる。

サソリたちが砂隠れの方角に消えたのを確認したのち、二人は目的地である場所へ歩を進めた。